

オルタはお嫌いですか？

濁り丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【小説情報】

女性サーヴァント達と男性マスターのハーレム系作品です。

短編形式で多数のキャラクターを執筆しておりますので、好みのキャラクターのお話だけでも読んで頂ければ幸いです。

評価者100名、250名記念など、アンケートの企画も行っていきます。

【Twitter】

作品の更新状況や今後の予定などを投稿しております。

<https://twitter.com/nigori77maru>

【Fantia & pixivFANBOX】

FantiaとpixivFANBOX方で限定作品（ナイチンゲールやBBちゃん、メスガキカーマ等）を多数投稿しております。

投稿内容はどちらも同じですので、入りやすい方にご加入頂ければ幸いです。

<https://fantia.jp/fanclubs/245259>

<https://nigori77.fanbox.cc>

支援プラン【梅】（月額300円）にご加入頂ければ、週一回以上で投稿している限定作品の閲覧が可能です。お試しで限定作品の”前編”が閲覧可能になっておりますので、無料登録だけでもして頂ければ幸いです。

何卒、よろしくお願いいたします。

【リクエストの参考】

評価者250名記念などのアンケート企画で、参考とさせて頂きませす。

<https://syosetu.org/?mode=kappa|view&kid||266180&uid||127064>

目次

Fantia&pixivFANBOX作品紹介

Fantia&pixivFANBOX作品紹介：婦長は治療が必

要―1― | 1

Fantia&pixivFANBOX作品紹介：婦長は治療が必

要―2― | 14

Fantia&pixivFANBOX作品紹介：婦長は治療が必

要―3― | 26

Fantia&pixivFANBOX作品紹介：婦長は治療が必

要―4― | 37

評価者50人記念 番外編―1― モルガンは夫に恋をする

番外編：モルガンは夫に恋をする―1― | 54

番外編：モルガンは夫に恋をする―2― | 67

番外編：モルガンは夫に恋をする―3― | 78

番外編：モルガンは夫に恋をする―4― | 91

(仮)評価者150人&お気に入り2000人記念 番外編―1.5―

三つ子を孕む花の魔術師

番外編：三つ子を孕む花の魔術師―1― | 104

番外編：三つ子を孕む花の魔術師―2― | 115

評価者50人記念 番外編―2― 叛逆の騎士は従順な雌になる

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―1― | 126

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―2― | 138

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―3― | 150

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―4― | 163

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―5― | 174

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―6― | 186

評価者100人記念 番外編―3 影の国の女王は死よりも生を望んだ
んだ

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―1― | 199

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―2― | 212

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―3― | 224

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―4― | 235

評価者100人記念 番外編―4 病める氷の皇女は愛熱に蕩ける

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―1― | 247

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―2― | 258

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―3― | 267

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―4― | 277

評価者100人記念 番外編―5 盾の少女は、女の悦びを知る

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―1― | 287

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―2― | 299

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―3― | 310

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―4― | 322

評価者200人記念 番外編―6 彼のための剣は、村娘の恋を叶える
る

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―1― | 334

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―2― | 347

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―3― | 359

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―4― | 370

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―5― | 379

評価者200人記念 番外編―7 愛の神は、愛に溺れる

番外編：愛の神は、愛に溺れる	1			
番外編：愛の神は、愛に溺れる	2			
番外編：愛の神は、愛に溺れる	3			
番外編：愛の神は、愛に溺れる	4			
番外編：愛の神は、愛に溺れる	5			
評価者200人記念 番外編—8 虞美人草は淫蕩に耽る				
番外編：虞美人草は淫蕩に耽る	1			
番外編：虞美人草は淫蕩に耽る	2			
番外編：虞美人草は淫蕩に耽る	3			
番外編：虞美人草は淫蕩に耽る	4			
番外編：虞美人草は淫蕩に耽る	5			
438	428	416	402	391

評価者250人記念 番外編—9 最強種は屈服を覚える

幕間：花の魔術師の助言							
番外編：最強種は屈服を覚える	1						
番外編：最強種は屈服を覚える	2						
番外編：最強種は屈服を覚える	3						
番外編：最強種は屈服を覚える	4						
番外編：最強種は屈服を覚える	5						
番外編：最強種は屈服を覚える	6						
番外編：最強種は屈服を覚える	7						
評価者250人記念 番外編—10 BBちゃんはクソ雑魚オナホ							
582	572	561	551	540	532	522	506

AIに堕ちていく

595

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく	1
番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく	2

604

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく―3

614

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく―4

623

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく―5

633

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく―6

643

評価者250人記念 番外編―11 巴御前が愛と肉欲によりお嫁

さんになるまで

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで―1 | 654

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで―2 | 665

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで―3 | 678

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで―4 | 687

【NEW】番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで―5 | 696

特別編

クリスマス特別編：サンタオルタはトナカイと愛を育む | 707

夏休み特別編：レディ・アヴァロンは“ご主人様”にお仕置きされる | 722

pixiv有料リクエスト 作品まとめ

pixiv有料リクエスト：アナスタシアは旦那様とのドスケベセックスを記録する | 736

pixiv有料リクエスト：ハロウィンに魔性菩薩はマスターに

“悪戯”をしようとするが、逆に快樂に墮とされてハメ潰される

762

pixiv有料リクエスト：分身魔術でマスターを増やしたモルガンは、お仕置き輪姦でハメ潰される

781

pixiv有料リクエスト：貸し切り閻魔亭での愛に塗れた“慰安

”

803

pixiv有料リクエスト：オルレアンの乙女は、愛され墮とされ妻となる

835

プロローグ：堕ちてるオルタナティブ

プロローグ—1：淫らに堕ちた竜の魔女（中出しセックス）

868

プロローグ—2：被虐と精に溺れる暴君（フェラチオ）

875

本編—1：アルトリア・オルタはお嫌いですか？

第一話：暴君の騎士王と万能の才人の交渉

885

第二話：暴君と主人は支え合う（ディープキス）

896

第三話：主人の牡に慄く暴君（ディープキス，服脱がし）

909

第四話：暴君の裸体と手淫の奉仕（手コキ，精飲）

920

第五話：暴君は連続絶頂で果てる（乳首絶頂、素股、お漏らし）

931

第五・五話：暴君と一緒に暮らしたい（台詞のみエロ描写）

942

第六話：主人に乳房を責められる暴君（乳首責め）

953

第七話：暴君は快感を与えたい（クンニ）

964

第八話：暴君は口淫で達する（フェラチオ，イラマチオ）

975

Fantia & pixiv FANBOX 作品紹介

Fantia & pixiv FANBOX 作品紹介：婦

長は治療が必要——1

「——我が夫お♡♡ お♡っ♡ 許ひへっ♡♡♡ おひい
♡ っ♡♡♡ 許ひへえ♡♡ ——イ♡ク♡っ♡♡ イ♡ク♡イ♡
ク♡イ♡ク♡うっ♡♡ イ♡ック♡うう♡うう♡うう♡うう
♡うう♡ ——っっ♡♡♡♡ お♡ほっ♡♡♡」

冷酷で全てを支配することを望む妖精國の女王”モルガン・ル・フェ”は、今日もマスターにただの雌として支配されていた。本来ならば許しを乞うなど彼女のプライドが許さないだろうが、自分の夫である彼の前ではプライドなど紙切れ同然の儂いものである。

マスターと自分と同じ彼のメス以外には、死んでも聞かれたくない無様な命乞いのような嬌声を上げて、頭を振り乱して感じ入ることしか出来ない。

今の二人の体勢は、モルガンはベッドの上でうつ伏せに寝そべっており、その上にマスターが覆い被さっているような状態であった。俗に寝バックや敷き小股と呼ばれる体位であり、ベッドと彼の間でサンドイッチのように彼女が挟まれていた。

傍から見れば今のモルガンは無抵抗のまま雄に屈服する、従順な雌にしか見えないだろう。

全身をマスターとベッドに挟まれて拘束されているせいで、モルガンはいつものように背中や首を反らして快感を逃がすことも出来ない。悲鳴のような濁音混じりの嬌声を上げて、唯一動かせる足のつま先をギュッと曲げたり伸ばしたりを繰り返している。脳髓を芯まで焼くような快感に身悶えながら、半開きになった口から舌を突き出していた。

普段は冷たい氷のような眼をしたモルガンだったが、今では脳が溺れるような快樂の底なし沼に沈んでいる。冷酷な感情の窺えない蒼

部屋中が男と女の淫らな臭いで充満している。

それこそ壁や床にすら染み付いてしまいうような程に臭いが濃く、嘔せ返ってしまいうような程に濃い臭気であった。女の甘酸っぱい汗の匂いと栗の花の臭いにも似た精液の臭い、潮のほんのりとした磯の臭い。他にも尿に含まれるアンモニア特有のツンとした刺激臭。

それら全てが入り混じったニオイは、天然の媚香と言つて差し支えない。

鼻腔にその媚香が少しでも入ってしまったえば、老若男女を問わずに生殖本能を刺激する。半強制的に発情させてしまふ、下手な毒よりも遥かに恐ろしい効果を秘めていた。

法典の原典を求めて旅した僧侶や魔竜を下した聖女などの性欲から遠い存在であつても、例外なく種付け交尾を求める程に発情させた実績がある。

因みに自身の不徳を恥じながらもマスターに処女を捧げた二人は、今では彼専用のオナホ嫁に自らの意思でなつていた。自分からトイレや物陰にマスターを誘い込み、秘所を見せ付けながら精を求めてしまふ程に淫らな雌へと変わっている。

淫媚な臭いは時間経過と共に強くなる。

具体的に言えばモルガンが絶頂するか、マスターが大量の精を吐き出す度にだ。雄のフェロモンと雌のフェロモンが、空气中に発散されていく。

——そして、また……

「——モルガン、射精すつ。射精すよつ！」

「~~~~~~~~~~つ♡♡♡ 待つへ♡♡♡ 待つひえ♡♡♡ いま精液はあ……つ♡♡♡ らめえつ♡♡♡ あ——つ」

マスターは掛け声と共に、モルガンの膣内で亀頭が大きく膨らむ。

彼女は誰かに助けを求めるようにシーツの海を掻き分けて両手を伸ばすが、そんなことで彼の射精が止まるはずも無い。大きく重たい

届かないマスターの私室に朝が来たことが告げられる。彼はまだ物足りなさそうな表情をしながら、目の前で潰れたカエルのような体勢をしているモルガンに話し掛けた。

「もう朝か……モルガン、凄い気持ち良かったよ」

「……………あひつ♡♡♡　いう♡……………いつ♡♡♡　————いひつ♡♡♡」

モルガンは息も絶え絶えになりながら、意味も無い言葉を呟いている。

朝を迎えてやっと気絶が出来る筈だったのだが、モルガンは快感による覚醒と気絶を繰り返していた。膣から精液を吐き出す度に、恐ろしい程の快感が発生するせいである。瀕死になった虫のように、ビクっ♡♡　ビクっ♡♡と四肢を震わせていた。

子宮に溜まった精を出す行為は、排尿や潮吹き、排泄行為より何倍も気持ち良かったようだ。

妊娠してから半年以上が過ぎたかのように、モルガンの下腹部がポツコリと膨らんでいた。

未だに怒張しているペニスが引き抜かれた膣口は開いた状態から戻らなくなっており、煮詰まったお粥のような白濁とした半固形の精液がぐぷっ♡♡　ぐぷっ♡♡と粘っこい音を立てながら零れている。

モルガンのあられもない姿にマスターは興奮しながら、彼女をお姫様抱っこで抱え上げた。

「——取り敢えず、シャワー浴びよっか」

「……………いつ♡♡♡　あゝっ♡♡♡　い——っ♡♡♡」

無抵抗のままガラス張りのシャワー室に連れ込まれたモルガンは、当然のようにガラスの壁に押し付けられながら時間ギリギリまで犯されることになる。シャワーの水音と女の喘ぎ声が、本来は一人用に狭い空間に響き続けた。

任務開始の時間が迫る二人は、”最低限の後処理”をして部屋から出て行った。

上手く歩けないモルガンの腰を抱き寄せるように支えるマスターと、彼の片腕に両手を絡ませて縋りつくようによろよると歩く彼女。モルガンは未だに快感の抜けきっていない、蕩けた雌の顔をしていた。

一歩足を進める毎にモルガンは熱っぽい吐息を吐いており、腰を支えてくれているマスターの手が僅かに動くだけで小さく喘いでいる。明らかに直前まで交尾をしてましたと周囲に伝えている二人は、ゆっくりと作戦指令室へと向かうのだった。

「……………あっ♡♡ 我が夫、ゆっくり歩いて下さいっ♡ 子宮の中の精液が揺れると気持ち良くなっ——いひっ♡♡ こっ、腰の手は動かさないで…………っ♡♡♡ あっ♡ んぁ——っ♡♡」

甘ったるい声を上げるモルガンは、今日もマスターとの愛欲に溺れる。

——ここで話は終わらない。

二次災害という言葉を知っているだろうか。

例えば地震による被害が一次災害だとすれば、地震による停電や水道などのライフラインが寸断されてしまうことが二次災害に当たる。

場合によっては一次災害よりも、二次災害の方が被害が大きいこともある程だ。

今回の場合では、マスターに朝まで犯され続けた”モルガン・ルフエ”が一次災害に当たり、彼の生活空間を清潔に保つために部屋へと訪れた”フローレンス・ナイチンゲール”が二次災害に当たるだろう……

奉仕と献身を信条とするクリミアの天使”ナイチンゲール”がマスターに召喚されたのは、第五特異点で彼との縁を紡いだ後だった。カルデアに召喚された彼女は、世界の命運をマスターだけに背負わせる現実に悲しみながらも、それでも病んだ世界を”治療”しようとする奔走の彼の強い意志に好感を覚え、少しでも自分が助力になればと共に戦ってきた経緯があった。

幸いにもマスターの精神面は”女を抱く”ことで安定していたため、ナイチンゲールは肉体面でのケアを中心に考えて彼を支えた。部屋の中の清潔や消毒を徹底して、マスターが病気をしないように努めたのだ。

マスターが多くの女性と関係を持つことに対しては、これが”精神の治療”となつていることを理解していたため、善悪以前に必要なことであると冷静に判断していた。

その考え方は彼女が戦争に深く関わってきたことも、大きく影響しているだろう。

クリミア戦争の最前線で負傷兵の治療に当たっていたナイチンゲールは、人を殺すという精神に大怪我を負った男達が、女の肌を癒しを求めることを知っていたからだ。彼女自身は生涯に渡って独身を貫いた未通女であったが、性に理解の無い人間では無かった。

そのような生前の経験があり、多大な精神負荷を受けているマス

ターが、女の肌に癒しを求めることに対して、ナイチンゲールは忌避や抵抗を感じなかったのだ。

もしも、彼に女の柔肌を与える女性がいなければ、彼女自身がマスターの性の捌け口となっていた未来もあったかもしれないが、幸か不幸か多くの女性サーヴァント達が彼に柔肌を与えてくれていた。

必要なことには全力となるナイチンゲールだったが、不必要なことは好まない性分のため、彼女がマスターとまぐわうことは無かったのだ。ある意味でマスターとナイチンゲールが、女性サーヴァント達の中で最も男女の関係となる可能性が低かった。

——しかし、淫臭の残る彼の部屋を掃除と消毒をするようになって、ナイチンゲールの歯車が狂い始めてしまう。

マスターは性行為後の後処理も目に見える範囲ではしっかりと行っていたが、鼻が淫臭に慣れてしまっており、どうしても閉鎖環境に近い場所では臭いが残ってしまうのだ。

常人離れた鋼の精神を持ったナイチンゲールであっても、その残り香が鼻腔に入ってしまうえば雌として性的興奮を半強制的に覚える。毎日マスターの部屋を掃除する度に、自身のシヨーツをびちやびちやに濡らすのに、そう時間は掛からなかった。

次第に性的興奮と生殖本能が増していき、マスターの精の臭いに無意識の内に魅了されるようになっていく。彼の部屋の精液が拭われたティッシュを自室に持ち帰り、その臭いを嗅ぐことに夢中になってしまう。自身の体が日に日におかしくなっていくことを自覚しながら、マスターの部屋掃除を止めたいとは思えなかった。

ナイチンゲールはマスターに指一本触れていないのに、彼の精に犯されていく。

臭いとは脳と直結した感覚の一つであり、淫臭に脳を犯されるナイチンゲールの肉体が堕ちていくのも仕方が無いことではある。末期にはマスターの顔を見るだけで、秘所を濡らす程に性的興奮を覚えるようになってしまっていた。

それでも鋼鉄の女傑であるナイチンゲールは、自身の中で湧き上がる性衝動に耐え続けた。

生前から文字通り死ぬまで止められなかった自分を犠牲にして、他者を救いたいという異常な精神性が、愛欲や性欲への墮落を許さなかったのだ。トロンとした雌の顔をしながら、シヨーツだけでは無く白タイツまで愛蜜で濡らして耐えていた。

しかし、我慢し続けたナイチンゲールにとっての運命の日が訪れてしまう。

それがモルガンが朝まで種付け交尾をされ続けた、正しく今日であつた。

いつものように性衝動に屈しない心構えをしてからマスターの部屋へと入ったナイチンゲールだったが、今日に限ってはそんなものは無意味である。

マスターとモルガンに時間が無かつたため、後処理は本当に最低限であつた。

ドロドロのシーツやタオルはビニール袋に入れて口を軽く閉じただけであり、精液を拭いたであろうティッシュなどはゴミ箱に入つたままだ。

未だに劇毒と言つても差し支えない媚薬を、そのまま蒸気に変えたような濃い淫臭が部屋中に籠つていた。例え兵器としての機能しか持っていないエルキドウであつても、性的興奮と生殖本能を覚えてしまふだろう。神代の大魔術に匹敵する効果が、この部屋の空気には秘められていた。

要するにナイチンゲールが、どうなつてしまったのかと言うと――

「――すうーんーんーんっ♡♡♡ はあ、ーんーんーんっ♡♡♡ ここは危険ですっ♡♡♡ いつ、今すぐ封鎖措置と換気をしなくてはっ♡♡♡♡
すうーんーんーんっ♡♡♡ はあ、ーんーんーんっ♡♡♡ ああ――っ♡♡♡」

両手で股の部分を抑えるナイチンゲールは、人生で初めての潮吹きをしていった。自身の足元に小さな液溜まりを作つてしまう。余りに

普段のナイチンゲールからは想像も出来ない、絶叫のような嬌声を上げてしまう。

今の彼女は陰核を起点に、頭に向かって電気が流れていた。目の前が何も見えなくなり、全身が浮かんでしまうような浮遊感が包み込んでいる。

初めての自慰行為が服越しにクリトリスを軽く撫でただけであったが、性衝動を長い期間に渡って我慢し続けた肉体にとってはこの上ない快楽だったのだ。

床にうつ伏せになって倒れ込み、全身をビクビクと震わせている。スカートの内側が自身の恥ずかしい体液で濡れていた。

赤い瞳を快感で濁らせるナイチンゲールは、荒い呼吸をしながら呟く。

「はあっ♡♡ はあっ♡♡♡ おっ、治まりません……っ♡♡♡
もつと気持ち良くなるなくてはっ♡♡♡ ……はあっ♡♡ 下腹部
の疼きが止まりませんっ♡♡♡ 私は病気になるってしまったようで
す………”治療”をしなくてはっ♡♡♡♡」

自分自身に治療だと言い聞かせながら、ナイチンゲールは再び自らの秘所に手を伸ばすのだった。

大まかに分類して二種類のスメルで、マスターの部屋の空気は満たされていた。

もしもこの淫らな二オイが、無差別にカルデア中に撒き散らされていれば、古今東西の英霊が集った大乱交パーティーが始まっていた可能性も否定は出来ないだろう。

ある意味で被害に遭ったのが一人だけだったのは、不幸中の幸いであったのかもしれない。

少しずつ部屋に備え付けられた空調により換気が行われているのだが、発情した雌のどこか甘酸っぱいと感じる二オイは時間経過と共に濃くなるばかりである。

それは二オイの発生源である”発情した女”が、自慰行為という快樂の底なし沼に頭为天辺までドツプリと浸かり、ブクブクと大量の気泡を口から吐き出しながら溺れているからだ。

「すう……っ♡♡♡ はあ……っ♡♡♡ あんっ♡♡♡ あ……っ♡♡♡
ああっ♡♡♡ ——んひい”っ♡♡♡”

甘ったるい嬌声を上げる女は、かつて『クリミアの天使』と呼ばれた。奉仕と献身を信条とする看護師”フローレンス・ナイチンゲール”その人である。

今の彼女は鋼鉄の意志を持った怪我人や病人を”治す者”では無く、全身の火照りを慰めるために自慰行為に耽る”患者”であった。

自身の中で湧き上がる病的なまでの性的欲求を発散するために、彼女は自分自身を”治療”しているのだ。少なくともナイチンゲール自身は、このオナニーを治療行為だと位置付けていた。

自慰行為の邪魔になるとナイチンゲールは黒いスカートを、ベッド付近の床に乱雑に脱ぎ捨てている。

女性らしく肉付きの良いしなやかな脚を覆う純白のタイツは汗でジツトリと濡れた肌に張り付き、中の肌色が確認出来るくらいに透けていた。それは下手に生足を晒しているよりも、何倍も卑猥である。

その純白のタイツもナイチンゲールがより強い快感を得るために、

股間部分がビリビリと破っていた。ゆで卵の殻を破った時のように、汗ばんだ太ももの付け根や丸い尻タブが露出している。

汚れが目立つようになると彼女が好んで履いているシンプルなデザインの白色のショーツは、膣口から溢れさせたトロットとした粘性の高い愛蜜と尿道口から何度も尿のように噴き出した潮を大量に含んでいる。

そのショーツを手でぎゅうつと絞れば、雌のフェロモンがたっぷり含まれた体液が滴り落ちることだろう。

そんな秘所を隠すためのショーツは、ふっくらと膨らんだ大陰口の横に意図的にズラされていた。

充血してプツクリと膨らんだクリトリスや普段はピタリと閉じて一本線の筋にしか見えない小陰唇が隠すことなく見えている。

性的興奮から雄を受け入れるために小陰唇は『くぱあ♡♡』とイヤらしく開いており、愛蜜や潮などの体液でピンク色の媚肉がテラテラと濡れているのが確認出来た。

発情期に入った若い雌猫よりも”エッチな気分”になっているナイチンゲールは、右手の親指と人差し指で充血したクリトリスを摘まむように刺激しており、粘性の高い愛蜜でトロトロにぬかるんでいる膣孔に、左手の人差し指と中指を根元までずっぷりと挿入している。

膣の入り口から少し進んだ先の恥骨側にある、柔らかな膣肉や凸凹とした膣ヒダとは少し感触が違う、ブニブニと腫れぼったい感触の”G—スポット”をお腹側に指を折り曲げて、清潔を好むナイチンゲールらしい綺麗に整えられた爪先で『カリっ♡♡ カリっ♡♡』と何度も引つ掻いていた。

右手の指先で摘まんだ陰核は、指の腹で優しく撫でるようにクリクリと弄っている。

クリトリスとG—スポットを刺激する度に、『コプっ♡♡♡ コプっ♡♡♡』とガムシロップのような愛液を溢れさせていた。それはまるで地下から湧き出る水のようなものである。

「すうーっ♡♡ はあ、っ♡♡♡ こっ、このニオイは危険な

のに……っ♡♡ すうーっ♡♡ はあ……っ♡♡
ああっ♡♡ ダメなのにい♡♡ ———すうーっ

快樂によつて焦点の定まらない瞳で天井を見詰めるナイチンゲールは、自分でも駄目だと理解しているシーツに染み付いた淫臭を、深呼吸でもするかのように脳に届くまで嗅いでしまっていた。

煙草を吸えば人体に悪影響が出ると分かっているながら、その中毒性に抗えない重篤な喫煙者に似ているかもしれない。

自分が自慰行為の快樂に溺れてしまった元凶であるのにも関わらず、彼女はシーツに染み込んだ雄の濃い精臭と雌の愛液や潮の臭いを肺が一杯になるまで吸い込む。

その淫臭を自身の脳に深く深く刻み込んでおり、今後もこのニオイを嗅げば蕩けた雌の表情を晒すことになるのは想像に難くない間違いない。

シーツに染み付いた淫臭を文字通り自慰行為の”オカズ”にして、ナイチンゲールは両手を必死に動かしていた。

膣孔から『グチュっ♡♡ グチュっ♡♡』と、卑猥で粘っこい水音が断続的に鳴り響いている。

——そして、その水音と嬌声は時間が経つに連れて、更に大きくなっていく。

口端からだらしなく唾液を垂らす半開きになった口から、自身の絶頂が近いことを嬌声と共に言葉にする。

普段の冷静で落ち着いた声からは想像もつかない、甘ったるい猫撫で声を上げていた。

「——あっ♡♡ ああっ♡♡ あひっ♡♡ ———いクっ♡♡ まらいクっ♡♡♡♡ いつ、陰核と膣孔を刺激してイキますっ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あ……っ♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ うーっ♡♡♡♡ うーっ♡♡♡♡ うーっ♡♡♡♡ うーっ♡♡♡♡ うーっ♡♡♡♡ おひい——っ♡♡♡♡」

仰向けの状態で喉と背中を目一杯に反らして、開いた口から舌を突き出している。

両膝をガクガクと産まれたての小鹿のように震わせながら、しなやかな腰をビクっ♡♡ ビクっ♡♡と震わせている。

充血したクリトリスの下にある小さな尿道口から、間欠泉のように大量の潮を吹いていた。

犬のように鼻を鳴らしてニオイを嗅いでいるナイチンゲールの使用済みのシーツとは違う、ベッドに敷かれた真新しい純白のシーツに潮の液溜まりを作っている。

その液溜まりからは雌のフェロモンがタップリと含まれたイヤらしい香りが匂い立ち、また部屋に充満する雌の淫臭が濃くなっている。

視界全体が真っ白に塗り潰されていたナイチンゲールは、最後に腰をビクっ♡♡と大きく震わせ、尿道口からぷしゅっ♡♡と吹いた。

それを最後に彼女は全身をクタクッと脱力させて、四肢をベッドにだらしなく投げ出す。

——しかし、彼女の下腹部は絶頂後もズキズキと痛いと感じる程に疼いており、性的欲求は少しも満たされていないなかった。

ナイチンゲールは自身の中の一方向に収まる気配の無い性欲を処理するために、殆ど一時的な効果しかないと分かっているながら自慰行為を再開するしかない。

再び両手を自分の濡れそぼった性器へと伸ばし、膣孔からグチュグチュと粘っこい水音を掻き鳴らす。

クリトリスとG—スポットで十分に快感を得ているのに、彼女の指が届かないもつともつと”奥”が刺激を求めている。

必死に一番長い中指を奥へと伸ばすが、どうやっても後数cmが届かない。そして、よしんば指先がギリギリ届いたとしても、子宮が求めている快感には全く及ばないのだろう。

「——ない♡♡ 足りない♡♡♡ 自慰行為によるう♡♡

あうっ♡ この治療方法では足りません……っ♡♡♡ もつと強

ひい♡♡ しっ、刺激っ♡♡ いひっ♡♡♡ 刺激が欲しい…っ♡♡♡
「いうっ♡♡」

必死に自分の両手で性器を弄って慰めるナイチンゲールの真っ赤な眼の尻からは、自然と涙がツーツと流れる。

その涙は雌の本能が訴える飢餓感から来るものであり、自身の細指で弄ったくらいでは満足出来ないことの証明であった。

「もっ♡♡♡♡ ふっ、太くて長い…っ♡♡ んあっ♡♡♡ ナニカでっ♡♡ 私の子宮を強く刺激して頂かなくてはあ♡♡♡ あうっ♡♡♡ こっ、このままでは狂ってしまいますっ♡♡♡ あっ♡♡♡
ああ——っ♡♡♡」

自慰行為のオカズにしている屈強な雄に交尾して貰えなければ、この飢餓感が無くなることは無いのだと、ナイチンゲールの中の”牝”はハッキリと理解していた。

屈強な雄——マスターのペニスを膣孔に挿入して頂き、子宮をどちゅどちゅと突いて貰わない限り、彼女は性欲が治まらない”患者”のままであるのだろう。

しかし、ナイチンゲールが帰りを待つマスターは、未だに帰ってくる気配は無い。

自慰行為で絶頂すればするほど下腹部——正確に伝えるならば子宮のジクジクとした疼きは増すばかりであった。

彼女は絶頂する度に性感だけは間違いなく高まっており、全身の火照りと共に発汗量も多くなっている。

甘酸っぱい汗の匂いと共に、首筋や腋の下などから雌のフェロモンを発していた。

体温の上昇は性感をより高める。お風呂に入った後の方が感じやすいのも、体温が上昇しているからだ。

絶頂したばかりで敏感になっていることも合わせり、ナイチンゲールは何度目かの絶頂を早々に向かえるのだった。

「——クっ♡♡♡ イックっくくっ♡♡♡ お——っ♡」

自らの手で弱々おまんこになるように開発していることに気付かずに、彼女はマスターが部屋へと戻ってくるまで”応急処置”を続けるのだった。

「はぁ、——っ♡♡♡ はぁ、——っ♡♡♡ もっ、もっとおっ♡♡♡」

「——ぢゅぢゅうっ♡♡♡ ぢゅるるっ♡♡♡ じゅるる……っ♡♡♡ ぢゅうっ♡♡♡ ……ぷはぁ♡♡♡ はぁ——っ♡♡♡ はぁ、——っ♡♡♡ 我が夫っ♡♡♡ それではまた後ほど……っ♡♡♡」

「うん、また後で——ね？」
「くくくくくっ♡♡♡♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡♡ 必ず伺いますからっ♡♡♡ ———その時はおまんこいっぱい可愛がって下さい♡♡♡」

二人は知る由もないがナイチンゲールが自慰行為をしている部屋の前で、マスターとモルガンは舌を絡め合うキスをした後に別れた。盛大に後ろ髪を引かれながらも半ば趣味と化している妖精郷に建てた城の改造・改築へとモルガンは向かい、彼はそれを軽く右手を振りながら見送る。

その光景はまるで年若いカップルが、相手の家の前でイチャついた後に解散する光景に似ていた。

モルガンは目標としては『今度こそケルヌノスの襲撃があつて

も、確実に対処できる城にします』と常日頃から語っており、別の世界の女性のマーリンとアルトリア・アヴァロンの仲の良い三人で定期的に集まって改築工事に勤しんでいるのだ。

将来的にマスターの使命が全て終わった後には、希望者を集めてアヴァロンへと移住する計画であるらしい。

——お城の改造が終われば、また昨夜のようにマスターに抱かれに来るのだろう。

モルガンの後ろ姿が見えなくなったのを確認して、マスターはゆつくりと自分の部屋へと戻るのだった。その中では……

「——あゝっ♡♡ あゝっ♡ ああゝっ♡♡ ……イクゝっ♡♡♡
イクゝイクゝ うっ♡♡ イっクゝ うううううううう——
——っっ♡♡♡♡」

濁音混じりの嬌声を上げるナイチンゲールが、両脚をピンと真っ直ぐに伸ばした状態で腰を浮かせながら、破裂した水道管や噴水のように大量の潮を吹いていた。

彼女が仰向けになっっているベッドの上に敷かれているシーツは、大量の汗や愛液、潮でびちゃびちゃに濡れている。

部屋の中は雌の淫らなニオイで満たされており、マスターのペニスが無意識の内に勃起していた。

陸に打ち上げられた魚のように全身をビクビクと震わせていたナイチンゲールは、最後に秘所を天井に突き出すように浮かして、その

後はベッドに柔らかなお尻から自由落下する。

快楽の余韻に浸るのもそこそこに、子宮の疼きを慰めるために両手で秘所を弄り始めた。

あまりにも淫靡なナイチンゲールの姿を目に焼き付けながら、マスターは独り言のように彼女を呼んでしまう。

「…………ふっ、婦長？」

「ああ…………っ♡♡ ——へう？♡♡」

すっかり慣れた手付きで膣孔を穿り続けながら、ナイチンゲールは声のする方を見た。

その声がした方向には、当然ながらマスターが棒立ちで立っていた。

彼女は今まで見たことの無い雄のギラついた双眸をした彼を視認してしまい、自身の子宮がキュンキュンとこれまでとは違う疼き方をしているのを感じる。

自分の痴態を彼に見られていることを自覚して、急速に羞恥心と快感が膨れ上がっていく。

それなおまankoを弄る両手の動きが止まることは無く、より一層激しく淫らな水音を響かせていた。

——ただ貪欲に快楽を貪っているのだ。

「うあ~~~~~~~~~~~~っ♡♡♡」

性的興奮以外の理由で顔を林檎のように真っ赤にしながら、ナイチンゲールは声にならない声を上げる。

直前に絶頂したばかりであるのに、これまでで一番早く上り詰める。

「あっ♡♡♡ みらっ、見られ…………っ♡♡♡ ——いひいっ♡♡♡ あっ♡♡♡ イクっ♡♡♡ マスターに見られながら——イクう

ナイチンゲールが美しい肢体を投げ出ししているベッドの上に乗り、意識が混濁している彼女の耳元まで近付いて声を掛けた。

「――婦長は何でオナニーしてるの？」

羞恥心から声にならない悲鳴を上げるナイチンゲールは、慌てて自分が快楽を得るためにオナニーをしていた訳では無いと弁明をする。

「~~~~~っっ♡♡♡ 違っ♡♡ 違います……っ♡♡♡ これっ、これは治療行為です♡♡ 私はっ、私は自身の身体を蝕む性的欲求を解消するためっ♡♡ じっ、自慰行為をしていただけ……っ♡♡♡ これは立派な治療ですっ♡♡♡」

自分自身に言い聞かせるように、先程までの自慰行為が治療の一環だったと、ナイチンゲールは主張する。

子供の屁理屈のような理論で、自分が自慰行為が大好きな変態では無いと思いついていた。

「――ふん……婦長は治療をしてたんだ。他人の部屋でオナニーしてお漏らししちゃう……」 変態 じゃなかったんだ」

「はっ、はいっ♡♡ 私は変態ではありません……っ♡♡ 流星はマスターですっ♡♡♡ 私の状況を理解して下さいますね……っ♡♡♡」

助かったと安堵の表情を浮かべるナイチンゲールに、マスターはうんうんと頷きながら言葉を続ける。

「うん、今の婦長は患者さん何だよね？」

「そっ、そうですっ♡♡ お恥ずかしながら……この部屋の空気と袋の中にあつたシーツの匂いを嗅いでからっ♡♡ 体が火照って仕方が無くてっ♡♡ 今も子宮がキュンキュンと疼いて……」

もつと治療が必要なようですっ♡♡♡」

「そっか……婦長の病気を治す方法を知ってるんだけど、俺が”お医者さん”になっても良いかな。いっぱい気持ち良くなれるし……また同じ症状が出て、俺がいつでも治療してあげるから」

「マスターが私のお医者様になって下さるのですか？♡♡ それも気持ち良く……っ♡♡♡」

『気持ち良く』というマスターの言葉に、ナイチンゲールはゴクリと生唾を呑み込んだ。本人だけが気付いていないが彼女の浮かべている表情は、快楽に飢えた雌の顔そのものである。

ほんの一瞬だけ迷った後にナイチンゲールは、マスターに『お願いしますっ♡♡』と口にしてしまうのだった。

——彼女にもう少し理性が残っていれば、彼の蒼い瞳の中でメラメラと燃える情欲の炎が揺らめいていることに気付けたのかもしれない。

Fantia & pixiv FANBOX 作品紹介：婦
長は治療が必要―3

甘酸っぱい匂いの汗や微かに磯のような匂いを感じる潮、ツンと鼻を刺激するアンモニア特有の臭いの尿。他にも愛蜜や唾液など様々な女の体液で濡れたシーツの上で、”医者” 役の青年が”患者” である美女に対して”治療” を行おうとしていた。

治療と言っても二人の間には、甘く湿っぽい淫靡な雰囲気は漂っている。間違ってもこれから病気や怪我を治療する、重々しく緊迫した様子には見えない。

——明らかにこれからセックスを始める、男女が漂わせる甘い空気であった。

語るまでも無いことだが医者とはマスター”藤丸 立香” のことであり、患者とは彼のサーヴァント”フローレンス・ナイチンゲール” のことである。

普段とは彼らの立場が、完全に逆になっていた。

怪我人や病人を治療することに対して鋼鉄の意志を持っている彼女が、今では自身が治療を必要とする患者側になっていた。人間の三大欲求の一つである”性欲” に対して、今のナイチンゲールは抗うことが出来なくなっているのだ。

クリミア戦争で負傷兵を救い続け”クリミアの天使” と呼ばれた血濡れの看護婦が、今は発情が隠せない淫らな雌猫のような表情を浮かべており、まるで淫乱な商売以外でも雄を求める娼婦のようであった。

彼女はマスターとモルガンがまぐわった後の淫らなニオイに、我慢など到底出来ない程の性的興奮を覚えていた。腹の底から沸々と湧き上がる性欲を解消するために、プツクリと充血して膨らんだクリト

リスやローションのように粘っこい愛蜜で膣内が満たされた狭い膣孔を、両手でグチュグチュと卑猥な水音を立てながら弄り慰めていた。

しかし、どんなに激しくしなやかな指先を動かそうと、意識を失ってしまいそうな快感を味わったとしても、その性的興奮が治まることは無い。寧ろ下腹部がキUNKUNKUNと”何か”を求めするような、飢餓感すら覚える疼きが次第に強くなっていった。

その疼きはナイチンゲール一人ではどうやっても解消することが出来ず、目の前にいるマスターにしか解消することが出来ないと雌の本能が訴えている。彼女はこれから行う秘め事を治療行為であると考え、間違っても男女が愛し合う行為では無いと思い込んでいる。

バーサーカークラス特有のクラススキルである狂化がナイチンゲールの場合は、人を癒し治すことへの執着心が変わっていた。今回の場合は自身を性的興奮が治まらない病人だと定義して、それを直してくれるドクターをマスターとしているのだ。

——狂っている彼女にとって、医者言うことは”絶対”である。

目の前の淫らな雌を目にするマスターは、荒い呼吸をする彼女に医者として指示を出した。

「——これから治療するから……ナイチンゲールは脚を大きく開いて」

「はぁーっ♡♡ はぁーっ♡♡ はいっ♡ ん……っ♡♡ こうでしようか?♡♡♡♡」

ドクターである彼の指示通りに、ナイチンゲールは肉付きの良い両脚を左右に開く。ふっくらとした恥丘やしとどに濡れた淫肉の割れ目が見える。俗に言うM字開脚のような体勢であり、雄に交尾を求め発情した雌のポーズであった。

異性であるマスターの前で恥ずかしいポーズをすることに、全身が

震えるような羞恥を覚える。しかし、彼女にとって医者言うことが絶対であるため、この恥ずかしいポーズを止めることが出来ない。ただ淫肉の割れ目から、粘っこい蜜を垂らすことしか出来なかった。(これはお医者様のご指示ですっ♡♡♡ 治療のために必要な行為……っ♡♡ —— だから大丈夫ですっ♡♡♡)

自分の言うことに従順なナイチンゲールに、マスターは雄の征服欲が刺激される。情欲の炎が灯った蒼い瞳で彼女の肢体をジツと見詰めるながら、更に彼女の羞恥を煽る指示を出す。

「次はおまんこ両手で開いて……俺に良く見えるように腰を突き出してくれる?」

「~~~~~っっっ♡♡♡ そっ、それはあ……っ♡♡♡」

彼に自分の一番恥ずかしい場所を自分の手で開いて見せることに、流石のナイチンゲールも躊躇してしまう。それをしてしまえば自分が本当の痴女になってしまうと、貞淑な淑女であった彼女は理解していたからだ。

しかし、何度も繰り返すがナイチンゲールにとって、医者言うことは絶対である。それも自分が治療して貰っている立場なのだ。彼女は少しでも自分が変態で無いと思えるように、彼にこれが医療行為であることを再度確認する。

「こっ、これは♡♡ あくまでも視診ですからっ♡♡♡ いっ、医療行為ですよ?♡♡」

「うん、だから……おまんこ見せて」

「~~~~~っっっ♡♡♡ はっ、はい♡♡♡ おまんこ開いてっ♡

♡ マスターに見せます……っ♡♡♡」

逃げ場の無くなったナイチンゲールが、行すべき行動は一つしか残って無い。

身を焦がすような羞恥の炎に焼かれながらも、彼女は震える指先で

柔らかな大陰唇を左右に開いた。

充血したクリトリスや何度も潮を吹いた小さな孔である尿道口、そして雄の交尾器を挿入するための膣孔の入り口が、飢えた獣のような相貌をするマスターには見える。

ナイチンゲールは秘所を突き出すように浮かせ、桜色の小さな窄まり——肛門も恥ずかしい所が全て見えてしまう。

ただの一度の男性経験の無い、桜色の媚肉で作られたトロトロに解れた膣孔は、童貞ならば見ただけで射精してしまいそうな程にイヤらしく美しい。欲望に正直な肉体は膣口からコプコプと涎のように、とろみの付いた愛蜜を溢れさせ零していた。

熟した林檎のように首から上を真っ赤に染めるナイチンゲールは、両手で秘所を広げているために顔を隠すことも出来ない。そして何よりも彼女を混乱させたのは、彼に見られることに快感を覚えてしまうことだった。

(ああ……っ♡♡♡ 私のおまんこ、見られています♡♡♡ へんっ♡
変ですっ♡♡ 恥ずかしいのに気持ち良いです……っ♡♡♡ ——
やっ、やはり私は病気ですっ♡♡)

過呼吸のようにハカハカと荒い息をするナイチンゲールは、全身に走る甘い痺れにピクピクと身体を震わせる。その甘い痺れを自分が病気である証拠だと思いながら、医者であるマスターの指示に従うことしか出来ない。

彼はベッドの近くの棚の引き出しを開けて、ビニールで包装された小さな箱を二個取り出した。その箱にはXLサイズと大きく表示されており、右上には小さく20個入りと書かれている。

現代を生きる人間の大半は、それが直ぐに避妊具であると気付けるだろう。

勃起したペニスにコンドームとも呼ばれるゴムを装着し、膣内で射精した時にもゴムの中に精液が溜まる構造になっている。避妊具で意味は分かるかと思うが、妊娠する可能性を無くするための物だ。

マスターが何のために避妊具を取り出したのかは、言葉にせずとも分かってしまうだろう。一応の治療という体裁を保つために、コン

ドームを装着してセックスをするつもりなのだ。

因みに彼が何故コンドームを所持しているのかと聞かれれば、沢山いる恋人達との性行為の際にプレイの一環としてコンドームを使用していたからだ。

泡立った愛液で外側が濡れた使用済みコンドームで全身を彩り、チウチウと音を立てながらゴムの中に溜まった大量の精を啜るスケベな雌に、最後はボテ腹になるまで生ハメセックスするのが定番となっている。

コンドームからの生チンポの気持ち良さによがり狂い、無様イキするのが癖になっている雌も多い。

例を挙げれば最初だけ生エッチを拒む人妻系サーヴァントなどは、最初だけコンドームをしてセックスをしている。結局はザーメンボテ腹にされるのがお約束ではあるのだが、それを含めて背徳感を味わいながらドスケベセックスに溺れるのがテンプレートになっているのだ。

性病予防という観点でコンドームの存在を知っていたナイチンゲールは、その箱についても即座に理解してしまう。マスターが自分とセックスするつもりだと気づき、それを拒否しなければと思うのだが、言葉として出てこなかった。

それは彼女の中の雌の部分が、雄との”交尾”に期待してしまっているからに他ならない。

ナイチンゲールが拒否の言葉を紡ぐのに戸惑っていると、彼はペニスを露出するために衣服を脱いでしまう。数々の特異点を攻略していく中で、一般人とは到底思えない程に鍛えられた上半身が露になり、流れるようにパンツも脱ぎ捨てた。

「——っ!?!♡♡♡ なっ、なあ——っ♡♡」

彼女がルビーのような深紅の瞳を大きく見開き、まるでお手本のよくな絶句をした。

ナイチンゲールの目に映るのは、当然だがマスターの勃起したペニ

スである。それについては彼女もある程度は予想出来ていた筈だったが、予想を遥かに上回る大きさの”モノ”が露になって、ナイチンゲールは絶句したのだ。

明らかに常人と比較にならない大きさのペニスに、彼女は見惚れてしまっていた。

（~~~~~）　　なっ、何ですか♡♡　　…あつ、あのペニスは♡♡♡　　わたっ、私が知っているモノと全く違います♡♡）

ナイチンゲールの性に触れてこなかった乏しい男性経験では、彼の常軌を逸した大きさのペニスを冷静に受け止めきれない。マスターのペニスは肉の槍と表現するべき禍々しいフォルムをしており、女の細腕よりも遥かに太く、30 cmを優に超える長さがあった。

両手両足の指では足りない雌を喰らった剛槍は、女の本気汁を潤滑油にして膣肉や膣壁でタツプリと磨かれ、赤銅色になるまで淫水焼けを起こしている。性経験の豊富な人間が彼の淫水焼けたペニスを見れば、相当な数の雌を墮としてきたことが分かってしまうだろう。そして何よりも凶悪なのが、親指の幅よりも深い段差のカリ首である。

そのカリ首は女の淫肉を抉りゴリゴリと掘削するためだけに存在する凶器であり、神霊や世界を滅ぼす獣ですらヒンヒンと余裕を剥がして哭かせる魅惑の段差であった。幾ら英霊であろうとも元がただの人間では、その魔性のペニスから与えられる快感に耐えられる筈も無い。

寧ろマスターとのセックスに耐えられる最低条件が、英霊クラスの強靱な肉体を持つていたことであつた。それでも彼との本気セックスの肉欲に頭の天辺まで完全に溺れ、霊基すら変質させながらマスター専用の肉便器なお嫁さんになっている女性サーヴァントが殆どなのだが…

当然のようにナイチンゲールの中の雌としての本能は、既に自身の完全敗北を悟っていた。性経験のない未通女であつたこともあり、自分の指ですらきゆうきゆうと締め付けていた狭い膣孔に、マスターの

肉で出来た槍のようなおちんぽが入る訳無いと怯えていた。

(こんなもので治療されたらあ………壊れ………るっ♡♡♡♡♡ちっつ、
膣が裂けてしまいます♡♡治療で死んでしまいます——っ♡♡♡♡)
本人も無意識の内にナイチンゲールは、マスターの指示であった両
脚を閉じてしまう。大陰唇を開いて見せていた両手も、今では逆に秘
所を覆い隠している。

全身をプルプルと震わせながら秘所を隠すそのイヤらしい姿で、余
計に男の性欲を煽っていることに気付かなかった。彼はいつもより
少し低い声で、彼女を責めるように問い掛ける。

「何でナイチンゲールは、おまんこ隠しちゃうの？ これじゃ”治療
”も出来ないから、早くチンポ入れられるようにおまんこ開いて」
「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡ まっ♡ 待って下さい♡♡
ほっ、他に治療法はありませんか？♡♡ マスターの長くて太いペニ
スが、私の膣に挿入出来るとは思えないのですっ♡♡♡♡」

一途の望みでマスターに他に方法が無いかとナイチンゲールが聞
いたが、彼は彼女の深紅の瞳を見詰めながら無慈悲に答えた。

「——無いよ。俺とモルガンのセックスの後の二オイで興奮しちゃう
”ドスケベ”なナイチンゲールは、おまんこの奥の子宮までいっぱい
チンポで突かれて、セックスで治療しないと治まらないよ。”一応”
まだ治療でコンドームもちゃんとするから、医者言うことを聞いて
くれる？」

「——っ♡♡♡♡♡ はっ、はい………っ♡♡ お医者様の言うこと
は、ちゃんと守らなくてはならないです♡♡♡♡ マスターとセックス
治療しま………すっ♡♡♡」

最終的にナイチンゲールは狂化の影響もあって、医者であるマス
ターの言うことに逆らえない。

他にも彼女が素直に言うことを聞いてしまったのには理由がある

のだが、普段の誰にでも分け隔てなく優しい彼が、今は強引で”雄”を感じる態度であった。ベッドヤクザの片鱗を見せるマスターに、ナイチンゲールの胸はドクンドクンと大きく高鳴り、彼に逆らう気力が削がれてしまったのだ。

彼女は先程よりもマスターとセックスをすることを意識してしまい、深紅の瞳を潤ませ耳の先端まで真っ赤に染める。先程と同じように両脚を大胆に開き、震える指先で大陰唇も開いた。巨大なペニスを受け入れるために、膣孔からはこれまで以上に粘っこい愛蜜を溢れさせている。

M字開脚をしておまんこをクパあ♡♡と広げる、ナイチンゲールの淫靡な姿に興奮しながら、マスターは既製品の中でも最大サイズのコンドームの箱を開封する。一つ一つが個別包装されたコンドームの袋を彼はペリペリと破き、中から黄緑色の丸まったゴムを取り出した。

しっかりと先端の部分を摘まんで空気を抜きながら、巨大なペニスにコンドームを装着する。明らかに手慣れている様子の彼は、丸まっているゴムを陰茎全体を覆うように伸ばしていく。

しかし、幾らコンドームが既製品の中で最大サイズであろうとも、マスターの規格外な大きさのペニスに対応してくれる筈も無かった。いつ破れてもおかしく無い程にゴムが張り詰めており、勃起したペニスの硬度にゴムの強度が完全に負けている。本来ならばゴムがキツくて痛みを覚えそうなものであるが、彼の強靱なペニスは全く痛みを感じていなかった。

陰茎を覆う長さも全く足りておらず、全体の半分程度しか覆えていなかった。明らかにサイズが合っておらず、マスターが如何に雄として強く優れているかを証明している。

彼はナイチンゲールの骨盤をガツシリと両手で左右から掴み、膣口とコンドームに包まれた大きな亀頭の先端を触れ合わせた。膣口からコブコブと溢れる粘っこい愛蜜を、グチュグチュと卑猥な水音をさせながらコンドームを含めたペニス全体に纏わせる。

彼女の粘っこい愛液で黄緑色のコンドームが濡れているのだが、部

を叩き付けた。

——パンっ!!!

「いひ——っ♡♡♡」

肉同士が勢い良くぶつかり合う破裂音が部屋中に響き渡り、ナイチンゲールは肺の空気が全て一気に抜けたような声を出す。実際にマスターの長大な肉槍が膣孔を一息に貫き蹂躪して、本人さえ触れたことの無い無垢な子宮をグリグリと押し潰していた。

彼女は目の前で大きな火花がバチバチと弾け、全身に高圧電流が流れたかのように震えている。

これまで感じていた甘い痺れとは比べるのも烏滸がましいレベルの快感が押し寄せているのだが、未だに知覚する段階にまでは至っていないのだ。

余りに大きな快感に脳の処理が追い付いていない。ずっと疼き飢えていた子宮がいきなりペニスで押し潰されるといふ衝撃に、快感という名の悲鳴を上げてしまったのだ。

下半身からジクジクとマグマのような快感が、脳に向かっていくのがナイチンゲールには分かった。

全身の毛穴から汗が噴き出し、お腹がベコベコと痙攣するように動く。尿道口から尿でも出すかのように、マスターの下腹部に潮をぶしゅっ♡♡♡ ぷしゅっ♡♡♡と大量に噴き出す。

絶対に知ってはいけない快感がゆっくりと迫ってきており、ナイチンゲールはそれを止めようとするが無駄な努力でしかない。

しかし、切羽詰まった人間とは冷静な判断が出来ないものであり、いつもは冷静沈着な彼女が、余裕も無く迫ってくる絶頂に『止まって』と哭き叫ぶ。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ダメっ♡♡♡ ダメですっ♡♡♡
くるっ♡♡♡♡ キっちやうっ♡♡♡ 止まってっ♡♡♡ 止まって

らす。

「——イククっ♡♡♡ イククイクイクイクク——
—っっっ♡♡♡ イッククうううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう」

元が上流階級生まれ故の淑女としての品や理性の消えた絶頂報告をする彼女は、喉が枯れてしまいそうな程に大きな嬌声を上げる。マスターに教えられた“イク”という単語を使つて、濁音混じりの甘い声を出す。

全身で大きな快感を逃そうとしているが、そんなものは焼け石に水滴を垂らす行為に等しい。

これまでの自慰がただの一人遊びであったことを骨の髄まで覚え込まされ、自慰行為では満足出来ないことが確実なものとなる。

(こっつ、こんなの知らない♡♡♡ 知らないですっ♡♡♡ セックス治療、強すぎるっ♡♡♡ こんにゃの覚えたら、中毒を起こしてしまいますっ♡♡♡ イク——っ♡♡♡)

——しかし、マスターが言った“思いつ切りする”とは、一息に膣孔を征服して子宮を押し潰す程度で終わる筈も無い。

絶え間なく押し寄せる絶頂の濁流に呑まれるナイチンゲールの耳元で、彼女にも聞こえるようにマスターはハッキリと囁いた。

快感で意識が混濁としているナイチンゲールにとって、彼の言葉は死刑宣告にも等しい。

「……これから”動く”ね」

「あっ♡♡♡ ああ……っ♡♡♡ 待っ——」

彼女が言葉を紡ごうとするが……

覚から戻って来れなくなる。寧ろマスターが子宮を押し潰す度に、彼女は更に高い位置まで宙に浮かび上がってしまう。

ナイチンゲールは地に足の着かない不安感に襲われ、彼に向かってしなやかな両腕を伸ばす。

彼女の伸ばした両手がマスターの肩に触れ、筋肉の筋を感じるガツシリとした肩の肉に爪先が食い込む程に力を込める。肩と背中の中の境目辺りから血が滲むが、それを気にする様子も無くマスターは力強いピストンをより激しくした。

「イっっっ♡♡♡ イックク…:…っ♡♡♡ あっっ♡♡♡ ああっっ♡♡♡ おっ
チンポっっ♡♡♡ よいっ——ッ♡♡♡♡ おっひっ♡♡♡ ずっどイっっでま
すっっ♡♡♡ いっくくくくくっっ♡♡♡♡ つぐうっううう
うううっうっっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

「もつと、もつとナイチンゲールが欲しい。イってる時の可愛くてエッチな顔も、普段からは考えられない甘くて可愛い声も——
もつと欲しい」

「イっくくくくくくくくくくっっ♡♡♡♡♡♡♡♡ かわいいっ♡♡♡ う
ぐっ♡♡♡ やめっっ♡♡♡♡♡♡♡♡ やめへえ♡♡♡♡♡♡♡♡ おっ、おまんこっっ♡♡♡
♡♡♡ キュンキュンしっでっ♡♡♡♡♡♡♡♡ いっ——っ♡♡♡♡♡♡♡」

生前にも言われたことが無かった『可愛い』という言葉に、ナイチンゲールは絶頂で痙攣する膣肉をきゆうきゆうと甘えるように締め付ける。

肉厚の槍の返しのようなカリ首が、今までよりも膣肉や膣襞を掘削した。

理性は未だにこのセックスを治療だと思いつまとうとしているが、肉体や本能は既にマスターの女や雌として墮ちている。男性や雄として魅力を感じている彼に可愛いと言われて、正直な肉体が敏感に反応してしまっただ。

ナイチンゲールは嬉しいという気持ちが隠し切れず、蕩けた表情の口端がヒクヒクと吊り上がってしまう。深紅のルビーのような瞳を

れは自分の中だけでのルールであるが、バーサーカーというデフォルトで狂化のスキルを持っているナイチンゲールにとっては効果覲面であった。

キスと生エッチをしなければ大丈夫だと判断して、自分はまだまだ大丈夫だと安心感を得てしまう。しかし、自己暗示の効果が高ければ高い程、本当に治療行為の枠組みを超えてしまった時の反動も大きくなる。

そのことに彼女は気が付かないまま、結局はマスターにされるがままに犯されてしまう。

コンドームのせいで彼の方も快感を感じ難いのか、いつもよりも更に時間を掛けて杭打ちピストンを続け、合計で二百回近く子宮を押し潰してようやくマスターの射精感も高まる。

グツグツと片方だけで野球ボールのように大きな睾丸の中で煮詰まった精が、マグマの噴火のように出口を目指して競り上がっていく。膣内で陰茎全体がビクリと大きく震え、亀頭が更に大きく膨らむ。

「——っ。ナイチンゲール、射精そうっ！」一回目”射精すよ——っ”

「~~~~~~~~っっっ、♡♡ はっ、はい、っ♡♡♡ 出して大丈夫……ですっ♡♡」

「うんっ、射精すっ。——射精すっ！」

——バッチュンっっっ、!!!!

これまで以上に力強い腰の打ち付けに、ナイチンゲールの尻タブやベッドから浮いた。膣内に挿入された成人男性の腕のように長く太いペニスと下腹部に彼女の下半身は支えられている。度重なる子宮への暴力で彼女の子宮全体がクタクタに柔らかくなっており、亀頭の形に合わせて歪んでいた。

亀頭の先端と子宮口が完全に密着した状態で、大量の射精が始まる

するように震わせ、呼吸の仕方すら忘れてしまいそうな程に快感の津波に巻き込まれる。

射精の後も暫くは腰をグリグリと押し付けていたマスターだったが、コンドームを着けている為に一度ペニスを膣肉からズリりと引き抜いた。精液の溜まったコンドームは先っぽだけが膣口から覗いた状態で、ペニスからは取れてしまっている。

彼の長大で彼女の身体を支えていたペニスが引き抜かれると同時に、ナイチンゲールは女性らしい丸みを帯びた大きなお尻から重力に従ってベッドに崩れ落ちた。それが切っ掛けとなったのか、彼女は全身の筋肉を弛緩させる。

尿を我慢する骨盤底筋と呼ばれる筋肉も緩んでしまい、ナイチンゲールは潮を吹いていた尿道口からじよろじよろとツンと鼻を刺激するアンモニアを含んだ黄金水をちよろちよろと出してしまう。二度目の雄の前でする排尿の快感に耽溺しながら、恥ずかしいおしっこを止めようとすら思えなかった。

「——おゝっ♡♡♡ おゝお……っ♡♡ おゝひっ♡♡♡ はあゝーっ♡♡ はあゝーっ♡♡♡♡♡」

ナイチンゲールは全力疾走をした後のように荒い呼吸をするのだが、豊かに実った果実のような乳房が大きく揺れる。その姿を見ただけでマスターのペニスに血流が集まり、まだまだ足りないと言った獣欲が滾ってしまう。

マスターは彼女の膣口から飛び出しているコンドームの先端を摘まんで、大量の精液が溜まって泡立った愛液に濡れたゴムをずりゆずりゆと抜いていく。両の目を見開くナイチンゲールは、半開きになった口から舌を突き出して、獣のような下品な声を出してしまう。

——ぬぼっ♡♡

「——っ♡♡♡♡♡ おゝほおゝゝゝゝゝゝゝゝっ♡♡♡」

少しでも刺激すれば『パンっ!』と弾けてしまいそうな程に、ドロドロのお粥のような精で膨らんだコンドームが彼女の膣から引き抜かれた。彼はコンドームの口をギュツと縛り、彼女の顔の横に放ってしまう。

直ぐに残り十九個となった箱から、新しいコンドームを抜き取る。また同じように黄緑色のコンドームを勃起したペニスに装着して、マスターは泡立った愛蜜を溢れさせる膣口に龟头を触れ合わせた。

ゴムの感触にナイチンゲールは気が付き、必死に頭を振り乱しながら『休ませて♡』と懇願する。

「————っ♡♡ まっ、待つへ♡♡♡ 待つへえ……っ♡♡ すこっ、少しだけきゆうけい♡♡♡ セックスちりよう♡♡ 待つて下しやい♡♡♡」

「駄目、我慢出来ない。取り合えず”残りのゴム”が無くなるまでは、休まずにセックスしよう? ゴム越しだから快感も弱いと思うけど、いっぱい気持ち良くなれるように俺も頑張るから」

彼の言った残りのゴムとは、十九個と更にもう一箱を合わせた合計三十九個のことである。

「うっ♡♡ うそっ♡♡♡ しんじやうっ♡♡ 本当にしんじやいますっ♡♡♡ あう————っ♡♡♡」
(~~~~~っ♡♡♡ 死んでしまいますっ♡♡ 本当にイキ死んでっ♡♡♡ につ、逃げるべきですっ♡♡ マスターから逃げないとお♡♡♡)

マスターが一個のゴムを消費する間に、ナイチンゲールは十回以上も絶頂に達してしまっていた。ゴムを全部使い終わってしまう頃には、彼女の絶頂する回数は余裕で三桁を超えてしまうだろう。

本当に死んでしまうとナイチンゲールは仰向けになった状態から、

腹這いになってシーツを両手でギュッと握り締めながら部屋の出口を目指して這いずろうとする。しかし、彼女の細腰をマスターが両手でガツシリと掴んで、絶対に逃げられないように拘束した。

俗に後背位とも呼ばれる体勢になり、再び彼の膣口にコンドームに覆われた亀頭の先端が触れる。ずぶぷつ♡♡と空気の抜ける音を出しながら、ゆつくりとペニスが膣内に埋没していく。

マスターは彼女に覆い被さり、ナイチンゲールを組み伏せた。

まるで本当の獣同士がまぐわう時のような体勢に、彼女の子宮はキュンキュンと疼いてしまう。雌としての本能がこの交尾の体勢に反応してしまい、膣口からはコプコプと粘っこい愛蜜を溢れさせる。

逃げようとする意志や反抗する気持ちも無くなってしまい、ナイチンゲールはゆつくりと侵入してくるペニスを受け入れてしまう。亀頭の先端が子宮口に触れ、ゆつくりと子宮を持ち上げていく。

——遂には子宮がぐにゅりと押し潰され、またポルチオアクメしてしまう。

発情期を迎えた雌猫のような嘆き声を上げる彼女に対して、マスターは耳元で底冷えするような低い声で囁いた。

「俺の形を覚えるまで、いっぱいシようね」

「~~~~~♡♡♡ イックッ♡♡ イッ—
—」

——ズンっ！♡♡

ナイチンゲールの柔らかくなった子宮が、彼の硬いペニスの亀頭によって更に押し潰される。声にならない嬌声を上げる彼女に対して、マスターは腰をゆつくりと引き抜いていくのだ。

「——愛してるよ」

「~~~~~♡♡♡ あいっ♡♡ イックッ♡♡
♡♡ イックッ♡♡ イックッ♡♡ イっくう♡うう」

う う う う う う う う う う う う う う う う
「♡

彼の愛の告白にナイチンゲールは混乱と歓喜で、より深い絶頂を味わいながら哭いてしまう。

——彼女は地獄と天国を同時に味わうこととなる。

——コンドーム七個目

「——イってます♡♡♡♡♡ ずっとお♡♡♡♡イってま
しゅっ♡♡♡♡ おちんぽ♡♡♡ おちんぽじゅぽじゅぽ♡
♡ お♡♡♡♡ お♡ひっ♡♡♡ しぬっ、しんじやう♡うう♡
うう♡うう♡うう♡——っ♡♡♡♡♡ ひらひら♡♡♡♡♡」

——コンドーム十六個目

「♡♡♡♡♡……………♡♡♡♡♡……………♡♡♡♡♡」

——コンドーム二十四個目

「ごめんなしやいっ♡♡♡♡♡ ひいい♡♡♡——っ♡♡♡♡♡ むりっ♡♡♡ む
りいっ♡♡♡♡♡ しえつくす休ませっ♡♡♡ おっぱい捏ねないれえ

♡♡ ちくびグリグリしにやい——んむう!?!♡♡♡ ちゆるっ♡♡
ちゆるるっ♡ じゅちゆう——」

——コンドーム三十二個目

「ぢゆるるっ♡♡♡ じゆるるるるっ♡♡ ぢゅちゆう——ぷ
はあ♡♡♡ はあ——っ♡♡ はあ——っ♡♡♡ イ——
くくっっ♡♡ キスっ♡ キスはあ——っ♡♡ んあ——
くくっっ♡♡♡ ——んむう——っ♡♡ ちゆるるっ♡♡♡ ぷ
はっ♡♡♡ はあ——っ♡♡ こっ、これじゃただのせつくすで
すっ♡♡ イ——クっ♡♡ ちりようじゃない♡♡♡ ……ちゆう
♡」

——コンドーム四十個目

「——ぶはっ♡♡ はあ——っ♡ はあ……っ♡♡♡ イ
グっ♡♡ イ——ク——う——う——っ♡♡♡ もっとキスう♡♡
キスほしい——っ♡♡♡」

——ぬぼっ♡♡♡

完全にマスターのペニスの形を覚え、閉じなくなってしまった膣口
から最初のころと変わらない量の精液が詰まったピンク色のコン
ドームが引き抜かれた。

元々意味を為していなかった衣服は全て剥かれ、全身の至る所にキスマークを作られたナイチンゲールは、真っ赤に腫れていつもより更に大きくなつたお尻だけを天井に向かって突き出した状態で、何度目になるか分からない尿を弱々しくちよろちよろと零している。

彼女の背中やお尻の上、ベッド中に使用済みコンドームが乱雑に置かれていた。黄緑色とピンク色の愛液濡れのコンドームはイヤらしく、後は彼女のお尻に正の字が黒ペンで書かれていれば、ドスケベ女の肉便器のようである。

部屋にはナイチンゲールが入った最初の頃と同じように、雄と雌の濃い淫臭が立ち籠っていた。

今が何時であるかすら彼女には分からず、セックスの快感といつの間にか受け入れてしまったキスの幸福感に抗うことが出来なくなっている。ナイチンゲールの中にあつたキスと生セックスをしなれば、治療行為だというルールの一つは破られ、残っている生でのセックスが最期の防波堤となつていた。

しかし、マスターに愛を囁かれながらな女を墮とすキスをされて、彼女の中で彼への好意は強くなる。

今後もマスターに床に誘われれば、尻尾をブンブン振りながらナイチンゲールは来てしまうだろう。最早、彼のいない生活など考えられる筈も無く、セックス中毒に近い依存をしまつてしまつていた。

「——むっ、無理ですっ♡♡♡ もうこれ以上は駄目ですっ♡♡♡ イキ過ぎて全身が敏感に……っ♡♡♡ あっ♡♡♡ また——」

尿を出し切つた後にブルリと腰を震わせて彼女は、何度目になるかも分からない失神をしそうになるが、それよりも早くマスターが声を掛ける。彼の言葉はナイチンゲールの意識を覚醒させるのに十分過ぎる程の衝撃を与えた。

「——ナイチンゲール、ゴム無くなつたから……生でセックスさせて？」

「~~~~~♡♡♡ なっ、なまつ♡♡♡」

「うん、これからは治療も関係ないよ。エッチで可愛いナイチンゲール」

ルと恋人セックスがしたい」

彼女の治療という逃げ場も全て塞いで、マスターはただの愛し合う男女のまぐわいを求める。生前から一度も無かった男女の愛し合う関係を想像して、ナイチンゲールはそれだけで快感と幸福感を感じてしまう。

——彼女の鋼鉄の意志は、とうの昔に愛と快楽で溶かされていた。本能にも近い純粋な答えだけが残ってしまい、ナイチンゲールは震える唇を動かいて最後の一線を越えてしまう。

「——わたっ、私もマスターと恋人セックスがしたいですっ♡♡ 治療じゃなくて、恋人セックスが良いですっ♡♡♡♡」

「絶対に幸せにするから——んっ」
「ちゅう♡♡♡♡ ちゆるるっ♡♡♡♡ ちゅ……………ぷはっ♡♡♡♡ はあ」
……はいっ♡♡♡♡ マスター好きっ♡♡♡♡ 好きですっ♡♡♡♡ これからは私も愛して下さい♡♡♡♡」

一度自分に素直になってしまえば後は転がり落ちるだけであり、彼女は我慢していた愛の言葉を繰り返して呟く。マスターを誘うようにお尻が左右にフリフリと揺れ、怒張したペニスを欲しいと強請る様に開いた膣口がくぱくぱと開閉を繰り返す。

娼婦と比べることすら烏滸がましい程に、マスターとのエッチなことが大好きになってしまったナイチンゲールは、両手で既に開いている膣口をさらに広げ、粘っこく泡立った蜜を涎のようにダラダラと垂らしながらおねだりをする。

「——マスター専用の恋人おまんこにっ♡♡♡♡ 精液でマーキングして下さい♡♡♡♡ マスターとのセックスしか頭に無いドスケベ女に、おチンポ欲しいですっ♡♡♡♡♡♡♡♡ いつでもっ♡♡♡♡ どこでもっ♡♡♡♡♡♡♡♡ 好きなだけ——使って下さいっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

どこでも使えるお手軽オナホになることを彼女は誓い、今までで一番ペニスを膨張させたマスターは自分専用の孔にゆっくりと挿入するのだった。

——彼らの部屋には雌の哭声と肉のぶつかり合う音が響き続ける

評価者50人記念 番外編―1 モルガンは夫に恋をする

番外編：モルガンは夫に恋をする―1

「――さい。――なさい」

氷で作られた鈴のように冷たく美しい声色。

その女の声は聞くものに安心や高揚では無く、恐怖と冷静を与えた。聞いているだけで、何故か背筋を伸ばしたくなる。

そんな声の持ち主に”彼”は起こされた。

「――起きなさい、我が夫。いつまで妻を待たせるのですか」

「……………あれ、モルガン？」

「はい。妻であり、妖精國の女王であるモルガンです。

さっさと起き上がりなさい。夫の寝顔も流石に”見飽きて”しまいました」

言われるがままに我が夫と呼ばれた男は、上体だけを起こした。

モルガンの声で意識を取り戻した人類最後のマスター”藤丸 立香”は、まだボーっとしている脳をぎこちなく回転させる。それは錆びた歯車に油を差しながら、ゆっくりと動かしていくのに似ていた。ギギギと不快な音を立てながら、彼の思考が回っていく。

本当は色々聞きたいことがある筈なのに、脳と意識と口が連動していないせいで、口から出てくるのは取り留めも無い言葉である。

「ごめん、何だか気怠い感じがして。……………凄い寝坊をしたような感じなんだ」

「無理もないでしょう。色々ありましたから」

本当に長い間、例えば”数カ月”くらいずっと眠っていたような感

覚をマスターは覚えていた。自分が浦島太郎にでもなったかのように、時との”ズレ”を漠然とだが感じている。

全身の筋肉が落ちていく訳では無いのだが、何となく動かし難い。手を開いたり、閉じたりを繰り返していると、少しずつ自分の思うように腕が動き始める。体調自体はこれまでに無いくらい良かったので、交換可能なパーツを全て最新式に交換した愛車を運転し始めた時の感覚に近いだろうか。

マスターの様子を観察していたモルガンは小さく呟く。

「……………結果は上々のようですね。ちゃんと定着しています」

「んっ、何か言ったかな？」

聞き返すマスターにモルガンは素知らぬ顔で「何でも無い」と、短く答えた。

これ以上、聞いても無駄だと直感的に感じたマスターは、自分が今いる場所や意識を落とす前のことを思い出そうと試みる。しかし、頭の中に濃い霧が掛かったように思い出せなかった。その部分だけ隠されているようだ。

何故か疑問に思えない。そういうものだとして自然に受け止めてしまおう。

カルデアのことや異聞帯のことはハッキリと憶えているのだが、直近のことだけがどうしても思い出せない。

明らかに魔術的なものが使用されているのに、マスターはそのことに気付けない。犯人は目の前に居る魔女しかいないだろう。

マスターが周囲を見回して確認できるのは、異様に豪華な部屋の内装と窓から覗く美しい自然、自分が眠っていたキングサイズの倍はありそうな純白のベッド。

——そして、目が覚めるような美人である、モルガンの姿しか確認出来なかった。

パツと見た印象は、涼しげで近寄り難い美人だろうか。

月光のように美しい銀髪のロングヘアを、黒色の大きなリボンで

纏めてポニーテールにしている。目鼻立ちも非常に良く整っているのだが、冬の寒々しい空や氷河のように蒼い瞳が冷たい印象を抱かせた。無表情と言っても良い表情の変化が乏しいことも、芸術品のような美しさの原因だろう。

整った容姿と冷たい瞳は、男を虜にする魔性の美女である条件を全てクリアしていた。

細い首から下はまた違った意味で極上である。

女が望む華奢な肩や細く締まったウエスト、長く細い脚。男の欲望を掻き立てる豊かな巨乳と悩ましげな腰つき、ムチつとした太もも、元気な赤ん坊が沢山産めそうな安産型の張りのあるお尻。

男の欲望と女の願望を全て詰め込んでいるのに均整の取れた肉体。二つを両立していることは奇跡としか言いようが無い。

男も女も見境なく欲情させる淫靡がその身体には詰まっていた。

「……………ここは何処？」

「それも忘れたのですか？ 私達の城の中ですよ。今はまだ”夢の中”で見せられませんが、近い内に本当の生身でも招待します」

「——ここは夢の中なんだね」

マスターは現状を知る手掛かりを一つ手に入れた。

リアル過ぎる感覚ではあるが、ここは夢の中であるらしい。本来ならば驚くべき所なのだろうが、マスターは意識だけ違う世界や英霊の心の中に飛ばされることを、何度も経験していた。

本当は珍しいことなのだろうが、本人にとっては良くあることではない。

「あまり驚かないのだな。もう少し面白い反応が見られると思っていたのだが…………」

「ははっ、慣れてるからね。綺麗で大きなお城だけなら、和と洋のお城とピラミッドがくつついてる建物より、全然マシだよ」

「…………相変わらず汎人類史は狂ってます」

モルガンは汎人類史が狂っていることを再確認した。

自分が妹とまぐわって、子供を作っている世界線なだけはある。マスターに姉では無い姉がいたり、母では無い母がいたりとおかしい存在も多い。

汎人類史に呆れるモルガンに、マスターはもう一つ疑問に思っていることを口にした。

「もしかして此処って、妖精郷？」

「——何故分かった？」

モルガンの雰囲気ガラリと変わった。

空のように蒼い瞳がマスターを射抜くように見詰める。

それは真偽を暴き本心を見抜く“妖精眼”の存在をマスターに再確認させている。暗に自分に対して『?を吐くな』と視線だけで伝えている。

もしも、ここでマスターが嘘を吐けばモルガンは“怒る”のだろう。冷徹で強権的な独裁者である女王の怒りが、どのような結果を招くか考えるだけで恐ろしい。

先程まではマスターとサーヴァントの関係に基づいたものだったが、今は女王モルガンとただの人間に変化していた。実際にやるかは別にして、マスターを指先一つで呪い殺せる。

この場の全てが凍てつくような感覚にマスターは襲われる。全身に寸分の隙間も無く氷の針を刺されているようだ。しかし、マスターは少しも臆することなく答える。死線を何度も潜り抜け、神霊の相手をしている胆力は伊達では無いらしい。

「前からモルガンが凄いお城を建てたいって言ってたから、場所の候補はアヴァロンだと思ってたんだ。アルトリアオルタからアヴァロンのことは聞いてたからね。自然が豊かな妖精達が暮らしている所だって。窓から見える景色が綺麗だったから……尚更ね」

「……なるほど。嘘は言っていないようですね。」

相変わらず余計なことばかり、ペラペラと口にするアルトリアのせいか。私はまた夫の周りをうろちよろしているマーリンや糞虫の入れ知恵だと……しかし、黒い聖剣に私の名前を付けただけでは飽き足らず、本当に忌々しいっ！ 我が夫の恋人気取りの”聖女崩れ”と合わせて、本当に呪い殺してやろうか」

先程までの全てが凍りつくような空気が霧散した。

アルトリアオルタとジャンヌオルタへの怒りはあるのだろうが、マスターへの怒りは消えたらしい。基本的に一部を除いたサーヴァントを疎ましく思っているので、デフォルトの状態である。

苛立たしげに親指の爪を噛むモルガンに、マスターは声を掛けた。

「——それで、モルガンがここに呼んだんだよね？ 目的と……それからこのリアルな”体”についても教えてくれるかな」

「……………そこまで分かりますか」

「目的は完全に分からないけど、アヴァロンは精神体だけで来れる場所じゃないと思ってたんだ。前にマーリンがアヴァロンから特異点に徒歩で来たって言ってたから、最低でも実在する場所みたいだからね」

「答えましょう。それとマーリンと関わるのは止めよ。あれは悪夢そのもの。奴は閉じ込めて、近寄らぬことが重要なのだ。今も私とマスターを覗こうとしている不埒者だ。あのデバガメ夢魔に千里眼ほど、最低の組み合わせも無いだろう」

一頻り花の魔術師への文句を言った後に、モルガンはマスターの疑問に答える。

「先に体について説明しましょう。」

その体は私が”作りました”。最高の素材と高度な魔術を潤沢に使用して、全てが終わった後に”星の終わり”までアヴァロンで共に

暮らすための肉体です。ああ、しっかりと魂と肉体で拒絶反応や変質が起こらないように、調整してあります。その証拠に今回は精神体だけでの借り入居ですが、違和感はないでしょうか?」

「……………ずっと眠ってた感覚はもしかして」

「初めてこの体で起きたからですね。完成自体は結構前からしていたので、そのせいでしょう。」

寝顔観賞にしか使用出来ていませんでしたが、ようやく役に立ちました」

モルガンは満足気に微笑み、胸を張った。

平然と言つてのけるが、やっていることは常軌を逸している。ブリテン島の”神秘”を継承する『真の王』である神域の天才魔術師モルガンにしか出来ない芸当だった。2000年以上の時を生きた彼女が”最高”と言つた素材と、”高度”と言つた魔術がどれ程のものであるか、想像するだけで恐ろしい。

近代魔術師が見れば、泡を吹いて卒倒するだろう。

いつの間にかアヴァロンでの永住権と不老と思われる新しい肉体、お城が出来上がっていたことに、流石のマスターも苦笑が浮かぶ。自分が死んだ後に連れていかれそうな閻魔亭や冥界、ヴァルハラや事象の地平の彼方、他にも影の国など候補は沢山あったが、死ぬ前に妖精郷送りになりそうだ。

マスターの苦笑を見たモルガンは、見当違いなフォローを入れ始めた。天然な部分が要所要所で垣間見える。

「……………安心して下さい。ここにも少ないですが人はいます。」

汎人類史の”妹の旦那”なのですが、夫ともきつと気が合うでしょう。マーリンの入城は絶対に許しませんが、他のご近所付き合いを止めたりする程、私は器量が狭い女ではありません」

「——アルトリアの旦那さん?」

「カルデアに居るアルトリア達とは、完全に切り離された別物”です”がね。」

人々の幻想から騎士王が消えた後に残った、少女としての”アルトリア”です………自分が少し旦那と幸せだからといって、毎日のように手紙で『2000歳の恋愛処女年増、本当の夫が欲しかったら体での誘惑は止める、下半身に脳が付いているのか、私とシロウは今日もラブラブセックスしますが……駄姉は無理そうですね？ 別側面の私と竜の魔女に旦那を寝取られている妻(笑)』と、私を煽ってくる愚妹ですっ！ ああっ、思い出しただけで怒りが込み上げてきましたっ！

——やはり竜に縁のある女共は私の敵だっ!!」

ふーっ、ふーっ、威嚇する猫のような息を吐くモルガン。

アヴァロンに住む旦那持ちの妹と毎日手紙のやり取りをしている事にも驚くが、その手紙の内容がまた酷い。お互いに煽り合って、喧嘩をしているのだろう。……ある意味、仲が良いのだろうか？

マスターはモルガンを宥めながら、続きを促す。

「まあまあ、落ち着いて。——それで俺をアヴァロンに呼んだ目的を教えて欲しいのと、カルデアにある体は大丈夫？」

「はあ……はあ、カルデアにある夫の体は寝ているだけです。」

目的については——夫が私の夫であることを”再認識”させることです。小憎らしいアルトリアや恋人気取りのジャンヌと別れることを宣言して、私一筋になることを誓うまで、アヴァロンから返すつもりはありません。

何であの小娘達とは毎夜セックスして、私とは……んっ、今日こそは私のカラダに溺れて貰うぞ」

「えっと、つまり……俺を独占するため？」

「その通り。男なんて私と淫蕩に浸れば簡単に堕ちてしまう。覚悟することだなっ♡」

マスターはようやく全てに合点がいく。

ここまで壮大な拉致監禁をしてやりたかったことが、ずっとエッチ

なことを避けていた自分とのセックスだったのだと。もう少し穏便に事を運べなかったのだろうか。

マスターがモルガンとセックスする関係にならなかったのも、彼なりにモルガンのことを大事に思っていたからだのだが、それは全く伝わっていなかったようだ。

妹の言うように”恋愛処女”には、難し過ぎたのかもしれない。

今もズボンを脱がそうとしてくるモルガンに対して、どうしても言いたいことがあったが、今の彼女に言っても意味は無いだろう。寝れば簡単に男が堕ちると思っっているままでは、永遠に本当の夫婦にならないことを――

気持ちを切り替えたマスターは、モルガンに一つ提案をする。

「――モルガン。セックスするのなら、俺に任せてくれないかな？」
「ふふっ、ようやくその気になりましたか♡」

言っておきますが、私は汎人類史の多くの男と寝た淫蕩な私の記憶も有しています。そして、1800年ほど昔のことですが、私自身もそれなりに浮世を流してきました。夫が少し経験が豊富であるからと言って、どうにかなる相手では無いと覚悟して下さい。

――今から夫が私にへこへこと腰を振る姿が見えますっ♡」

モルガンには絶対的な自信があった。

これまで数多くの男を手籠めにしてきた実績と自分の優れた容姿への信頼。そして、妖精眼の存在。

相手の『愛している』が、全て嘘だと分かっってしまう眼で、真実の愛などある筈も無い。逆に『気持ち良い』や『もつとシたい』などの雄の欲望だけは、いつだって本当なのだ。恋愛観が歪むのは必然だった。

なまじこれまで自分が本気を出して、靡かなかった男がいなかったせいで、男はセックスすれば自分の思い通りになるといふ偏った恋愛観を作りあげた。また、汎人類史の自分も同じ過ちを繰り返していたため、間違いが是正されることも無かった。

2000年以上の膨大な時間を消費して、間違った恋愛観は彼女の中で確固たるものになってしまった。

——結果、出来上がったのが生まれてから2000年以上経っても、一度も恋愛をしたことが無い乙女だった。

性知識と性経験だけ貯め込んだ、恋を知らない生娘。

体だけでは無く、心も通わせる。愛のあるセックスを一度も体験したことが無い悪女。

そんなモルガンは、今までと同じようにマスターを自分に溺れさせることで、支配しようとしていた。支配こそが彼女の愛情表現だからだ。

（夫もこれで私の”物”だ♡ 結局は男など肉欲には勝てない獣と同じです。極上のエサを前に貪ることしか出来ない）

「……………それは楽しみだな」

マスターは笑顔を浮かべていたが、その目は全く笑っていない。

この恋愛処女に愛のあるセックスを教え込んで、絶対に墮とすと決めていた。

——小さな水音が室内には響いていた。

じゅるっ♡♡ ちゅるるっ♡♡ ちゅっ♡ ちゅぢゅっ♡♡

音の発生源では、大きなベッドの上で男が女の上に覆いかぶさっている。お互いに服は着ているので、まだ本番は始まっていないようだ。

マスターはモルガンにキスを落としながら、右手で慈しむように頭を撫でている。

どれだけの時間、そうしていたのかは分からない。しかし、モルガンの無表情は何かに耐えるような表情に歪み、太ももをもじもじと擦り合わせている。両手でシーツをギュツと掴み、お腹がビクビクと震えさせていた。

頬や額には玉のような汗が浮かび、目尻にも涙が溜まっている。キスで酸素を取り込めていないせいかわ、顔が林檎のように紅潮していた。

マスターがモルガンの呼吸のために、一時的に唇を離す。

呼吸を荒くしながら、モルガンは涙目でマスターを睨み付ける。

「ぶはっ♡♡ はあっ♡………はあっ♡………はあっ♡ おっ、夫♡
これは、セックスではありませんっ………んむっ♡♡ ちゅっ♡ 良
い加減にしないとぉ♡ 怒りますんっ——じゅるるっ♡♡ ぢゅっ♡♡
♡♡ いつまでキスっ♡♡ んむっ——っ♡♡」
（いつまでキスをするのですか♡ こんなっ、こんなに長いキスなんて知りません。頭が少しずつ融けてしまう♡♡）

これまでのモルガンは、キスを儀式的なものとしか捉えていなかった。

相手と唾液を交換する意味や意義が感じられず、そんなことをする位なら、さっさとセックスを始めた方が快楽が得られると思っていた。乳房を揉まれたり、陰部を弄られたりする方が気持ちが良い筈だと。

実際、マスターとのキスにも最初はそのままで快感を感じていなかった。

唾液の交換も相手に合わせているだけであり、手順を大事にするマスターに付き合っているだけ。

しかし、キスを始めて十分ほど経った頃に、肉体の方が心地良さを感じ始めたのだ。

唇同士の触れ合いや舌の絡め合い、歯茎や内頬を舌で舐められると小さな喘ぎ声が漏れそうになっていた。

美味しくも無い唾液が、美味しいような錯覚に囚われ始める。

——直接的な快感では無く、精神的な充足感から来る気持ち良さ。モルガンが良く分かっていたいなかった概念を体の方が先に理解していく。凝り固まった脳は理解を拒んでいるのだが、深層心理が喜びを感じていた。

「ちゅるるっ♡ ——んっ♡ まらしゅるきですかっ♡♡♡んちゅっ♡ しゃっしゃとしえつくすっ♡♡ ちゅぢゅっ♡♡ するべきれすっ♡♡ んむっ♡♡」

（キス程度で気持ち良くなる筈がありませんっ♡♡ 私は誇り高いブリテンの女王！ 夫の丁寧で、優しく、愛情を感じるキスなどっ♡♡ あ——っ、舌の甘噛み良いですっ♡♡♡♡）

どれだけ頭が理解を拒否しようが、体の方は正直である。

一方、マスターはモルガンにキスの良さを根気強く教え込んでいた。

触れ合うようなソフトキスから始まり、最終的にはお互いの口内を舐め合うディープキスまでゆっくり丁寧に好意を持って行う。それは肉欲に溺れた男がする貪るようなキスでは無く、相手と一緒に気持ち良くなるうとするキスだ。

モルガンに心まで繋がる気持ち良さを教えるために、愛情を持って前戯を続ける。

本質的に愛に飢えたモルガンがキスに酔ってしまうのは、当然の帰結であった。

そして……

「んちゅっ♡ じゅるるっ♡♡ ——ぷはっ♡ もっろ♡♡ もっろ欲しい♡♡ 夫のきしゅ♡♡ んちゅっ♡ ちゅぢゅっ♡♡」

マスターの伸ばされた舌に吸い付き、唾液を音を立てて啜る。

この始めて絶頂を迎えた生娘のような嬌声をモルガンが出していると云って、信じる者は誰一人としていないだろう。

畳み掛けるようなマスターの愛の言葉に、モルガンは身を振りながら悶える。

長い人生で初めて受けた、異性からの本物の愛情に脳が誤作動を起こしているのだろう。幸せホルモンが分泌され過ぎて、興奮した犬のように尿道口から潮を吹いてしまう。両脚がつま先まで一直線に伸びて震えている。

これまでに感じたことの無かった心も体も満たされる絶頂に、モルガンの女王としての誇りは瓦解していく。支配することこそが愛情表現である彼女が、マスターのモノに成りたいと思ってしまうていた。

マスターに全て捧げさせる人生では無く、マスターに全てを捧げる人生を幸せと思ってしまう。

（——我が夫っ♡♡♡ 私か夫のものにっ♡♡♡ 心も捧げるっ♡♡♡
あっ——良い♡♡♡）

妖精國の女王　モルガンはこの日、初めて恋をした。

『うふふっ……異聞帯とは言え、あの支配したがりの妖妃モルガンが形無しじゃないか。面白そうだと思って、見に来て正解だった。それにしても——彼、美味しそうだね♡”ボク”も食べたいなあ♡

『♡

番外編：モルガンは夫に恋をする―2

「――あっ♡♡ あひっ♡♡ うあっ♡♡」

今まで味わったことが無い絶頂を味わったモルガンは、未だに余韻から抜け出せず、腰を小刻みに震わせていた。自分の吹いた潮で、下着がびちゃびちゃになる感覚を味わっている。

本来ならば濡れた下着など不快でしか無い。しかし、今のモルガンにとってはマスターに愛されている証だ。

（我が夫の愛の言葉で潮が出てっ♡ 腰が止まらないっ♡♡ あ―
―っ、また絶頂がっ♡♡）

腰を浮かせて秘部を強調するように、マスターにも分かる絶頂を迎える。子宮をイジメられて絶頂した時のように、絶頂から戻ってこれない。波が押し寄せてきたまま、一向に引かないような状況が近いだろうか。

そんな状態のモルガンに、マスターが耳元で優しい声色で囁く。

「モルガン。もっとモルガンとキスしたい。……しても良い？」

「~~~~~っ♡♡ おっ、夫がのぞむのならっ♡ いくらで――んむううっ♡♡♡♡」

モルガンの言葉を言い切る前に、マスターがその可憐な唇を塞いだ。キスを覚えたての生娘のように鼻呼吸も忘れて、彼女は舌と唇を弄ばれる。

舌を引き戻す前に絡め取られ、前歯を使って何度も甘噛みされる。その度に体中に甘い痺れが走り、嬌声を上げたいが口を塞がれているせいで、それすら叶わない。抵抗しようにも、流し込まれる唾液を飲み下すことだけで精一杯の状態だった。

今までの優しいキスから、モルガンをイジめるキスに変わっていた。

イジメると言っても貪るようなものではなく、愛情の感じられるキ

スだ。しかし、今の彼女にとっては大きすぎる変化だった。

脳の処理が追い付かず、自由な足だけがバタバタとシーツの海を泳ぐように動いてしまう。

完全にマスターに手玉に取られているモルガン。自分が最初にイメージしていた状況と真逆である。

悔しい気持ちもある筈なのに、負けるのが気持ち良くなっていた。

(キスだけで手玉に取られているっ♡♡ 私ほ口づけもまともに出来ない下手くそだっ♡♡♡ 舌を噛まれて仕置きされてっ♡ 唾液美味しいっ♡)

その後も一切の息継ぎもさせずに、マスターはモルガンにキスをする。

元々、マスターがモルガンに覆い被さる体勢だったが、いつしか全身で拘束するような体勢になっていく。

身じろぎすら出来ないくらいに拘束されて、口の中を蹂躪される。次第にマスターの唇や舌の動きだけで、求められていることが分かるようになっていく。

例えば上歯と下歯の間を舌で舐められれば『口を開けて』である、口内に侵入してきた舌が自分の舌を突けば『舌を伸ばして』だ。

言葉の必要としないキスの仕方だけのコミュニケーションを、モルガンは教え込まされていた。

マスターからのキスに支配されているモルガンは、快感と幸福感で蕩ける頭にキスでのコミュニケーションを甲斐甲斐しく刻み付けていた。

——その理由は、理解できていると頭を撫でて貰えるからだ。

飴と鞭。飴は頭を愛情を持って撫でることであり、鞭は舌への痛みを感じない程度の甘噛みだ。その二つを巧みに使い、マスターはモルガンを愛していく。

それは女を従順にさせるための確かな技術と呼べるものだった。

他にも彼は英霊達と性的な関係を深めていく中で、沢山の技術を学び、見付け、習得している。それら全てを駆使して、相手を気持ち良くさせることにだけ使う。

根底に愛があるからこそ凶悪である。

痛みは我慢できても、愛と快楽を我慢できる人間は本当に少ない。仮に一般人女性にその技術の数々を行使すれば、マスターのために尽くす雌奴隷が出来上がるだろう。実際に指先一つで潮吹きアクメしてしまうサーヴァントも存在するので、比喻抜きで女を駄目にする可能性があった。

ある意味で将来が恐ろしいマスターは、キスからようやくモルガンを開放する。

「ちゅぷっ♡　ちゆるるっ♡♡　んむううっ♡♡　ちゅっ♡　んっ——
　　——　　ぷはあっ♡♡　はあっ♡……………はあっ♡……………はあっ♡」

「モルガン、可愛かったよ……」

先程よりも更に蕩けた表情を見せるモルガンは、仰向けの状態でも潰れることのない、美しい形を保つ乳房を揺らしながら、肩で息をしている。

マスターは優しく頭や頬を撫でながら、モルガンの息が整うのを待つ。それが余計に彼女の下腹部をキュンキュンと疼かせた。あんなに鬼畜なキスで躡けておいて、今度はただ慈しむように愛でられる。

緩急で心がぐちゃぐちゃになる。

マスターという沼にズブズブと嵌っていく感覚であった。

（我が夫は想像以上に、女性の扱いに長けているっ♡♡　子宮が熱いつ♡　勝手に夫の精を求めていますっ♡♡）

モルガンの体は完全に交尾の準備が整っていた。膣内は粘っこい本気汁で潤い、子宮が入り口近くまで降りて来ている。膣口の周りを包んでいる小陰唇や大陰唇もふっくらと膨らんで、熱を帯びながら赤みを増す。

後はマスターのペニスを迎え入れるだけだった。

——しかし、何事も上手く事は運ばないのが人生である。

マスターは息を整えたモルガンに告げた。

「——最初はおっぱいからじっくり弄ってみようか」
「待っ、待って下さいっ♡ 私の準備はもう出来てっ♡♡」
「ううん、始めからじっくりやろうと思ってたんだ。欲望を貪るようなエッチじゃなくて、愛し合うエッチをしようって」
「な、な——っ♡♡♡」

モルガンにとつての死刑宣告である。

唇一つであんな状態になってしまったのに、生娘の相手でもするかのように体中を丁寧に愛撫されるなんて、自分がどうなってしまうのか想像すら出来なかった。

屈託の無い笑顔でそう言ったマスターは、モルガンの上体を起こす。後ろから彼女を包み込むように抱きしめる。俗に言うあすなろ抱きに近い状態になった。

服の上から豊かな乳房に優しく触れながら、モルガンの耳元で囁く。

「モルガン、好きだよ。いっぱいイク所見せて？」

「ひいっ——♡♡」

引き攣った悲鳴のような声がモルガンの口から漏れた後、マスターは重量感タップリのバストを持ち上げるように両手で支える。そのまま握るように揉みしだくのでは無く、ふよふよと優しく指を動かすようにして揺らした。

乳房の揺れに合わせて、モルガンの口から喘ぎ声が漏れる。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ もどかしいですっ♡ もっ、もっと強くがっ♡♡ あんっ♡♡♡ ああっ♡♡♡」

「モルガンくらい大きいと、支えられるだけでも気持ち良いんだよ。それに、ずっとおっぱい支えられてると段々気持ち良くなるから………ゆっくり楽しんでね」

「そんっ♡♡ そんな——っ♡ 強く握ってっ♡♡ んあっ♡ 大丈夫なっ♡♡ おっぱいですからっ♡ あッ♡♡ こんなっ♡♡ 生殺しですっ♡♡ ——ふあっ♡」

確かに強い快感は無かったが、少しずつじんわりと胸の中心に熱が溜まっていくような感覚があった。モルガンは、その小さな熱に恐怖を覚える。この熱がどんな快感を生むのか分からなかったからだ。

マスターはモルガンの言葉を受け流しつつ、絶妙な力加減で手に収まり切らない乳房を弄ぶ。意図的に乳輪や乳首には触れず、親指が乳房と腋の境目をカリカリ引つ搔くように動かす。

モルガンの懸念の通り、乳房の熱は全体に広がっていき、中心の温度も更に上がっていった。温度の上昇に合わせて感度が上がり、元々マシユマロのように柔らかかったおっぱいが更に柔らかくなっている。

特に酷いのがマスターの手が触れている下乳部分である。十本の指が小さく動く度に、興奮と快感を煮詰められていく。自然と口が開き、舌を突き出す扇情的な表情に変化していた。

「——おっ♡♡ おっ、おっぱいあついっ♡♡ あっ♡♡ い♡♡ ふあっ♡♡ ゆびいッ♡♡ しっらにやいっ♡♡ こんにやのッ♡♡ しらっ、しらに“やい”いいいいいい“い”っ♡♡」

遂にはお尻を浮かせながら、秘所を突き出すような体勢で絶頂してしまう。

細い首を目一杯に反らし、マスターの肩に後頭部を擦り付ける。乳房をマスターに持ち上げられているせいで下半身しか動かせないため、下品な腰振りダンスのように腰を揺らしながらイってしまう。そうでもしないと快感が逃がせないため仕方が無いのだが、女王の威厳の欠片もない恥ずかしい格好である。

体全体から雌のフェロモンを発しながら、これまで以上に発汗す

鈴のように冷たく美しい声が快楽で男の欲望を掻き立てる、下品で淫猥な雌声に変わってしまう。

グツグツと沸騰したお湯に、赤熱化した鉄球を放り込むようなものである。文字通り桁違い快感にモルガンの脳みそが焼かれる。あらゆる淫蕩に浸っていたなどと、今では過去の自分自身を鼻で笑いたくなるような性体験。

脳が耐えられる快感の上限値をとつくに超えたソレは、モルガンをマスターへ隷属させるための鎖と楔になる。愛と快感で彼女は飼いならされていく。

「いぐグ——っ♡♡♡ おっぱい♡こわれり♡ゆ♡♡♡♡
あ♡あ♡♡ ちくびっ♡♡♡ ちくびっ、つぶさない♡れえッ♡♡♡
おっぱいしぼるのっ、はんしよくっ♡♡♡ おっぱいのさかいめ♡っ♡
♡♡♡ ゆびでいじるのむりいい♡いい♡いい♡いい♡いい♡
♡っっ♡♡♡♡♡」

「大丈夫だよ。もつともつと——気持ち良いこと教えてあげるから。脱がせるね?」

「あ♡っ♡♡♡ やああッ♡♡♡♡」

マスターは手慣れた動作でリボンやホックなどを解いて外し、汗で湿ったワンピースタイプのドレスをスルスルと脱がせていく。絶頂によって抵抗する気力すら無いモルガンは、気付けばショーツだけを残して素肌を晒していた。

興奮で鎖骨から上の肌は赤らみ、全身が汗でしとどに濡れている。乳頭はピンと勃起、乳輪がプツクリと膨らんでいた。引き締まったお腹がベコベコと凹んだり、膨らんだりを繰り返しているのは、絶頂のせいでお腹の筋肉が収縮をしているからだ。お臍の窪みには汗が溜まっていた。

多くの男を虜にしてきたであろう極上の女体を前にして、マスターは乳房だけの愛撫から責め方を変更することを決めた。

息も絶え絶えなモルガンを仰向けに寝かせ、右手をお臍近くの下腹

に合わせて膣口から愛液が零れ、尿道口から潮を吹いてしまう。特に子宮と一緒に膀胱にも振動を与えられているため、モルガンにとって違う液体のお漏らしのように感じてしまう。

子宮が受ける刺激を性行為が始まったのだと体が勘違いを始めて、腰が浮き上がり、人一人が収まる位に両脚が開き、両膝を曲げた状態で浮いてしまう。それは明らかに正常位で男を受け入れる時の体勢であった。

マスターに下腹部を刺激されただけで、エアセックスを始めてしまう無様過ぎる格好。しかし、モルガンにはそれを気にするだけの余裕が無い。

（お腹をトントンされてるだけなのにっ♡♡♡ 子宮が反応してます♡

腰が浮いてっ♡♡ んひいつ♡♡♡）

その後も右手でお腹を叩かれ、左手で乳輪と肌の境目を円を描くように指でなぞられて、モルガンの性感は高められていく。

下着は秘所を隠す以外の機能を放棄しており、桃尻の下のシートに潮と愛液のプールを作っていた。腰が浮く度に下着の上からでも蜜が溢れていることが分かる。モルガンも妹に似て、汗気の多い体質のようだ。

「おひ——っ♡♡♡ いひっ♡♡♡ いぐっ♡♡♡ はあっ♡♡♡………はあっ♡♡………むひい♡♡♡ もう、むひい♡♡♡」

「少しは解れてきたね。じゃあ……もうちよつと強めに子宮柔らかくしよっか」

「——いひっ♡♡♡ もうしきゅうっ♡♡♡ グズグズれすっ♡♡♡ おつとのしきゅうだからあ♡♡♡ おつとのものらからっ♡♡♡ や————っ」

最早、命乞いにも近いモルガンの言葉を無視しつつ、マスターは愛撫をより気持ちの良いように変化させる。

具体的に説明すると、右手で両乳首を摘まみ二つを擦り合わせるように捏ね上げ、左手は子宮を振動させるように叩くのでは無く、押し

潰すように動かし始めた。

「~~~~~」

声にならない絶叫。

これ以上ないと思っていた快感を軽々と上回る快感が、頭の天辺からつま先まで駆け巡る。雷に打たれたような衝撃に、モルガンは蒼の瞳を裏返した。

肩をベッドに着いたまま、背骨が折れてしまうのではと心配になるほど背中を反らし、両膝をガクガクと震わせながら、つま先立ちになっていた。強すぎる絶頂を逃がすために、自然とエビ反りのポーズになってしまう。その体勢のまま、秘所を突き出すように何度も腰が跳ねる。

大量に吹いた潮をショーツが一時的に受け止め、丸い尻タブまで伝い、びちゃびちゃと音を立てながらシートに落ちて染みになっていく。

快感を水に例えるなら、快楽の許容量はコップだ。

モルガンのコップはとづくに満杯であるのに、蛇口に繋いだ二つのホース使ってドボドボと際限なく水を注がれている。因みに二つのホースは、乳首を捏ねられる快感と子宮をお腹越しに押し潰される快感である。

溢れて処理しきれなかった快感は時間を掛けて、絶頂に変換されていく。しかし、モルガンにとつては、どんなに絶頂しても、次の絶頂がやってくる。終わりのない馬拉ソン大会のようなものだ。

体を作り出している霊基にまで影響が出そうな程の快感を、ただ体を震わせて耐えることしか出来ないモルガンは、遂に潮と愛液の液溜まりが出来たシートにお尻から崩れ落ちた。瀕死の虫のように、全身を時折ビクビクと痙攣させている。

普段のモルガンであれば絶対にしらないようなガニ股で震えている姿は、男の獣性を掻き立てる。

体を強張らせて痙攣していたモルガンだったが、最後に一際大きく

震えた後に、蛸などの軟体動物のように全身を脱力させてしまった。開いた口からはだらしなく舌が垂れ下がっている。

何度も振動で刺激され、最後には子宮と共に押し潰された膀胱の周辺筋肉も緩んで、じよろじゅろと水音を立てながら失禁してしまう。潮と愛液で出来た液溜まりに、黄色い液体が混じる。

意識を半分失っているモルガンの耳元でマスターは囁く。

「モルガン……お漏らし気持ち良かった？」

「——っ♡♡♡ ……………は………いつ♡♡♡」

殆ど無意識の状態でもルガンは、お漏らしが気持ち良かったと認めよう。

彼女のお尻がブルリと震え、最後の尿がチヨロつと漏れ出た。

モルガンは女として支配される悦びを霊基に刻んだ。

『彼、間違はなく鬼畜だね。ボクだってあそこまでの経験はないよ。わっ、失禁までしたのに、またお腹とおっぱい弄り始めた♡♡ あーあ、泣きながら命乞いまでしてるのに、目を合わせて愛してるって言いながらキスまで♡ 妖精眼持ち特攻みたいなことしてる♡ くっ、今だけは同情するよ妖妃モルガン、本当にご愁傷様！

……………二人が眠ったら、摘まみ食いさせて貰おう♡ 少しくらいなら良いよね？』

番外編：モルガンは夫に恋をする―3

お腹を見せる犬のような体勢をしている女がいた。

それは服従のポーズだろうか。

犬や狼がお腹を見せるポーズをするのは、相手に弱点を見せることで、自分には敵意が無いことを伝えるためだ。

実際にお腹を見せるポーズをしているモルガンが、誰かに服従をしているかと言えば……

「――お♡♡ ……もう、ゆうひへえ♡♡♡ ……：…：…：…：ゆう…：…ひへえ♡♡♡」

――完全に服従していた。

乳首責めとお腹からの子宮責めで失禁アクメをしてから、追加で四回”深い”絶頂をするまで愛撫され続けた。それに加えて、キスをされながら頭を撫でられたり、耳元で愛を囁かれたりと、愛情もタツプり注がれていた。

体と心をドロドロの蜂蜜に変わるまで愛されて、霊基を壊されていた。

自分の”在り方”である”支配への渴望”を、マスターに対して限定ではあるが”支配される悦び”に変化させられたのだ。

英霊としての在り方を変質させられてしまう程の性愛体験をマスターに刻まれ、モルガンはもう戻れない所まで墮とされている。マスターという沼があるとしたら、半身浴どころか頭の天辺まで浸かり、ゴボゴボと溺れているような状況である。

今のモルガンも全身がびしょびしょに濡れており、水を浴びた後のようだ。因みに濡れている本当の理由は、度重なる絶頂と興奮による体温上昇が原因の発汗と秘所から流した大量の体液が原因である。

絹で織られた上質な純白のシーツには、大きな汗染みや黄色い水溜りが出来ていた。

女の汗の甘酸っぱいような匂いと潮や愛液のほんのりと磯臭いような匂い。そして、尿に含まれるアンモニア特有のツンと鼻を突く刺激臭が合わさって、男を雄に変える興奮するニオイがベッドの周辺には充満している。

モルガンは呼吸するだけでも、全身が気持ち良くなっていた。

特に乳房は空気に触れているだけでも感じてしまう状態だ。肩で荒い呼吸をすると柔らかいおっぱいがふよふよと揺れてしまうのであるべく浅く息をしようとしている。

息も絶え絶えなモルガンに、マスターは声を掛ける。

「——モルガンは、これからどうしたい？」

「はあっ♡………はあっ♡………はあっ♡………しえっ……くすっ♡♡………しえっくすっ♡♡ したいれす♡ おっとのぎーめん………こだねっ♡♡ クタクタしきゆうにつ♡♡♡ ほしい………ほしいれすっ♡♡♡」

モルガンは少しでも早く性行為がしたかった。

ずっと子宮に振動と圧迫の愛撫を繰り返されていたせいで、体は既にセックスをしたつもりになっているのだ。しかし、肝心の精を未だに注いで貰っておらず、飢餓にも近い状態を味わっている。

子宮を丹念に柔らかくされているのに、未だに子宮がキュンキュンと疼いているのは子種を欲しているからだ。

——だが、モルガンの綺麗な銀髪を手櫛で梳くように撫でながら、マスターは本当にそれで良いのかと確認してきた。

「もつと準備したら、もつとセックスが気持ち良くなるよ？」

………例えば腋の下を唾液タップリの舌で舐めたり、唇で優しく吸ったりするのとか。背中の背骨のラインを指とか舌でなぞられるのもゾクゾクするし、足先とか指先も神経が集まっているから色々気持ち良くなれるのに。他にもまだまだ腰とかお尻とか一杯あるけど——

——本当にセックスする？」

「~~~~~♡♡♡」

マスターの説明した前戯の数々を、自分の身体でされる想像をしてしまう。

性感の高まっているモルガンは、それだけで絶頂に達してしまう。マスターならば自分の想像を超える快楽を与えてくると分からされているから、全身がビクビクと震えるように強張ってしまう。

ここで『お願いします♡』とモルガンが答えれば、候補に挙げた前戯を全てじっくり丁寧に泣き叫ぶまでされてしまうのだろう。

そうして出来るのは、全身の至る所が性感帯に開発されたドスケベで弱々な雌一匹。マスターの愛撫でヒンヒン泣きながら、種付け交尾のことしか考えられない淫らな牝だ。

(……そんなの駄目だっ♡♡♡ それでは妻では無く、性処理用の奴隷女になってしまう♡♡ アルトリアやジャンヌと何も変わらぬ♡♡ 夫との交尾のことしか頭にない女に——っ♡♡)

モルガンは未だに”妻”になりたいという、強い願望を持っていた。そう、マスターに支配されたい願望は生まれたが、マスターに他の女がいる事は認めたくないのだ。自分だけを見て、愛して欲しかった。

初めて恋をした女の純粋な独占欲だった。

そのためには、マスターにも自分に夢中になって貰う必要があった。アルトリアオルタやジャンヌオルタよりも、自分の方が魅力的だと思ってもらわねばならないのだ。

モルガンは気力を振り絞って、マスターに返答する。

「——せつ、セックスが良いですっ♡♡♡ 夫の上に跨らせて下さい♡♡ 夫が気持ち良くなれるようにっ♡♡♡ ……私に夢中になって貰えるように頑張りますっ♡♡」

「うん、分かった。それじゃあ……シよっか？」

「はっ、はい♡♡」

この時、モルガンはまだ過去の経験を引き摺っていた。

幾らマスターの愛や前戯が素晴らしいモノであっても、セックスが始まってしまえば自分の蜜壺で締め上げれば夢中になって貰えると思っていたのだ。二千年の時間の重みと実績が、自分が本気で男を虜にしようとするれば、出来る筈だと考えさせた。

それに加えて、今回は自分のペースで動ける騎乗位でのセックスだ。自分が最も得意としている体位であり、快感もある程度はコントロール可能だという客観的に見ても有利であった。

（だっ、大丈夫ですっ♡♡ 夫の上で妖艶に腰を揺らす私に、我が夫も夢中になってくれるはず♡♡♡ 達してしまいそうになっても、ゆっくり動いたり腰を止めれば大丈夫ですっ♡♡ こっ、怖がる必要はありません♡）

自分に言い聞かせるようにして、モルガンは心を強く保つ。

——もつと客観的に、これまでの事実をモルガンが真摯に受け止められていれば、これからの散々な結果も変わっていたかもしれない。しかし、一つだけ確かなことが言えるとするならば、未来の彼女は“幸せ”だ。

マスターはモルガンに指示された通りに、ベッドの上で仰向けになる。

これまでとは体勢が逆転していることにモルガンは興奮しつつ、マスターの股間部分に顔を寄せながらズボンとパンツを下ろそうとしていた。

荒い呼吸をする程の興奮で両手が上手く動かせず、ズボンのボタンを外すのにも苦勞している様子である。

子宮が子種を求めてキュンキュン、ズキズキと疼くせいである。やっとマスターとのセックスが出来ると思うと、心臓が高鳴る程の興奮が押し寄せていた。

見るに見かねたマスターが、モルガンに助け船を出す。

「……モルガン、俺が自分で脱ごうか？」

「だっ、大丈夫ですっ♡ 今、脱がせますからっ♡♡♡」

深呼吸をして心を落ち着かせたモルガンは、何とかボタンを外して、続いてチャックを下ろした。後はズボンとパンツを下ろすだけなのだが、彼女の鼻腔には雄の濃い臭いが入って来た。

蒸れたペニスの臭いはこれまで、モルガンが嗅いだことのあるものよりも何倍も濃かった。

（ふあ——っ♡♡ 濃いニオイですっ♡♡♡ 蒸れてしまったからでしょうか……とっっても雄臭いっ♡♡ でも、嫌いな臭いじゃないですっ♡♡♡♡）

既にびしょびしょの膣口から愛液を零しながら、モルガンは臭いに夢中になってしまう。本来ならば不快な饞えた雄の臭いが、堪らなく素敵な臭いだと感じてしまう。それは彼女の体が、目の前の雄を求めている証拠であり、交尾を求める雌としての反応だった。

スンスンと鼻を鳴らしながら、モルガンはマスターのペニスの臭いに酔う。

もつと濃い雄のニオイを求めて、ズルズルとズボンとパンツを下ろしていく。

マスターが腰を上げてくれたお陰で、比較的スムーズにズボンとパンツは下ろせていたのだが、膝上近くで引っ掛かりのような抵抗があった。モルガンは力を込めてグツと下ろしたのだが……

——ブルンっ

正しく飛び出してきたという表現が合致する、長大なイチモツが露出した。勃起力とでも表現すれば良いのか、寝転がった状態でも天を衝かんばかりにそそり立つ太い槍。

何人もの女を何度も貪ったことが見ただけで分かる程に淫水焼けしてる。マスターの肌の色に比べて明らかに黒い肌の陰茎部分。先

端の亀頭はピンク色では無く、赤銅色をしており、本当に同じ人間のモノなのか不安になる程だ。

例えるならマスターの肉体のペニスと睾丸部分だけを、ヘラクレスやオリオンなどの性豪で有名な英雄と、取り換えたと言われた方が、まだ納得出来そうだった。

それ程までにマスターのペニスは逞しく禍々しい。女を犯し孕ませることにだけ特化したような凶器である。

今のマスターの体は、モルガンが新しくアヴァロンでの生活用に作った肉体なので、淫水焼けなど普通ならしていない筈だ。しかし、神代の魔女である彼女は、作った時のマスターを完璧に”再現”してしまっていた。だからアルトリアオルタやジャンヌオルタを筆頭とする、複数の女達の淫水で焼けたペニスも忠実に再現されていたのだ。

それが自分自身を苦しめるとは、夢にも思っていなかっただろう。

「——あつ♡ うそつ♡♡ これが夫のペニス……っ♡♡♡ 大きいっ♡♡♡」

モルガンは今日初めて、マスターの勃起したペニスを見た。

アヴァロン用の肉体を作っている時から、非勃起状態でも大きいとは思っていたが、血流が集まり勃起したペニスは想定を超えていた。

正直、マスターのペニスであれば5 c m程の大きさであろうとも、絶頂が出来る自信のあるモルガンだった。しかし、30 c m以上の子供の腕と同等か、それ以上の大きさのペニスは考えの埒外にあった。

無意識の内にモルガンの太ももが閉じてしまう。女を、雌を殺すペニスを前にして、彼女の肉体が既に敗北を悟ってしまふ。

マスターのペニスの大きさに近い相手と、淫靡に浸ったこともあるのだろうが、そんなものは今のモルガンにとっては、慰めにもならない。この禍々しいペニス自分の蜜壺に受け入れ、子種を射精して貰えるまで、腰を振らなければならない事に、気が遠くなるような思いが

膣口を合わせる。

蜜壺の入り口からトロトロと垂れてくる愛液が亀頭に掛かり、陰莖に伝っていく。自分の体液でマスターを汚している事実には、彼女は征服欲のようなものを感じてしまう。

今のモルガンは足を大きく開いたガニ股の体勢であるのだが、その姿だけで射精してしまいような程に淫猥である。荒い呼吸で揺れる巨乳の先端や、太ももの付け根から秘所に掛けて出来る窪みまで、マスターには全てが見えていた。

亀頭の先端と膣口がキスをしているので、後はモルガンが腰を落とすだけでいい。しかし、彼女は腰を小刻みに振るだけで、なかなか落とそうとしない。

——いや、落とさないでは無くて、落とせないのだ。

(亀頭が大き過ぎて、怖いですっ♡♡♡ ひいつ♡♡♡ ペニスの熱気を感じてしまって、腰が引けてっ♡♡♡)

なまじセックスの経験があるだけに、余計に恐怖を感じてしまっていた。

自分の性感が極限まで高まった状態で、マスターの巨根に貫かれるのが怖かった。根元まで受け入れてしまったら、自分が自分で無くなってしまおうような、表現しようの無い感覚に腰が止まってしまおう。

結果的にマスターの亀頭に自分の秘所を擦り付ける、自慰行為をしているような状態になってしまっていた。

内心でどうしようとパニックになっているモルガンに、マスターは優しく微笑みながら声を掛けた。

「手を繋ぎながらしてみない？ それだけでも安心出来ると思うから」

「——っ♡♡♡ てっ、手ですか♡♡♡」

「うん、体の支えにもなるから」

「そっ、その、おねがいします♡♡♡」

気を使われた羞恥と嬉しきで耳の先端まで真っ赤になりながら、白

く綺麗な両手をマスターに向かつて差し出した。マスターは自分の指と相手の指が交互になる、恋人繋ぎのように両手を握った。

「——あつ♡♡ これ良いです♡♡」

「それなら良かった。大丈夫そう?」

「は、はいっ♡♡ ……行けます♡」

モルガンは自分の指と相手の指が絡み合う気持ち良ささと、掌同士が密着する安心感に感動する。ただ手を繋いだけなのに体の震えが治まっていた。

これなら大丈夫だと、モルガンは腰を落とし始める。

ぬちゅ♡つと、粘っこい水音と共に、マスターの龟头がモルガンの蜜壺に呑み込まれていく。

「おゝっ…おおっ♡♡♡ きいっ♡♡♡ ひい♡♡♡ ——あゝあつ♡」

限界まで膣口が広がる感覚と、内臓を圧迫されていく感覚が最初に襲い掛かってくる。本当に受け入れられる限界に近いらしく、不規則な呼吸になり、背中に変な汗を掻いてしまう。

それと同時に、膣肉とヒダを掻き分けられていく快感が身体中を駆け巡り、愛する男に自分の身体を征服されていく隷属欲求が満たされていく。

「いひっ♡♡ んあつ♡ はあっ♡…はあっ♡…ふう♡♡
すみま…せんっ♡♡♡ いま、うごきますっ♡♡ んあ♡♡」

「ゆっくりで大丈夫だよ」

「そっ、そうはっ…いきませんっ♡♡ んひい♡♡ つまとして♡

あっ♡♡ ああ♡♡ おつとがほかの女にっ♡♡ ふうっ♡♡

ふうーっ♡♡ なびかせ…ませんっ♡♡ あっ♡♡ あぐっ♡♡

♡ おつとが入れていいのはあ♡♡ つまのおまんこだけで

続く。絶頂した状態から戻ってこれないのだ。ずっと足が浮いてるような浮遊感と脳を焼き焦がす快感に晒されることとなる。

意識が飛びそうなモルガンだったが、これ以上奥までペニスが刺さらないように、マスターの手を握る両手に力を込める。これ以上されてしまえば本当の意味で壊れてしまうと、下唇を噛んで絶頂に耐え忍ぶ。

（——これ駄目っ♡♡ 頭、真っ白っ♡ 死ぬっ♡ これ以上刺さったら死んじゃうっ♡♡♡ 耐えなぎや——っ♡♡ まだぐるゝゝゝっ♡♡♡♡）

最後には顔中が汗と涙と涎でぐちゃぐちゃになりながら、何とかモルガンは耐えきった。きつとマスターが両手を繋いでいてくれなかつたら、もつと酷い状態になっていただろう。

荒い息を吐きながら、妻としてマスターのペニスを受け入れられたことを報告する。

「はあっ♡♡………はあっ♡♡ 妻としてっ♡♡♡ おっ♡♡ 子宮の奥まで入りましっ♡♡ 頑張りましたっ♡♡♡」

きつとマスターは褒めてくれるとモルガンは思っていたのだが、肝心の彼は何故か苦笑を浮かべていた。

マスターは言い辛そうにしながらも、残酷な真実が告げた。

「その……」半分”も挿入ってないよ？」

「——へうっ？」

言葉の意味が理解できないモルガンは首を傾げる。

マスターがペニスと蜜壺の結合部の方に視線を向けたので、自分も視線を落としたのだが、そこには彼女にとって衝撃的な光景が広がっていた。

ペニスの全体の三分の二程度が、まだ露出したままだった。逆を言えばモルガンが受け入れられたのは、三分の一程度だったということ

だ。

「うそ♡♡ うっ♡ ?ですっ♡♡♡ あんなにがんばってっ♡♡」

「子宮下りてきてたから……多分、モルガンのイメージより、入らなかつたんだと思うよ?」

「あ♡♡ あっ♡♡ いゝゝゝゝゝっ♡♡♡」

モルガンはペニスを根元まで受け入れた位に頑張っているつもりだったが、マスターから見れば亀頭と少しの陰茎部分だけを呑み込んで、後は腰をへこへこと振っていたようにしか見えなかった。ピストンと呼ぶのも憚られる、体を上下に揺らすことしか出来ていなかった。

自分の醜態にモルガンの心はベキベキと折られていく。

(恥ずかしいっ♡♡♡ こんなっ、こんなっ♡♡♡ 勝負にもならないっ♡♡♡ 我が夫のオチンポに勝てないですっ♡♡)

羞恥と絶望で頭の中がぐちゃぐちゃになっていているモルガンに、マスターが止めを刺す。

「今度は俺が気持ち良くしてあげたいから、選手交代しよっか? モルガンが頑張ってくれた分だけ、沢山頑張るから」

マスターは今度は自分が動くと言っているのだが、そんなことになればモルガンは壊れてしまっただろう。しかし、彼女はそれを受け入れてしまう。完全に自分の有利な条件で負けてしまっただけ、被虐願望が生まれてしまった。

(もう夫のオチンポに負けます……っ♡♡♡ きっとアルトリアもジャンヌも、私と同じですからっ♡♡♡)

「—————お願いしますっ♡♡♡」

モルガンは完全にマスターに屈服した。

『あくあ、折れちゃった♡♡ これからもっと酷いことになるのに。
それにしても、あんなに愛撫も上手いのに、オチンポも大きいとか
……っ♡♡ ボクも本気で楽しめそうだなあ♡♡ 我慢出来なくて
お城の中に入っちゃったし、早く寝てくれないかなあ♡♡』

番外編：モルガンは夫に恋をする―4

「――始めるよ?」

「はっ、はいっ♡♡♡ やさっ…:優しくしてください♡♡♡ 子宮がずっとグズグズで、もう感度がおかしくなってるんですっ♡♡ お願ひしますっ♡♡♡ 優しいセックスしてください♡♡♡」

自分が提案した騎乗位エッチで、マスターのペニスに完全敗北してしまつたモルガン。彼女は目元に涙を浮かべながら、優しいセックスをマスターに懇願している。

マスターのペニスを三分の一程度、蜜壺で啜え込んだだけで子宮口に到達してしまい。その後は、殆ど自爆であつたが子宮をペニスで持ち上げられながらガクガクと揺らされ、ポルチオ絶頂してしまつたのがトラウマになつてしまつたようだ。

本人は至つて真面目にお願いしているのだが、完全に男を誘つていた。ここまで前振りをされて昂らない雄は存在しないだろう。

マスターも正直な所、性欲を抑える限界に達しつつあつた。

常人の何倍、何十倍もある精力を抑えながら、モルガンという極上の美女を愛撫し続けていたのだ。彼女の聞き心地が良く、男の獣性を掻き立てる嬌声を何度も間近で聞かされ、芸術品のようなエロスに満ちた肉体による痴態をずっと見ていた。精巢で精液が大量に作られ、ずっしりと重くなつていく。

性行為が始まつたと思えば、ガニ股でへこへこと情けなく腰を振る淫らで無様な姿と、龟头と陰茎の一部だけを本気汁と愛液でぬかるんだ肉壺で愛撫をされて、中途半端に終わってしまう。射精することも出来ずに、モルガンの潮を吹き掛けられただけであつた。

煮え滾つたマグマのような性欲が、発散の場所を求めていた。そして、目の前の極上の雌が、無意識にはあるが男を誘っている。

場は整つたと言えるだろう。

モルガンは頭に枕を敷かれ、いつぞやの犬の服従によく似たポーズをしている。その開かれた両脚の間に割り込むように、マスターが膝

立ちになっていた。俗に言う、正常位の体勢だ。

両手を繋ぐことが気に入ったのか、モルガンは態々おねだりをしてマスターと両手をしっかりと繋いでいた。自分の不安を少しでも抑えるために、ギュツと何度も強く握ったりを繰り返している。

童女のようなないじらしさが余計にマスターの獣性を煽っていく。目の前の雌を屈服させて、子宮を玩具にしながら腹が膨れるまで精を注ぎ込んで、獣のように全身をマーキングしたくなってしまう。

マスターの獣のような眼に気が付き、モルガンは怯えるように質問をする。

「おっ、夫っ♡♡ 優しくして下さいますよね？」

マスターはモルガンの今も愛液を涎のように零す蜜壺の入り口に、怒張したペニスの先端を触れ合わせながら答える。

「……うん、優しくするよ」

「~~~~~♡♡♡ あ♡♡ あっ♡♡ ああっ♡♡ うそっ♡♡
うそっ——」

——ドチュンっつっつ
!!!!!!

「こひゅっ——っっ♡♡♡♡♡」

モルガンが嘘や本音を見抜く妖精眼で視た結果を最後まで口にする前に、マスターが思いつきり腰を叩きつけた。彼女の恥骨とマスターの腰がぶつかり合った破裂音は、広い部屋中に響き渡る。

長大な肉棒はモルガンの入り口付近まで下りていた子宮を限界まで押し上げ、そして容赦なく押し潰した。誰が主人であるかを一撃で徹底的に教え込ませる。

雄のイチモツと子種を欲してキュンキュンと疼いていた子宮が、救いを乞うように快感という名の悲鳴を大音量で上げる。大きすぎる

口では駄目や止めてと言っているが、モルガンの体は逆の意見であるらしい。マスターの言葉を聞いて、彼女の膣肉が離さないようにギョっ♡と締まる。

その後もマスターに優しくして欲しいと懇願を続ける中で、モルガンの蜜壺はマスター専用に変化していく。内臓を圧迫される感覚に慣れ、苦しいことが気持ち良くなってしまう。犬のように浅い呼吸をすることで、マスターの長大なペニスを受け入れていても、酸素を取り込めるようになる。

目の焦点が定まらなくなり、涙で潤んだ蒼い瞳が虚空を見ている。白目に近い状態になっていた。

笑みを含んだ大きく緩んだ口元からは、ガムシロップのような唾液が垂れて、伸びきった舌が覗いている。

すっかり出来上がってしまったモルガンの表情に、マスターはもう大丈夫だろうと判断した。

「——動くよ」

「~~~~♡♡♡ まっ、まってくださいっ♡ まだなれ——」

モルガンの恥骨に押し付けていた腰をマスターはゆつくりと離していく。

大きくエラ張っている雁首が、ゴリゴリと膣肉や膣壁を削りながらペニスが外気に露出していく。モルガンの体は蜜壺からマスターの肉棒が抜けてしまわないように、ぎゅうぎゅうと甘えるように締め付ける。しかし、彼女の心と脳は、少しでも膣圧を緩めて欲しいと懇願していた。

膣壁の一つ一つを余すことなく雁首で引っ搔かれる快感は、例えゆつくりな動きであろうと想像を絶するものであった。

「——まっれ♡ とまっれ♡ え♡♡ 無くなり♡ ゆっ♡♡♡ いひっ♡ ヒダヒダ無くなり♡ ゆう♡♡ おまんこのヒダヒダ♡♡♡ ひいひいひい♡♡♡ 入り口のコリコリはだめえ♡♡♡

何度も何度も——まるで餅でも搗くように子宮を捏ねられ、心も体もマスターに陵辱された。他の雄のことなど完全に忘却され、魂や霊基、座にまで新しい夫の存在を刻まれる。次第に自分の体をマスターに”使われる”ことにさえ、幸福感を感じてしまう。

一切の抵抗も出来ない状況で、雄に隷属する悦楽を覚え込まされる。

五十回を超える杭打ちピストンでモルガンが、声すら上げられなくなった頃に、マスターの怒張したペニスが更に膨らみ始めた。それは射精感が高まって来たことの証明であり、重たそうな睾丸が持ち上がっていた。

叫ぶようにマスターは射精することを伝える。

「——射精すよつ、モルガンのナカに射精すつ！」

「……あつ♡♡♡ いつ………いひゅ——っ♡♡♡♡」

ドつチュンつつつ
!!!!!!

これまでで一番の勢いで腰が叩きつけられた。

マスターの腰の力が強すぎたため、モルガンのお尻が宙に浮いている。このお尻が持ち上がって、肩がベッドに着いている状況は、最も精液が子宮に注ぎ込まれてナカに溜まっていく体勢だ。

正しくマスターはモルガンに、止めを刺そうとしている。

これから一生、精液を注がれ愛されるだけの人生を送らせようとしていた。女としても、雌としても完全に墮とすつもりなのだ。

ペニスの先端と子宮口がディープキスでもするかのように深く繋がり、一部の隙間も無く密着していた。ひと際大きく亀頭が膨らみ、子宮口周辺の膣肉も塞ぐと遂に……

びゅる……どびゅっ♡♡♡ びゅっぷっ♡♡♡ どびゅるるっ♡♡♡
びゅるるるるっ♡♡♡ どっぷっ♡♡♡ どぶぶっ♡♡♡ どびゅるるるるるるっ♡♡♡ びゅぶるるるるるるっ♡♡♡

「~~~~~♡♡♡♡♡ あっ、あっ、あっ♡♡♡

「——はいっ♡♡♡」

精液で膨らんだ下腹部に両手を添えながら、モルガンは魔術を行使する。

眩い光と共に、彼女のお臍の下に描かれていた青色の紋様が変化していく。元の紋様がマスターの右手の甲に浮かぶ令呪と同じ紋様に変化して、それを囲うようにデザイン性の高いハートマークが追加された。

明らかに淫紋と呼ばれる類のモノだ。

普段のモルガンの衣装であっても全てが見えてしまうように、計算されて描かれている。

自分の所有者はマスターであると、その淫紋が声高々に主張していた。

モルガンは自分がマスターの所有物になった事実を視覚的に実感して、膣口からゼリーののような精液をゴポリっ♡と、吐き出しながら腰を震わせて絶頂する。

「いく——っ♡♡ はあっ♡………はあっ♡………見てっ♡ 見て下さいっ♡♡ これで夫のモノですう♡♡♡ セックス奴隷のオナホ嫁になりましたっ♡♡♡ 褒めてっ♡♡♡ 褒めて下さいっ♡♡♡」

「偉いよ、モルガン。凄いエッチで興奮する」
「ああ♡♡♡ ありがとうございますっ♡♡♡」

目尻を下げて幸せそうな表情を浮かべるモルガンは、もう一つの”捧げもの”のために魔術の準備をする。

「我が夫のために、もう一つ差し出したいものがあります♡♡」
「ん？ 何かあったの？」

「はいっ♡♡♡ 夫婦の情事を盗み見る、スケベな夢魔を捕らえましたっ♡♡♡」

モルガンはマスターと自分の城に入り込んでいた、女を魔術的に拘束する。

本来ならば”花の魔術師”と呼ばれる、いつでも誰かの夢に逃られる存在を捕まえることは不可能だ。しかし、今回に限っては女の居る場所が悪かった。女の得意とする千里眼や他の魔術、夢魔としての能力ですら、工房内であれば妨害が可能だったのだ。

モルガンの工房を兼ねている”城の中”に入り込んだ時点で、女の未来はとつくに決まっていた。

何かをモルガンは唱え終わると、強烈な光と共に両手を輪で拘束された女が現れる。

「——これは不味いね」

女は『はははっ』と、乾いた笑いを口にしながら、困ったという表情を浮かべる。

マスターの良く知る花の魔術師マーリンに、雰囲気や服装が非常に良く似た女。男のマーリンとは兄妹ですと紹介されれば、そのまま本気で信じてしまうだろう。

モルガンが目の覚めるような美女であるなら、マーリンに似た女は妖精のような美少女だろう。

白くフワフワとした髪からは花の香りがしており、アネモネのように綺麗な赤紫色の瞳は見るだけで吸い込まれてしまいそうだ。全体的に華奢な体付きだが、胸や尻はそれなりに育っている。人外のような浮世離れた雰囲気もあって、清楚な見た目なのに妙に色っぽかった。

マスターは半ば女がどんな存在か確信しつつも、モルガンに確認を取る。

「モルガン。マーリン似の人はもしかして……」

「はいっ♡ 違う世界のマーリンです。」

我が夫を夢の中で性的に食べようとしていたので、どうせなら夫の

性処理用の孕み袋にしようと思ひ、全ての力を封じてお持ちしましたっ♡♡ ……褒めて頂けますか？」

「……うん、嬉しいよ。ありがとう」

お母さんのお手伝いが出来た子供のようなモルガンに対して、マスターは褒めながら頭を撫でて上げることしか出来なかった。目を細めて彼女がマスターの手の感触を堪能していると、マーリンが恐る恐る声を掛けてきた。

「——お楽しみの所申し訳ないのだけれど、謝るからボクのこと開放してくれない？ 今後はモルガンの夫を摘まみ食いしたり、覗きもしないと魔術で契約するからさ」

「駄目ですよ、我が夫っ♡♡ あの女はろくでなしのドスケベなので、悪さをしないように夫の精液と精気で飼いましよう♡♡」

——それに、あのマーリンは英霊でも何でもないの……食べきれない程の精を注がれば、本当に子供を孕めますっ♡♡ 私も霊基の改造か受肉で孕めるようになりますが、夫には沢山の奴隷嫁がいた方が良いでしょう♡♡♡ 夢魔のクォーターを作りましょう♡♡」

目の前の美少女であるマーリンが孕めると聞かされて、マスターの表情が飢えた獣のような眼光と相貌に変化する。普段の彼ならば無理矢理など絶対にしないのだが、モルガンが良かれと思つて精力”三倍”と理性の希薄化の魔術を行使してしまう。

そのことに気が付いたマーリンは焦つたように、モルガンを止める。

「そつ、それは本当に不味いんじゃないかな。今の彼をボク達二人で相手に出来るわけが、本当に孕んでしまふっ♡♡ モルガンだって今の彼を相手にすれば、壊れ——」

説得を試みるマーリンだったが、全て無駄だった。

モルガンは快樂と愛に濁った眼でマスターを見て、蕩けた表情をしながら言った。

「——夫に壊れるまで使って貰えるなんて本望ですっ♡♡♡」

全てを悟った表情で、マーリンは誰かに向けて呟いた。

「……………覗きは良くないね。”君”も気を付けるべきだよ」

『も”う無理い”っ♡♡ 孕んだっ♡♡ 孕んだか”ら許してえ♡♡

あ”ひいっ♡♡♡♡』

『じゅるるるっ♡♡ ぢゅっ♡ 夫のオチンポおいしいれすう♡♡
れろ——お♡♡ 精液のましえてくらさいっ♡♡ じゅちゅっ

♡♡』

『お尻の穴はだめえっ♡♡ ひい♡♡ お腹破けちやう♡♡ 後ろか
ら子宮突かないれ”っ♡♡ 排卵しちやう”っ♡♡ 卵でちやう
”うううう”うう”っっっ♡♡♡♡ あっ——?!♡♡♡』

『お腹の令呪で命令して下さい♡♡ ドスケベ嫁にっ♡♡ あっ♡♡
いひい♡♡ 感度倍はしんじやいましゅう♡♡ イグ”——
——』

『ぢかいますっ♡♡♡♡ ご主人様の孕み袋になりますっ♡♡♡♡ なる
からあ♡♡ ボクにザーメンもつと下さい♡♡ あは——っ♡♡
♡♡』

『後ろからはかわいい♡♡ 怖いですう♡♡ 手をつ♡ 手を繋いで

下さらい♡♡♡ それならあああああ あ ああ つつ♡♡♡
『ああ♡♡♡……………いひ♡♡♡…しゅじん…さま♡♡♡
♡』
『いひ♡♡……………いあ♡♡♡ おっ…とっ♡♡♡ らい
……………すき♡♡♡』

”五日間”、謎の昏睡状態にあつたマスター”藤丸 立香”の健康に問題は無かつた。

その後のマスターに四六時中張り付くマーリン似の女の存在と、マスターの令呪の形の淫紋を刻んだモルガンの方が問題になったことを、ここに報告しておく。

因みに一部の女性サーヴァントの間で、淫紋が流行つたこともここに追記する。

「愛してるよ……………ご主人様♡」

「愛しています……………我が夫♡」

(仮) 評価者150人&お気に入り2000人記念

番外編―1. 5:三つ子を孕む花の魔術師

番外編:三つ子を孕む花の魔術師―1

じゅるるっ ちゅぢゅっ じゅちゅっ ぢゅるるっ

「―いつ、いくらボクのおまんこがっ♡♡♡ あうっ♡♡ 花の蜜のように美味しいからって……………っ♡♡♡♡ 舐めすぎだと思っ
なっ♡♡ んあ♡♡」

花の魔術師マーリンは自分の膣口やクリトリス、尿道口などを丁寧に舐め続けるマスターを諭すように声を掛けるが、彼の耳には何も入って来ない。

――何故なら理性が消失しているからだ。

花のような香りのする妖精のように美しい女を、孕ませることしか頭には無い。

理性の光が消えた獣のような眼をしているマスターは、舌先をマーリンの膣口にねじ込んで膣壁を愛撫している。膣口から溢れてくる愛液をじゅるじゅると水音を立てて啜り、空いた両手は彼女の肉好きの良いお尻を鷲掴み、パン生地でも捏ねるかのように揉みしだいていた。

マーリンの体感時間で一時間以上は、秘所を舐め続けられている。理性は消えてる筈なのに、女の気持ち良い部分を的確に捉えて”感じる”舐め方をするマスターに、彼が生まれつきの性の化物だと驚愕せざるを得ない。百戦錬磨であるマーリンが、思わず声を出して感じ入ってしまう程である。

何度か尿道口を舌先で穿るように舐められたせいで、マーリンは潮以外の体液も出してしまったが、理性の消えたマスターはそれを気に

せず、ゴクゴクと美味しそうに飲んでしまった。

流石の”ヒトデナシ”であっても、羞恥を感じる程度には恥ずかしくなかったらしい。

頬を赤くしながら『ああ……ボクのおシッコ飲んで………っ♡♡♡』と、うわ言のように呟いていた。

直ぐに交尾が始まると思っていたマーリンは、情熱的過ぎるマスターの愛撫への困惑と性感の高まりを感じていた。既に十分過ぎる程の精気を貰ったので、ここから逃げ出したかったのだが、今の無力な彼女にはそれが出来ない。

マーリンは異間帯のモルガンに殆どの能力を封じられており、マスターを止めることは出来なかった。彼女に出来ることは、夢魔の吸精能力で中出しされた精液を吸収して、子供がデキないように耐えること位である。

——マスターの増幅された精力を考えると、殆ど不可能に近いのだが。

マスターが獣になってしまった原因は、モルガンが掛けた精力三倍と理性の希薄化の魔術のせいである。

神代の魔女の使用した魔術はマスターに効果靨面であり、元から人並外れた精力が恐ろしいことになっていた。

魔術が効き過ぎたと言うよりは、精力三倍の魔術と相性が良かったが正しいだろう。性に関することにおいては、マスターは英霊すら超越しかねない逸材であった。

そして、マスターが理性を無くした原因である妖精國の女王モルガンはどうしているのかと聞かれれば、彼等の隣で潰れたカエルのような体勢で気絶していた。膣口からゴプっ♡♡ゴプっ♡♡と音を立てて、白く濁ったゼリーののような精液を大量に吐き出している。シートにはお粥のような白濁液の液溜まりが出来ていた。

性獣と化したマスターによる、抜かずの十七連射でモルガンをハメ殺したのだ。

四肢を押さえ付けて女の胎を徹底的に肉槍で征服しながら、信じられない量の精を注ぎ続けた。正しく獣のような交尾で、モルガンは女として壊されてしまったらしい。

それを間近で見っていたマーリンは、ドン引きしながら密かに秘所を濡らしていた。

あまりに激しい性行為に興奮していたのもある。しかし、一番の理由は初めて孕まされるかもしれないと、雌の部分が反応してしまっていたからだ。

どれだけ人から逸脱した存在であろうと、仔を産める雌であることには変わりが無い。マスターを自分を孕ませる雄だと認識してしまっていた。

マーリンがこのような事態に陥ったのは、完全に自業自得である。マスターとモルガンの情事を覗き、夢の中でマスターを”摘まみ食い”しようとは画策している時にモルガンに捕らえられたのだ。同情できる余地は無いだろう。

何とかマスターを冷静にさせようと、自分の股間に顔を埋めている彼の頭を優しく撫でながら、マーリンは説得を試みる。

「いひ——っ♡♡♡♡ そんなに子作りの準備したって、ボクは夢魔だ……っ♡♡♡ ふわあっ♡ かつ、簡単に赤ちゃんは孕まないから、気持ち良いだけのエッチをしてっ♡♡ お互いに後腐れなく終わろうよ……っ♡♡ ああっ……：激しくしちや駄目だよお♡♡ きっ、キミは犬かい？♡」

マーリンの説得も虚しく、余計に舌の動きを激しくするマスター。彼女が言うように、今の彼は犬のようだ。

鼻先でプツクリと充血したクリトリスを刺激されながら、膣壁の気持ち良い所を舌先で愛撫され、力強くお尻を揉みしだかれる。次第に快感が溜まっていき、マーリンは四度目の絶頂を迎えてしまう。

マスターの顔をスベスベの太ももで挟み込み、頭を両手で押さえ付けながらマーリンは叫ぶ。

「あっ♡イクっ♡♡ ボク、オマンコ舐められていつちや…:うっ♡♡ あっ♡ ああっ♡ あいつ♡♡♡ イっくうううううう
っ♡♡♡♡」

尿道口から噴き出す大量の潮をマスターに飲まれながら、マーリンは絶頂の快感に酔いしれる。ビクビクと腰を震わせながら、絶頂から抜けるまで自分の秘所にマスターを押し付けていた。

マーリンが絶頂する度に花の香りは強くなり、この匂いこそが彼女の雌臭であった。人間と殆ど変わらない見た目を彼女はしているが、細かな部分でやはり違いを感じる。

絶頂から戻って来れたマーリンは、マスターを拘束していた太ももや手を離れた。マスターもぬちやつ♡♡と、口と秘所の間で糸を引きながら口を離す。

(きっ、気持ち良かったあ…:っ♡♡ ボクのオマンコ舐めるの上手すぎるよお♡♡ あっ——押し倒されたっ♡♡♡♡ こっ、交尾されちゃう♡♡♡)

獣のような相貌に変わっているマスターの雄を感じる顔付きに、マーリンはドキドキと胸を高鳴らせながら、碌な抵抗も出来ずに押し倒されてしまう。

モルガンにもしていた種付けプレスをするための、正常位の体勢になっっていた。

女の細腕よりも太く長いペニスが、マーリンの十分に濡れそぼった膣口に押し当てられる。彼女は期待と恐怖が入り混じった表情をしながら、マスターの両肩を掴んで止めようとした。

「まっ、待つて欲しい…:っ♡♡♡ 次はボクが君の大きなオチンポを舐めるからっ♡♡ こっ、こう見えてもテクニクには自信がつ——」

——どっちゅんっつっつ
!!!!!!

てしまう。

ただの”食事”でしか無かったセックス擬きと、マスターとの”交尾”は全く違うものだった。

(こんなのボクの知ってるセックスじゃないっ♡♡♡ 壊れるっ♡♡
僕の何かが壊れちゃう………っ♡♡♡♡ 急いで快感を和らげないと——っ♡♡♡♡)

必死になって魔術を行使して快感を和らげようとしているが、モルガンに封じられている状態では無駄でしかない。それならば少しでも嬌声を上げて、快感を逃がすのが賢明である。

そのことにも気が付けない程に、マーリンの意識は快楽に絡め取られていた。

マスターは必死の懇願に全く耳を貸さず、ペニスが膣から抜けるギリギリまで腰を引く動作と、子宮を押し潰すための腰を叩き付ける動作を繰り返す。

誰が番となる雄であるかを徹底的に、文字通りマーリンに叩き込んでいた。

圧倒的な暴力を受けた子宮は、必死に許しを乞うように初めての”活動”をしてしまう。強い雄に許して貰うために、子作り袋が出来ることは一つしかない。

——ぷりゅっ♡♡

(ああっ!?!♡♡♡ ぼっ、ボクの卵が出ちゃったっ♡♡♡ なっ、何でえっ♡♡♡♡)

人外特有の察知能力なのか、それとも雌としての感覚だったのか。マーリンは自身が排卵してしまったことが分かった。マスターの暴力ピストンを止めてもらうために、さっさと孕んで許して貰おうと、子宮が動いてしまった結果である。

マーリンに残された孕まない方法は、マスターのドロドロ精液を魔力の力で可能な限り吸収することだけだ。

満腹になってしまった瞬間に、マーリンは”お母さん”になってしまおう。

しまっただろう。

殆ど気絶した状態であったマーリンが、意識を手放そうとした瞬間
……

ずりゆりゆりゆりゆり……っ♡♡♡♡♡

——ドっチュンっつつつ
!!!!!!

「ふぎゅ——っ!?!♡♡♡♡♡」

マスターが杭打ちピストンを再開した。

ペニスを膣から抜けるギリギリまで引き抜いた時に、雁首によって搔き出された精液が膣口から溢れてくる。

マーリンは再び始まった暴力ピストンに目を白黒させながら、止めてくれるようお願いする。しかし、相手の理性は消えてる上に、精力は極限まで高まっているので止めてくれる筈が無かった。

「もっう無理いっっ♡♡♡ 孕んだっ♡♡♡ 孕んだかっら許してえ♡♡♡
あっひい♡♡♡ モルガンっ♡♡♡♡♡ モルガン助けてっ♡♡♡ 死ん
じゃう♡♡♡ 英霊になっちっやうっうっうっうっうっうっうっうっうっ
ううっううっうっううっうう——っつつっ♡♡♡♡♡」

プライドも何もかも捨ててモルガンに助けを求めるが、未だに気絶している彼女に何を言っても聞こえる筈が無い。マーリンが一回で半泣きになっている射精を十七回連続で受け入れたのだから、最低でも半日は起き上がって来ないだろう。

要するにあと半日は、マスターの性処理オナホとして扱われるということだ。

「ダメえっ♡♡♡ またくるっ♡♡♡ またキちゃ——」

必死に逃れようとするが子宮をペニスで押し潰されて、また快樂の

海に溺れてしまう。

番外編：三つ子を孕む花の魔術師―2

――びゆるるっ♡♡ びゅぶ……びゅ

「~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡ はあ♡
♡……………はあ♡……………はあっ」

声にならない嬌声を上げるマーリンは、だらしなく半開きになった口から舌を伸ばしていた。

彼女は細腰をマスターにがっしりと掴まれた状態でお尻に腰を叩き付けられ、お粥のような精液を子宮にドブドブと注がれていた。

子宮が精液で重くなってお腹が張っていく感覚に、心地良さすら覚えてしまっている。

体も脳も全く慣れてくれない絶頂を迎えて、背を猫のように反らせながら弱々しく潮を吹く。ビクっ♡♡ ビクっ♡♡と、丸いお尻を大きく震わせていた。

夢魔の血を半分引いているマーリンは、自身の体重が20 kgしかないことを今まさに後悔している。

日頃から鍛えているマスターに簡単に全体重を持ち上げられて、本当のオナホやダッチワイフでも扱うように使われていた。膣と子宮をマスターのペニスで蹂躪されて、玩具のようににされてしまったからだ。

物のように扱われる快感を覚えさせられ、マゾメスとして調教されていた。

最初の分と合わせて十回近く射精されて、マーリンのお腹は妊娠六か月目であるかのように膨らんでいる。子宮内だけでは飽き足らず、膣肉や膣壁の隙間も満遍なく肉槍を使って精液を塗り込められていた。ペニスと膣口の隙間からは、絶え間なく半固形の精液がポトポトと零れ落ちる。

潮と尿、精液が混ざり合った大きな液溜まりが、マーリンの股下のシートには出来上がっている。表現しようのない淫臭は、鼻腔に入っ

て来るだけで性別を問わず理性を溶かしていく媚香のようだ。

「あ……………♡♡ おっ……………おっ♡♡♡♡」

今も呻き声のような嬌声を上げているマーリンは、ベッドにうつ伏せになっているのだが、女性らしい丸みを帯びたお尻だけを天井に向かって突き出している。ミルクのように白かったお尻の尻タブは、マスターの鬼畜ピストンで真っ赤に腫れ上がっていた。

この真っ赤な尻タブは、マーリンが獣のような体勢で子宮をどちゅっ♡♡ どちゅっ♡♡と、突かれるのが好きだったせいでもある。色んな体勢で子宮を責められている時に、後背位で最も反応が良かったのがマスターにバレてしまったからだ。

その結果、お尻が真っ赤に腫れ上がるまで腰を叩き付けられた。理性が消えていようと相手により悦ぶことをしているのは、マスターが根幹に持つ愛して気持ち良くさせたいという気質故だろうか。鬼畜なベッドヤクザのような行為をしているのに、相手が気持ち良くなる事しかしていないのは、女から見てズルとしか言えない。

マーリンは元から好きだった後背位を、更に好きにされてしまった。今後は四つん這いになるだけで、膣口から愛液を溢れさせてしまおうだろう。

未だに精力が衰える気配のないマスターは肉槍でマーリンの子宮を小突きながら、お尻の穴を人差し指と中指で穿っている。精液と腸液を潤滑剤にして念入りに弄繰り回されているせいか、桜色の綺麗な内肉が見えるまでぽっかりと孔が空いていた。

「……………おっ♡♡……………うっ♡♡……………おっ……………♡♡」

挿入した指先をナカで曲げたり回転させたりする度に、マーリンは濁音の混じったお腹に響くような嬌声を上げる。口端から唾液が零れるのも気にせず舌を突き出して、壊れてしまうような快楽から来る涙を流しながら、アナルセックスで気持ち良くなれるように開発され

ていく。

最早、恥ずかしい尻穴を触られても、抵抗する気力さえマーリンには無い。

それどころかマスターにお尻の穴を穿られて、膣内やクリトリスを弄られるのはまた違った気持ち良さを感じている。今日だけで数え切れない程した絶頂の中には、膣や子宮だけでは無くアナルでの絶頂も確かにあった。

お尻の穴が十分に解れたとマスターは判断したのか、長大なペニスを膣からズルズルと引き抜いた。

子宮口の栓になっていた肉棒が抜かれたので、膣口から大量の精液を吹き出すかと思われた。しかし、お腹に溜まった大量の精液は、少しづつしか外に出て来ない。原因は精液が濃すぎて粘度が高いせいであることは明白であり、ゆっくりと膣口を目指して膣内を隙間なく塗り潰しながら流動しているのだろう。

マスターは精液と愛液で汚れたペニスを膣口には無く、指を使って丹念に解した尻穴に亀頭の先端を当てた。そのままゆっくりと体重を掛けていき、イヤらしい肉孔に長大なペニスを挿入していく。

「お、っ………お、おっ♡♡♡ お、しりっ………あ、なあっ♡♡♡
ボクう♡♡ きもひいい……っ♡♡♡ お、ほ——っ♡♡♡」

普段のマーリンからは想像も出来ない下品な喘ぎ声を上げて、お尻での快感を得ていた。

ローションの代わりに精液で十分に解されていたせいで、既に性感帯の一つになってしまうほど開発されていた。子宮が精液で膨れる圧迫感が好きになっていたのもあり、アナルの異物感や圧迫感も快感に変換されてしまっている。

マーリンはどの穴でも気持ち良くなれる、ドスケベ女にされていたのだ。

ただでさえ他の男では満足出来ない体にされてしまっているのに、尻穴も同じように屈服されてしまえば、マーリンは本当に終わってし

まうだろう。安定期に入る前の妊娠期間中もお尻の穴を使って、マスターの性欲を処理するオナホ奴隷のようになるのだ。

(ぼっ、ボクの人生終わっちゃう………っ♡♡♡ オマンコだけならお嫁さんになるだけで”ギリギリ”大丈夫だけど、お尻もされたら奴隷になっちゃうからっ♡♡♡♡ ボクにご主人様が出来ちゃう♡♡♡ ……ちよつと良いかもっ♡♡♡♡)

マスターの性奴隷となった生活を想像して、少し魅力的だと考えてしまうマーリンだったが、何とか誘惑に打ち勝った。彼から逃げたり抵抗することを考えるが、腰は碎けて全身に少しも力が入らないため何も出来ない。辛うじて動く口で、マスターを説得する以外に方法は無かった。

既に半分以上ペニスを尻穴に挿入されて、雌の媚びるような甘えた声をだしながらマーリンは説得を試みる。

「お〇しりは……だめえっ♡♡♡ お〇っ、オ〇マンコなら良いから
あ………っ♡♡♡ ボクっ………このまま奴隷にな〇っぢやう〇
——っ♡♡♡ お〇っ、お〇ねがい〇♡♡ ——お〇
ぐう♡♡♡ ま〇っ、ふかい〇いい〇いい〇いい〇っ♡♡♡
「〇

未知の快感に悶えながらマーリンは何か言葉を紡ぐが、マスターは更に力強く彼女の肛門を犯し始めた。

結局、根元までペニスを肛門に挿入されてしまう。マーリンはお尻の穴まで征服されてしまったことに、悦びを覚えてしまっていた。子宮を潰され過ぎて、マゾっ気が出てしまったようだ。

そして、アナルセックスの本当の快感は引き抜くときに訪れる。ズルズルとゆっくりとした腰の動きでペニスが引き抜かれていくのだが、マーリンは排泄にも近い快感に悶えていた。普通のセックスとは違う快感を脳と尻穴に刻まれていく。

「お〇ひい〇いい〇いい〇いい〇っ♡♡♡ ぬ〇ぐのだめっ♡♡♡

ぬぐのへんにゝなるゝううゝううゝうゝつっ♡♡♡♡イゝつ
ぢやうつ♡♡♡ボクうゝつ♡♡おしりでイゝつちゝやううゝう
うゝううゝうううゝうゝうううゝうゝう——つ♡♡♡♡♡

マーリンはお尻の穴で絶頂を迎えてしまった。

尿道口からぶしゅっ♡♡♡ぶしゅっ♡♡♡と潮まで吹いてしまっているのです、どうやっても誤魔化しようのない程に気持ち良かったのだ。夢魔として無駄な排泄行為を一切したことが無かったのが原因なのか、人以上にアナル絶頂の気持ち良さに狂っていた。

そんなマーリンの絶頂を気にせず、マスターはギリギリまで引き抜いたペニスを再度挿入する。しかし、今度は根元まで挿入するのでは無く、腸壁越しに子宮を狙って突いた。的確に子宮を後ろ側から押されてしまい、子宮内に溜まっていた一部の精液が勢い良く膣口から噴き出す。

そこからのマーリンの反応は劇的だった。

弱点に開発されてしまった子宮を裏側から責められて、陸の魚が跳ねるように全身を震わせる。アナル絶頂と子宮アクメで脳がパンクしてしまう。

マスターはマーリンの反応の良さを確認してから、ピストン運動を開始する。

餅でも搗くように子宮を裏側から突き、雁首で腸壁をぞりぞりと削った。普通のセックスの時よりは動きが優しかったが、彼女を快樂の海に沈めるのには十分過ぎた。

後ろから突かれた子宮がまたしてもパニックになりながら悲鳴を上げてしまい、二度目の許しを乞おうとしていた。それに気が付いたマーリンは、”双子”のお母さんになることを避けようと必死に叫ぶ。

「おしりのあなはだめえっ♡♡♡ひい♡♡♡おゝなか破けちやう♡♡♡
うしろからしぎゆうゝ突かないれゝっ♡♡♡ハイランしちゝやう

っ♡♡♡ ボクのたまごでちゃう。うううう。うう。つつ♡♡♡
あ。っ——?!♡♡♡」

——ぷりゅっ♡♡……ぷちゅんっ♡♡♡♡

マーリンの訴えも虚しく、排卵とほぼ同時に受精した。

子宮の中で溜まっていたドロドロ精液の海に、卵子が飛び込んできたのだ。本人と同じように卵子も精子に陵辱されながらマゾ受精した事だろう。

人間であれば一度の受精だけで済んだが、夢魔という人を超越した存在だからこそ、状況によっては何度でも排卵が出来てしまうのだ。二児の母になることが決まってしまったマーリンは、二人の赤ちゃんに乳首を吸われている自分を想像しながらオーガズムでビクビクと震えていた。

(ボク、双子の赤ちゃん孕んじゃった……っ♡♡♡ 両方のおっぱい同時に吸われちゃう♡♡ ハジメテなのに子育てどうしよう♡ いひ——っ♡♡♡)

夢魔であるマーリンは産まれた頃から、人間を物語のようにしか見ることが出来ない。

昆虫のような精神構造の持ち主だったのだが、今では自分の母になることやマスターのお嫁さん、性奴隷になる幸せや悦びを感じられる精神構造に変わってしまった。

ここからヒトデナシには戻れない。

裏側から子宮を突かれる快感と腸壁を雁首でゾリゾリと掘削される排泄にも似た快感を覚えながら、マーリンはアナルセックスを好きな性行為の一つだと認めてしまう。

(お尻エッチ好き……っ♡♡♡ こんな覚えちゃったらっ、ボク変態になっちゃうのにい♡♡ これからはオマンコとお尻でご奉仕い♡♡ ご主人様に変態女ってお尻叩かれながらお尻エッチっ♡♡♡ そんなの絶対気持ち良い……っ♡♡♡♡)

マスターに罵倒されながらお仕置きのように尻穴を肉槍で貫かれ、

締めりが悪いと尻タブを平手で打たれる自分を想像して、マーリンはそれだけで絶頂に達してしまいそうだった。一切の容赦が無い獣のように貪られる交尾をされ過ぎて、イジメられるマゾアクメが大好きになってしまっている。

これからは妊娠中であろうと自ら両手で尻タブを開いて、オモチヤでトロトロに解したお尻の穴をマスターに見せ付けながら肛門交尾を求めてしまおうだろう。

ただでさえマスターの激しいセックスでしか満足出来ない体になつてはいるのに、特殊なプレイの分類に入るアナルセックスまで覚えさせられてしまった。今回の性行為でマーリンの心が最後まで堕ちなかつたとしても、屈服した体の面倒をマスターに見て貰わなければ生きていけない。

マーリンはまだ理解していないが、もうマスターの所有物である。マスターは膣の締め付けとは違う、腸壁の締め付けを堪能しながら腰を動かす。

始めは緩やかな腰の動きだったが、次第に素早く力強いものに変わっていった。自分の下で『許してっ♡♡』、『変態交尾、覚えちゃっ♡♡』と雌の声を出しながら悦んでいる女を、更にペニスで躡けながら射精感が高まっていく。

既に何度も経験した自分のナカで亀頭が膨らむ感覚を腸壁で感じて、今も蕩けた顔を晒しているマーリンはマスターの射精が近いことが分かってしまう。子宮や膣内だけでは無く、お尻の中もマスターに精液でマーキングされてしまうのだと、彼女は自分の心の内にある期待と隷属欲求を感じていた。

(ボクのお尻の穴が、ご主人様の精液お便所になっちゃう……っ♡♡♡♡♡
♡♡ ベッドの上だけじゃなくてっ、トイレの個室に連れ込まれて、お尻でご奉仕させられるんだっ♡♡ 上手くできなかつたらトイレの壁に押さえ付けられて、お尻に刺さったオチンポだけで体が浮いて、オシッコ出すみみたいに精液出されるっ♡♡♡♡)

無意識の内にマスターのことを“ご主人様”と呼んでいるマーリンは、自分が乱暴に犯される状況を想像して興奮していた。ドスケベ

マーリンとモルガンの二人は、自然と相手の体に近い方の手を取って握り合う。

「これからよろしくっ♡♡♡♡♡ さて、一緒にご主人様の性欲を処理しようかっ♡♡♡♡♡」

「はいっ♡♡♡ 私の見立てでは後三日は掛かるので、お互いに頑張りましょう……っ♡♡♡♡♡」

三日という言葉を聞いただけでマーリンは意識が飛びそうだったが、今のモルガンと一緒にならば可能な気がしていた。二人は小さく領き合い、握った手の力を少しだけ強くした。

マーリンとモルガンは同時にマスターを誘った。

「二——来てっ♡♡♡♡♡ ご主人様（我が夫）」

その後、マーリンとモルガンは、仲良くマスターにハメ潰された。ダブルパイズリやマスターのペニスを挟んだ貝合わせ、二人同時のフェラチオで友情を育み。最終的にはお互いに親友と呼べる程の間柄となった。二人がカルデアに戻った際には円卓の騎士達や騎士王、そして男のマーリンを大いに混乱させたことは想像に難くない。

最後にマーリンが自分の意思でタマゴを差し出し、晴れて三つ子のお母さんとなったことを報告する。

「愛してるよ……ご主人様♡」

評価者50人記念 番外編―2 叛逆の騎士は従順な雌になる

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―1

『おい、触るな。ブン殴られてえのか』

叛逆の騎士モードレッドは、マスター”藤丸 立香”が最初は好きでは無かった。

その理由は、自分が剣を預けるだけの人物だとは思えなかったからだ。

最低限の魔術回路を持つだけの、何の才能も無い一般人。

人類最後のマスターというだけで、世界を救うという不相応な使命を背負わされた憐れな凡人だと思っていた。境遇が悲惨過ぎて、内心では同情すら覚えていたのをモードレッドは覚えている。

しかし、数々の苦難をマスターは前を向いて乗り越えてきた。それはどの英霊達にも負けない位の偉業だ。

『つたく、バカマスターめ！ 俺がすっかりしてなきや、どーしようもないじゃないか！ まつたく！ ……まつたく！』

モードレッドはマスターを憐れな凡人ではなく、支えてやらなきやいけないマスターだと考え直した。弱っちいやツだが良いヤツだと、騎士である自分が守ってやろうと思えた。

そのことに加えて、王に叛逆した騎士という信用できない経歴を持つっており、難儀な性格をしている自分に対して、マスターは誠実に対応してくれることを嬉しく思っていた。

モードレッドは、自分が終わらせた”父上”であるアーサー王が、褒められるのも悪口を言われるのも腹が立つ。自分が女性扱いされたり、露骨に男性扱いされても憤怒する。堅苦しく接されても虫唾が走るし、おざなりにされて自分の意見をちゃんと聞いてくれないのも

不機嫌になってしまふ。

着火点の多い爆弾のような存在だ。

地雷の多いモードレッドにマスターはある一点を除いて、完璧な対応をしていた。

その一点とは、他のサーヴァントに現を抜かさないことであるが、そこに関してもある程度は許容出来る位に、マスターを信頼出来ていた。

『なあ……オレは、父を超える騎士になると思つか？』

『なれると思う。自分一人では何にも出来ない俺だつて、皆に支えられながら特異点の攻略が出来たんだから。……俺よりずっと凄いモードレッドなら、きつとなれるよ』

『……………ふんふん、そうか』

内心でモードレッドという騎士がアーサー王を超える騎士になると、心の底から信じてくれたマスターの存在は本当に嬉しかった。自分を信じてくれて、我儘を許してくれるマスターに対して、無意識の内に父性のようなものを感じていたのだ。それは生前にずっと、追い求めていたものだった。

モードレッドは、モルガンがアーサー王を超えるために生み出したホムンクルスである。

ホムンクルス特有の短い人生の中で父に憧れ、父に認められたいと願っていた。結果的には、本当に認知していない子供であつたモードレッドをアーサー王は拒絶した。

——父への憧れが反転し、全てを踏み躪る叛逆の騎士となった。後のことは有名なカムランの丘の戦いで分かるだろう。

結局、モードレッドは生前に欲したものを何一つとして得られなかった。

生前で手に入れることが出来なかった。自分を認めて受け入れてくれる、父のようなマスター。彼になら自分の”剣を預けて”も良いと思えていた。

そして……

『オレの剣を預け、名誉を預け、命を捧げる。騎士としては三流かもしれねえが——それでもいいか?』

モードレッドは騎士の誓いを口にしたが、途中で気恥ずかしくなっ
てしまい。自分を三流だと茶化してしまった。そのことを少しだけ
後悔しながら、マスターの返答を待った。しかし、返ってきた答えは
意外なものだった。

『……………モードレッドの剣をちゃんと俺に預けて欲しい。』

他の時代のやり方とかも混ぜつつて、上手くできるか分からないけ
ど協力してくれる?』

『——い、いや。別にいいけどよ……』

真剣な表情で頼んでくるマスターに気後れしながらも、モードレッ
ドは自分の武器である燦然と輝く王剣をマスターに手渡した。

マスターはクラレントの重さによるめきながらも、騎士の誓いを再
現していく。

『モードレッド、跪いて』

『ほっ、本当にやるのか? 別に気持ちだけで良いだろ』

『ううん、俺にとってもモードレッドにとっても、大事なことだと思っ
たら。』

俺の我儘に付き合っただけ………駄目かな?』

『しょ、しょうがねえなあ……』

今日だけは強情なマスターにモードレッドが折れて、その場で彼女
は跪いた。

マスターはモードレッドの肩にクラレントの刃の平を置いて、騎士
就任の宣言をする。

『モードレッド、君をカルデア最後のマスターの騎士に任命する……これからもずっと頼りにしてるよ』

『——っ』

マスターがモードレッドにクラレントの刃の平を向ける。

モードレッドがマスターに差し出されたクラレントの刃に口付けをして、極めて簡素な騎士の誓いは終わった。傍から見れば騎士の真似事にしか見えなかったかもしれない。

それでも”二人”にとっては十分なものだった。

マスターはモードレッドに剣を丁寧に戻して、気恥ずかしそうに赤くなつた頬をポリポリと指で搔く。

『……………格好つけすぎたね』

『分かってたんならやるなよ。オレまで恥ずい…………』

『でも、モードレッドにちゃんと伝えたかつたんだ。

俺はモードレッドのことを信頼してるし、いつでも頼りにしてるって』

『…………っ！ もう止めだ、止めだ！ これ以上この話は無し！

良いな、マスター！』

『うん。ところで——』

モードレッドにとって、例え座にいる本体にすら渡したくない記憶である。カルデアに召喚された自分だけが手に入れた、騎士としての誇り。

命ある限りはマスターのために忠義を尽くそうと、心の中で誓っていた。

その騎士の忠義が女の情愛も含んだものになることを、モードレッドはまだ知らなかった。

「あゝっ！ むしゃくしゃすんなあ！」

モードレッドは一人、両手で頭をガシガシと掻いて金髪を振り乱す。私室のベッドの上で寝転がりながら、駄々っ子の癩癩のように、細くしなやかな足をジタバタとさせている。誰がどう見ても苛立っているのが分かる状態だった。

モードレッドが心を乱している原因は、マスターを取り巻く最近の状況にあった。

「オレより父上の方がやっぱり良いのかよ……マスター」

モードレッドに深い縁のあるアーサー王”アルトリア・ペンドラゴン”のオルタが、この一か月でマスターと急激に仲良くなったのが、彼女の劣等感とマスターが遠くに行ってしまったような寂しさを感じさせたからだ。

アルトリアオルタがマスターの部屋に同棲するようになってから、マスターの無理をしているような感じが無くなり、雰囲気も柔らかくなったのは純粹に嬉しかった。しかし、それは自分にだって出来た筈だと思っ自分もいた。

マスターの騎士である自分が、マスターの”特別”にだってなれると思ってしまう。

「オレだって……」

マスターと話でもしようマイルームに会いに行っても、妙に色っぽい何故か汗だくのアルトリアオルタが常に傍にいたので、最近ではめつきりと話す時間が無くなっていった。心に溜まったヘドロのような感情が、モードレッドを苛立たせる。そのせいで夜も良く眠れなかった。

この行き場の無い感情の解決策として、モードレッドが辿り着いた答えは――

「マスターに文句を言っただけでやる！ 仕える騎士を蔑ろにしやがって、一回怒ってやればマスターも絶対……」

モードレッドはベッドから勢い良く立ち上がって、私室から飛び出す。

現在時刻は夜の十二時を回っていたが、それが彼女を止める理由にならなかった。後のことはなるようになれと、半ばやけっぱちの行動であったのだ。

ドスドスと足音を立てながら、マスターの私室にまで足を進める。特に障害や誰にも会うことなくマスターの部屋の扉の前までこれたのだが、そこで足が止まってしまった。

後は扉でも叩いて部屋の中に入れて貰えば良いだけであるが、勢いだけで来てしまったせいで何を言おうか全く頭の中が整理できていなかったのだ。

もしかすると二人共が既に眠っている可能性に気が付く。

いきなり起こされたことをマスターとアルトリアオルタの二人に、怒られるかもと考えてしまう。しかし、ここで引き下がるもの格好悪いので、モードレッドはこっそりと中の様子を窺って、二人が寝てなかったら少しの間だけマスターを自分の部屋に呼び出そうと考え付いた。

（――べつ、別に父上が怖い訳では無いからな！）

自分に言い訳をしながらモードレッドは、サーヴァントの基本的な能力である体を霊体化させて、マスターの部屋の中に侵入した。

——モードレッドが目を改めていれば、今後の展開は変わって
いただろう。

部屋の中に入るとモードレッドにとつて、衝撃的な光景が入り込ん
できた。サーヴァントになってからを含めても、人生で一番の驚きで
ある。

そこには……

「——マスター♡♡ キスっ♡♡ はあ……っ♡ あっ♡♡ キスし
て欲しい♡♡ んむっ♡♡ ちゅう♡♡ ちゆるるっ♡♡ じゆる
ちゅっ♡♡ ——ぷはあっ♡♡ はあっ♡……はあっ♡………
はあっ♡♡ 愛しているマスター♡♡♡ あっ——」

モードレッドの良く知る二人が、セックスをしていた。

一糸纏わぬ裸体を晒すアルトリアオルタがベッドの上で両膝を着
いており、背中を反らせながらマスターにお尻を向けていた。マス
ターも当然のように全裸であり、アルトリアオルタの両手の手首を
がっしりと掴んで、お尻に腰を激しく打ち付けていた。腕を拘束した
後背位である。

アルトリアオルタはマスターと繋がったまま、腰と首を回して後ろ
を向いてキスを強請っていた。愛を伝え合うように舌と舌を絡め合
う姿は、正しく愛し合う夫婦や恋人同士のようにしか見えない。少な
くともマスターとアルトリアオルタの性行為が、無理矢理のものでは
無いのは間違いなかった。

部屋中に女の甘ったるい嬌声と肉同士のぶつかり合う破裂音が響
き渡っている。

アルトリアオルタの秘所。しとどに濡れた女の割れ目に、マスター
の棍棒のようなペニスが出たり入ったりを繰り返しており、結合部か
ら白く泡立った液体がベッドに零れ落ちている。ベッドには沢山の
シミや白く濁った水溜まりが出来ていた。

部屋中に男と女の汗の混じった匂いと、ほんの少しだけ感じる磯のような海の匂い。そして、鼻腔に籠るような雄の體えた臭いと栗の花に似た精液の臭い。

それら全てが混じったニオイが、部屋中にムワつと籠っていた。モードレッドはこのニオイを、以前にも嗅いだことがある。以前、この部屋を訪れた時に妙に汗を掻いたアルトリアオルタとマスターがいた時にも、今よりは少し薄かったが同じニオイがしていたのだ。それ即ち以前からマスターとアルトリアオルタが、セックスをしていたということである。

衝撃的な光景に思考が止まっていたモードレッドだったが、ハツと我に返った。何とか現実を受け入れようと状況を整理しようとするが、今も目の前で繰り広げられる獣同士の交尾から目を離せない。

(まつ、まつ、マスターと父上がセックスしてるっ♡ あんなにデカイのが父上のナカに……っ♡♡ 部屋の中の匂いがクサイ♡ これ前にも嗅いだこと———そうか前からっ♡ 父上の尻があんなに波打って、痛くねえのかな……)

モードレッドは二人の情事を見ながら、太股同士を擦り合わせる。秘所にジワリと湿り気が帯びていく。それは僅かではあるが性的に興奮しているということである。

この場から動くことも出来ずに、二人の情事をモードレッドが見続けていると、ラストスパートに入っていくようだ。

今まで以上にマスターの腰の動きが速くなり、肉同士のぶつかり合う音もパンっ！パンっ！からバチュンっ！バチュンっ！に変わっていく。腰を打ち付ける力も、アルトリアオルタのお尻が潰れてしまうのではと、心配になる程の強さである。

アルトリアオルタの嬌声も更に大きくなり、慎ましやかな胸が上下に激しく揺れる。

「ふっ、ひい♡♡ まつ、マスターっ♡♡♡ 射精してっ♡♡ あっ♡♡
♡♡ イクっ♡♡ ナカに射精してくれっ♡♡♡ マスターの精液っ♡♡
♡♡ いっぱいい♡♡ あっ———」

うな感情を持てば良いのか分からなくなる。ただ自分の下着が濡れて、内側の太ももにヌルヌルとした液体が伝っていることだけは、頭の一部だけ冷静な部分を感じ取っていた。

（あつ、あんなに射精してるっ♡♡ 父上のお腹が膨らんでっ♡♡♡
ああ…アソコからオシッコみたいなのと白いのがっ♡♡ ———
—父上、幸せそう…）

モードレッドは淫らなアルトリアオルタを羨ましいと思っ
てしまった。

マスターのペニスにお腹を貫かれ、お尻が真っ赤に腫れるまでピストンをされて、シチューのような白くてドロドロな精液をお腹が膨れるまで注がれる”父上”を羨ましいと思ってしまう。

そんな自分を必死に違うと否定するが、今も秘所からは愛液が溢れて太ももに伝っていた。自分がマスターにされる光景が脳内で浮かび上がるが、何故か嫌悪感を感じていなかった。

苦悩するモードレッドを余所に、マスターとアルトリアオルタは繋がった状態で、最初の時のようにキスをしている。

「ちゅるる、っ♡♡ ちゅぢゅっ♡ ぢゅるる♡♡♡ れろ———
—お♡♡ ちゅぷっ♡ じゅるちゅっ♡♡ んっ——ぷはあっ♡♡

お腹があ♡♡ 精液でタプタプっ♡ ……幸せです♡♡♡♡」
「俺も幸せだよ…もっと思った」

「~~~~っ♡♡♡ 私ほ朝まで大丈夫だっ♡♡♡ 確認なんてしなくて良いからっ♡♡ マスターが好きだけ——あっ♡♡
お腹っ♡ 膨らんだままっ♡♡ このエッチすきい♡♡♡ ああ♡♡
♡ あっ——」

その後もアルトリアオルタの言葉通りに、朝まで二人は様々な体位でセックスを行った。下品なひよっところ顔でのお掃除フェラや開発されたお尻の穴を使っつてのアナルセックス。マスターの性欲を文字通り、全身を使っつてアルトリアオルタは処理していた。

途中何度もアルトリアオルタが絶頂し過ぎて失神をしたが、その度

に別の快感で叩き起こされてずっとまぐわっていた。

彼女の全身が精液塗れにされ、ベッドも同じような惨状を迎える。二人は午前五時頃に気絶するように、繋がったまま眠りについた。モードレッドは約五時間に渡って、マスターとアルトリアオルタのまぐわいを見続けた。その後、こっそりと霊体化したまま私室に戻る。その時のことはよく覚えていない。

色々と思う所があったようだが、部屋に帰ると直ぐに体の火照りを抑えるために、初めての自慰行為を行った。やり方も良く知らなかったが、マスターとアルトリアオルタの行為を見て学んだ自分にも出来るようなことをする。

胸を揉んでみたり、秘所の小豆をクリクリと指先でモードレッドは弄る。体の中に指を入れるのは怖かったらしく、膣内を弄ることはしなかった。しかし、触り方の問題なのか一向に絶頂出来ない。

気持ち良いとは思えるのだが、何か足りなかった。

結局、二時間ほど自慰行為を試したが、いけないまま秘所とベッドのシーツを濡らしただけである。部屋中に女の淫らな臭いと汗の甘酸っぱい匂いが籠っていた。

「——クソっ♡♡ 何でいけないっ♡ 同じように弄ってるの
にっ♡ んっ♡」

体の疼きと情けなさで涙を流しながら、体を弄っていると扉をコンコンと叩かれる音がした。

モードレッドは体を猫のようにビクツと震わせる。急いで乱れた衣服を整え、ベッドのシーツが見え無いように掛け布団で覆う。部屋の換気すら出来ていないが、今の慌てる彼女にそこまでは考え付かなかった。

自分に大丈夫だと言い聞かせながら、扉を開けると——

「おはよう。モードレッド」

「——っ、なっ！ まっ、マスター……」

モードレッドの目の前には、自分が忠義を誓うマスターが現れた。

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―2

「おはよう。モードレッド」

「――っ、なっ！ まっ、マスター……」

マスターの予期せぬ来訪にパニックになるモードレッドは、床に視線を落してしまう。

少し前に意外にがっしりとした、マスターの男らしい全裸を見てしまっている。そして何よりも、父上――アルトリアオルタと二人の甘い情事を、数時間に渡って覗き見していた引け目もある。マスターの顔を見るだけの胆力が彼女には無かった。

もじもじとするモードレッドに、マスターは元々近かった距離を更に詰める。少しでも体を傾ければ体が触れ合う距離まで近付き、背の小さい彼女の身長に合わせるために少し屈み、耳元でそっと囁いた。

「俺の部屋……覗いてたよね？」

「~~~~~っ!?!」

あまりの驚きに声にならない声を上げるモードレッドは、床に落ちていた視線をバツと上げる。彼女の顔は林檎のように真っ赤に染まっており、動揺からか口がわなわなと震えていた。

ずっと自慰行為をしていたせいか、マスターの顔をハッキリと見ただけで太ももに汗では無い体液が伝う。

「――なっ！ なっ、なんで♡♡」

「全部一から説明するから、モードレッドの部屋に入っても良いかな？」

マスターは今も扉が開かれている、モードレッドの私室に視線を向けた。確かに絶対に廊下で話す内容では無いのだから、近場で誰にも邪魔されない彼女の部屋が適当だろう。しかし、問題が一つだけあつ

た。

「おっ、オレの部屋っ!?　いつ、今は駄目だっ!　だ、だって——」

そこから先をモードレッドは、口にすることが出来ない。つい数分前まで、自分が自慰行為をしていた場所に、マスターを入れられる訳が無かった。

モードレッドのエメラルドのような碧眼が揺れる。

何か断る理由をモードレッドが探していると、マスターが追い打ちのように違う場所を提案する。そこは彼女が暫く近寄ることすら憚られる場所であった。

「——それとも、俺の部屋にする?　アルトリアオルタが寝てるけど、それでも大丈夫なら良いよ」

「~~~~~っ?!　……おっ、オレの部屋で良い」

「そっか、それならお邪魔するね」

悩みに悩んだ結果、モードレッドは二人が情事を行っていた部屋では無く、自分の部屋に入れることを選んだようだ。例え寝ていたとしてもアルトリアオルタに、どんな顔をして会えば良いか分からなかったらしい。

先にモードレッドが部屋に入り、それに続いてマスターも部屋の中へと消えていた。

マスターはモードレッドの部屋に入ると、何でも無い世間話のよう

に呟いた。

「——何だか良い匂いがするね」

「~~~~~っ♡♡♡ きつ、気のせいだっ！」

「そうかな? ……俺は凄いこの匂い好きだよ」

「——っ♡♡ ばっ、ばっ、バカ言ってるので、適当に座れ！」

数分前まで自分がオナニーをしていた部屋を良い匂いだと言われて、モードレッドは全身が震える程の羞恥を感じていた。ここにマスターが居なければ、枕に顔を埋めて全力で叫んでいただろう。

そして何よりも、自分の恥ずかしいニオイをマスターに好きだと言われて、心の奥底で喜んでいる自分がいたことに困惑していた。マスターに良く思われて喜ぶ”女”である自分が嫌だった。

（オレは違う! 女である前に騎士だ! 何れ父上を超える王になる……父上は）

心の中で必死に否定をしようとするが、脳裏にはアルトリアオルタの幸せそうな笑みを浮かべながら絶頂する雌の顔や数々の痴態が過ってしまう。

何度も愛を囁き合い、マスターのために下品なフェラチオやお尻の穴まで使って奉仕していた淫靡な父上の艶姿が、どうやっても忘れられないのだ。

モードレッドの尊敬する父上が、王や騎士である前に”女”であるを知った今では、確信を持って自分の”女”の部分否定出来なかった。アレを思い出すだけで、ジクジクと下腹部が疼いてしまう。

モードレッドが思い悩んでいる間にも、時間は平等に進んでいく。マスターはベッドの近くの椅子に座り、モードレッドはベッドの縁に腰を下ろした。二人は向かい合うような位置である。因みに彼女がベッドに腰掛けたのは、間違っても自分の愛液で濡れたシーツを見せないためだ。おねしよを隠す子供のように見えてしまう。

ほんの少しだけ間があって、マスターが話し始める。

「——それで、モードレッドが覗いてたのが分かったのか？にっ
いてだけど……その前に、どうして俺とアルトリアオルタが、エツチ
するようになったのかを話しても良い？」

「……ああ、話せ」

「うん。これは俺も後から知っただけど——」

マスターはアルトリアオルタと自分が、セックスをするようになった
経緯を説明する。

花の魔術師マーリンがダ・ヴィンチに夢越しに伝えた。

このまま自分の精神がボロボロのまま、ストレスの発散が出来ない
状況が続くと、自分の中に溜まり続ける呪いが自分自身を殺してしま
うこと。

そして、メンタルケアとストレス発散のためには、性欲の処理がど
うしても必要であり、それにはアルトリアオルタが適任であるとマー
リンが推薦したこと。

結果的にアルトリアオルタがそれを受け入れたこと。

そして今では普通に愛し合っていることを、全て包み隠さずにマス
ターは伝えた。

「——要点をまとめるとこんな感じだよ。質問は……」

何か質問が無いかマスターが問い掛けようとするが、目の前には花
の魔術師に怒りを燃やすモードレッドが居た。床を陥没させる勢い
で、地団駄を何度も踏む。

「あのクソ花野郎っ!! 全部アイツのせいじゃねえかつ! 今度会っ
たらぶっ殺す!!」

自分が悩むことになった原因であるマーリンに対して、モードレッ
ドは純粹な殺意を漲らせる。

また一人、マーリンに報復を考える存在が現れた。

きつと花畑に囲まれた塔の上から『はははっ、また嫌われたね』などと、暢気に笑っている花の魔術師がいることだろう。機会さえあれば、アルトリアオルタとモードレッドの二人の剣ビームが披露されることになりそうだ。

一頻り怒った後に、モードレッドは何とか落ち着いたらしい。深呼吸をした後に彼女はマスターに話の続きを促した。

「――それで、何でオレが覗いてたって分かったんだよ……」

聞くのは怖かったがモードレッドは、マスターに説明を求める。

そこをハッキリさせておかないことには、喉に小骨が刺さったような状態がずっと続いてしまう。マスターは言い難そうに、頬を指で掻きながら言った。

「自分も後から教えて貰ったんだけど、アルトリアオルタは初めから気が付いてたらしいんだ」

「はっ!? だっ、だっ。それじゃ――」

混乱しながらもモードレッドは、答えが何となく分かってしまう。

答え合わせのようにマスターは説明を続ける。

「うん、”娘”の性教育のためだっ。

アルトリアオルタからモードレッドへの手紙を預かってる。読んだ後は自分で決めなさいって言ってたよ」

モードレッドはマスターから手渡された手紙を震える手で掴んで読む。

手紙にはこう書かれていた。

『これからは息子では無く、正式な私の娘として接する。

モードレッドもマスターの騎士を名乗るのならば、私と同じくマスターの”女”になることだ。強制するつもりは毛頭無いが、マスター

に構って貰えず寂しそうな顔をしているくらいなら、私と共にマスターに身も心も愛して貰う方が幸せだろう。好きなら好きとちゃんと伝えなさい。

PS. 暫くマスターとの夜を譲る。女として仕込んで貰うように』

「——っ！ ちっ、父上!?!」

モードレッドは喜んで良いのか分からなかった。

自分のことをしつかりと見てくれていた父上のことは嬉しかったが、いきなり正式な娘と接すると宣言されて、マスターの騎士なら女となつて愛して貰えと、書いてあることが滅茶苦茶である。それに加えて、暫くマスターの夜を譲ると事実上の強制だ。

アルトリアオルタの中では、モードレッドがマスターの女になることが殆ど確定事項なのだろう。自分で決めなさいの言伝は何処に行つたのか。

感情を処理できないまま、アルトリアオルタからの手紙を何度も読み返していると、手紙の向こう側から声が掛けられた。当然のことだが、モードレッドに声を掛けたのはマスターである。

「何て書いてあつたのか、教えて貰つても良い?」

アルトリアオルタには、モードレッドから聞いてくれつて言われててさ」

「いやっ……読んだ方が話が早えか」

手紙の内容を伝えることを拒否しようとしたが、既に色々と”今更”であることに気が付いて、モードレッドはマスターに手紙を手渡す。受け取つたマスターは手紙を読み進めていくが、表情が苦笑に変わっていく。

明け透けなアルトリアオルタに当惑しているのかもしれない。

「——うん、モードレッドはどうしたい?」

「どうって……」

「俺とエッチなことしたい？」

「~~~~~っ♡♡　ぼっ、バカ言うなっ！　オレはっ……オレはっ」

『マスターのことなんて別に好きじゃねえ』と、モードレッドは口に出来なかった。

好きか嫌いかで言えば、マスターのことは間違い無く好きだ。それここで全てを拒否すれば、アルトリアオルタの手紙にも書いてあった通り、マスターが構ってくれなくて寂しいままである。

モードレッドは顔を真っ赤にして、口をパクパクと動かすことしか出来ない。

そんなモードレッドの様子を見て、マスターは椅子から立ち上がった彼女に近寄る。彼はモードレッドの頭を撫でながら言った。

「俺はモードレッドとエッチなことしたいよ」

「~~~~~っ♡♡♡　ふっ、ふざけ~~~~~」

モードレッドが羞恥から怒ろうとするが、それよりも先にマスターが囁いた。

「さっきまでオナニーしてたよね。俺とアルトリアオルタのエッチをオカズにして」

「~~~~~っ♡♡♡~~~~~」

完全に言い当てられて、モードレッドの頭は沸騰寸前である。

（なっ、なんでバレてんだっ♡♡　オレちゃんと隠して~~~~~）

マスターはモードレッドの股間部分を隠している、前掛けのような赤い布を右の太ももに退かす。

前掛けを退けると女の秘所をギリギリ隠した、際どい角度の黒色のショーツが露になる。そのショーツはびちゃびちゃに濡れており、太ももの内側までヌルヌルの体液で濡れていた。太ももの間に何本か

の糸が引いている。

前掛けと太ももの中で籠っていた、雌のムワつとした発情臭が部屋全体に広がる。

正確には、元からしていた雌の淫らなニオイがより濃くなった。

「——ずっと部屋の中がエッチな匂いだったから分かるよ。こんなに濡らしてたんだ」

「みつ、見んなっ♡♡ 嗅ぐなっ♡♡♡ やめっ、やめろよお♡♡」

前掛けを元に戻して両手で押さえ、目尻に涙を浮かべながらモードレッドがマスターを睨みつける。しかし、下腹部が疼いてしまう。お尻がモジモジと忙しく動く。

折角、マスターと話して治まりかけていた、体の火照りがぶり返してしまう。

自慰行為をしていたことがバレていた、顔から火が出るような恥ずかしさ。下着と愛液で濡れている所を見られただけで気持ち良くなってしまう。羞恥と快感。二つがモードレッドの心の中で、せめぎ合っていた。

表面上だけで本当は嫌がっていないモードレッドを見て、マスターは彼女を抱き締める。前掛けを押さえていたモードレッドは、特に抵抗することも出来ずにマスターの腕の中にすっぽりと収まってしまう。

モードレッドが抗議の声を上げる。

「なっ、何しやがるっ♡♡」

「ずっと寂しい思いをさせてごめんね」

「——っ♡♡♡ はっ、はな……せっ♡」

言葉では拒絶しているが、声色と行動ではまるで拒否が出来ていなかった。

目尻を下げて顔を蕩けさせながら、両手の置き場所をどうすればい

いのか分からず、空中に彷徨わせている。誰かに抱きしめられた経験が無かったせいで、どうしたら良いのか分からないのだ。

その状態のまま、マスターは子供の頭を撫でるように、モードレッドの金髪を手櫛で梳くように撫でた。それは正しく、彼女が生来から求めていた親子のようであり、気を抜けばそのまま眠ってしまいそうな心地良さがあつた。マスターの心臓の鼓動を耳と肌で感じて、抵抗する気持ちが奪われていく。

蕩けた表情をするモードレッドに、マスターは耳元で囁く。

「モードレッドは俺のこと嫌い？」

「——きつ、嫌いじゃねえけど……オレはマスターの騎士で、何れ王になるからっ♡」

「女にはなりたくないんだ」

「そつ、そうだっ！ オレは——ひゃっ!!♡♡」

騎士として自分を強く保とうとするモードレッドだったが、マスターが彼女の耳を甘噛みする。それと同時にモードレッドの小ぶりだが張りのあるお尻を布越しに揉みしだかれた。

モードレッドはベッドの縁に座ったままであるため、マスターの両手は彼女のお尻とベッドに挟まれているような状態である。お尻を振って逃げることも出来ず、ガツチリと両方の尻タブをマスターに掴まれていた。

正しく女の子のような悲鳴の後に、嬌声が口から漏れ出る。

「……やめっ♡♡ しりをっ♡ 揉むなあ♡♡ ひう——っ♡ 耳に息掛けんなあ♡♡ あっ——」

(自分で揉んだり弄ったりするより気持ち良いっ♡♡ こんなのでっ♡ クソ——っ♡♡ こんなに簡単に振りほどけるのになっ♡♡)

マスターの合計十本の指でモードレッドのお尻がグニグニと揉みしだかれる度に、彼女の腰が震えて秘所から愛液が零れていく。ス

カートのような赤い衣装に自分の愛液が染みて広がる。

当然、モードレッドのお尻をスカート越しに揉む、マスターの両手にも濡れた感覚が伝わってくる。

「お尻揉まれて気持ち良くなって。愛液いっぱい出てるね」

「~~~~~♡♡♡ ちがつ、違うっ♡♡♡ ふう♡♡♡ これは汗だっ♡♡♡ あせっ♡♡♡」

自分に言い聞かせるように愛液を汗だと言い張るモードレッドに、マスターの嗜虐心が煽られていく。

マスターはお尻に指を沈めるような単調な動きから、尻タブを左右に開いたり、円を描くような揉み方に変える。それはより感じやすく、羞恥を煽り、愛液をより出しやすくする揉み方だった。

尻タブが左右に開かれる度に、モードレッドの割れ目からピュっ♡と愛液が零れる。スカートだけでは無く、ベッドのシートにも染みが出来ていく。お尻全体を刺激されるような円を描く揉み方により、甘い嬌声が漏れ出てしまう。

「ふあっ♡♡♡ やめろっ♡♡♡ お尻ひらくなっ♡♡♡ あひっ♡♡♡ 漏れるう♡♡♡」

「気持ち良くなって”汗”いっぱい出して良いから」

「んひっ♡♡♡ 本当にっ♡♡♡ やめえ♡♡♡ ゆるさ……ないっ♡♡♡ ああっ♡」

桃の果汁でも絞るかのように、マスターが指に力を入れると淫肉の割れ目から汁が漏れる。

両親がアルトリアとモルガンであることを考えれば仕方のないことかもしれないが、モードレッドも汗気が多いようだ。本当にお漏らしでもしてしまったかのように、シートやスカートが愛液でびちゃびちゃに濡れる。

モードレッドの口が半開きになり、舌がだらしなく口から出てい

る。目の焦点が定まらなくなり、絶頂が近いせいで腰がピクっピクつと、不規則に震え始めた。

自分ではどれだけ乳房を揉んだり、クリトリスを弄っても絶頂出来なかったのに、初めての絶頂をマスターにお尻を揉まれただけで迎えてしまう。

「——くるっ♡♡ 父上がビクビクしてたみたいのがっ♡ 自分じゃデキなかったのにつ♡♡ マスターに尻を揉まれただけでっ♡♡♡ んぁ——い♡♡♡」

「イって良いよ。モードレッドのイクとこ見せて」

「~~~~っ♡♡ やめっ♡♡ あっ♡♡ ほんとにつ♡♡ あっ♡♡ ああっ♡♡ あひっ♡♡ ——クっ、イクううううっ♡♡♡」

マスターに揉まれるお尻を浮かせて腰がへこへこと動きながら、モードレッドは初めての潮吹きをする。尿道口から噴き出す透明な体液を黒のショーツが受け止め、尻タブや太ももに流れていく。排尿した時のような解放感と共に、全身に電流が走るような快感を伴う絶頂に達してしまう。

モードレッドは潮吹き of 気持ち良さを覚えてしまった。

快感を逃がすためにカクカクと揺らしていたモードレッドだったが、全ての波が引いた後にグツタリと脱力して、ベッドに仰向けに倒れてしまう。全身に珠のような汗を浮かべながら、肩で息をしている。

意識が飛んでしまいそうな程の気持ち良さを、脳と体に刻み込まれてしまう。これを知ってしまった後に、もう快樂から逃れられる訳も無い。

父上がどうしてあんなにも幸せそうだったのか、モードレッドにも分かってしまう。

愛している男とこれ以上に気持ち良いことをしているのだから、幸せに思っただけだった。

初めての絶頂に体力を奪われ、そのまま眠ってしまいそうに微睡むモードレッド。彼女の額に短く口付けをしたマスターは、最後に一言だけ残してモードレッドの部屋から去っていった。

意識を失う寸前にモードレッドが聞いた言葉は……

『——今夜、俺の部屋で待ってるから』

心の中で『オレは行かない……っ♡』と、強がりながらモードレッドは意識を失った。

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―3

東から昇った太陽が西に沈み。

時間帯は朝から昼に変わり、そして夜になる。

日中は沢山の人々が往来していたカルデアの居住区域の通路に於いても、夜が深くなれば人通りは無くなっていた。殆どの者が眠りに就く時間帯なのだから当然だろう。

そんな人通りの殆ど無い、静まり返った通路。マスターの部屋の扉の前で、立ち往生しているモードレッドがいた。彼女は忙しなく左右を確認したり、扉にノックしようとしては手を引っ込める動作を繰り返している。

明らかに挙動不審であり、近くにサーヴァントが居れば警戒する位には怪しい動きをしていた。

モードレッドがマスターの部屋に訪れた目的は、マスターの”女”にはならないと伝えに来たからだ。

間違ってもマスターに抱かれに来たわけでは無いと、本人は思っている。

（まつ、マスターの部屋。……父上とマスターがセックスしてた場所っ♡ オレもこれから……ちっ、違がう！ オレは断りに―――）

モードレッドには未だに迷いがあるようだ。

今朝、マスターにお尻を揉みしだかれて絶頂したことを、モードレッドは努めて忘れようとしている。しかし、絶頂の気絶するような快楽と潮吹き of 排尿にも似た解放感を、忘れられる筈も無かった。

「―――オレは断りに来たただけだ。騎士として仕えるだけだっ……それだけだっ」

何かを決意したモードレッドは、扉をガンガンと勢い良く叩いた。

少し間があつて扉が開かれる。

扉を開けたのは当然のことではあるが、部屋の主であるマスターだった。彼はお風呂上りなのか、黒髪が若干湿っていて頬も赤らんでいる。

その姿を見たモードレッドは、マスターに色気のようなものを感じてしまう。

胸がドクンと高鳴り、頬が熱くなるのを感じていた。この動揺のせいで当初の目的であつた、マスターの女にはならないと伝えるのが遅れてしまう。

「モードレッド、来たんだ。入って」

「オレはここで別に——」

モードレッドが話し終える前に、マスターは部屋の中に戻ってしまふ。

少し迷つたモードレッドだったが、結局はマスターの部屋の中へと入ってしまった。それがどのような結果になるのかを薄々理解しながら。

モードレッドの下着に小さな染みが出来た。

モードレッドが部屋の中に入ると扉が自動で閉まつた。

マスターとモードレッド、二人だけの空間が完成してしまう。

今朝、自分の部屋でマスターと二人つきりだったことを否応なく、モードレッドは連想してしまった。

そこでマスターに抱きしめられたことや優しく頭を撫でられたこと。そして、お尻を沢山揉まれて初めて絶頂してしまったことも、全て鮮明に思い出してしまう。

下腹部が切ない熱を持ち始めたことを感じて、モードレッドは早急にマスターの部屋から出るべきだと判断した。

このままここに居れば、また秘所を濡らして淫らな雌臭をマスターに嗅がれて、発情していることをマスターに気付かれてしまう。そうなれば後はマスターに抱きしめられながら、ズルズルとエッチなことに耽ることしか出来ない。

声を上擦らせながら、モードレッドはマスターに話す。

「マスター。オレはやっぱり、その……」

緊張のせいか上手く言葉が出て来ないモードレッドに、マスターはゆっくりと近付く。彼女にはまた抱きしめられると何となく分かってしまうが、回避や抵抗する気持ちが湧いてこない。

あの父親に抱きしめられるような、安心感が忘れられないのだ。無意識に目を瞑って、マスターが来ることを待つてしまう。

しかし、幾ら待ってもマスターは、モードレッドに触れて来なかった。

モードレッドが目を開けると、両手を広げて彼女が来るのを待っているマスターが見えた。彼は温和な笑みを浮かべながら、彼女に優しい声色で話しかける。

「取り敢えずエッチなことは抜きにして、久しぶりのスキンシップを試みよう。絶対にいきなりお尻を揉んだり、耳朶を甘噛みしたりしないって約束するから」

「——っ」

モードレッドに迷いが生まれる。

それ位なら良いんじゃないかと考えてしまう。マスターなら約束

を破ったりしないと、信用出来てしまうから尚更であった。

モードレッドの親子愛への願望。

優しく抱きしめて、頭を撫でて欲しい欲求が勝ってしまう。

「……約束したからなっ」

「うん。ほら、おいで」

顔がサクラランボのように赤いモードレッドは、マスターの元に近寄ってそのまま身体を預けた。彼の胸板にグリグリと頭を擦り付けるように、無言のまま行動だけで甘える。

マスターはモードレッドの華奢な身体を、両腕で優しく包むように抱きしめる。

全体的に細く見える彼女だが、女の子らしい柔らかさはしつかりとある。子供のように高い体温も合わさり、抱き枕にしたい位に抱き心地が良い。

モードレッドは躊躇しつつ、マスターの脇腹に控えめに両手を添える。マスターの左胸に右側の頬と耳を密着させて、心臓の鼓動を触覚と聴覚で感じていた。

マスターは片手でモードレッドの頭を撫でるが、前回の髪を梳くような撫で方から変えていた。指を開いて爪の先では無く、指の腹を使って頭皮をマッサージするような手付きで、後頭部や耳の裏を絶妙な力加減で撫でている。

「…………ふぁ♡ あっ……………んう♡ ………………ふう♡」

熱っぽい吐息がモードレッドの口から漏れる。

猫が頭を撫でられて目を細めながら、ゴロゴロと喉を鳴らすのによく似ていた。精神的な心地良さ以外にも、美容室でシャンプーをして貰う時のような気持ち良さを、モードレッドは感じていた。

タップリと時間を掛けて、マスターはモードレッドを愛でる。

普段の男勝りな部分が鳴りを潜めているが、それを揶揄ったりはし

ない。寧ろ時折、自分が変じやないかと不安になって、見上げてくるモードレッドに普通のことだと微笑む。何も変じやないと安心させて、より彼女が甘えられるような雰囲気を作る。

次第にモードレッドの表情に変化が出てきた。

勝気な印象を与える吊り上がった眉は端が下がり、意志の強そうな目はトロンとして潤んでいた。口元が緩んでしまい、口端から涎が垂れている。

控えめにマスターの脇腹に添えていた両手だったが、今ではマスターの背中にしっかりと両腕を回していた。木にしがみ付くコアラのようだ。

すっかり出来上がってしまったモードレッドに、マスターは優しい声色で声を掛ける。

「モードレッドは可愛いね」

「~~~~~♡♡ オレに可愛いって言うなっ♡ ふあ——」

反射的にマスターに可愛いと言われて、羞恥の裏返しで怒ろうとしたモードレッドだったが、頭を撫でられる気持ち良さから言葉が途中で止まってしまふ。

畳み掛けるようにマスターは、モードレッドを褒め殺す。

「今の蕩けてる顔も、本当は寂しがりやな所も可愛い」

「——やめろっ♡ オレは可愛いなんて言われて嬉しくないっ♡

♡ いつもみために……………頼りになって、カッコイイって言えっ♡」

「俺だけの騎士だから頼りになって、カッコイイよ。」

でも、もつと仲良くなりたい……………駄目?」

「駄目っていうか……………仲良くのなり方が違うだろっ♡

オレは父上みたいにせっ、セックスはしないっ♡♡」

モードレッドの言葉を聞いてマスターは少し考え、何かを思い付い

たようだ。彼女の耳元で囁くように、マスターはある提案をする。

「——セックス以外のことならしても良い？」

「せつ、セックス以外のこと……」

「モードレッドの全身を触ったり、舐めたりしたい。」

後は今日の朝みたいに、いっぱいイかせて気持ち良し上げてたいかな」

「~~~~~♡♡♡♡♡へつ、変態っ♡♡」

顔を真っ赤にしたモードレッドが、マスターを罵倒する。しかし、頭の中ではマスターに全身を弄繰り回され、恥ずかしい所を沢山舐められて、何度もイカされる自分を想像してしまう。

今朝にお尻で絶頂した時よりも、もつと気持ち良くされると簡単に予想が出来た。

父上のように甘ったるい雌の嬌声を上げながら、全身をビクビクと震わせて潮吹きする自分を妄想する。

モードレッドの下腹部がジクジクと疼き、太ももの内側を擦り合わせってしまう。

円卓の騎士であり、何れ王を目指すモードレッドならば、直ぐにでもマスターの提案は拒否しなくてはいけない。しかし、彼女は性行為をしないなら騎士の道に背いていないのでは無いかと、マスターの提案を自分の中で正当化しようと考えてしまう。

(それならマスターの女になるわけじゃねえよなっ♡♡ セックスしなきゃセーフ……っ♡)

自分の中で言い訳を作れたので、モードレッドはマスターの提案を受け入れた。

「本当にセックスはしないんだな……?」

後はキスも無しだ♡ キスは恋人とか夫婦しかしないヤツだから

♡

「うん、約束する。モードレッドが良いって言わないと、キスもエッチ

もしない」

「絶対に言わねえけど、それなら別に良い……っ♡♡ んぁ——っ♡
いきなりい♡♡」

モードレッドが受け入れると直ぐに、マスターは今朝と同じようにお尻を揉む。父上と同じような甘い嬌声を上げながら、彼女はマスターの手を拒まない。

「モードレッドのお尻、凄い綺麗だよね。揉み心地も良くて、ずっと触ってたい」

「ずっとは駄目だっ♡ ああ♡♡ その広げんのおっ♡♡ いひっ♡」

マスターに尻タブを掴まれて左右に広げられるのが、モードレッドは好きなようだ。

尻タブを広げられる度に甘い声で哭き、秘所からトロツとした粘性のある体液を零す。このままでは今朝のように服がびちやびちやに濡れてしまうだろう。

「モードレッドの服、このままシたら濡れちゃうから脱ごっか」

「くくくっっ♡♡ ぜっ、全部か？」

「うん、モードレッドの裸が見たい」

「ばっ、馬鹿っ♡ オレの裸なんて色気無いだろっ♡♡」

モードレッドは女としての自分に自信が無い。

女性らしい肉付きをしていないと思っっているからだ。胸も自分の手で全て収まる位に小さく、父上のような綺麗な色白の肌でもない。一般的な女性よりも筋肉質なため、女として魅力的であるとは思えなかったのだ。

「……………モードレッドはエロいよ。今から証明するね」

そう言ったマスターはモードレッドから離れて、おもむろに服を脱ぎ始めた。

上半身に身に纏っていたTシャツを脱ぎ、流れるようにズボンとパンツも合わせて脱いだ。いきなりのことに驚くモードレッドだったが、それよりも目に入ったのはマスターの大きく怒張したペニスだった。

子供の腕程ある太く長いペニス。

釣り針の返しのような形状をした、女の媚肉を抉るためだけに存在する段差の深い雁首。自分の鳩尾に龟头が当たりそうな程に反り返っており、陰茎には葉っぱの葉脈のような太い血管が走っている。根元には片方だけで野球ボール位はありそうな大きさの睾丸が鎮座していた。

モードレッドに興奮してマスターがペニスを勃起させているのは明白である。

顔どころか耳の先や首筋まで真っ赤にして、モードレッドは勃起したペニスに見入ってしまう。

「マスター♡ オレに興奮して、大きくしてるのか……っ♡♡」

「うん。モードレッドが可愛くてエロいから勃起してる」

マスターの大きなペニスを見ているだけで、モードレッドの子宮が反応する。お尻を揉まれている時のように、膣口から愛液を零してしまふ。黒のショーツの吸水能力が無くなり、太ももに垂れ始める。

「モードレッドも脱いで」

「おっ、おう♡ 脱げば良いんだろっ♡♡ 脱げば……っ♡」

マスターに言われて、モードレッドも衣服を脱ぎ始める。

腕を覆っているアームカバーを外し、太ももまで覆っているニーハイを脱ぐ。腰元を覆っているスカートを脱げば、後は胸を覆っている

チューブトップと秘所をギリギリ隠しているショーツだけとなった。

マスターのしている状態で衣服を脱ぐ行為に、モードレッドは興奮を隠せない。

息が荒くなり、全身が汗ばんでいる。太ももの内側が汗では無い体液で濡れており、マスターの視線を感じる度に体をピクっと、震わせていた。

震える指先でチューブトップを掴んで上から脱ぐ。

ツンと勃った乳首が上を向く生意気おっぱいが露になる。胸筋の上におっぱいが乗っかっているため、一切垂れることの無い形の良い乳房。

美乳と呼ばれるモードレッドのおっぱいは、マスターのイチモツを更に熱を持たせる。

「モードレッドのおっぱい綺麗だね。エロくて興奮する」

「~~~~ツ♡♡♡ あんまり褒めんっ♡♡ あくく、もうっ♡」

羞恥に染まるモードレッドは勢いに任せて、黒いショーツも脱いでしまう。

恥丘は薄く産毛すら生えていない。淫肉の割れ目もピタリと閉じており、幼い少女の秘所のようなだ。しかし、今も肉の割れ目からトロツと糸を引く愛液を垂らしている。

穢れを知らない乙女であるのに、雄を求めて愛液という名の涎を垂らしていた。

涙目のモードレッドは右手で胸を隠して、左手で秘所を隠している。

中途半端に隠されている方がより卑猥に見えてしまい、マスターは食い入るようにモードレッドの裸体を見詰めてしまう。

マスターの視線に耐え切れず、モードレッドは叫ぶ。

「そっ、そんなに見んなっ♡♡ ……恥ずしい♡」

「それなら胸の手だけ外して欲しい。モードレッドの綺麗なおっぱい見たい」

「——っ♡♡ うっ……ほらよっ♡」

モードレッドは胸を隠していた手を避けると、即座にマスターの視線が突き刺さった。見られている場所が熱を持つような感覚を覚える。マスターに見られているだけで、モードレッドは気持ち良くなってしまう。

愛液が太ももを濡らすだけでは収まらなくなり、床にポタポタと水滴のように落ち始める。

「モードレッドのおっぱい本当に綺麗だね。触りたいんだけど良い？」

「かつ、勝手に触れっ♡♡ キスとセックス以外は好きにしている……っ♡♡ ——あっ♡♡ いつ、いきなり先っぽ摘まむなあ♡♡ ひうっ♡」

モードレッドの小さな乳首をマスターは人差し指と親指で優しく摘まむ。感度を確かめるように、指のお腹で転がし始める。

「何でっ♡ ああ♡♡ 自分でっ♡ んう♡♡ 触った時とっ♡ 違
うっ♡♡ ひい♡♡ もっと優しく……しろお♡♡」

「うん、凄い感度良いね。これなら胸だけでイけると思うから、気持ち良くなってるね」

「話し……聞けえ♡♡♡ おっっ♡♡ コリコリすんなっ♡ ふうっ♡♡ ほんとにくるっ♡♡ ああ♡♡」

乳首をクリクリと転がされる度に、モードレッドの腰が震える。

自分でおっぱいを揉んでいた時には気持ち良いと感じられる位だったのに、マスターに優しく乳首を弄られているだけで、何度も達してしまいそうになっていた。

マスターに乳房を愛撫されていく内に、モードレッドの体勢が変化する。

背を反らしておっぱいだけを突き出すようになり、太ももを閉じた状態で腰が引けて、お尻を突き出したような体勢である。

快感を逃がすために、腰やお尻を震わせていた。

太ももを伝って足先にまで愛液が垂れており、モードレッドの足元には小さな水溜りが出来ている。

(乳首、気持ち良いっ♡♡ 気持ち良い所、マスターにバレてるっ♡
乳首と乳輪、一緒に擦られてっ♡♡♡ イキそう——っ♡♡♡)

快感に悶えるモードレッドは、少しずつ自分では自慰行為すら出来ない体にされていく。

自分で触っても絶頂が出来なかったのに、マスターにお尻や乳首を愛撫して貰えれば簡単に絶頂が出来てしまう。その経験が積み重なっていく内に、脳と体がマスターでないと絶頂が出来ないと刷り込まれていくのだ。

自慰行為すらしたことの無い生娘だったせいで、快感の基準がマスターの愛撫になっってしまう。

身も心もマスターに調教されていることをモードレッドは気付けない。

「マスターっ♡♡ くるっ♡♡ ほんとにくるっ♡ 今朝のみたいなヤツが——っ♡♡♡」

絶頂が近付いてきたことを、モードレッドはマスターに伝える。

マスターは笑顔で答えた。

「——イって良いよ。いっぱい気持ち良くなって」

マスターは指に込める力を強めてる。そして、人差し指を使って乳

連続絶頂は未知の快感であり、目の前が真っ白になってしまう。首を限界まで反らして、先程の雌の声よりも野太い下品な喘ぎ声を出す。

マスターは更に指を動かしながら言った。

「——モードレッド、大好きだよ。もつと気持ち良くなってね」

モードレッドはその日、数えきれないほど哭いた。

だから、もつとモードレッドが気持ち良くなって貰えるように頑張る」

「しょ……ん……………なあ♡♡♡ げ……………ん……………かい♡♡♡♡」

排尿が終わると同時にモードレッドは反らせていた背中を戻して、最後にお尻をブルリと震わせた後、ベッドの上に全身を脱力させながら崩れた。これら全ての動きに彼女の意思は存在していない。ただ与えられた快楽に反応して、体が勝手に動いているだけである。

絶頂で少しだけ覚醒した意識の中で、モードレッドは自分が壊れていくことを感じていた。もう彼女を構成する霊基ですら、マスターに隅々まで丹念に調教されているのだ。

モードレッドは父上が手紙に書いていた『女として仕込んで貰う』の意味を理解した。

目の前が真っ白に光り、全身に電流が流れるような快感をその身に深く刻まれ、愛しているや可愛いと心が甘く蕩けるような言葉を囁かれる。

これが女としての悦びであると徹底的に覚えさせられていた。

（——オレの霊基、壊れた……………♡♡♡ マスターにイカされる癖付けられてっ♡ イキ過ぎて苦しいのも気持ち良くされちゃまった♡♡ ずっと愛してるって……………可愛いって言われながらされたから、それ言われるだけで気持ち良く……………イグう♡♡♡ 耐えろっ♡♡♡ 耐えればマスターの騎士のまま——っ♡♡♡）

既に肉体は疲労困憊であっても、快感を遮断することは出来ない。それに加えて、マスターは時間が経つごとにモードレッドの弱点を見付けて、新しい弱点を作っているのだから圧倒的に彼女は劣勢である。

その後もモードレッドは数え切れない程の絶頂を味わわされ、気が付けば彼女は完全に気を失ってしまった。

「——きて、——起きてよ、モードレッド」

「……………んあ♡ ましゆたー?」

マスターの声に起こされ、モードレッドの意識は覚醒していく。彼女は呂律も回っていない状態であり、ぼやけた視界いっぱいマスターの顔が映っている。

マスターは既に服を着ていた。

疲れたモードレッドを気遣って、時間ギリギリまで寝かせていたのだろう。

「うん、もう朝だよ」

「そっか、オレ……………意識……………失って——っ♡♡♡♡♡」

脳が回転し始めてモードレッドは、自分の今の状況を思い出した。当然のように今の彼女は全裸である。全身を手や口で愛撫されて、何度も何度も絶頂させられた昨夜のことも、全てを思い出してしま

「あっ♡ オレっ……………マスターにっ♡♡♡」

何度もオシッコや潮をお漏らししながら、『もう許してえ♡』と『イキたくないっ♡』と涙を流しながら懇願していた。自分の情けない雌の姿を冷静になった頭が理解する。

全身を襲う激しい羞恥心と、容赦の無かったマスターへのほんの少しの怒り。そして、父上のようにマスターの女にして貰いたいと思う気持ち。モードレッドはそんな自分の気持ちを認めようとせずに頭

を振った。

頬を赤くしながらマスターをキツと睨みつける。

「へっ、変態マスターっ♡♡ スケベっ♡♡ オレの全身っ♡ ずっと弄りやがって♡♡ 止めろって言ったのに♡♡♡♡ ケダモノっ♡♡」

「——ごめんね。でも、モードレッドが”可愛い”から」
「んひい——っ♡」

マスターに可愛いと言われた瞬間、全身に甘い痺れが走った。

一晩中ずっと気持ち良くされながら、耳元で『可愛い』や『愛している』、『好きだ』と言われ続けたせいで、それだけで肉体に快感が走るようになってしまったらしい。

それはパブプロフの犬とも呼ばれる、特定の行動で勝手に体が反応してしまう条件反射の一つだ。高温の物を触った瞬間に手を離すように、モードレッドはマスターに愛を囁かれると気持ち良くなってしまう。

きつとマスターに何度も連続で愛を囁かれれば、それだけで絶頂に達してしまうのだ。

モードレッドは、自分の体がもう自分の物で無くなっていることを理解する。マスターのための物なのだと、肉体の方は完全に屈服してしまっていた。

モードレッドは荒い息を吐きながら、マスターに抗議した。

「はあっ♡……………はあっ♡ 可愛いって言うなあ♡♡ ずっと可愛いって言われながらっ♡♡ カラダ弄られたせいでオレの体が変わにい♡♡♡♡ ぜってえ、許さねえ♡♡ ——責任とれよお♡♡♡」

「責任ってどうすれば良いかな?」

「そっ、それはっ♡♡ そのっ……………」

モードレッドはマスターへの責任の取らせ方を聞かれ、どうすれば良いのか分からない。

もごもごと口ごもるモードレッドに、マスターは彼女の本心を見透かすように言った。

「——キスしながら、沢山セックスすれば許してくれる？」

「~~~~~っっっ♡♡♡ ちっ、違うっ♡♡ オレはマスターの騎士だからっ♡ 父上みたいにはっ……ならない♡♡」

ただの強がりモードレッドは、マスターの言葉を否定する。

本心ではモードレッドは、マスターの言葉にそうだと頷きたかった。

舌を絡め合うキスを沢山しながら、マスターの手でタツプリと解された蜜壺に大きな肉棒を挿入してもらい、お腹が膨らむまで精液を射精して欲しかった。父上と同じようにマスターへのご奉仕のやり方も、仕込んで貰いたいと思っていた。

既に肉体は完全にマスターに屈服しているし、心もマスターの物になりたいたいと思っているのだ。しかし、未だに彼女の中で燻る騎士としての誇りと父上への憧れが、女になることを躊躇せている。

それもマスターに無理矢理に犯されれば、簡単に消えてしまうものだが、マスターはそのようなことはしない。その証拠に、未だにモードレッドはキスも性行為も体験していないのだから。

マスターがどれだけ性豪で好色であっても、根は紳士的で真面目なのだ。

——だからマスターがすることは決まっていた。

「そっか、じゃあ今日も気持ち良くなろうね」

「——へっ？」

間の抜けた声を出すモードレッドに、マスターは当然のように説明する。

「だって、これから夜はモードレッドと一緒にだよ。昨日の夜みたいに今夜も気持ち良くしたいから」

「昨日みたいなはずっとされたら、もっと体が変わるっ♡♡ おっ、オレはマスターの女にならないっ♡♡ そんなことしても意味ないっ♡♡♡♡ だから——」

『もう、気持ち良くするなっ♡♡』と、マスターに伝えようとするモードレッドだった。しかし、マスターは彼女にとって予想外のことを口にする。

「大丈夫だよ。モードレッドの体の面倒はちゃんと見るから。」

騎士でありたいモードレッドの気持ちも応援するから、これからもずっと愛させてね」

「あ——っ♡♡♡」

モードレッドは気が付いてしまう。

マスターは自分の女にならなくても、自分を愛するつもりなのだと。

昨夜の鬼畜な責めも、マスターは気持ち良くさせたかっただけで、モードレッドを女に墮とすつもりは無かったのだ。

マスターにとっては、そもそも勝負ですら無かった。

これから毎日、マスターに全身を愛撫されることを想像して、モードレッドは血の気が引いていく。自分が一体どの程度、騎士としての誇りを守ろうと快楽に耐えられるのが、分かってしまったからだ。

数日の内に、自分がマスターの上で淫らに腰を振っているのは想像に難くなかった。

(こっつ、これから毎日っ♡♡ マスターに全身ずっと気持ち良くされる………っ♡♡ そんなのっ♡♡ 我慢できるわけねえだろ♡♡

♡ マスターの女になるしか………っ♡♡)

モードレッドの心の支えであった騎士としての矜持が、ベキベキと

屋の扉が開いた。

マスターが戻ってきたのかと思い、笑顔を浮かべるモードレッドが振り返ると、そこには父上——アルトリアオルタが、サンドイッチなどの軽食を載せたトレイを持って立っていた。

動揺するモードレッドに対して、アルトリアオルタは自然体である。

「ちっ、父上!？」

「——起きていたか。マスターに疲れて眠っているかもしれないから、様子を見てくれと頼まれていたのだが……必要なさそうだな」
「その……お気遣い頂き、ありがとうございます」

緊張でぎこちない対応をするモードレッドに、アルトリアオルタはため息を吐く。

「はあ……手紙にも書いたがモードレッド。

お前はもう私の正式な娘なのだから、少し力を抜いて話せ」

「いっ、いきなりは……そのっ」

色々と過去にあり過ぎて、未だに後ろめたさを感じているモードレッド。

アルトリアオルタは近くの机に持ってきた食事を置いて、俯くモードレッドを正面からぎゅっと抱き締める。突然のことにあたふたとするモードレッドだったが、それを宥めるようにアルトリアオルタが話し始めた。

「——えっ、父上!?! いきなりどうしてっ」

「親子のスキンシップとはこういうものだと思うが、モードレッドは違ったか?」

「ちっ、違います……けどっ」

アルトリアオルタはいつもマスターにして貰うのと同じように、モードレッドの頭を優しく撫でる。それは、凶らずもモードレッドがずっと追い求めていたものだった。マスターにされるのとは、また違った幸せが彼女の心を満たしていく。

モードレッドは自分でも良く分からない感情の涙をポロポロと流す。子供のようにしやつくりを上げる彼女を、アルトリアオルタはぎこちない手付きながら背中を擦る。アルトリアオルタにとっても、初めて”親”として接しているのだから、慣れていないのも仕方が無いことだろう。

独白するようにアルトリアオルタは語り出す。

「……………私もマスターに愛される内に、”母”となる意識を持つようになった。

モードレッドは我が怨敵、モルガンとの間に生まれた。人を捨てた……王としてあらねばならなかったブリテンの頃では、どうあっても認めることが出来なかった子供だ。お前を我が子として認めてやれなかった私は……人として、親として最低だった……本当にすまない」

アルトリアオルタはモードレッドの肩を掴んで、涙を流すモードレッドと視線を合わせる。

「——しかし、生前に縛られない。

マスターによって私達も変わった今ならば、我が子として愛してやりたい」

「ちっ、ちちっ……………う……………えっ」

「生前では果たせなかったが、これから共に幸せになろう……私の娘モードレッド」

「……………は……………いつ。ちち……………うえっ……………父上——っ」

アルトリアオルタの胸元にモードレッドは幼子のように顔を埋め

て泣きじやくる。そして、アルトリアオルタもさめざめと涙を流していた。

きつと二人がこれから先に進むためには、必要なことだったのだろう。

歪だった親子の深い溝を埋めるように、涙の雨はいつまでも振り続けた。

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―5

モードレッドはアルトリアオルタに手渡された、マスターに喜んでもらえる衣装に着替えていた。彼女は恥ずかしそうに、腰元の”フリフリ”を気にしている。

「――父上っ♡♡ 本当こんな格好ですか……っ♡♡♡ 裸より恥ずかしい♡♡」

アルトリアオルタはモードレッドと同じ恥ずかしい格好であるが、腰に手を当てて自信満々といった様子である。

「マスターは私のこの格好をとても気に入ってくれている。いつもより激しく求めてくれるからな……っ♡♡ 私と体型が殆ど同じで良かった……モードレッドも良く似合っているぞ」

「――っ♡♡ 父上も良く似合っています……この”メイド服”？」

アルトリアオルタとモードレッドは、お揃いの衣装に身を包んでいた。

ホワイトブロンドとブロンドの頭を飾る上品なホワイトプリム。

二人の細い首には、白いフリルがあしらわれたチョーカーが巻かれており、大きめの黒いリボンが胸元を飾っている。

三角ビキニと名称される。三角の布二枚に紐を通したビキニトップスが、慎ましい大きき美乳をギリギリ隠れる程度に覆っている。

乳房が大きくないからこそ、大人っぽい黒のビキニがより倒錯的な色気を出していた。

布の表面積が極端に少ない上半身に比べて、下半身はそれなりの量の布地で守られている。

細くしなやかな脚の膝上まで覆う、黒のニーハイ。

片足の太ももにだけおしやれで巻かれた、白いフリルが付いたガー

ターリング。

黒いミニのフレアスカート裾にも、白いフリルがあしらわれている。黒いスカートに映えるように、サロンエプロンも当然のように白であった。

この水着とミニスカメイドを混ぜ合わせたような衣装は、どう頑張ってもご主人様に性的なご奉仕をするために作られた物にしか見えない。

現状ではマスターのためにアルトリアオルタが用意した、セックス用の衣装であるため何も間違っていないかった。本来ならば自堕落なマスターを決して見逃さない、本当に厳しいメイドの衣装として使いたい道があったのかもしれない。

どうしてこのスケベな衣装を着ることになったのかと言うと、モードレッドの父上のようにマスターにご奉仕が出来るようになりたいという希望があったからだ。アルトリアオルタが持っているエロ衣装の中で、希望に最も合っていたのがこの水着メイドの衣装であった。

二人にあった溝が完全に無くなったからこそ、お揃いの衣装を着ているのも多分にあるだろう。

アルトリアオルタはモードレッドに確認をする。

「私が教えた通りに、マスターに”告白”と”おねだり”をするのだぞ。しっかりと自分がマスター専用の性処理メイドだと伝えなくては、マスターに手を出して貰えないからな」

「わっ、分かっています……っ♡♡♡ 父上に教えられた通りに、ご奉仕の出来る種付け用のメイドだってマスターに伝えるからっ♡♡」

アルトリアオルタは良しと頷いた。

マスターが帰ってくるまでの間、アルトリアオルタはモードレッドに、マスターの女としての心構えやご奉仕の方法を教えていた。その中に、マスターが戻ってきたら開口一番で言うべき台詞やポーズについても指南があったのだ。

(頑張ればマスターに興奮して貰えて、父上にも褒めて貰える……っ♡♡)

とても恥ずかしい内容だったが、今はどんな恥ずかしいことであろうと実行する自信がモードレッドにはあった。

生前やこれまでのカルデアでの時間を含めても、数時間前に父上と和解出来てからの方が長い時間話せていた。これまでの時間を取り戻すように父上と、お互いの好きなものや愛しているマスターのことなどを話すことが出来たのだ。

モードレッドは今が自分の作りだした、理想という名の夢なのでは無いかと疑ってしまう。そう思える程に幸せだった。

そうして、部屋の扉が開かれる。

今日のノルマを達成したマスターが部屋へと入って来た。

水着メイド衣装のアルトリアオルタとモードレッドの二人が、自分のベッドの上に座っていることを視認したマスターは、イチモツに血流が集まり始めたことを感じていた。自分の愛する女性二人がスकेベな衣装を着ているのだから、興奮して当然のことだろう。

マスターは優しそうな好青年から、飢えた獣のような相貌に変化してしまう。その眼は獲物を狙う狩人のようにギラついていた。

そんなマスターを見たアルトリアオルタは、発情した雌の顔に変わって股座を濡らし始める。経験上、このような顔付きになったマスターの情事は、全てを貪られるような雌として屈服するものになると知っているからだ。

モードレッドの方もアルトリアオルタと同じく、これまで見たことのないマスターの獣のような顔付きに雌の本能が刺激されて、小さい悲鳴と共に秘所を濡らしていた。まだ男を知らない彼女であっても、今のマスターなら女を無理矢理にでも手籠めにすると理解が出来た。

反射的に太ももを閉じるモードレッドに、アルトリアオルタが声を掛ける。

「ほら、マスターに告白とおねだりを——」

アルトリアオルタの言葉で、モードレッドは自分のすべきことを思い出した。彼女は膝立ちになり、おもむろに両手でスカートをたくし上げる。スカートの中から眩しい健康的な太ももと、既に湿り気を帯びている黒のビキニボトムが露になる。

熟れた林檎のように顔を真っ赤にさせながら、モードレッドはマスターを床に誘う。

「まつ、マスター♡ すき♡♡♡ 大好き♡♡♡ オレを父上と同じマスターのお嫁さんにして欲しい……♡♡♡ いっぱい愛して貰えるように頑張るから♡♡♡ マスターのオチンポ様にもご奉仕が出来るように、スケベなメイドにも舐けて下さい♡♡♡」

羞恥で体をプルプルと震わせながら、モードレッドは告白とおねだりを言い終える。アルトリアオルタは彼女の後ろに回り込み、乳房をビキニの薄い布越しに揉みしだく。

いきなりすることに驚きつつも、マスターに見られながら父上に乳房を揉まれる快感に、モードレッドは甘い声を出す。

「あ♡♡♡ 父上……♡♡♡ つ♡♡♡ やめ♡♡♡ 止めてえ♡♡♡ ん♡♡♡ あ♡♡♡」

「どうだマスター。流石は私の娘だろう？ 私に良く似てスケベな雌だから、タツプりとマスター専用に舐けてやってくれ♡♡♡ 今日の私は補助役だ……それにしても良い揉み心地だな」

興味深げに乳房を弄り続けるアルトリアオルタに、モードレッドは許しを乞いながら、甘く切ない声で鳴き続ける。同い年にしか見えないう美少女二人が絡み合っている姿に、マスターは言いようも無い興奮を覚えてしまう。

花に吸い寄せられる虫のように、マスターはモードレッドの正面に移動した。目の前で快感に蕩けた顔をする彼女の頬を、両手で押さえ一応の確認をする。

「モードレッド、キスして良い？」
「あっ♡♡♡ キスしてっ♡ んっ♡ オレのハジメテもらっ
んむっ♡♡♡」

モードレッドが全てを言い切る前に、可憐な唇がマスターによつて塞がれる。いきなりのことに目を見開く彼女だったが、直ぐに目を閉じてマスターの唇を受け入れた。

互いの唇の感触を確かめ合うように、触れ合わせては離すを繰り返す。子気味良いバードキスである。

何度も小さなリップ音が鳴り、自分がマスターとキスをしていることを唇の感触と聴覚で実感するモードレッド。嬉しさと

バードキスに慣れてきた頃、マスターがこれまでよりも深く唇を触れ合わせた。モードレッドの上唇と下唇の間に舌を侵入させていく。内頬や歯茎を舐め上げ、口内に溜まっていた唾液を啜る。

いきなりの激しいキスに戸惑うモードレッドだったが、少しの躊躇の後におずおずと舌を突き出して、マスターの舌と絡め合わせる。唾液を？み込み切れずに口端から垂らしながら、マスターから送られる唾液を一生懸命に嚥下していく。

「ちゅゆるっ♡♡♡ んっ——っ♡ じゆるちゅっ♡♡♡ ——んぐっ♡♡♡ ちゆるる…っ♡♡」
(マスターの舌がっ♡♡♡ オレの口の中で暴れてる…っ♡♡♡ 父上に言われた通りに、鼻で呼吸しないといけないのに、マスターの唾液で濡れちまう♡♡♡ マスターにキスされて、父上におっぱい揉まれるの気持ち良い…っ♡♡♡)

前からマスターに両頬を抑えられ、後ろからアルトリアオルタに抱きつかれて胸を揉まれているため、身動きの取れないモードレッドは、口内と乳房を徹底的に陵辱される。

アルトリアオルタはモードレッドのビキニの中に手を滑り込ませ、

固くシコった乳首をクリクリと指先で弄り始める。モードレッドは口内でくぐもった嬌声を上げるが、マスターもアルトリアオルタも止めてはくれない。

モードレッドは体をピクピクと震わせ、淫らな肉の割れ目から愛液を垂らすことしか出来ない。

「————マスターっ♡ モードレッドの乳首が、イヤらしく硬くなっているぞ♡♡ 昨夜、マスターが仕込んだお陰か感度も良い……っ♡」

「んん————っ♡♡ ぢゆるっ♡ んっ……ぷはあ♡♡♡ ちちうえっ♡ あんっ♡ イジワルしないでえ♡♡ んむっ♡♡ んっ——ぢゆるっ♡ じゅちゅっ♡♡」

何とか父上に手を止めて欲しいと懇願するが、直ぐにマスターに唇を貪られてしまう。アルトリアオルタも更に乳首と乳輪を刺激していく。人差し指で乳首の先つぽを擦り、中指で乳輪と地肌の境目をグルグルとなぞる。

アルトリアオルタが普段からマスターにされているおっぱいの弄り方を、娘であるモードレッドにしていた。

「私と同じ責められ方が好きなようだなっ♡ ……私にされるよりマスターにされる方が、何倍も気持ち良いから期待しておけ♡♡ そろそろ生娘を卒業するために、オマンコにも準備が必要そうだ……っ♡♡

モードレッド、マスターにおねだりをしなさいっ♡♡ マスターの大きなオチンポ様を受け入れられるように、おマンコを指でホジって準備して下さいとっ♡♡♡」

「~~~~~っ♡♡♡ んぐっ……ぷはあっ♡♡♡ はあっ♡………はあっ♡………はいつ、ちちうえっ♡♡ スケベなおねだりしますっ♡♡♡ マスターにおねだりい♡♡」

モードレッドは秘所を隠していたビキニを恥丘の横にずらす。

誰にも触れられていないのに、既にびちゃびちゃに濡れた女陰を両手を使って広げながら、腰を突き出すように反らしておねだりを始める。

声が羞恥と緊張で上擦っているのが、余計に卑猥である。

「マスターっ♡♡ オレのオマンコを準備してくれっ♡♡♡ マスターの大きなオチンポ様が入るように……っ♡♡ 処女マンコいっぱいほぐしてえっ♡♡♡」

「——っ、沢山ほぐすよ」

マスターは昨日と同じように右手の人差し指と中指を、モードレッドの濡れそぼった蜜壺に挿入する。まるで指をご奉仕するようにきゅっ♡♡ きゅっ♡♡と締め付けてくる膣肉を掻き分け、恥骨側の腫れぼったい膣壁を指を曲げながら刺激する。

昨日、何度も潮を吹かされた原因の一つであるGスポットを刺激されて、モードレッドは直ぐに半狂乱になった。指が軽く触れるだけで、背中から頭に向かって電流が走るような快感が走り、トロトロの愛液がポタポタとシーツに落ちていく。

「あぁっ♡♡ マスターのゆびい♡♡♡ 入ってっ♡♡ あっ♡♡
そこお♡♡♡ んひいっ♡♡ そこだめっ♡♡♡ 潮吹き覚えたところお♡♡♡ 出るっ♡♡♡ お漏らしする——っ♡♡」

「今日もいっぱい出して良いから、大好きだよモードレッド」

モードレッドに好きだと告白しながら、マスターは止めを刺す。

Gスポットを二本の指でグリグリと押し潰して、イキ癖と潮吹き癖を付けた膣肉のスイッチを入れる。一晩中、躡けられているモードレッドは、それが当然であるかのように条件反射で絶頂した。

脳髓が焼けるような快感が刻まれる。

モードレッドは後ろで抱きついているアルトリアオルタの肩に後

頭部を押し付け、背中を弓のように反らせながら、大きな嬌声を上げる。

「——ひぐっ♡♡ マスター、イクっ♡♡ イクイクイクっ、イクウウゝううウゝううウゝうっっ♡♡♡」

閉じていた尿道口が開く。

その小さな穴から、少し磯の匂いにも似ている透明な体液が間欠泉のように、ぷしゅっ♡♡ ぷしゅっ♡♡と何度も噴き出す。マスターの指をこれまで以上に締め付けて、言葉だけでは無く膣肉でも絶頂したことを伝えていた。

快感を逃がすために腰をガクガクと震わせるモードレッドは、後ろにいるアルトリアオルタに汗で濡れたお尻をペチペチと押し当てていた。

ムワツと女の絶頂したフェロモンのようなニオイが発せられる、モードレッドが絶頂する様子を少しだけ羨ましそうに見ていたアルトリアオルタは、肩に押し付けられるモードレッドの頭をゆっくりと撫でる。自分の娘が女としての幸せを味わっていることを喜んでいるのか、優しい目をしながら微笑んでいた。

「……ふふっ、私に似て直ぐに潮を吹くスケベな娘だ♡♡ マスター、遠慮は要らない。もっと、モードレッドのおまんこをイジメてやってくれ♡♡♡ その方がこの子も悦ぶ……っ♡♡♡」

「分かったよ。でも、アルトリアオルタのも弄りたい。二人を気持ち良くしたい」

「~~~~っ♡♡ マスターが望むのであれば構わない……っ♡♡♡」

親としての顔をしていたアルトリアオルタも、娘のモードレッドと同じようにスケベな女の顔に変わった。

モードレッドを床に仰向けに寝かせ、自分もその横で仰向けになる。黒いビキニを恥丘の横にズラして、濡れそぼった女陰を外気に晒

した。娘の胸を揉みしだきながら、自分自身も興奮していたのだらう。

絶頂の余韻から抜け出せていないモードレッドの代わりに、アルトリアオルタはおねだりを口にする。

「マスター専属の性処理用メイド親子のトロトロオマンコを、タツプリと味わってくださいっ……っ……っ♡♡♡」

マスターは右手でモードレッドの秘所に触れ、左手でアルトリアオルタの秘所に触れた。

「あっ♡♡♡ 来てっ——」

「まつれ、いったばっ——」

——ちゅぷっ♡♡♡

二人の蜜壺にマスターの指が挿入され、穴を慣らすように掘削していく。

蕩けた雌の甘い嬌声が二つ。

ハーモニーを奏でるように、部屋中に響き渡った。

「——あぁっ♡♡♡」

Gスポットを中心に膣内をゴツゴツとした男らしい太指で穿り回され、マスターの柔らかい唇や濡れた舌先が二人のクリトリスや尿道口、小唇陰を交互に愛撫した。

指先がGスポットをグリグリと押し潰すと、二人は喉を反らせて叫ぶ。

マスターの唇が肉豆を優しく挟んでちゅっと吸い付けば、柔らかい太ももでマスターの顔を挟んで、頭を激しく振り乱す。充血したクリトリスを前歯で甘噛みする度に、マスターの顔に大量の潮を吹き掛け

した水道管のように噴き出す潮がベッドに収まり切らず、近くの床にびちゃびちゃと水音を立てて飛び散っていく。

快感を逃がすために腰をびくっ♡♡びくっ♡♡と、震わせていた二人だったが、最後にお尻をブルリと震わせた後に脱力してベッドに崩れ落ちた。

二人はひっくり返ったカエルのような体勢で、未だに残る快感の余韻に体を震わせる。形の良い美乳をふよふよと揺らしながら、荒くなつた呼吸を整えていく。

快楽で濁つた金色の目でマスターを見詰める、アルトリアオルタがお礼を言う。それに続いてモードレッドも、蜜壺の準備をしてくれたマスターに感謝の言葉を述べる。

「はあっ♡……はあっ♡……ふうっ♡♡ ドスケベメイドのオマ
ンコ舐けていただきっ♡♡♡ ありがとうございますっ♡♡♡」
「はあっ♡……はあっ♡……マスターっ♡♡ オレのオマンコ準備い♡♡ いっぱいほぐしてくれて、ありがとうっ♡♡♡」

二人の淫らなメスの卑猥な感謝に、マスターの我慢も限界に近付いていく。怒張した肉槍がパンツとズボンに無理矢理押さえ付けられて痛い程であつた。

アルトリアオルタとモードレッドが息を整えている間に、潮や愛液で濡れた服を全て脱いで全裸になる。それなりに鍛えられた逞しい肉体と共に、天を衝かんとする女の細腕よりも太く大きいペニスが露出された。

それに気が付いたアルトリアオルタは、モードレッドの後ろにゆっくりと回り込む。自分の体に凭れさせてモードレッドの上体を起こす。後ろから膝の裏を持ち上げるように抱えて、両脚を大きく開かせた。M字開脚のポーズをモードレッドに取らせた。

秘所や肛門を見せ付けるような体勢に羞恥を覚えるモードレッドに、アルトリアオルタは女になるための最後の儀式を済ませるようにと促す。

「マスターに処女を捧げる時が来たぞ♡ 私もしっかりと見ているので、ここで”女”になりなさい……っ♡♡」

「——はいっ♡♡ 父上の目の前で女になりますっ♡♡♡」

首から上を紅潮させて、震える指先で小唇陰をくぱあ♡と開きながら、モードレッドは最後のおねだりをする。

「オレの処女マンコをマスターのモノにしてくれっ♡♡♡ 父上と同じマスター専用の女にして……っ♡♡」

番外編：叛逆の騎士は従順な雌になる―6

「オレの処女マンコをマスターのモノにしてくれっ♡♡♡ 父上と同じマスター専用の女にして……っ♡♡」

アルトリアオルタにM字開脚になるよう後ろから支えられるモードレッドは、自分の指で小唇唇を開いている。

正面にいるマスターには、モードレッドのぷっくりと充血したクリトリスや今は閉じている尿道口の小さな穴。そして、コプコプと愛液を溢れさせる膣の入り口が全て見てしまっている。

飢えた獣のような眼で卑猥な穴を視姦するマスターは、最大まで怒張した女の細腕よりも大きいだろうペニスの先端を、モードレッドの膣口に触れ合わせる。

ぷちゅっ♡♡と、水音と共にモードレッドは小さく喘いだ。

想像以上に熱い亀頭が触れたことによる快感もあるが、マスターのペニスの大きさを改めて実感したからだ。間違いなく膣口から鳩尾まで届くだけの長さで、膣肉が裂けてしまうかもと不安になる程の太さがあった。

（マスターのオチンポ大きいっ♡♡♡ これが今からオレのオマンコに入って……本当に入るのか？ 股が裂けちまうかも……っ♡♡でも父上は奥まで――）

不安そうにしているモードレッドに、アルトリアオルタが声を掛ける。

「大丈夫ですよ。モードレッドのオマンコも、しっかりとマスターのオチンポを受け入れられます……っ♡♡ 私の娘なのだから自信を持って♡♡」

「はっ、はいっ♡♡♡ マスター、来てくれ……っ♡♡」

アルトリアオルタの言葉に頷き、モードレッドはマスターを受け入れやすい腰を反らした体勢になる。

「ゆっくり挿入れるからね——」

マスターが腰に力を入れて押し込んでいくと長大なペニスの亀頭が、モードレッドの膣内に少しずつ埋没していく。

モードレッドの膣肉を掻き分け、『ぬぷっ♡♡』や『ぐちゅっ♡♡』と卑猥な水音が鳴る。

——そして、子宮を守る最後の防御壁と亀頭の先端が触れ合った。それは乙女の証である。

処女膜には元から穴が空いているのだが、マスターの大きな亀頭が侵入するならば確実に破れてしまうだろう。そして、それが破れた時にモードレッドは本当の意味で、マスターの物となるのだ。

モードレッドはコクンと頷き、マスターはキスをしながら腰を進めていった。

微かな痛みを感じながらモードレッドは、”乙女”から”女”になつた。

出血も大したことは無く、シートに数滴の赤い痕が残った程度である。人によって痛みや出血量にも個人差があるのだが、比較的モードレッドは軽い方だろう。

破瓜の間も接吻をしていたモードレッドは、唇を離して自分がマスターの物であることを伝える。

「ぢゅるっ♡♡　ちゅう——んむっ♡♡　ちゅるるっ♡♡　じゅる——
ぷはっ♡♡♡　オレ、マスターの女になっちまった……っ♡♡　も
うマスターだけのモノだ♡♡」

「ありがとう。絶対に幸せにするから」

「オレは……マスターと父上と一緒になら幸せだからっ♡♡　んむ——
——っ♡♡」

二人は愛し合いながら、更に深くまで繋がっていく。

処女膜の奥の場所は、膣腔とも呼ばれる。凸凹となっている膣襞や

柔らかい膣肉によって構成された、本当に狭い空間だ。その中にGスポットなどの、強い性感帯も存在している。

そんな狭い膣腔をマスターの長大な巨根が蹂躪して征服していった。

今まで膣腔に挿入された一番大きいモノがマスターの指であったのに、今回はその何倍も太いペニスである。ぐちゅぐちゅと音を立てながら膣内を拡張していく。

「あぐっ♡♡ マスターのお♡ おっ♡♡ 大きいのが入ってっ♡♡♡ おっ♡♡♡」

自分の体の中に大きな異物が入って来る違和感と、他の内臓が圧迫されていくような苦しさは確かに有った。しかし、自分の大事な場所である赤ちゃんを作る所を、マスターのモノにされていく感覚はモードレッドに悦びを与えた。

(オレの狭いナカが、マスターのオチンポに征服されてるっ♡♡♡ 苦しいのに、嬉しい…っ♡♡♡)

膣肉が限界まで広がり、このまま裂けてしまうのでは無いかと不安になる。しかし、マスターの指先で十分に耕されていた膣内は、想像以上の柔軟性を見せてペニスを受け入れていった。

考えてみれば赤ん坊の頭も通ることが出来る肉孔なのだから、マスターの大きな亀頭も入念な準備があれば挿入が出来て、当然のことであつた。

マスター専用のペニスケースとなるように、ギリギリ受け入れられる形にモードレッドの膣内が変化していく。その結果、膣内が熟れた時にモードレッド本人に与えられる、壮絶な快感については考慮しないものとするが。

ペニスが三分の二程度、蜜壺の中に呑み込まれた所で、子宮の入り口に辿り着いてしまう。モードレッドはこれで終わったと安心していった。しっかりと奥までマスターを受け入れられたと。

——その時、後ろにいたアルトリアオルタが声を掛けてきた。

「さあ、ここからが本番だ。」

モードレッドも意識を強く保ちなさい。私が手を握ってやる」

アルトリアオルタがモードレッドの両手をそれぞれ握った。

一方、モードレッドはまだこれから起こることが、良く分かっていない。恐る恐るといった様子で彼女は、当たって欲しくない予想を尋ねる。

「父上……ここから、まだ入れるのかっ？♡♡」

「その通り。マスターのオチンポに子宮を持ち上げられて、押し潰される感覚はモードレッドの想像以上の快感だ……っ♡♡ 始めは苦しいだろうが、浅く呼吸して酸素だけは確保しなさい♡」

モードレッドはアルトリアオルタの話を知っている内に、期待感と恐怖が押し寄せてくる。覗き見た時の父上のように、根元までマスターのイチモツを受け入れた時、自分がどうなってしまうか分からなかった。

マスターに壊されてしまう自分を想像して、モードレッドは変な気持ちになる。

それは雌としての、雄に傅きたい欲求だろうか。

愛する雄に雌として壊されることを、幸せでは無いかと誤ってしま

う。
「一番奥まで……っ♡♡」

無意識の内に膣をきゅっ♡♡ きゅっ♡♡と締め付けるモードレッドに、マスターは彼女の骨盤付近を両手で掴んだ。

マスターがモードレッドに選択肢を提示する。

それは何方の選択肢を選んでも、結果的に彼女が墮ちることには変わりがない内容であった。

「ゆっくり持ち上げてくより、一気に奥まで挿入れた方が楽だと思うけど……モードレッドはどっちが良い？」

「えっと……っ♡♡ そのっ、ゆっくりが良い……っ♡♡♡」

モードレッドの言葉に頷いたマスターは、腰を押し込んでいく。

少し腰を進めると、子宮口と亀頭が完全に密着した。

完全に逃げる場所が無くなった子宮が、マスターの腰が進むにつれて徐々に持ち上げられる。

子宮が移動する臓器でなければ、とっくに押し潰されていただろう。

ゆっくりじつくりと子宮を持ち上げられるモードレッドは、お腹の圧迫感と共に自分が少しずつ変になっていることを感じていた。誰にも触れられたことの無かった無垢な子宮が、強い雄にゆっくりと時間を掛けて躰けられているのだ。

雌として狂っていくのも当然のことであった。

ある意味で一息に腰を叩き付けて屈服させるよりも、酷い墮ち方をしてしまう。

最終的には子宮を押し潰されて、悲鳴を上げることしか出来ないと分かっているからこそ、真綿で首を締められるような責め方である。

「ましゅっ♡♡ んぁ♡♡ ましゅたー♡♡♡ これっ♡♡ やば……
いつ♡♡ あうっ♡♡♡」

子宮がブクブクと煮立っていくような感覚によって、モードレッドの顔が蕩けてしまう。それでもマスターは更に腰を押し進め、子宮が完全にペニスを支えられている状態となっている。

許しを乞うように、子宮が快感という名の悲鳴を上げ始める。

モードレッドは少しずつ呼吸が苦しくなっていく、父上が言っていた浅い呼吸をしないと酸素が取り込めなくなっていく。半開きの口から舌をだらしなく出して、『ハっ♡♡ ハっ♡♡♡』と、犬のような呼

全身が汗で濡れて黒いビキニが乳房の形に合わせて張り付き、フレアスカートやエプロンも大量に吹いた潮で濡れてしまっていた。微睡むモードレッドに、アルトリアオルタは優しく声を掛ける。

「良くやったな、偉いぞ」

「ちちうえ……………マスターのおんなに……………っ♡ なれ……………ましたっ♡♡」

「ああ、しつかりと見ていた。後は……………精液を注いで貰うだけだ」
「……………あっ♡♡」

モードレッドは初めてのポルチオアクメが気持ち良過ぎて、まだマスターに射精して貰えていないことを忘れていた。自分だけが気持ち良くなって、全て終わった気になっていたのだ。

マスターの方に目を向ければ、優しい表情と視線を向けられていた。

年下の妹や娘を見るようなマスターの視線に、モードレッドは既に紅潮した頬を更に赤く染める。

「まっ、マスターっ♡♡ あう——っ♡♡ オレだけいってごめん……………っ♡」

「大丈夫だよ。でも、まだ動かない方が良いよね？」

まだ敏感な膣の状態を考えてモードレッドが頷こうとした時、後ろにいたアルトリアオルタがそれを遮った。

「あまり娘を甘やかし過ぎては駄目だぞ。

モードレッドはこれから私と同じ、マスターの性欲を処理するご奉仕メイドにもなるのだから。マスターの性欲を受け止めなくては……………メイド失格だ。なあ……………モードレッド？」

「ちっ、父上っ♡♡ ……まっ、マスター動いてくれっ♡♡」

父上の圧に負けたのか、それとも純粹にマスターにも気持ち良くなつて欲しいと思つたのか。

マスターに動いて欲しいと、モードレッドはお願いする。彼は苦笑しながら頷き、ゆつくりとペニスの抜き差しを開始する。

「——痛かったら、言つてね」

「おつ、おう……っ♡♡ いひい——っ♡♡♡」

子宮口とはまた違う快感にモードレッドは、困惑の合わさつた嬌声を上げた。

深い段差を持つ雁首がずりゆずりゆと、膣肉や膣襞を容赦なく引つ掻きながら引き抜かれていく。モードレッドは目を見開き、子宮口への刺激とはまた違う快感に甲高い声で喘いだ。

鈍痛のように脳髓や子宮を焼き焦がす子宮口への快感に比べて、膣肉や膣襞を抉られる快感は短く鋭い。膣襞の一つ一つを雁首で引つ掻かれる度に、神経に直接電気を流されるような快感が走っていく。

「あ♡っ♡♡ む♡りっ♡♡ これ♡え——っ♡♡ む♡りい♡♡♡
ナカのぜんぶ……っ♡♡ ひっか♡かれ♡る♡♡♡♡♡ いひい
♡い♡い♡い♡い♡い♡い♡い♡っ♡♡♡♡」

雁首が散々刺激されて腫れぼつたくなつた恥骨側の媚肉を抉つた瞬間、雷に打たれたような快感が全身を突き抜けた。

恥骨側の腫れぼつた媚肉とは、マスターに指先で捏ねられたGスポットのことである。今まで優しく刺激されていたところが、エラ張つた雁首でゴリゴリと削るように刺激されたのだ。

モードレッドが絶頂の海に溺れている最中であっても、マスターはゆつくりとだがピストンを続ける。抜けてしまうギリギリまで腰を引いた後は、腰を押し出してまた子宮口を押し潰すために膣内を蹂躪していく。

緩慢な腰の動きであつても、モードレッドは何度も絶頂を繰り返すことしか出来ない。

「しきゆうがっ♡♡♡ あぐっ♡ つぶれるう♡♡ イっつてるの
にっ♡♡♡ しきゆうズンズンだめっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡
♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ まだぐりゅ♡♡♡♡ ダメなとこくりゅ♡♡
♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ♡♡♡ ああ♡♡♡ ああ♡♡♡ ああ♡♡♡
っ♡♡♡♡♡♡♡」

子宮を亀頭で押し潰され、Gスポットを雁首で掘削される。

絶頂し続ける中で二種類の強い快感を交互に与えられ、半狂乱になつて嬌声を上げるモードレッドは何度も潮を吹く。途中、潮ではな
い体液を尿道口から噴き出しながら、マスターのピストンで自分は絶
対に雄に勝てないと分からせられる。

数え切れない位に子宮を押し潰され、雁首で膣内を掘削され、Gス
ポット以外の膣肉や膣襞も開発された頃に、マスターの射精が近付い
てきたようだ。

これまで以上に亀頭が膨らみ、ずっしりとした大きな睾丸が持ち上
がる。

耐えるような表情を浮かべながらマスターは、モードレッドに射精
が近いことを伝える。

「——モードレッド、射精そうっ」

「~~~~っ♡♡♡ おくでっ♡♡♡ おくでだしてっ♡♡♡♡ マ
スターのせいえきい♡♡♡ いっぱいだしてっ♡♡♡ しきゆうズ
ンズンしながら………だしてっ♡♡♡♡」

モードレッドはマスターの腰に脚を絡ませて、精液を子宮に欲しい
とおねだりする。

子供が欲しいと強く思う女が愛する男に精を乞う姿に良く似てお
り、勝気で男勝りな彼女からは想像も出来ない程に、酷く淫らであつ

た。

マスターもモードレッドのギャップに耐え切れず、最後に思いつ切り腰を押し付けた。

——ドズンつつ!!!

「いひゃ——っ♡♡」

「モードレッド、射精すよっ!」

子宮口に亀頭の先端が食い込んだ状態でお粥のような精液がドロップと注がれていく。

びゆるっ♡♡ びゆくっ♡♡ びゆくっ♡♡ どびゆるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ どぶっ♡♡♡♡♡ どぶっ♡♡♡♡♡ どぶっ♡♡♡♡♡ びゆるるるるるるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ どびゅ…
ぶびゅっ♡♡♡ ぶびゅびゅびゅっ♡♡♡♡♡ びゅく……びゅ

大量の精液を子宮内に出されるモードレッドが、始めに感じたのは精液の熱さだった。睾丸の中でグツグツと煮詰まった高温で粘性の高い精液に、子宮が火傷したと錯覚さえ覚えている。

「あっっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡ しぎゅう やけるっ♡♡♡♡♡
せいえきでっ♡♡♡ しぎゅう やける ううう ううう
ううう ううう ううう ううう あえ…っ♡♡♡ しぎゅう
…こわ……えるっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ お
なかくるひい…っ♡♡♡」

雌の余裕が完全に無くなった濁音混じりの嬌声。

本来ならば聞き苦しい筈のそれは、雄のドロドロとした欲望である征服欲を際限なく満たす。ここまで快感を与え、絶頂させることが出来たのだと誇らしさすら感じてしまう。

膣口と太いペニスの隙間から放屁のような音と共に、子宮に入りきらなかった精液が零れていく。それでも子宮内には大量の精液が溜

まっっており、モードレッドの引き締まったお腹が、妊娠したかのよう
に膨らんでいる。

少女のボテ腹は倒錯したエロスがあった。

「あゝっ♡♡いひひ——っ♡♡♡♡ふあ……っ♡♡」

荒い呼吸を吐き出すと共に、モードレッドは絶頂の海に溺れる。

子宮に大量の精液を注がれ、お腹が苦しいことすら嬉しいと思つて
しまう。

雄の精に子宮内を白く塗り潰されて、獣のようにマーキングされる
ことが気持ち良く。自分がマスターの所有物となったことに幸福を
感じていた。

（これでオレの全部……マスターのモノ♡♡ 父上とマスターとずつ
と一緒だ……っ♡♡♡♡）

幸せそうな表情を浮かべるモードレッドから、マスターはゆつくり
とペニスを引き抜いた。愛液と精液でドロドロになったイチモツが
外気に露出する。

雄と雌の淫らなニオイが部屋全体に広がっていく。

娘の初体験を見守っていたアルトリアオルタが、快感を逃すために
ビクビクと震えているモードレッドの上体を起こす。モードレッド
の目の前には、自分達の体液でドロドロになったペニスがあった。

アルトリアオルタはモードレッドの横に移動して、亀頭から垂れて
いた精液を口で受け止めた。ぐちゅぐちゅと口の中で咀嚼した後に、
ゆつくりと飲み込んだ。

「んぐっ……んっ……はあっ♡ モードレッド、最後はお掃除フェラ
だ……っ♡♡ 今回は私も一緒に舐めて、マスターがどこを感じるか
教える♡♡ マスターの女として……一緒にご奉仕しよう♡♡♡♡」
「あっ♡♡ はあっ♡………はあっ♡………はい♡ 大好きな父上と
一緒にっ♡♡♡♡ 大好きなマスターのオチンポにご奉仕します
……っ♡♡♡♡」

モードレッドとアルトリアオルタは、ペニスの亀頭を左右から挟むように同時に口付けをした。

——ちゅっ♡♡

三人の夜はまだまだ終わらない。

評価者100人記念 番外編―3 影の国の女王は
死よりも生を望んだ

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―1

『ああ、そうとも……私は望んでいるよ、死を。聖杯なるものが真に万能ならば、自分を殺してみせる何者かを超越すがいいと』
『そして願わくば……その者が、かつてこの手で授けた、槍を持つ者であれば』

これはスカサハが一時的にはあるが”死”のある世界に召喚してくれたマスターに、つい零してしまった本音であった。彼を力が弱くとも勇士と認めたからこそ、話してしまった弱音である。

――影の女王”スカサハ”は、死を望んでいた。

彼女にとつての死とは、どれだけ望んでも手に入らないものであるからだ。

ケルト・アルスター伝説の戦士、魔境、影の国の女王にして門番であるのがスカサハだ。卓越した槍術とルーン魔術に精通した、文字通り規格外の存在である。

無数の亡霊が闊歩する影の国の門を閉ざし、支配するに足る絶大な力を有していた。

後にアルスターの大英雄となる光の御子”クーフリーン”の師となつて彼を導き、技の悉くを授け、愛用の魔槍ゲイボルクを授けたのも彼女である。

そして、クーフリーンの息子であるコンラを教え導き、クーフリーンの手でコンラを殺すようゲツシュを与えたのもスカサハであった。当時のスカサハがクーフリーンに対して、どのような感情を持っていたのかは彼女にしか分からない。

人の身で神と亡霊を殺し過ぎたことで、神の領域に近付いてしま

い、影の国ごと現世でも幽世でもない”世界の外側”に弾き出されてしまった。

その結果、自分では死ぬことも出来なくなったのだ。

人のように美しい死も、醜い死も存在しない。ただ世界と世界の外側が消えゆくその時まで、在り続けなければいけないのである。

長い年月を経て、スカサハの魂は腐る。

満たされることの無い時間だけが過ぎ、心が死んでいった。

影の国にいる本体は、とっくの昔に狂って化物になっている。

今のサーヴァントとしてのスカサハが、人であった頃のように感情の起伏を持つているのは、契約者であるマスターの影響と死のある世界に来れたことが要因である。

きっと人理を修復して全てが終わった時には、彼女はまた化物に戻るのだろう。

——もう一度言おう。スカサハは、死を望んでいた。

「——ふむ……良く分からん」

スカサハはマスターのことを考えていた。

それは色恋の意味合いは無く、単純な疑問符から来るものだ。

約一か月前に自分が死を望んでいることを話してから、度々マスターが料理と一緒に作らないかと誘ってきたり、おすすめの本を紹介してきたりと、今までは無かった行動を取り始めたことについてだ。

それまでは『流石、師匠です！』と此方を純粹に慕っていたマスターが、妙に馴れ馴れしいと言うよりもお節介を焼くようになった。まるで

で半神たる影の女王には無く、小娘でも相手にするようになら。

それらのことについて悪い気はしなかったが、理由も分からない変化はどうしても気になってしまおうものだろう。スカサハも何かしらの切っ掛けがあったかと思案していたのだが、どうしても分からなかった。

一つ諦めのため息を吐いたスカサハは、マスターに直接問いただした方が早いと考える。今はお昼を過ぎた辺りでこの時間帯のマスターは、自室で食後のトレーニングに励んでいる頃合い。

スカサハはマスターの自室に向かい扉を開いた。

彼の自室は鍵を掛けているか、夜八時以降でなければ基本的に開いているので、彼女が無理矢理入ったりはしていない。もしも、鍵が掛かっているようにスカサハにとっては、鍵など無いのと同義であるが。

扉の先には黒いインナーだけを身に纏い、片手三本の合計六本で指立て伏せをしているマスターがいた。しっかりと顎が床に着く寸前まで深く下ろしてピタリと静止してから、ゆっくりと身体を上げている。

スカサハから見ればまだまだマスターは未熟も未熟であるが、真剣な表情や自分の限界を超えようとしている姿は好感が持てた。自分のことにも気が付いていないようだったので、トレーニングが終わるまで眺めることにしたようだ。

マスターのベッドに音も無く移動して、ベッドの縁に腰掛けてスラリと長い脚を組む。スカサハは親が子の成長を見守るような優しい目をしながら微笑んでいた。

(セタンタとは比べるべくもない貧弱な小僧ではあるが、やはり私が好む勇気あるものだな……)

それから数分が経ち、マスターのトレーニングは終了したようだ。全身にじつとりと汗を掻き、肩を上下に動かしながら息を整えていた。

そんなマスターにスカサハは、ベッドに置いてあったハンドタオルを投げつけた。

「はあっ………はあっ………わっ!? あっ、あれ師匠?」
「良いから先に汗を拭え。風邪など引いては本末転倒だろう」

マスターはスカサハの言葉に頷き、顔や体の汗をタオルで拭いていく。

彼がそこまで驚いていないのは、一瞬で屋根裏から現れる忍者のせいだろうか。

ある程度の汗を拭き終わると、彼はいつの間にか部屋にいたスカサハに声を掛けた。

「それで師匠……何か用事ですか?」

「ああ……お主に聞きたいことがあつてな。お主は最近、色々な私に構ってくるが——」

その時、マスターの身体がメトロノームのようにグラリと揺れて、スカサハの方へと倒れ込んだ。

「どうやらいつものように”繋がって”しまったようだ。彼は契約するサーヴァントの心や特異点などにカルデアのレイシフトを使用しなくとも、夢を介して転移してしまうことがあるからだ。」

この夢を介した転移は狙って出来るものではなく、本人の意思に関わらず起こってしまう。マスターが起きている時でさえ、強制的に気絶するように夢へと誘われる。

スカサハは冷静にマスターを受け止めた。

仮にも自身のマスターであるのだから、怪我の無いように行動したまでである。彼女は慌てることなく、冷静に彼のことを観察していた。

(ほう………これが話に聞いていたマスターが夢に誘われる瞬間か。全く難儀な能力を抱えたものだな——っ)

スカサハに誤算があったとすれば、マスターとの縁が強く結ばれていたこと。そして、予想以上に彼の夢を介した転移能力が強力だったことだろう。制御が効かないことを除けば、”獣が持つ”単独顕現”と

さして変わらぬ異能なのだから、もう少し警戒する必要があったのかもしれない。

気付けばスカサハは、マスターと共に見知らぬ土地へと転移していた。

目の前に広がる白い砂浜と青い海、後ろには鬱蒼と茂る森林と年季の入った掘っ立て小屋。聞こえてくるのは波の音と風で揺れる木々のざわめきだけだった。

鼻腔に入ってくる潮の香りと眩しい日差しを感じながら、スカサハは気絶したマスターを支えながら独り眩く。

「さて……どうしたものか」

その眩きも波の音に攫われてしまった。

——バタンっ

「……………んっ」

立て付けの悪いドアが閉まる音によって、マスターの意識は覚醒した。少し古いがまだまだ使用できる木製のベッドの上に、自分は寝かされていたらしい。

周囲を見回せば山小屋のような少し古めの内装の部屋であることが分かり、唯一つの外への出入口となる扉の前には朱槍を携えたスカサハが立っていた。

「起きたのだな。……………状況は理解しているか？」

ただ立っているだけでも、スカサハは絵になる。

光の加減によって赤色や紫色にも見える、ガーネットのような美しい髪は太ももまで伸ばされ、紅玉のような朱色の瞳は見ていただけで”魅了の魔術”を掛けられた状態になってしまいそうだ。

整った目鼻立ちと落ち着いた雰囲気から、艶麗な美女と表現したくなる。

美しい顔立ちに合致するように、顔から下の肉体もまた美しく何より淫靡であった。

その細くしなやかな肢体を紫色の薄いタイツで包み。四肢や豊満なバスト、鼠径部だけは薄手の黒布をタイツの上に更に重ねている。

身体のラインの殆どが出ており、美の女神にも劣らない美しい肉体が手に取るように分かってしまう。ある種、全裸であるよりも男の情欲を誘う衣装である。

マスターはスカサハに見惚れてしまいがちながらも、一度頷いて返事をした。

「うん。いつもの強制転移だと思う。

あの意識が遠くなって倒れた時に……………近くにいた師匠も巻き込んでごめん」

申し訳なさそうなマスターの謝罪に対して、スカサハは気にするなと手をひらひらと振った。

「気にしなくてよい。私が近くに居なければ、もっと大変なことになっていた。

軽く全体を見た程度ではあるがこの孤島には私達しかおらず、ヤドカリのような魔物も確認が出来た。お主が一人で転移していれば、命の危機も十分に考えられただろう」

「孤島……………それなら尚更、師匠にお礼を言わないと。助けてくれて本

「当にありがとう」

深く頭を下げるマスターにスカサハは律儀な男だと思いながら、始めに確認すべき事項を聞いた。

「——それで、カルデアとの連絡は取れそうか？」

「うーん………駄目だね。今頃は消えた俺と師匠を探して思う。それに他のサーヴァントも呼べないみたいだから、完全にカルデアとのリンクが切れてるみたい。今は師匠とだけ契約している状態なのかも」

殆ど確信していたことだが、やはりカルデアとの連絡は取れないようだ。もしも、マスターの居場所をカルデアが把握していれば、即座に何かしらの反応があっただろう。

数時間が経っても何もカルデアからの反応が無い時点で、スカサハも半ば確信していた。

「やはりそうか。こちらで出来ることはそう多くない。

島の探索と身の安全を確保しつつ、カルデアからの連絡を待つしかないだろう」

「うん。今回は魔術礼装も着てないから補助も出来ないけど……出来る限り頑張るよ」

二人は特に悲観することも無く現状を受け止めて、出来る範囲で行動を開始した。

幸か不幸か——スカサハの脅威となるような魔物はおらず、食料や飲み水の確保は簡単に行うことが出来た。孤島の探索も島自体がそこまで広くも無かったので、一日程度で完了してしまった。

日頃からサバイバル術や料理を英霊達から習っているマスターの面目躍如もあり、三日程度で安定した生活基盤を手に入れることが出来た。

後はカルデアからの連絡をのんびり待つだけの、快適な遭難生活を送ることが可能となっていたのだが。

しかし、ここで一つだけ問題があった。

マスターにとっては明確な脅威となる魔物が存在しているので、常にスカサハを召喚を維持する必要がある。

本来ならばスカサハも力を最小限に抑えているので、召喚の維持に問題は無い筈だった。しかし、マスターとスカサハの間のパスが不安定であり、召喚を維持するための魔力が不足していたのだ。

魔力を送る際のロスが多いと言い換えても良い。

車に例えれば本当はガソリンを10 リットル供給すれば済むのに、給油用のホースに穴が空いているせいで20 リットル必要になっているのに近いだろうか。

この二人のパスが不安定になっている原因は、マスターとカルデアとの繋がりが切れていることが主な要因である。カルデア式の英霊召喚でスカサハとマスターは契約しているので、パスが不安定になるのも当然の結果であった。

因みに普段はマスターを中継器に見立てて、カルデアが電力から作り出した魔力をサーヴァントに供給していた。それが可能であるから百名以上のサーヴァントを、カルデアは召喚・維持が出来る。不安定なパスを解決する方法は、今の状況では一つしか無かった。

——即ち”体液”からの直接的な魔力供給だ。

魔力は体液に溶けやすい性質を持っている。

マスターの何らかの体液をスカサハが摂取すれば、パスが不安定な状態でも問題無く魔力の供給が出来るのだ。

危険は少ないように思えるが命が懸かった状況であることには変わりないため、お互いに納得して体液からの魔力供給は行われることとなった。

「……………それじゃあ、始めようか」

スカサハが『うむ』と短く頷いた。

掘っ立て小屋にあった包丁で、マスターは人差し指の腹を軽く切った。傷口から血液特有の鉄臭いニオイと共に、真っ赤な鮮血が溢れてくる。

マスターは鮮血が溜まっていく人差し指を、スカサハに向かって差し出した。

スカサハは開いた口から舌を伸ばして、指先に溜まった血液をペロリと舐め取る。

「れろ——お。んっ……確かに魔力供給が出来ているぞ」

「良かった……初めて試したから、本当に出来るのか不安だったんだ」

「——んっ。舌で舐めるのは効率が悪い……少し啜えるぞ?」

「しっ、師匠!? ——んっ」

マスターの人差し指の第一関節を、スカサハは口ではむつと啜えた。

ちゅーちゅーと指先を吸われる感触と指先を啜えるスカサハの姿に、マスターのペニスが本人の意思とは関係なしに反応してしまう。疑似的なフェラチオをするスカサハのイヤらしい姿を見て、男として反応しない方がおかしいだろう。禁欲生活が三日目に突入していたことも大きな原因である。

黒いインナーの下にサポーターを履いていようとも、勃起したペニスの前では無意味である。インナーの上からでも分かるペニスの隆起に、スカサハも頬を僅かに赤くしながら気付いてしまう。

「んっ————ぶはっ♡ お主も男であったな♡♡ 私のような美女

に指を啜えられて勃させるとはっ……………興奮したのか?♡」

「……………すみません。少し溜まってました」

申し訳なきさそうにするマスターに対して、スカサハは上機嫌である。

ケルト・アルスター伝説は性に奔放な者が多く、スカサハ自身も過去はそれなりに勇士と浮世を流した存在であった。

男の性にも理解のある方だという自負があり、自身の美貌にも自信を持っているタイプである。マスターが自分に欲情して、ペニスを勃起させているのは気分が良かったのだ。

「私もそこまで悪い気はしない……っ♡♡ —— それにしてもっ♡」

スカサハの視線の先にはサポーターと黒いインナーを押し退けて隆起するペニスがあるのだが、これまで相手をした勇士に勝るとも劣らない大きさであった。

彼女の中に眠っていた女が、否応なしに反応してしまう。

マスターのペニスもスカサハの熱い視線を受けて、更に血流が集まって更に大きくなる。明らかに一度処理をしなければ、治まらないだろう猛り具合であった。

これ以上、恥を晒す訳にもいかないと、マスターがこの場から逃げ出そうとする。

「すっ、少し席を外して処理して来ます。うあ——っ?!」

他の場所で自慰をして処理に行こうとするマスターに対して、スカサハは柔術でも使用したのかベッドの上にふわりと投げ飛ばした。ベッドに叩き付けられる衝撃自体は抑えてくれていたが、いきなり変わった視点にマスターは目を剥く。

悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべるスカサハが、マスターが仰向けに倒れているベッドの上にかかる。

「お主がこうして勃たせているのは、私にも多少なりとも責任があるっ♡♡ 私が軽く相手をしてやろう…っ♡♡♡」
「ちよっ、ま——っ」

マスターの静止も聞かずに、スカサハはインナーやサポーターも全て脱がせてしまう。

勢い良く跳ねながら女の細腕よりも大きなペニスが露出した。

長大なペニスからは汗で蒸れた雄の膣えた臭いが漂っており、嗅いでいるだけで頭がクラクラしてしまいそうな程に臭いが濃かった。

数々の勇士を虜にした女王メイヴでさえ生唾を呑み込むだろう猛々しいペニスに、スカサハも思わず秘所を濡らしてしまう。仮にマスターが女性に買われるタイプの男娼であったのなら、相当な人気が出ていただろう。

（想像以上の魔槍の持ち主ではないか…っ♡♡ しかし、槍の扱いで私に勝てる者などいない♡）

スカサハは右手で陰茎の中段を握り込み、指が回りきらない程に太いことに密かに興奮しながらマスターに話しかける。

「立派なモノを持つているではないかっ♡♡ この私が直々に扱いてやろう…っ♡♡♡♡」

「しっ、師匠っ。う——くうっ」

絶妙な力加減で陰茎をスカサハに扱かれて、マスターは快感から低く呻いた。

スカサハは左手で大きな亀頭を包むように、開いた掌で円を描くように撫でる。右手は陰茎を扱き続けていた。両手を使って肉槍を磨くように扱いていくと雄の臭いも更に濃くなり、彼女の鼻も自然とヒクヒクと動いてしまう。

女を興奮させる臭いをスカサハは楽しむ。

彼女の手淫が激しくなるにつれて、左手の掌が大量のカウパー液で濡れてくる。ワザとらしく水音を立てながらマスターに気持ち良い

びゅっ

白濁液というよりも溜まっていたせいも黄ばんだ精液が大量に、スカサハの左手の掌に吐き出された。何度も何度も脈動を繰り返しながら精が吐き出され、陰茎を握っていた右手すらドロドロの精液で汚していく。

部屋中が栗の花にも似た性臭で満たされる。

あまりに雄雄しいマスターの大量射精を目にしたスカサハはウツトリとした表情を浮かべながら、頬に少しだけ付いた精液を舌で舐め取った。濃厚な雄の味と香り共に、血とは比べられない量の魔力が供給される。

スカサハは全てを魅了するような、妖艶な笑みを浮かべて静かに呟いた。

「……………ふふっ♡♡ これは楽しめそうだ♡♡♡」

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―2

興奮からなのか普段より少し声が高くなっているスカサハは、射精したマスターに先程の手淫の感想を尋ねる。

「沢山、射精だな……っ♡♡ ” 儂 の手は気持ち良かったか？♡」

スカサハは一人称を私と儂で使い分けていた。

普段の女王として振舞う時には『私』を使い、素の状態になると『儂』に変わる。

今は一人称が儂に変わっているので、スカサハ自身が素に近い状態で会話をしているのだろう。そんな彼女の問い掛けに、マスターは息を荒くしながら答える。

「はあっ……はあっ……。凄い気持ち良かったです」

「そうかそうか……っ♡♡ 儂は多くの勇士を魅了した影の女王だから当然ではあるが……お主も存外に良い肉槍を携えているではないかっ♡♡♡ あれだけ大量に射精したというのに、今もビクビクと脈打ちながら怒張しておる♡♡」

一分間近い射精をしたばかりであるのに、未だに勃起したままのペニス。

スカサハはぐちゃぐちゃとイヤらしい水音を立てながら、精液塗れの右手で陰茎を扱っていた。マスターの出した大量の精液を、ローションの代わりにしているようだ。

残った左手をまた亀頭の刺激に使うかと思われたが、スカサハはザーメン塗れの左手の掌を自分の顔の近くに持っていくと、スンスンと鼻を鳴らして臭いを嗅ぎ始める。

まるでお粥やシチューのようにドロドロしている精液は、三日の禁欲生活で熟成されたのか黄ばんでいる。栗の花に似た臭いもいつもよりも更に濃くなっており、一嗅ぎ毎に脳が蕩けて酔ってしまう。

スカサハの肉付きが良い太ももの内側に、ガムシロップにも似た愛液が伝う。

「すう——はあっ♡♡ 何て臭いだ……っ♡♡ こんな濃い臭いの精を儂の胎の中に、出すつもりだったのか？♡♡♡」
「ちっ、違います。俺は師匠にそんなこと——う、あっ」

マスターがスカサハの言葉を否定しようとする、彼女が陰茎を握る右手の力を強めた。彼の強靱で女の腕よりも太いペニスでなければ、痛みを感じる程度には強い力であった。

呻き声を上げるマスターに対して、スカサハは強く握ったままペニスを扱き上げる。彼女の表情には嗜虐心にも似た笑みが浮かんでおり、彼に雄の欲望を口にさせようとしていた。

「嘘を吐くなっ♡♡ こんなにチンポを大きくしておいてっ♡♡ 今更、良い子ぶつても遅いであろう……っ♡♡♡ 正直に言え……影の国の女王に精を注ぎたかった♡♡」
「くうっ……ほっ、本当にそんなつもりは——あっ。しっ、師匠のことはっ、もっと大切に……うあっ」

マスターは強い快感に呻きながらも、スカサハに弁解している。しかし、彼女が求めている答えは、自分に男の欲望を向けているというものであった。

自分の想い通りの言葉を言わないマスターに対して、絶対に言わせやるとスカサハが意地になる。手淫の速度を速くしながら、彼の肩口に歯形が残る程度に噛み付く。

「——はあっ♡♡ お主が素直になるまで、儂が泣くまで搾ってやろう……っ♡♡♡」

「ま——っ。しっ、師匠っ……う、う」

それはある種の独占欲のような物であり、絶対にマスターの欲望を吐露させると言う宣戦布告でもある。数多の勇士を魅了した女王として、絶対にマスターを籠絡するつもりであった。

単純にケルトの戦士特有の負けず嫌いも、多分に含まれているだろう。

スカサハは乱暴な手淫のように見えて、痛みが無いギリギリの力加減で快感だけを与えている。ローションの代わりの精液のお陰で滑りが良いこともあり、マスターが感じている快感は想像以上のものがあった。

普通の人生であればお目にかかることすら出来ない美女の手コキとマスターの底なしの精力からくる絶倫によって、本日二度目の射精が近付いていた。

ペニスの力強い脈動を感じて、スカサハも射精が近いことを悟る。

「——っ♡♡ また射精そうなのだな……っ♡♡♡ 儂の手が気持ち良いと、言いながら射精せ♡♡ ……言わなければ射精することを禁ずる♡」

スカサハが本気で言っていることが分かってしまう。

既に我慢の限界であったマスターは、彼女の言う通りの言葉を戸惑いながら口にする。

「——あっ。しっ、師匠の手がっ。気持ち良いです——っ」

「~~~~っ♡♡♡ そうかそうかつ♡♡ 儂の手が気持ち良いのだな……っ♡♡♡ 良いぞ♡♡ 儂のことを思いながら射精してしまえ——っ♡♡♡」

「——ぐっ。射精るっ」

マスターの言葉と共に、大きく膨らんだ亀頭の先端から、勢いよく精液が吐き出される。今回は手による覆いも無いので、手を離してしまい暴れまわるホースのように精液が飛び散った。

嚙下していった。

既に目下の問題であった、魔力供給不足は無くなっている。マスターの精液に含まれている魔力で、スカサハの召喚を維持するだけの魔力の供給が出来ていた。

当初の目的は既に達成されたが、スカサハはまだまだ終わるつもりが無かった。

そして、マスターのペニスも怒張が治まるどころか、更に血流が集まって大きく硬くなっている。禍々しいペニスはスカサハの右手によつて精液が塗り込められており、噎せ返るような雄の濃い精臭を放っていた。

スカサハは乳房を覆っている黒布の留め具を外して、薄い紫色のタイツを破いて零れ落ちそうな程に大きな乳房を露出させた。

手に収まり切らない程に大きいのに、形の崩れていない美しい乳房。

呼吸に合わせてふよふよと揺れており、見るだけでも分かる程の柔らかさ。プツクリ膨らんだ乳輪の中心には、ツンと上を向いたイヤらしい桜色の乳首があった。処女雪のように白い肌の

スカサハの大きく綺麗な乳房を見た、マスターのペニスがビクツと大きく震える。

大きな乳房を両手で抱えるスカサハは、ワザとらしく乳房を揺らす。

乳房の動きに合わせてマスターの視線が揺れているのを楽しみながら、彼女は雄を誘う甘ったるい声を出した。

「お主の視線が熱い……っ♡♡ 儂の乳房はどうだ?♡」

「きつ、綺麗です……」

「ふふふっ……そうだろう、そうだろう♡♡ 今からお主の肉槍を、柔らかな乳房で挟んで扱いてやるっ♡♡♡ どうだ、嬉しいか?♡♡」
「いや……嬉しいですけど。その——うあっ」

未だに迷っているような素振りを見せるマスターのペニスを、大きい

な乳房でスカサハは挟んでしまう。

どこまでもペニスが沈み込んでしまいそうな、柔らかな感触が気持ち良い。しかし、何よりも視覚的な暴力が凄かった。

蕩けた表情をしている美女の処女雪のように白く大きな乳房に、淫水焼けしている禍々しい黒光りしたペニスが挟まれている。大きな乳房でも三分の二程度しか隠れておらず、陰茎の上部や大きく膨らんだ亀頭が露出していた。

いつも凛々しく美しいスカサハが豊満な乳房でペニスを挟んでいる姿は、それだけで射精してしまいそうな程に淫靡である。

間近でペニスを見詰めるスカサハは、ウツトリとした表情を浮かべていた。

自然と鼻腔に入ってきて来る雄の精臭を取り込みながら、熱く湿った息をペニスの裏筋に吹き掛けている。

「お主の熱く燃えるような肉槍が、儂の乳房に挟まれておるぞっ♡♡♡
…:はあっ♡ チンポが大き過ぎるせいで亀頭が出ている…:っ♡♡♡♡ 儂の乳房の中でビクビクと震えて、悦んでいるのが丸分かりだ♡♡♡♡」

スカサハは弾むような声でマスターに語り掛けながら、乳房を両手で左右から挟んで乳圧を強くする。

まるで専用のオナホであるかのように、ペニスの形に合わせて乳房が形を変えていた。

吸いつくような感触に加えて精液がローションの代わりとなっており、まるで人肌に温かいゲルにペニスを挿入しているかのようなのだ。

スカサハは直ぐに乳房を上下に動かしたりはせず、左右から挟む力に強弱をつけて遊ぶ。

『タップンっ♡♡♡ タプンっ♡♡♡』と乳房が揺れ動き、ペニスを優しくマッサージしている。これはマスターの怒張するペニスに対して、今から柔らかおっぱいでズリズリ扱いて射精させると挨拶しているのだ。

「今からお主の肉槍をつ♡♡ 儂の乳房で磨いてやる…♡♡♡♡」

大きな乳房を両腕で抱えるように挟み、上下に動かすことでパイズリを開始した。

太ももや下腹部に下乳がぶつかるタップ♡♡ タプ♡♡♡という肉同士が軽くぶつかる音と共に、精液塗れのペニスと乳房が擦れるイヤらしい水音が鳴る。

ずちゅっ♡♡ じゅちゅっ♡♡♡♡ ずちゅっ♡♡♡

「ほれっ♡♡ —ほれっ♡♡ どうだっ♡♡ 気持ち良いだろう？♡♡♡♡」

「師匠のおっぱいっ…♡♡ やわらかくてっ。きっ、気持ち良い…♡♡ですっ」

「~~~~~♡♡♡♡ それならばもっと気持ち良くしてやろうっ♡♡♡」

マスターに気持ち良いと言われて、更に機嫌を良くするスカサハ。彼女は乳房をギョツと抱き締める両腕の力を強くして、より乳房を激しく上下に動かす。

下乳が太ももに当たる音がタップ♡♡ タプ♡♡♡から、より大きなタップンっ♡♡♡ タップンっ♡♡♡という音に変わる。ペニスを乳房で擦る水音も、先程よりも更に大きくなった。

じゅちゅっ♡♡♡ ずちゅんっ♡♡ じゅちゅっ♡♡♡

先程までも十分に気持ち良かったが、更に強まった乳圧で乳房がペニスに密着する。ペニスへの快感はさらに強まり、亀頭の先端からは先走りの汁がトプトプと流れていた。

目の前で亀頭から先走り汁が流れる光景を目にして、スカサハは我慢が出来なくなる。

彼女はプルンとした艶のある瑞々しい唇を亀頭の先端に触れ合わせて、じゅるじゅると水音を立てながらカウパー液を啜った。啜り終

わった後もスベスベの頬で、亀頭にズリズリと頬ずりをする。

スカサハはパイズリ続けながら、亀頭に口付けや頬ずりなどの愛撫をした。

「——じゅるるっ♡♡♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡♡♡ はあっ♡♡♡♡♡…先走りまで溢れさせてっ♡♡♡♡♡ ちゅぷっ…♡♡♡♡♡ ちゅるるっ♡♡♡♡♡ 全く堪え性の無いチンポだっ♡♡♡♡♡ ——ちゅっ♡♡♡♡♡ これは修業が必要だな…♡♡♡♡♡ れろ——お♡♡♡♡♡ ちゅぢゅっ♡♡♡♡♡ ちゅっ♡♡♡♡♡ 儂の身体でじっくりと鍛えてやるっ♡♡♡♡♡ ちゅぷっ——」
「しっ、師匠っ。射精そうっ…♡♡♡♡♡ですっ」

乳房の間に挟まれるペニスがビクビクと震えて、元から大きな亀頭が更に膨らむ。パイズリの間に大量に生産された、精液でずっしりと重たい睾丸が持ち上がる。

「儂の乳擦りでイキそうかつ♡♡♡♡♡ ちゅるっ♡♡♡♡♡ ちゅっ♡♡♡♡♡ 好きなだけ射精してよいぞっ♡♡♡♡♡ ちゅっ…♡♡♡♡♡ じゅるる——っ」

乳房をギュッと抱きしめながら、亀頭の先端にスカサハは吸い付いた。

亀頭への愛撫が切っ掛けとなり、睾丸から大量の精液がせり上がってきた。

腰を少し浮かせながら、マスターは射精することを告げる。

「——でっ、射精ますっ！——」
「じゅるるっ♡♡♡♡♡ ぶはっ♡♡♡♡♡ 射精せ——っ」
——びゅっ♡♡♡♡♡ びゅっ♡♡♡♡♡ びゅるるっ♡♡♡♡♡ ぶ
びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ ぶ
♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ ぶ
♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ ぶ
びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ ぶ
びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ びゅるるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡ ぶ

スカサハの顔を目掛けて、大量の精が発射された。大量のお粥のような精液を、スカサハは悦んで受け止める。

前髪や額、開いた口の中を大量の精が汚していく。形の良い顎先から滴り落ちた精液が、胸元にもボトボトと落ちる。

部屋に充満している精の臭いが、更に濃くなった。

口内に入った精液のぷりぷりとした触感と噎せ返るような精臭を愉しみながら、スカサハはゆっくりと精液を嚥下していく。彼女は興奮から大量の愛液を秘所から溢れさせてタイツや黒布の吸収が追いつかず、ベッドのシーツにシミを作り出す。

「じゅるっ♡♡ んぐっ♡♡………んぐっ♡♡ ——ぷはあっ♡♡
♡ お主は儂の顔や乳を孕ませるつもりか……っ♡♡♡ ぢゅるるっ♡♡ このように濃い精を、大量に吐き出しおって♡♡ んぐっ♡♡♡ これでは洗っても臭いが取れん………っ♡♡♡ じゅるっ♡♡」

すっかりマスターの精液が好きになっっているスカサハは、上半身やペニスに付着している精液を舐め取っている。口では文句を言っているが、声色は嬉々としていた。

マスターは荒い息を吐きながら、スカサハに謝罪する。

「はあっ………はあっ。すっ、すみません………気持ち良すぎて」

「ちゅぷっ♡♡ 殊勝に謝ってはいるが……っ♡♡ ——はあっ♡♡ お主の肉槍はまだまだ足りぬと、そそり立ったままだぞ♡♡♡ ぢゅるるっ………んぐっ♡♡ 呆れた精力だっ♡♡♡ 相当、儂の乳擦りが気に入ったか？♡♡♡」

「師匠のパイズリは凄い気持ち良かったです。確かにもっとして欲しい位ですけど——っ」

マスターの言葉を遮るように、スカサハがパイズリを再開してしま

う。

彼のもつとして欲しいという言葉で、女としてのスイッチが入ってしまったようだ。

先程の射精で追加されたザーメンローションで滑りが良くなった乳擦りは、マスターが言葉を続けられなくなる程に気持ちが良い。射精したばかりの亀頭を舌でレロレロと舐め回しながら、スカサハは興奮を隠し切れない様子で宣言する。

「ぢゅるるるっ♡♡♡ ぢゅぶっ♡♡ れろ——おっ♡♡♡ 今日はお主の肉槍から何も出なくなるまでっ♡♡♡ ちゅっ♡♡ 儂の乳房で絞り尽くしてやる♡♡♡ —— 覚悟せよ♡♡♡」
「まっ——」

マスターの制止を全く聞かずに、スカサハは乳擦りでの精液搾りを始めてしまう。

「ちゅぶっ♡♡♡ 儂の乳房の虜にしてやる……っ♡♡♡♡♡」

スカサハは知らなかった。

性豪で知られる英雄に並ぶかそれ以上の精力を、マスターが有していることを——

小屋の外は既に日が昇っていた。

眩しい位の太陽の光が差し、潮風が木々を優しく揺らしている。清々しい朝と表現するのに、ピッタリな天気であった。

肝心なスカサハとマスターがいる、小屋の中はと言えば……

「ぢゆるるっ♡♡♡ はあっ♡……はあっ♡ げふう………っ♡♡
♡♡ どれだけ射精せば気が済むのだっ♡♡♡♡♡ んぶっ♡♡♡
——んゲえええくくくっ♡♡♡♡♡ ゲフっ♡♡♡♡」

口から精液の臭いのする下品なおくびを出すスカサハは、マスターの絶倫具合に内心で慄いていた。

（絶倫が過ぎるぞっ♡♡♡ これでは……精液の味と臭いを、儂が覚えさせられただけでは無いかっ♡♡ んぐっ♡………おくびが止まらんっ♡♡）

一晩中ずつとパイズリと亀頭のエラチオを行い二十回以上は射精させたと言うのに、マスターのペニスは一向に萎える気配さえありはしない。寧ろ射精を繰り返す度に、よりペニスの硬度が増しているのをスカサハは感じていた。

スカサハの全身がお粥のような濃厚精液に塗れており、胃の中にも大量の精が溜まっていた。

先程の下品なゲップも、胃の中に溜まっている精液が放つ濃い精臭。それによって発生したガスが、思わず口から出てしまったものである。

マスターの精液の味と臭いを完全に憶えさせられ、ある種の中毒にされてしまっている。

スカサハはまだ気付いていないが、この島からカルデアに戻った後も彼の濃厚な精が忘れられずに、下腹部が疼いてしまう。最初は我慢できたとしても、必ずマスターの精を強請りに来ることが決まっていた。

既に勝負でいえば負けているのだが、スカサハは強がりながらマスターに言った。

「げええくくっ♡♡♡ こっ、今回は時間切れで引き分けとするっ♡♡♡ ……んぶうっ♡♡ 今夜で決着をつけるぞっ♡♡ ——ゲ

フっ♡♡♡ 分かったな……っ♡♡♡」

スカサハは自身が負けることを、心の奥底では理解していたのかもしれない。彼女のお尻の下のシーツには、大きな水溜りが出来ていた。

——そして、カルデアからの連絡も無いまま時間は過ぎていき、スカサハにとって忘れられない日となる四日目の夜が来た。

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―3

人工的な光の無い孤島の夜は、一寸先も見えない程に真つ暗である。

マスターとスカサハが寝泊まりしている掘っ立て小屋も、古めかしいランタンの灯りと窓から入って来る月明りだけが光源となって、部屋全体を淡く照らしている。

ベッドの手前でお互いに向かい合っているマスターとスカサハ。

月光に照らされるスカサハは、本当の女神であるかのように幻想的で美しい。そんな彼女の姿を真正面から見るマスターは、無意識の内にゴクリと生唾を呑み込む。

スカサハのパイズリをマスターは思い出して、自然と股間に血流が集まってしまう。

半日近く精液を搾られ続けたのだが、まだまだ余裕であることを示すかのように勃起したペニスに、インナーを力強く押し上げていた。

木造で作られた部屋の中には、未だに雄の精臭が残っている。

日中に窓を開けて何度も換気をしたのだが、それでも部屋に染み付いてしまっているようだ。

その雄の臭いを敏感に感じ取っていたスカサハの肉体は、自分の意思に関わらず反応してしまう。タイツと黒布に隠された淫肉の割れ目から、ジワリと愛蜜が滲んでいた。頬も微かに紅潮しており、性的に興奮していることは間違いないかった。

自然と二人の顔が近付いていく。

あと少しで唇同士が触れ合いそうになったその時、マスターがスカサハの肩を押さえた。彼は自分でも勿体無いことをしていると分かっているが、この蕩けるように甘い秘め事を止めようと切り出す。

「……師匠。やっぱり止めましょう」

「お主が頑なに拒む理由は何だ？ 儂に魅力を感じていない訳では無いだろう」

不満気な表情を浮かべるスカサハに対して、建前を取っ払った本音をマスターは話す。彼女の紅玉のような瞳を、しつかりと見詰めている。

「……師匠は凄い綺麗です。戦闘でもずつと頼りになって、本当に尊敬してます。」

俺だって出来ることなら、師匠とエッチなことがしたいです」

「ならばそうすればよい。俺はお主を受け入れよう……っ♡」

思っていた以上に自分のことを好意的に思ってくれていたマスターに、スカサハは言い表せない喜びを感じていた。それならセックスをすることに、何も問題が無いと彼女は考える。

しかし、マスターは頭を左右に振った。

「——俺は師匠には幸せになって貰いたいから、こんな体だけの関係はしたくない……」

「……………はあ？」

「二か月くらい前に師匠が死を求めているって話を聞いて、本当は悲しかったんです。」

死ねない師匠の苦しみも何も分からないですけど、俺は生きていて欲しいって……きつと我儘ですよね」

「——それはっ」

スカサハは震える声を何とか絞り出す。

自分がどんな表情をしているのかさえ、今の彼女には分からなかった。

死を望んでいることをスカサハが話して以降。

彼女におすすめの本を紹介したり、一緒に料理を作ろうと誘っていた。それはスカサハが生きることも悪くないと思える切っ掛けになればと、マスターなりに行動していたものだったのだろう。

そのことにスカサハは気が付く。

「……っ。だから儂にあのようなことを……」

自分の幸福をマスターが本当に想ってくれていることが分かる。影の女王や半神としては無く、人間としてのスカサハがどうしようもなく喜んでしまう。そんな自分の心情を自覚して、彼女の胸の鼓動はドキドキと高鳴っていた。

（~~~~っ♡♡ これでは儂がただの小娘では無いか……っ♡♡）

スカサハが生前から好む男らしい勇士とはまた違っているが、自分のことを大切にしてくれるマスターのことを心から愛おしいと思ってしまう。

自分の肩を掴んで押さえようとしているマスターの首に両腕を回して、スカサハは強引に身体を近付けて彼の唇を奪う。目を見開いて驚くマスターが彼女を止めようとするが、幾ら鍛えていると言っても人間とサーヴァントでは力の差があり過ぎて、振り解くことも出来ない。

スカサハのプルンとした瑞々しい唇の感触に抗えず、マスターもその口付けを受け入れてしまう。

実際の時間では一分未満であったが、マスターにはもっと長く感じられた唇が離される。頬を赤く染めているスカサハが、彼の耳元で甘い声色を出しながら囁いた。

「……はあっ♡ 儂を幸せにしたいと本当に思っているのならば、お主が愛してみせよ……っ♡♡♡」

「本当に言ってるんですか」

「ふふっ♡♡ 儂が生きたいと思える位に……な？♡♡ ——んむっ!?!♡♡」

スカサハの唇をマスターが奪う。

最初は驚いていた彼女だったが、直ぐに嬉しそうに受け入れた。

今までとは違って積極的になっているマスターは、スカサハの唇を貪るような口付けをする。自然と唇が開かれ、舌同士が絡み合うようになってしまう。

お互いの内頬や歯茎を舐め合い、口内に溢れる唾液を交換し合う。絡め合う舌の上で唾液を混ぜっこして、泡立った唾液の混合液を半分に分け合いながら飲み下す。

情熱的なディープキス。

どちらも引かない交互に攻め合うようなキスに次第に夢中になってしまう。口端から唾液が零れて形の良い顎先に伝い、スカサハの豊かな乳房の上部分に落ちていく。

「——じゅるっ♡♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅぢゅっ♡♡♡ んぐっ……ぷはっ♡♡♡ はあっ♡♡♡………はあっ♡♡♡……お主がこんなにも情熱的な口付けが出来るとは……っ♡♡♡ んむ——っ♡♡♡ ちゅぶっ♡♡♡ じゅるるっ♡♡♡」

マスターはスカサハの後頭部を片手で押さえて、直ぐにまた貪るようなキスを再開する。

今までと立場が変わってしまったような状況に、スカサハは反撃しなければと考えるが。しかし、マスターとのキスに思考が絡め取られてしまい、次第にされるがままになっていった。

スカサハにとって誤算だったのは、本気になったマスターの性愛に關する技量だろう。

相手を気持ち良くするためのテクニクが並外れており、何より心から相手を愛して求めるため拒み辛いのだ。キス一つで数々の勇士と浮世を流した影の国の女王が、彼の手玉に取られていた。

気付けばスカサハの内腿は、秘所から零れた愛蜜でびちゃびちゃに濡れてしまう。悩まし気に腰をくねらせながら、内腿同士を擦り合わせている。明らかに口付けだけで性的な快感を得ていた。

ただの口付けだけで感じている自分に困惑しつつ、自分はとんでもない相手を本気にさせてしまったのではかと思いつつ、自分もそんな僅かにあつた危機感もマスターとのキスの気持ち良さによって、川の上に浮かぶ木の葉のように押し流されていく。

(~~~~っ♡♡♡、これは不味いやもしれ……ぬっ♡♡♡)

——三十分以上の間、口付けは続いた。

マスターが唇をゆつくりと離れた頃には、スカサハの表情が蕩けていた。

目尻はだらしなく下がり、朱色の瞳は潤んでいる。紅潮した頬は汗ばんでおり、彼女の赤にも紫にも見える美しい髪が数本だけ頬に張り付いていた。瑞々しい唇の端から唾液が垂れており、口の周りは唾液に濡れている。

それは、女王の威厳や半神としての矜持も無い、ただの快樂に蕩けきった女の顔だった。

他人には見せられない表情をするスカサハの耳元で、マスターは優しい声色で囁く。

「……………好きです」

「~~~~~あっ♡♡♡ やっ、やめよっ♡♡」

「愛してます。師匠を幸せにさせて下さい」

「ひい——っ♡♡♡ ……………あうっ♡♡♡」

マスターの告白に、スカサハの身体が反応してしまう。

引き締まったお腹がビクビクと震える程に、子宮がビクビクと疼く。お腹の震えに合わせて愛液がびゅっ♡♡ ぴゅっ♡♡と噴き出す。膝が左右にガクガクと揺れる。

（——身体が変だっ♡♡ こっ、これでは本当に男に手玉に取られる、ただの小娘では無いか…………っ♡♡♡ それはいかんっ♡♡ 儂は影の国の女王にして、神すら殺した者だっ♡ 幾らマスターが愛おしくとも、儂の方が立場が上でなくてはならないっ♡♡♡）

女王としての矜持がスカサハを奮い立たせた。

マスターに愛されることは嬉しいが、彼に手玉に取られているのは我慢ならなかったのだ。スカサハは昨夜と同じように、自分が精を搾るような立場に戻ろうと考える。

しかし、マスターの方が行動が早かった。

自分のペニスを挟み込んで気持ち良くしてくれた、スカサハの豊満な乳房に両手で触れた。衣装の上からでも分かってしまう、マシユマ口のように柔らかな肉鞠に合計十本の指を沈める。

十本の指がそれぞれ意思を持っているかのように、自由自在に乳房を揉みしだいていく。大胆にググニと揉んでいるが、スカサハが痛みを感じるような乱暴な動きでは無い。

服越しにピンと勃っている乳首を掌で擦られる度に、スカサハが甘ったるい嬌声を上げる。

「——あっ♡♡♡んあ♡♡ 何をしておるっ♡♡♡ ふあ——っ♡♡♡
ああっ♡♡ 儂は乳を揉んで良いとはっ♡♡♡♡♡んんっ♡♡♡ 一言
もお♡♡♡♡♡んひいい——っ♡♡♡」

「師匠のおっぱい、服の上からでも柔らかいです。——服、破いても良いですか?」

「だっ、駄目に決まって……んあっ♡♡♡♡♡ いるだ——ろうっ♡♡♡
ああっ♡♡ 早く……手をつ♡♡♡♡♡ はあっ♡♡ ……離せえっ♡♡♡
はうっ♡♡ ——んむっ♡♡♡♡♡」

スカサハの拒否の言葉は、マスターによつて物理的に塞がれた。

好き勝手に胸を揉みしだかれながら、口内を舌と唇で蹂躪される。喘ぎ声を出すことも出来ずに、脳を蕩けさせられる。太ももに勃起したペニスを押し付けられて、雄を意識させられてしまう。

数分後、唇を離れたマスターが、先程と同じ質問をする。

「はあっ……服、破つても良いですか?」
「はあっ♡♡………はあっ♡♡………はあっ♡♡ ダメ……だっ♡♡♡♡♡ 儂
は……影の国のっ♡♡♡ 女王だ……っ♡♡♡♡♡ 分かつて——ん
むっ♡♡♡♡♡♡ じゅるっ♡♡♡ ちゅっ♡♡ ぢゅぢゅっ♡♡♡ じゅる
る——っ」

(儂が良いと言うまでっ♡♡♡ 繰り返すつもりだ……っ♡♡♡♡♡ この

結果的に恨み節を言うスカサハの話が殆ど入って来ない程に、マスターは大きな乳房を揉みしだくことに集中していた。

スカサハは話を聞いていないマスターに本当は怒りたかったが、じわりと乳房に溜まっていくような快感がそれを邪魔した。タイツ越しで揉まれるのと、直接揉まれる感覚は違っている。相手の体温が直に感じてしまい、これまでより優しい揉み方でも十分に気持ち良かった。

マスターはタイツの中で蒸れた、スカサハの汗ばむ乳房の先端を指で触れる。

「いひい——っ♡♡」

普段のスカサハの落ち着いた声からは、想像も出来ない甲高い嬌声を上げた。

乳首から電流が流れたような快感が走る。

何度も乳首で絶頂した後で敏感になっっているのに、直で触られることが合わさって異常に感じてしまっていた。彼女の様子を見ていたにも関わらず、マスターは先程と同じように乳首を親指と中指で挟み、人差し指で乳首の先端をカリカリと引つ搔いた。

「~~~~~っ♡♡♡♡♡ イクっ♡♡ イクっ♡♡
イクイク イクイク イクっ♡♡♡♡ イくっ♡♡
———
—ああ あああ ああ ああ ああ ああ っっっ♡♡♡♡♡」

外にも響くような絶叫のような嬌声をスカサハは上げる。

今日一番の絶頂を与えられ、背中と首を弓のように反らす。内股のままお尻を上下にカクカクと揺らし、尿道口から大量の潮を吹いた。彼女の眼の前は、光が埋め尽くして何も見えなくなる。脳髓を焼くような快感に思考が完全に停止していた。

暫くオーガズムで震えていたスカサハだったが、脚に入れていた力を含めた全身の力が抜けてしまう。自分の愛液や潮で出来た液溜ま

りに、女性らしい丸みを帯びたお尻からストンと落ちてしまった。
スカサハの背中と膝裏を両手で抱えて、マスターは彼女を持ち上げる。

俗に言うお姫様抱っこと、呼ばれるものであった。快感の余韻でビクビクと震えているスカサハをベッドの上に載せて、彼女が回復するまで指通りの良い長髪を手櫛で優しく梳く。

意識が遠のいている状態で荒い呼吸をするスカサハは、マスターに髪を触られることを心地良く思っていた。

(~~~~~っ♡♡♡ 絶対に後でマスターの精を搾ってくれる……っ♡♡♡♡ 儂の方が絶対に上であることを、分らせてくれるっ♡♡♡……)

未だにマスターより自分が上だと思っているスカサハは、回復した後により返すことを誓いながら意識を落とすのだった。

——スカサハが意識を取り戻したのは、二時間後のことだった。

自分が起きたことに気が付いていないマスターを、ベッドに押し倒したスカサハは彼の上に跨った。自身で秘所の部分の黒布を外し、タイツをビリビリと破りながらマスターに語り掛ける。

「ふふふっ♡♡♡ 油断したなマスター……っ♡♡♡ 散々、儂の身体を弄った仕返しだっ♡ これからお主の肉槍を儂の蜜壺で搾り尽くしてくれる……っ♡♡♡」

しとどに濡れた秘所。

小陰唇を右手でピースをするように開きながら、左手で露出させたマスターのペニスを挿入しやすいように握る。愛液を亀頭に垂らしながら、スカサハは妖艶な笑みを浮かべた。

「——覚悟せよっ♡♡♡ 儂が上だと分らせてくれる……っ♡

♡♡♡
└

——ぬちや♡♡♡

スカサハは膾口に亀頭を当て、腰をゆっくりと落としていった。

番外編：影の国の女王は死よりも生を望んだ―4

「――― 覚悟せよっ♡♡♡ 儂が上だと分からせてくれる…っ♡♡♡」

仰向けに押し倒されたマスターの腰上に、ガニ股の体勢でスカサハが跨っていた。

彼女は女の細腕よりも太く長いペニスの先端に、自らの濡れそぼった膣口を触れ合わせた。どれだけ膣口が愛蜜で濡れていようとこの小さな縦孔に、まるで拳のように大きく膨らんでいる亀頭が挿入出来るのか不安になる。

スカサハも自分の真下にある、禍々しいペニスの存在感を感じ取っていた。自分が喰らう側である筈なのに、貪られてしまうと第六感が警鐘を鳴らしている。彼女は弱気になってしまいそうな気持ちを心の中から追い出す。

（わっ、儂は影の国の女王にして、神をも殺した存在…っ♡♡♡ たかが儂の腕よりも太く、鳩尾まで届くであろう長さの肉槍如きに♡♡♡ ―― 遅れを取ったりはしないっ♡♡♡）

自分を鼓舞したスカサハは、自分から腰を少しずつ落としていく。ぬぷぷっ♡♡、ずぷっ♡と卑猥な音と共にマスターのペニスが、彼女の蜜壺に埋没していった。

スカサハは自分の膣がギリギリまで広がっていく感覚と共に、内臓が圧迫されるような苦しさを彼女は久しぶりに体感していた。永劫にも等しい時を独りで過ごしてきたスカサハにとって、雄を受け入れるのは本当に久しぶりのことであったのだ。

快感以外の圧迫感や苦しきなどの様々な感覚に、スカサハはペニスが子宮に向かって奥に進む度に嬌声を上げてしまう。

「ふうっ♡♡ ……うあっ♡♡♡ ―― あぐっ♡♡♡ ンっ♡♡♡ あうっ♡♡♡ ……んっ♡♡♡♡♡」

膣肉や膣壁を硬い亀頭が搔き分ける。

ペニスと膣口の隙間からは、声を抑えきれない快感と膣を守ろうとする防御本能で愛蜜がコブコブと溢れて流れていく。睾丸や太ももがスカサハの体液で濡れてしまう。

三分の二程度ペニスが挿入された所で、亀頭の先端に柔らかい膣肉や壁の凸凹とした感触とは違うコリコリと少し硬い感触がした。それは女の一番大切な小部屋の入り口である。

「——ああっ♡♡♡ 奥に当たって……おるう♡♡ ——んひい♡♡♡」

亀頭の先端が子宮口に触れる度に、スカサハは甲高い嬌声を上げる。

なまじ豊富な経験があるだけに、肉体がしっかりと快楽を感じ取れてしまう。錆び付いていた女や雌としての本能が、子宮が感じる度に呼び起されていく。

未だにマスターの太ももや下腹部に、スカサハの丸みを帯びたお尻が当たっていない。

そのことに彼女も気付いている。奥まで受け入れるためには子宮口を亀頭を密着した状態で、子宮を持ち上げられる以外に方法は無かった。

（——いひっ♡♡♡ 思った以上に感度がよい……っ♡♡♡ しかし、マスターの上で情けなく腰を振る騎乗位など……そんなことすれば儂の立場が無いっ♡♡♡ はうっ♡ 絶対にもう精を出せないですと、根を上げさせねばならぬ……っ♡♡♡♡）

開いた口から舌を伸ばして感じ入っているスカサハは、亀頭に子宮口をゴリゴリと押されながら腰を更に落としていく。子宮口と亀頭が完全に隙間なく密着する。ペニスを求めて膣口の方へと下りてきていた子宮が、ぐぐぐっ♡♡♡と持ち上げられてしまう。

「ふうううううううう——っ♡♡♡ すっ、少し肉槍が太く

長いだけでえっ♡♡♡ あうっ♡♡♡ 生意気であろう……っ♡♡
♡♡ おぐっ♡♡♡ ふうっ♡………ふうっ♡♡………ひいっ♡
♡ 儂の中で……しっ、搾り尽くしてくれるっ♡♡♡ ふんっ、
ひいひいひいっ……っ♡♡♡♡♡」

両手をマスターの胸板に突きながら、スカサハは腰をゆっくりと落としていく。

これまでの膣肉や膣壁を搔き分けられる感覚と、子宮口をゴリゴリされながら柱のような頼りがいのあるペニスで子宮が持ち上げられる感覚は全く違う。甘く痺れるような快感が止まらないのだ。スカサハの意思を無視して子宮が悦んでしまい、快感が彼女の全身を包み込んでいく。

下から見上げるマスターには、だらしなく蕩けたスカサハの顔が見放題である。

普段の表情の変化に乏しい凜々しい相貌が今は見る影もない。娼婦でももう少し上品な顔をするだろうと思える程に、淫らでイヤらしい表情をしていた。

自分だけが見れるスカサハの表情に、マスターのペニスは更に大きく怒張ってしまう。自分の膣内でペニスが膨らむ感覚に、彼女は首を仰げ反らせて感じることにしか出来ない。

「……いっひいひいひいっ♡♡♡ はぁーっ♡♡♡
はぁーっ♡♡♡ まっ、まだ大きくするつもりかっ♡♡♡ ふうっ♡
ふうっ♡♡♡ もう許してやらんっ♡♡♡ ひっ、一息で儂の蜜壺に完全に収めてくれるう♡♡♡♡♡ ふうっ♡
ふうっ♡♡♡……ふんっ♡♡♡」

——ぱちゅっ!!!

「~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡ おほあ——っ♡♡」

愛液で濡れた肉同士がぶつかる、破裂音と水音の中間のような音がする。

深呼吸をして息を整えたスカサハは、本当に尻タブをマスターの腰に叩き付けたのだ。

逃げ場の無くなった子宮が、グニゅっ♡♡♡と押し潰される。彼女は彼の腹筋に潮をぷしゅっ♡♡♡と吹き掛けながら、背中と首を限界まで反らせた。

スカサハは軽くではあるが、子宮での絶頂を味わっていた。

背中を反らせた状態でビクっ♡♡♡と、瀕死の虫のように全身を震わせている。嬌声を上げていないのは、彼女の女王としての意地だろうか。

子宮での絶頂はポルチオ絶頂と呼ばれる。

乳房やクリトリスでの絶頂と、子宮での絶頂はまた違うのだ。他の部位での絶頂が鋭い槍による一撃のようなものであるとすれば、子宮での絶頂は重石で全身を少しずつ押し潰されるようなものである。

絶頂した状態からスカサハは戻ってこれない。

(————イクっ♡♡♡ イクうっ♡♡♡ 子宮が肉槍で潰されておるっ♡♡♡ 絶頂から戻ってこれないっ♡♡♡ しっ、子宮口に龟头が食い込んでえ……っ♡♡♡ イグ————っ♡♡♡)

全身の震えに合わせて、スカサハの豊かな乳房がゆさゆさと揺れる。

マスターは彼女の淫靡な姿とキュっ♡♡♡ キュっ♡♡♡と膣が締まる感触を楽しみながら、スカサハが絶頂から戻ってくるのを待っていた。

暫くしてスカサハが、ポルチオアクメから戻ってきた。

彼女は快感で蕩けた朱色の瞳で、マスターを見詰めている。肩を下にさせながら荒い呼吸をして、熱っぽい吐息を吐いていた。

スカサハはマスターの鍛えられた胸板に両手を突いて、本格的なセックスを始めようとする。

「いつ、今からお主の精を昨夜と同じように、僕の蜜壺で搾り取ってくれる……っ♡♡♡ はあっ♡♡♡ はあっ♡♡♡ 絶対に泣いても許してやらぬぞ——っ♡♡♡♡」

腰をゆつくりと上げるスカサハ。

半分程度のペニスが外気の露出した瞬間、尻タブを彼の腰に叩き付けた。肉同士がぶつかり合う破裂音と共に、汗ばんだお尻が波打って汗が飛び散る。

ずりゆりゆ……りゆ——♡♡♡ じゅっ……パンっ♡♡♡ ずりゆ……りゆりゆ——♡♡♡ じゅっ……パンっ♡♡♡

「どうだあ……っ♡♡♡ おう——っ♡♡♡ ワシのお……っ♡♡♡ いひい——っ♡♡♡♡」

快感に耐える女の喘ぎ声が、部屋の中には響いていた。

腰を上げればマスター深い雁首で膣壁や膣肉をガリガリと掘削され、腰を落とすと子宮が形を変えるまで押し潰される。何度も絶頂をして準備万端の媚肉から伝わってくる、全身に電流がビリビリと流れるような快感。それを必死に我慢しながらスカサハは腰を振っていた。

殆ど隙間の無い膣口とペニスの間からは、これまで以上に大量の愛蜜が溢れている。

特にスカサハが丸みを帯びたお尻を腰に叩き付けると、果汁タツプリのみかんに穴を空けた時のように愛蜜が噴き出す。

スカサハの膣内で愛蜜がペニスによって攪拌される。

白く泡立った愛液がペニスを満遍なくコーティングしていた。メスのフェロモンがタツプリと含まれた、甘ったるいと感じる愛液の匂いが部屋中に漂う。

全身から汗を掻くスカサハ。

既に自分は限界が近付いており、何とかマスターを射精させようと

深くまで亀頭の膨らんだペニスが、彼女の奥深くまで突き刺さった。

「——射精るっ！」

マスターの叫びと共に射精が始まった。

スカサハの精を求めて飢える子宮の中に、噴水のように大量の精液が注がれ始める。

ぶびゅっ♡ぶびゅっ♡ぶびゅるるるるるるっ♡♡♡ど
ぶっ♡どぶっ♡♡どぶぶぶぶぶぶっ♡♡♡びゅるるるるるる
るるるっ♡びゅくっ……びゅくっ♡♡ぶびゅるるるるっ♡♡
どぶっ……どぶぶぶぶっ♡♡びゅるるるるるるっ♡♡びゅくっ♡♡♡…
びゅっ

「~~~~~
♡♡んっひいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ
いゝいゝいゝ——っっっ♡♡♡♡♡♡♡イいつグううう
ううううううううううううううううううううううううう
♡♡♡♡♡」

島中に響き渡ってしまいそうな嬌声をスカサハは上げる。

全体重をマスターの腰とペニスに持ち上げられており、逃げ場の無くなる程に亀頭と子宮口と密着していた。その状態で子宮の中に直接、大量のお粥のようにドロドロとしている精液が注がれる。

スカサハのお腹が外から見ても分かる程に膨らんでいく。脳髓が焼け付いてしまうような快感。

目を開いていられなくなる程の閃光がスカサハの視界を覆い尽くし、弓のように背を反らした状態でビクっ♡♡♡ビクっ♡♡♡と大きく震えることを繰り返している。尿道口からの体液を噴き出すことが止まらず、彼の下腹部に何度も何度も潮を吹き掛けてしまう。(儂の子袋に濃厚な精が………っ♡♡♡サーヴァントでなければ確実に孕んでいたっ♡♡♡♡)

マスターの放った全ての精液を、全て子宮内で受け止めたスカサハ。

最後に大きく身体を震わせた後に、彼女はマスターの身体にしな垂れ掛かった。深く重たい絶頂の余韻に、意識が微睡んでいる。

——しかし、マスターの精力はまだまだ尽きていない。

スカサハの蜜壺の中でペニスが萎えることが無く、逆に大きく硬くなって怒張っていた。マスターは彼女の耳元で囁いた。

「師匠が動いてくれて、凄い気持ち良かったです。——今度は俺が動きますね」

「~~~~っ♡♡♡ ま………てえ♡♡ 少し休憩を……っ♡♡♡」

弱々しい声でマスターを止めようとするスカサハだったが、先程の絶頂で身体に力が入らない。

スカサハのプリっつと張りのあるお尻を両手で鷺掴みにして、胡坐を掻いた空間に彼女が跨るような体勢にする。俗に言う対面座位と呼ばれるものだ。

マスターにお尻を掴まれているせいで、身体を離すことも出来ない。逆にクリトリスを恥骨に押し付けるように密着させている。彼の胸板にスカサハの大きな乳房が潰れており、この状態で身体を動かせば敏感な乳首が擦れてしまうだろう。子宮をゆさゆさと揺らされながら、クリトリスと乳首が擦れて気持ち良くなってしまいう体勢である。

もう限界であるスカサハは、命乞いのようにマスターに休憩を求めた。

「ふう、ー……っ♡♡♡ ふう、ー……っ♡♡♡ いつ、今は止めよっ♡♡ 後で好きだけ乳擦りをするっ………っ♡♡♡ 乳房も好きだけ触って良いから——っ♡♡♡ 休憩………をっ♡♡」

マスターはスカサハの耳元で囁いた。

「——嫌です。師匠が生きたいって思えるまで、ずっとセックス
します」

「~~~~~♡♡♡♡ 待つて——っ」

——ズンっ♡♡

「——ああんっ♡」

スカサハの制止も一切聞かず、マスターはペニスを突き上げた。

既に亀頭と子宮口が密着した状態であったため、子宮がゆさゆさと大きく揺れる。完全にポルチオアクメを教え込み、彼女の蜜壺を自分専用のペニスケースにする気だった。

一生、マスター以外とのセックスでは満足が出来なくなり、女の幸せで溺れさせるためのセックスを始める。

ズンっ♡♡♡♡ ズンッ♡♡♡♡ ズンッ♡♡♡♡

「あぐっ♡♡♡♡ やめっ♡…♡…やめよお♡♡♡♡ ふあっ♡♡♡♡ しきゅう
揺らすのはんそく♡——っ♡♡♡♡ 乳首と陰核こそすれ♡る♡♡♡♡
イク♡っ♡♡♡♡♡ イ♡っ♡て♡し♡ま♡う♡♡♡♡ ——♡い♡っ♡ひ♡い♡い♡
♡い♡い♡…♡っ♡♡♡♡♡」

完全に余裕の無くなったスカサハは、快樂で舌っ足らずな嬌声を上げてしまう。

騎乗位や後背位のように、激しい動きのセックスでは無い。しかし、全身が密着する幸福感とポルチオ絶頂へと導く、女の心と身体を蕩けさせるセックスであった。

スカサハがどれだけお願いをしても、マスターは腰の動きを止めない。

彼女のお尻をタイトツ越しにパン生地でも捏ねるように揉みしだきながら、子宮をズンズンと突きながらポルチオ絶頂をさせ続ける。

愛を囁き続けた。

小屋の窓から太陽の光が差し込み始めた頃、スカサハは完全に墮ちてしまっていた。

死にたい願望や孤独は完全に消え去っており、マスターの女になることをケルトの戦士にとっては命よりも重いゲツシユを用いて誓っていた。

「——スカサハは永遠に”マスター”の女としてっ♡♡♡ 愛し愛されることを禁誓とする……っ♡♡♡ ……………こっ、これで良いか？♡♡♡」

「うん。”スカサハ”のこと絶対に幸せにするから。——愛してる」

「~~~~~っ♡♡♡ 儂も愛している……んむっ♡♡♡ ちゅう♡♡♡ ちゆるる——っ♡♡♡」

二人っきりの孤島で、彼らは愛を育み合う。

カルデアがマスター及びスカサハを発見したのは、消失から二週間後のことであった。

その間の出来事について、当事者達は何も問題は無かったとカルデアに報告。何事も無かったかのように、特異点攻略が再開された。

一つだけ変わったことがあるとするならば、真夜中にマスターの私室へと訪れるスカサハが目撃されるようになったこと位だろう。

評価者1000人記念 番外編―4 病める氷の皇女
は愛熱に蕩ける

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―1

処女雪のように穢れの無い裸体を晒す美少女がいた。

シミが一つも無い純白の肌を、透き通るような肌と表現することがある。彼女の肌が正しくそれであり、まるで雪の妖精であるかのよう
に美しい。

太もも付け根まで伸びた長髪も肌と同じく真っ白であり、瞳の色と乳首や局部だけ違う色であった。特に桜色のプツクリと膨らんだ乳輪やピンと勃った乳首は、周りの肌が白いからこそ目立っている。男女を問わず、絶対に視線が誘導されてしまうだろう。

美しいだけでなく彼女の肉体は、男好きのする豊満さでイヤらしかった。

大きく実った果実のような乳房。普段はドレスに隠れて見えない、元気な赤ちゃんが産めそうな安産型の大きなお尻。お尻の大きさにも負けない、ムツチリとした肉付きの良い太もも。

男が欲情する要素が詰まっているのに、ウエストはキュツと括れている。乳房が人並みより遥かに大きいのに肩も華奢であり、女が羨む要素もしっかりと兼ね備えていた。

正しく反則のような、魅惑の肉体である。

そんな彼女はアイスブルー色の瞳を涙で潤ませながら、親に置いて行かれた子供のような心寂しい眼で男を見詰めていた。彼の胸板にしな垂れ掛かりながら、少女は震える声で語り掛ける。

「私を罰して――私を壊して。私には……私にはもうっ……マスターしかっ……もういな……い……のっ」

涙を流しながら体を震わせる女を男は強く強く抱きしめた。

心が壊れてしまいそうな彼女を、繋ぎ止める鎖になれるようにと願

いながら。

すすり泣く女の耳元で、男は彼女の名前を呼んだ。

——アナスタシア

”英霊の座”には、時間の概念が存在していない。

そこには人々に信仰された英霊達の魂が記録されており、カルデアの英霊召喚もこの記録が元になっている。

ロシア帝国、最後の皇帝であったニコライ二世の末娘である、”アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァ”もその例外から外れていない。生前、ロシア帝国が保有していた秘蔵精霊である”ヴィイ”と死の間際に契約したことで、魔術師のクラスとして召喚される適性を持っている。

カルデアにも魔術師として、アナスタシアは召喚された。

マイナス100度を軽く下回る絶対零度に等しい冷気を操り、広範囲のあらゆる存在を片っ端から凍らせる程の力を持つ。

彼女が使役するヴィイと呼ばれる、精霊ないし妖怪は厳密には存在していない。

ロシアの文豪であるゴーゴリが執筆した怪奇短編小説『ヴィイ』で登場した想像の産物である。しかし、その全てが虚像と言う訳では無く、ヴィイに似た伝承が東スラヴ神話に幾つも存在しており、それが原型となっていた。

ヴィイはその東スラヴ神話の存在としての、バロールを祖とする魔眼を持つ。

その魔眼であらゆる結界を打破し、時には城塞の弱点すら見つけ出

すことが可能である。

本来のアナスタシアは、史実そのままに召喚された場合、「歴史の闇に呑まれた悲劇の皇女の一人」として、良くても幻霊としての力しか持ち得なかった存在である。しかし、”とある理由”で彼女は上記のように、サーヴァントとして十分過ぎる程の力を保有していた。

……
——この力を持つ”原因”が、アナスタシアの心を蝕んだのだが

他のサーヴァント達と比べてアナスタシアが変わっている点があるとすれば、彼女はマスターと”未来”で縁を作った”フライングで召喚された”存在だったことである。これは英霊の座に時間の概念が存在していないために起こる現象だった。

人理修復の途中で召喚されたアナスタシア。

始めは生前の父が治めていたロマノフ帝国の人民によって、自分を含めた家族や使用人を殺害された過去から、マスターに対しても強い警戒心を見せていた。

自分の使役するヴィイ以外を信用しようとせず、マスターが近寄ることすら許そうとしない。

正しく何者をも凍てつかせる、氷のような態度を取っていた。周囲の者達も態々、見えている地雷に突っ込むような酔狂な真似はしない。アナスタシアは自ら望んで、孤独になっていた。

しかし、マスターはアナスタシアが許してくれる範囲で、彼女との交流を図ろうとする。

近寄ることが出来ないならと、マスターは手紙でのやり取りを試みた。拙いながらも彼女が故郷で使用していたフランス語で手紙を書き、アナスタシア宛てに送ったのだ。

始めは手紙を返す気どころか読むつもりも無かったアナスタシアだったが、内容が気になってしまい中身をチラリと確認する。警戒していた自分が馬鹿らしくなる程に、呆れるほど何気ない日常が綴られているだけだった。

その後もマスターから送られてくる手紙の内容に、大きな変化は無かった。

仲良くして欲しいなど催促するような言葉も無く、季節ごと起きるイベントやこれまでの特異点攻略についてが面白可笑しく書かれていた。アナスタシアがマスターからの手紙を楽しみにするようになるのに、そう時間は掛からなかった。

そして、手紙の中には食堂のおすすめメニューや娯楽になるような暇を潰せる場所、何か困ったときに相談すると助けて貰える英霊などの情報が随所に織り交ぜられていた。それはアナスタシアがカルデアで生活しやすくなるための情報であり、相手には気付かせないようになっているがマスターからの気遣いや優しさが詰まっていた。

そのことに気が付いたアナスタシアは、マスターに絆されてしまう。

彼は自分を騙したりする積もりがなく、生前に彼女が慕った姉達のように優しい人なのだと思っても分かってしまう。

アナスタシアは今までマスターから送られてきた手紙の束を、シワにならないように優しく抱き締める。

これまでの失礼な態度からマスターに謝るべきだと考えたが、素直になれないアナスタシアは顔を伏せながら彼に言った。

『まあ……壁越しに喋るくらいなら、構いませんが』

その言葉を聞いたマスターは、本当に嬉しそうに笑う。

アナスタシアのこれまでの態度を責めたり、謝らせたりすることも無く、ただ『ありがとう』と彼女にお礼を言った。彼女は白い頬を真っ赤に染めながら、コクリと小さく頷いた。

この出来事の後からアナスタシアは、マスターに心を少しずつ開いていく。

『まあ……同じ部屋にいるくらいなら、いいです』

マスターと同じ空間に居たいと思ってしまい、彼を自分の部屋へと招き入れるようになった。

まだ、マスターの目を見ることは出来なかったが、それでも扉越しでは無い会話は、彼の表情の変化や身振り手振りが見れて楽しかった。

少しずつ自分のことを、マスターに話せるようになっていた。

『あらマスター、いらっしやい。ちよつと待ってね、今お茶を入れるから。皇女といっても、末期は自分一人でいろいろとやれるようになっていたのよ』

気付けばマスター専用のカップを用意していた。

彼とのお茶の時間を心待ちにしている自分がおり、アナスタシアは花の咲いたような笑みを浮かべてマスターを部屋へと迎え入れる。自分から話題を出すことも増えた。

マスターの自分と同じ青い瞳を、見詰めることが出来るようになっていた。

本当のアナスタシアは落ち着いた見た目に反して、天真爛漫で悪戯好きである。何事に対しても積極的であり、見た目以上に子供っぽい所が多かった。

マスターの紅茶に砂糖の代わりに塩を入れる悪戯を仕掛けたり、生前に父親のパイプを吸ったことがあると自慢してきたり。まるで悪戯好きの妹のような茶目っ気があった。

実際、アナスタシアには三人の姉がおり、家族への深い愛情を持っている。

世間一般から隔離された環境で育ったことと、幽閉された上で死刑で家族諸共、殺されたからだろうか。楽しそうに家族との温かな記憶をマスターに話しながら、その顔にはどこか影が差していた。

そんなアナスタシアの手を優しく握って、マスターは彼女の家族との思い出をもっと聞かせて欲しいとお願いをする。彼の手の温もりを感じながら、彼女は石を詰めた雪玉を姉にぶつけて昏倒させてし

まっつて大泣きしたことを話した。

——アナスタシアの部屋には、二人分の笑い声が響いた。

『……………掴んだ手を離さないで。私の目の届くところにいて。私の声を聞いたなら、いつでも返事をして。私はもう失いたくないの』

アナスタシアはマスターを家族と同じ位、大切に思うようになっていた。

その手の温もりが恋しくて、彼の姿を見るだけで安心してしまう。自分の悪戯を笑って許してくれるマスターの声が聞きたくて、この幸せをまた失うのが怖くなっていた。

マスターは優しい声色で『大丈夫だよ』と声を掛け、アナスタシアの手を両手で握り、彼女が安心できるまで傍にいる。きつといつかお別れが来ると心の奥底で分かっているながら、彼の言葉と温もりによりアナスタシアは幸せを感じていた。

せめて最後までマスターと共にお願い、この奇跡のような時間を噛み締める。

——そして、死闘の果てに全ての特異点の攻略と魔術王ゲイティアとの決着がついた。

ゲイティアと相打ちする覚悟でソロモンとしての全てを破棄する、第一宝具を使用したロマニ・アーキマンもとい”魔術王ソロモン”だったが。

しかし、ダ・ヴィンチとの間に出来た子供が世界に引き留める楔となり、魔術王ソロモンから完全に切り離されて、”ただのロマニ”として生き残ってしまった。

ゲイティアの攻撃で消滅したかに思われたマシユ・キリエライトも、フオウもとい第四の獣キャスパリーグの助力があり復活。

結果的に終局特異点で行われた、最終決戦で犠牲は無かった。

マーリンとギルガメッシュが腹を抱えて爆笑する、完全無欠のハッピーエンドを迎えたのだ。

その後の亜種特異点の攻略も苦戦をしつつも成し遂げ、カルデアとサーヴァント達の役目も完全に終了。

マスターと契約していたサーヴァント達も英霊の座に退去することになり、本当のお別れがやってくるかに思われたが……

“異聞帯のアナスタシア”がカルデアを氷漬けにした。

アナスタシアがされた理不尽な蹂躪を、異聞帯とは言え自分が行ったのだ。

多くのカルデア職員が殺され、生き残った一部の人間は虚数潜航艇シャドウ・ボーダーを使用して、命からがらの逃走を開始。

唯一カルデアが幸運だったことは、一部の女性サーヴァント達が英霊の座へと退去していなかったことだ。そのお陰で、守られた命が本来の歴史よりも遥かに多かった。

逃げ出した彼らが三か月間の潜伏後に見たのは、白紙化された地球だった。

カルデアが命懸けで守った世界は、約三ヶ月で滅亡してしまった。それと入れ替わるように、異聞帯と呼ばれる違う歴史を辿った世界が地球上の各所に発生したのだ。

奇しくも特異点と同じ七つの世界を破壊するための旅が始まる。

新たに”ゴルドルフ・ムジーク”を所長に据えた新生カルデアが始めに向かったのは、異聞帯のアナスタシアがいるロシアであった。

その世界では平均気温がマイナス100度前後という人がどうあっても生きられない環境であり、異聞帯の王”雷帝”主導の元で人は魔獣との合成種”ヤガ”として生きていた。強くなければ生きられない弱肉強食しかない世界をマスターは駆け抜ける。

異聞帯のアナスタシアやそのマスター”カドック・ゼムルプス”。そして、異聞帯の王であるイヴァン雷帝と死闘を繰り広げた。

多くの悲しみや怒りがあったが、それでも世界を取り戻すためにマ

スター達は勝利を収める。それが一つの世界を終わらせることだと知りながら。

——結果、異聞帯を世界に固定している、空想樹の伐採を達成。

ロシアの異聞帯を破壊した新生カルデアがようやく一息をつける段階になった時、マスターはアナスタシアを再召喚した。このタイミングまで彼女を再召喚しなかったのは、彼が異聞帯のアナスタシアの姿を見せたくなかったからである。

マスターも無駄であるとは分かっていたが、何も知らないままいつもの無邪気なアナスタシアでいて欲しかったのだ。しかし、時として運命は残酷である。アナスタシアは異聞帯の自分の記憶の一部が共有されていた。

アナスタシアはマスターの身体に継りつき、『ごめんなさい』と涙を流しながら謝り続けた。

自分の居場所だと思っていたカルデアを奪った記憶が、アナスタシアに深い深い罪悪感を抱かせている。

あれは異聞帯の自分が行ったことだと頭では理解出来ていたが、同じ自分という存在が親しい人々を手に掛け、あまつさえマスターに悲しい思いをさせてしまったことに、心が悲鳴を上げていた。

アナスタシアは本来ならば英霊となることも出来ない、ただの十七歳で亡くなった少女である。気にせずにいられる程、心の強い存在では無かったのだ。

マスターは泣き継るアナスタシアを抱き締めながら、彼女に『アナスタシアのせいじゃない』と慰め続ける。アナスタシアは、自分が愛した温もりであった筈なのに、今は余計に罪悪感が増していくだけだった。優しい言葉や慰めでは無く、罵倒や怒りをぶつけて貰った方が何倍も気が楽だったのだ。

この罪悪感を晴らすためには、どうしてもマスターからの”罰”が欲しかった。

今の自分がマスターから与えて貰える罰は何かとアナスタシアは

考える。

マスターの深い優しさを知っているからこそ、殴ったり罵倒したりはしてくれない確信があった。それ以外に何が罰になるかを考えに考え抜いた彼女は、一つの答えに辿り着く。

何かを決意したアナスタシアは、目元の涙を拭いながらマスターにあるお願いをする。

「……………いつ、今から……………マスターの部屋につ……………行きたい……………です」

「うん……………今日はゆっくり話そうか」

マスターは快くアナスタシアを部屋へと招く。

彼女の傷付いた心を少しでも癒せるように、一晩中だつて慰めるつもりだった。

二人は無言のまま部屋に入る。

カルデアの私室と比べて、シャドウ・ボーダーの私室は狭かった。そんな違いに気付いただけで、アナスタシアの心はズキズキと痛んでしまう。楽しかったお茶会の記憶ですら、今は心苦しい思い出に変わってしまいそうだった。

「少し待ってて。今、お茶を淹れるから……………」

「……………はい」

マスターはアナスタシアが少しでも落ち着けるようにと、温かいお茶を淹れる準備を始めた。入り口付近に立つ彼女に、背中を見せるような位置取りに自然となる。

アナスタシアは徐に自分の衣服を脱ぎ始めた。

ドレスの留め具を外してストンと足元に落として、身に着けていたショーツなども全て脱いでいく。マスターが布が擦れる音で振り返った時には、既にアナスタシアは全裸だった。

——そうして、場面は冒頭へと戻る。

「私を罰して——私を壊して。私には……私にはもうっ……マスターしかっ……もういな……い……のっ」

涙を流しながら体を震わせるアナスタシアを、マスターは強く強く抱きしめた。

すすり泣く彼女の耳元で、彼が混乱した様子で問い掛ける。

「アナスタシア——どうしてこんな」

「私はっ……罰が欲しい……ですっ。マスターに少しでもっ……自分を壊して……欲しいですっ。でもっ、マスターはやさしいから……私を責めないっ。だからっ、だからっ……せめて私を……女として貪ってっ。あっ、愛情は要らないですっ。ただマスターが気持ち良くなるだけのエッチでっ……私を使って下さいっ」

アナスタシアが考えた罰は、マスターの慰み者になることだった。彼が気持ち良くなるためだけに、自分の体を使って貰おうと考えていたのだ。そうやってマスターからの罰を受けようとしていた。

少女として夢見た男に愛されながら処女を捧げるのでは無く、何の愛情も無くただ肉欲をぶつけるためだけに処女を奪われたかったのだ。

それがきつと罰になると信じていたから。

マスターはどうするべきか迷っていた。

ここで断ればアナスタシアがもつと心を病んでしまうと、漠然とだ

が理解出来ていたからだ。しかし、彼女を物を扱うような慰み者にすることも死んでも御免だった。

悩んだ末にマスターは決断する。

「分かった。今からアナスタシアを抱くね」

「——っ。ありがとうございます……私をこわし——」

アナスタシアの言葉を遮るマスターは、首を左右に振って否定する。

彼女を強く抱きしめて離さないと言外で伝えながら、自分の想いを口にした。

「そんなこと絶対にしないよ。多分、アナスタシアは嫌だと思うけど言うね」

——愛してる

マスターは涙で濡れるアナスタシアの青色の瞳を、見詰めながらハッキリとそう言った。

アナスタシアの心を蝕む氷は、まだ溶けない。

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―2

アナスタシアの青い瞳を見詰めながら、マスターは彼女の耳元で告げた。

「――愛してる」

「――っ!? あっ……ちがっ」

頭を左右に振ってマスターの言葉を否定しようとするが、彼の愛しているという言葉にどうしようもなく胸が高鳴っていた。そんな自分を認めようとせずにマスターから離れようとするが、彼の両手が背中に回されているので逃げる事が出来ない。

寧ろマスターのアナスタシアを抱きしめる力は強くなる一方であり、彼の胸板に彼女の豊かな乳房がぐにゅりと潰れてしまう程に密着してしまう。自分の胸の高鳴りがマスターに伝わってしまいそうで、アナスタシアは抵抗して拘束から逃れようとする。

しかし、マスターはアナスタシアが行動する前に、また彼女の心をかき乱す言葉を紡いだ。アナスタシアの病んでしまった心の奥底にも、しつかりと届くようにと願いながら。

「――好きだよ。大好きだから慰み者になんて、絶対になんて欲しくない」

「やっ、やめて……っ。わた……くしをっ――愛さないでっ。罰を………罰が欲しいのっ……っ」

力なく項垂れるアナスタシアは、嗚咽と共に罰を求める。

マスターの鎖骨部分に頭を預けて、彼女は肩を震わせながら涙を流す。

自分はもう幸せになっちゃいけない存在だと決めつけて、自分の殻の中に閉じ籠ろうとしてしまう。

カルデアに来た最初の頃と同じような状態に戻ろうと、心を凍てつ

かせて何も感じられなくなろうとする。マスターとの温かい思い出も、全て忘れてしまおうとしていた。

そんなアナスタシアの耳を覆うように、マスターは両手で挟むように押さえた。彼女の涙で潤んだ青色の瞳をジッと見詰める。

髪で片目は隠れているがアナスタシアの目には光が宿っておらず、まるで精巧に作られた西洋人形のように見えてしまう。

硝子玉のようなアナスタシアの目を覗き込みながら、マスターは努めて普段通りの声色で話し掛けた。

「俺の目を見て……アナスタシアの目を見せて」

「みっ……見てま……すっ」

「ううん、見てないよ。いつもの宝石みたいに綺麗に輝いてる……俺の好きなアナスタシアの目を見せて」

自分の目を宝石のようで好きだと言われて、アナスタシアの目に一瞬だけ光が戻った。

しかし、いつもと変わらない優しい目をするマスターの視線に耐え切れず、アナスタシアは視線を伏せてしまう。やっと見詰めることが出来るようになった自分と同じ色の彼の瞳が、また見れなくなってしまうていた。そのことに気付いて胸がズキズキと痛んで、呼吸をすることさえ苦しくなる。

アナスタシアはこの時になって、初めてマスターへの恋心を自覚する。

ずっとマスターに対して、新しい家族が出来たように思っていたが、本当はとつくの昔に恋をしていたのだ。この想いにもっと昔に氣付きたかったと後悔を覚えながら、今ではもう叶わない恋だと余計に悲しくなってしまう。

止め処なく涙を流すアナスタシアを見て、マスターは申し訳なさそうに謝った。

彼女が本心から罰して欲しいと願っているのに、それを自分の我儘で愛そうとしているからだ。本当に嫌われてしまうかとも思いなが

ら、それでも彼女の心の傷を分かち合いたかった。

「……………本当にごめん。アナスタシアが望んで無いのは分かっているけど、その苦しみも悲しみも半分だけで良いから貰いたい——
——」

「——んむっ?!♡♡ んっくくくくくっ♡」

目を見開いて驚くアナスタシアは、マスターにファーストキスを奪われる。

自分が望んでいた慰み者がされるようなキスでは無く、初々しい恋人達がするような唇同士を触れ合わせるだけのキスであった。

相手への肉欲をぶつけるようなものではなく、愛情を伝えるようなキスをマスターはする。当然、アナスタシアにも、マスターの愛情が伝わってしまう。

実際に唇が触れ合っていた時間は数秒程度だったが、アナスタシアにとっては数分や数十分のようにも感じられる。ファーストキスの味はレモンの味がすると言うが、彼女が感じたのは自分の涙のしよっぱさだった。初めてのキスに鼻呼吸をして、酸素を確保することも出来ない。

酸欠になっていくアナスタシアの呼吸が出来るように、一度マスターは唇をゆっくりと離す。

「あ——っ♡ あっ」

目を見開くアナスタシアは口をパクパクさせながら、白い頬を今は真っ赤に染めている。

どれだけ心を閉ざそうとしても彼女は、良い意味でも悪い意味でもただの十七歳の初心な少女だった。今もまだ何が起こったのか分からずに、思考が停止してしまっそうになっている。

「——あっ♡ マスターとキスっ。初めて…………でも、優しかったっ」

混乱する頭で自分がキスをしたことを認識した時には、再びマスターが顔を近付けていた。

もつと酷いことをしてと彼に言わなければいけないのに、アナスタシアは反射的に目を瞑ってしまう。それはキスを受け入れる体勢に他ならない。

再びアナスタシアとマスターの唇同士が触れ合う。

唇同士が触れ合った場所が、ジンと熱を持っていくのをアナスタシアは感じていた。相手の鼻息が頬に掛かってこそばゆい。全身を緊張でピクピクと震わせながら、両手の置き場が分からずにマスターの両肩に手を添えている。

最初のキスよりも長い時間、唇同士が重なり合う。

脳が蕩けてしまいそうになり、アナスタシアは思考が良く回らなくなる。この唇の熱に身を任せてしまいそうになっていた時、マスターの上唇と下唇の間から唾液で濡れた舌が伸びてきた。

「~~~~~♡♡んんっ……ちゅっ……ちゅるっ」

アナスタシアは唇を強く結んで拒もうとするが、それよりも早くマスターの舌が彼女の口内に侵入してしまう。彼女は食いしばっている。歯の奥には進めないが、歯茎や内頬は彼の舌によって愛撫される。マスターの舌先が丁寧にアナスタシアの歯茎をマッサージした。想像以上に舌先で歯茎をマッサージされることは気持ちが良い。

粘膜同士の接触は相手の熱がよりダイレクトに感じられるからこそ、”繋がっている”という実感が湧いてくるのだ。

一般的に半径50 cmより近い距離に他人が入って来ると、人は不快感を覚えてしまう。

これはパーソナルスペースとも呼ばれるものである。それよりも近くに人を受け入れられるということは、その人に好意を抱いているということだ。

キスをしっかりと拒めなかった時点で、アナスタシアは好意を隠せていない。

そしてキスには、キスした相手を好きになる効果がある。

赤ちゃんの時に母乳やミルクを口で吸って飲んでいた経験が作用して、生きるための栄養を全て受け入れる口からの快感は、安心感と愛を強く感じてしまうからだ。

唇や口内で感じた快感は、脳の大部分を刺激して快樂ホルモンが活性化される。

男性はキスで性的欲求が高まるのだが、女性は愛情の確認や愛の印としての意味合いで捉える人が多い。アナスタシアも例に洩れず、マスターの愛を感じて蕩けてしまいそうになる。

アナスタシアは次第に不慣れなキスをしながらの鼻呼吸が上手く出来ず、脳に酸素が足りなくなっていた。快樂と幸福感で脳が上手く働かなくなっていくのに合わせて、歯を食いしばっていた力が弱くなっていく。

数分もしない内にアナスタシアは、口を開いてしまう。

マスターは舌先を彼女の口内に侵入させて、怯えるように奥に引込んでいるアナスタシアの舌に触れる。観念したのか彼女がおずおずと舌を伸ばすと、マスターが舌を逃さぬように絡め取った。

「んん——っ♡♡ じゅるるっ♡♡ ぢゅりゅりゅっ♡♡♡
じゅるちゅっ♡♡ ちゅう♡♡」

明らかに手慣れているマスターの舌使いに、アナスタシアは完全に翻弄されてしまう。

舌を引つ込めることも出来なくなってしまう。自分の口内に溜まった唾液を水音と共に啜られ、逆にマスターから唾液を流し込まれてしまう。口端からは？み切れなかった唾液が垂れる。

アナスタシアはこのキスは、自分が駄目になつてしまふと理解する。

しかし、身体を突き放して抵抗したり、口を閉じて拒むことが出来ない。唇からの火傷してしまいそうな熱と、全身を抱き締められる安心感のある温かさに、アナスタシアの身体は溶けてしまいそうだった。

た。

（——駄目っ♡♡　こんなの罰じゃない……のにつ♡）

アナスタシアの全身を、快感と幸福感が包み込んでいた。

恋を自覚してしまったマスターに全身が密着するまで抱きしめられ、舌同士を絡め合う恋人同士がする熱い口付けを交わしている。アナスタシアの目尻から零れる涙が、悲しみから来るものでは無く、幸せから来る涙に変わってしまう。

マスターが二度目の唇を離れた頃には、アナスタシアの顔は蕩けていた。

雪のように白い頬は汗ばんで林檎のように真っ赤に染まっており、酸素を取り込むために開いた口からは舌先が覗いている。目尻と眉尻がだらしなく下がり、青色の瞳は快楽で潤んでいた。

肩で荒い息をするアナスタシアは、この恋人みたいな行為を止めるためにマスターに懇願をする。

「はぁーっ♡♡　はぁーっ♡♡　はぁーっ♡♡　恋人みたいなキスは駄目っ……お願いだからっ………愛さないで。優しくされるとっ………甘えちゃう」

マスターに甘えてしまいそうになる自分を嫌だと思いつつながら、アナスタシア自身ではその幸せを拒めない。だからこそマスターには愛情の無い肉欲だけをぶつけて貰いたい。

しかし、マスターがアナスタシアのお願いを聞くはずも無かった。

親が子供の頭を撫でるような手付きで、アナスタシアの白髪の手を優しく撫でる。マスターは彼女の頬に自分の頬を触れ合わせながら、自分を頼って欲しいと口にした。

「アナスタシアにもっと甘えて欲しい。

………どれだけ辛いのかは、分かっているつもりだから。俺だって

ロシアの異聞帯を壊して……罰が欲しいって気持ちも分かるよ」
「——っ!? あ——っ」

今のマスターの言葉でアナスタシアは気が付いた。

カルデアの人々を殺した記憶のある自分だけが辛いと思っていたが、マスターは異聞帯という世界一つを壊したのだ。それに自分では無いというアナスタシアの言い訳も出来ない、本人が意思を持って手を下していた。

既に自分よりも辛い思いをしているのに、マスターは残り六つの世界を破壊しなくてはいけない。

アナスタシアには想像もつかないような辛い思いを彼はしていた。そして、これからも白紙化された世界が元に戻るまで、マスターは多くの命が生きている異聞帯を破壊しなくてはならないのだ。

(ああ……私よりもマスターの方が辛い思いを……それなのに私は、自分だけが罰を受けて楽になろうと……) (っ)

マスターへの罪悪感が津波のように押し寄せて来る。

全身から血の気が引いていくような感覚がアナスタシアにはあった。真っ青な顔をしながらマスターに謝ろうとする。

「まつ、マスター……ごめんなさいっ。わたくしっ、自分だけが辛いと思っ——っ」

アナスタシアの言葉は途中で途切れてしまう。

彼女の言葉をマスターが遮り、頭を左右に振って違うと伝えたからだ。

「——違わないよ。俺は自分の意思でやったことだから仕方ないけど、アナスタシアは自分ではどうしようも無かったんだから。辛くて当然なんだよ」

「そんな……でも——っ」

マスターの言葉を否定しようとするが、上手く頭が働かず言葉が出て来ない。

伝えたいことはある筈なのに、彼の憂いを帯びた表情を見ると何も口に出来なかった。その表情の奥にどのような感情を抱えているのか、想像することすら出来なかった。

アナスタシアは国を救った聖女や怪物を退治した英雄では無いのだから、今のマスターに掛ける言葉など見付けられるものでは無いだろう。

彼女がもごもごと口ごもっている、マスターが話し掛けてきた。

「アナスタシアは、これからどうしたい？」

「これから……」

「うん……俺はアナスタシアに酷いことなんてしたくない。でも、独りで抱え込んで欲しくもないから……一緒に分け合いたい。辛いのも、悲しいのも、苦しいのも……二人でなら半分になると思うから」

「——半分に？」

マスターの言葉にアナスタシアは、どう返事をしたら良いのか分からなくなってしまう。それは自分が彼に対して、甘えてしまうだけなのではないかと思っただからだ。

迷っているアナスタシアに対してマスターは、自分でも狡いと分かる言い方をお願いをする。彼女の優しさを利用した、悪い男のするよくなお願いであった。

「俺は大好きなアナスタシアに、これからの辛い旅を傍で支えて貰いたい。そうすればどんな辛いことがあったって、大丈夫だと思うから

——嫌かな？」

「~~~~~。ずつ、狡いです。そんなこと言われたら……私が断れないって知ってるの………本当に狡い人っ」

アナスタシアはマスターの胸板に額をグリグリと押し付けながら抗議をした。それから暫く、彼はごめんねと謝りながら、彼女を愛おしむように抱き締め続ける。

この二人のこれからの行為は、所詮は傷の舐め合いだ。

大きな罪と癒えない心の傷を抱えた者同士が、お互いを慰め合う惨めな行為でしかない。しかし、それでも二人が、また前を向いて進み出すためには必要なことだった。

——白紙化された世界の中で、彼らは互いの罪を分かち合う。

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―3

「——あつ♡ いひつ♡………ふう♡ んあつ♡………あつ♡」

女の甘く耳障りの良い嬌声が、その部屋には響いていた。

その声を上げているのは、アナスタシアに他ならない。

ベッドの上に座るマスターを椅子代わりに、アナスタシアが彼の膝上に座っている。

マスターがアナスタシアの肩と首の境目付近に吸い付き、彼女の搦き立てのお餅のような大きな乳房を後ろから揉みしだいていた。彼が合計十本の指に力を込める度に、母性の象徴のような白い果実が形を変えていく。

一般女性と比べて遥かに大きな乳房には、生娘特有の中心に芯があるような独特の感触があった。

その芯をじっくりと解すようにマスターの指が動き、三十分が経った頃にはふわふわのマシュマロおっぱいが出来上がっていた。アナスタシアも始めは熱っぽい吐息が零れる程度の快感だったが、今では彼の指が動く度に甘ったるい雌の嬌声を上げている。

桜色の色素の薄い乳輪はプツクリと膨らんでおり、その乳輪の先端には硬くシコった乳首がマスターに触って欲しそうにピンと主張していた。彼の指先が乳輪や乳首を掠める度に、アナスタシアの肩がビクビクと大きく震える。

アナスタシアの色白の肌は、首から上が真っ赤に染まっていた。

彼女のトロンとした青色の瞳は快楽と幸福感で濁っており、半開きになった口端からは唾液が伝っている。少し間抜けな表情のようにも見えるが、男から見ればスケベな雌の顔にしか見えない。

マスターがアナスタシアの白い肌から唇を離すと、そこには虫刺さりのような赤い痕が残っていた。彼女の衣装から考えても、隠せない位置にキスマークが付いている。自分の所有物だと示す証のようであり、それを付けられたアナスタシアは膺口から愛蜜をコプっ♡と零

してしまおう。

太ももにアナスタシアの柔らかいお尻の感触と確かな重みを感じながら、マスターは彼女の耳元で愛を囁く。

「——アナスタシア好きだよ。もつと可愛い声を聞かせて」

「~~~~~♡♡♡ そんなっ♡♡♡ ふあっ♡♡♡ んうっ♡♡♡ 恥ずかしいです……っ♡♡♡ ——ああっ♡♡♡」

マスターの好きという言葉に、アナスタシアの身体と心が悦んでしまう。

雨降って地固まるという言葉があるように、マスターとアナスタシアの仲はこれまで以上に深まっていた。

肉体接触が増えたのと口付けをするようになり、彼女に至っては裸を見せてしまったことで、これまで抑えていたタガが外れてしまったらしい。

言葉だけでは恥ずかしがっているが、アナスタシアはマスターに背中を完全に預けている。彼女は乳房を揉んでいる彼の手を押さえているが、その手には一切の力が入っていない。

アナスタシアは建前だけの形で、マスターに抵抗をしていた。

甘ったるい嬌声を上げるアナスタシアは、乳房を揉みしだくマスターに声を掛ける。

「——まつ、マスター……っ♡♡♡ ふう♡♡♡ 触り方がっ♡♡♡ イヤらしいわ……っ♡♡♡ ああっ♡♡♡」

「イヤらしいことしてるからね。アナスタシアのおっぱいは柔らかくて、ずっと触ってたくなる」

「んあっ♡♡♡ ずつとは駄目よ……っ♡♡♡ ——んひい♡♡♡ ちっ、乳首は敏感だからあ……っ♡♡♡ ああっ……さわってされるのムズムズします♡♡♡」

マスターが触れるか触れないかのギリギリで乳首や乳輪を弄るせ

いで、アナスタシアの性感は更に高まっていく。絶頂出来る程の強い快感では無いため、焦らされているような感覚が次第に募ってしまう。

乳輪と白い肌の境目を中指で円を描くようになぞるマスターの指使いは絶妙であり、指先の先端が微かに乳輪に触れる巧みさであった。恋愛すら初心者である生娘なアナスタシアにとっては、女の体を知り尽くした彼の愛撫は正しく毒である。

アナスタシアの性的なことに対する忌避感やマスターに自分の肉体を触られる抵抗感が、マスターの愛撫という媚毒によって溶かされていく。既に気持ち良いことが好きになり、マスターにもっと触って欲しいと思ってしまうていた。

膝の上で太股をギュッと閉じたり開いたりを繰り返していたアナスタシアは、辛抱が堪らなくなったのかマスターにおねだりをしてしまう。

「……もつ、もつと乳首を触って欲しいです……っ♡♡♡——
あうっ♡ マスターの指でちゃんと触ってっ♡♡ もつとちゃんと
弄って下さい♡♡♡」

自分からおねだりをするアナスタシアは、耳の先端まで真っ赤に染まっている。そんな彼女の要望に応えて、マスターは性的な興奮でブツクリと膨らんだ乳輪に指で触れた。

「——んひいっ♡♡♡」

それだけでアナスタシアは喉を反らし、背中に電流がビリビリと走るような快感を感じてしまう。

これからマスターに乳首を好きなように弄られた時の快感を想像して、彼女は少しだけ恐怖心を覚えて腰がブルブルと震える。

「本当にちゃんと触って良いの？ 今までの何倍も気持ち良くなると

う掛からないと思われる。

快感の涙を流すアナスタシアの蕩け切った表情を横目で見ながら、マスターは次に内腿を両手を使って撫で始めた。彼女の色々な体液で濡れた内腿は、彼の手に吸い付くような触り心地である。

アナスタシアの内腿をマスターが撫でたり軽く揉んだりを繰り返している、恥ずかしそうにする彼女が太ももを閉じてしまう。彼に太ももを触られることよりも、自分の出してしまった尿を気にしていることであつた。

「おっ、おしっこできたないからっ♡ んひ——っ♡ さわっちや
らめれす♡ セっ、せめてシャワーにい……っ♡ ——あうっ
♡ らめっ♡♡ 奥にすすんじやらめえっ♡♡♡♡」

「汚くないから大丈夫。アナスタシアの大事な所、触って気持ち良くしたい………ダメかな？」

アナスタシアの返事を聞く前に、マスターの右手の指先が彼女のふっくらとした恥丘に辿り着いてしまう。

「んあっ♡♡ ソコはあ……っ♡♡♡♡ おっ、おまんこは、もつとらめれすう♡♡」

陰毛も生えていない恥丘は、ツルツルの表面と柔らかい肉に沈み込むような触り心地であつた。

アナスタシアは乳房も豊かに実っているが、腰から下の肉付きも素晴らしい。

お尻もタツプリと肉の詰まった安産型の桃尻であり、太股も大きなお尻に見合うだけの太まじさと柔らかさがあつた。女が羨むというよりも、男の劣情を誘う下半身である。

処女であるアナスタシアのヴァギナは、連続絶頂ですっかり準備が出来てしまっている。

彼女は恥丘の表面を撫でられただけで、甘い痺れが全身に走ってし

まう。

その快感にアナスタシアの太ももの拘束が緩んでしまい、マスターの両手が彼女の秘所に触れる。既に濡れていない場所が存在していない程に濡れそぼっており、クチュクチュとイヤらしい水音が簡単に鳴ってしまう。

アナスタシアは嫌々と頭を振って、マスターに止めてと伝える。嫌がっている様に見える彼女に対して、彼が淫肉の表面を指先でなぞりながら問い掛けた。

「本当に触つちや駄目？ いっぱい濡れてるココを指でかき混ぜると、乳首グニグニつて弄られるより気持ち良いから。アナスタシアが本当に嫌じゃ無かつたら太もも開いて？」

「~~~~~っ♡♡♡ ……っ♡♡♡」

少しの葛藤の後に、アナスタシアは太ももを開いた。

マスターに乳首よりも気持ちが良いと言われて、羞恥心が肉欲に負けてしまったらしい。

マスターはアナスタシアに『ありがとう』と呟き、両手で彼女の秘所を触り始めた。

彼が左手で小陰唇を左右に開くと、充血した陰核や小さな尿道口、開閉と共にコプっ♡♡ コプっ♡♡と愛液を噴き出す膣口が丸見えになる。

「アナスタシアのピンク色で綺麗だね」

「——やあっ♡♡ はっ、恥ずかしい♡♡ そんなに見ちやダメえ ……っ♡」

誰にも見せたことの無い自分の一番恥ずかしい所をマスターに見られ、綺麗だと感想まで言われてしまったアナスタシアは、顔から火が出てしまいそうな羞恥を感じていた。しかし、羞恥と同時に自分のヴァギナが変な形をしていなくて良かったと、安心感も覚えてしま

本来、陰核とはとてもデリケートな場所であり、強く触られれば痛みすら感じる程に敏感である。

しかし、十分に乳房で快感を感じて愛蜜や潮で濡れそぼった陰核は、痛みは無く快感だけをダイレクトに伝えてしまった。

悲鳴のような嬌声を上げるアナスタシアは、尿道口から大量の潮を吹き出す。

開いていた太ももが閉じたり開いたりを繰り返して、少しでも快感を逃がそうと動いていた。潮吹きタイミングに合わせて、彼女のお腹がベコベコと膨らんだり引つ込んだりする。

子宮での絶頂と比べて、陰核での絶頂は時間が短い。

その代わりに陰核での絶頂は、快感の波がとても大きかった。文字通り意識が飛んでしまいそうな程の快感が、全身を駆け巡っていく。

快楽中毒になってしまう人間の気持ちだが、今のアナスタシアには分かかってしまう。

こんなにも気持ちが良いことを知ってしまったら、元の何も知らなかった状態には戻れない。トロトロに蕩けた表情をしながら、彼女は一部だけ冷静な頭でそんなことを考えていた。

全身をビクビクと震わせて絶頂の余韻に浸っているアナスタシアに、マスターが声を掛けた。

「気持ち良かった？」

ふにゆふにやと呂律の回らない口でアナスタシアは答えた。

「はい………っ♡♡♡ とつても、きもちよかったです♡♡♡
もっとおまめイジってくらさい………っ♡♡♡」

アナスタシアのおねだりに応えるように、マスターは再び陰核に触れるのだった。

「——もっど気持ち良くしてあげる」

二人の秘め事はまだまだ終わらない。

番外編：病める氷の皇女は愛熱に蕩ける―4

一人が寝泊まりする想定で設計された部屋には、濃密な雌の臭いが籠っていた。

もしも、ニオイを色で見ることが出来るなら、部屋中が濃いピンク色に包まれていただろう。一呼吸毎に男の理性を溶かしていき、雄の獣性を際限なく高めていく淫らなニオイがしている。

そんな部屋の中では、牝の鳴き声が響いていた。

「いぐっ♡♡ おまめグリグリとお♡ うひい♡♡ おまんこホジリやれ♡♡ てえ♡♡ イキ♡♡ ますっ♡♡♡♡ イく♡♡♡♡ イグイ♡♡グっ♡♡ お♡—————う♡♡♡♡」

普段のアナスタシアからは想像も出来ない野太い嬌声を上げて、小さな尿道孔からぷしゅ…：…っ♡♡♡♡ ぷしゅ…：…っ♡♡♡と勢いの弱い潮を吹いている。快楽の波に押されて蕩け切った顔をする彼女は、半開きの口から舌を突き出して感じ入っていた。

今のアナスタシアは両脚を大きく開いて、秘所を弄られやすいような体勢をしている。

アナスタシアはマスターにほつてりと充血した陰核を左手の親指と中指で転がすように弄られ、トロトロに解れた膣孔を右手の人差し指と中指で恥骨側の腫れぼったくなくなったG—スポットを刺激されていた。

マスターの指が動く度に膣口からクチュクチュ粘っこい水音が鳴り、トロリと粘性のある泡立った愛蜜が掻き出されていく。尻タブまで愛液や尿でビショビショに濡れており、ベッドのシーツには吸水し切れなかった体液の液溜まりが出来上がっていた。

すっかり陰核と膣にイキ癖を付けられてしまったアナスタシアは、マスターの指が僅かに動くだけでも全身を震わせてしまう。秘所での快楽を彼に徹底的に教え込まされており、まだ処女であるとは思えない程に性感帯が開発されてしまっている。

既に蛸やナメクジなどの軟体動物のように、アナスタシアは全身を脱力させている。

数え切れない程の膣での絶頂と陰核での絶頂で、彼女の肉体は交尾がしやすいように仕上がっていた。最初は人差し指を挿入するのも難しかった小さな膣孔だったが、今では完全に解れておりマスターの二本の指を美味しそうに啜え込んでいる。

右手でアナスタシアの膣孔をヌプヌプとホジっていたマスターも、十分に性行為が出来るような状態になっていると判断したのか、最後にGスポットを指先で刺激して二本の指を引き抜いた。彼女はまた野太い嬌声を上げると共に、ぷしゃあ……っ♡♡♡と潮を吹いて全身をビクビクと震わせる。

マスターの指には白く泡立った愛蜜が根本までベツタリと付いており、人差し指と中指の間でねちやつ♡♡と粘つく糸を引いていた。

快楽で目の焦点が定まっていないうアナスタシアに、マスターが声を掛ける。

「————これからセックスしても良い？ ずっとアナスタシアのエッチな声を聞いていたら、我慢出来なくなっちゃった」

「~~~~~♡♡♡ はいっ♡ セックス♡♡ セックスしますっ♡ ましゅたーもいっぱい気持ち良くなってっ♡♡♡♡ わたくしのおまんこで、いっぱい気持ち良くなってっ♡♡♡」

マスターに性行為をしたいと言われたアナスタシアは、呂律の回らないふにゆふにやとした甘えた声で同意する。

アナスタシアの首元と腰の下に枕を敷いたマスターは、彼女を仰向けの体勢で寝かせる。

彼にとつては当たり前前の気遣いであるが、正常位の体位の際に腰の下に枕やクッションを敷くと膣から子宮口までが一直線になるので、奥まで突いてポルチオを刺激しやすくなるのだ。

彼女の肉体系への負担を極力減らし、より気持ち良くなって貰うための気遣いであった。

アナスタシアの体液でビショビショに濡れたズボンとパンツを脱いだマスターは、大量の血流が集まった長大なペニスを露出させる。自分の腕よりも明らかに太く、目測でも30 cm以上は長い淫水焼けた禍々しいペニスを目にした彼女は、カッと目を見開きながら間抜けな声を出してしまう。

「ふえ？…♡♡♡」

アナスタシアの故郷であるロシア帝国が滅亡する遠因となった、怪僧「ラスプーチン」は大きなペニスの持ち主であったという逸話があり、最大勃起時で長さ13インチ（約33 cm）はあったと語られている。巨根で知られたラスプーチンのペニスを上回るモノをマスターは持っていた。

長大なペニスに見合う大きさの睾丸が二つ、陰茎の根元には付いている。

睾丸の大きさとは則ち生殖能力の高さであり、マスターの生殖能力が人並み外れているということであった。女の膣や子宮を完全に屈服させる長大なペニスと、雌を絶対に孕ませる大量の精を吐き出せる大きな睾丸。

正しく女を殺す鈍器のようなマスターのペニスを見たアナスタシアは、快楽で微睡んでいた意識が完全に覚醒してしまう。今からこんなにも大きく雄々しいペニスを受け入れると考えると、彼女は恐怖心を覚えざるを得なかった。

アナスタシアは震える声を出しながら、マスターに話し掛ける。

「まつ、ましゆたーっ♡♡♡ こんなに大きい挿入らないです……っ♡♡♡ おまんこ、こわれちゃいますっ♡♡♡」

「ちゃんと時間を掛けて解したから大丈夫だよ。最初は苦しくても、直ぐに気持ち良くなれるから」

怖がっているアナスタシアを安心させる言葉を掛けながら、今も愛

蜜を零している彼女の膣口に亀頭の先端を押し当てた。

——くちゅっ♡♡

「ふひい——っ♡♡ あっ、アツいですっ♡ 先っぽがアツくて怖い
です♡♡」

怒張したペニスの火傷してしまいそんな熱さを感じるアナスタシアは、恐怖心を和らげるためにマスターの背中を両手で掴んだ。

お互いの顔が近くなった二人は、自然とキスをする。

「——んっ♡♡♡♡ ちゅう♡♡ ちゆるるっ♡ じゆるちゅっ♡
♡ ちゅぶっ♡♡♡」

アナスタシアがキスに気が逸れている間に、マスターが腰を押し進める。

ぬちゅぬちゅとイヤらしい水音と共に、大きく膨らんだ亀頭が彼女の膣孔に埋没していく。

「じゆるるっ♡♡♡♡ ん——ん——っ♡♡ ぢゆるっ♡♡ ……ん
むっ♡♡♡」

口内で苦悶の声を上げるアナスタシアは、マスターの背中に爪を立ててしまう。

彼の背中に傷を付けるのとはぼ同時に、彼女の処女を守ってきた膜が亀頭によつて破られる。膣孔の下から少量の血液が流れるが、彼女が感じていたのは痛みよりも太いペニスの圧迫感だった。

マスターの指で処女膜や膣孔全体が十分に柔らかくなるまで愛撫されていたからこそ、アナスタシアは痛みを殆ど感じなかった。しかし、彼女の目尻から自然と涙が流れてしまう。

生前では“女”になることが無いまま死んでしまった少女が、死後

に英霊となって初めて女になれたからだ。言葉には表せない幸福感がアナスタシアの全身を包み込む。

二人はゆつくりと唇を離す。

お互いの唇の間には、唾液の銀糸が繋がっていた。

「んっ——ふはっ♡♡ふうっ——♡♡ふうっ——♡♡ふうっ——♡♡おっっ、お腹がへんな感じれすっ♡♡♡ わたくしのナカに、熱くて大きいのが……っ♡♡うあっ♡♡」

「アナスタシアのナカ、トロトロなのにキュって締め付けてきて気持ち良いよ——痛くはない?」

「~~~~~っ♡♡♡ いっ、痛くはないれすっ♡♡ マスターのが奥に進むと、わたくしのナカがミチミチって広がって……っ♡♡ ああ……っ♡♡ おぐう♡♡ ——んあっ♡♡♡♡」

初めて体験する膣孔がギリギリまで拡がり、内臓が押し退けられていく不思議な感覚に、アナスタシアは快感と苦悶が混じったような声を出す。

ずりゆずりゆとアナスタシアの膣肉を掻き分けて、長大なペニスが奥へ奥へと進んでいく。彼女の腰に枕を敷いているお陰で比較的スムーズに挿入が出来ていた。

マスターのペニスの半分がアナスタシアの膣孔に挿入された時、亀頭の先端が子宮口に接触した。

膣肉の柔らかな感触や膣壁の凸凹した感触とは異なり、子宮口は少し硬いコリつとした感触がする。

その独特な感触のする子宮口が、亀頭で軽く押された。

——グニっ♡♡♡

「あゝひゅ——っ♡♡」

目を大きく見開くアナスタシアは、反射的に枕に後頭部を押し付け

る。

彼女は初めてポルチオを刺激される感覚に戸惑ってしまふ。まだ陰核やG—スポットのように性感帯として十分に開発されていないので、まだ強い快感が発生するものではない。

しかし、地に足が着かなくなったかのような、浮遊感のようなものを感じていた。

これは覚えちゃ駄目な感覚だと頭の中の冷静な部分が伝えているが、今のアナスタシアにはこれを拒めなかった。何度も絶頂を重ねて全身に力が入らない状態で、仰向けになっている自分の上にマスターが覆い被さっている。

食べる側と食べられる側で、完全に関係性が出来上がっていた。抵抗を考へることすら、馬鹿らしくなるような状況である。

アナスタシアが自分の今の状況を理解した頃、マスターが彼女にとって恐ろしいことを告げた。

「今からアナスタシアの子宮、ゆっくり押すからね」

「——ふへ？」

マスターの言っていることが理解が出来ず、素っ頓狂な声を出してしまふ。しかし、次の瞬間には彼の言っていることが、嫌でも分かっ

てしまふ。
子宮口と亀頭が触れ合っている状態で、マスターが更に腰を押し進め始めたからだ。

ぐっ♡♡♡ ぐっ♡♡♡ ぐぐっ♡♡♡

「——うあゝっ♡♡♡ おゝぐっ♡♡♡♡♡ もうおゝぐれすっ♡♡♡
すすめゝないれゝすううゝううゝううゝっ♡♡♡♡♡ ——お
ゝっ♡♡♡」

アナスタシアの子宮がマスターのペニスによって、下腹部側から鳩尾の方に向かって押される。

彼の棍棒のような鈍器ペニスに、彼女の子宮が抵抗出来る訳も無い。一方的に膣と子宮を征服されていき、遂には子宮が亀頭によつてグニユっ♡♡♡と潰されてしまう。

「——しっ、しっ、ぎゅう、つぶれりゅっ♡♡♡いっひいつ♡
♡ あっかちゃんのおへや、つぶれへま、しゅっ♡♡♡お
っ♡♡おっ♡♡おへ——っ♡♡♡」

ゴリゴリと子宮口を硬い亀頭が抉り、アナスタシアは身体が浮いてしまっているような感覚に囚われてしまう。マスターは彼女の頭を優しく撫でながら、この状態で体勢を固定した。

「暫くは”このまま”でいるね。俺の形を覚えてくれれば、いっぱい突かれても平気になると思うから」

「こによままは、ヘンになりゅっ♡♡♡おへやの入り口、グリグリ
ずっとはらめえ……おっ♡♡♡ぐりゅっ♡♡♡ヘンなのぐ
りゅっ♡ おかしくなりゅううううううううううう——
——っっっ♡♡♡♡おっくくくくくくくくくくくっ♡♡♡」

ぷしゅっ♡♡♡ぷしゅっ♡♡♡ぷしゅ——っ♡♡♡♡

マスターの下腹に向かって潮を吹くアナスタシアは、絶頂の波が全く引いていかないことに混乱していた。

乳首やG—スポット、陰核での絶頂とは明らかに違うオーガズムの仕方に、快感の逃がし方が分からなくなってしまう。彼女が身体を見悶えるように動かす程に、子宮口に亀頭が食い込んで快感が強くなっ
ていく。

「イクっ♡♡♡イトってりゅっ♡♡♡おへや、グリグリし
にっやいれっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡まだくり
ゅっ♡♡♡きもちいいのくりゅううううううううううっ♡♡♡
」

マスターは完全に姿勢を固定しているだけなので、アナスタシア自身がポルチオ性感帯をセルフで開発してしまっている。彼の硬くて熱い亀頭で、自分の負け癖が付いた弱々子宮口をグリグリイジメられるのが大好きな、マゾマンコになるように自ら動いてしまっていた。その後も絶頂を迎える度に、膣全体がキュっ♡♡ キュっ♡♡と締めまり、亀頭以外の竿の部分の形も憶えてしまった。せめてもの抵抗なのか彼の背中に爪を立てながら、アナスタシアは嬌声を出しながら潮を吹き続けた。

「……………いひっ♡♡ ———— いっ♡ お、おっ♡♡ ……………あ
っ♡」

続けざまにポルチオで絶頂してしまい快感と言う名の津波に、アナスタシアの意識が攫われてしまった。彼女の膣と子宮が、完全にペニスの形を覚えてしまっている。

アナスタシアは殆ど意識を失っているが、彼女が絶頂やその余韻で身体を震わせる度に、膣全体が締めまりマスターのペニスを刺激し続けていた。彼自身は全くピストンはしていなかったが、それでも射精するのには十分な快感が与えられている。

ここから射精を我慢することも出来たが、マスターは射精してしまおうと考えたようだ。吐息のような喘ぎ声を出すアナスタシアの耳元で彼が言った。

「アナスタシアの中に射精するね」

「———あうっ?♡♡」

強い快感を得てする消防車の放水のような射精とは違った、ゆっくりとした吐精が始まった。

いつもなら一分近い射精時間であるが、今回はその二倍はありそうな長さであり、精液が亀頭の先端から吐き出されていった。まるでシ

彼に女としての幸せを教えて貰ったばかりなのに、今度は母としての幸せも教えて貰えると言われて心が追い付いていなかった。

「本当に赤ちゃん作ろう？」

「~~~~~♡♡♡ はっ、はい♡♡ わたくしも
マスターとの赤ちゃん欲しいです……っ♡」

実質的なマスターからのプロポーズに、アナスタシアは幸せの涙を流しながら返事をする。

二人は誓いのキスでもするかのように、唇同士を合わせる優しい口付けを交わした。

『——汎人類史の私。貴方の呪いとなった”私”にこれを言う資格は無いけれど……私がなれなかった分まで、マスターと幸せに………生き………て』

口付けを交わすアナスタシアは、自分と同じ声を確かに聞いた。

それがただの幻聴だったのか、それとも彼女の記憶の中で残留していた異聞帯のアナスタシアの意識だったのかは分からない。

しかし、これ以降アナスタシアが声を聞くことは、二度と無かった。

(さようなら。もう一人の私………)

——アナスタシアの心を蝕んでいた”氷”は、マスターとの愛熱で溶けてしまった。

評価者100人記念 番外編―5 盾の少女は、女の悦びを知る

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―1

人類最後のマスター”藤丸 立香”のメインサーヴァントである
と自負している”マシユ・キリエライト”は、最近のカルデアでの生
活に一抹の寂しさや疎外感を感じていた。彼女が誰かに無視や虐め
を受けているといった事は一切無いのだが、寂しさや疎外感を感じる
ことに繋がった理由が大きく分けて二つ存在している。

一つ目は、カルデアという組織全体の最大目標であった、”人理修
復”を達成したことである。

共に人理修復のために戦い続けたマスターやロマニなどが、人理修
復後の”次”を何かしら見付けていた。しかし、マシユだけは何も見
付けられていなかった。

それが自分だけが取り残されてしまったかのような、孤独を感じる
ことに繋がってしまったらしい。

二つ目が、マシユにとつての”人生の先輩”であるマスターと、接
する時間が減ってしまったことにある。

これまでは特異点での攻略の際には、マスターの隣には自分が必ず
居た。しかし、最終決戦でマシユが一度死んでから蘇った後には、力
を貸してくれていた英霊が自分の中から消えていたのだ。

疑似サーヴァントとしての力を失ってしまったマシユは、マスター
と関わる接点の一つ消えてしまったようなものであり、業務中に会話
する時間が無くなってしまっていた。何かしらの会話があつても通
信機越しであったりと、彼が何処か遠くに行ってしまったかのように
感じてしまう。

それだけならプライベートの時間で、マスターに会えばよかったの
だが――

「はあ……今日も”先輩”が居ません」

カルデアの施設内を散歩しながらマスターを探していたマッシュは、影も形も見当たらない彼を思ってしまった息を吐く。人理修復を達成してからというもの、任務中以外のマスターはアルトリアオルタやスカサハなどの女性サーヴァントに連れられて、何処かに消えてしまうのだ。

直ぐ近くに居るのに遠くに行ってしまったマスターに、マッシュの心には小さな穴が空いていた。

「最近は何となくとお話しした記憶が、殆ど無いです……」

天井を見上げる彼女の眩きは、誰にも聞かれることなく虚空へと消えていった。

魔神王ゲーティアによって、紀元前931年から計画・実行された『人理焼却』。

それは様々な年代や場所に七つの特異点を設置して、人類史における重要な転換期となる人理定礎を破壊。

その破壊した人理を焼却することで約3000年分の熱量を確保。地球が創世される46億年前までゲーティアが時間を遡り、惑星から死の概念を無くすという壮大な計画であった。

この人理焼却を阻止するために、マスターやサーヴァント達、カルデアは死力を尽くして戦った。

七つの特異点の先にある終局特異点にて、遂にカルデアはゲーティアを打倒。世界を救うための戦いであった人理修復は遂に成し遂げ

られた。

マシユ・キリエライトも一度は、ゲーティアの物理焼却砲によって完全に消滅した。

しかし、フオウこと第四の獣キヤスパリーグが、これまで溜め込んだ『比較の獣』としての力と運命力を彼女に譲渡。魔法ですら成し得ない奇蹟『死者の完全な蘇生』によって、マシユは復活を果たしたのだ。

この復活の際に”英霊の器”として設計されたマシユの肉体的な限界も覆される。

本来ならば長くは生きられない命であったが、普通の少女と変わらない寿命を手に入れることが出来た。やっと普通の人として、生きられるようになったのだ。

——彼女は人並の幸せを、まだ知らなかった。

——未だ亜種特異点への兆しも見えていないため、カルデアは束の間の幸せを目一杯に謳歌していた。

世界を救うという重圧から解放されたカルデア。

ずっと緊張状態にあつた職員達の空気も良い意味で緩み、今では笑顔の絶えない職場へと様変わりしている。

特にロマニ・アーキマンとレオナルド・ダ・ヴィンチは、昼夜を問わずベタバタと身を寄せ合ってイチャイチャしている。見ているだけで口から砂糖を吐いてしまいそうな、甘ったるい雰囲気を常に漂わ

せていた。

これまでは最低限ではあるが人目を憚りながら交際をしていたようだが、今では同じ部屋で堂々と寝泊りをしている。一日の業務の始まりである朝礼でも、ロマニとダ・ヴィンチは髪を仄かに湿らせて、同じ匂いをさせながら揃って会議室に来ることが多い。

二人が直前まで蜜月の時間を過ごしていたことは、勘の鈍い職員でも丸分かりであった。

業務時間中にもロマニとダ・ヴィンチは二人揃って姿を消して、数十分後に艶っぽい雰囲気纏わせて戻って来ることがある。彼等が”エツチなサボタージユ”をしていても、常人の数倍の仕事量をしっかりと熟しているのが、職員の誰一人として文句が言えない状況であった。

一つだけ被害を挙げるとすれば、独身男性の心に深刻なダメージを与えていること位だろう。

生前は歴とした男性であったレオナルド・ダ・ヴィンチだったが、今の彼女はロマニ・アーキマンの”妻”であり、彼との間に生まれてくる子供を大切に育てようとしている”お母さん”であった。ダ・ヴィンチは業務中にも暇を見付けては、子供の揺り籠となっている自身の膨らみ始めたお腹を愛おしそうに撫でている。

ロマニとダ・ヴィンチが事実上の夫婦となり、子供が出来たことはマシユにとっても喜ばしいことであった。心の底から幸せそうな二人を見てみると、彼女自身も幸せな気持ちになれたからだ。

——二人が人目も憚らず濃厚なキスをしていることについては、マシユも多少なりとも思う所はあるのだが……

そんな幸せの真つ只中にいるダ・ヴィンチに対して、マシユは自分が感じている寂しさや疎外感を相談していた。一人で考えていても解決策が浮かばなかったことと、人理修復後の今が一番充実しているうなダ・ヴィンチならば、良い考えを教えて貰えると思ったからだ。

「——なんです。ダ・ヴィンチさんは、何か良い解決策は無いでしょうか？」

マシユの相談に真剣に耳を傾けていたダ・ヴィンチは、うんうんと何度か頷いた後に口を開いた。

「二つ確認したいんだけど……マシユはマスター君のことをどう思ってる？ 勿論、好きなことは知っているけれど、それがLoveかLikeかで私が提示する解決策が変わってくるからね」
「LoveかLike……」

ダ・ヴィンチの質問に対して、マシユは考え込んでしまう。

先輩ことマスターのことを好きなことは間違い無いが、それが親愛なのか恋愛としてかと聞かれれば答えが出せなかった。好きの種類について考えたことが、これまで一度も無かったのだ。

それこそ恋愛とは本の中で読むものというイメージがとても強く、自分が恋愛の当事者になるという考えが思い付かない程だった。

（先輩のことは好きですが、その意味を考えたことはこれまで無かったです……。私の手を握ってくれた先輩のことが私は……私は……）

顎先に片手を添えて思い悩んでいるマシユだが、彼女の表情を見ていたダ・ヴィンチには答えが簡単に分かってしまう。本人は気付いていないが彼女の顔は風邪を引いたときのように赤らんでおり、マスターを想っているだろうアメジストに良く似た色の瞳は熱っぽく潤んでいた。

明らかに恋する乙女の表情をマシユはしている。知らぬは本人ばかりであった。

（うくん、この表情で自覚してないのは重症だね……）

ほんの少しだけ呆れるような表情をしたダ・ヴィンチは、ある解決策をマシユに提示した。

一般的に言ってダ・ヴィンチが提示する解決策の内容は相当な荒療

治であるが、生まれた環境を含めて超が付く程の初心に育ったマシユに恋心を自覚させるためには、必要なことであると判断したようだ。

ダ・ヴィンチはマシユにマスターの私室の電子キーを手渡しながら、ある解決策を言葉にする。

「マシユがマスターのことを本当はどう思っているのか知りたかったら、この鍵を使ってマスターの部屋に忍び込んでみたら良いと思うな。丁度、礼装とかを保管しているクローゼットは、人が隠れられる位の大きさがあるから……そこで一日だけマスター”達”を観察してみると良いよ」

「えっ、えっ……それは覗きになってしまうのでは無いでしょうか？ マスターと同じ部屋に住んでいるアルトリアオルタさんの、プライバシーの侵害にもなってしまいますし……」

「マスター君もアルトリアオルタも怒ったりする程、度量の狭い人間では無いから大丈夫だと思うよ。もし二人にバレて怒られそうになっても、私の提案だったと言ってくれば良いからさ——ね？」

その後も、犯罪に近い行為をするのを躊躇うマシユに対して、ダ・ヴィンチはマスター達になら問題ないと説得して彼女を部屋から追い出してしまった。

マシユも最初は自身の良心が痛んだが、渡されてしまった電子キーと自分の気持ちを確かめたいという気持ちが勝ってしまった。誰も居ないマスターの私室に周囲を警戒しながら侵入して、ダ・ヴィンチに言われた通りに礼装が保管されている部屋付けのクローゼットの中に忍び込んだ。

（いつ、勢いでここまで来てしまいましたけど、やっぱりイケないことをしている気分になってしまいます。もしも見つかってしまったら、先輩やアルトリアオルタさんは本当に怒ったりしないでしょうか……）

かくれんぼをしている時のような高揚感と自分が覗きをしている罪悪感を感じながら、クローゼットの隙間から見えるベッドの風景を

マシユはジツと見つめていた。何度も良心の啖呵で部屋から出ていこうとクローゼットの扉に手を掛けたが、その度に好奇心が自身の手を抑えてしまう。

マシユの良心と好奇心が何度も戦っていると、部屋の自動扉が開く音がした。

「——っ!? 先輩が帰ってきてしまいましたっ。もう出られそうに無いです」

目を見開いて驚くマシユが息を呑んでいると、マスターを含めた“数名”の人間が入ってきた。

マシユも良く一緒にいるのを目にするアルトリアオルタやモードレッドの他にも、プライベートのマスターを何処かに連れて行くのを何度か見たことがある、スカサハやナイチンゲールの姿も確認出来た。

意外な組み合わせの四人の女性を目にして、マシユも驚きを隠せなかった。

（アルトリアオルタさんとモードレッドさんは仲が良いので分かりませんが、スカサハさんやナイチンゲールさんも……四人の共通点は何でしょうか？ マスターと仲が良いこと位しか——っ!?）

興味津々といった様子でマシユが覗きをしていると、目の前で思考が追い付かなくなる出来事が起こった。何が起こったかと言われれば四人が突然、衣服を脱ぎだしたのだ。

それぞれ魅力が違う美少女や美女が、際どい表面積しか隠していない下着姿になってしまう。

細くしなやかな肉体を惜しげもなく晒しているアルトリアオルタやモードレッド。成熟した大人の魅力を醸し出している肉付きの良いスカサハやナイチンゲール。

一人一人が最上級の雌であり、同性であるマシユでさえドギマギしてしまう程に魅力的な女性達であった。そんな彼女達が異性の目の前でいきなり服を脱ぎだしたことに、初心なマシユは混乱が隠せない。

（マスターの前で脱いで——っ♡ っ、今から何が起こるのでしょ

うか……っ♡♡)

顔を林檎のように真つ赤にしながら覗き見るマシユは、思わず声を出してしまいそうな自分の口を両手で塞ぐ。彼女が息を押し殺しながらマスター達を覗いていると、意外なことにナイチンゲールがマスターの首に両腕を回して濃厚なキスを始めてしまった。

自身の豊満な乳房がマスターの胸板でむにゅっ♡♡と潰れるのも気にせず、ナイチンゲールは舌同士を絡め合う行為に没頭していた。寧ろマスターが興奮しやすいように、肉感的な肉体をズリズリと押し付けている。

『——ちゅっ♡ ちゆるるっ♡♡ ぢゆるっちゅ♡♡ んっ——
——はあ♡♡ マスターの性的興奮を確認しました……っ♡♡
ちゅっ♡ ちゆるっ♡♡ んっ♡……引き続き口内の粘膜接触によつて、性的興奮を高めていきますっ♡♡♡ んむっ♡——』

マシユが今まで全く見たことが無い、蕩けた女の顔をしているナイチンゲール。

既に太ももの内側にはトロリとした愛蜜が垂れてきており、彼女自身も性的に興奮していることが丸分りであった。唾液が口端からダラダラと零れており、それすら全く気にせずに口付けに夢中になっている。

(なっ、ななっ、ナイチンゲールさんが、マスターとキスを——っ♡♡♡ 治療の一環……ちっ、違いますよね♡♡ ダ・ヴィンチさんとドクターがいつもしてる、愛し合っている人同士がするキスです………っ♡♡♡)

マスターとナイチンゲールの濃厚なキスにマシユが見入っていると、アルトリアオルタとスカサハがマスターの両腕にそれぞれ抱き着いてきた。二人は左右からマスターを挟みながら、彼の耳をじゅるじゅると舌を使って舐め始める。

自分をマスターに意識して貰えるように、アルトリアオルタとスカサハが甘えるような猫撫で声をだして彼に語り掛けた。

『ぢゅるるっ♡♡ マスター♡ ちゅっ♡♡ 私も構って欲しい…
ちゅっ♡ じゅるるっ♡♡』
『じゅるっ♡♡ ちゅっ♡ はあ…そうだぞっ♡♡ 儂のことも忘
れるな♡♡♡ ちゅるるっ♡ じゅちゅっ♡♡』

ナイチンゲールと同じ雌の顔をしているアルトリアオルタとスカサハは、マスターの服を脱がせながら胸板や脇腹など身体を弄っていた。彼の両手も二人の猫撫で声に応えるように、肉付きの良いお尻をそれぞれ揉みしだいている。

熟れた桃から果汁が滴るように、マスターの指がお尻のお肉に食い込む度にアルトリアオルタとスカサハは秘所から蜜を吹き零していた。

三人の女の発情した甘ったるい匂いが、マスターの部屋に充満し始める。

マシユが隠れているクローゼットの隙間からも、その甘い雌のニオイが入り込んで来る。

そのイヤらしい匂いを嗅いでしまった彼女の秘所もじんわりと湿り気を帯び始めていたが、初めて見るエッチな光景に夢中になっているマシユはそのことに気付かない。

(四人でエッチなことを…っ♡♡ アルトリアオルタさんも、スカサハさんも聞いたことがない甘えた声を出しながら、嬉しそうに先輩にお尻を揉まれてますっ♡♡)

正面にナイチンゲール、左右にアルトリアオルタとスカサハがマスターに抱き着いているため、モードレッドは彼の背中に抱き着いた。ナイチンゲールと同じように自分の身体をズリズリと擦り付けながら、首筋にキスマークを付けるために吸い付いている。

『——ちゅう…っ♡♡ ぷはっ♡ オレのことも忘れんなっ♡
♡ おっ、オレもマスターの女だかなっ♡♡♡ ちゅう——』

普段の男勝りなモードレッドからは想像も出来ない、もつと構って欲しいと子供のように甘えていた。彼女はマスターの首筋や肩口に、赤い痕を残す行為に耽溺している。それは猫のグルーミングのようにも見えて、傍から見ているマシユも可愛らしいと思ってしまうものだった。

四人からの愛情の籠ったご奉仕をされていたマスターは、ナイチンゲールとのキスの息継ぎのタイミングで、彼のことを心の底から愛している彼女達が絶対に言うことを聞くお願いする。

「——はあ。はあ……みんなベッドに両手をつけて、お尻を突き出して？ 始めは後ろから挿入したい」

「~~~~~♡♡♡♡ はいっ♡♡」

彼女達は元気良く返事をする、マスターの指示通りに横並びになつてベッドに両手を着いた。それぞれ魅力的な雄の獣性を刺激する美尻を後ろにいる彼に向けて突き出す。びしょびしょに濡れたショーツが秘所に張り付き、その形を余すことなく教えていた。

マスターはズボンとパンツを脱いで全裸となる。

女の細腕よりも遥かに太く、30 cmよりも更に長いペニスが外気に晒された。淫水焼けた禍々しいソレを見たマシユは、余りの驚きに声を漏らしそうになる。

(あつ、あれが先輩の——っ♡♡ 遠くから見ても大きいですっ♡♡♡ あんなものが女性の体に入るものなのでしょようか……っ♡♡)

性教育で学んだ子供の作り方を思い返しながら、マスターの大きなペニスに魅入られていた。それは雌であればどうやっても免れない、生殖本能によるものだ。

優秀な雄をマシユの雌の部分が感じ取ってしまい、否応なしに体が反応してしまう。アルトリアオルタ達の発情臭を嗅いだ時とは比べ物にならない量の愛液を膣口から溢れさせていた。

マスターはベッドの右端にいたモードレッドのショーツを膝まで擦り下ろして、しとどに濡れたおまんこを露出させる。ショーツと恥丘の間には愛蜜の糸が引いており、彼女の興奮とマスターとまぐわいたいという思いが見え透いていた。

愛蜜を溢れさせるモードレッドの膣口に、マスターはペニスの亀頭を触れ合わせる。彼女は興奮から来る震える声を出しながら、彼にセックスのおねだりを始めた。

『マスター♡♡ オレのマスター専用おまんこ♡ 今日もたっぷり可愛がってくれっ♡♡ ザーメン好きただけ射精して、オレのおまんこマーキングしてっ♡♡♡♡ ——ふぎゅっ♡♡♡♡♡』

マスターが腰をモードレッドの美尻に叩き付け、セックスを始めてしまう。

彼の力強い腰の動きによって、彼女のお尻が波打ちながら跳ね上がる。モードレッドは子宮をどちゅっ♡♡ どちゅっ♡♡と激しく突かれて、余裕のない雌の嬌声を上げ続けていた。

バチュンっ!! バっチュンっ!!! バチュン!! バっチュンっ!!!
『イグっ♡♡ イっっちゃうっ♡ オレのよわよわおまんこっ♡♡
マスターのおちんぽでイっくうっううっううっうううっうううっううう
うっうう —— っっ♡♡♡♡♡ あっあ —— っ♡♡♡』

マスターに細腰をガツシリと掴まれ、尻タブが真っ赤になるまで腰を叩き付けられるモードレッド。彼女は両膝をガクガクと震わせながら、尿道口から間欠泉のように潮を吹いている。

女として、雌として幸せそうな顔をしているモードレッドの横顔を見詰めるマシユは、無意識の内に小さな声で呟いてしまう。

「…………羨ましいです」

今もマスターに犯されているモードレッドを自分に当て嵌めながら、マシユは自分のスカートを捲り上げ、黒タイツとショーツで覆われた自身の濡れた秘所に触れる。

——くちゅっ♡♡

クローゼットの中で淫らな水音が響いた。

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―2

『————クっ♡♡ イクっ♡♡♡ 肛門性交でイクっク
うううううううううううううううううううううううううう
————♡♡♡♡♡』

マスターの長大なペニスを菊門で啜え込むナイチンゲールは、濁音混じりの嬌声を上げている。部屋中に響き渡る程の大きな声量であり、彼女が絶頂しているのは間違いなかった。

背中と首を限界まで反らせながら、男が悦ぶ女の嬌声を上げ続けている。

部屋中に男と女の性の臭いが充満しており、何も知らずにここに入れば嘔せてしまいそうな程に臭いが濃かった。

本来、ナイチンゲールは清潔を重んじる医療に準じた女性である。彼女がサーヴァントとなって排泄行為をしなくなったため、病気になる可能性が無い綺麗な尻孔であろうと、肛門で男性器を啜え込むことを良しとはしない筈だった。

しかし、マスターと愛し合いながらセックスをするようになって、膣や子宮、口だけでは彼の性欲を受け止め切れなくなり、よりマスターに気持ち良くなって貰うために自分からアナルセックスを”おねだり”するようになっていた。

今ではマスターのペニスを啜え込み、精を出して貰う専用の”交尾孔”に開発されており、S字結腸や子宮を後ろ側から突かれて刺激されるのが大好きなスケベな女になっている。彼限定の性処理オナホを自称している程であった。

バチュっ!! バチュンっ!!! バチュっ!! バっチュンっ!!!

『マスターっ♡♡ イっつてっ♡♡♡ イっつてまっすう♡♡ つ
よいっいいいっいいいっいいいっ—————っ♡♡♡♡♡』

思わず撫で回したくなるナイチンゲールの桃尻に、マスターの腰が勢い良く叩き付けられる。その度に肉同士がぶつかり合う小気味良い破裂音がする。

真っ白だったナイチンゲールの尻タブは真っ赤に腫れ上がっており、膣口からはボトっ♡♡♡ ボトっ♡♡♡とお粥のような白濁としたザーメンが零れ落ちていた。

マスターの太いペニスを受け入れるために、ナイチンゲールの両脚は大きく開かれている。彼女の足元には、男と女の淫臭が匂い立つ水溜りが出来上がっていた。今も彼女の膣口や尿道口から零れ落ちる体液で、その卑猥なニオイのする水溜まりは徐々に大きくなっていく。

因みにアルトリアオルタやモードレッド、スカサハは全身をマスターの精液で汚されており、潰れたカエルのような体勢でイキ潰されていた。お腹を妊婦のように膨らませながら、膣口や尻孔から大量の精液をゴポ…：…っ♡♡♡ ゴプ…：…っ♡♡♡と垂れ流している。

幸せそうな顔をしながらアルトリアオルタ達は、完全に意識を失っていた。

時折、死に掛けた虫のようにピクピクと全身を震わせているので、未だに快感が抜けきっていないようだ。

ナイチンゲールも彼女達の例に漏れず、妊娠してから四か月以上は経ったようなお腹の膨らませている。サーヴァントでなければとつくに孕んでいたであろう濃厚な精液を、子宮内に大量に注ぎ込まれていた。

百近い破裂音が鳴り響いた頃、マスターの睾丸がぐぐぐと持ち上がり、ナイチンゲールのナカで亀頭が膨らむ。射精してしまいそうな彼は、これまでよりもピストンのペースを速めながら、彼女にそれを伝える。

『くっ。ナイチンゲール…：…射精すっ、射精すよ！ ナイチンゲールのナカに、射精すっ!!』

『くっくっくっくっくっ♡♡♡ おっ、お好きだけ射精して下さいさいつ♡♡ 私のおっ♡♡ マスター専用の孔に…：…っ♡♡♡ 射

上に、大量の潮を間欠泉のように噴き出す。

快感を逃がすためなのかつま先立ちになって、両膝を左右にガクガクと震わせている。遂にはベッドの縁に着いていた両腕が力を失って、ベッドの方に上半身が倒れ込んでしまう。

『お……っ♡♡ お……お……っ♡♡ お……ひ………いつ♡♡』

ズルズルと肛門からペニス抜けていき、ナイチンゲールが完全に座り込んでしまった時には、亀頭の先端まで露出してしまった。彼の精液と彼女の腸液でドロドロに塗れたペニスは、未だに勃起した状態のままである。

アルトリアオルタ達と同じように、ナイチンゲールも快楽で失神してしまっていた。絶頂の余韻でびくびくと、お尻が震えている。

最初にモードレッドがマスターとまぐわい始めてから既に四時間が経過しており、一人が約一時間程度でイキ潰されてしまっていた。サーヴァントとして常人とは比較にならない体力をしている筈だが、彼の手で性感帯を十分に開発され、本人も知らない弱点も完全に把握されている状態では、どれだけHPが高くとも直ぐに力尽きてしまうようだ。

その証拠に半神にも近いスカサハや竜の心臓を持つアルトリアオルタが、未だに荒い呼吸をして倒れている。彼女達の意識が回復するまで、最低でも三時間程度は必要であろう。

まだまだ余力を残して平気そうに立っているマスターを、未だに意識を残して見ている少女が部屋の中に一人だけいた。その少女——マシユ・キリエライトは狭いクローゼットの中で、黒タイツとショーツを膝下まで下している。

スカートが捲り上げられてお腹の所で纏められているせいで、肉付きの良いむっちりとした太ももや淫毛も生えていないツルリとした恥丘が、余すことなく見えてしまっていた。愛液がトロトロと膣口から溢れており、秘所全体がしとどに濡れている。

快楽で濁った目をしているマシユは、食い入るようにマスターのペニスを見詰めながら、自身の膣孔を右手で弄っていた。左手の袖を自分の口元に当てて、喘ぎ声が出そうになるのを物理的に止めながら、数時間前に覚えた自慰行為の快感に耽溺している。

くちゆくちゆとイヤらしい水音がクローゼットの中で響き、その狭い空間には女の甘酸っぱい汗と愛液の濃い臭いが籠っている。一度も換気をしていないせいで、温度も高くマシユの全身は汗ばんでいた。

今のマシユはマスターの情事を覗き、それをおかずにオナニーをする変態である。

先程まで彼とまぐわっていたナイチンゲールを始めとしたアルトリアオルタやモードレッド、スカサハを自分に当て嵌めながら、マスターと妄想の中でセックスをしていた。

数時間前まで初心だったマシユ・キリエライト。

今では処女のままマスターに子宮や口、お尻の穴まで精を注がれる妄想で何度も絶頂に達している。クローゼットの隙間から入ってくる雄の精臭を、鼻腔から肺が一杯になるまで取り込んでいた。

(ああ……っ♡♡♡ 先輩の精液とおちんぼの匂いが凄いですっ♡♡ オマンコもお尻の穴も精液でいっぱいなの、とっても気持ち良さそうです♡♡ 自分の細くて短い指で弄るより、先輩の長くて太いおちんぼでズボズボ穿られる方が、気持ち良いに決まっていますう♡♡ っんあ——っ♡)

マスターとセックスしていた女性達の使っていた淫語を学習したせいか、脳内でスケベな言葉を何度も繰り返しながら自慰行為を続けている。

自慰行為自体はとっても気持ちが良い筈なのに、目の前でその何倍も気持ち良さそうに哭いていたアルトリアオルタ達がいるせいで、羨ましいという気持ちが快感を邪魔してしまう。

(私も先輩のおちんぼ欲しいですっ♡♡♡ あうっ♡♡ ドロドロのシチューみたいな精液で、お腹が膨らむまで射精して貰いたい……っ♡ お口でご奉仕したいですっ♡♡♡ あっ♡ あっ♡♡ ああ——

——つ)

多少のノイズがあっても快感は少しずつ高まっていき、マシユは真上を向きながら何度目かの絶頂に達してしまう。背中や腰をビクビクと震わせながら、膣口から愛液をびゅっ♡♡びゅっ♡♡と噴き出す。

目の前が真っ白な光で見えなくなり、背中から頭に向かって電流のような快感がビリビリと流れる。

マシユは自分の意思に反して、足を動かしてしまった。

——ガタツ

『えっ……誰かいる?』

——ツ!?)

自分がやらかしてしまったことにマシユは気が付く。

一瞬で冷静になった彼女はマスターが気が付いていないことを願うが、彼はゆつくりとクローゼットの方へと近付いてきていた。

(だっ、ダメですっ♡♡先輩のエッチを覗いて、オナニーしてたのがバレちゃいます……っ♡♡先輩に変態だって思われちゃうっ♡)

マシユがパニックになっている間に、マスターはクローゼットの前まで辿り着いてしまう。クローゼットの取っ手に、その両手を掛けている。

(どっ、どうすればっ♡♡♡衣服を直さなきゅいけないのに……っ♡♡あ——つ)

——ギイ……バタツ

「……マシユ」

「せっ、先輩っ♡♡♡こっ、これは違うんです……っ♡♡ダ・ヴィンチさんに鍵を渡されてっ♡♡♡こっでっ♡♡こっで——」

何か言い訳をしようとマシユは言葉を紡いでいるが、その内容は支離滅裂である。

今の彼女の格好はスカートをお腹の辺りで纏めており、黒タイツとショーツを膝下まで下していた。愛液で濡れた卑猥な肉の割れ目がマスターからも丸見えであり、お尻の下には愛液の水溜まりが出来ている。

クローゼットの中はマシユの濃い淫臭で満たされており、誰が見ても自慰行為をしていたのは明白であった。

そんなマシユの痴態をマスターが見ていると、自然と血流が下腹部に集まってしまふ。元々、勃起していたペニスが更に大きくなって反り返る。

「——こっ、これは不可抗力だ……た………んっ♡ おっ、おおきい♡♡」

勃起したペニスを至近距離で、マシユは見ってしまった。

彼女の言い訳が途中で止まり、間近でその雄の濃い臭いを鼻を鳴らしてクンクンと嗅ぎながら、自慰行為のおかずになっていたペニスに熱い視線を送ってしまう。

本人も無意識の内にスケベな雌の顔をしてしまうマシユに対して、マスターはペニスを近付ける。

彼女の鼻先まで握り拳と同じ位に大きそうな亀頭が近付き、まだ精液などでドロドロに汚れているペニスの熱気を肌で感じるマシユ。はしたないことだと分かっているにもかかわらず、深呼吸でもするかのように臭いを嗅いでしまふ。

「すう——っ♡♡♡ はあ——っ♡♡♡ すう——っ♡♡♡
♡♡ はあ——っ♡♡♡ 濃い臭いで頭がクラクラしますっ♡♡♡ こ
んな大きくて長いのが、おまんこにズポズポってっ♡♡♡ すう——
——っ」

一嗅ぎ毎にマシユの膣口から、粘性の強い愛液が溢れてくる。

マスターのペニスとの交尾を彼女の肉体が想定してしまい、少しでも挿入がスムーズになるように膣や子宮が準備を始めてしまっているのだ。

ペニスの臭いを嗅ぐことに夢中になっているマシユに、マスターは次のステップに進ませるための許可を出した。

「マシユが良かったら、触っても良いよ」

「~~~~~っ♡♡♡ せつ、先輩のおちんぽにっ♡♡」

顔を林檎のように真っ赤にさせるマシユは、欲望に抗い切れずにおずおずと両手を伸ばしてしまふ。彼女の両手がペニスに触れると、ぐちゅっ♡♡と粘っこい水音が鳴った。

「あつ、熱いですっ♡♡ 手が火傷してしまいそうっ♡♡ ふっ、太すぎて指が回りきらない♡♡♡ 先輩のおちんぽ凄いです…っ♡♡」

口から独り言のようにペニスを触った感想を呟きながら、アルトリアオルタがやっていったように陰茎をゆっくりと扱ってしまう。ぐちゅぐちゅと卑猥な音が鳴り、湿った温かい息をペニスに吹きかけながら、手コキを始めていた。

四時間以上ずっとマスターの情事を覗いていただけあって、初めてとは思えない程にマシユの手淫は上手であった。上目遣いで彼が気持ち良くなっているかを確認しながら、両手を使ってマスターにご奉仕をしている。

「ああっ♡♡ 先輩のおちんぽがビクビクって震えますっ♡♡♡ アルトリアオルタさんみたいに先っぽも弄った方が気持ち良いですよね？♡♡ んっ————♡♡♡ こうやって唾液をおちんぽの先っぽに垂らしてっ♡♡♡ 良い子良い子って撫でれば良いんですよっ♡♡♡」

完全にこのエツチな雰囲気酔ってしまったマシユは、右手で陰茎を粘っこい水音をさせてながら抜き、左手で唾液を垂らして滑りの良くなった亀頭をグリグリと撫で回している。

亀頭の先端から先走りの汁がトプトプと溢れて、陰茎全体を満遍なく覆っていく。それがローションの代わりとなって、マシユの手淫のスピードは更に速まっていった。

暫くしてマスターにも限界が訪れた。

マシユの手の中で一際大きく脈打ち始め、大きな亀頭が更に膨らむ。

「——っ。もう射精そうっ。マシユの手が気持ち良くて射精るっ」

「あはっ♡♡♡ いっぱい射精して下さいっ♡♡ 先輩の精液を掛けて欲しいですっ♡♡」

——びゅぶっ♡♡

亀頭の先端から白濁とした精液が飛び出す。

本日だけで軽く二十回は射精しているが、未だに全く衰える様子の無い大量射精が始まった。

びゅぶっ♡♡ びゅっ♡♡ ぶぶびゅっ♡♡ びゅぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ♡♡

♡♡♡ どびゆるるるるるるるっ♡♡♡ びゅぶぶぶぶぶぶぶぶぶっ♡♡♡
びゅくっ♡ びゅくっ♡♡ びゅぶるるるるるるっ♡♡♡

びゅぶ……びゅっ♡♡

「——きゃっ♡♡ ああっ……凄いですっ♡♡♡」

マシユの桃色の髪や黒縁の眼鏡のレンズ、パーカーなどの服にも、大量の精液が掛かっていく。彼女は嬉しそうな表情をしながら、マス

ターの射精を受け止めている。これまでとは比べ物にならない濃密な精液の臭いに、マシユは更に酔ってしまふ。

(先輩の精液の臭い、好きな臭いですっ♡♡ 嗅いでるだけで頭がフワフワしてきて、お腹がキュンキュンしますっ♡♡♡)

口の周りにも粘性の高いお粥のような精液が付着しており、マシユはモードレッドがしていたように精液をペロリと舐め取ってしまう。口の中には精臭と共に濃厚なコクと僅かにえぐみを感じる。

(精液が濃い……っ♡♡ のどに絡みついて、少し変な味ですけど……嫌いじゃないですっ♡♡♡ もつと欲しい♡♡)

マシユは自分の眼鏡を外すと、レンズにこびり付いている精液をじゆるじゆると音を立てて啜り始めた。口の中でプチプチと粘っこい精液を噛んで、自分の唾液と混ぜ合わせながらじつくりと味わう。

「じゆるっ♡♡ ぢゅっ♡♡ ぢゆるるっ♡♡ んぐっ……ん………ん……っ♡♡ ——んぐっ♡♡ ぷはっ♡♡ 先輩の精液とつても濃くて、美味しいですっ♡♡♡ ああ……まだまだいっぱいっ♡♡ ……あくんっ♡♡」

顔に付いた精液を指でこそぎ落として、それを指ごとおしゃぶりするマシユは、誰がどう見ても淫魔の類であった。彼女のお尻からは、先端がハート型の尻尾が生えているのをマスターは幻視してしまう。淫靡な表情をしているマシユを見てだけで、マスターのペニスにはまた血流が集まっていく。八割程度から十割まで怒張する。

自分の体に掛かった精液を舐め取るのに集中していたマシユだったが、再び怒張したペニスを目にして、彼女のアメジストに良く似た瞳が妖しく光る。じゆるじゆると水音を立てながらおしゃぶりしていた自分の指を口から引き抜いて、マスターのペニスに愛おしそうに頬擦りをした。

「はあ……っ♡♡ 先輩のおちんぽっ♡♡♡ まだまだ元気です……っ♡♡ 私で良ければ、おちんぽ扱かせて頂きますっ♡♡♡♡

「……………どうでしょうか？♡♡」

「……………お願いしても良い？」

マスターの返事を聞いたマシユは、妖艶な笑みを浮かべながら嬉しそうに頷いた。

「我慢せずに沢山、射精して下さいっ♡♡♡ 先輩の性欲を処理させて頂きます……………っ♡♡♡♡」

亀頭の先端から垂れる精液を開いた口で受け止めながら、マシユは両手を使った手コキを再開する。ぬちゃぬちゃと卑猥な水音と彼女の荒い息遣いが、部屋には響いていた。

場の空気に酔ってしまったマシユが正気に戻るのには、まだまだ先になりそうだ。

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―3

「————じゅるっ♡♡♡ ぢゅるるるっ♡♡♡♡ じゅっちゅっ♡♡♡
ぢゅるるるっ♡ ちゅぢゅっ♡♡♡ じゅぢゅるるっ♡♡♡♡」

何かを啜るような卑猥な水音と共に、んぐっ♡♡♡ んぐっ♡♡♡とくぐもった呻き声が部屋中に響いていた。

そんな精通を終えた男子であれば、聞いているだけで股座がいきり立ってしまうような、イヤらしいBGMがクローゼットの中では絶え間なくしている。

時間経過と共に睾丸の中で大量の精子が生産されており、陰茎には大量の血流が送られている証拠でもある太い血管が浮かび上がっていた。淫水焼けた赤銅色のペニスに耳を押し当てれば、ドクっドクっど鼓動が聞こえてきそうな程に力強く脈打っている。ペニスの脈動に合わせて亀頭の先端である尿道口からは、透明なカウパー液がトプトプと溢れていた。

そんな女の細腕よりも遥かに太いペニスを、マシユ・キリエライトは口一杯に頬張っている。

女性の握り拳よりも大きい亀頭を彼女は口の中に含み、頬袋に木の実を詰めたリスのように頬を膨らませていた。

マスターのペニスをおしやぶりするために、マシユはその端整な顔立ちを歪めている。

元が美少女であればあるほど、ひよつとこの面にも似た下品なフェラチオ顔は男を興奮させた。

「ぢゅちゅっ♡♡♡ ちゅるるるっ♡ じゅるるるっ♡♡♡ んっ——
——ぷはあ♡♡♡♡ はあっ♡♡♡………はあっ♡ 大き過ぎて根元まで唾えられませんか……っ♡♡♡ 先っぽからエッチなお汁がドクっ♡♡ ドクっ♡♡て、溢れてきますっ♡♡ もっとおちんぽが気持ち良くなれるように頑張りますね♡♡ ちゅっ♡♡ ぢゅるる——
——っ」

未だに淫靡な雰囲気には酔っているマシユは、手コキだけでは満足が出来なくなってしまうた。

花に吸い寄せられる蝶々のように彼女の可憐な唇がペニスに近づき、大事なファーストキスを亀頭に捧げてしまう。桜色の瑞々しいプルンとした唇で、亀頭の先端に口付けをしてしまったのだ。

一度ペニスにキスを捧げてしまったからには、マシユは本当に我慢が出来なくなる。

唾液に濡れた舌先でカリ高の亀頭の傘部分を嘗め回したり、口に含んで内頬で亀頭を優しくマッサージしながら裏筋を舌先でゾリゾリとなぞり上げている。亀頭の先端からドクドクと溢れるカウパー液を、じゆるじゆると卑猥な音をさせて啜ってしまふ。

正常な味覚であればペニスや先走り汁が美味しい筈が無いのだが、雌としての本能がマスターの体や体液を美味しいと認識してしまう。マシユの子宮が雄の精を求めて、キyunキyunと疼いている。

(先輩のおちんぽ美味しい……っ♡♡♡ 臭いが濃くって頭がクラクラしますっ♡♡ 少ししょっぱいお汁も美味しいですけど……早く精液が欲しいです♡♡♡)

相手に尽くしたい願望が強いタイプであるマシユは、マスターが気持ち良くなれるように一生懸命にご奉仕をしていた。まだまだアルトリアオルタ達に比べれば拙い舌や唇の動かし方だが、上目遣いで相手の顔を見詰めながら熱心にペニスをしゃぶる彼女の姿は、それを見ただけで射精感が込み上げてくるほどに淫らである。

マシユの顎がフェラチオで少し疲れてきた頃には、彼女の口内で亀頭が膨らんでいた。

陰茎がビクビクと大きく震え始め、野球ボールのような大きさの睾丸がぐぐつと持ち上がる。透明なカウパー液が白く濁り、濃厚な精液が混じりはじめた。

(~~~~~) おちんぽが膨らんで、お口の中で暴れていますっ♡♡♡ 射精が近いんです……っ♡♡♡)

「じゅるるっ♡♡♡ ぢゅぢゅっ♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡ はあ……っ♡♡♡
はあ……っ♡♡♡ んっ♡♡♡ ……先輩のおちんぽ震えてますっ♡♡♡
もう射精しそうなんですネ?♡♡♡」

亀頭に愛おしそうに頬擦りをするマシユは、両手で陰茎を握りぐちゅぐちゅと卑猥な水音を立てながらペニスを扱っている。射精を我慢して少し苦しそうな表情をしているマスターは、彼女の桃色の髪を右手で撫でながら答えた。

「——うん、射精そうっ。無理して飲まなくて良いからっ」

「いっ、嫌ですっ♡♡♡ 飲みますっ♡♡♡ 先輩の精液を飲みたいですっ♡♡♡ ちゅっ♡♡♡ ——ちゅぷっ♡♡♡ ぢゅるるっ♡♡♡ ぷはあ……っ♡♡♡ 私のお口の中につ♡♡♡ どびゅどびゅっ♡♡♡ て射精して下さい……っ♡♡♡ 美味しい精液飲ませて下さいっ♡♡♡ ——ちゅるるっ♡♡♡」

初めてフェラチオで口内に大量に精液を吐き出されるのは厳しいと思い、マスターは善意から飲まなくても大丈夫だと伝えた。しかし、マシユは蕩けて発情したメスの顔をしながら、自分の口内に射精して欲しいと懇願する。

亀頭の半分ほどを咥え込んだちゅうっ♡♡♡と吸い付き、射精を促すように尿道口を舌先でペロペロと舐める。その尿道口への快感が射精への引き金となったのか、マスターは彼女の頭を両手で押さえた。

「——っ。まっ、マシユの口の中に射精すよっ」

「じゅずずっ♡♡♡ じゅるる♡♡♡ んん——っ!?!♡♡♡」

——びゅるるっ♡♡♡

現在進行形で睾丸から大量に生産され続けている精液が陰茎という長いホースを通って、亀頭の先端から吐き出される。

雄の精臭のする荒い息を吐き出すマシユは、羞恥を感じながら下品なおくびを零してしまう。

羞恥に震える彼女は、口に手を当てておくびを抑えようとしているが、胃の中に溜まった大量の精液から発生するガスが呼気と共に我慢しても自然と漏れ出る。胃の中がカツと焼けるように熱く、下腹部が異常な程にキュンキュンと疼いてしまう。

物理的にもそのガスの発生を抑える術はないため、どうやってもおくびが止まらない。

「げふ——う♡♡ げえぶ…:…つ♡ うぶつ♡♡ んっ♡ ガスが止まらなくて——うっ♡♡ げええ…:…:…:…ぶッ♡♡♡」

おくびを出すことをマシユが恥ずかしかっているからこそ、平然とされるよりも淫らに見えてしまう。

彼女のイヤらしい姿と下品なおくびの音を聞いて、マスターのペニスはまた元気を取り戻す。ビキビキと音が聞こえて来そうな程に限界まで勃起して、天を衝くようにそそり立っていた。

クローゼットの中に座り込んでいるマシユは、目の前にマスターが立っているため逃げ場がない。

再度勃起したペニスが自然と彼女の顔の位置に来るため、彼が興奮していることが直ぐに分かってしまう。

甘ったるい雄に媚びるような雌の声を出してしまうマシユは、膣口から粘っこい愛蜜を噴き零しながら次のご奉仕を提案する。

「~~~~~っ♡♡♡ んぶっ♡♡ 先輩のおちんぼが、ガチガチに勃起していますっ♡♡♡ まだまだ射精しないとですよね…:…♡♡ げえ…:…ふっ♡♡♡ 次はスカサハさんと同じように、おっぱいで挟んでご奉仕させていただきますっ♡♡♡ う…:…:…♡♡」

カルデアのロゴの入った真っ赤なネクタイをマシユはスルリと外して、黒のワンピースのような制服を脱いだ。彼女の上半身はブラ

ジャーだけを身に着けた状態になる。

華奢な肩や細い二の腕、引き締まっている腹部が露出された。

肩や腕、お腹周りなど全体的に細身であるのに、バストだけは平均より遥かに大きい。

清楚な印象を与えるレースのあしらわれた白色のブラジャーの中に、大きな乳房が窮屈そうに押し込められていた。マシユは服の上からでもそれなりに発育の良い女性らしい体型に見えるが、目測を更に超えて着痩せするタイプのようである。

一瞬の躊躇いが確かにあったが、マシユはブラジャーのホックを震える指先で外した。

彼女のたわわに実った乳房が、ブラジャーという拘束から解放された。搗き立てのお餅のような、白くて柔らかそうなおっぱいがブルンっ♡♡と大きく揺れる。

元からマシユは色白な方であるが、太陽の光に当たっていない乳房は更に真っ白であった。

色素が薄目な桃色のぷつくりと膨らんだ乳輪の上には、ピンと勃った乳首が堂々と主張している。白色と桃色のコントラストは、見惚れてしまいそうな程に綺麗だった。

呼吸に合わせてふよふよと揺れる乳房は、触らなくとも分かるほどの柔らかさである。しかし、若さによる反則だが大きな乳房であるのにも関わらず、重力に完全に逆らうハリが兼ね備えられていた。

その乳房を上から見下ろしているマスターは、口から自然と感想が漏れ出る。

「——マシユのおっぱい綺麗だね」

「~~~~~っっ♡♡♡ うっ、嬉しいですっ♡♡ スカサハさんやナイチンゲールさんよりも下手ですけど、私のおっぱいで気持ち良くなつて下さい……っ♡♡」

マスターに近付いて膝立ちになったマシユは、彼の長大なペニスをその大きな乳房で挟む。

彼女の平均よりも大きな乳房でも、亀頭や陰茎の上部が完全に露出していた。乳房の間が火傷いてしまいそうな程に熱く、その大きなペニスに改めて圧倒されてしまう。

「先輩のおちんぽっ♡♡ とつても大きいです……っ♡♡♡ 私のおっぱいでも全然、包み込めない♡♡ おっぱいから逃げてしまいそうな位に、ビクビクと暴れてますっ♡♡♡ ——んっ♡♡♡」

ビクっ♡♡ ビクっ♡♡と脈打つペニスがマシユの乳房の間で震えており、それを押さえるために両腕で左右から挟む。既にペニス全体が精液や彼女の唾液で濡れているため、汗ばんだ乳房のお陰で全体的に滑りが良くなっていた。

マシユはペニスを乳房で挟み込んだ状態で、軽く体を上下に揺する。

滑りが悪く途中でペニスが引つかかってしまうことも無く、追加で潤滑油となる唾液を垂らさなくても、十分にパイズリが出来ると彼女は判断したようだ。

「んっ♡♡ 始めますねっ♡ ん——しよっ♡♡」

——ずちゅっ♡♡ ……ずちゅ♡♡ ……ずちゅっ♡♡ ……ずちゅっ♡♡

粘っこい水音がマシユの胸元で鳴る。

マスターのペニスに自分の乳房の匂いを擦り付けるように、マシユはゆっくりと身体を上下に動かし始めた。

汗でしっとりとしたモチ肌の柔らかな乳房が、長大なペニスの形に合わせて吸い付くように形を変える。マスターは歯を食いしばって、自分専用に変えるおっぱいオナホの感覚を味わう。気を抜けば直ぐにも射精してしまいそうな程に気持ち良かった。

「——っ。うっ、マシユのおっぱいふわふわなのに、吸い付いて気持ち良すぎるっ」

「ほっ、本当ですかっ♡♡ とつても嬉しいです……っ♡ 寂しそう
な先っぽも、お口で気持ち良くしますね?♡♡ ——じゅるるっ

♡ ぢゅるるっ♡♡ ぢゅるるる……っ♡♡♡♡」

マスターに気持ち良いと言われて声を弾ませて喜ぶマシユは、乳房に挟まれていない亀頭部分を唇や舌先を使って愛撫する。乳房と口の両方を使って、彼のペニスに対して熱心にご奉仕を始めた。

ペニスの竿部分を乳房で擦る水音と亀頭を口で愛撫する水音、二つの淫靡な水音がクローゼットの中で反響している。

次第にマシユの興奮も高まっていき、その興奮を表すように身体を上下に揺らす動きも早まっていく。激しい運動で全身から発汗してしまい、乳房の滑りも更に良くなる。

マシユも性的興奮で硬くシユった乳首がマスターの腹筋でズリズリと擦れて、気持ち良くなってしまう。自分の指先で膣口を弄るよりも、彼の体で乳首が擦れる方が何倍も気持ちが良い。

マスターにご奉仕が出来ているという精神的な充足感も同時に得ながら、秘所から粘っこい交尾用の愛液をピユっ♡♡ ピユっ♡♡と噴き出す。亀頭の先端から少し精液の混じった先走りの汁を啜りながら、乳房を挟む両腕の力を更に強める。

(乳首が擦れて気持ち良いっ♡♡ おちんぽが更に熱くなって、しよっぱいお汁に精液の味が混ざってきてます……っ♡♡ ——
—また射精して貰えそうですっ♡♡♡♡)

「じゅるるっ♡♡♡ ちゅっ♡♡ ちゅぷっ………はあっ♡♡♡ 先
輩のためのおっぱいですから、我慢しないで精液びゅーっ♡♡♡
ていっぱい出してください♡♡ ちゅっ♡♡ ちゅる——っ♡♡
「♡

——じゅ……ぱんっ♡♡♡ ぢゅ——ぱんっ♡♡♡ じゅっ

二スに血流が集まって海綿体が膨らんでいく。

もつともつと目の前の少女を犯して、胎の中に濃い精を注ぎ込み孕ませたいと、彼の中にいる獣性が叫んでいた。彼女の眼前に勃起したペニスを突き付けて、獣のような雄の相貌をしながら話し掛ける。

「——マシユ。もう我慢出来ない……マシユとセックスしたい」
「~~~~~つつつ っ♡♡♡ せつ、セックスっ♡♡♡ 先輩とセックス……っ♡♡♡」

マシユは顔をサ克蘭ボのように真っ赤にしながら、膣口から粘っこい愛蜜をこぶっ♡♡と垂らした。動揺と歓喜で右往左往している彼女に、マスターが性行為をしても良いのかと確認をする。

「マシユは俺とセックスしたくない？」
「わっ、私もセックスしたい……ですっ♡♡♡ アルトリアオルタさん達と同じように、おまんこにおちんぼでずぼずぼされてっ♡♡ ナカに精液びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡て、出して欲しいですっ♡♡♡ あ——っ♡♡♡」

勢いに任せて欲望を吐露してしまったマシユは、マスターの獣のような眼を見てしまう。

この眼をしていた彼がナイチンゲール達を貪っていたのを知っているからこそ、自分もこれから同じにされてしまうのだと頭が理解してしまう。

マスターの『立って後ろを向いて』という言葉に、マシユの発情した体が勝手に従った。狭いクローゼットの中では自然と腰を曲げて立つことになり、肉感的な桃尻を彼に向って突き出すような体勢になる。膣口からまるで涎のように、粘り気の強い交尾用の蜜を垂らしていた。

これまで以上に子宮の疼きを感じるマシユは、緊張で震える声を出しながらおねだりをする。

「がっ、我慢出来ないの、もう先輩のおちんぽ下さいっ♡♡♡ お腹がキュンキュンと疼いて、切ないんですっ♡♡」

後ろを向いているマシユからはマスターの表情を確認することは出来ないが、彼の両手が彼女の細腰をがっしりと掴んだ。その両手はメスを絶対に逃がさないという、オスのギラついた欲望が垣間見える無言の主張だった。

マシユの真っ赤に染まった耳元で、マスターが驚くほどに低い声で囁く。

「——ごめんね。手加減とか出来ないかも」

番外編：盾の少女は、女の悦びを知る―4

発情したマシユの淫らなおねだりをされて、理性の限界を迎えてしまったマスターは、雄のギラついた欲望の炎が灯った蒼い瞳で彼女のしとどに濡れた秘所を見詰めている。

性的興奮でマシユの小陰唇は開いており、ピンク色の艶肉や膣口が見えていた。

その膣口はペニスを求めてくぱくぱと開閉を繰り返し、開閉に合わせて粘っこい愛蜜をトロトロと垂らしている。快感に伴って出るサラサラとした愛液では無く、粘性の高い愛液は肉体が性行為を求めているからだ。

早く子宮に子種を注いで欲しいと、マシユの身体は交尾の準備を完了していた。

全身から女の甘酸っぱい体臭と共に、雄を興奮させる濃密なフェロモンを発している。

男性の鼻腔に雌の発情フェロモンが入れば、ドロドロのチョコレートのように理性を溶かしていた。それらの男性の例にマスターも漏れず、これまでのマシユの痴態もあって完全に生殖本能に支配されている。

意図したものでは無いがマスターは普段よりも低い声で、耳の先端まで真っ赤に染まっているマシユに囁いた。それは辛うじて残った彼の優しさだったのだろう。

「――ごめんね。手加減とか出来ないかも」

「ひうつ♡♡ せつ、先輩♡♡ はっ、ハジメテなので、最初は優しくが――ひいつ♡♡♡♡」

優しく初体験を迎えたいとマシユは言うが、マスターは無言のまま彼女の細腰を掴む両手の力を強めた。彼が本当に手加減をする気が一切無いことが、マシユには分かってしまい小さな悲鳴が漏れる。

（いつ、いつもの優しい先輩じゃないです♡ スカサハさんのように

反抗心が湧かなくなるまで、おちんぽで躰けられちゃいますっ♡♡
子宮いっぱいどちゅどちゅっておちんぽで突かれて、お腹が膨らむま
で精液を注がれちゃいます……っ♡♡♡)

娼婦でさえ恥じらいでしまいそうな雌の顔をするスカサハが『マス
ターの性処理奴隷にチンポを恵んでくれっ♡♡ チンポ無しでは生
きていけない雌犬だから……っ♡♡♡ もつと……もつと可愛がっ
てくれ♡♡』と、聞いている方が恥ずかしくなってしまうような媚び
方をしていたのをマシユは思い出す。

自分もスカサハと同じになっってしまうとマシユは危惧しているが、
マスターから逃げられる筈も無い。クローゼットの中に押し込めら
れた状態で、彼にお尻を向けて腰を掴まれている。

蜜を溢れさせる膣口にペニスの先端を触れ合わせ、後は腰を押し出
せばマシユの処女を奪える状況になっていた。

処女喪失からの孕ませ交尾をされてしまうという実感が、マシユの
中で確かなものになっっていく。サーヴァントであるアルトリアオ
ルタ達と違って、生身の人間である彼女はマスターの強々精子を子宮
に注がれば、簡単に受精してしまうと本能が理解していた。

(~~~~~っ♡♡♡ ダ・ヴィンチさんと同じ、”お母さん”
になっっちゃっ♡♡)

聖母のような微笑を浮かべながら愛する人との間に出来た子供が
宿る、自身の膨らんだお腹を撫でるダ・ヴィンチの姿が、マシユの脳
内では鮮明に映し出されていた。

自分もダ・ヴィンチと同じ”母親”にされてしまうとキチンと理解
しているが、それに対して微塵も抵抗感や忌避感を覚えられない。た
だ喜びだけがマシユの胸中には渦巻いている。人工授精によってホ
ムンクルスのように造られた自分が、こうして”愛する人”とまぐわ
い子供を産めるということに感動すら覚えていた。

ダ・ヴィンチからの質問であったマスターへの好きが、親愛として
の好きなのか、それとも恋愛としての好きなのかの答えが見付かる。
セックスを始める直前になって、ようやくマシユは自分の本心を理解
したのだ。

(あ——っ♡♡ 私は異性として先輩のことが好きですっ♡♡
先輩の赤ちゃん産みたい……っ♡♡♡ 先輩のことが大好きですっ♡♡)

一度自分の恋心を自覚してしまえば、後は底なしの沼に沈んでいくようにマスターへの気持ちに溺れてしまう。これまで以上に体が火照って仕方がない。

直ぐにでも愛する人のペニスを、膣や子宮で受け入れたくなくなってしまふ。自分でもはしたない淫乱な女だと分かっているが、一刻も早く犯して貰いたかった。

マシユは後ろを振り向いてマスターを愛欲で蕩けた視線を向けながら、誘うように桃尻をフリフリと左右に振る。スカサハと同じ雄に媚びる甘ったるい雌の声を出しながら、彼に告白とおねだりをした。

「——おちんぼ下さいっ♡♡ 先輩の精子で孕ませて欲しいです……っ♡♡♡ 先輩のこと大好きです——あっ♡♡♡」

——くちゅっ♡♡

トロトロと蜜を溢れさせる膣孔に、マスターの亀頭の一部が埋まる。彼が腰をほんの少しだけ押したのだ。マシユの子宮を守っているのは、頼りない処女膜だけである。それも彼の剛槍のようなペニスの前では、有って無いようなものだ。

マシユは処女喪失の緊張から声を震わせて、マスターへの愛の言葉を紡ごうとするが……

「先輩のモノにして下さいっ♡♡♡ 愛してま——」

——バッチュンっつっ!!!

「——いひゅっ?!♡♡♡」

肺の空気が全て抜けてしまったような音が、目を剥くマシユの口か

ら吐き出された。

最早、彼女に声を掛ける余裕すら無くなってしまいう程に性欲の化身となったマスターは、自分の腰を彼女の桃尻に思いつ切り叩き付けたのだ。

マシユの肉感たつぷりの白い尻タブが波打っている。

彼女の膣はマスターの極太ペニスでミチミチと拡がり、穢れを知らなかった子宮は凶悪な亀頭で押し潰されていた。

全身をガクガクと震わせているマシユは、目の前が白い光で見えなくなり、呼吸が上手く出来ない。過呼吸の時のような状態になりながら、下腹部から脳髓に流れる快感という名の稲妻にその身を焼かれている。お腹の圧迫感と処女膜を破られた痛みだけが、彼女の意識を辛うじて繋ぎ止めてくれていた。

（~~~~~あつ?!~~~~~ これダメっ~~~~~ ダメ——っ
こわ……………れっ~~~~~ いひっ~~~~~）

悲鳴の代わりなのか尿道口から、尿のように大量の潮を噴いている。

内腿やクローゼットの床をびちゃびちゃと濡らしながら、少しずつ脳が大き過ぎる快感を処理を始めていく。

「——あつ~~~~~ あつ?~~~~~ ……あつ!~~~~~ ああつ?!~~~~~」

自分の状態を理解出来ない困惑とこれまで感じたことのない快感から、マシユは母音だけで間抜けな声を上げてしまう。肉体の方は既に快感を受け取っているのだが、心と脳が処理し切れていないのだ。

快感で両脚に力が入らなくなり、クローゼットの壁に両手や上腕を着けて体勢を何とか保っている。殆どはマスターのペニスと太ももに、マシユの下半身は支えられているような状態であった。

これまでの自慰行為やフェラチオで感じていた絶頂とは比べられない程に、深く深く達してしまう。マシユの肉体からかなり遅れて、

心と脳がようやく快感を理解し始めた。打ち上げ花火のような強く大きな快感が、彼女の脳内を埋め尽くす。

背中を弓のように反らせて大きな乳房をクローゼットの壁に押し付けながら、ナイチンゲール達が絶頂した時に上げていたような絶叫にも近い嬌声を出す。

「おっ♡♡♡ おくっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あいっ♡♡♡ い
っ♡♡♡ イっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡
ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡
♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ ———っ♡♡♡」

相手に可愛く思われたいなどの余裕が一切感じられない、ただ快感を少しでも逃そうとする絶叫。それは特異点攻略でも常に傍にいたマスターでさえ、聞いたことの無い声であった。

マスターの股間と雄の獣性に響く雌の絶叫であり、ただでさえ理性が蒸発している彼の嗜虐心を際限なく煽っていく。もつと目の前の雌の媚肉を味わい尽くしたいと、マシユの細腰を掴む両腕に力を込めながら、腰を引いて雁首で膣襞を掘削していった。

未だに絶頂から抜け出せていないマシユは、膣襞をゴリゴリと音が聞こえてきそうな程にカリ高い雁首で穿られる快感に悲鳴を上げる。これは彼女の膣肉と子宮を服従させるための暴力に他ならない。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ああっ♡♡♡
——っ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡
ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡ ええっ♡♡♡
っ♡♡♡ うっ♡♡♡ ———っ♡♡♡」

必死に膣掘削のペニスの引き抜きを止めると、マシユが頭を振り乱しながらお願いしている。今の余裕が無い彼女は、普段の敬語を使う余裕がない。

しかし、理性の溶けたマスターはマシユが自分のモノになるまで、

この暴力ピストンを止める筈も無かった。

「お、おっ♡♡♡ しょっ、しょこ♡♡♡ むり♡♡♡ お、お——っ♡♡♡ あく♡♡♡ うっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ 突くのだめっ♡♡♡ 死んじやうう…:…っ♡♡♡ しんじや——うっ♡♡♡ つ♡♡♡ お、くくくくくくく♡♡♡」

膣から完全に抜けきつたしまうギリギリまでペニスを引き抜き、ほんの少しだけ間を置いて、自分の腰をマシユの尻タブに思い切り叩き付ける。二回目にして彼女の尻タブが、真っ赤に腫れ始めていた。

半開きの口から舌を突き出すマシユは、マスターのペニスに膣と子宮を凌辱されていた。ただの人間であれば狂ってしまったし、まいそうな程の快感が、洪水のように絶え間なく襲ってきている。彼女が疑似サーヴアントとして造られ、色々と頑丈であったから辛うじて耐えられている状態であった。

一般人がマシユと同じ性行為をマスターにされていけば、廃人になりかねない程の快感である。現在進行形でマシユの膣肉や子宮が性感帯として開発されており、脳髓に送られる快感は大きくなるばかりであった。

ペニスの深い雁首に泡立った愛蜜を掻き出され、妊娠しやすくさせるための先走り汁が子宮内に入り込んでいく。子宮が潰れて形を変えらるまで突かれる度に、ポルチオ快感と雄への服従心が育てられる。

「——く、うっ♡♡♡ お、……………いひっ♡♡♡ ——イっく、う♡♡♡」

絶頂から抜け出せなくなったマシユは、全身に力が入らなくなっていた。

上半身はクローゼットの壁にお腹が着くまで押し付けられ、下半身はマスターの両腕とペニスに支えられている。子宮に自分の体重が掛かり、より強い服従アクメを覚えさせられてしまう。

目尻から止めどなく涙を流し、口端から涎をだらだらと垂らし、顔中を自分の体液でドロドロに汚しながら、マシユは淫らに蕩けた表情を浮かべるようになっていた。桃色の髪に隠れていない紫色の瞳は、快楽でドロリと濁っている。

終わらない絶頂に両足がつま先立ちになっているが、マスターに持ち上げられているため、両足が床に着いていない。地に足の着かないフワリとした浮遊感は、更に現実感のない天にも昇るような絶頂へと誘っていた。

マスターが腰を叩き付ける度に、マシユの全身が子宮を支えに持ち上がる。何度も何度も子宮が押し潰される度に、下腹部から全身の末端まで駆け巡るような悲鳴の代わりに快感が発生した。

五十を超えるペニスの突きを受けた時、遂に子宮が白旗を上げてしまう。

——ぷりゅ♡♡

「~~~~~♡♡♡♡♡ れたあ♡♡ れちやつたあ♡ いひゅ
——♡♡♡」

卵巢から赤ちゃんの素となる卵が出てしまった。

マシユ自身も排卵したことが、本能によつて何故か分かつてしまう。排卵日は本来ならもう少し先であったはずだが、硬く怒張した亀頭に子宮を突かれ過ぎて、排卵の周期を早めてしまったのだ。

卵管に卵子が飛び出しているので、後は精子が結合すればマシユは妊娠してしまう。

おおよその卵子の寿命となる一日の間、精子と卵子が結合せずに時間が経過すれば妊娠の可能性は無くなる。しかし、マスターの濃く量も多い精で孕まないなど、万が一にもありえないことだった。

雌の孕む準備が出来たことを無意識に察したか、マスターのずつしりと重たい睾丸が持ち上がり、マシユの膣内で亀頭が膨らみ始めた。ペニス全体が大きく何度も脈打ち、射精が近いことが彼女にも分かかってしまう。

マシユの僅かに残った冷静な思考が、己の未来を悟っていた。

(もう直ぐ私の子宮に、先輩の精液が出されちゃいます……っ♡♡
卵が出ちゃったから、赤ちゃん妊娠しちゃうの決まっちゃいますっ♡

♡♡先輩のお嫁さんに……っ♡♡~~~~~♡♡)

自分の幸せな未来を想像して、全身を幸福感が包み込む。

胸の辺りがポカポカと温かくなって、膣全体がキyunキyunと締まってしまう。その刺激が最後の引き金となった……

——ドっチyunっ
!!!!!!

「——おひいっ♡♡♡」

クローゼットの壁に頬を擦り付けながら、マシユは短い悲鳴を上げる。

雌を孕ませることしか考えていないマスターは、マシユに最後の止めを刺すかのように、彼女の体が浮く程の強さで腰を叩き付けた。

子宮口に亀頭が僅かにめり込み、その状態で長い長い吐精が始まる。

びゅぶゅっ♡♡ぶゅゅっ♡♡ぶゅゅっ♡♡ぶゅゅるるるっ♡♡びゅぶゅっ♡♡びゅぶゅっ♡♡びゅぶゅぶゅぶゅぶゅぶゅぶゅぶゅっ♡♡どびゅっ♡♡どびゅっ♡♡どびゅびゅびゅびゅびゅっ♡♡びゅるる……びゅ

「~~~~~っ♡♡~~~~~あっ♡」

声にならない嬌声をマシユは上げる。

睾丸でグツグツと煮だったこれまでで一番濃い精液が、子宮内に直に注ぎ込まれる。子宮の容量を超えて卵管まで精液で満たし、それも収まり切らないためにお腹が膨らんでいく。

マシユの脳みそが快感の海でブクブクと溺れる。

快樂物質となるドーパミンが過剰に分泌され、今までの人生で味わったことのない幸福感に全身が溶けてしまったかのような錯覚を覚える。

一度この絶頂を経験してしまえば、抜け出せない程の強い依存性があつた。

今後もマスターとセックスしなければ、性的欲求が満たされない人間になる。スカサハやモードレッドと同じく羞恥や誇りも捨てて、マスターに媚びてしまふだろう。

マシユは自分が年齢や肉体的な意味で少女から女になったのでは無く、本当の意味で”女”になったのだと直感的に理解した。

そして、マスターの濃い精液によって、マシユは女から”母”となる。

——ぶちゅんっ♡♡♡

「——あっ♡♡」

卵管の奥に隠れていた卵子が、マスターの強い精子に捕まる。

スパルタの兵士のように屈強な無数の精子達の中で、最も力強く素早かった選り抜かれた精子が卵子に向かって突撃した。

無抵抗の卵子は強い精子に徹底的に凌辱されて、受精卵となつてしまふ。

マシユは自分が孕んだことを確信しながら、強すぎる快感に意識を失う。糸の切れた人形のように全身をぐったりと脱力させて、快樂の海に沈んでいった。

——しかし、未だにマスターは満足していない。

一分近い吐精が終つても、全く萎える様子の無い怒張したペニスをずりゆずりゆと引き抜き、精液で満たされた子宮を再び突き上げる。

——ドっチュっ!!!

母から女の顔に変わったマシユは、マタニティウェアをはだけさせながら、マスターにおねだりをする。

「私たちの赤ちゃんにお迎え棒で、パパのご挨拶をして欲しいですっ
♡♡♡ 愛し合って生まれてきたって、この子にも教えてあげて下さ
い……っ♡♡」

——咲き誇るような花のように彼女は笑った。

評価者2000人記念 番外編―6 彼のための剣は、
村娘の恋を叶える

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―1

「――はあ……っ♡♡ はあ……っ♡♡ 我が命が悪いのですよ？」

呼吸を荒くする少女は、自身の”下”にいる青年に呼び掛けていた。

ベットの上で仰向けになっている青年の上には、金髪が美しい少女が彼の腹部に桃のように形の良い尻を下して跨っていた。普段は髪を縛っている青と赤のリボンが解かれ、頭の上に載せている王冠は近くの机の上に置かれている。

今の彼女は立場や自身の役割を捨てて、この場にいるという意味表示でもあるのだろうか。

「ずっと私のことを”あの子”と違うと思って……私の好意はあの子のものだと受け取らないから♡♡ ——こうして実力行使で、理解させるしか無かったです♡♡♡ はあっ♡♡ はあ……っ♡♡」

少女のしなやかな細腕が男の両手首を押さえており、彼女の頬は赤く染まっている。

少女はゆっくりと上半身を倒して、彼のしっかりとした胸板に自身の乳房がふにゆりと潰れるのも構わずに押し付けた。服越しであっても青年には、彼女のトクントクンと高鳴る鼓動が伝わっている。

誰もが見惚れるような恍惚とした表情を浮かべる少女は、普段よりも少し高く弾んだ声で青年に囁いた。

「……私の好意を伝えますっ♡♡♡ ——んっ♡♡」

「——っ」

ほんの少しの間、青年の蒼い瞳をジッと見詰めた少女は、彼の唇と自身の唇を触れ合わせる。

彼女が言ったあの子を含めても、初めてのキスをしたのだ。実際に触れ合っていた時間は数秒程度だったが、少女にとっては数分にも数十分にも感じられた。

胸がポカポカと温かくなる”二人分”の幸福を感じながら、名残惜し気に少女はゆっくりと唇を離す。

彼女の碧色の瞳が自然と涙で潤んでおり、湿っぽくて温かい空気を口から吐き出した。青年に熱っぽく蕩けた視線を送りながら、欲望を抑えきれない少女は二度目の口付けを求める。

「——んっ♡♡♡……はぁっ♡ もう一回ですっ♡♡♡ ——んむっ♡♡♡」

少女からの口付けを受け入れる青年は、未だに混乱から抜けきっていない頭で彼女のことを想う。

自分が知らず知らずの内に少女と距離を置いてしまったが故に、このような行為に及ぶまで彼女を追い詰めてしまったのだと気が付いたからだ。

今は唇に塞がれているので言葉には出来ないが、心の内で謝罪をする。

（ごめん……”キャスター”）

青年——カルデアのマスター”藤丸 立香”は、少女の名前をクラス名で呼んだ。

三百を超えるサーヴァントと契約している彼が、同クラスのサーヴァントが多数いるにも関わらず、特定個人をクラス名で呼ぶのは、相手との距離が相当近いということである。

苦難の道に行くマスターの導き手として、守るために彼の精神に住んでいる。

巖窟王” エドモン・ダンテス”のことを『アヴェンジャー』と呼ぶのと同じように、『キヤスター』と呼ぶ少女には特別な何かがあるということだ。

正確には少女も言っていた”あの子”とマスターが特別だったのだが……

未だ”アルトリア・キヤスター”の面影を引き摺っている”藤丸立香”は、”アルトリア・アヴァロン”に心の中で謝るのだった。

——エミュレート

それは模倣や真似することを意味する。

則ちエミュレートする存在とは、”本物”とは違うということであった。例えそれが使命を果たした彼女が望んだ姿であろうとも、同一の存在では無いのだから……

妖精國アヴァロン・ル・フェで己の使命を果たした”アルトリア・キヤスター”。

命が果て呪いに溺れても地の底から這い出て、自身の責務として六氏族からなる妖精達を滅ぼそうとする”呪いの厄災 ケルヌノス”を打ち払うがために、彼女は妖精國の旅の中で至った聖剣という概

念に身命を捧げたのだ。

アルトリア・キャスターはケルヌノスの決戦前に、お互いにこれが最後だと悟りながらマスターと別れ際に話しをした。今までの旅の思い出など、いつものように他愛のないことを喋ったが、最後の最後まで打ち明けられなかったことを一つだけ胸に抱えていた……

『……でも、本当に楽しかったのは、十一日目のグロスター』

『貴方にとっては、なんでもない、普通の出来事かもだったけど』

『——生まれて初めて、”好きなヒト”と大通りを歩いたのです』

別れがより悲しいものになってしまうと——口にすることは出来なかったが、お互いに相手を思い合っていたのは間違いないかった。

それには恋愛的な意味合いも間違いなく有ったが、相手の生き地獄のような境遇やそれでも折れることが出来ない心境への理解者として、二人は互いを深く想っていたのだ。

一人玉座へと訪れたアルトリア・キャスターは、妖精國の女王”モルガン・ル・フェ”が残した対厄災大儀式——”霊脈閉塞型兵装”を致命的な反動を受けながらも放ち。

それだけでは自分の全てを出し切っていないと、自分の心臓を術式の炉心に組み込み”龍脈焼却型兵装”として、ケルヌノスの呪層を穿つがための二度目の超抜級魔術を放った。

聖剣、抜刀——！

祭神よ、我らが罪を、許し給え——！

アルトリア・キャスターが命を賭した二連撃は、呪いの厄災 ケルヌノスが一万四千年の時を掛けて積み上げた呪層外殻に打ち勝つたのだ。

彼女の攻撃がケルヌノスの神核を露出させてくれなければ、例えば神をも屠るブラックバレルがあろうとも、マスターを含めたカルデアは何も出来ずに敗北していただろう。

彼女がマスターの道を切り開いてくれたのだ。

斯くして予言の子と呼ばれたアルトリア・キャスターは、自分と同じ過酷でどうしようもない運命を歩み、それでも前を向いていた強くて優しい“彼”を最期まで想いながら、呪いの厄災たる祭神との戦いで消滅した。

アルトリア・キャスターの最後の地であった冬の玉座には、役目を終えた彼女の杖だけが残される。

——残された杖は、まるで一つの剣のようだった。

呪いの厄災 ケルヌンノスとの決戦で、アルトリア・キャスターの役目は完全に終わった。

——しかし、この話には続きと呼べるものが存在していたのだ。

妖精國で予言の子と呼ばれたアルトリア・キャスターの正体とは、一万四千年前のセファール襲来時に造られなかった「聖剣」を造るが為に、星の内海たる『楽園』から派遣された、地上の情報を集める『集積装置』としての使命を背負った「楽園の妖精」である。

原罪を背負った六氏族の子孫である妖精國の妖精達とは、根本的に出自が違う高位の妖精だった。

アルトリア・キャスターのことを魔力が低く成長するといった要素があるがために、妖精國の妖精達は彼女のことを嫌っていたのだが、実際には本能的に“楽園の妖精”を異物として嫌う傾向があったからである。

——楽園の妖精としての“使命”を果たしたアルトリア・キャス

ターは、そのまま楽園へと帰り永い眠りにつく筈だった。

高位の妖精であるが故に、アルトリア・キャスターの妖精眼は、あらゆる嘘を見抜き真実を映す。

嘘と悪意に塗れた楽園以外の世界では、寝ている時でさえ悪意の嵐に晒され苦しんできた彼女が、ようやく安寧と安息を手に入れられる機会が訪れたのだ。

しかし、アルトリア・キャスターは役目を終えた後も『嵐の中で輝く小さな星』のために、戦い続けることを選択し、消滅する寸前に『聖剣の騎士』の概念と一体化した。

こうして”聖剣エクスカリバー製造のため”の『情報集積装置』から、”星を脅かす脅威に対抗するもの”の助けとなる『人理補助装置』として生まれ変わったのが、”アルトリア・アヴァロン”である。

楽園の妖精という生命から昇華した、抑止の守護者であった。

彼と共に旅をした『楽園の妖精』”アルトリア・キャスター”と、カルデアに召喚された『サーヴァント』”アルトリア・アヴァロン”は厳密には同一の存在では無いのだ。

確かにアルトリア・キャスターの記憶を『春の記憶』として持っているが、英霊となった彼女の在り方は「星に住む生命を守るもの」である。

——『聖剣の騎士』という概念が擬人化した姿であり、本質が超自然的な存在へと寄っていた。

地表の命が生み出す掛け替えの無い紋様の輝きを知るものであり、そう言う意味では汎人類史のアルトリア・ペンドラゴンやアルトリア・キャスターにも共通している「何かを守るもの」としての生き方は変わっていない。

アルトリア・アヴァロンとなった彼女が、**■****■****■****■****■**オー**■**イ**■**ー**■**との最終決戦でマスターの呼び掛けに応えて駆け付けたのは、呪いの厄災との決戦前にアルトリア・キャスターが交わした『一度だけの恩返し』を果たすために召喚に応じたものである。

本来ならば聖剣の騎士の概念に近いアルトリア・アヴァロンは、嘘に塗れた世界を妖精眼で見続けた末の達観した精神と合わせて”

個人”に肩入れすることは無い。

しかし、アルトリア・キャスターの記憶が、マスターに対しては相
当な”依怙鼻屑”をさせていた。

それこそ彼の『来い、キャスター!!!』という呼び掛けがあれば、”
アヴァロン”を経由して駆け付ける程である。

因みに某”花の魔術師”のように、アヴァロンから徒歩で来たわけ
では無いと本人は語っていた。

——アルトリア・アヴァロンはアルトリア・キャスターと地続きの
存在では無いが、マスターのことを想っていることは間違いないなかつ
た。

カルデアのマスターとアルトリア・キャスターは、一個人が成すに
は無理難題としか言い様のない使命をやりたくも無いのに担わされ、
自分の代わりがいなかったが為に走り続けたという共通点があった。

二人が心の内に大きな闇や歪みと言えるものを抱えていたからこ
そ、お互いのことを深く理解していたのだ。彼らがもつと余裕のある
状況で出会えていれば、互いに支え合う恋人同士になるのも時間の問
題であつただろう。

実際にアルトリア・キャスターは、マスターに恋をしていたのだけ
ら。

アルトリア・アヴァロンがカルデアに召喚されたのは、妖精國の空
想切除を完了した後だった。

妖精國で旅した時と変わらない姿で笑顔を浮かべながら、春の記憶をエミュレートするアルトリア・アヴァロンは、カルデアのマスターに初めて会ったかのように挨拶をする。

『こんにちは。キャスター、アルトリアと申します！ 実のところ、サーヴァントというものは良く分からないのですが、魔術なんかで役に立てるなら遠慮なくお使い下さい』

『——っ。キャスターの魔術は“なんか”じゃ無いよ』

『え？ 魔術は、なんか、じゃない？ ……うわあ、こつちの世界ではそうなんですか』

『うん……頼りにしてるから、これからよろしくね』

暗い表情を浮かべてしまいそうになるのを隠すために、マスターは自然な作り笑いを浮かべる。

(やっぱり英霊の座から呼ばれたキャスターは、俺の知ってるキャスターとは違うのかな……)

これはマスターがアルトリア・キャスターのことを、想うが故の寂しきである。

妖精國で共に旅をした彼女と深い絆を紡いだからこそ、カルデアに召喚されたアルトリア・アヴァロンがどこか違う存在であることを、マスターが漠然とだが理解していたことも大きいだろう。

普通に笑みを浮かべているように見える彼の顔を、アルトリア・アヴァロンはジッと見詰めている。

彼女のエメラルドのように美しい碧色の瞳には、彼の胸中に渦巻く寂しさがしっかりと映っていた。

アルトリア・アヴァロンは、寂しさを感じているマスターに疑問を持ったが、それよりもまた彼の元に来れたことに浮かれてしまう。

当の本人であるアルトリア・アヴァロンは、アルトリア・キャスターと殆ど地続きの存在であると思っていた。

妖精國でのマスターとの思い出を春の記憶としてしっかりと持つ

ているのだから、マスターには”あの子”と同じように接して欲しい
と思っていたのだ。だからこそ、態々アルトリア・キャスターの姿で、
マスターに召喚されたのである。

——マスターとアルトリア・アヴァロンは、大事な部分ですれ違っ
てしまう。

アルトリア・アヴァロン個人として接しようとするマスターと、ア
ルトリア・キャスターと同じようにマスターに接して欲しいアルトリ
ア・アヴァロン。掛け違えてしまったボタンのように、気付けば直ぐ
に噛み合う歯車が互いに空回りをしていた。

お互いが本音で語り合えば解決する問題だったが、彼らはすれ違っ
たまま徐々にストレスを溜めていくことになる。

特にマスターとアルトリア・キャスターの頃に叶わなかった”恋”
が出来ると思っていたアルトリア・アヴァロンは、どこか素っ気ない
彼の態度にもどかしさと共に鬱憤を溜めていった。

種火と素材を消費して霊基再臨が行われ、本来のアルトリア・ア
ヴァロンの姿に戻った。聖剣の擬人化としての達観した精神が前面
に出てしまうがために、彼女とマスターのすれ違いは更に大きくなっ
ていく。

アルトリア・アヴァロンは必死にマスターにアピールをしているの
だが、彼がその受け取り方に迷っているような状況が続いたのだ。

「はあ……どうしてこのようなことに。最近は更に我が命に、心の距
離を置かれています」

日に何度もため息を吐くようになったアルトリア・アヴァロン。
彼女の抱える鬱憤が臨界点に達しそうになった頃、良く嗅いだこと
のある花の匂いと共に、違う世界の花の魔術師”マーリン”がアルト
リア・アヴァロンの目の前に現れた。

「やあ、何だか元気が無さそうだね。ため息は幸せが逃げてしまうから、あんまりしない方が良いとボクは思うなあ」

アルトリア・アヴァロンよりも後にカルデアにやって来た女のマーリンは、我が世の春と言わんばかりに上機嫌である。今も正しく花のような笑みを浮かべており、スキップでもしそうな程に声が弾んでいた。

アルトリア・アヴァロンが上手く接することが出来ないマスターとの仲もすこぶる良く、純粋な嫉妬すら覚えてしまいそうな程である。つつい自分のモヤモヤをぶつけるように、彼女は棘のある言葉を口にしてしまう。

「……………余計なお世話です。見ての通り今の私は、死ねない者を処する魔術すら使ってしまったくなる位に機嫌が悪いのですが……………何か用ですか？」

「わわっ、そう邪険にしないで欲しいなあ。……………キミの悩みを解決出来るかもしれないのに」

何気ないように呟かれたマーリンの言葉に、アルトリア・アヴァロンの耳と一房のアホ毛がピクリと動いた。今の彼女は藁にも縋る思いであるため、マスターとの仲が改善出来るのであれば、ロクデナシの夢魔の力でも借りたい位である。

そもそも全てを見通す千里眼を持つマーリンは、アルトリア・アヴァロンの悩みなど既に知っている状態で、彼女の前に現れたのだから。

普段の冷静なアルトリア・アヴァロンであればマーリンの意図にも直ぐに気付けたのだが、本人が思っている以上にマスターと上手く接することが出来ないことが、彼女の思考の鈍化に繋がっていた。

思った以上に重症なアルトリア・アヴァロンに、片手を額に添えるマーリンは呆れ半分で呟く。

「ありやりや……これは重症だね。」ご主人様」と延いてはボクのためにもなるから、絶対に悩みを解決出来るアドバイスをしようか」「マーリンに助言を求めるのは業腹ですが、我が命と仲良くなれるのなら恥も捨てましょう……私はどうすれば良いのですか?」

「なあに簡単なことさ。マスターに想いの丈をぶつけるために——押し倒せば良いんだよっ♡♡」

雌の顔をするマーリンは、大胆過ぎる提案を口にした。

数瞬の間の後に、アルトリア・アヴァロンは顔を真っ赤にしながらか、死なないマーリンすら殺せる魔術を展開する。

「~~~~なっ?! 何を言っているんですかっ! 人が真剣に相談してみれば、ふぎけたアドバイスをするとは——っ。やはりどの世界のマーリンも、一度は死んだ方が良さそうですねっ!」

確実に致命傷となる魔術を放とうとするアルトリア・アヴァロンに、流石に慌てたマーリンが両手を前に突き出しながら説得を試みる。

「じよ、冗談なんかじゃ無いよ! ボクの千里眼にはそれで万事上手く行くことが視えているからっ! ほっ、本当だって……望むのなら魔術的な契約をしたって良いよ」

「——嘘だったら、本当に殺しますからね」

「うんっ! 上手く行かなかったら、座に登録されるのも吝かでは無いよ」

ゆっくりと魔術を消したアルトリア・アヴァロンにマーリンは胸を撫で下ろしつつ、自分の提案が受け入れられたことに安堵する。最近になって出来た”友人”の頼みを、しっかりと熟すことが出来た安堵も多分に含まれているだろう。

「今夜、マスターの部屋に行けば良いよ。後は勢いに任せて動けば、良い感じの結果になるから」

「……………分かりました。今夜はマーリンの言う通りにしてみます」

最後までジト目をマーリンに向けながら、アルトリア・アヴァロンはその場を後にした。

彼女がその場から完全にいなくなるのを待って、額の冷や汗を拭いたマーリンは今は近くにいない友人に向けて一人呟いた。

「“モルガン”の頼みを聞いたら、危うく死に掛けちゃったよ……………ある意味で”同じ立場”にいたキミが、あの子に幸せになつて貰いたいのは分かるけど、もう少し上手いやり方もあつたと思うんだけどなあ……………」

微妙な表情を浮かべるマーリンは、マスターに抱いて貰えば全て丸く収まると思っている未だ恋愛初心者な友人に対して、小さなため息を吐くのだった。

「……………くしゅんっ！ 誰かが私の噂をしていますね」

——遠くの方で妖精國の女王の可愛らしいくしゃみの音がした。

斯くして花の魔術師に唆されたアルトリア・アヴァロンは、言われた通りにマスターの部屋へと赴き、勢いに任せてマスターを押し倒したのだ。

興奮から頬が赤く息の荒いアルトリア・アヴァロンは、自身の下に
いるマスターに語り掛けるのだった。

「——はあ……っ♡♡ はあ……っ♡♡ 我が命が悪いのですよ？」

——冒頭へと話は戻る。

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―2

魔術によって嚴重な施錠がされたマスターの部屋の中では、小さな呻き声やリップ音、互いの服が擦れ合う布ずれの音が響いていた。

「ちゅう……っ♡♡♡ — んうっ♡ ……ん、っ♡♡」

自分よりも体格に優れているマスターのことを、アルトリア・アヴァロンはサーヴァント由来の人並外れた膂力を用いてベッドに押し倒している。

彼らは付き合いたての恋人同士がするような、初々しいリップキスに耽溺していた。

ただ唇同士を合わせるだけの行為であるのに、アルトリア・アヴァロンは唇から伝わる熱で全身が溶けてしまいそうな錯覚に陥っている。彼女の思考はキスをすることに囚われており、今している人生二度目の口付けは、何度も鼻腔から酸素を取り込む必要がある程に時間が長くなっていった。

（本当は我が命としっかり話すべきなのにつ♡♡ キスが止められませんが……っ♡ 頭がボーっとなります♡♡）

キスの快樂に理性が抗えなくなっているアルトリア・アヴァロンは、興奮と酸素不足により思考が上手くまとまらなくなり、理性が次第にゴボゴボと音を立てて溶けていく。溶けていく理性の代わりに表出してくるのは、学習や条件反射によらない生得的に持つ”本能”である。

本能の中にも大きく分類して三つの種類がある。

自分の巣や生まれた場所に戻ろうとする帰省本能、外部の刺激に対して引き起こされる反射行動のことを防御本能などと呼ぶが、今のアルトリア・アヴァロンが最も表出している本能は、種族を保存しようとする”生殖本能”であった。

彼女自身も無意識の内に、自分の匂いをマスターに擦り付けるように上半身をズリズリと彼の体に押し付けて前後に動いていた。彼女

が行う動物のマーキングのような行動は、メスとしての生殖本能が原因である。

目の前の雄が自分の番だと主張するための、雌の本能からなる行為であった。

マスターに身体を擦り付けるアルトリア・アヴァロンのクイツ♡♡クイツ♡♡という腰の動きに合わせて、彼の腹部に押し付けられている女性らしい丸みを帯びたお尻が、むぎゅむぎゅと形を変えている。

口付けで唇が塞がれているので、二人は自然と鼻呼吸をしていた。

マスターの普段の呼吸と変わらないであろう鼻息が、アルトリア・アヴァロンの顔に優しく吹き掛かる。それが彼女にとっては妙にこしょばゆく、くすぐったさと共に気持ち良さを感じてしまう。

自分の荒い鼻息もマスターの顔に吹き掛かっていると考えると、興奮から既に赤くなっている頬が更に赤く染まっていた。

「——んっ♡♡……ちゅうっ♡♡♡ん……っ♡♡——
ぷはっ♡♡ はあ……っ♡♡♡ はあ……っ♡♡ もっです——
——」

酸素不足よりも興奮からの荒い息を吐くアルトリア・アヴァロンは、彼の顔に自分の顔を近付けて三度目の口付けをしようとするが……

「——待って」

アルトリア・アヴァロンの行動を遮るように、マスターが制止の言葉を掛けた。

彼女の相手の嘘や心情を見抜く碧色の妖精眼には、彼の罪悪感や自分に向けた謝罪の気持ちが見えている。仄暗い黒と物寂しい青が混じったようなマスターの表情は、アルトリア・アヴァロンの心の火照りを一気に冷却した。

敢えてマスターはアルトリア・アヴァロンの妖精眼を真正面から見詰めながら、自身の心情を吐露する。

「……今までごめん。俺はずっと妖精國のキャスターのことが忘れられなくて、今のキャスターとどう接したら良いのか分からなくなってきた」

「私は、あの子」のことを……今でも大切に思っていてくれる我が命を嬉しく思っていますよ」

アルトリア・アヴァロンの言葉に嘘は無い。

彼女にとつて”アルトリア・キャスター”とは過去の自分のようなものであり、その思い出を大事にしてくれているマスターのことを嬉しいと感じていた。

——自分と同じだと思ったからだ。

人理の守護者となった聖剣の擬人化であるアルトリア・アヴァロンの存在の”中核”は、マスターと共に妖精國を旅したアルトリア・キャスターの記憶であるのだから。”春の記憶”とも呼ばれるそれは、彼女の人生において一番楽しかった記憶のことだった。

だからこそアルトリア・アヴァロンは、マスターのことを『我が命』と呼んでいるのだ。

マスターの両手首を掴んでいた両手を彼女は開放して、彼の頬を両手で挟むように優しく触れる。それは相手の存在を、手の甲から伝わる温度や感触で確かめているように見えた。

「あの子が冬の玉座で最後を迎えるまで……我が命のことを想っていましたよ。だからこそ今の私が、”ここ”にいるんです。暗い嵐の中でも輝く小さな星のような——我が命が”あの時”も呼んでくれたから……っ」

アルトリア・アヴァロンが言っている”あの時”とは、彼女にとつても憎み切れない相手である ■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■・■■■■■とマスターが対峙した時のことだろう。

同じ悪意の嵐に晒され、理不尽な使命を背負った”似た者同士の根っからの大？つき”である■の虫。

■オー■イ■ー■としての目的である”ブリテン島の消滅”と、■
■として目的である”人類史の根絶”を「気持ち悪いから」という理由で、大真面目に叶えようとした努力家。

アルトリア・キャスターにとって■
■は、幼少期から花の魔術師”マーリン”の名を騙り自分に苦勞しながらも魔術を教えてください、親子とも兄妹とも子弟とも割り切れない、言葉には表しきれないくらいに複雑で近しい存在である。

カルデアに来てからアルトリア・アヴァロンは『宿敵にして同胞』、『同じ幻想でありながら、私は人を知らず、彼は人を知り過ぎた』とマスターに語っていた。

マスターにとつても■
■は相容れない敵ではあったが、ある意味でアルトリア・キャスターと同じ位に自分の深い理解者であった。自分の代わりがいなかったために身の丈以上の使命を押し付けられ、否応なく歪まされたという共通点があるがために……

「——っ、そっか……そうだったんだね」

このマスターの短い言葉には、様々な感情が込められている。

きっと感情が視れるアルトリア・アヴァロンには、彼の心情が分かかってしまうのだろう。しかし、そこに彼女が不快に思うような考えや感情が無いことだけは確かだった。

カルデアにアルトリア・アヴァロンが召喚されてから、ずっとマスターが抱えていた物寂しかった気持ちが晴れていくような気がしていた。確かに彼女が言うように共に妖精國を旅した”あの子”は呪いの厄災　ケルヌノスとの戦いで消えたのだろう。

しかし、”あの子”の想いと記憶を目の前のアルトリア・アヴァロンは、確かに”受け取って”いるのだ。例え彼女が同一の存在で非ずとも、もつと大切にすべき”ナニカ”は確かに同じだった。

楽園の妖精から聖劍の擬人化として、その存在や在り方は変わって

いるのかもしれない。それでも”あの子”と変わらない気持ちが一っただけあった――

「――好きです……っ♡♡ あの子と変わったこともありませんけど、それでも我が命が好きという気持ちに変わりはありませんっ♡♡♡ 我が命が私を”キャスター”と呼んでくれるのなら、いつまでも”貴方のための剣”でありたいっ♡♡♡ ……これは我が儘でしょうか？」

アルトリア・アヴァロンの問い掛けに、マスターは震える唇を動かす。

彼女を見詰める彼の雲一つない空のような色の瞳は、様々な感情の詰まった涙で潤んでいた。

アルトリア・アヴァロンの顔にマスターは手をゆっくりと伸ばし、その頬におっかなびっくりといった様子で触れる。彼の掌や指先には彼女の”温かさ”が確かに伝わった。

その温かさは目の前の確かに、”キャスター”がいることの証明に他ならない。マスターの両の目尻からツーツと涙が流れる。その涙はあの日アルトリア・キャスターが呪いの厄災との戦いで亡くなった時に、悲しくても苦しくても流せなかった涙であった。

あの時は全ての感情を飲み込んででも、無理矢理にでも前に進まなくてはならなかった。

呪いの厄災との戦いの後は、共に旅をした■■■■の裏切りから、人類史の根絶寸前まで一直線の急転直下であり、マスターは泣くことさえ出来なかったのだろう。

小さな嗚咽混じりにマスターは、アルトリア・アヴァロンの問いに答える。

「ずっと今のキャスターと、どう接して良いか分からなくなった。本当は俺の方からこうやって話し合えば良かったのに……俺の知っているキャスターと違ってたらと思うと怖くて……っ。真実を知ること

から逃げてた臆病者だけど……これからもキャスターには、俺の剣でいて欲しいっ」

「~~~~っ、はいっ！ 私はずっと……ずっとっ、我が命の剣……で………すっ」

マスターの涙に釣られてしまったのか、アルトリア・アヴァロンのエメラルドのように綺麗な瞳も涙でうるうるると潤む。目尻にまで溢れた水分が重力に従い、彼の頬にポタポタと雫となって落ちる。

アルトリア・キャスターが最期まで告げられなかった想いと同じ気持ち、マスターはアルトリア・アヴァロンに告げる。

「——キャスターっ。俺も……ずっと好きだったよ。本当は”十一日目のグロスター”と一緒に歩いた時に伝えたかった。遅れてごめん……大好きだよ」

「——っ、あっ♡ そんなっ♡♡ きつ、きつと……”マスター”にとつては、なんでもない、普通の出来事だったと思つてたのにつ——憶えていてくれたんですね」

アルトリア・アヴァロンはあの子のエミュレートをしている訳でも無いのに、あの頃のような口調に戻ってしまう。彼女にとつて”一番楽しかった思い出”が、正しく十一日目にグロスターの町中をマスターと一緒に歩いたことだったのだ。

——予言の子でも何でもない、ただ好きな人と一緒に街に出かけた”村娘”のように過ごせた”あの短い時間”が、アルトリア・キャスターが本当に求めていたものだったのだから。

きつとあの短い時間を大切に思つていたのは、世界中で自分一人だけだったと考えていた。

しかし、同じ時間を過ごしてくれた”好きな人”が、十一日目のグロスターをしつかりと憶えてくれたことが、嬉しくて仕方なかったのだ。

大量の嬉しさと驚きがミキサー車にかき混ぜられ、大量に注ぎ込ま

れたかのように激しく混乱しているアルトリア・アヴァロンに、マスターはその時のことを憶えていて当然だと答える。

「憶えていて当然だよ。キャスターみたいに可愛い娘と一緒に街を歩けるなんて……嬉しいに決まってる。出来ればまた一緒に、どこかに行きたいって思ってたんだよ」

「~~~~~っっっ♡♡♡ もう……っ♡♡ もうっ♡♡ ズルいですっ♡♡ こんなのもっと好きになるに、決まってるじゃないですかっ♡♡♡ ……………バカっ♡♡ ……………バカバカっ、バカあ…………っ♡♡♡」

アルトリア・アヴァロンはマスターの鎖骨辺りに、グリグリと額を押し付ける。

それは照れ隠しも含まれているが、相手への好意が抑え切れないが故の行動であった。今も彼女の心から泉のように彼への好意が溢れてくる。

それも仕方のないことだろう——だってアルトリア・アヴァロンからは、“二人分”の好意が湧き上がっているのだから。

それから暫くの間、アルトリア・アヴァロンとマスターの二人は、お互いの”温かさ”をゆっくりと確かめ合うように感じ合っていた。

お互いの気持ちを確認合った二人に——最早、言葉は必要が無かった。

アルトリア・アヴァロンはマスターの蒼い瞳を、マスターはアルトリア・アヴァロンの碧の瞳を……ジツと見詰め合いながら、二人の顔が徐々に近付いてく。

あと数cmで唇同士が触れ合いそうになった頃、ゆつくりと瞳が閉じられた。

——チュっ♡♡

三度目の口付けが交わされるが、今までのキスに比べて何倍も気持ちが良い。

マスターと気持ちが通じ合った精神的な高揚感が、アルトリア・アヴァロンのキスの快感と幸福感を何倍にも何十倍にも増幅させていた。

その余りの気持ち良さに彼女は、目を見開いてしまう。

「~~~~~っ♡♡♡♡♡ んう……っ♡♡♡ ちゅうっ♡♡♡♡ ——
——んっ♡♡♡」

(なっ、な——っ♡♡♡ さっ、最初のキスより気持ち良いです……っ♡♡♡ さつきと同じことをしてるのにつ♡♡♡ ——頭がクラクラしてしまいますっ♡♡♡)

心まで深く繋がってしまいそうになる口付けに、アルトリア・アヴァロンの頭はボーっとしてくる。

今まではそんなことは無かったのに、彼女の秘所に僅かな湿り気が帯び始めていた。相手への好きという気持ちが全身を満たし、肉体がこれまでとは比較にならないほどに敏感になっている。

マスターの上唇と下唇の間から舌先が伸びて、アルトリア・アヴァロンの可憐な瑞々しい唇をチロリと舐めた。彼女の唇に甘い痺れが走り、人生で初めて体験する強い快感に目を剥いて驚く。

アルトリア・アヴァロンは一度唇を離して息を整えたかったのだが、マスターに後頭部を押さえられているので、体勢や呼吸を整える

ことが出来ない。

「んう~~~~~つっ♡♡♡♡♡んっ♡♡んっ♡♡ん
ん——っ♡♡♡♡」

驚きと快感に声を出したかったが、キスをしている状態では呻くような声を上げることしか出来ない。アルトリア・アヴァロンは今の状況と快楽に全く順応出来ていないが、マスターはこれまでの消極的だった態度が嘘のように、この愛を確かめ合う行為に積極的である。アルトリア・アヴァロンの上唇と下唇の間に、マスターの舌先が侵入する。

「ん——うっ?!♡♡♡♡♡ちゆるっ♡♡じゆるる…:ちゆう♡♡ちゆるる…:っ♡♡♡♡♡じゆるる——ちゆちゆう♡♡♡♡」

こと性経験に於いてはアルトリア・キャスターの時代を含めて生粋の生娘である彼女が、古今東西あらゆる時代の英霊たる美少女や美女達を墮としてきた性豪マスターに、単純なキスであっても敵う訳も無い。彼の巧みな舌と唇の使い方によって、簡単に口の中を蹂躪される。

(~~~~~っ♡♡♡♡♡我が命の舌が私の口の中に入ってきてますっ♡♡♡♡♡こんな大人のキスをいきなりい♡♡舌の動きが激しくて、全身がビクビクと震えてしまいます…:っ♡♡♡♡♡)

唇を軽く舐められるのとは、比べるのもおかしいと感じてしまう程の快感が全身に迸る。

口端から唾液が垂れてしまうが、今はそんなことを気にする余裕も無く、全身を震わせながら必死に鼻腔から酸素を取り込むことしかアルトリア・アヴァロンには出来ない。

「じゆるるるっ♡♡まっ——ちゆずずッ♡♡ちゆ…:ずるるるっ♡♡♡♡♡まっつて——んむうっ♡♡じゆるる…:っ♡♡♡♡♡

♡ ぢゅ——っ♡♡♡」

一度休憩をアルトリア・アヴァロンは求めるが、これまでの溝を埋めるようにマスターは口付けをより深める。柔らかく唾液に濡れた内頬や歯茎を丁寧にマスターの舌先が這い回り、口内に溜まった唾液をじゅるじゅると水音を立てて啜られる。

次第にアルトリア・アヴァロンの口を閉じていた力は緩んでいき、上歯と下歯の間に隙間が出来ていく。遂にはマスターの舌が入り込める位に、口が開いてしまう。

彼の長めの舌が歯という城門を突破して、口の奥側に進んでいく。こうなってしまうえばアルトリア・アヴァロンに抵抗する術は無く、舌を喉奥の方に引っ込めることしか出来ない。しかし、マスターの舌先が彼女の奥に引っ込んでいる舌をツンツンと突き、無言のままに舌を伸ばすように催促していた。

マスターの無言のお願いに抵抗する気力が無くなってしまったアルトリア・アヴァロンは、おずおずと自分の舌を差し出してしまふ。直ぐに彼の舌が獲物を捕らえた蛇のように絡み付き、咄嗟に喉奥に自身の舌を引っ込めようとしても、マスターの唇に挟まれて逃れることが出来ない。

「んゝうゝゝゝゝゝゝゝっ♡♡ じゅるるるっ♡♡♡ れろ——おっ♡♡ んゝむゝっ♡♡♡ んゝ——ぢゅるるるるっ♡♡
………じゅぢゅう♡♡」

アルトリア・アヴァロンの目がトロンと蜂蜜のように蕩けて、自身の口内に響くイヤらしい水音に鼓膜を揺さぶられる。正常の思考と理性が働かなくなっていく、目の前にチカチカと白い光が見え始める。

彼女の淫らな肉の割れ目は、言い訳が出来ないくらいに濡れそぼっており、膣口からとろりとしたガムシロップのような愛蜜が、全身のビクっ♡♡ ビクっ♡♡という震えに合わせて溢れていた。

(わっ、我が命のキスしゅごい♡♡ こんなっ♡♡ こんな知らにやい♡♡ あひ——いつ♡♡♡ しっ、したもどそうとしたらっ♡♡ 甘噛みされてだめって……っ♡♡♡ あう——っ♡♡♡)

マスターのディープキスに翻弄されながら、大人のキスの仕方をアルトリア・アヴァロンは仕込まれていく。少しずつ舌の絡め方や口が開いた状態でも唾液を？み込む方法が分かっていき、三十分が経つ頃には彼に自身の唾液を送ることや二人の舌の間で、お互いの唾液を混ぜ合うことが出来るようになっていた。

尻尻から快感による涙を流しながら、未だ誰にも触られていない交尾孔から涎をとぷっ♡♡ とぷっ♡♡と零している。

キスだけで十分な程にアルトリア・アヴァロンが蕩けたことを確認して、マスターはゆっくりと唇を離した。彼女は半開きの口から舌先を突き出した状態で、温かく湿っぽい呼吸を吐き出す。

「はあゝ————っ♡♡♡ はあゝ————っ♡♡♡ いきなり激しいれす……っ♡♡♡ はあっ♡♡♡ こんなおとななキスはあ……もつとあとに覚えるキスれすっ♡♡♡ ——あうっ♡♡♡♡」

鬼畜なキスをしたマスターに対して、アルトリア・アヴァロンは呂律の回っていない口で文句を言いつている。しかし、彼女は完全に発情し切った雌猫のような表情をしているので、その文句には説得力が無い。快樂の余韻なのか、たまに体がビクっ♡♡と震えていた。

「——もつと好きって伝えたいって思ったら、歯止めが効かなくなっちゃった。………キヤスターは嫌だった？」

「うゝゝゝゝゝっ♡♡♡ そっ、その聞き方はひきようれすっ♡♡

♡ ——いつ、嫌なわけありませんっ♡♡♡」

「それならもつとキスしたい。キヤスターともつと深く繋がりたい」

「……っ♡♡♡ はいっ♡♡♡ もつと我が命ともつと大人なキスがし

たいですっ♡♡♡ ——んむっ♡♡♡♡」

た。——二人だけの空間には、甘ったるい小さな水音が再び鳴り始め

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―3

「——ああっ♡♡ だめっ、ダメですっ♡♡♡♡ んひいつ♡♡ 乳首
吸っちゃ…っ♡♡ あく、う…っ♡♡♡♡ 何にも出ないですっ
♡♡ んあ——っ♡♡♡♡」

乳房に与えられる甘く痺れるような快感にアルトリア・アヴァロンは、身悶えながら天井を焦点の定まらない碧色の瞳で見詰めていた。声を我慢したいと本人は思っているのだが、快感に全身がビクビクと震える度に自分でも驚く程の甘い声を出してしまう。

マスターの息継ぎすら許さない情熱的なキスでトロトロに溶かされた彼女は、そのまま流れるように衣服をスルスルと脱がされ、正しく妖精のように美しく可憐な裸体を晒していた。彼の相手の衣服を脱がせる手捌きは非常にスムーズであり、アルトリア・アヴァロンの認識では気付けば脱いでいたような感覚である。

性的興奮で身体の芯から火照り、しなやかな肢体がまるでお風呂上りであるかのようにしっとり汗ばむ。白く透き通るような肌が汗で濡れ、艶めかしい光沢を放っている。全身から漂う甘酸っぱい汗の匂いと共に、うなじや耳の裏、腋の下などから若々しい雌のフェロモンが大量に分泌されていた。

触れれば壊れてしまいそうな儂い美しさと、女性らしい柔らかさを兼ね備えている極上の肉体。ハッキリと浮かび上がった鎖骨や細くしなやかな腕、悩まし気な腰付き。

——そして、何よりも雄の欲望を刺激するのが、アルトリア・アヴァロンの美乳としか表現しようがない乳房である。同年代と比較しても平均かそれよりも小さいのだが、名のある職人が心血を注いで作り上げた陶器や大理石で彫られた彫刻品のように美しかった。

搗き立てのお餅のように白く柔らかそうな肌に、桜色のぷっくりと膨らんだ乳輪とその上に載った小さめの乳首が映えている。それはまるでショートケーキの上に載ったイチゴのようであり、雄にとってはどんな極上のデザートよりも味わいたいと思える柔肉であった。

そんなアルトリア・アヴァロンの柔肉を、マスターは手と口で味わっている。

彼女の小さな乳首を彼の唇が上下に挟み、乳首の先端を力の入って硬くなった舌先がグリグリと穿るように愛撫していた。それと同時に口で愛撫されていない反対側の乳首は、彼の右手でネットリと愛撫されていた。

少女特有の柔らかな乳房の中心にある”芯”を文字通り、ふにふにと揉み解されている。マスターの右手の五指がそれぞれ別の生き物であるかのように動き、同じ快感に慣れさせないために敏感な乳首や乳輪をクリクリと不意打ちのように指先で弄っていた。

明らかに彼の女性の乳房を揉みしだく手付きは手慣れており、女が快感を得るポイントを完全に理解している指使いである。何気ないマスターの指の僅かな動きが、アルトリア・アヴァロンにとっては喘ぎ声を抑えきれない原因となっていた。

男性経験が豊富な女性サーヴァント達が、愛撫だけでヒンヒンと情けない雌の哭声を上げる程の卓越したテクニクをマスターは持っていた。当然、キスの時と同様に生娘であるアルトリア・アヴァロンが、快感に耐えられる筈も無い。

彼の愛撫に翻弄されて、彼女はただ喘ぐことしか出来なかった。

「おっ、おっぱい美味しくないからっ♡♡♡ 乳首い♡♡ ちゅうつて吸われると、伸びちやいますう♡♡ あっ♡♡ ああっ♡♡ だっ、駄目えっ♡♡♡ はう——っ♡♡♡」

甘い声色を出すアルトリア・アヴァロンは、言葉だけではあるが嫌がっている。そんな彼女の硬くシコった乳首を、音を立てて吸っていたマスターは口を離した。右手でアルトリア・アヴァロンの乳首をクリクリとイジメながら、彼女が悦んでしまう言葉を自然と口にする。殆ど無自覚に彼は、相手が望む言葉を口にしていった。

「ちゅ——っ。キャスターのおっぱい、しょっぱくて美味しいよ。

で真っ赤にしなながら、マスターにまだ心の準備が出来ていないことを告げる。

「あっ♡♡ わっ、我が命っ♡♡♡ んっ♡♡♡ まだ”ソコ”はっ♡♡ はっ、恥ずかしいですっ♡♡♡ あんっ♡♡ 左手動かしちゃ♡♡♡ いひっ♡♡ おっぱいも激しいっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あぐうっ♡♡♡」

「——ぶはっ。はあ……キャスターのこと、もっと気持ち良くさせた。それにソコじゃ分からないから……ちゃんどこなのか教えて？ ——そうじゃないと、俺が触りたい所を触るよ」

「~~~~~っ♡♡♡」

少しだけ意地悪な表情を浮かべるマスターは、わざとアルトリア・アヴァロンの太ももに挟まれる左手を奥へ奥へと向かって動かす。大量の汗で滑りが良いせいなのか、簡単に秘所を目指して手がにゆるにゆると侵入していく。

マスターがアルトリア・アヴァロンに『おまんこ』と言わせようとしているのは、彼女の嘘や考えを見抜く妖精眼が無くとも分かる。

しかし、アルトリア・アヴァロンに、それを拒否をする選択肢は無い。

今も彼の左手が奥に向かってゆっくりと進んでおり、早く恥ずかしいことを口にしなければマスターの手が秘所に辿り着いてしまうからだ。快感と羞恥で濁る思考の中で、彼女はなるべく恥ずかしくない言葉を選ぶ。

「そっ、ソコはっ♡♡♡ 割れ目です……っ♡♡♡」

「うーん、割れ目じゃ分からないから。もっと分かりやすくして、エッチな言葉で教えて？」

「~~~~~っ♡♡♡ わっ、我が命は意地悪ですっ♡♡♡ あひっ♡♡♡ ——んこっ♡♡♡ おまんこですっ♡♡♡ 我が命におまんこ触られるの恥ずかしいです……っ♡♡♡ んあっ♡♡♡ だか

ら左手は、動かさないで下さいっ♡♡♡ おっぱいなら良いですか
らっ♡♡♡」

半ばヤケクソのようにアルトリア・アヴァロンは、『おまんこ』と何
度も口にしてしまう。頭が沸騰してしまいそうな程に羞恥心に全身
を震わせながら、その言葉を口にする度に下腹部に響くような快感が
走る。

（我が命に意地悪されているのに……っ♡♡♡ そっ、それが嫌じゃな
いですっ♡♡♡ こんなのおかしいのにい♡♡♡ 酷いですっ、怒ら
ないと駄目なのにつ♡♡♡）

意地悪されて嬉しいと思ってしまう自分自身の心境に驚きながら、
それを必死に違うと否定しようとする。しかし、下腹部に響く甘い痺
れは、間違いなく本物だった。膣口から粘性の高いメープルシロップ
のような愛蜜を溢れさせている。

それは間違いなく羞恥プレイと呼ばれるものであり、汎人類史のア
ルトリア”達”と同じようにアルトリア・アヴァロンもMっ気が強い
ようだ。彼女の羞恥に悶えながらも隠し切れない悦びを感じている
反応から、アルトリア・アヴァロンがマゾであることをマスターは確
信していた。

彼女の耳元まで近づき、彼はいつもより少し低い声で囁く。

「キャスターのお願いは聞けない。おっぱいもおまんこも——唇も全
部、俺のものにしたい」

「——っ♡♡♡ ダメ……で………すっ♡♡♡ もう少しっ♡♡♡
♡ あう♡♡♡ 心の準備を……っ♡♡♡ その後ならっ♡♡♡ ——ん
むっ!?!♡♡♡ ちゆるっ♡♡♡ じゆるるっ♡♡♡ じゅちゅ——
——っ♡♡♡」

マスターのいつもより低い言葉にドクンと心臓を高鳴らせながら、
アルトリア・アヴァロンは何とか拒否の言葉を絞り出そうとするが、
その瑞々しい桜色の唇は彼の唇に塞がれてしまう。右手は乳房を揉

みしだき、左手が濡れた秘所に向かって進んでいく。

彼の強引な行動にドキドキしながら、愛撫に抵抗しようと試みる。しかし、マスターの女を蕩けさせるようなキスの幸福感と全身をビクビクと痺れさせる強い快感に、全身に力が入らなくなってしまふ。

アルトリア・アヴァロンの太ももを閉じる力も弱まってしまい、マスターの左手が愛液と汗で濡れた太ももの付け根付近まで侵入する。

(ああ……っ♡♡♡ 我が命の手がっ♡♡♡ 私のおまんこにい♡♡♡
くくくくくっ♡♡♡ ダメっ♡♡♡ びちやびちやに濡れてるの
バレちやいますっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ——っ)

——くちゅっ♡♡♡

「じゅるるっ♡♡ んゝむっ♡♡ んゝうくくくくくっ♡♡♡♡♡」

マスターの左手の指先が、アルトリア・アヴァロンの女陰をショーツ越しに触れる。

小さな水音が鳴るのほぼ同時に、彼の口内で彼女は悲鳴のような嬌声を上げた。頭が真っ白になるような快感と、秘所を濡らしていたことがマスターにバレた羞恥心を同時に感じてしまふ。

アルトリア・アヴァロンは今更になって太ももに力を込めて、両脚を閉じるが既に無意味である。マスターの左手は彼女の秘所に辿り着いており、ショーツ越しに何度も割れ目をなぞるように人差し指と中指が愛撫を始めていた。

「んゝっ♡♡ ぢゅるるっ♡♡♡ んゝむっ……だめえ♡♡♡
んあっ♡♡ おまんこお♡♡♡ ゴリゾリだめ——んゝ
むうっ♡♡ じゅるるっ♡♡ ちゅっ、ぢゅう♡♡ じゅるるるっ♡♡♡
ぷはっ♡♡ はあーっ♡♡♡ キスしながら……あんっ♡♡
おっぱいとおまんこはあ……っ♡♡♡ へっ、変になりますうっ♡♡
——んちゅっ♡♡♡ ぢゅちゅう♡♡ じゅちゅるる♡♡♡
じゅる——っ♡♡♡」

二人はベッドの上に対面するように座っていたが、マスターのキスや愛撫から逃げようとアルトリア・アヴァロンの上半身はベッドの方に倒れていく。気付けば彼女は最初の時とは逆に、彼に押し倒されていた。

逃げ場の無くなったアルトリア・アヴァロンは、マスターの愛撫に全身をビクっ♡♡ ビクっ♡♡と震わせながら彼の口内で嬌声を上げる。辛うじて彼の肩に両手を添えるが、押し退けることが出来ない。

(ひう————っ♡♡♡ 気持ち良い所っ♡♡ 全部バレています……っ♡♡ あっ♡♡ あう♡♡ お豆擦るの反則っ♡♡♡ 全身ビリビリしますっ♡♡ 頭………真っ白………につ♡♡♡ ——いひっ♡♡♡)

唇と乳房、秘所を絶妙な力加減で愛撫され、三点同時の責めにアルトリア・アヴァロンの性感は、瞬く間の内に高まっていく。生まれて初めての絶頂が目前まで迫り、彼女は自分が自分で無くなってしまふような感覚に恐怖を覚える。

「——ぢゆるっ♡♡♡ じゅずずっ♡♡ んぐ………ぷはっ♡♡ はあゝーっ♡♡♡ はあゝーっ♡♡♡ わっ、我が命い♡♡♡ クるっ♡♡♡ キちやいますっ♡♡♡ あんっ♡♡♡ 目の前っ♡♡♡ チカチカっ♡♡♡ 体フワフワしますっ♡♡♡ 変なのくるっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ——っ♡♡」

アルトリア・アヴァロンは自分を繋ぎ止めるように、マスターの肩を掴む力を強める。彼女の爪先が彼の肩肉に食い込み、僅かに血が滲んでしまう。

当然、それなりに痛みが伴っている筈だが、マスターはアルトリア・アヴァロンを安心させるように微笑みながら、初めての絶頂へと導いていく。愛液で濡れたショーツ越しに充血してプツクリと膨らんだクリトリスを摘まむように親指と中指で左右から挟む。

最後の一押しのようにマスターが、アルトリア・アヴァロンの耳元で囁いた。

「——大丈夫。このままイって良いから、俺にキャスターのイク所を見せて」

彼女のクリトリスを左右に挟んだ状態で、彼が陰茎を扱くように上下に擦る。

快感を得るためだけに存在している陰核をショーツ越しに思いつ切り刺激されて、アルトリア・アヴァロンはずっと耐えてた快感が爆発してしまう。後頭部をベッドに押し付けるように首を曲げ、背中を和弓のように反らせる。

彼女は目を剥きながら、快感の津波に攫われてしまう。

「あゝ~~~~~♡♡♡ ああゝ♡ がっ、我慢出来ない
っ♡♡♡ イクっ♡♡ イクイクイクっ♡ イゝっくうゝうゝう
うゝうゝううゝううゝううゝ——っっ♡♡♡♡♡」

部屋中に響き渡る獣の遠吠えのような濁音混じりの嬌声を上げ、アルトリア・アヴァロンは人生で初めての絶頂を味わう。

太ももの付け根から足のつま先まで一直線にピンと伸び、初めて尿道口から尿ではない体液を間欠泉のようにショーツの中に噴き出す。一般的に潮と呼ばれる体液が、クリトリスを刺激するマスターの左手を濡らした。

充血した陰核に直接電流を流されたかのような快感が、頭に向かって突き進みアルトリア・アヴァロンの脳髓を快感という名の電気が焼き切る。彼女は目を大きく見開いているのに、真っ白な光が視界全体を覆い尽くして何も見えなくなっていた。

アルトリア・アヴァロンは全身が宙に浮いているような錯覚を覚え、宙に浮いてしまいそうな自身を繋ぎ止めるために、マスターの首に両腕を回して抱きしめる。快感を少しでも逃すために何度も何度

も全身をビクンと震わせる彼女は、まるで陸に打ち上げられてしまった魚のようであった。

「——イっ♡♡ いひ……っ♡♡♡ い——っ♡♡」

あれから暫くして絶頂から抜け出せたアルトリア・アヴァロンは、瀕死になった羽虫のように両脚をピクっ♡♡ ピクっ♡♡と痙攣させている。快感で潤んだ碧色の瞳の焦点は合っておらず、どこを見ているかも分からなかった。

意識が半分飛んでいる彼女に、マスターが声を掛ける。

「キャスターのイってる所、凄いいツチだったよ。気持ち良かった？」
「~~~~っ♡♡♡ 恥ずかしいです……っ♡♡ でっ、でもお♡♡♡ 気持ち良かったですっ♡♡ 何も考えられなくなってしまいました……っ♡♡♡ はあ——っ♡♡」

熱っぽい吐息を吐くアルトリア・アヴァロンは、全身に力が入らない脱力感に身を任せていた。慎ましやかだが柔らかな乳房をふよふよと揺らしながら、初めての絶頂の余韻に浸っている。

（先程のが”イク”なんですっ♡♡ ヒトが快楽に溺れる訳が、分かった気がします……っ♡♡♡ こんなに気持ち良いことを知ってしまったたら、知らなかった頃には絶対に戻れないです♡♡）

彼女が初めての絶頂に感動すら覚えていると、マスターの両手が潮と愛液で濡れたショーツに伸びる。

「もつとキャスターのイク所を見せて欲しいから、気持ち良くするのに邪魔な濡れてる下着は脱がせるね」

「あっ♡♡ まっ、待って下さいっ♡♡♡ 身体に力が入らない……っ♡♡ ああ——っ♡♡♡」

マスターは濡れたショーツを、スルスルと脱がせていく。

ズプと粘っこい水音をさせながら挿入してくのだった。マスターは彼女の耳元で囁いた。

「——いっぱい気持ち良くなってね」

イヤらしい水音と共に、アルトリア・アヴァロンは甲高い嬌声を上げた。

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―4

「——っ♡♡♡ イクっ♡♡♡ ——イクっ♡♡♡ ク
リっ♡♡♡ トリっ♡♡♡ スっ♡♡♡ 舐めにっ♡♡♡ やがらっ♡♡♡ ……っ♡♡♡ おまんこっ♡♡♡
ゆっ♡♡♡ っ♡♡♡ びっ♡♡♡ いっ♡♡♡ つ♡♡♡ 指でじゅぽじゅぽお…っ♡♡♡ つ♡♡♡ りっ♡♡♡ やめ
っ♡♡♡ えっ♡♡♡ つ♡♡♡ ♡♡♡ イクっ♡♡♡ イクっ♡♡♡ つ♡♡♡ おっ♡♡♡ つ♡♡♡ ♡♡♡ おっ♡♡♡ ひい
っ♡♡♡ ——っ♡♡♡ ♡♡♡ ♡♡♡」

濁音混じりの喘ぎ声を上げるアルトリア・アヴァロンは、マスターの唇と舌で充血したクリトリスを舐め吸われ、トロトロに解れた膣孔を彼の人差し指と中指でかき混ぜられていた。

雄の獣欲を鼓膜から煽る嬌声と粘っこい水音が、彼の部屋には響いている。

アルトリア・アヴァロンの秘所にマスターは顔を埋め、乳首の先端を舌先でグリグリと穿られていた時のように、性的興奮でプツクリと膨らんだ陰核を舐めしゃぶっていた。

クリトリスとは元からとても敏感であり、快感を得るためにだけ存在する部位ではあるのだが、今では快感の神経がそのまま剥き出しになっているかのように、感度が上昇していた。

今では陰核にフッと息を吹きかけられただけで、我慢しようと思っても甘い声を漏らしてしまう。

最初是指一本の挿入でも狭く窮屈だった膣孔は、マスターの人差し指と中指によってトロトロの交尾孔に変えられていた。

膣内がローションのようにとろみの付いた愛蜜で満たされており、彼がいくら指先で愛蜜を膣口から掻き出しても、それ以上にコプコプと雌のフェロモンがたっぷり含まれた蜜を溢れさせている。

膣壁や膣肉を柔らかい媚肉に変わるまでマッサージされ、恥骨側の腫れぼったくなつたGスポットを性感帯として開発されていた。十分に膣の刺激だけでも絶頂が出来るように、気持ちの良い交尾の準備が着々と進んでいく。

そして、また……

「————っ♡♡♡ イ…………っ♡♡ ———いひっ♡♡♡ お
ひいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ♡♡♡♡」

言葉にもなっていない快感に呻く声が、荒い吐息と共に半開きになった口から漏れ出る。だらしなく開いた口端からは、ガムシロップのような唾液が垂れていた。

一時間程前までは快感すら碌に知らなかったアルトリア・アヴァロソンドだったが、今では絶頂の感覚と強烈な快感をマスターの愛撫によって、何度も何度も嫌になる位に教え込まされていた。

ショーツ越しに陰核を刺激されて迎えた初めての絶頂が、“浅い”ものだったと思い知らされている。時間が経つに連れてクリトリスやG—スポットといった性感帯は、更に開発されていき、絶頂はより“深い”ものへと変わっていく。

（わっ、我が命にっ♡♡♡ イクの覚えさせられてます…っ♡♡♡ お豆もおまんこの穴もいっぱい弄られてっ♡♡♡ 気持ち良いのも♡♡ 恥ずかしいのも…っ♡♡♡ ———もう好きになってますっ♡♡ ———いひっ♡♡♡）

何度も何度も押し寄せる津波のような絶頂に身も心も蹂躪されながら、彼女の肉体は本人の意思に関わらず交尾への準備を進めていった。雄の精が胎の中へと入りやすいように閉じていた子宮口が緩み、膣孔から溢れる愛蜜の粘度が上がっている。

マスターの指にかき混ぜられて泡立った愛蜜が、膣口からこぼこぼと音を立てて零れていく。性的興奮できゆうきゆうと締まる桜色の肛門を通して、お尻の下のシーツを濡らす。

愛蜜と潮、全身の毛穴から吹き出る汗でベッドシーツは絞れそうな程に濡れており、甘酸っぱい汗の匂いと合わせて磯の匂いにも似た潮の香りが、部屋には籠り始めていた。雄にとっては不快感が一切無い、どんな高級な香水よりも好ましく獣欲を掻き立てるニオイであった。

絶頂の間はずっと四肢を緊張させながらビクビクと震えていたが、

最後に全身をブルリと震わせると、ベッドに四肢を投げ出すように崩れ落ちた。セックスへの期待と緊張で強張っていた肉体は、絶頂する度にだらりと弛緩する。

今のアルトリア・アヴァロンは、軟体生物のようにベッドの上で蕩けていた。

彼女が絶頂し続ける間も肉豆を舐っていたマスターは、ゆっくりと口を離れた。とろみの付いた愛液と潮、自身の唾液が混じった体液が、彼の唇とアルトリア・アヴァロンの秘所の間で糸を引く。

粘っこい液体から空気が抜けた時のようなぬぽっ♡♡という音と共に、トロトロに解れた膣孔からふやけた人差し指と中指が外気に露出する。まるで長時間お風呂に入った時のように、人差し指と中指は根元までふやけていた。

指先と膣孔の間には、粘っこい愛蜜の糸が引いている。

口元や指に付着した雌のフェロモンがたっぷりと含まれた愛蜜を舌先で舐め取ったマスターは、快楽で濁り焦点の定まっていないアルトリア・アヴァロンに話し掛けた。

「——キャスターのイってる声、可愛くて好き。もっとなんか聞きたい……」
「~~~~~♡♡♡ わがいのちい……っ♡♡♡ もうむりっ♡♡♡ むりれすっ♡♡♡ おまめとおまんこっ♡♡♡ これいじようされたら……しっ、しんじやいますっ♡♡♡ おまんこきもちいいのでしんじやう♡♡♡」

自分が壊れてしまいそうな快楽に怯えている彼女は、これ以上彼に愛撫をされ続けられれば、霊基が壊れて死んでしまうと思っていた。世界で一番恥ずかしいカルデアからの退去方法になつてしまうと考えると考えながら、脱力している腕を動かして秘所を覆うようにマスターから隠す。

しかし、心の中ではマスターに壊されるのも、嫌では無いと思っている自分もいた。

彼に何度も強制的に絶頂させられ続けて、アルトリア・アヴァロン

は性感帯だけでは無く、マゾヒズムも開発されていたのだ。

必死にお願いしても許して貰えずに、無理矢理に秘所を弄られて前後不覚になってしまう程に何度も絶頂する。恥ずかしい体液をマスターの目の前で嘔き出すことが、気持ち良くなっていた。

——だからこそ彼に本気で迫られれば、彼女は抵抗することが出来ない。

敢えて無言のマスターは、秘所を隠すアルトリア・アヴァロンの両手の手首を掴んで、簡単に手を除けてしまう。今の彼女は度重なる絶頂で腕に力が入っていないため、彼の手を払い除けることなど出来る筈も無かった。

アルトリア・アヴァロンは顔や耳の先端を、熟した林檎のように真っ赤にしながら、マスターという強い雄に媚びるような甘い声を出して、気持ち良いのを許して下さいと懇願する。

「やあっ♡♡♡ わがいのちい……っ♡♡ ゆるひへっ♡♡ ゆるひへえ♡♡ ゆびもくちもお——らめえ……っ♡♡♡」

(きつと——また、おまんこイジメられちゃいますっ♡♡♡ イヤっ
て言っても許して貰えなくてっ♡♡ おしっこみたいなのを、お漏らししちゃう♡♡♡ ……そっ、そんなの気持ち良いに決まっていますっ♡♡ ♪♪♪♪♪っ♡♡♡)

想像しただけでアクメしてしまいそうになり、アルトリア・アヴァロンは自身の淫乱さへの羞恥で全身をビクンっ♡♡♡と震わせる。

淫乱な自分を否定したくて、幼い子供がグズった時のように、頭をブンブンと左右に振るアルトリア・アヴァロンに対して、マスターは彼女が予想出来ないことを口にする。

「——それなら……今度はエッチしよっか」

「——ふえっ♡♡♡」

「キャスターとセックスしたい。もう十分に解れてるし、痛くないから大丈夫だよ」

「しえ……しえつくすつ♡♡♡ わがいのちとセックスつ♡♡ あゝ
~~~~~♡♡」

彼の言葉の意味を理解して、アルトリア・アヴァロンは歓喜と恐怖に打ち震える。

彼女の肉体と本心はやつと交尾が出来ると悦んでいるのだが、僅かに残った理性的な部分は、こんなにも敏感になった身体で大好きなマスターとセックスをしたら、本当に壊れてしまうと悲鳴を上げていた。

（我が命とセックスつ♡♡ そんなの絶対に気持ち良いに決まってますつ♡♡♡ でっ、でも口や手より、セックスの方が気持ち良かったら♡♡ ——つ♡♡♡）

アルトリア・アヴァロンがそんなことを考えている内に、マスターは今まで着ていた服を脱いでいく。黒いインナーを脱げば鍛えられた上半身が露になり、目の前でそれを見ていた彼女は、ドキドキと胸が高鳴っているのを感じていた。

——そして、彼はズボンと共にパンツを脱いだ。

ブルンと音が聞こえそうな程に勢い良く、海綿体が大量の血液によって膨張したペニスと露となる。ズボンとパンツに押し付けられ、ずっと蒸れていた陰茎は、噎せ返る程の雄の臭いを放っていた。

勃起したペニスのフォルムは、まるで捕鯨用の槍に似ていた。

マスターのペニスの全長は少なく見積もっても30 cmを優に超えており、全体が女の淫水に焼けて赤銅色になっている。彼の健康的な肌の色とも違っており、その異様な大きさもあって、巨人のペニスを移植されているのではないかと、錯覚してしまう程であった。

アルトリア・アヴァロンが握っても指が回り切らないであろう程に竿が太く、竿の部分には葉脈のような太い血管が浮かび上がっている。まるで鍛えられた男性の腕のようだ。

亀頭も握り拳のように大きいのだが、何より目立つのは、亀頭と竿

の境目である雁首の深さであった。2 cm以上は深そうな魅惑の段差は、膣肉と膣襞をゴリゴリと削ることが容易に想像が出来る。

余りにインパクトのあるペニスに目を奪われがちだが、陰茎の根元にぶら下がっている片方だけで野球ボールよりも大きいのではないかと思える大きさの睾丸が、威圧感すら感じる程の存在感を放っていた。

睾丸の大きさとはいち、生殖能力の高さである。

総評してマスターの睾丸を含めたペニスは、僅かな反抗心すら湧かなくなるまでメスを屈服させ、その睾丸から大量に生産された濃厚な精で確実に孕ませる。

あらゆる雄の中でも、最上位に位置するペニスであった。

「~~~~っ♡♡♡ ……うそっ♡♡ 大きすぎ……ます♡♡♡ こんにやの入らないですっ♡♡」

自分がヒンヒン甘い声を上げて哭いていた、マスターの男性らしいしつかりとした指が、爪楊枝であったかのようにすら感じる程に長大なペニスに、アルトリア・アヴァロンはただ絶句することしか出来ない。

“こんなにも大きな”モノ”で胎を貫かれて濃厚な精を注がれば、霊基を壊される程度で済む筈も無いだろう。マスターという存在を魂を含めた全てに深く深く刻み込まれ、彼に肉体や魂まで屈服してしまい、聖剣の擬人化としての在り方すら歪んでしまう。

彼女の理性が『直ぐにでも逃げなさい』と、最大限の警鐘を鳴らしつつ、蕩けた雌の本能が理性に抗い、既に墮ち掛けている肉体が言うことを聞いてくれない。

ただペニスに熱い視線を注ぎ込み、これまでに以上に粘っこい愛蜜を膣孔から溢れさせることしか出来ない。

(あんなにも大きなおちんぽでっ♡♡♡ おまんこ……♡♡ こっつ、壊されてしまいますっ♡♡♡ 我が命に壊されるっ♡♡♡ につ、逃げなきやいけないのにつ♡♡♡ おちんぽから目が離せない♡♡♡



につ、逃げ——っ♡♡♡♡)

逃げなければとアルトリア・アヴァロンが思考していると、それを実行する前にマスターが彼女の両膝をがっしりと掴み、一人一人が間に入れるように脚を大きく左右に開いた。

「——ひいっ♡♡♡♡ 大きい……っ♡♡♡ ——ながっ♡♡♡」

悲鳴を上げるアルトリア・アヴァロンの引き締まったお腹に、マスターの大きなペニスが置かれる。明らかに股下から鳩尾までをペニス貫くだけの長さがあり、彼女の下腹部が痙攣を起こしたかのよう

に震えた。  
嘘や心情を見抜く妖精眼を使用しなくとも、自分を犯したいと思っ

ているのが分かる。ギラギラと情欲の炎が灯った瞳のマスターが、絶対に逃がさないと言外で伝えるように、アルトリア・アヴァロンの細腰を左右からがっしりと掴んだ。  
「ひゅう——っ♡♡♡♡ こわいつ♡♡♡ わが命っ♡♡♡♡ こわいれすっ♡♡♡ セックスだめっ♡♡♡♡ おちんぽ大きすぎてっ……ぜったい無理れすっ♡♡♡ む——」

彼女は肺が引き攣るような悲鳴を漏らしながら、自分の腰を掴む彼の大きな両手に手を重ねて、必死に性行為は無理だと訴える。しかし、アルトリア・アヴァロンの碧色の眼には、自分に向けられた”愛”と雄の”獣欲”しか映らない。

——目の前の雌を欲望のままに貪り、愛することしかマスターの頭と心には存在していない。

彼女はこの段階でようやく、自分が彼という”強い雄”に捕食される、”か弱い雌”だったのだと理解した。

必死の懇願も聞いて貰える筈が無かった。完全な上下関係が出来上がっている状態で、下の者の言うことなど聞いて貰える筈が無いのだ。

(ああ……私は我が命に壊されてしまうのですねっ♡♡ 我が命専用のおちんぽケースにされてっ♡♡ お射精されるだけの肉壺に……っ♡♡♡)

——チュっ

「……んっ。キャスター……愛してるよ」

「~~~~~っ♡♡♡ あ——っ♡♡ ああ……っ♡♡」

アルトリア・アヴァロンの金色の紋様が浮かぶ額に、マスターが軽く口付けを落とした。男性が女性の額にするキスは、心から愛しているという無償の愛の意味がある。

彼の本心からの額への口付けは、ある意味で誓いのキスよりも強い意味を持つ。

少なくとも悪意と嘘の嵐に吞まれ続けた彼女にとっては、自分が壊れても良いと思える程に蕩けてしまう口付けだった。僅かに残った理性もドロドロに溶けて、マスターのモノになる決意が固まってしま

う。  
(もう……逃げるとかどうでも良いですっ♡♡♡ 私が我が命の”剣”だと思っていました、本当は我が命の”鞘”が私だったのですねっ♡♡ どうせ抵抗しても無駄ですから……っ♡♡♡ このまま——受け入れてしましましょう♡♡♡)

全身が幸福感に包まれるアルトリア・アヴァロンは、熱っぽい吐息を吐くのだった。

番外編：彼のための剣は、村娘の恋を叶える―5

額への口付け一つで蕩けたアルトリア・アヴァロンは、マスターとの性行為を悦びながら受け入れる。理性はドロドロに溶けて蒸発しており、彼女は雌としての本能が表出していた。

本人は意識している訳では無いのだが、自然と両脚がこれまで以上に左右に開く。彼の長大なペニスを受け入れやすくするために、秘所を突き出すように腰が反っている。

それは一般的に正常位と呼ばれる体勢であり、恋人・夫婦が最も好む愛し合う為の体位であった。

また、アルトリア・アヴァロンは降伏して腹を見せる犬のような体勢に自然となるため、彼女の羞恥や快感に染まる淫らな表情や美しくもイヤらしい乳房、しとどに濡れた秘所などが丸見えとなる。

その美しい肢体や蕩けた彼女の表情を見ることが出来るのは、世界中を探しても自分一人だけだと思つくと、マスターの怒張したペニスに血液が集まつていく。

陰茎がビキビキと苛立つように反り返って、ドクンドクンと高鳴る心臓のように脈打つ。

野球ボールのように大きくずつしりと重たい睾丸の中で、グツグツと煮立った精液が大量に生産される。それは雄としての飢える獣のような煮え滾る生殖本能が、目の前の雌を孕ませようとしているからに他ならない。

アルトリア・アヴァロンの細腰をマスターはガツシリと両手で驚掴みにする。本当に挿入出来るのか不安になる小さな膣孔に、彼の大きな亀頭の先端が触れた。

——クチュコッ♡♡

後はマスターが腰を押し込めば、彼女は処女を卒業するのだ。

半開きになった口から『ハッハッ』と、子犬のような浅く早い息使いをするアルトリア・アヴァロンは、理由も分からずに瞳をうるうる

と潤ませて涙を流す。

その涙はアルトリア・キャスターの想いが、彼女に涙を流させたのだろう。最後まで使命を全うした自分が遂げられなかった”恋”を、アルトリア・アヴァロンが叶えてくれるのだ。

彼女が目尻から流した涙をマスターはキスをするように舐め取り、耳元で最後にもう一度だけ愛を囁いた。

「——好きだ。”キャスター”が欲しい」

「~~~~~っっ♡♡♡ もっ、貰って下さい……っ♡♡ 私も我が命が、大好きです——ちゅっ♡♡♡」

二人は互いに目を見詰め合わせた状態で、付き合いたてのカップルがするような軽いリップキスをする。それは溢れる想いが抑えきれなくなってしまうからだろう。

短いキスの後に、マスターは腰をゆつくりと押し進めていく。

ずぷぷぷっ♡♡と粘っこい水音と共に、マスターの長大なペニスがアルトリア・アヴァロンの膣内に埋没する。自分の狭い膣肉がミチミチと限界まで拡がり、指での愛撫とは全く異なる圧迫感と快感が彼女に伝わり始めた。

「あゝ——っ♡♡♡ あぐう……っ♡♡ ナカゝっ♡♡ ひろがる  
っ♡♡♡ あゝっ♡♡♡ あゝっ♡♡ あゝ……っ♡♡♡」

アルトリア・アヴァロンが余裕の無い濁音混じりの嬌声を上げる内に、マスターの指で解され、柔らかくなった処女膜が抵抗も無く破ける。彼女の膣孔から本当に少量の血液が流れるが、直ぐに大量の愛液で洗い流されて分からなくなってしまう。

女の細腕よりも遥かに太い30 cmを超える長さのペニスが、ゆつくりと”奥”に向かって突き進む。事前に膣肉や膣壁を丹念にマッサージしていたお陰で、自分の握り拳よりも大きな龟头が痛みも無く受け入れられる。

しかし、痛みは無くとも長大なペニスで内臓が圧迫される感覚や骨盤が歪んでしまいそうな錯覚に、全身が竦むような恐怖を覚えた。

普通に考えて自分の腕よりも太いモノが、体内に入っていくのは怖いだろう。震える声を出すアルトリア・アヴァロンは、その恐怖を紛らわせるためにマスターにキスを懇願する。

「い……っ♡♡ いっ♡♡ ひっ♡♡ わっ、わが命っ♡♡ ——うあ  
っ♡♡ きしゅっ♡♡ キスして欲しいれすっ♡♡ キス——  
んむっ♡♡♡♡ ちゅう♡♡ ちゆるるっ♡♡♡♡ じゆるちゅう——  
——んうっ♡♡♡♡」

彼の長い舌が彼女の口内に躊躇なく侵入して、舌同士が蛞蝓の交尾のように隙間なく絡み合い、ガムシロップのように甘いと錯覚してしまふ唾液の交換が始まる。

上と下の両方からマスターに蹂躪されるアルトリア・アヴァロンは、気を抜けば意識が飛んでしまいそうな快感と幸福感を感じてしまふ、気付けば怖いという気持ちは無くなっていた。

緊張で強張っていた身体もふにやふにやに弛緩しており、ペニスの挿入もよりスムーズなものとなる。硬く熱い亀頭が柔らかな膣肉を搔き分け、全体の半分ほどペニスが挿入された頃には、女の一番大事な“小部屋”の入り口に亀頭の先端が辿り着いてしまふ。

（——っ♡♡♡♡ おくっ♡♡ 奥まで入りましたっ♡♡♡♡ これで我が命のモノです♡♡♡♡ 幸せで変になってしまいましたそう……っ♡♡♡♡）  
真正正銘の“女”となったアルトリア・アヴァロンが、夢見心地になつていると、既に亀頭と子宮口が密着しているのに、マスターが腰を更に押し進め始めた。

子宮口がぐにゆりと圧迫され、子宮全体が亀頭によつて持ち上げられていく。

「——じゆるるっ♡♡ ぢゅ——っ!?♡♡ んっ♡♡♡♡ ん  
むううっ♡♡ううっ♡♡うううう——っ♡♡♡♡ ぢゅちゅう♡♡ ん













『んんんん？ 見えないなあ』

花の匂いをさせる妖精のように美しい白髪的美少女が、首をコテンと可愛らしく傾げていた。うん、うんと何かを思案するように唸っており、彼女には何か不可解なことがあったようだ。

何故か虚空を見詰めている彼女に、アルトリア・アヴァロンの淫紋とよく似た”蒼色の淫紋”を下腹部に刻む美女が声を掛ける。

『——何を唸っているのですか？ 余り五月蠅いと作業の邪魔なので、ここから追い出しますよ』

『酷いなく。ボクと”竿姉妹”なんだから、もう少し優しくして欲しいなあ。この前なんて、ボクと精液を分け合うティープなキスだったのに……ねえ？”モルガン”』

『あつ、あれは我が夫が悦ぶから、仕方なくしているだけです。それより唸っていた理由は何ですか？”マーリン”——早く答えなさい』

この前のマーリンとのキスを思い出したのか、モルガンは白い肌を紅潮させ、捲し立てるように問い掛ける。その問い掛けにマーリンは、少しだけバツが悪そうにしながらかも答えた。

『あゝ……すこーしだけ気になって、モルガンの後輩とご主人様のエッチを”覗こう”としたんだけど——何でか”見えない”んだよ』

マーリンの”覗き癖”に、モルガンが心底呆れた表情を浮かべる。彼女が”ご主人様”と呼ぶマスターに、屈服する原因にもなった”千里眼”を使った”覗き”を懲りずに続けていることに、呆れることしか出来ない。

（——いえ、もしかすると我が夫からの”お仕置き”を、期待しているのかもしれませんが。我が夫にお尻を叩かれながらするセックスは、癖になってしまいますからね……っ♡♡♡）

脳内でお仕置きエッチをされた時のことを思い出して、モルガンの

蒼色の淫紋が僅かに光る。見た目は冷徹で近寄りがたい美人だが、彼女も覗きをするマーリンに負けない位にスケベなことで頭が一杯であった。

そんな脳内のスケベな妄想を一切外に漏らさず、モルガンはマーリンを注意する。

『——全く何をしているのですか。そう言った出歯亀行為は、古来から碌な結末を迎えないと相場が決まっていますよ』

『ふふっ、大丈夫だよ。仮にも神代クラスの魔女が二人もいて、覗き位で対処出来ない結果になる訳無いよ』

マーリンは自信満々といった様子で答えるが、俗に言う”フラグ”を見事なまでに立てていた。本来ならば全てを見通す千里眼を持つ彼女に、不測の事態などありえないのだが、何事にも例外は存在する。自らフラグを立てていることに気付かずに、マーリンはスケベな表情を浮かべてモルガンに提案をした。

『……それよりも覗いてたのがご主人様にバレて、お仕置きセックスの方がありえそうじゃないかい？♡♡ ——その時は”連帯責任”で、一緒にどうっ♡♡』

『——♡♡♡♡ いっ、良いでしょうっ♡♡ 私も水鏡で覗いてみます』

——訂正しよう。

モルガンとマーリンは、同じ穴の貉であった。

愛するマスターが関わると途端にポンコツになる二人は、先程の出歯亀が碌な結果を生まないという言葉も忘れて、覗き行為に神代の魔術を戸惑うこと無く行使する。

現代の魔術師がそれを目撃すれば、こんな低俗で下らないことのために使われる魔術の難易度に発狂することだろう。しかし、世界がマスターを中心に回っている二人にとっては、根源への到達よりも遙か

に優先するべきことだった。

斯くして無駄に高度な魔術によって、マスターの部屋の様子が映し出されることになるかと思われたが……

——二人が目映ったのは、大きなダンゴムシだった。

虫を大の苦手としているモルガンは、反射的に自身の持つ最大火力となる宝貝を展開する。しかし、ここはカルデアの内部であり、こんな所で大規模な破壊が起これば、大きな問題となることは火を見るよりも明らかであった。

『~~~~~っ?!!?』

『“モルガン”待っ——』

モルガンを止めようとしたマーリンの制止も間に合わず、カルデアは文字通りに”半壊”するのだった。

半壊の原因となった二人は、罰としてカルデアを修復するまでの期間、マスターとの接触が禁止となったのは仕方のないことだろう。

モルガンがカルデアを半壊させる原因となった、大きなダンゴムシの背中に腰掛ける”男”がいた。その男は背中にトンボのような羽が生えており、男にしては長い灰色の髪を押さえるように、冷たい青色の王冠を被っている。

確証は一つとして無いがマーリンの千里眼を妨害し、モルガンが苦手な虫を水鏡に出現させたのは、この男で間違いないだろう。そんな

ことが可能なのは、カルデアには■■■■しかない。

心底つまらなそうな表情を浮かべる■■■■は、ドブ川に唾を吐き捨てるかのように言葉を紡いだ。

『——バカ同士……”短い間”……………”不幸になれ』』

この『バカ同士』が誰を指しているのかは、本人にしか分からない。しかし、その後の言葉は口にしたこと全てが反転する■■■■にとっては、最大限の”祝いの言葉”だったのは間違いないだろう。世界を憎む男が”誰か”を祝福することがあるのだとすれば、それはきつと——

——同じ悪意の中で生きた”少女”と敵だが嫌いになれなかった”青年”の、二人だけだろう。

世界を嫌う大嘘つきの■■■■は、幸せを手に入れた二人を思い、僅かに両の口端を吊り上げるのだった。

評価者200人記念 番外編―7 愛の神は、愛に溺れる

番外編：愛の神は、愛に溺れる―1

『―私は貴方を無間の愛の中に飲み込んでしまいかもしれません』  
『覚悟しておいて下さい……』

『私みたいに面倒臭い愛の神は、背中を押して一歩踏み出させるどころか』

『二度と這い上がれない墮落の断崖に、能天気で危機感のない貴方を突き落とす隙を―ずうっと、ずうっと、窺っているんですからね……？』

目の前で能天気な笑みを浮かべる自分のことを『迷っている時に背中を押してくれる神様』と言ってくれた黒髪の青年に向かって、これからもずっと見続けるという脅しを含ませた忠告を少女はした。雪のように白い髪をサラサラと靡かせ、ルビーのように深紅の瞳を怪しく輝かせる彼女は、年齢には合わない妖艶な笑みを自然と浮かべてしまう。

―それはまともな仕事の出来ない”歪んだ愛の神”である少女が、一人の人間を”特別”に思っている証明である。

”今”は彼だけのサーヴァントである彼女にとって、青年は根源に関わる存在であるが故に、自然と目で追ってしまうし、忘れられないし、無視をすることも出来ないのだ。しかし、少女が青年を特別に思っている理由が、根源に関わっていることだけなのか。

それとも”別の感情”が存在しているのかは、この時の彼女には分かっていなかった。

―愛されることも、その悦びも知らない愛欲の獣が、愛に溺れる

のはまだ先のことである。

最も『愛』について熟知しており、愛に近すぎたが故に愛を倦んだ神。他人に分け隔てなく無償の愛を与え、骨の髄まで墮落させることに特化した存在が、インド神話における”愛の神 カーマ”の役割であった。

カーマデーヴァとも呼ばれる彼女は、釈迦が菩提樹の下で悟りを開こうとした際に様々な邪魔をして、悟りを阻止しようとした”魔王 マーラ”と同一存在の別側面とされている。これはインド神話における『修行者の邪魔をする者』としての位置付けが同じであるため、カーマとマーラの二人は同一存在とされているのだ。

——カーマ／マーラは愛という概念の良否を同時に表している。

仏教道における六欲天の第六天、他化自在天に住まう『第六天魔王”波旬”であるマーラは、釈迦の悟りを邪魔するために、自身が変身した姿である美しい三人の娘を送り込み、火の円盤を投げつけ、岩石や武器を降らせ、怪物達に襲わせるなど様々な妨害を行った。他にも豪雨や雷など、己の持つ全ての力を用いて邪魔をする。

しかし、釈迦に対して美しい女の誘惑は心を揺らすものではなく、投げつけた武器や岩石などは花に変わってしまった、結局の所は悟りを阻止することが出来なかった。悟りを開いた釈迦に対して、マーラは自身の敗北を認めるといふ逸話がある。

因みに同じ第六天魔王の呼び名を持つ、第六天魔王”織田 信長”とマーラに直接的な関係は無い。

織田 信長が第六天魔王と呼ばれるようになったのは、人間の欲望



の全てを否定する仏教の考え方が、新しい時代を切り開き、人の欲望を肯定し叶えようとする”彼女”の行った偉業の全てを否定したことから始まる。

日本を統一するまで秒読みであった織田 信長が、『人々を仏の道から遠ざける仏敵』であると当時、相当な力と権力を持っていた僧侶達が一斉に批判したのだ。それを許さなかった苛烈な彼女が、真つ向から仏教と敵対し、他国からキリスト教を広めた経緯があった。

身内に対しては謀反を起こされても許してしまう程に甘い信長だったが、それ以外には正しく魔王のように恐ろしく容赦が無かった。

実際に『比叡山焼き討ち』などで僧侶、学僧、上人、児童の首の悉くを刎ねたことも歴史に語り継がれていた。

キリスト教の宣教師ルイス・フロイスが、日本布教長であったフランシス・ガブリエルに宛てた手紙に、信長の仏教を駆逐せんばかりの行動に『第六天魔王 信長』と記載したのが始まりである。それが後世にも残ったがために、現代でも第六天魔王 織田 信長の名前が広まっているのだ。

マールが釈迦の悟りを邪魔した逸話があるように、カーマはひたすら修行に集中していたシヴァ神に対して、その妻である女神 パールヴァティーの想いを気付かせるために、他の神々に恋のキューピットのように”矢を射させられた”逸話がある。

——かつてターラカという魔神が、インドの神々を苦しめていた。

後に三界を支配するまでに至ったターラカは、アスラ又はタラカースラとも呼ばれる。想像を絶する苦行を行い、その行いを”創造神ブラフマー”に認められ、本人の望みによつて『破壊と創造を司るシヴァ神の息子以外には殺されない体』を与えられた存在である。

何故、ターラカがシヴァの息子以外からは殺されないという条件付けをしたのかと聞かれれば、当時のシヴァ神は最初の妃で知られる”サテイー”を失った悲しみを乗り越えるために瞑想に入っており、当

分の間は子を作る気配が無かったからである。実質的な不死身の存在となることを望んだのだ。

ほぼ不死身となったターラカは、瞬く間の内に地上界、空中界、天界と呼ばれる三界を支配して”アスラ王”となった。

アスラ王を倒せるのがシヴァ神と”女神 パールヴァティー”の間に生まれた子供だけであると知っていた神々だったが、シヴァ神は瞑想と修行に集中するあまり、パールヴァティーに全く目を向けていない状態であった。

これに困った神々は”愛の神 カーマ”を派遣して、シヴァに情欲の矢を撃たせることで夫婦の愛を取り戻させようとしたのだ。神々の策略は成功し、アスラ王を打倒する”軍神 スカンダ”が二柱の間に生まれた。

一時は三界を支配したアスラ王は、軍神 スカンダの活躍によつて消滅するという、勸善懲惡の”ハッピーエンド”を迎えたのだ。

——しかし、何も犠牲が無かった訳では無い。

世界——宇宙すら破壊する役目を持った神。破壊と再生を司る神であるシヴァ神の修行の邪魔をするなど、戦の神でも無いただの愛の神には無謀に過ぎる所業であった。例えるならば子供と大人の喧嘩にも等しい、力の差が存在している。

神々もそれを知らない訳も無かったが、アスラ王を倒すためにカーマを生贄にしたのだ。

誰もが予想した結果ではあるのだが、二柱の愛を取り戻させるために矢を撃ったカーマの行為に、シヴァ神は怒髪天を衝く程に憤怒する。『宇宙を焼き尽くす存在』としての力である第三の目を開眼して、愛の神であるカーマを焼き殺してしまったのだ。

ここまでがインド神話における愛の神 カーマの最期にして、現代でも有名な伝説である。全体で見れば幸せな物語であったとしても、大多数のために犠牲となった愛の神にとっては不幸な出来事であつ

た。

このような凄惨な過去があつて——彼女が誰かの愛を手助けすることに”トラウマ”を持つようになったのは、誰もが仕方無いと思うことだろう。

そして、ここからはカルデアのマスターとカーマの馴れ初めについてだ。

宇宙を焼き尽くすシヴァ神の力で消滅した彼女は、身体無き者となつてしまった。それは逆説的に宇宙たる資格を得たことに等しかったのだ。

自分自身の形が同種の無と化してしまい、”無辺際の領域”という簡単に表現するのであれば”宇宙の概念”と同化してしまったのだ。則ち『身体無き者』としてのカーマは宇宙という概念と深く繋がり、『シヴァの宇宙』そのものとなった。

本来ならばカーマが”シヴァの宇宙”そのものとなつても、大きな意味を持つものでは無かつた。身体が無い時点で、何も出来ることが無かつたからである。しかし、何度も説明したがカーマには同一の存在とされる魔王 マーラが存在していた。同一であるが故に本当の意味で消える訳では無かつたのだ。

マーラは別側面から宇宙の力を手に入れたことに等しい。

——その結果、『宇宙と繋がった欲望の魔王 マーラ』が、『宇宙と繋がった愛の神 カーマ』に等しいという災厄。カーマは『愛と欲望の宇宙的氾濫』という災害を内包する存在となった。

災害に等しい存在となったカーマは、人を滅ぼす獣の幼体となる資格を獲得する。

七つの人類悪の一つである『愛欲』の獣、ビーストⅢ／Ⅰの幼体として顕現したのだ。愛欲の獣として『自分が全てに愛を与える——則ち、全ての愛を奪う』という在り方であつた。

愛欲の獣の幼体となったカーマは、ビーストⅢ／Ⅰとして完全に羽化するために、そして自身の対となる愛欲の獣『自分に全ての愛を向けさせる』在り方のビーストⅢ／Ⅰ”殺生院キアラ”に対して、マウントを取りに態々カルデアを訪れたのだ。

ビーストⅢ／Rである殺生院キアラは、紆余曲折を経てカルデアに召喚されていた。ある意味で貰い事故のような形で、カルデア及びマスターはカーマに襲われたのだ。

そこから先は語るまでも無いだろうが要約すると、強大な力を持つカーマによつて、カルデアを崩壊させる寸前まで追い詰められた。

しかし、彼女の依り代となった少女の姉や父親と同じよううっかりと慢心が原因となり逆転され、彼女の宇宙全体を自分で満たすという計画は失敗に終わってしまう。

最終的にはカーマと縁深い”パールヴァティー”によつて、彼女は空の彼方にまで飛ばされたのだ。

内面概念宇宙の恒星に引かれ墜ち、炎に焼かれて灰になろうとしていたカーマを哀れんだ殺生院キアラは、同じ獣性を持つ者の情けでマスターとの間に縁を繋げて掬い上げた。

縁が存在すれば召喚出来るのがカルデアであり、マスターとの縁を辿つてカーマは召喚されたのだ。

『ふう……。本当は、ここにお邪魔する予定なんて無かったんですけど、諸事情あります。私はカーマ、愛の神です。でも、私に恋愛相談とかはしない方が良くと思いますよ？』

この時の愛に疲れてしまったカーマは、恋や愛に現を抜かす存在を邪魔することに楽しみを覚える、悪い愛の神として開き直っていた。

この世で最も愛に詳しい存在であるカーマには、未だに理解出来て

いない愛が一つだけ存在している。それは他人に愛を与える神であるが故に知ることが出来ない、自分自身へ向けた愛『自己愛』であった。

奇しくも彼女の対となる、殺生院キアラとは真逆である。自己愛の極致にいる魔性菩薩は、他人を愛する気持ちを理解出来ていなかったのだ。

——どこまでも正反対な二人だったが、本当の意味で男女の”恋愛”を知らない共通点があった。

どこぞの妖精國の女王のように、恋愛処女と言い換えても良いかもしれない。性愛ばかりに耽って、健全な愛を一度も育んだことの無い彼女達に、愛を教えるのは同じ男であった。

「……カーマにとって、”愛”って何だと思う？」

戦闘と何気ない日常を共に過ごす中で絆を深めていき、素材と種火を注いで幼い姿から少女、そして成熟した美女の姿になったカーマに対して、マスターは疑問を投げ掛けた。

それは愛の神にとっての『愛の考え方』を知りたかったのもあるが、それ以上に嫌々ながらも”他人に与える愛”は話しても、自分への愛は一度も語ったことの無い彼女のことをもっと知りたかったからだ。

愛の神——カーマが”自分が全てに愛を与える”存在であることは知っているのだが、それでも言葉の節々に感じる卑屈さや自分を好

いていない考えが、多くのサーヴァント達と関わる中で観察力の培われたマスターには透けて見えていた。

カーマが本来の力を取り戻しつつあり、絆を深めた今だからこそ、マスターは彼女の心に一步踏み込んだのだ。それは彼自身もカーマのことを、憎からず思っているからであった。

「……え？　そもそも愛とはなんなのか、ですって？」

カーマは形の良い眉を顰め、露骨に嫌そうな顔をする。

正しく嫌いな人の話をされた時のような反応であった。嫌いや苦手とする人物の多い彼女の場合は、シヴァ神やパールヴァティー、殺生院キアラの話をされた時と殆ど同じである。

マスター以外が同じ質問をすれば、きつと彼女は無視を決め込んでいた。しかし、憎からず思っている彼の問いには、自然と思い浮かんだ言葉を口にしてしまう。

「そんなこと口にするのも嫌です。考えるのも嫌です。それくらい、私は愛というものに倦んでいます」

殆ど大義のための生贄にされ、焼き殺された苦い思い出の原因たる”愛”への忌避を口にしていく。そして、ほんの少しの期待を持って言葉を続ける。

「——そんなに興味があるなら貴方が私に教えてくださいよ」

堰を切ったように、本音がカーマの口から漏れ出る。

「愛に疲れ絶望しているこの私に、もし愛の素晴らしさを思いさせてくれたら——ッ」

——自分を愛することが出来るかもしれません

喉から出かかった言葉を、彼女は慌てて？み込んだ。そんなありもしない幻が駄目な自分には、与えられる筈が無いと思ってしまう。希望を口にするよりも、諦観の念が襲ってきたのだ。

「……いえ、何でもありません。兎に角、もう完全に貴方は私の中なんです。絶対に逃げられない。それだけは、忘れないで下さいね……マスター」

先程の言葉を誤魔化すように、マスターを脅すような言葉を口にしてしまう。

長い年月を掛けて形成された地層のように分厚く大きな諦めと、未だに捨て切れない僅かな希望の入り混じった表情を浮かべるカーマに対して、彼女の話の話を静かに聞いていたマスターは意を決したように、ずっと思っていたことを言葉にする。

「——本当に俺で良いなら、カーマに愛を教えて上げたい」

「——ッ。はっ、はあ?! ほっ、本気で言ってるんですか……私がどういう存在なのか認識できてないんですか」

「うん、分かってるつもり。全部知った上で、”カーマを愛したい”」  
「~~~~~っっ♡♡ なっ、なあ——っ”♡♡」

絵に描いたような狼狽の仕方をするカーマに、彼は意志の強い人間がする真っ直ぐで力強い視線で彼女を見詰める。

その物理的な熱量すら持つていそうなマスターの視線を受けて、カーマは顔を林檎のように真っ赤にしながら更に狼狽えてしまう。感情がぐちゃぐちゃにかき混ぜられて、自分の今の気持ちちが理解出来ていなかった。

(えっ、え? いっ、いきなり何ですか、この状況は? ちよつと展開が早すぎて、全く追い付いてないんですけど……ッ)

彼女が混乱している間に、彼は二人の間にあつた距離を詰めていく。気付けば少しでも身体を前に傾ければ、相手と触れ合う距離まで

近付いていた。人間の持つパーソナルスペースと呼ばれるものを、完全に踏み込んでいる距離感である。

愛を与える神とは思えない程に、カーマは身悶えるような羞恥を感じる。耳の先端まで真っ赤にさせる彼女は、まるで初心な少女のようであった。マスターの顔をチラチラと盗み見ながら、少しでも自分を落ち着かせようとする。

しかし、愛し合うことに関しては愛欲の獣にだって負ける訳が無い百戦錬磨のマスターが、そんな暇を与えてくれる筈も無かった。無意識の内に後退して距離を取ろうとする彼女を壁際に追い込み、顔を背ける頭を左右から挟むように押さえて、強制的に見詰め合う状態に持っていく。

カーマを愛したいという想いが嘘で無いことを伝えるために、彼はただジツと彼女の深紅の瞳を見詰める。

「ちっ、近いですう♡♡　いつ、いきなり愛したいって言われても……っ♡」

「——嫌だった？」

「いつ、嫌じゃないですけど♡　心の準備がまだ……っ♡♡♡  
………すっ、少し時間を下さい♡♡」

ずっと自分が望んでいた筈のことが突然やって来て、全く平静を保てていないカーマは何とか言葉を絞り出した。心臓が破裂してしまいたい程に胸が高鳴っており、このまま見詰め合ったままでは比喩抜きで死んでしまいそうである。

そんな彼女のいっばいっばいな様子を見ていたマスターは、カーマを開放する前に十秒ほどジツと見詰めた後に、そのまま流れるように顔を近付けた。

本当に一秒にも満たない僅かな時間だけ、唇同士が触れ合った。

「——っ!?!♡♡♡」

「——んっ。今日の夜になったら、俺の部屋に来て欲しい——そこで



答えを聞かせてね？」

彼は彼女の耳元でそう呟くと、カーマの頭を押さえていた両手を離す。そのまま何事も無かったように、未だに放心している彼女の元から去ってしまう。それは相手に考える時間を与えると共に、より自分を強く意識させる”悪い男”が使う手段であった。

本人は特に意識せずに行っているので余計にたちが悪いのだが、少なくともカーマには効果覿面である。彼女は壁に寄り掛かったまま、ズルズルと滑り落ちてお尻が床についてしまう。

未だに甘い痺れと熱の残る唇に、右手の人差し指で触れる。

マスターとキスしたことと、少しずつ今夜の床に誘われたことを理解していく。元から赤面していたが、鎖骨辺りから真っ赤に染まってしまう。

まだまだ現状を正確と理解し切れていないが、この後の自分の行動だけは分かっていた。間違いなく彼に言われた通りに、夜になれば彼の部屋を訪れてしまうことである。

既にこの場にはいないマスターに向けて、カーマはささやかな反抗のように彼への文句を口にした。

「……………ズルいですっ♡♡ 本当にズルい♡♡♡」

何度もズルいと口にする彼女の声は、蕩けてしまいそうな程に甘ったるい。

——これは愛の神が、愛に溺れるお話である。

## 番外編：愛の神は、愛に溺れる―2

全てに愛を与える神。

自分以外の全てに無償の愛を与えることで、魔王 マーラが釈迦の悟りを邪魔して墮落させようとした時のような、遍く者を墮落させるという”歪み”を持っている。

そんな本人が望んでいない役割を持った”愛の神”であるカーマに対して、彼女のマスター”藤丸 立香”は愛を教えたいと口にした。

『――本当に俺で良いなら、カーマに愛を教えて上げたい』

本来ならば愛の神に愛を教えたいというのは、釈迦に説法をするような愚行に聞こえるかもしれない。しかし、誰かを愛することは出来ても、誰かに愛される悦びや自己愛を忘れてしまった彼女にとって、この世界で何よりも切望しているものが誰かに”愛して貰うこと”だったのだ。

――子供のような願いに聞こえるかもしれないが、愛するよりも愛されたかった。

その定められた全てを愛するという在り方から、これまでのカーマは”誰か”に愛された経験が無い。

だからこそ”自分に与えられる愛”を、心の奥底から渴望してしまう。結果的に愛を与えようと行動するマスターに、彼女は抵抗することが出来ない。いや、逆らおうという考えすら思い浮かばないと、表現するのが正しいだろう。

それこそ番となった雄に従順な雌のように、されるがままになってしまふのだ。

カーマは愛を与える神という在り方から、誰かに愛を与えることに関しては得意中の得意であった。しかし、依り代となった少女の親族の血筋なのか予期せぬアクシデントに弱い。

彼女の一番の弱点と言っても良いのだが、誰かから愛されることに関しては、まるで防御力という数値が初めから設定されていないかのように極端に無防備だった。

経験と言い換えても良いのだが”慣れ”と呼ばれる経験が全く無いせいで、まるで初心な恋も知らない少女であるかのように、カーマは自分を愛そうとするマスターに翻弄されるばかりである。

じりじりと壁際まで簡単に追い詰められ、碌な抵抗も出来ないままに唇まで奪われてしまう。彼の愛情を伝えようとする優しい口付けに、彼女は混乱と羞恥、そして何よりも強い歓喜が胸中を満たしていた。

まだまだほんの一端でしかないが、カーマが望んでいたものをマスターは与えてくれたのだ。耳の先端まで真っ赤に染まった彼女の耳元で、彼は更に離れられなくなってしまおう言葉を口にする。

『今日の夜になったら、俺の部屋に来て欲しい——そこで答えを聞かせてね?』

明らかにキス以上の愛情を伝える行為をするというのが、言外に含まれている言葉であった。その愛という名の糸に絡め取られれば、愛に飢えた愛の神は決して抜け出すことは出来ないだろう。

部屋中に愛の糸が張り巡らされた蜘蛛の巣のようなマスターの部屋に、自分の意思で来てくれとカーマは言われたのだ。彼の巣に捕らわれた彼女という”獲物”が、どのような結果を迎えるのかは、誰にでも分かることだろう。

——巣の主であるマスターに愛という名の”毒”をタツプリと注入され、骨の髄までドロドロに溶かされた後に、抵抗も出来ずに貪るように肢体と心を捕食されてしまうのだ。

本来ならば彼の元に行く必要などどこにも無いのだが、愛に飢えた神はその誘惑に抗うことが出来なかった。さながら誘蛾灯に惹かれてふらふらと近づく羽虫のように、カーマは夜が訪れると直ぐにマスターの部屋の前に来ていた。

誰に咎められている訳でも無いのに、彼女は自分に対して言い訳をしてしまう。

（——わっ、私は答えを伝えるために、マスターのお部屋に來ただけです……っ♡♡ その後のことなんて……全くこれっぽちも期待してません♡♡ すっ、直ぐに帰りますから♡）

彼女は透き通るように白い肌を熟した林檎のように真っ赤にして、戸惑いながら部屋の扉をコンコンと控えめに叩いた。結局は色々な言い訳をしながらも、カーマは自分の意思で彼の元へと訪れてしまったのだ。

少しの間があつてから、ゆっくりと焦らすように自動扉が開かれる。

「来てくれたんだね」

「こっ、来いと言われたからっ♡♡ 仕方無くです……っ♡」

部屋の中からは当たり前ではあるのだが、彼女を迎え入れるためにマスターが現れた。

湯上りなのか彼はTシャツに短パンという、普段よりもラフな格好をしている。黒髪がまだ若干だが湿っており、しっとりとした頬が赤く上気していた。喉仏から胸元に向かって流れる水滴を目にして、カーマはゴクリと生唾を呑み込んでしまう。

マスターに口付けをされた一件があつてから、彼女はどのようなもなく”男”を意識してしまっていた。思春期の娘のようなはしたなさに、カーマは身悶えてしまいそうな羞恥を感じてしまう。

（~~~~っ♡♡ ちっ、違いますっ♡♡ これはいつもと違うお風呂上りのマスターに、ドキドキしてる訳じゃないですっ♡♡ 本

当にこれからエッチなことを始めるんだって、別に意識した訳じゃない……です♡♡♡)

耳元でドクンドクンと五月蠅い位に心臓の音が鳴っている彼女に、マスターは笑顔を浮かべて自分の部屋へと招き入れる。

彼女から見て右側に彼は立ち、部屋の中へと誘うように右腕を伸ばした。さながらドアを開けてお客様を迎え入れる、高級ホテルのドアマンのようである。

「さあ……取り敢えず部屋の中に入ろうか。後は中でじっくりと——  
ね?」

「——っ♡♡ は、はい……♡♡」

明らかに”含み”のあるマスターの言葉に、カーマは蚊の鳴くような声で返事をしてしまう。

既に彼からの愛が欲しいのかという返事を聞くまでも無い程に、彼女は愛して貰うための行動をしまっていた。カーマは自ら糸が張り巡らされた部屋に向かって、戸惑いながらも歩を進めて行く。

完全に”巢”に入ってしまった彼女を逃がさないために、部屋の自動扉がゆっくりと閉じられた。

元からあまり広い部屋では無いため、自然と二人はベッドの近くで向かい合うことになる。

パーソナスペースを確実に侵入している距離感であり、カーマはマスターの顔を見詰めるのも恥ずかしくなっていた。いつもより魅力

的に感じている彼の顔を真正面から見ることが出来ず、自然と床の方に視線を向けてしまう。

両手を後ろに回してもじもじとする彼女に、マスターは本題を切り出す。

「――答えを聞かせてくれる?」

「~~~~っっ♡♡ そっ、そのっ♡ 私みたいな悪い愛の神に愛を与えるなんて、どうなるか分かってるんですか?♡♡ 絶対に死んでも離さない位に、重くて、嫉妬深くて、依存するタイプですよ……」

最終確認のようにカーマは脅しを入れるが、それに対して彼は臆する様子はまるで無かった。

既に神代クラスの魔女や星の聖剣を保持する王、キングメーカーである夢魔や神すら殺す半神など、多種多様な女性達と愛を育んでいる彼にとって、愛によって墮落させる悪神であり愛欲の獣という危険な存在であろうとも、彼女を愛さない理由にはなりえないのだ。

未だに愛されることに慣れていないカーマは、拒否されてしまうかもしれないという不安が拭い切れておらず、彼女の顔には不安な気持ちがありありと浮かび上がっている。

その不安を取り除くように、マスターは彼女を優しく抱きしめた。突然、抱きしめられたことに驚くカーマは、少女のような可愛らしい悲鳴を上げてしまう。

「――きやつ♡ いつ、いきなり何するんですか♡♡ びっ、ビックリするので抱きしめる時には、今から抱きしめると事前に言っておきい……っ♡♡」

「もしも、嫌だったのなら直ぐにでも離れるよ。それよりもさっきの依存してくれるってことは、ずっと一緒に居てくれるってことだよね?」

常人を遥かに上回る膂力を持ったカーマは、振り払おうと思えば簡

単にマスターの抱擁を振り払える。しかし、彼女はされるがままに、彼に身体を預けてしまう。その理由はどうしようもない位に、マスターとの肌の触れ合いが甘美なものだったからだ。

肌の触れ合いとは心に安らぎを与えるものだが、人肌を——与えられる愛を心の奥底で求めているカーマは彼の体温に当てられて、肌の触れ合った部分がチョコレートやアイスであるかのように蕩けてしまう。

それでもまだ本当に自分を受け入れてくれるのかという、不安が拭い去ることが出来ていないのだろう。彼女はその不安な心情が手に取るように震える声で、本当に自分を愛してくれるのかを確認する。

「そつ、そうなりますけど♡ 本当はずつとですよ……♡♡ 生きてる限りずつとストーカーみたいに張り付いて、たとえ死んでしまっても魂だって逃さないですからね♡♡ ねちっこくて陰険な、愛して墮落させちゃう悪い神に、死んでも付き纏われるんですよ……」

『……それでも良いんですか?』と、カーマは最後まで言葉には出来なかった。

ただ紅玉のように美しい朱色の瞳をうるうると涙で潤ませ、言葉にするよりも分かり易い不安げな表情でマスターに伝えている。

彼女の自分に対しての自信の無さが垣間見えており、それは愛の神の依り代となった”少女”の人格も大きく影響しているのだろう。

神霊系のサーヴァントがカルデアの召喚に応じる際に、聖杯に深く関わった人物の中で最も相性の良い存在が依り代となる。その際、依り代となった人物が辿った人生経験や記憶などは反映されないが、人格面は大きく影響されるのだ。

例を挙げれば”金星の女神”は依り代となった少女のお陰で、性格が幾分か”マシ”になっているらしい。生前の関係から不?戴天の敵である”人類最古の英雄王”が、同じカルデアに所属することに目を瞑る程度には性格が丸くなっていた。

それでも英雄王の親友である神造兵器は、容赦なく天の鎖を振り回





「あつ、あれっ？ おかしいです……嬉しいのにつ。なっ、涙が………止まら……ないっ。私は……悪い神様………なんですよっ。それなのに………こんな………こんなのっ」

彼女は両手の甲でゴシゴシと両目を擦り、溢れる涙を拭っていく。しかし、胸の内に満たされる大きな感情が涙と変わって、途切れることなく流れ続けてしまう。

自分がどうして泣いているのかも良く理解出来ていないカーマは、困惑を隠し切れていない様子であった。嗚咽混じりの声を上げて肩を震わせる彼女の背中を、マスターは親が子供をあやすように優しくポンポンと叩いた。

昔の自分を思い出して遠い目をする彼は、普段よりも優しい声色でカーマに語り掛ける。

「ううん、おかしいことなんて無いよ。カーマが落ち着くまで待ってる………いっぱい泣いて良いから」

「——ッ」

「……俺も自分が壊れそうなくらいに限界だった時があつて、その時も同じように抱きしめられたことがあるんだ。誰かに抱きしめられながら泣くと、心が凄くスッキリするんだよ」

「そっ、そんなの知らな………かつた………ですっ。もうっ………絶対に離しませんからねっ。嫌だって言われてもっ………絶対っ………絶対っ」

素直に『ありがとう』と口に出出来ないカーマは、いつものように愛欲の獣——歪んだ愛の神として脅すような言葉を口にしてしている。しかし、今の彼女が浮かべている表情は、どこにでもいる普通の少女がするような、ただ一人の男性を愛しいと想う恋する乙女の顔であった。

マスターのTシャツの胸元を涙で濡らす彼女は、細くしなやかな両腕を彼の背中に回す。

もう二度と離すつもりが無いことを伝えるように、彼女はマスターのシャツを両手でギュッと握り絞める。子供のように泣きじやくるカーマを強く抱きしめる彼は、宥めるような優しい声で彼女に告げた。

「うん、ずっと一緒にいようね」

それから暫くの間、幼い子供が泣いているかのような、小さな嗚咽が部屋の中で木霊する。

——全てに愛を与えるカーマは、初めて愛を与えられたのだ。

「——だっ、誰にも言わないで下さい♡♡ 仮にも愛欲の獣であるこの私が、愛されて泣いてしまうなんて……っ♡♡ ——いつ、一生の不覚なんですからっ♡♡♡」

目元を真っ赤に染めて腫らしているカーマは、マスターの胸板に頭をグリグリと押し付けていた。

彼女が一生の不覚と言っているように、仮にも愛に特化した神がマスターに愛されて泣いてしまったことが恥かしくなり、全身が震えるような羞恥心に身悶えている。

「誰にも言わないから安心して？ ……俺はカーマの可愛い所が見られて、凄いい役得だったけどね？」

「~~~~~つつつ♡♡ かつ、かわ——っ♡♡♡」

可愛いとマスターに耳元で囁かれ、カーマは声にならない悲鳴を上げてしまう。彼のことをこれまで以上に好きになつてしまつているせいなのか、彼女はどうしようもない位に異性として意識してしまつていた。

スライムやプリンのように全身をプルプルと震わせているカーマを落ち着かせるために、マスターは彼女の白雪のような美しい髪を手櫛で梳くように撫でた。

彼にギョツと抱きしめられながら頭を撫でられているカーマは、全身に伝わるマスターの体温と頭を撫でられる心地良さに、目尻を下げた表情を蜂蜜のように蕩けさせている。

身悶えるような恥ずかしさは有つても、それ以上の幸福感をカーマは感じていた。

彼女の髪を梳いていた手をマスターが離すと、本人は気付いていないがカーマは露骨に寂しそうな表情を浮かべてしまう。子供が拗ねた時のように唇を尖らせる彼女は、彼に撫でて欲しいとおねだりをした。

「——あつ、あのっ♡ ……もつと撫でて欲しいですっ♡♡ いっ、いきなり止めないで下さい……っ♡」

カーマの真紅の瞳を紺碧の瞳でジツと見詰めたマスターは、それだけで良いのかと誘惑するようなことを口にした。

「カーマは撫でられるだけで十分なの？ もつとしたいことは無いかな……例えばキスとか？」

「きっ、ききっ、キスですかっ♡ そっ、そのキスもシたいです……っ♡♡♡」

普段は相手を誘う側である彼女が、今は彼に誘われる側になつてい



彼女は敏感過ぎる自分の身体を未だに理解出来ていないが、彼に与えられた”愛”によつて既に”出来上がっていた”のだ。簡単に説明すれば、タップリ時間を掛けて愛撫をされた後や全身を開発され尽くした後のように、マスターから与えられる刺激に対して感じやすくなつていた。

元から感じやすい体質もあつたのかもしれないが、何よりも彼に与えられる愛に心が悦んでしまい、精神的な部分で身体が敏感になつていたので。

女性は男性に比べて精神の高揚で快感を感じやすさが変わるので、特筆すべきことでは無い。しかし、愛の神であるカーマは、この世界で誰よりも精神で快感が左右される存在であつた。

誰にも愛されたことが無いことが災いし、愛してくれるマスターの愛撫に過剰に身体が反応してしまふのだ。ある意味で彼という存在そのものが、彼女にとつての最大の弱点に変わつてきている。

それこそ唇を舐められただけで、意識が保てなくなつてしまひそんな程に――

(きつ、キスだけでこんなに気持ち良かつたらっ♡♡ これより”先”なんて、絶対に耐えられないです……っ♡ 死んじやいますっ♡♡  
♡ ~~~~~♡♡♡)

マスターはほんの少しだけ唇を離して、赤い瞳をトロンとしているカーマに話し掛ける。

「んっ……今度はもつと深いキスをするね?」

「~~~~~っ♡♡♡ まっ、待って下さい♡♡ 今は身体がヘンなんですっ♡♡ これより深いキスをしたら、もつとヘンになってしまひます♡♡♡ あっ♡♡♡ 待っ——んむっ♡♡♡」

彼女は本気で駄目だと言っているのだが、男である”彼”にとつては誘っているようにしか感じられなかった。マスターは少しだけ強引に唇を奪い、更に深く激しい口付けをする。



室内には女のくぐもった嬌声と、いやらしい水音が響き続けた。

## 番外編：愛の神は、愛に溺れる―3

始めは唇同士を軽く触れ合わせるような、付き合いたての恋人同士がするキスであった。

「……………んっ♡♡♡ ———んう♡♡♡」

その優しいリップキスだけで白髪の美女——愛の神　カーマは、頭の天辺に向かって微弱な電気が流れるようなビリっ♡と痺れる快感に身悶える。閉じた上唇と下唇の間から漏れる低い呻き声のような嬌声は、唇が塞がれていなければ甲高く甘ったるいメスの哭声を上げていたことだろう。

彼女が身に纏っている金の装飾が施された衣装は、豊かな乳房の殆どが丸見えとなっていた。

辛うじてギリギリではあるのだが、乳輪と乳首は金の装飾によって隠されている。しかし、隠れていることが女性らしく美しい肢体の淫靡さを抑えている訳では無く、見えていないからこそ妄想することが出来てしまう。

——結果的に、ただ裸でいるよりも何倍も淫靡に見えていた。

そんな黄金の装飾によりギリギリ隠されているが、桜色の乳輪はプツクリと膨らみ、乳首は痛いと感じるくらいに硬くシコっていた。もしもその充血した乳首や乳輪に息をフーッと吹き掛ければ、カーマは大きな嬌声を上げると共に、全身をビクンっ♡♡♡と震わせていることだろう。

誰かを『愛する』ことはあつても、『愛される』ことが無かったがために”歪んだ”愛の神は、青年——人類最後のマスター”藤丸　立香”から与えられる愛情を伝えるキスによって、過剰なまでに”敏感な身体”になっていた。

それこそ唇同士が触れ合うだけで唇を中心に、ビリビリと電流が流



れるような甘い痺れが全身を駆け巡り、一切触れられてもいけない秘所が湿り気を帯びてしまう。それ程までに誰にも愛されることの無かったカーマにとって、マスターから与えられる愛はどんなに高純度な媚薬よりも強力な効能を秘めていた。

ある意味——世間一般で『キメセク』とも呼ばれる、違法薬物を用いた依存性の高いセックスが可愛らしく思える程に、彼女にとっての”愛”とは全ての毒を凌駕する程に劇薬である。

そして、何物にも代え難い、甘美な酒のようなものであった。

愛の神であるカーマにとっての”与えられる愛”とは、麻薬よりも中毒性が高いモノだ。一度でもその甘美な毒を知ってしまえば永遠に忘れることも出来ず、雛鳥が親鳥に餌を求めて鳴くように、彼女はマスターに愛を求めてしまうだろう。

そんなリツプキスだけで強い快感を得てしまうカーマに対して、潜在的に嗜虐心が強い傾向にある彼は更に深い口付けを行おうとする。最早、語るまでも無いことではあるのだが、彼女はそのキスを拒むことが出来ない。

——世界を滅ぼす”愛欲の獣の力”を持っていようと、たった一人の人間にも勝てはしないのだ。

「んう——っ♡♡♡ ちゆう♡♡ んう、っ♡♡♡ んちゆう♡  
♡ ん、くくくくうっ、♡♡」

甘い痺れを伴う快感によってカーマの固く結んだ唇は、次第に弛んでふにゃふにゃになつてしまう。そのことを見逃さなかつたマスターは、彼女の上唇と下唇の間に出来た隙間を縫うように、唾液に濡れた舌先を彼女の口内に遠慮なく侵入させた。

「う、くくくくっ、!?!♡♡♡ ん、ちゆう♡♡ ぢゅちゆう♡♡  
♡ ぢゅっ、ちゆるる、っ♡♡」

困惑と快感の混じった悲鳴を口内で上げるカーマは、柔らかい内頬

や歯茎の溝となつている部分を、彼の舌先が隙間なく舐め上げる。

彼女は初めてキスをした少女のように上手く呼吸が出来ない状態に陥り、酸欠に近い状態となつて思考が上手く纏まらない脳に、強い幸福感と快感が半強制的に与えられる。カーマの口を閉じていた力は次第に弱まつていき、唇を固く結んでいた時と同じように開いてしまう。

口が弛んだ状態になつたのを確認したマスターは、一度だけカーマの唇を開放する。

そして、より深い口付けを行うことを彼女に対して伝える。それは逃げることに出来ないカーマにとって、死刑宣告の判決にも等しかった。

再び唇同士が元からそうであつたかのように繋がり合い、更に奥深くまでマスターの長い舌が彼女の口内に侵入していく。

目を大きく見開いて驚くカーマだったが、襲のように凸凹している硬口蓋や口腔底、緊張によつて力が入り硬くなった舌まで入念に愛撫される。明らかに豊富な経験を持つているマスターの巧みな舌使いを受けて、彼女の口内はまるでプリンであるかのように柔らかく蕩けていった。

彼の舌先がツンツンと彼女の柔らかくなつた舌を小突き、奥の方に縮こまつている舌を伸ばすように無言で催促をする。自分を愛してくれるマスターからの命令に逆らえないカーマは、彼に促されるままにおずおずと舌先を伸ばしてしまう。

その差し出された舌をマスターは長い舌で絡め取り、口の外へと出た舌先を上唇と下唇で挟むように優しく拘束する。

本来は簡単に抜け出せる拘束は愛に飢えた彼女にとつて、絶対に抜け出すことの出来ない強固なものであつた。それは例えるならば北歐神話で有名な怪狼”フェンリル”を拘束した、グレイプニルと呼ばれる足枷に縛られるのと同義である。

逃げ出そうとする気持ちやその力も無いカーマは、口内で絶叫にも近い悲鳴と嬌声の混じつた声を上げる。

しかし、そんな口内に響く悲鳴は次第に小さくなっていく。否、悲

鳴は切なくも甘い嬌声に置換されていった。緊張で硬くなっていた彼女の舌がマスターの愛撫によって柔らかくなっていたように、彼女の元から脆弱な理性もドロドロに溶解する。

——その結果、彼の舌の動きに合わせるように、カーマもぎこちなく舌を動かし始めた。

お互いの唾液を混ぜ合わせる『じゆるじゆるっ♡♡』と、卑猥な水音が部屋の中で鳴り響く。ナメクジの行う交尾のように二人の舌が艶めかしく動き、互いの舌がネットリと離れることの無いように絡み合う。

相手を愛し合っているからこそ、相手の唾液を何故か甘いと感じてしまった。

マスターが唾液をじゆるじゆると水音を立てて啜るように、気付けば彼女も舌を絡め合う中で泡立った唾液を、ゴクリと喉を鳴らして飲み込んでいた。蝶が花の蜜を求めて吸うように、カーマは彼の唾液を求めて啜る。

「ぢゆるるゝるゝっ♡♡♡ じゆるるっ♡♡ んゝうっ♡♡  
ぢゅっぢゅう……っ♡♡♡ じゆるぢゅぢゅっ♡♡ ん——  
——っ♡♡♡」

二人の口元から響く濁音混じりの水音は更に大きくなり、快感に呻くカーマは全身をこれまで以上に震わせた。縦に割れた美しいお臍の少し下の辺りから、絶頂へと至る波がじわじわと込み上げてくる。

最早、彼女にその絶頂を止める術は方に一つも無く、愛しい人に愛される幸福感で胸が一杯になってしまう。

（~~~~~っ♡♡♡ まっ、マスターのキスう♡♡ う  
まっ、上手すぎますっ♡♡♡ こっ、こんなのされたらっ♡♡ イっ  
ちやいますっ♡♡♡ イ——っ♡♡）

「じゆるるゝっ♡♡♡ んゝぢゅっ♡♡ ぢゅちゝゆう……っ♡♡



ように真つ白な長髪が目を惹く美女が、深い口付けの快感にビクビクと全身を震わせていた。

詳細に説明すればキスをする相手である”黒髪の青年”が、舌先を動かす度に華奢な肩を『ピクっ♡♡♡ピクっ♡♡♡』と悩まし気に震わせ、唾液を啜られると肉付きの良いお尻を『ビクンっ♡♡♡ビクンっ♡♡♡』と左右に振るように揺らす。

例え声を満足に出すことが出来ない状況であろうとも、彼女が快感を感じていることは間違いようが無かった。

本来ならばもつと声を上げて快感を少しでも逃したかったのだが、青年の長い舌に口内を蹂躪されているため、満身に大きな嬌声を上げることすら叶わない。初めて口付けをされた年若い少女のように、彼女は彼の巧みな舌の動きに翻弄されるばかりであった。

しかし、口内の全てを貪られる美女が思い感じていることは、青年への愛しいと想う気持ちと愛されることへの幸福感の二つだけである。彼に愛されているこの時だけは、自分に対して向けていた”負の感情”や劣等感が綺麗さっぱりと消え去っていた。

(マスター……っ♡♡♡好きっ♡♡♡好き好き好き——大好きです……♡♡♡あつ、愛してるマスターとディープキスっ♡♡♡こんな激しくて気持ち良いキス知らない……♡♡♡こっ、こんなにやのお口でセックスしてるのと変わらないですっ♡♡♡マスターとお口セックス……っ♡♡♡い、くくくくくくくくくくくくくくっっっ♡♡♡)

口付けの快感と幸福感に抗えない白髪の美女は、簡単に絶頂へと昇り詰めてしまう。精神的に絶頂を拒む気持ちも無かったからこそ、耐えたり我慢するということが不可能である。

——ぷしゅ……♡♡♡ぷしゅっ♡♡♡ぷしゅああ——っ♡♡♡

これで”何回目”になるのか分からないが、尿道口から大量の体液をお漏らしでもするように噴き出す。小さな孔である尿道口から噴



「~~~~~」

マスターの口内で大きな嬌声を上げるカーマは、今日だけで”七度目”の潮を吹いてしまう。

花の形を模った黄金で出来たショーツのような秘所を隠す装飾の隙間から、雌のフェロモンをタップリ含んだ潮や愛蜜がお漏らしをしたように溢れ零れている。びちゃびちゃとイヤらしい水音がシートの上で鳴り、清潔感を感じさせる純白のシートに大きな染みを作り出す。

成熟した女のむっちりとした太ももの内側は、ヌルヌルとした粘っこい愛蜜や汗でじつとりと濡れている。ムチっ♡♡ ムチっ♡♡と擬音すらしそうな肉付きの良い太ももの間には、照明の光でキラキラと反射するような透明の糸が何本も引いていた。

水溜まりのようになっていいる濡れたシートからは、メスの濃い淫臭のする湯気が立ち昇る。

カーマの全身の毛穴からは大粒の汗が噴き出し、甘酸っぱい汗の匂いが部屋中に広がる。何度も何度も絶頂を繰り返した女の淫臭は、噎せ返ってしまう程に濃くなっていた。

全身にじつとりと汗を掻いた彼女は、オイルでも塗ったかのようにイヤらしい光沢を放っている。本来、汗とは不潔で臭いといったイメージを持つかもしれないが、カーマの汗にそう言った負の感情を持つ男性など存在しないだろう。

彼女の甘酸っぱい汗のニオイは雄の獣性を刺激しており、白く透き通るような肌に浮いた汗は理性が無ければ舐め回したい衝動に駆られるに違いない。男とは美しい女を前にした時には、常識やモラルと言ったものが極端に下がるものだ。

破壊神 シヴァの邪魔をしたことによって焼き殺された結果、シヴァの宇宙と同化してしまった憐れな愛の神。カーマは再臨を重ねて本来の力を取り戻しつつあったがために、しなやかな四肢や長く長い髪の内側が宇宙や青い炎のようなものと同化しているような見た目である。

明らかに一般人とは違う特異な見た目である筈なのだが、正しく”女神”のように美しい彼女の前では些事ではない。寧ろ白髪の美女のまるで精巧に作られた芸術品のように綺麗な容姿と、しなやかでありながら女性らしい丸みを帯びた肢体には、安直な表現だが”似合って”いた。

そんなこの世に二人としない唯一無二の美しさを持ったカーマは、数多くいる女達の中でも最弱の部類に入りそうな程に快感に対して貧弱であったのだ。この表現も適切では無いかもしれない、彼女にとってマスターという存在だけが”最大の弱点”になっていた。

それこそデープキスだけで絶頂を迎える程に、敏感で我慢の一切出来ない程である。しかし、ただのキスをしただけで、男女の”愛を確かめる行為”が終わる筈も無かった。

ずっと唇同士が繋がった状態であった、マスターがゆっくりと口を離れる。二人の唇の間には透明な唾液の糸が引いており、それはまるでまだ繋がっていたいと表現しているようだ。

露骨に名残惜しそうな表情を浮かべる彼女は、目尻に涙まで浮かべながら半開きになった口から荒い呼気を吐き出す。口端からはダラダラと唾液が垂れており、その唾液は形の良い顎先から豊かな胸元へ向かってポタポタと零れ落ちる。

「じゅるるっ♡♡♡んぐっ♡♡♡んう……んっ♡♡♡——ぷはあっ♡♡♡ はあ”ーっ♡♡♡ はあ”ーっ♡♡♡」  
「んっ——はあ、本当はもつとキスしたかったんだけど、カーマが可愛いくて我慢出来ないから……”次”に進んで良い？」

何度も迎えた絶頂の余韻で呂律が回っていないカーマは、声を微か



に震わせながらマスターの言う次について尋ねる。

「はぁ、ーっ♡♡ はぁ、ーっ♡♡♡ つっ、次れすか?♡♡」  
「うん、次はおっぱいが触りたい」

「~~~~~♡♡♡ おっぱい♡♡♡ おっぱいはぁ……♡♡♡ そっ、そんなの駄目れすっ♡♡♡ キスだけでこんなに♡♡♡ イっちゃったのにオツパイもイジられたら……っ♡♡♡」

彼女は自分が彼に乳房を口付けの時のようにタツプリと愛撫され、キスとは比べものにならない程の絶頂と痴態を晒してしまうことを危惧する。しかし、マスターの要望に対して拒める訳も無いことは、カーマ自身が一番良く分かっていた。

(女の気持ち良い所を分かっているマスターに、敏感になったおっぱい触られたら……♡♡♡ こっ、壊されちゃいますっ♡♡♡ キスでいつでも許してくれなかったのに、おっぱいでいつでも許してくれる筈も無いです♡♡♡ ~~~~~♡♡♡)

容易に想像が出来る自身の恥ずかしい未来を悟りながら、彼女は言葉を発しようとする。しかし、それよりも早くに、彼が耳元でカーマにとって逆らえ無くなる言葉を囁いた。

「——もっとな愛したいから、自分でおっぱい見せて?」  
「——っ♡♡♡ もっ、もっとな愛してくれる……♡♡」

愛される喜びを既に知ってしまった彼女は、マスターの『もっとな愛したい』という言葉の誘惑に簡単に屈してしまう。もっとな自分が蕩けて彼に依存してしまうことを知りながら、震える指先を胸元を隠していた頼りない裝飾へと近付ける。

——プチっ……タプン♡♡♡

結局、愛への誘惑に勝てなかった愛の神は、胸元を隠していた裝飾

を外したのだ。

窮屈な拘束具から開放された豊かな乳房は、たゆんっ♡♡と大きく大胆に揺れた。ウエストがキュツと引き締まっているせいで、カーマの巨乳は体感ではそれ以上のサイズに見える。

汗でテラテラと光沢を放つ桜色の乳輪や乳首は、外気に触れただけでジンジンと沁みるような快感を感じ取っている。そして彼女が感じている快感は乳首や乳輪が外気に触れるものだけでは無く、マスターの熱すら感じそうな視線にも気持ち良くなっていた。

実際には数秒程度の出来事ではあったのだが、カーマにとつては数十分にも感じる彼からの視線に、柔らかそうな乳房をプルプルと揺らす。後ほんの数秒でも視線が続けば、それだけでアクメしてしまいそうな彼女に向かって、両手をゆっくりと伸ばすマスターが声を掛ける。

「最初は優しく触ろうと思ったけど——ごめんね。手加減出来そうも無い」

「あ~~~~~♡♡♡」

——ぴゅっ♡♡

彼の言葉によって極度の興奮状態に陥ったせいなのか、それとも相手の望む姿になるとするカーマの能力が発動した結果なのかは定かでは無いが、殆ど音になっていない声を上げる彼女の乳房の先端からは、真っ白な母乳が確かに噴き出していた。

それを目撃したマスターの目が飢えた獣のような眼に変わり、カーマの未来が更に愛と快楽に溺れることが確定してしまう。どちらにしても逃げる事など彼の部屋へと入った時点で不可能である彼女は、母乳を噴き出す快感に身悶えることしか出来ない。

愛の神を性愛に墮落させるマスターの魔手が、両の掌にも収まらない程に豊かな乳房へと触れる。

「——っ♡♡♡」

絶対に逃げることの出来ない部屋の中で、蜂蜜よりも甘ったるい女の嬌声が響き渡った。

## 番外編：愛の神は、愛に溺れる―4

病室のような清潔感を重視した白を基調とした部屋の中には、発情したメスの淫臭が噎せ返ってしまいそうな程に籠っていた。

花の蜜を思わせる甘酸っぱい汗の匂いや雌のフェロモンをタツプリと含んだ磯のニオイに近い潮の香り、我慢出来ずに漏らしてしまつたアンモニア特有の刺激臭のするおしっこ臭い。

——そして、まるで部屋中にミルクを零したのかと勘違いしてしまふ、濃厚で豊潤な母乳の香り。

男の生殖能力と獣欲を刺激する女の淫らなニオイが、部屋中にムワっ♡♡と充満しているのだ。きつとニオイを可視化することが出来たのなら、部屋の中には一寸先すら見ることの出来ない桃色の靄が掛かっていることだろう。

部屋の中で熟成された濃密なメスの香りは、どんなに強力な媚香よりも強い効果を持っていた。

そんな淫らなニオイの発生源となつているのは、耳に残るドロドロに蕩けた嬌声を上げている白髪の美女——愛の神“カーマ”である。彼女は性的興奮により体温が上がっており、汗で全身をしっとり濡らしていた。天井からの照明によりカーマの白く透き通るような肌は照らされ、テカテカと艶めかしい光沢を放っている。

秘所を隠す黄金で作られた装飾以外の衣装は全て剥かれており、彼女の美しく淫靡な裸体の殆どが見えていた。特に男女を問わず目を惹くのは、黒髪の青年——藤丸 立香の男らしい両手で鷲掴みにされ、ぐにぐにと揉みしだかれる搗き立てのお餅のような乳房である。

汗で濡れた白くきめ細かい肌が妙に艶めかしい乳房は、正しくマシユマロのような柔らかさを主張するように、彼の両手のイヤらしい動きに合わせて形を変えていた。合計十本の指はその柔肉にどこまでも沈んでいき、乳房の先端から真っ白なミルクを噴水のように『ぴゅーっ♡♡♡ ぴゅーっ♡♡♡』と、噴き出している。

硬くシコつた桜色の乳首から母乳を噴き出すカーマは、雄の情欲を煽ることに特化しているかのような、相手であるマスターに媚びた艶

のある喘ぎ声を上げていた。本当に自分を取り繕うとする余裕が無いのか、彼女の口端からはガムシロップのように透明な唾液が零れている。

「——んひいつ♡♡♡ イッっ、イッグツ♡♡♡ イッっぢやいますっ♡♡♡ おっっぱい♡♡♡ おっぱい強い…♡♡♡ まっ、ましゆたあ…♡♡♡ ぐにぐに♡♡♡ らっ、らめえーっ♡♡♡ ほんっ、ほんろにっ♡♡♡ イッ、いっくくくくくくくっ♡♡♡」

「我慢しないで良いよ。もっとおっぱいから、ミルク出す所を見せて？」

「っっ、付いちゃう♡♡♡ 本当に出る癖が付いちゃいますっ♡♡♡ 牛みたいにミルクびゅーっ♡♡♡ びゅーっ♡♡♡ つてする癖え♡♡♡ いひう♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ ミルク出すの気持ち良い…♡♡♡ 気持ち良いれすう♡♡♡ こっ、こんなの我慢、出来ないっ♡♡♡ ——んあっ♡♡♡」

ルビーのような真紅の瞳をうるうると潤ませるカーマは、目尻から涙を流しながら本当に耐え切れないと言った様子であり、身悶えながら甘ったるい声を上げています。本人は拒絶の言葉を口にしたいたいと思っているのだが、口から漏れ出てくるのは熱っぽい吐息や甲高い嬌声、そして母乳を出す快感の言葉だけだった。

合計十本にもなるマスターの太く男性らしい指が、それぞれ別の意思を持っているかのように動く度に、彼女は華奢な肩や悩まし気な腰を中心に『ビクっ♡♡♡ ビクっ♡♡♡』と、身体全体を震わせる。既に潤っている膣口からトロリとした粘っこい愛液と、乳房の先端からサラサラとした真っ白な母乳を溢れさせた。

快感の荒波に吞まれるカーマは舌つたらずな口調で、自身の絶頂が近くなっていることを告げる。

「——んあっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ほんっ、ほんろにい…♡♡♡ もう

ムリれすう♡♡ ”また” イっちゃうっ♡♡ イっちゃいますう♡♡  
♡♡ おっぱい絞られてっ♡♡ みっ、ミルク出しながらイク——っ♡♡♡♡  
♡♡♡♡ イっちゃう…:…っ♡♡♡♡」  
「うん、イって良いよ。おっぱい絞られながらイっちゃえ」  
「~~~~~」♡♡♡♡♡♡

彼女は言葉にならない嬌声を上げながら、座り込んでいる純白のシーツに大きな染みを残した。

根元から先端に向かって正しく乳絞りでもするかのように、彼の両手が大胆且つ繊細にギリギリ痛みを感じない力加減で動く。カーマは半開きになった口から、唾液に濡れた舌尖を突き出す。プツクリと膨らんだ乳輪の上にちよこんと載った、充血し切った乳首からは、マスターが豊満な乳房を根元から先端に向かって絞る度に、噴水のように真っ白な体液である母乳を噴き出した。

乳頭からの母乳の出方とは、一箇所から出てくるものではない。男の夢と脂肪をタップリと蓄えた乳房内の乳管と呼ばれる管を通り、乳頭の複数箇所から『ぴゅうっ♡♡』と噴き出るように溢れてくるのだ。漫画的な音を文字で表すならば『ぴゅっ♡♡ ぴゅっ♡♡』と、弧を描くように溢れ出る母乳は、彼女自身のむっちりとした肉付きの良い真っ白な太ももへと、ぴちやぴちやと卑猥な水音を立てながら掛かる。

まるで乳牛にでもなったかのように、カーマはマスターの手で搾乳されていた。

（こっ、こんなのおかしいですっ♡♡ おっぱいからミルク出るの癖になってましゅ♡♡♡♡ マスターに絞られるの好きにされちゃってるう♡♡ 根元からぐにぐにおっぱい調教されて、揉まれただけでイっちゃうスケベな乳牛女にされちゃってますう…:…っ♡♡♡♡  
こっ、これで乳首もされたら——っ♡♡♡♡）

彼にまだ触られてもいない乳輪や乳首を愛撫されることを想像して、彼女はそれだけで母乳を出す量が自然と増えてしまう。母乳を噴き出す乳頭がジンジンと疼き、マスターに触って欲しそうにプルプル

と震える。

背後から彼に抱きしめられるように乳房を揉みしだかれるカーマは、体勢の関係から自然と女の子座りになっている。その結果、これまで何度も絶頂に達しながら噴き出した大量の母乳が、下腹部と太ももの間に『ちやぷちやぷつ♡♡』と、波打つほどに溜まっていた。

股間部分に逆デルタの形で母乳が溜まっており、彼女を遠くから見れば真っ白なショーツを履いているように見えるかもしれない。

この下腹部と太ももの間に母乳では無くお酒を溜めた場合は、客をもてなすことを仕事とした”芸者”のお座敷芸の一つである『わかめ酒』と呼ばれるものとなる。何故、太ももと下腹部の間に溜めたお酒をわかめ酒と呼ぶのかと聞かれると、秘所を覆う陰毛がまるで海の中に漂うわかめであるのように、お酒の中でゆらゆらと揺れるからだ。

ある意味でお酒よりも遥かにエロいと感じる、自身の噴き出した母乳でわかめ酒を作っている彼女は、現在進行形でその量を増やしていた。普通の人間であれば既に脱水症状になってしまいそうな程に母乳を噴き出しているのだが、存在としての格が最上位に位置する神霊であるカーマは、その程度のことでは倒れることも出来ない。

ただ母乳を絞られる快感を骨の髄まで教え込まれ、乳房にイキ癖を付けられていた。

そして、今まではカーマの搗き立てのお餅のように柔らかな乳房を、マスターは根元から揉み解しながら絞っているだけだったが、その指先が更に敏感部位である桜色の乳輪や乳首へと伸ばされていく。彼はプツクリと膨らんだ乳輪と白い肌の境目を親指と中指で挟むように添え、乳頭の先端を人差し指の爪先が触れる。

——バチっ♡♡♡ バチバチっ♡♡

彼女の目の奥深くで、真っ白な火花が散った。

「ひゅ~~~~~~~~~~~~つっつ♡♡♡♡」

成熟した女性の美しきを持った彼女の見た目からは想像も出来ない程に、甲高く少女のような嬌声を咄嗟に上げてしまう。

全身を『ビクンっ♡♡ ビクンっ♡♡』と、大きく震わせながら尿道口から潮を吹くカーマは、乳房の先端にビリビリと電気が流れたかのような快感が走り、目の前が真つ白な閃光に包まれてしまう。ずつと乳首や乳輪への愛撫を”おあずけ”にされていた彼女は、想像していたよりも遥かに敏感になっていたのだ。

熱っぽく荒い呼気を吐き出すカーマに対して、マスターは耳元で吐息を吹き掛けるように囁いた。

「カーマの乳首いっぱい気持ち良くするから、好きなだけイって良いからね？」

「~~~~~っつっつ、♡♡♡♡ まっ、マスターっ♡♡  
らめえ♡♡♡ らめれすう♡♡ 少しだけで頭が、ビリビリしますっ♡♡♡ こんっ、こんなのいっぱいされたら死んじやう♡♡ 死んじやいますう……っ♡♡♡ いひい——っ♡♡♡♡♡」

中国の皇帝のみが食すことを許された”龍の髭”と呼ばれる、絹のように美しい白髪を振り乱す彼女は、左右に頭を振って駄目だと彼に伝える。しかし、女の子を哭かせることが大好きなマスターは、遠慮なしにカーマの乳首と乳輪への愛撫を始めた。

基本時に愛し合いながら子作りセックスをするのが大好きな彼であるが、人の範疇から逸脱してしまいそうな程に”強い雄”であるため、時たま飢えた獣のような獣性や嗜虐心に心を支配され、今のように容赦なく女の子を徹底的に撻る。

こうなってしまうと相手が注いだ精によってボテ腹になるまで犯され、ひっくり返ったカエルのようになるまで愛されてしまう。それを一度だけでも体験してしまえば、もう二度とマスターに逆らえない従順で淫らな牝へと変えられてしまうのだ。

彼は親指と中指で乳輪を上下から潰すように『ぐにっ♡♡ ぐにっ♡♡』と挟みながら、押し出されるように更に硬くなった乳首の先端







♡♡♡♡」

本当に乳牛にでもなってしまったかのように大量の母乳を嘔き出すカーマは、誰かに助けを求めるかのように大きな嬌声を上げるが、当然のように助けなど来る訳が無かった。彼と自分以外のメスの情事を覗きながら自慰行為に耽るスケベな雌はいるのだが、邪魔などしてしまえば長い”おあずけ”をされてしまうので、絶対に彼女を助けに来る者はいないのだ。

正しく蜘蛛の巣に捕らわれた蝶のようなカーマは、捕食者であるマスターに嬲られ続けるのだった。

「……ク、ッ♡♡♡ — イ、グッ♡♡♡ ……ひうッ♡♡♡ い——っ♡♡♡」

マスターに身体をぐつたりと預けているカーマは、弱々しい吐息と共に絶頂を伝える声を上げる。性的虐待と言っても過言では無い乳房への愛撫をされて、彼女の肉体は完全に屈服してしまっていた。

ベッドのシーツやカーマの身体全体、彼の両手を母乳でびちゃびちゃに濡らしており、部屋中に濃厚なミルクの匂いが籠っている。ベッドのシーツには濃密なメスのフェロモンをタップと含んだ愛液や潮、尿のニオイも染み付いているため、男性が室内に入れば理性が即座に溶けてしまうだろう。

あれから何度も数え切れない程に乳房での絶頂をしまい、彼女

の乳房はこれまで以上に柔らかく火照っている。例えマスターに触れられていなくとも乳頭から『びゅっ♡♡ びゅっ♡♡』と、溢れさせてしまう程に調教されていた。

寝起きのような微睡む意識の中にいるカーマは、未だ抜け出せない絶頂の余韻に身体を弱々しく震わせる。

(…:あう♡♡ 私のおっぱい壊れちゃいました…:っ♡ マスターの意地悪な指でいっぱい愛されてっ♡♡ ミルク『びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡』っ♡♡』って出すだけの、おバカな牛乳おっぱいになってますう♡♡♡ こんな変態おっぱいになった責任、絶対に取って貰いますっ♡♡ 結婚してラブラブ夫婦になってくれなきゃ、絶対に許しません…:っ♡♡♡)

乳房に外気や弱い風が触れるだけで快感を感じる彼女に対して、マスターは数時間にも渡って愛撫を続けた両手をゆっくりと離した。彼の両手は母乳でびちゃびちゃに濡れており、手には濃密なミルクの匂と甘酸っぱい汗の匂いが染み付いている。

数時間前と比較しても遥かに柔らかく、そしてバストサイズや感度も上がった乳房は、彼女の弱々しい呼吸に合わせてプルプルと震わせていた。

マスターは右手を滴る程に濡らす母乳を舌で舐め取り、乾きを感じていた喉を潤しながら、未だ意識が半分程度しか戻っていないカーマに話し掛ける。

「——んっ、美味しい。ねえ…:まだまだおっぱい弄つても良いんだけど、カーマはもっとおっぱいイジメられたい？ それとも…:もっくとエッチなことしたい？」

「~~~~~♡♡♡」

未だ理性がドロドロの蜂蜜のように溶けており、意識が夢の狭間で混濁している彼女は、愛されることに飢えた愛の神としての本音を、そのまま垂れ流すように口にしてしまう。これからもっと自分が壊れてしまうと分かっている、外灯に吸い寄せられる羽虫のように”

欲望 には抗えなかった。

「ふう、ーっ♡♡ おっぱいももつとイジメて欲しいですけど……もつ、もつとエッチなこととして欲しいれすっ♡♡ いっぱい愛して欲しいです……っ♡♡♡ おっぱいみたいにマスター専用になるまで、可愛がって下さい♡♡♡」

（いつ、言っちゃいましたっ♡♡ 本当は優しくしてっ、お願いするつもりだったのに♡♡♡ 愛して欲しいって気持ちだけが先走っちゃいましたっ♡♡）

今更になつて自分が酷いことになる実感をカーマは得ていたが、女神のように美しい女に誘惑された雄が我慢など出来る筈も無かった。彼女が上半身を預けていたマスターは身体を退かし、殆ど身体に力が入っていないカーマをベッドの上に仰向けのまま寝かせる。

さながらまな板の上の鯉のような彼女に覆い被さる彼は、カーマのお臍に勃起したペニスをズボン越しに押し付けながら囁いた。

「——うん、いっぱい愛して可愛がって上げるからね」

「——っ♡♡♡ はい……っ♡♡♡」

蚊の鳴くような小さな声で返事をした彼女は、されるがままに受け入れてしまうのだった。

## 番外編：愛の神は、愛に溺れる―5

蜂蜜のように甘ったるい吐息の音が、部屋の中には響いている。

「――はぁーっ♡♡♡ はぁーっ♡♡♡」

華奢な肩が上下に揺れる程の荒い息を吐くカーマは、呼吸に合わせて豊満な乳房を『タプンっ♡♡♡ タプンっ♡♡♡』と揺らしていた。搦き立てのお餅のように柔らかな乳房は、少しの振動だけで大きな揺れとなる。

既に搾乳期に入った乳牛おっぱいになるまで、調教された彼女の硬くシコった乳首からは、触れられてすらもないのに、濃厚なミルクを『ぴゅっ♡♡♡ ぴゅっ♡♡♡』と、噴水のように溢れさせてしまう。誰もが共通している赤ん坊の頃の記憶を思い出させ、気が付けば桜色の乳首に吸い付きたいという欲望が沸々と湧き上がってくる。

数時間前までは母乳を出したことが無かったのに、今では地下水が湧き上げてくるように止めどなく母乳を溢れさせていた。本人の意思では制御することも出来ず、性的興奮に合わせて乳量を増やしている。

カーマの豊満な乳房がこんなにもスケベな“牛チチ”になってしまったのかと聞かれれば、全てはマスターの女を快樂の沼に墮とす“魔手”が原因であった。魔性菩薩すら快樂の沼に沈める巧みな指使いによって、彼女の乳房はとつくの昔に墮とされているのだ。

女の快感を覚える箇所を知り尽くした彼が両手が、カーマの豊満で柔らかな乳房を執拗に揉みしだく。桜色のプツクリと膨らんだ乳輪や勃起した乳首、乳房と腋の境目である“スペンス乳腺”と呼ばれる性感帯を徹底的に開発していた。

特に腋と乳房の境目への愛撫は、快感と擦ったさを同時に感じる性感帯である。これまで快感を感じたことの無かった場所であったのだが、今では感じやすい乳首と同じ位に“気持ち良くなる場所”になっていた。

マスターに背後から抱きしめるように両腕を回され、抜け出すことや逃げ出すことも出来ないカーマは、乳房の愛撫だけで絶頂癢を付けられてしまい、それに合わせて母乳も噴き出すようになってしまう。豊かな乳房を彼の両手に絞って貰わなければ、母乳が溜まり過ぎて張るようになっていく。

——結果的に”まだ”妊娠もしてもいないのに、性的興奮によって母乳を溢れさせる噴乳体質になっていた。

そんな淫乱な噴乳体質になってしまった彼女が、現在進行形で性的興奮から母乳を『びゅっ♡♡ びゅっ♡♡』と噴いているのは、目の前の”光景”に興奮しているからに他ならない。カーマの目の前にはマスターが立っているのだが、その恰好について問題があった。

荒い呼吸をする彼女が目を見開きながら熱い視線を送っているのは、裸になっている彼の勃起した異常に大きなペニスであった。マスターのガチガチに勃起したペニスは、もう一本の”腕”や武骨な作り”剛槍”であると表現しても誇張では無い。

数多くの女性サーヴァント達の媚肉や淫水に磨かれ、成長した禍々しいペニスは、巨人のイチモツと言っても良い程である。淫水焼けした彼のペニスは赤銅色に変色しており、その硬化化したゴムのような肌質もあって、本当に恐ろしい凶器であるかのようだ。

男性の握り拳のように大きく膨らんだ龟头は、子宮を叩き潰すハンマーのような形状をしている。親指の横幅よりも深い段差を持ったカリ首は、魚の釣り針の返しのように女の膣肉や膣襞を掘削するのに、最適な形状をしていた。

——女を快樂の奈落へと叩き落す、魅惑でもあり恐ろしいペニスである。

ただ折れないことを主軸として作られた、鉄塊から削り出された武骨で強靱な槍を彷彿とさせるペニスを、たった一度でも挿入することを許してしまえば、女はそれ以外の貧相で貧弱な短小ペニスでは、満足が出来なくなってしまうだろう。





彼の言葉に対してカーマは、反射的に返事をしてしまう。数秒の間を経過するとマスターのお願いを、彼女の快感と興奮で蕩けた脳も理解を始める。よりこれからセックスが始まるのだと、実感が高まっていく。

(——っ♡♡♡ぬっ、脱ぐっ♡♡ 確かにマスターの言う通りに脱がないと、本番は始められないですけど……っ♡♡♡ 私のびちやびちやに濡れたオマンコ、見られちゃいますっ♡♡ いっぱいお漏らしした弱々オマンコ、一番恥ずかしい所が見られちゃう……っ♡♡)

湯気が出そうな程に顔を紅潮させるカーマは、羞恥によって震える指先を下半身へと伸ばす。自分の秘所を隠している黄金の装飾が施されたショーツのような衣装をおずおずと脱ぎ始め、糸纏わぬ生まれのままの姿を晒した。

無駄毛どころか産毛すら確認することの出来ない、白く透き通るような肌は芸術品のようである。

彼女の愛液と尿、汗を大量に含んだショーツを彼女はベッドの上に落とし、『びちやつ♡♡』と卑猥な水音が静寂に包まれた空間に響き渡る。ビツクリする位に大きな音が出てしまい、カーマの羞恥心は更に高まってしまふ。

自分がどれだけ興奮してしまっているのかを、強く自覚してしまふ。

全身をプルプルと震わせる彼女は、両手で秘所を覆い隠しながら太ももをギュッと閉じる。肉付きの良い太ももがぐにゅつと潰れる様を見ていると、その間に手を挿入して挟まれないと思ってしまう。秘所を恥ずかしそうに隠しているからこそイヤらしく、妄想の介在する余地があるからこそ、淫らであると感じてしまうのだ。

そんな淫靡な姿のカーマをジッと見詰めるマスターは、意地悪な笑みを浮かべながら言葉を紡ぐ。

「隠さないで欲しいから……両手と両脚を開いて見せて？」

「あう~~~~つっ♡♡ わっ、分かりました……っ♡♡♡」

目尻に大粒の涙すら浮かべてしまう彼女は、秘所を隠していた両手を離す。その後、震える両の膝をゆっくりと動かし、肉付きの良くしなやかな両脚を開いた。

産毛すら生えていないツルツルとした、性的興奮からふっくらと膨らんだ恥丘、その割れ目から覗くピンク色のイヤらしい媚肉。充血してプツクリと膨らんだクリトリスの先端が、彼女の正面にいるマスターには見えてしまっている。

自分の一番恥ずかしい秘所を見られているカーマは、淫肉の割れ目からコプロプとガムシロップのような蜜を大量に溢れさせ、ジンジンと疼くような快感を感じてしまう。彼女が溢れさせる愛蜜はとても粘っこく天然のローションのようであり、それは目の前のオスとの交尾を身体が準備してしまっているからだ。

目の前の雄々しい長大なペニスが少しでも挿入し易くなり、膣内が裂けてしまうことが無いようにと、粘っこいヌルヌルの愛蜜で膣内を満たしている。プツクリと膨らんだ乳輪の先端にちよこんと載った可愛らしい乳首からは、濃厚なミルクを『びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡』と、大量に溢れさせていた。

このままではマスターの熱の籠った視線だけで、絶頂を迎えてしまいうそうになっているカーマは、美しくしなやかな肢体を振って身じろいでいる。しかし、彼からのお願いに逆らうことの出来ない彼女は、秘所を隠すこと無く両脚を開いたままであった。

そんないじらしいカーマに我慢が出来なくなったのか、マスターは彼女が仰向けになっていいるベッドの上に乗る。ベッドがギシツと音を立てるのだが、

獲物を見付けた肉食獣がジリジリと近寄るように、彼はゆっくりと彼女に近寄った。

飢えた肉食獣のようなガラガラとした眼をするマスターが、無言のままに近寄ってくることに恐怖を覚えたカーマは、少しでも彼が冷静になってくれるようにと声を掛ける。

「まつ、マスター……っ♡♡♡ 目が怖いです♡♡ あっ♡♡ きゃ  
——っ♡♡♡」

彼女が年端もいかない少女のような嬌声を上げた理由は、マスターがカーマの両方の足首をガツシリと掴んだからだ。彼はそのまま自分の元へと足を引っ張るように引き寄せ、彼女のお腹に長大なペニスを乗せた。

剛槍のように長大なマスターのペニスは、その大きさに見合うだけの重量を持つており、カーマのお腹にもずっしりとした鉄アレイのような重みを感じてしまう。彼女の股下から縦に割れたお臍を余裕で超え、鳩尾にまで到達しそうな長さを持ったペニスは、早く目の前の美しい女の媚肉を味わいたいと主張するようにビクビクと震えていた。

(~~~~~♡♡♡ ひいつ♡♡♡ まつ、マスターのオチンポ、とつても熱いですっ♡♡ お腹が『ジユっ♡♡』て、火傷しちやいそう♡♡ 私の腕よりオチンポ太いのに、入り口から鳩尾まで届いちやう位に長い怖すぎですっ♡♡♡ こっ、こんなの壊れちやいますう♡♡♡)

緊張と性的興奮が極限まで高まったカーマは、過呼吸気味の『ハッ♡♡ ハッ♡♡ ハッ♡♡』と、子犬がするような呼吸の仕方をしていく。

「——今からカーマの中に、“コレ”が入るからね。最初は苦しいかも知れないけど、その分だけいっぱい気持ち良くするから」  
「ひう~~~~っ♡♡♡」

有無を言わせないマスターの言葉に、彼女は蚊の鳴くような悲鳴を上げる。

それなりに離れた場所から目視するのはまた違う、彼の人並み外れたペニスの大きさを間近で実感させられていた。カーマは秘所と

両方の乳首から『ぴゅっ♡♡　ぴゅっ♡♡』と、透明な愛蜜と真っ白な母乳を大量に噴いている。

重たいペニスを乗せられた彼女の引き締まった腹部は、痙攣を起こしたようにベコベコと動かしていた。カーマの意思に反してお腹が痙攣を起こしているのは、マスターの強すぎるオスに彼女のメスとしての本能と子宮が過剰に反応した結果である。

子宮がズキズキと痛いくらいに疼き、腹部の痙攣に合わせて尿道口から潮を吹いてしまう。

「——はひっ♡♡　んあっ♡♡　まつ、待って下さい♡♡　お腹が変になってるんですっ♡♡　んっ♡♡　今マスターのおっきなオチンポ入れられたら、おかしくなっちゃいます……っ♡♡♡♡　あっ♡♡♡♡　あっ♡♡♡♡　あぁ——っ♡♡♡♡」

彼女の必死な“お願い”は、オスの情欲を掻き立てるだけである。彼は腰を引いてペニスの先端と、カーマの淫肉の割れ目を触れ合わせた。腰をクイっクイっ動かし、濡れそぼった割れ目にペニスの先端を擦り付ける。火傷しそうな程に熱を持っている亀頭の先端が割れ目をなぞる度に、脊髄に沿って体の中心を駆け巡るような甘い痺れが走っていた。

充血したクリトリスをペニスの裏筋が擦り、脳の中で火花が散って甲高い嬌声が漏れる。

「まっ♡♡　ましゅっ♡♡、マスター……っ♡♡♡♡　いひっ♡♡♡♡　あっっ♡♡　熱いれすう♡♡　んひい——っ♡♡♡♡　くりトリスうっ♡♡　んあっ♡♡　こしゅっ、擦っちゃあ♡♡♡♡　——あひっ♡♡♡♡」

尿道口から『ぶしゅっ♡♡　ぶしゅ……っ♡♡♡♡』と潮を噴き出し、膣口から粘っこい愛蜜を『ぴゅっ♡♡　ぶびゅっ♡♡』と溢れさせる。それら全てのメスの淫らな体液がペニスに噴き掛かり、びちゃびちゃになるまで濡れていた。

メスの淫らな体液を吸ったペニスには、更に大量の血流が送られる。海綿体が限界まで膨張してしまい、普段の勃起時よりも更に大きなペニスとなっていた。マスターは器用に腰を動かして、膣口に亀頭の先端を触れ合わせる。

——しかし、それだけで彼の攻めは終わらなかつた。

マスターはこのまま正常位の体勢で繋がるのでは無く、より気持ち良くなれる体位となるように彼女の体を動かす。

「カーマに俺達が繋がる所、ちゃんと見せてあげるね」

「~~~~~」 まっ、待つてえ♡♡

きやつ♡ こっつ、こんな恥ずかしい格好らめっ♡♡ らめれすう

……っ♡♡ あう——っ♡♡♡」

カーマは今の自分の恥ずかしい体勢による極度の羞恥心から、熟した林檎のように真っ赤な顔を両手で覆う。何故なら恥ずかしいと口になっている彼女が目を開けば、膣口とペニスが繋がっている所が目に入るからだ。

マスターに両脚の足首を掴まれる彼女は、頭の横に両脚が来るまで押し倒される。

自然と彼女のムッチリとした肉付きの良い桃尻やしなやかな腰が宙に浮き上がり、俗に言う“まんぐり返し”の体勢となっていた。豊満が乳房が重力に従って自分の顔の方へと動き、乳首の先端から噴水のように『ぴゅっ♡♡ ぴゅっ♡♡』と、溢れた真っ白な母乳が顔を覆う両手に噴き掛かる。

彼は少しずつ体重を掛けていき、顔を隠す彼女に囁いた。

「——カーマ、愛してるよ」

「ひっ、いひっ♡♡ いまっ♡♡ 今はらめっ♡♡ らめえ♡♡」

イグっ♡♡ イっぢやう♡♡ イ~~~~~っ♡♡

♡♡♡」

ズププ……♡♡♡と、亀頭が先端から膣孔に埋没していき、膣口が拡がるような圧迫感と共に声を我慢し切れない強い快感が伝わる。マスターの愛を囁く言葉によって絶頂してしまい、大量の母乳と潮が両手に噴き掛かった。

「イっでっ♡♡♡ イっでましゅっ♡♡♡ ふと……っ♡♡♡  
ふとい♡♡♡ おっっ、オマンコこわれちゃう♡♡♡ おっっ♡♡♡  
おっひ——っ♡♡♡」

狭い膣孔がマスターのペニスの形を覚えるように、限界付近まで拡がってしまう。駄目だと口にする彼女の口に反して肉体の方は性欲に対して正直であり、彼のペニスを離さないと伝えるように『キュン♡♡♡ キュン♡♡♡』と締まっていた。

ゆっくりとペニスが入り込んでいき、気付けば女の感じやすい”場所”に亀頭が到達した。そこは膣入り口の近くであり、お臍側の腫れぼったい他とは違う感触がしている。俗に”G—スポット”と呼ばれる場所が、大きな亀頭にゴリゴリと押し潰された。

「いひ~~~~~~~~っ♡♡♡ しよっ、しよこら  
めっ♡♡♡ グリグリしちやつ♡♡♡ イグっ♡♡♡ イっぢやうう  
うううううううううううう——っ♡♡♡♡♡♡♡  
いひ——っ♡♡♡」

目の前を真っ白な光に包まれ、頭の中でバチバチと火花が散る。カーマは少しでも快感に耐えるために、顔を隠していた両手でシーツをギュツと掴む。絶頂に合わせて大量に噴き出る潮や母乳が顔や髪を濡らし、両足がつま先までピンと伸びる。

脳髓を焼くような快感に濁音混じりの嬌声が漏れ、頭を左右に振って快感に耐えようとする。真っ白なベッドの上で、カーマの処女雪のように美しい髪が波打ちながら広がった。

タップリとG—スポットを刺激したペニスは、まだまだ終わりじや







た。声にもならない嬌声を上げるカーマは、またしても子宮を押し潰される快感の渦に飲み込まれる。

その後はマスターによる杭を打つようなピストン運動が始まり、膣肉や膣壁の掘削が始まった。

マスターの腰が筋肉を使った力任せに上下に動き、部屋全体に子気味の良い肉のぶつかり合う破裂音が断続的に響く。子宮の形が変わるまで押し潰される快感と膣肉をゴリゴリと掘削される快感が波状攻撃のように繰り返され、彼女は白目を剥きながら快感の津波に攫われる。

脳髓が焼き切れるような快感に意識を飛ばしそうになるが、直ぐに新たな快感によって覚醒させられ、脳の処理できる量を遥かに超える快感が送り込まれ続けた。少しでも快感を逃すために、全身から体液が溢れる。

汗、唾液、愛液、潮——そして母乳が、振ったシャンパンのコルク栓を抜いた後のように、大量に噴き出た。カーマの全身から甘酸っぱい汗と共にメスの発情した濃密なフェロモンが発散され、彼女は一生忘れられない快感をその身に刻まれる。

自身の霊基がマスター専用だと深く深く刻み込まれ、本当の意味での専属サーヴァントになってしまう。自分が絶頂しているのか、それともしていないのかすら分かっていないカーマは、僅かに残った冷静な部分が、自分を取り返しのつかないことになってしまったのだと理解する。

(いっ、♡♡♡ いひっ、♡♡ マスターにオマンコだけじゃ無くて、霊基も壊されちゃいましたあ♡♡ おつきなオチンポに、オマンコ壊されてっ♡♡♡ 愛されセックス気持ち良過ぎて、霊基もおかしくなっちゃいました……っ♡♡♡)

何十回もの強烈なピストンにポリチオアクメを覚えさせられ、全身が宙に浮くような快感に半分意識が途切れている彼女に対して、マスターは耳元で射精が近いことを告げる。既にずっしりと重たい睾丸がグツと持ち上がり、龟头はこれまで以上に膨らんでいた。龟头の先端にある縦の割れ目からは、濃厚な精液の混じったカウパー液がトプ



最後の一滴まで精を吐き出したマスターは、虚ろな目をするカーマの唇を奪う。彼女は本能のままに舌を動かし、彼と舌同士を絡め合っていた。

「——じゅるっ♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅずずっ♡♡♡ じゅるる——っ♡♡」

カーマの唇を濡らしていた母乳や潮を舐め取り、口内に溜まった唾液を啜ったマスターは、ゆつくりと唇を離した。未だ餌を求める雛鳥のように、開いた口から舌を伸ばす彼女に耳元で愛を囁く。

「んっ、はぁ……カーマ、大好きだよ」

「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡ ——はい……っ♡♡」

未だ絶頂の荒波に呑まれたまま、殆ど意識の無いカーマだったが、それでも愛して貰える悦びからか返事をしてしまう。その返事に笑顔を浮かべながら頷いたマスターは、未だ萎える様子が全く無いペニスをゆつくりと動かし始めた。

再び声にならない嬌声を上げる彼女に対して、また唇を奪う前に言葉を紡いだ。

「……これからもずっと愛するから、いっぱい気持ち良くなろうね」

「——っっ♡♡♡」

愛されることに飢えた愛の神は、深い愛に溺れていた。

評価者2000人記念 番外編―8 虞美人草は淫蕩  
に耽る

番外編：虞美人草は淫蕩に耽る―1

「――じゅるっ♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅるるるっ♡♡ じゅ  
ちゅう♡♡♡ ぢゅちゅう…っ♡♡ じゅるるるるっ♡♡ ぢゅ  
るる――っ♡♡」

ベッドの上で胡坐をかいた黒髪の青年の上に、栗色の長髪が目を惹く美女が向かい合うように抱き着いている。一般的に対面座位と呼ばれる体勢であり、彼女の引き締まった白い腹部には怒張したペニスの先端がグイグイを押し付けられていた。

お互いの頬を両手で包み込むように挟み、唇と唾液を卑猥な水音を立てながら貪っている。半開きになった口から唾液に濡れた舌先が伸び、蛞蝓同士の交尾のように絡み合っていた。口端からは二人の唾液が混じったものが零れ、顎先に溜まったものがポタポタと零れ落ちていく。

ルビーを思わせる真紅の瞳は快感からトロンと蕩けており、普段は気の強そうな眉も端が下がっていた。上気して汗ばんだ頬には数本の髪が張り付いているため、より官能的な雰囲気纏わせている。普段は刺々しい態度で先輩風を吹かせる彼女が、発情したメスの顔をしていった。

普段とのギャップが雄の征服欲や独占欲を刺激してしまい、口付けはより深いものとなる。

「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡ んっ♡♡♡ ぢゅるるるっ♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅるるるっ♡♡ じゅちゅ…っ♡♡ じゅるるる――っっ♡♡♡♡♡」

青年の口内で甘ったるい嬌声を上げる美女は、服の上からでも分か

る位に乳首を勃たせ、秘所からガムシロップのような愛蜜を溢れさせている。華奢な女性らしい肩がピクピクと震え、快感を逃がすように細腰を悩まし気に動かしていた。

彼の長大なペニスの先端がグリグリと彼女の鳩尾を押し付ける度に、膣孔から『ぷしゅつ♡♡♡ ぷしゅう……♡♡♡』と、大量の愛蜜を噴き出している。今にも絶頂を迎えてしまいそうな美女は、まともな思考もままならない状態であった。

「——っ♡♡♡ わっ、私の後輩の癖に♡♡♡ 女慣れしまくってて、本当にムカつくわね♡♡♡ んあっ♡ 音立てて唾液啜りながら、舌絡めるの禁止だってこの前も言ったの♡♡♡ 後で文句言つてやるう……♡♡♡ おっ、憶えてなさいよ♡♡♡ 本当に生意気なんだからあ♡♡♡ んひ——っ♡♡♡」

「んう~~~~~っ♡♡♡」

——ぷしゅあああああ——っ♡♡♡

青年によつて”潮吹き”を徹底的に教え込まれている彼女は、絶頂と共に”いつものように”尿道口から潮と呼ばれるメスのフェロモンがタツプりと含まれた体液を噴き出してしまふ。目の前が真っ白な光に包まれ、全身から甘酸っぱい汗が噴き出す。

彼の脹脛にムツチリとした桃尻をズリズリと押し付けながら、全身を『ビクン♡♡♡ ビクン♡♡♡』と痙攣するように震わせる。しなやかさと女性らしい丸みを両立している両脚を、つま先まで一直線にピンと伸ばしていた。

彼女は絶頂の間もずっと唇を貪られていたが、波が治まり切った頃にゆっくりと唇を離される。二人の唇の間には銀の糸の架け橋が掛かっており、美女は半開きになった口から荒い呼気を吐き出していた。彼を睨み付けようとしているが、目尻が快感により下がっているせいで淫らな表情にしか見えない。



とは違う”粘っこい水音”が断続的に響き、噎せ返る程に濃い男女の性臭が籠っていた。理性的な男と女が理性の無い雄と雌に変わり、何度もまぐわった後であることは明白である。

二人は一糸纏わぬ生まれのままの姿を晒しており、美しい肢体をお粥のように濃い精液で汚している彼女は、彼の未だに怒張し続けているペニスに”お掃除フェラ”を行っていた。女の引き締まった腹部は妊婦のように膨らんでしまっているのだが、それは全て口や膣孔、肛門に注がれた大量の精液である。

つい先程まではペニスの挿入されていた膣口や肛門は開いたままであり、開いた穴からスライムやゼリーのような白濁液が『ぶぷっ♡♡ ぶぷぷぷっ♡♡♡』と放屁のような間抜けな音と共に、ゆっくりと溢れてベッドのシーツに大きな液溜まりを作っていた。

本当はもつと勢い良く精液を噴き出しても良さそうなのだが、精液が濃すぎるせいでゆっくりとしか出てこないのだ。彼女のタツプりと柔肉を蓄えた真っ白な桃尻は、平手打ちを何度もされた後のように真っ赤になつて腫れている。

ベッドヤクザを超えてベッドモンスターな青年に、後ろから獣のような体勢で何度も犯され、尻肉が腫れるまで腰を叩き付けられ続けたことが伺える。彼の性的虐待に耐えるために女の尻タブは更に大きくなり、思わず叩きたくなるデカ尻へと変わっていくことだろう。

「じゅぷぷぷぷ……っ♡♡♡ ぢゅるるるっっ♡♡♡ ぢゅぷぷぷぷっ♡♡♡ っんう——っっ♡♡♡ じゅるるるるっ♡♡♡ じゅぷぷぷっ♡♡♡ ——♡♡♡」

彼の剛槍のように大きなペニスの先端、膨らんだ亀頭を口一杯に頬張り、下品なフェラチオ顔を披露する彼女は、美乳と表現したくなる柔らかく形の良い乳房で陰茎を挟み、『ずちゅっ♡♡♡ ずちゅ……っっ♡♡♡』と、卑猥な水音を立てながら陰茎を扱っている。

青年の長大なペニスだからこそ、フェラチオとパイズリが同時に出来ており、雄としての強さを否応無しに再確認させられていた。散々

”分からされた”子宮が『キュン♡♡♡ キュン♡♡♡』と疼いてしまい、  
精液と共に粘っこい愛蜜を溢れさせてしまう。

乳房全体が精液と愛蜜の混じった天然のローションで濡れており、  
ブツクリと膨らんだ乳輪の中心にある硬くシコった乳首からは、真っ  
白な母乳を『びゅっ♡♡♡ ぴゅうーっ♡♡♡』と噴水のように噴き  
出していた。陰茎に乳首が擦れる度にくぐもった嬌声が響き、乳首から  
脳髓が焼けるような快感が駆け巡る。

彼の身体を使って自慰行為に耽っているも同義であり、彼女自身も  
絶頂の波が近付いていた。

「ぢゆるるるるっ♡♡♡ んっ♡♡♡ じゆるっ♡♡♡ じゅぶぶ  
ぷっっ♡♡♡ んっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ ぢゆるるるるっ♡♡♡  
♡♡♡ ぢゆるるるるっ♡♡♡♡♡♡♡」

亀頭の先端の割れ目からトプトプと先走り汁が溢れ、彼女は舌の上  
で濃厚な雄の味を堪能している。味覚は既にマスターのペニスや精  
液を、美味しいと感じるまで犯されていた。それに先走り汁こそ射精  
が近い合図でもあるため、目を細めて悦ぶ女は更に口奉仕を激しくし  
てしまう。

間抜けで下品な表情となってしまう”ひよっところエラ”をしな  
がら、喉奥に亀頭の先端を擦り付ける口奉仕をする彼女の頭を、青年  
の男性らしい武骨な両手が押さえ付ける。苦悶の表情と呻き声を上  
げる女に対して、青年はそれが普通のことであるようにペニスを更に  
奥まで押し込む。

「もう少しで射精そうだから、我慢して下さい——っ」  
「んぐううっ♡♡♡ うううっ♡♡♡ うううっ♡♡♡ んぐっ♡♡♡ んっ♡♡♡  
うううっ♡♡♡ うううっ♡♡♡ うううっ♡♡♡ うううっ♡♡♡」

喉奥を超えて狭い食道すら長大なペニスで犯す彼は、オナホールを  
扱うような快感とメスを乱暴に扱う加虐心や征服欲を刺激され、思わ





彼女は喉を『こくつ♡♡ こくつ♡♡』と、鳴らしながら精を嚙下していくが、余りに精液の量が多すぎるために、木の実を詰め込んだリスのように頬がパンパンに膨らみ、鼻の穴からも白濁とした精液が鼻水のように溢れている。

全身を『ビクつ♡♡ ビクンつ♡♡』と痙攣させるように震わせていたが、その震えも次第に弱くなっていき、最後に身体を大きく震わせると全身をクタッと脱力させた。口端と鼻の穴から精液を溢れさせ、殆ど気を失いかけている女は、尿道も緩んでしまいチヨロチヨロと黄金色の体液を漏らす。

精液で出来た白濁とした液溜まりに黄色い体液が混じり、ツンと鼻を突く刺激臭が空間全体に広がる。

お漏らしをしてもひよつとこのように口を窄めてペニスに吸い付く彼女は、ゆつくりと胃の中に精液を収めていく。パンパンに膨らんでいた腹部が、更に膨らんでしまう。その腹部の圧迫感すらも快感や幸福感に置換され、女は酸欠も相まって脳が蕩けてしまっている。

一分以上にも渡る吐精もようやく終わり、彼女の口から怒張したままのペニスをズルズルと引き抜いていく。深い段差のあるカリ首が食道をゴリゴリと掘削するため、最後まで快感を与えられる。『——ぬぽっ♡♡♡』と女の唇からペニスが引き抜かれ、亀頭の先端と桜色の可憐な下唇の間が、精液と唾液の混じった白い糸で繋がっていた。彼女は精液臭い呼吸を荒っぽく吐き出しながら、胃の中に溜まったガスを口から漏らしてしまう。

「ケ、プっ♡♡ ケ、えええええええ——ぷっっ♡♡♡ んぶ……っ♡♡ げふうーっ♡♡♡ ん、う——っっ♡♡♡」

カエルのように下品なおくびを何度も口から零しているのだが、汚いでは無く酷く淫靡に感じてしまう。口内には未だに飲み込み切れていない精液と唾液の混じった、白濁色のプールが出来上がっており、唇の端からダラダラと溢れていた。

焦点の定まっていない潤んだ瞳は、未だ彼女が精に溺れている証か

もしれない。脳の奥深くまで快感を与えられ、思考が殆ど回っていない。回らなかった。

淫靡な表情をさせている女を見詰める青年は、未だに全く衰える様子の無い怒張しているペニスを彼女のニキビやシミ一つ無いおでこにグリグリと押し付けている。無言のままもつとシて欲しいと伝えており、女は力なく上目遣いのように彼を見詰めながら、文句の言葉を呂律の回らないまま口にした。

「げふ——うっ♡♡ んぶっ♡♡♡ あっ、あんらまだシたりないの……?♡♡ ほんろうに……へんたいなんらからあ♡♡♡ けふっ♡♡♡」

太い腕のような陰茎に右の頬でズリズリと頬擦りをしながら、緩慢な動作で両手を動かし『ずちゅっ♡♡ ずちゅっ♡♡♡』と、卑猥な水音を立てながらペニスを扱っている。罵るような言葉を口にしてしまっているが、本当の拒否のようなものは全く感じられない。

寧ろ彼女に獣の尻尾が生えていたのならば、ブンブンと嬉しそうに振っていただろう。

精液と唾液でドロドロに濡れたペニスにピンク色の艶めかしい舌先を這わせ、裏筋やカリ首をチロチロと舌尖を動かしている。そんな彼女の茶髪をゆっくりと感触を楽しむように撫でながら、青年はもつとイヤらしいことがしたいと口にした。

「先輩……フェラも気持ち良いんですけど、もつとエッチなことがしたいです。後ろ向いてオマンコ指で広げて下さい」

「~~~~~♡♡♡ ほんろうにへんらいなんらからあ♡♡ んう……っ♡♡ ほらあ……好きならけすれば良いじゃないっ♡♡ こうはいのらいすきなココにっ♡♡♡ いっぱいズポズポしなさい……っ♡♡♡」

女は真っ赤に腫れたお尻だけを突き出すような体勢で、両手を使っ

て左右の大陰唇を開いている。開かれた膣口からは、白濁とした粘っこい体液がコプコプと溢れており、オスを誘うようにクパクパと開閉を繰り返していた。

彼女のキュツと括れている細腰を青年は両手で鷲掴み、更に血流が集まってガチガチに勃起したペニスの先端を膣口に触れ合わせる。『ずちゅっ♡♡ スプププっ♡♡♡』と肉槍を突き込んでいき、女のトロトロに解れた膣孔を再度蹂躪していく。

半開きになった口から舌先を突き出しながら、彼女は甘い嬌声を上げる。

「……ん♡ひっ♡♡♡ お♡っ♡♡ お♡ぐう……っ♡♡♡ い♡っ、い♡ひっ♡♡♡ い♡——っっ♡♡♡♡」

彼の火傷しそうな程に熱く長大なペニスに対して、女の膣肉や膣壁はきゆうきゆうと絡み付きながら、早く奥に戻って来てと抵抗なく？み込んでいく。逆にペニスが引き抜かれることになれば、逆立った膣壁が抜けることを拒むように吸い付いてしまうのだ。

半分程ペニスを挿入した所で、青年が女に覆い被さる。獣同士の交尾のような体勢になり、組み敷かれる格好に彼女の子宮はキュンキュンと痛いくらいに疼いてしまう。女の真っ赤に染まった耳を甘噛みと耳の穴を舌先でグリグリと穿り、彼女の耳が過敏になった頃に、彼は耳元で独り言のように囁いた。

「——じゆる……んっ。本当に先輩のナカ、気持ち良いです。セツクスすればする程、もつと先輩と繋がりがりたくなります。今日はこのまま、ずっとシたいです」

「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡ へっ、へんらい……っ♡♡♡ ほかにもいっぱいオンナいるのにな♡♡♡ んあっ♡♡♡ わたしまで孕ませて”セフレ”にするんだからあ……っ♡♡♡ いっ、いっっておくけど、アンタは二番なんだからっ♡♡♡ ”項羽”さまのつぎにやらんから——んむっ♡♡♡ ぢゆるるっ♡♡♡♡」



番外編：虞美人草は淫蕩に耽る―2

——パチュンっ♡♡♡♡♡ パチュツ♡♡♡♡♡ パチュンっ♡♡♡

「……………ツ♡♡♡♡♡ ————いつ♡♡♡♡♡ ……っ♡♡♡♡♡」

ラブホテルに設置されていてそうなガラス張りの立方体の中では、シャワーのお湯が流れる水音と共に、肉同士のぶつかり合う子気味良い破裂音が、密閉空間特有の反響をしながら鳴り響いていた。鼓膜を揺さぶるイヤらしいリズムは、聞く者の理性を徐々に奪っていくだろう。

その本来ならば一人だけでの使用を想定されているガラス張りのシャワー室では、一組の男女が絡み合っている。茶髪の美女は床に両足の先端すら着いておらず、青年に対して背を向けたまま肉付きの良いムツチリとした両脚を持ち抱えられていた。

「イク〜く〜く〜っっ♡♡♡♡♡ い…………っ♡♡♡♡♡ あ————っっ♡♡♡♡♡」

ガラスで出来た壁に両手を突き、豊満な乳房や膨れているお腹が押し潰れている。

女は肉同士のぶつかる破裂音がする度に、開いた口からピンク色の舌を突き出しながら、何らかの声を出そうとしているのだが、既に声を出すことすら出来なくなっていた。声を出す代わりになのか、快感を伝えるために秘肉の割れ目から、雌のフェロモンを大量に含んだ透明な体液を噴き出している。

女性らしさの塊である丸くイヤらしい肉の付いた桃尻は、度重なる打ち付けで真っ赤に腫れ上がっていた。今もマスターの鍛えられた硬い下腹部が叩き付けられており、イジメられるのが大好きな媚尻に開発されている。

青年のいきり立った剛直はトロトロに解れた腭孔に埋没しており、

親指よりも深い段差のあるカリ首でゴリユゴリユと掘削を続けていた。そんなカリ首に掻き出された泡立ったお粥のような濃厚な精液は、シャワーの流水によって流されている。

一日以上の時間をまぐわいに費やしているのだが、一般人である筈の青年——藤丸 立香は未だ元気である。逆に星の触覚や精霊に近い存在である筈の美女——虞美人の方が、精魂尽き果てたグロッキーな状態であった。

四肢に力が入っておらず、快感に溺れる瞳もどこか虚ろである。

それもその筈、このまぐわいが始まってから一切の休みは与えられず、性行為かご奉仕をさせられ続けているのだ。絶頂で気を失ってしまふことがあったとしても、直ぐに次の絶頂で叩き起こされてしまふ。

常に脳髓を焼くような快感を与えられ続け、脳がトロトロに蕩けている。

豊かに実った果実のような乳房を念入りに揉みしだかれながら、トロトロに解れ調教され切った膣孔や尻孔を蹂躪され続けており、獣のマーキングのように白濁とした精を注がれ続けていた。普段は小さな窄まりでしか無い尻穴が、今はぽっかりと穴が拡がったまま締まらなくなっている。

ゴプゴプと卑猥で粘っこい水音をさせながら、お粥のような白濁とした濃い精を溢れさせてしまふ。

「汗塗れでセックスするのも気持ち良いですけど！　こうやってシャワーでさっぱりしながらするセックスも気持ち良いですねっ！」

——じゅっ……パンツ♡♡♡　パチュンっ♡♡　バच्चュンツ♡

♡♡

「——っツ♡♡♡　いひ……っ♡♡　イ——ツ♡♡♡」

(バカこうはい……イっ♡♡♡　こっちはずっと気持ち良いのよお♡)







シャワー室の中では男女の淫らな臭いが立ち籠っているのだが、シャワー室を出た外側には更に濃密な男女の淫臭が噎せ返ってしまいう程に籠っていた。部屋中に男女のまぐわった痕跡が残されており、白濁や透明、黄色など様々な色の水溜まりが出来上がっている。

壁にも犬がマーキングしたかのような尿の後が残っており、虞美人が様々な体位や場所でマスターに犯されていたことが伺えた。実際に一般的に男女がまぐわう場所となるベッドの上だけでは無く、トイレや壁、机の上などで彼女は、獣のように卑猥なポーズをしながら何度も種付け交尾をしている。

マスターのことを「二番目」と言いながらも彼女は、彼の人並み以上どころか人外の域に入りつつある性欲の全てを受け入れていた。それこそ日頃から一切の避妊をしていない彼との間に、愛の結晶と言っても過言では無い、子供が出来てしまっても良いと考えているのだ。

二人は蛞蝓同士の交尾のように舌を密着させ絡め合いながら、ラストパートに向かって動いていく。マスターの腰の動きはこれまで以上に激しくなり、虞美人は子宮口を緩めてより奥で精を受け止めようとする。

何百回とまぐわっているからこそ、射精のタイミングが本能的に分かってしまうのだ。

♡♡  
——バッチュンっ♡♡♡ バチュンっ♡♡♡ バッチュンっ♡♡♡

「ぢゅるっ♡♡♡ ぢゅるるっ♡♡♡ ぢゅちゅう……っ♡♡♡ん  
うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡ うっ♡♡♡」

——びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡  
るるるるるっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡  
らららららっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡  
びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡ びゅらっ♡♡♡

何度目になるかも分からない子宮内への直接吐精が行われる。古い精が膣や膣口から溢れるように追い出され、ずっしりと重たい睾丸の中で煮詰まった新鮮で元気な精が注がれた。

マスターの口内で蜂蜜よりも甘ったるい嬌声を上げる彼女は、お腹が膨れる圧迫感と全身に高圧電流が流れるような快感に晒される。目の前を全てが光りに包まれるような閃光に覆い尽くされ、尿道口から黄金色の体液が放物線を描きながら出ていた。

女神や鬼、果てには龍すら孕ませる、化け物のような精子達が子宮内を埋め尽くす。

——しかし、二人の間には“まだ”子供が出来る気配は無かった。

互いに子供が出来なかったことを本能で悟ったのか、マスターは再び腰を動かし始める。虞美人もまた絶頂の中でされるがままにはあるが、絡ませ合ったままの舌を動かす。

ガラス張りのシャワー室の中では、二つの人影が重なり合ったままである。

——『聖晶石』という名の、夜空に輝く星の形を象った八面体の結晶。その結晶は雨上がりに掛かる虹のように光り輝き、聖なる力の宿った概念的な物質である。

数多の未来を確定させる”概念”を結晶化させた物質であり、魔術的な名称として”疑似霊子結晶”とも呼ばれる。多くのリソースを必要とする聖晶石とは、貴重で稀少な資源の一つであるため、”人理継続保障機関 カルデア”に於いても一定数の確保が重要とされていた。

……無数にある並行世界のマスターの中には、”色々なもの”を削った末に、聖晶石を手に入れている剛の者もいるらしい。

聖晶石には様々な使用用途が存在しているのだが、最も重要な使用方法は聖晶石を三つ消費して行われる”カルデア式英霊召喚”だろう。”シールダー マシユ・キリエライト”が持つ、『平等を意味する卓』を原型に作られた”盾”を用いて行われる召喚儀式である。

——人的資源が慢性的に不足しているカルデアに於いて、戦力を増強する唯一の手段だ。

カルデア式英霊召喚について端的に説明すると、”座”と呼ばれる死後も”語り継がれる英雄”が死んだ後に”魂”が保管される場所があり、召喚を行うマスターと”縁を紡いだ英霊達”を座から現世へと召喚するというものだ。

基本的に特異点で縁を紡いだサーヴァント達が、その縁を辿って召喚されることが多い。しかし、英霊達が存在している『座』には、過去や未来などの”時間”という概念が存在していないのだ。

——その結果、マスターにとっては遙か遠い未来の出来事であろうとも、縁を紡いでさえいればサーヴァントとして召喚されることがある。座に時間という概念が存在していないからこそ、英霊側にとっても”予期せぬ再開”があるのだ。

——”虞美人”と”マスター”の出会いが、正しくそうであった。

「――二つ、三つ……うん、数も大丈夫だね」

黒髪の青年は足元に置いた三つの聖晶石を、人差し指を動かしながら数え直す。

彼はこれから行う”詠唱”に間違いが無いか、脳内で確認作業をしていた。既に三桁近い召喚を行っているため、詠唱自体は完全に暗記しているのだが、半ばルーティンのようなものとなっている。

人理継続保障機関カルデアに所属する人類最後のマスター”藤丸 立香”は、第三特異点”封鎖終局死海 オケアノス”の攻略が終了したばかりであり、まだまだ戦力が不足していることを痛感していた。

実際にギリシャ神話の大英雄 ヘラクレスに山中を追い回され、比喩抜きに死にそうになったことも記憶に新しい。

そのためカルデアの施設内にある通称”召喚部屋”にて、新たな戦力となるサーヴァントを召喚をする準備を行っているのだ。今回も”海神 ポセイドン”をしばいて聖杯を奪った、頼りになり過ぎる”船長”を筆頭に、多くの英霊と縁を繋ぐことが出来たため、誰かが召喚に応えてくれる可能性は非常に高かった。

英霊召喚用の魔法陣の前に立った彼は、赤い令呪の輝く右手を魔法陣に向かって伸ばす。

深く息を吐いた後に閉じていた目をカツと見開き、英霊を召喚するための詠唱の言葉を口にする。流れるように紡がれる言の葉は、まだ

まだ未熟ではあるがマスターが一廉の魔術師であることの一端が垣間見える。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に……聖杯の寄るべに従い、人理の轍より応えよ。汝、星見の言霊を纏う七天。降し、降し、裁きたまえ、天秤の守り手よ——ッ！」

彼のまるで歌うような詠唱が終了すると共に、目の前の召喚サークルが金色に回転しながら輝き始めた。目を開けていられなくなる程の眩い光に視界が包まれ、至近距離に居たマスター自身も思わず目を閉じてしまう。

この発光現象はサーヴァントの召喚が成功した証であり、カルデア式の英霊召喚では”概念礼装”と呼ばれるモノが”摘出”されることもある。そのため今回の彼は、運が良い方であった。正しくカルデア式の英霊召喚とは”ガチャ”に近いものがあるため、サーヴァントの召喚が出来ない時には本当に出来ないのだ。

因みに完全に余談となってしまうのだが、基本的にはサーヴァントの召喚が出来た方が嬉しいに決まっている。しかし、一部の稀少な概念礼装については、無数にある並行世界の中で喉から手が出る程に欲しているマスターが存在しているらしい。

視界が眩む程の光が徐々に収束していくと、栗色の長髪を三つ編みした黒縁眼鏡を掛けた女性——”虞美人”が呆けた表情のまま現れる。暫くの間、口を半開きにしたまま放心していた彼女だったが、不機嫌な様子を少しも隠していない声色で、目の前のマスターへと話し掛けた。

「あのねえ、よくもまあ抜け抜けと……：……：……よりもよってお前が私を召喚するなんて、一体どういう神経してるの!?! ——ふん、まあいいわ。縁があったのもまた事実。サーヴァント、アサシン。その契約に応じてあげる」

虞美人は不満や困惑、驚愕といった負の側面が強い感情の入り混じった、露骨に不機嫌そうな表情を浮かべており、人畜無害そうな彼の顔をキツと睨み付けている。何となくいきなり引き取られた野良猫のようであり、怖いという思いよりも可愛らしいと思えてしまう。初対面である筈の彼女が明らかに既知の人物への対応をしているため、若干だが困惑の表情をマスターは浮かべてしまう。しかし、持ち前の基本的に誰とでも仲良くなれる柔軟さを発揮して、普段通りの挨拶を返した。

「えっと……初めまして藤丸 立香です。これからよろしくお願いします」

「……………?」

握手のために右手を差し出した彼に対して、小首を傾げながらも心根が優しい虞美人は、咄嗟に握手を返してしまう。握手をしたまま少しの間があつて彼女は、『自分とマスターが”異聞帯”で戦った』時よりも”過去”に召喚されたのだと気が付き、驚きの余りカルデア中に響き渡るような大声を上げる。

「はっ、はあ~~~~~~~~~~~~ツ!!」

こうして二人の邂逅の結果は、マスターの聴覚が暫くの間失われることで幕を閉じた。

彼と虞美人との出会いは、ある意味で最悪に近いものである。そして、彼女にとつて最も居心地の悪い、”未来で裏切ることになるカルデア”での生活が始まることとなった。

## 番外編：虞美人草は淫蕩に耽る―3

——これは”虞美人”と”藤丸 立香”の二人が出会ってから、暫く経った頃のことである。

『……そういえば先輩は、好きなものとかあるんですか？』

ある日、マスターの部屋であるのにも関わらず、ベッドの上で我が物顔で寛いでいた虞美人は、マスターとの何気ない会話の中で”好きなもの”について聞かれていた。普段から彼の部屋に入り浸っている彼女は、自然と言葉を交わすことも多いのだ。

そんなマスターからの質問に対して、怪訝そうな表情を浮かべながらも虞美人は答える。

本質的な部分で彼女の心優しい部分が滲み出ており、彼に対して少しでも心を開いていることが垣間見ることが出来た。虞美人にとってマスターはカルデアでの”後輩”にもなるため、サーヴァントという主従関係には非ず、もつと近い関係を築くことが出来ているのかも知れない。

『物言わぬ命、あるがままの姿で刹那の春を謳歌する者たち。そういう在り方は愛おしいわ。終わりなき命の連鎖……私は”傍観者”にしかたれないけれど』

彼女は普段の人間に近い感性から来る少し荒っぽい言葉とは違う、無限に等しい時を強制的に生きねばならない人外であるが故の諦観や憂いを含んだ、理知的な言の葉を紡いでいた。実際に虞美人は有名な詩を残していることから、高い教養を持った文化人であることが伺える。

命の連鎖の中に彼女自身は入っておらず、周囲の動植物から命を吸収するだけの『奪う側』でしかない。刹那の春を謳歌する者の中に虞美人は含まれていないため、完全なる常識や規範の外側にいる存在な



のだ。

悲しそうな表情を浮かべる虞美人が紡いだ言葉には、生命の輝きへの愛おしさや羨望が含まれていた。そして、変えようも無い前提として命の連鎖の中に存在しない彼女は、自分が蚊帳の外にいることへの”寂しさ”も滲ませている。

——それはきつと、彼女が”孤独”であることの表出だったのだらう。

星の意思から生み出された『受肉している精霊種』である虞美人に寿命は存在しておらず、誰にでも訪れる筈の”死”という概念が無かった。死にたくても死ぬことすら出来ない不死身であるがために、星の終わるその時まで生きなくてはならないのだ。

彼女は真正銘の不老不死であるがために、創作上の存在では無い本物の”吸血鬼”に近しかった。

人類が長い歴史の中で想像する吸血やニンニクが苦手などのイメージという”歪み”に影響されていない彼女は、完全な”真祖”と呼ばれる者と酷似している。実際にはそれとはまた別種の存在ではあるのだが、成り立ちや生態が非常に似通っていた。

虞美人はただ永劫の時を生きる中で、出会いと別れを無数に繰り返している。

因みに吸血鬼で有名なブラド三世やカーミラは、無辜の怪物という民衆のイメージによって歪められていた。大抵のサーヴァント達は自分を歪められることに対して、溶岩のような熱く煮え滾った怒りや海よりも深い悲しみを覚えている。

そういった民衆の思いによって歪められた英霊の中には、願望器である聖杯を使用してでも、民衆の抱くイメージを変えたいと思ってい

る者もいる程であった。

そんな人々の思いによつて作られた吸血鬼とは根本から異なり、誰に歪められることの無い虞美人は本当の意味で”独り”なのかもしれない。きつと彼女の理解者は何人か居た筈なのだが、長い歴史の中で死に別れしてしまったのだ。

生物は生きる上で寿命に勝てる訳も無く、別れというものは必ず訪れてしまう。

虞美人が紡いだ言の葉は紛うことなき本心であり、少なからず契約を結んだ”マスター 藤丸 立香”に対して、少しばかりでも心を開いたからこそその言葉であったのかもしれない。彼女は戦いの中で『殺されたぐらいで死ぬるとは……幸せ者め』と、ぼそりと実感の籠った言葉を呟くことがある程である。

それを間近で見聞きしていたからこそマスターは、虞美人の孤独を癒せればと思つたのだ。

人理保障継続機関 カルデアに所属していた”芥 ヒナコ”と、四面楚歌で有名な■の愛人や妻であつたと歴史上で伝えられており、ヒナゲシの別名である『虞美人草』の由来となつた”虞美人”は、過去と未来ではあるが完全な”同一人物”であつた。

時系列的には芥 ヒナコが過去の存在であり、サーヴァントとなつた虞美人が未来に当たる。

説明すると少しだけややこしい話になってしまっただが、精霊や星の触覚に近い存在である虞美人が、現代社会に溶け込むために使用している偽名が芥 ヒナコなのだ。

因みに芥 ヒナコの偽名の由来は、雛芥子（ヒナゲシ）のアナグラムである。

一般人を装う時には無口で本好きな”フリ”をしているのだが、実際には本は視線で追っているだけであり、代わりに他人を注意深く観察しているだけであった。長い時を生きる中で人々に騙されたことも数え切れない程にあり、次第に不信感を覚えるようになったのも自然な流れであるのだろう。

人間不信にも近いために虞美人は、人を信用することが出来ないのだ。

彼女がカルデアのマスター候補生となった経緯は、”オルガマリー・アnimスフィア”の父親でもあり、カルデアの前所長でもある”マリスビリー・アnimスフィア”が、芥 ヒナコを名乗り技術職として働いていた虞美人を推薦したという流れがあった。

存在自体が人類に推し量れ無い彼女が、マスター候補生の中でも精鋭である”Aチーム”に選ばれたのは当然のことである。

マリスビリー・アnimスフィアに関しては、未だに謎も多い人物ではあるのだが、芥 ヒナコの正体に気付いていたのは間違いない。実際に虞美人も『思い返せば、そもそもマリスビリーなんかの誘いに乗ったのが、大間違いだったのね』と、語っていることから察することが出来る。

本来ならばマスター候補に選ばれたからと言って、それに従うような彼女では無かったのだが、”叶えたい願い”があったがために、カルデアのマスターになることを承諾したのだ。見方によっては人の弱みに付け込んでいるため、その提案をした人間は腹が黒いのかも知れない。

それ故にマリスビリー・アnimスフィアの誘いにも、乗ってしまっただろう。

芥 ヒナコを含むカルデアAチームのメンバーが、人理修復後に”

クリプター”となる契約を行い、異星の神と呼ばれる”モノ”の命令に従い汎人類史を白紙化し、正史から外れた異聞帯を作成するよりも”過去”に、虞美人はサーヴァントとして召喚されたのである。

——それが神の気まぐれによる悪戯であったのか、それとも彼女の運命だったのかは分からない。

一つだけ確かなことがあるとすれば、召喚された当時の虞美人は自分の不運を呪っていた。

マスターの鼓膜を潰す程の大声を上げた虞美人は、カルデアで居心地の悪い生活を送っていた。

明らかに面識のある”ロマーニ・アーキマン”や”レオナルド・ダ・ヴィンチ”、”マシユ・キリエライト”から、訝し気な表情や鎌掛けのような質問を投げ掛けられるという、鬱陶しいとすら感じる日々を過ごしている。

半ば虞美人と芥ヒナコは同一人物であることが、周知の事実となってしまうているのだが、彼女は沈黙を貫き続けていた。本人も自分がどう行動するべきか分かっておらず、迷っているというのが現状である。

やろうと思えば憎きカルデアを滅ぼすことも容易いのだが、それで

は自分の夢が叶うことは無いのだ。■■との再会を果たすためにも、虞美人は複雑な心境の中で生活を送っている。しかし、理屈と感情は別であり、感情がささくれ立ち荒ぶっているのは間違いようが無い。自分を英霊になることを勧めた”始皇帝”に対して、恨み節の一つでも吐きたい気分であった。

■■が英霊の座に登録されるためには、虞美人が英霊となる必要があり、もしかすると再開することが出来るかも知れないという口車に乗せたのが、他ならぬ異聞帯の王たる始皇帝である。結果的に彼女は、”過去のカルデア”に召喚されてしまったのだ。

もしかすると虞美人が始皇帝を恨んでいるのは、逆恨みとは言い切れないかも知れない。

きっと張本人である始皇帝が、彼女の英霊になった”その後”を知ったのだとすれば、『ハハっ、それは如何に朕であれ、予想することが出来なかった。朕の顔に免じて許せっ!』と、虞美人に笑い掛けながら受け流しているのは、想像に難くない訳だが……少なくとも謝ることは無いだろう。

そんな悶々とした日々を過ごす彼女が一番接しやすかったのは、意外なことに宿敵と言っても差し支えない”藤丸 立香”であった。彼は色々と怪しまれている虞美人にも普通に接しており、一人の英霊として彼女を尊敬しながら、頼れる味方として接していたのだ。

マスターが善にも悪にも寄り過ぎず、中庸であるがために虞美人とも話すことが出来た。

自分の大切な人である■■を倒した張本人であるのだが、それが未来の出来事であるがために、憎み切れないという側面もあったのだ。何より彼の人に好かれ易い柔和な性格もあるからこそ、いつまでも怒りというモノが持続しなかった。

そして何よりも、多くの重圧の中で必死に努力するマスターに対して、怒れる程に彼女は鬼では無かったのだ。傍から見ても彼は、生き地獄の渦中にいた。

過去に来たのだから当然のことではあるのだが、未だにカルデアは

人理定礎を破壊し人類史を焼却した”魔神王 ■―■イ■”との戦いの最中である。”人類最後のマスター 藤丸 立香”は、未熟な部分が目立つ半人前であった。

彼は数か月前までは一般人であったのにも関わらず、世界を救うという重責をいきなり与えられ、心身共にボロボロになりながらそれでも前を向いている。生傷が絶えない日々を送りながら、力を貸してくれる英霊のために心を砕いていた。

心身共に擦り減り摩耗しながらも、マスターの責務を果たそうとする彼自身は、痛々しいという感想が出るのも仕方の無いものである。さながら彼は人類を救うための奴隷であり、虞美人が同情するのも仕方無かったのかも知れない。

彼女は不服という態度を取りながらも、マスターに力を貸すようになったのに時間は掛からなかった。

『虞美人……ありがとう。力を貸してくれた皆のお陰で、人理の修復が出来たんだ……本当にありがとう』

『——ッ、ふんっ！ アンタも……凡人なりには頑張ったんじゃない』

ボロボロな状態でベッドの上に寝たきり状態なマスターに対して、虞美人はそっぽを向きながらも彼を労っていた。

彼は全身に包帯を巻きながらも、晴れやかな表情で笑っている。そ

れもその筈、一年以上にも及んだ世界を救うという重責から解放されたのだ。晴れやかな表情になっても、仕方の無いことだろう。

それも本来ならばロマニ・アーキマンという“犠牲”が出ていた戦いだっただが、愛の成せる奇跡であったのか、それとも本気になった“万物の天才”が凄まじかった。”魔術王 ■■■■”は座から完全に消滅したが、彼との間に宿った子供との“縁”によって、ロマニ・アーキマンは完全な消滅を免れたのだ。

”花の魔術師 マーリン”や”人類最古の英雄王 ギルガメツ シュ”が腹を抱えて笑う程の奇跡であり、本来ならばあり得なかった大団団であった。犠牲も無いままに大義を遂げられたのだ、マスターが清々しい表情を浮かべてしまうのも仕方ないことだろう。

ずつと張り詰めていた糸が弛んだような状態である彼は、どこか遠くを見るような視線を天井に送りながら、独り言のように感慨深そうに呟いた。きつとマスターが見ているのは、これまでの思い出である。

『今まで何回も死を覚悟したことはあったし、痛いことや辛いことも沢山あったんだけど、世界を救えたんだって思うと……あの旅も悪くなかったと思えるんだ。——正直、旅の途中は何度も自分以外に”誰か”いないのになつて、ありもしないことを考えてただけどね』

人理修復中には絶対に口にしなかったマスターは、今だからこそ弱音を吐いている。

最後には魔神王 ■ー■イ■改め、人王 ■ー■イ■と意地の張り合いのような殴り合いまでしながら、ギリギリで生き残った彼は、生きてることが不思議な程に全身がボロボロであった。多数の骨折や捻挫、打撲は可愛らしいものであり、筋繊維の重度の断裂や神経がズタズタであるのだ。

非道な事かも知れないが決戦礼装は、着用者が”死んでも構わない”作りになっており、人理を修復さえ出来れば良いという設計である。結果的にマスターの神経や内臓は焼かれ、全身の穴という穴から

出血する事態にまで陥った。

カルデアに戻った今も寝たきり状態にいるのは、その後遺症と治療のためである。

そんな大怪我を負いながらも幸せそうに微笑む彼を見て、虞美人の心はズキリと切り裂かれたかのように痛んでいた。一年近い時間を共に歩む中で、彼女のことを『虞美人』と呼ぶことを許すまでに、マスターとの絆も深まっている。

これから”過去の自分”がもう一度マスターに世界を救う重責を負わせると思うと、どうしようも無い位に罪悪感が押し寄せて来るのだ。しかし、彼女にとって最愛の■■との再会は、文字通り世界を敵に回しても叶えたいことである。

彼に聞こえない位の小さい声量で、虞美人はボソツと呟いた。

『……恨んでくれて構わないわ』

『何か言ったかな?』

彼女の呟きを聞き取れなかったマスターが聞き返そうとするが、虞美人は『何でもないわ』と、話を強制的に終わらせた。そのまま後ろを向いて部屋から出て行くこうとするのだが、虞美人が浮かべている表情は悲し気なものである。

——マスターは未だ彼女の目的を知らないままであり、二人が本当の意味で心を交わすようになるのは先のことであった。



「——んあっ♡　せっ、折角シャワー浴びたのに……っ♡♡　あっ♡  
♡　あひっ♡♡　もっ、もう朝よっ♡♡♡　いい加減に——んむっ♡  
♡♡　ちゅ……ちゅるるう……っ♡♡♡　バカあ……っ♡♡♡　ん  
ゝむっ……じゅるる♡♡　——ちゅう……♡♡♡」

シャワー室で汗を流しながらまぐわっていた虞美人とマスターは、その後繋がつたまま部屋へと戻ることになった。彼女も言うようにシャワーを浴びた後でもあるのだが、結局はベッドの上での性行為に戻ってしまう。

それに対して文句を言おうとするのだが、彼に瑞々しい唇を奪われている。

満更でも無い虞美人は流されるままに、侵入してきたマスターの舌の動きに応えるように動かす。唾液を嚼るような水音が室内に響き、彼女の膣孔を満たしているペニスが上下の腰の動きに合わせ、柔らかな膣肉や絡み付く膣襞をゴリゴリと抉っている。

「ぢゅるるるっっ♡♡　ちゅう……ぢゅるるっ♡♡♡　ちゅるる——  
ぷはッ♡♡　はあっ……はあっ♡♡♡　こっ、後輩の精液でいっば  
いよ♡♡　んう……っ♡　まだシ足りないなんて……サルなんだか  
らあっ♡♡♡　んひっ♡♡」

蜂蜜のようにトロトロに蕩けた甘い声で、虞美人は形だけの文句を口にする。

その証拠と言っても過言では無いのだが、彼女の細くスラっとしているのにムチムチとした両脚をマスターの腰に巻き付けていた。体勢によっては”だいしゆきホールド”と呼ばれるモノであり、少なくとも好意を抱いていない相手に出来るものではない。

何度も濃厚な精を注がれている虞美人の子宮は、まるで水風船のよう膨らんでおり、誰のモノであるかを理解させるようにマーキング





## 番外編：虞美人草は淫蕩に耽る―4

——悩みながらもカルデアを裏切ることを決意した”虞美人”は、自分が辿った歴史と同じように人理の漂白を止めることはしなかった。

恐らく歴史の修正力によって彼女が人理漂白を本気で止めようとしても、それが叶うことは決して無かっただろう。しかし、精神的な部分で自分の”願い”のために他の全てを切り捨てたという事実は、虞美人の記憶と心に”傷”として永遠に残り続けるのだ。

それは呪いのように彼女の心をジクジクと蝕むのだが、それこそが優しく人に近い精神性を持っていることの証明でもあった。永遠の時を生きねばならない精霊種として、人外の精神構造をしていれば、虞美人が心を痛めることは無かったのだから。

結果的に彼女は世界を滅ぼす片棒を担ぐことになってしまったが、それは人類が憎いなどの私怨からでは無い。ただ愛している■■■との再会を願っているだけであり、そのためには世界を——そして藤丸立香を裏切らなくてはならなかったのだ

——心の中の天秤を掲げ、■■■への想いが勝ったのだ。

このような葛藤が生まれた理由は、マスターとの絆が深まったことが主な原因だろう。

虞美人は精霊種というあらゆる生命から命を奪う、永遠の時を生きる人外の存在であり、明らかに隠し事をしてきた。そんな危険で信用してはならない自分を何故か無条件に信頼している、お人好しな彼の人懐っこく安心感を与える笑顔が、彼女の心の中で少しずつ大きくなっていったのだ。

自分を理解して愛してくれた■■■と同じように、マスターもまた虞美人のことを受け入れようとしてくれた。そんな彼のことを嫌いになることが出来る筈も無く、彼女は葛藤することになったのだ。口に

することは無いだろうが、好きか嫌いかの二択で問われれば、間違いなく好きな分類に入るだろう。

そんな好意を覚え始めているマスターを裏切ることには罪悪感を覚えながらも、虞美人は■■との再会を望んだのだ。その結果、カルデアという施設全体は丸ごと氷漬けにされ、スタッフの殆ども亡くなる筈だったのだが――

しかし、彼女は確かに世界を敵に回す覚悟は決めたが、見す見す全ての犠牲を許容するつもりは無かった。

この一見すると矛盾しているように思える行動を虞美人が行ったのは、根っこの部分での善性も多分に影響しているだろうが、心を許していた彼を裏切ることに対しての、せめてもの贖罪の意味合いもあつたのだろう。

厚顔無恥にも許して欲しいなどとは、彼女は口が裂けたとしても言わない。それでも彼が悲しみが少しでも小さくなるようにと、亜種特異点の攻略が始まった頃から行動を起こし始めたのだ。

虞美人は俵藤太に頼んで保存の効く大量の食糧の確保を行ったり、レオナルド・ダ・ヴィンチが密かに製造していた虚数潜航艇シャドウ・ボーダーの建造に力を貸した。それは来たるべき人理漂白に備えての行動に他ならず、カルデアの人的被害を減らすためのものである。

ダ・ヴィンチは虞美人が協力してくれることを訝しみながらも、これからシャドウ・ボーダーが必要な事態に陥るのだと理解したため、彼女の協力によって得られた豊潤な資源を投入することで、より巨大で頑強なシャドウ・ボーダーの建造を行うことが出来た。

全ての亜種特異点の攻略が終わった後にも、カルデアから退去したフリをしてクリプターの襲撃に備えていたのだ。

――結果、歴史通りに異聞帯のアスタシアやコヤンスカヤ、ラスプーチンを始めとした異星の神の勢力がカルデアに攻めてきたのだが、潜伏していた虞美人や”何故か”それなりの数の女性サーヴァント達が退去していなかったため、多くのカルデア職員が生き残ることとなった。

本来ならばラスプーチンに手刀で胸を貫かれて死ぬ筈だったダ・ヴィンチも無傷であったため、ロマーニ・アーキマンとの間に生まれた子供が、母親のいない人生を送ることも無くなったのだ。もしかすると、母親が小■生にしか見えない幼妻になっていたのかもしれないのだが、それは違う世界線での出来事なので語る必要も無いだろう。

戦力的にはカルデアの方が遥かに勝っていたのだが、それでもカルデアの占拠が止められなかったのは、歴史の修正力が働いていたのかも知れない。シャドウ・ボーダーでの潜伏期間中も、虞美人が事前に用意していた大量の食糧の備蓄があったがために、餓死する人間が出ることも無かったのだ。

結局、マスターが二度目の世界を救う立場に立たされたことに変わりはないが、本来の歴史と比較するとカルデアが受けた被害は軽微であった。そして、シャドウ・ボーダーの潜伏期間中に、虞美人は彼に隠していたことを全てを打ち明けたのだ。

『——これで理解が出来たかしら。私はアンタ達……カルデアの敵だったわけ』

マスターのやり場の無い怒りや行き場所の無い憤りを自分に向けさせるために、彼女はわざと不遜な態度を取り悪びれる様子もないように振舞っていた。そんな演技をしている虞美人のことを、彼はジツと見詰めていた。

その寒空のような蒼い瞳には、悲しみしか浮かんではいないのだが  
……

『アンタが馬鹿みたいに信頼してた私は、始めから裏切るつもりだったの。誰でも信用しようとするなんて痛い目しか見ないんだから、今後は信用する相手は選びなさい——ッ』

彼女は言葉を紡ぎ続けることが出来なかったのだが、それはマス

ターが正面から虞美人のことを抱きしめたからだ。彼の抱擁に性欲や恋などは存在しておらず、親しい相手に行う親愛の意味合いが強い抱擁である。

まるで子供をあやすように虞美人を優しく抱きしめながら、マスターは彼女の本心を見透かすように耳元で呟いた。

『もう大丈夫です。先輩も本当は辛かったのは分かりますから……そんな悲しそうな顔しないで下さい』

『——ッ。わっ、私の話を聞いてたの!? アンタにまた世界を救うなんて重荷を背負わせたのは、間違ひなく私なのよ! アンタはそんな裏切り者を、絶対に許しちゃいけないの……』

まるで自分自身に言い聞かせるように、虞美人は深紅の瞳を涙で潤ませながら、彼に許してはいけないと伝える。マスターと共に人理修復を乗り越えたからこそ、それがどれだけ辛く大変な道のりであったのかを隣でずっと見ていた。

そんな生き地獄のような状況に、自分がまた突き落とされたのだ。彼女は自分が許されてはいけないと主張し、彼のことを突き放そうとする。しかし、人外のような力を発揮することも出来る細腕には、力が入っていなかった。マスターの抱擁を虞美人が振り解くことが出来ないのは、理解者となってくれる人の温かみを失うことが怖いからだ。

彼女は自分では振り払うことが出来ないため、彼から離れるように言葉を紡ぐ。

『お人好しなのも大概にしなさいっ。私はその気になれば……アンタを簡単に殺せることを忘れたの? 私は人じゃない精霊種。まだ人間と同じように思ってるなら、考えが甘すぎるのよ』

『俺の知ってる先輩はいつだって優しくかったから。それにダ・ヴィンチちゃんが言ってたんです。先輩が力を貸してくれなきゃ、カルデアの被害はもっと大きくなっていったって……俺は先輩のことを信じま

す』

『~~~~ツ』

最早、虞美人は言葉を出すことも出来ない。

それはマスターの馬鹿さ加減に呆れている訳では無く、ここまで自分のことを信用してくれる彼のことを人として好きになつてしまふからである。恋愛的な意味合いを含まないそれは、親愛などと呼ばれるものだろう。

(ほつ、本当にどうしようも無い馬鹿よ……。私のことを怖がりもしない、底なしのお人好し。そんなんだから……。厄介な女ばかり寄せてるのよ)

星の触覚としての肉体を持った精霊種である彼女は、永遠の時を生きる中で人間達に裏切られることが何度もあつた。人に対しての不信感を覚え、嫌悪することも多くなつていく。そんな虞美人が信頼を寄せることが出来た者は、片手だけで足りてしまう程にごく僅かである。

彼女は少しだけ自棄を起こしながら、マスターに力を貸すことを決めたのだ。

『……どうなつても知らないから。私にはどうしても叶えたいことがあるから、またアンタのことよりも優先することが絶対にあるわ。……でも、それ以外のことなら先輩として、これからも手を貸して上げる』

『はい、これからも頼りにしてます……。先輩』

誰かと親密になつていくことに切つ掛けがあることは滅多に無いが、少なくとも彼女にとつてのマスターは、この時から数少ない心から信頼が出来る人となつたのだ。

虞美人は本当に控えめに、彼の脇腹に手を添える。抱きしめ合う二人分の影は、一つの影のようになっていた。



——暫くの間、彼女は数百年ぶりの人の温もりを感じる。

深い絆を繋ぐことが出来たマスターと虞美人は、これまで以上の仲の良さを見せていた。

それこそマシユ・キリエライトやジャンヌ・オルタが嫉妬してしまう程であり、彼の部屋に入り浸ることも明らかに多くなっている。ある意味でこれまでずっと警戒していた野良犬のようであったため、一度でも心を許した相手には、相当に近い距離感になってしまいうのだから。

これまで以上にマスターにサーヴァントとして力を貸すようになり、ロシア異聞帯や北欧異聞帯の攻略でも規格外の力を発揮していた。彼に命の危機が訪れた時には、躊躇なく自身の不死性を活かして庇う場面することも多い。

虞美人はマスターが無事であることを確認すると安堵の息を吐いた後に、いつものような不遜な態度を取るのだが、明らかに照れ隠しをしているだけであった。その証拠と言っても良いのかは分からないが、彼の部屋で二人つきりになると、マスターのことを抱きしめながら『本当に後輩が無事で良かったわ』と、口にするのだ。

久方ぶりに人の温もりを”思い出した”虞美人は、無意識に彼と肌を触れ合わせたがるようになっていた。他人から見れば恋人よりも深い関係を築いているようであったが、二人はそう言った男女の関係では無かった。

——それは彼女が”誰か”を強く愛していると、マスターが分かっていたからだろう。

だからこそ二人は、ある意味で恋人同士よりも深い関係を築いているのに、そこから先には進むことが無かったのだ。そんな傍から見ればじれったいと思える、親密な関係を続けていたマスターと虞美人だったが、遂に関係性の変わる出来事が近付いていた。

彼女にとつて”過去”に当たる芥ヒナコが担当となっている、虞美人の愛する■■■■のいる中国異聞帯へと辿り着いたからだ。それもコヤンスカヤによってマスターは毒に犯され、解毒薬を製作しなければ死んでしまうという鬼気迫る状況であった。

新生カルデア一行は解毒薬作成の手がかりを求め、一行は第三の異聞帯へと向かう。

そこは——永久に平穏を享受する。

安寧と調和が続く泰平の大地、幸福への隷属を賭して叛逆の暁星は均霑に輝く。

全ては過ぎし日の夢——求め続けた、たった一つの祈り。

異聞帯の王である中国の”始皇帝”が不老不死を獲得し、統治の果てに世界統一を成し遂げた世界であった。

民たちは己の居住区を決めるような自由こそないが、平和に農作業に従事し、それこそ戦という概念を完全に忘れている程である。

——則ち、世界平定が完全に成し遂げられた世界なのである。

これまでのロシア異聞帯や北欧異聞帯のような衰退した世界とは異なり、安定し過ぎてているが故に剪定されてしまった世界。そこに彼女の愛している■■■が”稼働”しており、ここで芥ヒナコと協力すれば、虞美人の長年の悲願は確実に叶えられることだろう。

彼女は本来ならば第三異聞帯に着いた時点で、マスターのことよりも■■■のことを優先する筈だったのだが——それは出来なかった。せめて彼の命の危機を取り除いてからと、先延ばしにしてしまったからである。

虞美人の心の中でマスターという存在が大きくなっていった結果であり、気付けば■■■と同じ位に大切な人となっていたのだ。自分の起こす歴史の変化によって、彼が死んでしまう可能性が高まることが怖くなり、あの温もりを失うことが耐えられなかった。

自分でさえも完全に矛盾した行動を取っている自覚があり、それでもマスターのことを大切に思う気持ちは嘘偽りが無い。

——その結果、彼のサーヴァントである虞美人は、芥ヒナコと■■■と対峙することとなった。

過去の自分や愛する■■■と戦うことは、彼女も望んでなどいない。本当ならば逆にマスターを倒すために、芥ヒナコ達と轡を並べることがの方が正しかっただろう。

しかし、二度に渡って彼のことを裏切ることが出来なかった。

過去の自分に裏切り者と罵られながら、■■■を止めるために戦闘を行う。気付けば虞美人は大粒の涙を流しており、その隣で猛毒に身体を蝕まれながらも、汎人類史を救うために戦うマスターのために戦った。

遂には過去の自分を打ち倒し、■■■を半壊させ一時的に行動不能になるまで追い詰める。

【驩の逝かざる 奈何すべき 虞や虞や——若を奈何せん】

しかし、未来予知の域にすら達している”高速演算能力”を持つ機械人間である■■■は、芥ヒナコが語った汎人類史の歴史を演算することで”汎人類史の自分”を追体験しながらその想いを理解し、彼女への想いのために立ち上がるとしたのだが——

それとほぼ同時に、目の前にいるカルデアのサーヴァントとなった虞美人のことも理解が出来た。

『——ああ……ようやく理解した』

彼女が未だ自分のことを深く愛しながら、孤独を癒してくれたマスターのことを大切に想っていることを高速演算にて理解したのだ。虞美人が涙を流しながらも戦っていたのは、心が裂けんばかりに苦悩していたからである、と。

『虞よ……汝は』

どちらを選ぶことも本当は出来ておらず、ただ目の前の彼を死から遠ざけるために、戦つたに過ぎないことを——そして、今にも全壊しそうな自分を助けたいと思っていること。

どうしようも無い程に愚かな行為であるのに、それこそが彼女の優しさの表れであった。

そんな虞美人の隣には、今にも倒れそうになりながらもこちらを強い眼差しで見詰める、彼女のマスター”藤丸 立香”がいる。虞美人の孤独を理解しながら、傍に居ようとする者。それは汎人類史の自分のようにあり、彼ならば彼女を独りにはしないと演算によって理解が出来た。

——よって■■は、”項羽”は、安心をしたのだ。

『汝は——安息を、静かなる日々を過ごせる者を、悠久の時を経て見付けたのだな……。ならば汝の未来に、我が手が届かなくとも——悔いは無し』

『こつ、項羽様——私は……私はっ』

項羽は傍に近付こうとする虞美人を、右手を伸ばすことで制す。

それは彼女の幸せを願うからこそであり、また悲劇的な別れが待っている自分と在るべきでは無いと、押し止めたのだ。もとよりこの半

壊した躯体は、カルデアに未来を託すことを決定していた。

憂いであつた虞美人を任せることが出来る人物を見付けた時点で、これ以上の行動を起こすことが出来ないのだ。項羽は辛うじて動かせる口を動かし、最期となる言の葉を紡いだ。

『カルデアのマスター……藤丸 立香よ。………虞を——我が愛した伴侶を……永久に頼もう。我が叶わなかつた願いを——』

マスターはその言葉に一瞬の驚きを見せたが、直ぐに領きをもつて応えた。この場では彼の言葉は無粋であり、後は行動でのみ示す他には無いのだ。

それを見ていた項羽は安堵と共に微笑む。戦闘躯体としての機能が停止していく中で、彼は最期まで愛した妻の姿をその眼に焼き付け続ける。汎人類史で悔いや憂いを残して死んでいった項羽だったが、異聞帯での終わりは悔いの無いものであつた。

止まっていく思考の中で、彼は妻の幸せを願い続ける。

(——虞よ………汝に………幸福を)

斯くして西楚の霸王とまで呼ばれた項羽は、心安らかなままに活動を停止する。その表情は驚くほどに穏やかであり、戦闘に敗北した者の表情では無いことは確かであつた。

——二千年以上に渡つた悲劇の恋は、幸福な終わりを迎えたのだ。

番外編：虞美人草は淫蕩に耽る―5

「——いつ、後輩っ♡ あっ♡♡ わっ、私とエッチしてるのに、何考え事なんてしてるのよお……っ♡♡♡ ——んあっ♡♡」

快楽で蕩けながらも非難の視線をマスターに向ける虞美人は、今も自分の秘所を貫いている彼の極太で長いペニスによる、開発済みの子宮口のポルチ才責めに嬌声を上げていた。

「あっ♡♡♡ あひっ♡♡♡ どっ、どうせ他の女のことでもっ♡♡♡ んっ♡♡♡ かつ、かんがえてたんでしょっ♡♡♡ んひっ♡♡♡ んっ♡♡♡ あう……っ♡♡♡」

二人だけでのセックスの時には、自分だけに集中して欲しいという”いじらしさ”から、目の前の彼のことを怒っているのだ。

しかし、今の虞美人はマスターの胡坐の上に載った状態であり、コアラのように両手両足を使って彼の身体にしがみ付いている。非難する声すらもトロトロに蕩けた蜂蜜のような甘い声であるため、マスターには求愛の言葉にしか聞こえていなかった。

そんな愛おしいと感じる彼女の機嫌を取るために、彼は微笑んだ後に瑞々しい桜色の唇を奪う。

「ほっ、本当に淫獣なんだか——んむっ♡♡♡ ちゅう……っ♡♡♡ ちゆる♡♡♡ ちゆるるっ♡♡♡ ちゅう……っ♡♡♡」

命のゆりかごである子宮をペニスでズンズンと突き上げられながら揺らされ、言葉よりも『愛している』と伝えているキスを同時に受ける虞美人は、膣をキュンキュンと甘えるように締め付けながら、キスを受け入れることしか出来ない。

この時点で彼女の怒りも完全に消え去っているのだが、虞美人がチヨロイというよりも、マスターの性愛術が上達し過ぎているせい

だ。何事においても経験が多ければ多い程、上達していくのは当然のことだろう。

多くの女性と数え切れない程の経験を持っている彼は、性や愛に関しては並大抵の相手では敵わないのだ。タツプリと彼女の甘い唾液や唇を味わったマスターは、ゆつくりと唇を離して先程まで考えていたことを説明する。

「——んっ、はぁ……第三異間帯のことを少し思い出してたんです。俺は項羽さんに先輩のことを”任された”から、ちゃんとしなないと考えてました」

「~~~~~」

彼は虞美人の快感や幸福感に潤む朱色の瞳をジッと見詰めながら、彼女の背中に両腕を回して強く抱きしめる。それはまるでこれからも絶対に離さないと伝えているようでもあり、虞美人は既に真っ赤に染まっている顔を更に紅潮させる。

気恥ずかしさから何か憎まれ口でも叩こうとするが、言葉が出てこず口を金魚のようにパクパクとすることしか出来ない。

そんな可愛らしい姿を見せてくれる彼女に、マスターは男としての責任の取り方を口にする。遅かれ早かれではあり、本当は虞美人が孕んだ後に伝えるつもりだったのだが、募った感情を口にしてしまう。

「俺と結婚して下さい。これからもずっと一緒に居たいです」

「——ツ♡♡♡ ばっ、バカっ♡♡ セックスしながら、プロポーズするなあ……っ♡」

彼女は顔から湯気でも出てしまいそうな程に赤面しており、頭の中ではマスターのプロポーズが何度もリフレインしている。勿論、項羽との三度目の別れに落ち込んでいた自分を彼が慰める中で、今の愛し合いながら子作りセックスに耽るようになっていたため、将来的には”結婚”も考えてはいた。





意味で虞美人の孤独は無くなるのだ。星が終わるまでの永遠のような時間を愛する者と共に、歩むことが出来てしまう。

それは彼女が数千年の時を経ても得られなかった夢であり、感極まってしまいうのも仕方ないことであった。

「……………っ♡♡♡ ほんとうに……………ば……………かあ♡♡」

気付けば虞美人の目から、大粒の涙が溢れていた。

そのキラキラと宝石のように輝く涙は、間違いなく嬉し涙と呼ばれる類のものであり、彼女の心が幸福感で満たされていることの証である。肩を震わせている虞美人の背中を、マスターはポンポンと優しく叩いた。

彼女の熟した林檎のように真っ赤な耳元で、安心させるような声を掛ける。

「大丈夫です。これからは俺が先輩を支えます」

「……………っ♡♡♡」

その気遣いにすら胸がトクントクンと高鳴ってしまい、照れ隠しに彼女はやめさせようとする。しかし、抱きしめられている状態では身体を離すことも出来ないため、彼にされるがままになるしか無いのだ。

せめてもの抵抗でこれまでよりも甘ったるい声で、反論の言葉を口にしようとする。

「ばか……………っ♡♡♡ こっ、子供扱いしないでよ……………っ♡♡♡ んあっ♡♡♡ あっ♡♡♡ わっ、私の方が先輩でっ♡♡♡ ひう……………っ♡♡♡ 長く生きてるんだからあ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ——っ♡♡♡」

下腹部からジンジンと痛い位に疼きが走り、これまでよりも快感が高まっていた。秘所からもこれまでよりも粘っこい愛蜜が溢れ、虞美

人の肉体は確実に子を作るための準備を始めてしまっている。

幸せと快感がドロドロに混ざり合い、彼女の心と体は蕩けていた。

最早、答えは分かり切っていることなのだが、マスターは彼女にプロポーズの返答を求めた。

「先輩の答えを聞かせて下さい。俺と結婚してくださいませるか？」

「——るっ♡♡ するっ♡ するわよっ♡♡♡ アンタと……」立香  
”と結婚する♡♡ ……ずっと一緒にいなさいよ♡♡♡”

半ばヤケクソに虞美人は彼と結婚することを伝え、これからもずっと傍にいたいと口にする。その言葉を聞いていたマスターは嬉しそうに笑った後に、彼女の瑞々しい唇を再び奪う。

「——んむっ♡♡♡ ちゅう……っ♡♡ ちゅるるっ♡♡ じゅるっ♡♡ ぢゅるるるるっ♡♡ じゅずずずずっ♡♡♡ じゅるるるるるるっ♡♡ ——じゅるるるるるるっ♡♡♡」

結婚式でする誓いのキスとは、軽いリップキスである。しかし、今の二人が行っているのは、唾液を啜り合うディープキスであった。

お互いの好意や愛を伝え合うキスが、唇を触れ合わせるだけでは足りる筈も無かった。自然と二人の唇は開かれ、唾液に濡れた舌が伸ばされる。二人は舌先は躊躇無く触れ合い、蛞蝓同士の交尾のように絡み合う。

口内でイヤらしい水音が鳴り響き、その水音は大きくなっていく。

「ぢゅるるるるるるっ♡♡♡ じゅぶっ♡♡ ……んぐっ♡♡♡ ちゅっ♡♡ じゅちゅう♡♡♡ ちゅるるるるるるっ♡♡ じゅるるるるるるるるるるるるっ♡♡♡ ——じゅるるるるるるっ♡♡♡」

お互いの唾液を舌で混ぜ合わせ、喉をコクコクと鳴らして嚥下する。口端からも泡立った唾液が零れるが、それを気にすることすら出

来ない程に、デープキスに夢中になってしまう。

相手の鼻息が顔に吹き掛かるが、それすら心地良いと感じていた。タツプリと口で行う交尾のようなキスを交わした二人は、何方とも無く自然と唇を離していく。唇が離れてしまうことを惜しむように、混ざり合った唾液の糸が唇と唇の間で繋がっている。

「はあ……っ♡♡ はあーっ♡♡♡♡ ——はあッ♡♡」

虞美人とマスターは荒い呼吸を吐きながらも、相手の瞳を少しも逸らすこと無く見詰めていた。彼らの朱と蒼の瞳には、もっと愛し合いたいという情欲の炎が灯っている。心なしか彼女は先程からお尻を揺らしており、今も膣を貫いているペニスに奉仕をしていた。

彼は怒張したペニスをキュンキュンと締め付けてくる彼女の膣の感触を感じながら、虞美人の口から聞きたかった言葉を言って欲しいとお願いする。

「先輩にお願いがあるんですけど……好きって言って欲しいです。これまで一回も聞いたこと無いから、先輩の好きって言葉が聞きたいです」

「~~~~~♡♡♡♡」

これまでに何度も口付けを交わし、愛の結晶である子供を作るための種付けセックスを行っているが、マスターが言うように虞美人が『愛してる』や『好き』という言葉を口にしたことが無かった。

勿論、彼女は彼のことを愛しているのだが、俗に言うツンデレに近い素直になれないせい性格のせいで、いつも『項羽様の次なんだから……ツ♡♡♡』と、好意をキチンと口にすることが出来ない。

しかし、今のプロポーズを受け入れた彼女は、羞恥心から少しだけ戸惑った後に、蚊の鳴くような声で言った。最初は小さかった声も一度でも堰を切れば、ダムが決壊した時のように大きくなる。

気が付けば虞美人は、マスターへの愛を大声で叫んでいた。

「……好き♡♡ 好きよっ♡ 立香のことが大好きっ♡♡ 立香との赤ちやんならいつぱい欲しいから、今まで沢山セックスしてたのっ♡♡ 恥ずかしくて言えなかっただけで……愛してる♡♡♡♡」

——ビキビキっ

「んひい——っっ♡♡♡♡」

彼女の好きや愛しているという言葉聞いた彼は、長大なペニスに更なる血流が集まってしまう。虞美人の膺の中でペニスが更に大きくなり、既に押し潰されていた子宮が更に圧迫される。

それ程までに虞美人の愛の言葉とは破棄力があり、彼の理性のようなものを一気に蒸発させた。

彼女はいきなり訪れたポルチオへの強い快感に、背中を弓のように反らせてしまう。尿道口からも潮と呼ばれる体液が噴き出て、マスターの下腹部に水音を立てながら掛けられる。

「——きゃっ♡♡♡♡」

彼は虞美人をベッドの上に押し倒し、これまでの弱い快感に耽溺する対面座位から、一般的な正常位の体勢へと変化する。甘い蜜のような艶のある長めの茶髪が、純白のベッドの上に広がっていた。

マスターは上半身を彼女の方へと倒し、獣が獲物を押さえ付けるように覆い被さる。彼の逞しい胸板に虞美人の大きな乳房がぐにゆりと潰れ、互いの心音が直に伝わってしまうのでは無いかと思う程に密着していた。

彼女の紅玉のように美しい瞳を見詰めながら、マスターは絶対に孕ませると宣言する。

「今から絶対に孕ませます。俺と”虞美人”の赤ちやん作りましょ

う」

「~~~~~つつつ♡♡♡♡♡ いっ、いっばい孕ませ  
てっ♡♡ 立香との赤ちゃん生みたい……っ♡♡♡ ———あっ♡♡」

彼はこれまで何度も行ってきた、子供を作るためのピストン運動を開始した。

ずっと膣の奥深くまで突き刺さっていたペニスが、ズルズルと引き抜かれていく。握り拳のような大きな亀頭に相応しい、親指よりも深い段差のあるカリ首が膣襞をゴリゴリと掘削する。

「いひっ♡♡♡ あっ♡♡ あぐっ♡♡♡ おっ、おまんこっ♡♡ いっ♡♡♡ いひっ♡♡♡ すっ、すき♡♡ りつかあ……っ♡♡♡  
ああ——っっ♡♡♡」

何度味わっても慣れることの無い快感に、虞美人は甘ったるい嬌声を上げながら、マスターへの愛の言葉を口にした。それに反応して彼のペニスはビクビクと大きく震え、腰を動かそうとする力も更に強くなる。

性感帯である腫れぼったいG—スポットを容赦無く掘削し、膣から抜ける寸前まで引き抜き、今度は怒張したペニスが奥の小部屋を目標して突き進んでいく。柔らかい膣肉や膣襞が硬いペニスが拒むことが出来る筈も無く、簡単に子宮口と亀頭の先端が触れ合う。

「いっ♡♡♡ いひっ♡♡ あんっ♡♡♡ あっ♡♡♡ おくっ♡♡ りっ、  
りっかのオチンポお……っ♡♡♡ 奥までえ♡♡♡ あうっ♡♡♡  
あっ♡♡ ———んあっ♡♡♡」

腰の動きに合わせて長いペニスが子宮を更に奥へと押し上げ、限界まで奥まで追い詰められた後には、今もキュンキュンと疼いている子宮が押し潰される。これまでの子作り交尾で開発され切った子宮は、ポルチオを刺激される快感を伝えていた。

(いっ♡♡♡ 意識飛ぶっ♡♡♡ 立香のオチンポ、いつもより太くて長い…♡♡♡ ツ♡♡♡ 好きって言おうとオマンコ締まるう♡♡♡ こっ、こんな♡♡♡ イくくくっ♡♡♡)

メスのフェロモンをタツプリと含んだ潮を何度も噴き出しながら、彼女は気の遠くなるような絶頂を繰り返していた。

虞美人は蜂蜜のように甘ったるい嬌声を上げながら、脊髄から脳に向かつて走る電気のような快感に、両手でシーツを力強く握りしめている。後頭部をベッドに押し付けるように首を反らせる彼女の白玉のような喉は、大量に掻いた汗で艶めかしい光沢を放っていた。

杭を打つような力強いピストンをマスターは続けながら、虞美人の汗に濡れる美しい首筋に舌を這わせる。塩分を含んだ汗のしょっぱい味と共に、発情したメスのフェロモンを伴う甘酸っぱいニオイが口の中で広がった。

彼は舌を這わせるだけでは無く、彼は甘噛みをして歯を立てたり、唇でちゅうつと吸い付く。彼女の白い首筋に薄っすらとした歯型や赤くなった吸い痕が付いていく。それは間違いなくマーキングのような行為であり、自分のモノとなるのだと刻んでいるのだ。

「んひいっ♡♡♡ くっ、くびい…♡♡♡ いっ♡♡♡ いひっ♡♡♡ りっ、りつかあっ♡♡♡ いっ♡♡♡ いくっ♡♡♡ いくいくいく  
—っ♡♡♡ イくくくっ♡♡♡

部屋全体に響き渡るような絶頂の声を上げるのだが、マスターは虞美人が孕むまで交尾を止めるつもりが毛頭なかった。これまでよりも腰の動きは更に激しくなり、部屋中に恥骨同士のぶつかり合う破裂音が響き渡る。

—パンツ！ パンっ！！ パンツ！ パンツ!!!

「ひっ♡♡♡ ひい…♡♡♡ ツ♡♡♡ んあ♡♡♡ あっ♡♡♡ あ♡♡♡  
ああっ♡♡♡ ひぐう…♡♡♡ おっ♡♡♡ おまんこっ♡♡♡

こっ、こわれりゅ……っ♡♡♡ あっ♡ あっ♡ う♡♡ んうっ♡♡  
♡♡ — あひっ♡♡♡♡

ペニスが子宮をペチャンコになるまで押し潰す度に、肺の空気が抜けると共に男性の鼓膜を蕩けさせる嬌声が口から零れる。ポルチオでの絶頂を続けているせいで、その状態から戻って来れない虞美人は、快楽という名で出来た濁流に押し流されてしまう。

意識が何度も飛びそうになるのだが、膣壁を掘削される鋭い快感に意識が呼び戻される。何度も何度もそんなことを繰り返しながら、愛する旦那様に種付けをして貰うために膣を締め付け、子宮口で亀頭の先端に吸い付き甘えることしか出来ない。

彼女にとつて永遠にも感じられた杭打ちピストンであったが、マスターがマーキングだらけの首筋から口を離して、射精が近いことを告げることで終わりが訪れる。

「——はあっ。虞美人、射精す！ 虞美人のナカに射精すっ！」  
「~~~~~っ~~~~~っ~~~~~♡♡♡ だっ、だしてっ♡♡ だいたすきなッ♡♡ りっ、りつかのせーえきッ♡♡ いっ、いっばいおくにい……っ♡♡♡ い……っ♡♡♡」

——パンツ！ パンツ！！ パンっっっ！！

「孕めっ!!」

「いっひ——っっ♡♡♡」

今までで一番の破裂音と共に、子宮口に深々と亀頭の先端が突き刺さる。余りの腰を打ち付ける力強さに虞美人のお尻はシートから浮いており、ペニスと腰だけで下半身が持ち上げられている。

そして、野球ボールよりも更に大きな睾丸の中で作られた大量の精液が、彼女の小さな子宮内と言う小部屋に直接、解き放たれた。比喩抜きに数百ミリリットルの精液が、虞美人の子宮内を満たしていく。





とを本能的に理解する。そして、天にも昇るような幸福感や快感と共に、ギリギリで保っていた意識を手放すのだった。

(でっ、デキ……たあ♡♡♡ りつか……とのツ♡♡♡ あか……ちゃん♡♡♡)

精液で下腹部を膨らませる彼女の姿は、そう遠くない未来の姿のようである。

「……愛しているよ」

意識を失っている虞美人の唇に、彼は優しくキスを落とす。そして自身も眠りへと落ちるのであった。項羽との約束を守るように、マスターは彼女を抱きしめ続ける。

——永遠の時を生きる二人の人生が幸せに満ちていたことは、語るまでも無いことだろう。

幕間：花の魔術師の助言

『パンツ♡♡ パンツ♡♡♡♡』と、部屋中に響き渡る破裂音。

柔らかな物体に硬い何かがつかつた時のような音は、言葉では完全に表現することは出来ないが、耳に心地良い音であった。鼓膜を揺らすその破裂音は、何故かイヤらしい淫音であると感じてしまう。

その淫らな破裂音の発生源を辿れば、ベッドの上で裸の男女が交尾に耽っていた。女は獣のような四つん這いの体勢になっており、膝立ちになった青年が女の桃尻に密着させるように腰を押し付けている。まるでおとぎ話の中から出てきたかのような美しい白髪の美女が、黒髪の青年に激しく犯されていた。

黒と白の髪の色合いのコントラストと、硬さと柔らかさという男女の肉体の差が如実に表れている。有名な画家がこの光景を絵として描けば、立派な芸術作品として成立しそうであった。

二人がまぐわう体勢は、一般的に後背位と呼ばれる体位である。男が一方的に膣や子宮を蹂躪し尽くし、女を屈服させるための体位であった。淫らな表情を浮かべている女が、今の状態を嫌がっていないことは考えるまでも無い。

——パンツ♡ パンツ♡♡♡♡ パんっ♡♡

「っ♡♡♡♡——っ♡♡♡♡」

女性らしい曲線を描く桃尻の柔らかい尻タブに、男の腰が力強く叩き付けられている。絹糸で編まれた純白の布よりも白い肌をしている桃尻は、熟した林檎のように真っ赤に染まり腫れ上がっていた。

人によつては痛々しいと思うかも知れないが、男ならば大抵はイヤ

らしいやエロいと感じてしまうだろう。

元は女性が羨むような美尻であったのだが、今では男が欲情する肉付きの良いデカ尻に変わってしまったている。性的虐待と言い換えても良い腰打ちピストンを何度も行われ、ハリのある小振りな形の良いお尻が育ち、元気な赤ちゃんの産めそうな安産型のデカ尻になったのだ。

（ぼっ、”ボク”のお尻い……っ♡♡♡ またおつきくなっっちゃうっ♡♡）

本人は大きくなったお尻や乳房を気にしているのだが、男の愛撫とセックスによつて、今後も男が好きなのスケベボディが変わっていくことが確定している。今もお尻の尻タブが真っ赤に腫れているため、現在進行形で更に大きなデカ尻に育てられているのだ。

男の腰が叩き付けられる度に、女の大きく柔らかな尻肉が波打っている。お尻の浮かんだ大粒の汗が、キラキラとした雫となって飛び散っていた。照明に照らされる様子は、宝石が飛び散っているように見える。

イヤらしいのに幻想的に感じるのは、彼女の浮世離れた美しさによるものだ。

その淫らなまぐわいの光景は、表現しようが無い程に淫らであり、本気のセックスでしかこのような光景にはならないだろう。従順なメスを屈強なおスが貪るといふ、原始的で絶対の上下関係がそこには存在していた。

部屋中に女の甘ったるい汗のニオイが充満しており、何故か”花畑”の中にいると錯覚してしまう。彼女は汗以外にも潮や唾液、涙や尿をお漏らししているのだが、その全ての体液が花のような甘く良い香りがしていた。

そんな”花の妖精”のように美しいメスは、必死になって快感に耐えている。

「——お♡っ♡♡ お♡お♡お♡♡♡♡♡ お♡ひ♡い♡い♡——っ♡♡♡」





ある意味でローションすら不要な、お手軽で便利なオナホのように女は扱われている。お口を使ったお掃除フェラ付きの極上メスオナホは、日常的に身体を持ち上げられ、駅弁スタイルで犯されたりしている様の一端が垣間見えてしまう。

——それを悦んでしまう彼女は、どうしようも無いマゾメスであった。

女の細腕よりも遙かに太く長いペニスで、子宮口を『どちゅんっ♡どちゅんっ♡♡♡』と、突かれる度に絶頂してしまう彼女は、快樂と幸福感に蕩けたメスの顔をしている。淫乱な娼婦でさえ気恥ずかしくなってしまう淫らな表情は、オスを更に興奮させてしまう。

蕩けてしまいそうな表情をしながら『許してっ♡♡♡ 許して……っ♡♡』と、口から漏れている言葉はセックスを止めてと懇願している。しかし、快樂に蕩けた声は、どんな蜜よりも甘ったるかかった。例えるならば彼女の出している声は、砂糖をタツプリと使ったパンケーキに、大量の蜂蜜を浸る位に掛けるような甘さである。唇の端から唾液を垂らす半開きになった口から、甘ったるいメープルシロップのような声を出していた。

雄を興奮させる特定の周波数と、言ったら良いのだろうか。

本人は全く意識していないのだが、言葉の外側で『もつとっ♡♡もつと激しくイジメてっ♡♡』と、”ご主人様”へのセックスを懇願している。優しくして貰えない性行為に表情や声色で悦び、雄を更に興奮させているのだ。

表情と声でオスを誘っているが故に、女が大きな声を上げて哭けば哭く程に交尾は激しくなっていく。

「イゝ——っッ♡♡♡ イゝう……っ♡♡ イゝ………クう……ッ♡♡ イゝ~~~~~っッ♡♡♡♡」

絶頂報告と言う名の悲鳴を上げながら、彼女は次の絶頂を迎えるのだ。

「——あつ♡♡ あひっ♡♡ ボク壊れちゃう……っ♡♡♡♡ あぐっ♡♡  
♡♡ ごっつ、ご主人様のオチンポで壊れりゆう♡——っ♡♡♡♡♡♡  
イツ♡♡♡ いい♡♡ ツ♡♡♡♡ ——いひいい♡♡ つっ♡♡♡♡♡♡」

雪よりも白く美しい光沢を放つ長髪をベッドの上で揺らす女——  
”花の魔術師 マーリン”は、心から愛している”ご主人様”である  
藤丸 立香に、既に三つ子を孕んだ子宮をイジメられている。

お腹の中にいる赤ちゃんと大量の精液によって、普段の妊娠六か月  
付近の大ききのボテ腹から更に大きく膨らんでいた。重たくなった  
お腹を揺らされながら、四つん這いの体勢で獣のように犯されてい  
る。

（あつ、赤ちゃんデカ腹♡♡♡♡ ご主人様の精液でタップタップですう  
……っ♡♡♡♡ ボクと赤ちゃんが夢魔じゃ無かったら、死んでたか  
もおっ♡♡♡ あ♡♡ ツ♡♡ あ♡♡ ひ——っ♡♡♡♡♡♡）

意識すら失ってしまいそうな強い快樂由来の涙を流しながら、彼女は  
子宮の中にいる赤ちゃん三人と、マスターの長大なペニスの間に挟  
まれる。柔らかな子宮口を押し潰されていた。

完全に逃げ場を失ってしまった子宮は、快感の逃げ場所も無くなっ  
ている。

なまじ他の英霊とは違う”生身”であるマーリンは、強い神秘を内  
包しているがために、丈夫な肉体は強い快感を伝えるだけであった。  
彼女は美しい白髪を振り乱しながら、強すぎる快樂に喘ぐことしか出  
来ない。

「ボクらの赤ちゃんとご主人様のオチンポにい……っ♡♡♡♡ ぼっ、





られなくても彼のイヤらしい指使いを見るだけで、自分の身体を弄られた時のことを思い出して快感を覚える。

そんなドスケベでイヤらしいメスは、更に気持ち良いことをされてしまう。

彼が腕と同じ位の大きさや長さのありそうなペニスの亀頭、その先端を子宮口にグリグリと押し付けていた。蕩け切ったメスの顔をする彼女を更なる快樂の沼へと落とすために、性感帯として開発され切ったポルチオを刺激している。

下品な濁音の混じった絶頂報告は、どうしようも無い程に淫らであつた。

「——っ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっくっ♡♡♡ おっくグリグリりいっ…っっ♡♡♡ イックッ♡♡♡ まだイっっちっやうっ…っっ♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ —っっ♡♡♡」

ポルチオアクメにマーリンは全身をビクビクと震わせ、粘っこく泡立った蜜を『びゅっ♡♡♡ びゅっ♡♡♡』と、噴き出しながら溢れさせていた。背中を弓のように反らせながら、顔が天井を向くまで首を反らせている。

紫水晶のように美しい瞳を蜂蜜のようにドロドロと蕩けさせ、開いた口から唾液濡れの舌先を突き出す。

脳髓を焼くような快樂に耽溺する彼女に対して、マスターは更なる責めをする。

「…俺達の赤ちゃんにも、ママがドスケベだつてバレてるね？ お腹の中で育ってる赤ちゃんに毎日、愛し合ってますって教えてる。それに夢の中でも…自分からおねだりして、朝までセックスしてるんだよ。それって——」

ここで彼は少しだけ間を置いてから、止めを刺すようにマーリンに言った。



も、依存し切っている存在になっていた。

普段のマスターと彼女の関係性を言葉にして表すなら、ご主人様と性奴隷が一番近いだろう。実際にマーリンは彼のことを『ご主人様……っ♡♡』と、心酔するように呼んでいるのだ。

雄として屈強過ぎる彼に三つ子を孕まされてから、彼女は性処理道具であるオナホルルのように、乱暴で激しく扱われるのが大好きなマゾメスになってしまっていた。

それこそマスターにされるのなら、全裸に首輪だけを着用させられ、カルデア中を”お散歩”されても悦んではしまうMっ気があった。他にも連続絶頂で膣の締め付けが弱くなれば、お仕置きのようにお尻を平手で叩かれたり、愛している彼の目の前で自慰行為をするのも悦んでしまう。

因みに本当に”夜のお散歩”をしている、女性サーヴァントが一定数いるらしい。不思議なことに普段から気の強い女性の方が、こう言った倒錯的で被虐趣味なメスになることが多かったりする。

——普段とのギャップが強い程、マスターが興奮するのも原因かもしれない。

説明したようにマゾっ気の強いマーリンではあるのだが、イチヤラブエッチをする”夫婦”な関係性も好きなのである。こうやって彼に耳元で”ママ”と囁かれるだけで、自分がお嫁さんであり三人もの赤ちゃんを孕んでいることを、強く意識させられてしまう。

そして、今のように母親としての幸せとマゾメスとしての快樂を同時に与えられると、彼女の脳ミソは更に蕩けてしまう。風邪を引いた時や大量のお酒を飲んだ時よりも、頭が茹っつてしまえばフワフワとした気持ち良さを感じるのだ。

(あゝ~~~~っ♡♡♡ ご主人様にママって言われると、ボクの頭……バカになっちゃっ♡♡ おまんこキュンキュン止まらなくてっ♡♡ セックスもつと気持ち良くなっちゃっ……っ♡♡♡)

今回のように彼から『ママ』と呼ばれたりすると、彼から普段から



は、自分達のママである夢魔が、人間のパパにメロメロであることが知られていた。

(ボクとご主人様の赤ちゃんに、ラブラブ交尾バレてるう……っ♡♡♡  
♡ ママが淫乱なドスケベ女だつてえ♡♡♡ パパからご褒美お射  
精っ♡♡ もつ、貫わないと死んじやう……っ♡♡♡ パパに飼われ  
てるメスオナホだつて、赤ちゃんにバレてるう♡♡♡ ん”あくく  
くあ”っっ”♡♡♡)

実際に夢魔の血を引く三つ子達は、既に自意識を得ている。

現実どころか夢の中ですら母親であるマーリンが、父親のお嫁さんオナホにされていることが完全にバレていた。両親の獣のまぐわいのように激しいのに甘つたるい情事を毎晩のように見せられ、メスとしての”幸せ”を生まれる前から教えられている。

——そして、自分達が育つための栄養源がママと同じ、パパの精液になってしまっていた。

本来ならば多数の人間達から”栄養”を貰い、夢魔の子供は生まれてくる。

しかし、種族的に”多淫”であることがデフォルトであるのに、マーリンはご主人様に徹底的にハメ潰されて専用メス奴隷にされてしまっていた。そのために彼女は、マスター以外から栄養を貰うことが一度として無くなっている。

従順で一途なマゾメスであるがために、純度100パーセントの彼の精が栄養源なのだ。

(んひっ♡♡ ボクがご主人様に貰った精液っ♡♡♡ あつ、赤ちゃんに”食べられてる”う♡♡ 絶対にボクと同じドスケベメスになるっ♡♡♡ きつ、きつと子供にご主人様っ♡♡ とつ、取られちやう……っ♡♡♡)

現在進行形で子宮内に大量に注がれた精液を”娘達”は、栄養へと変えてすくすくと育っている。実際に受精してから僅か二ヶ月程度であるのにも関わらず、妊娠して半年程のお腹の膨らみに変わっていた。



部屋全体に響くような絶叫が包み、彼女は喉が裂けんばかりの声を出す。

マーリンと赤ちゃん三人でも吸収し切れない大量の精液が注ぎ込まれ、元から大きなお腹が更に膨らむ。潮と尿の混じっているであろう体液を尿道口から大量に噴き出しているが、そんな事では快感を逃がすことが出来ない。

(ぼっ、ボクもツ♡♡♡ 赤ちゃんもお……っ♡♡ どっ、ドロドロ精液で溺れるうツ♡♡♡)

そんな快樂の荒波に吞まれる彼女に対して、マスターは更に快感を与えようと腰を動かし出す。長大なペニスで精液を膣肉や膣壁を塗り込みながら、未だ深過ぎる絶頂の余韻から抜け出せていないマーリンに、彼は言い聞かせるように囁いた。

「——まだまだ射精すから、一緒に子育て頑張ろうね？」

「……………っ♡♡ ……うっ♡♡♡」

言葉を返すことも出来ない彼女は、更なる快樂の沼へと沈んでいくのだ。

「——んちゅツ♡♡♡ んう……っ♡♡ んツ♡ ちゅう……っ♡」

部屋全体が、退廃的で淫靡な雰囲気にも包まれている。

マーリンとマスターの二人は、初々しい恋人同士がするようなキス

をしていた。

今夜だけでも数え切れない程の精を注がれた彼女のお腹は、性行為を始める前よりも更に膨らんでいる。子宮やお尻の孔の中には、未だ大量の精液が溜まっていた。

——ごぶツ♡♡♡ ごぶぶつ♡♡♡ ごぼツ♡♡♡

白濁とした精液が両方の穴から、ゴプゴプと卑猥な音を立てながら吐き出している。ペニスが挿入されていないのに拡がったままの穴は、セックスの激しさを物語っていた。

今日も壊れてしまう寸前まで犯し尽くされ、淫らなヒツプアツプをしてしまったが、彼女の剥きたての卵のような肌は艶々としている。母子共に極上の栄養を貰い、心身共に健康体そのものであった。

ずつとキスを続けていた二人は、ゆつくりと唇同士を離す。

懐いた子猫のようにマスターに擦り着きながら、恋する乙女の表情をするマーリンは、甘えた声で感謝の言葉を口にする。両手では三人の赤ちゃんが眠っているお腹を優しく撫でていた。

「んむっ♡んっ♡——ふはあ……っ♡♡♡ ご主人様あっ♡♡♡

ボクも赤ちゃんも、いっぱいごはん貰って幸せですよ♡♡♡」

「俺もマーリンと気持ち良くなれて、本当に嬉しいよ」

セックスの最中は責めつ気の強いマスターだったが、普段は優しい好青年なのである。そのギャップに女性サーヴァント達が、墮とされているのだが、意図的なことでは無いのでどうしようも無いだろう。

そんな天然の誑しである彼に対して、マーリンは思い出したかのように忠告をする。

「あつー♡♡ ご主人様なら絶対にどうにかなるんだけど、気を付けて欲しいことがあるんだ……っ♡♡♡ モルガンも言ってたんだけど”アルビオン”……メリュジーヌが少し”無茶”をするかも知れないんだっ♡♡♡」

「メリュジーヌが？」



「うんっ♡♡ メリユジーヌはご主人様のことかボク等と同じように大好きだけど、最強種は傲慢で我が儘だから……絶対に独占したくなっちゃうんだっ♡♡♡ ……それにもう一つの”名前”が寝取りの権化だから——ねっ♡♡」

彼女は『だから——』と続け、彼にしか出来ない解決策を口にする。

「——メリユジーヌもボクと同じように、ご主人様の”メス”に調教してあげてっ♡♡♡ ……んむっ♡♡」

最強種が墮ちることを疑っていないマーリンは、マスターに再びキスを迫るのであった。

## 番外編：最強種は屈服を覚える――1

――これは”星に帰り損ねた童”が最期を迎えた後、無の海を飛び続けた後の”夢物語”である。

虹色に光り輝く召喚サークルの中心から、目も開けていられなくなる程の眩い光と共に、近代的にも感じられる蒼を基調とした甲冑を身に纏った白髪の少女が現れた。伊吹童子やヴリトラのような人外特有の雰囲気醸し出している彼女は、見た目だけなら華奢で可愛い容姿をしている。

その可愛い容姿に加えて、身長も小学校高学年程度しか無いため、庇護欲と呼ばれるものを掻き立てるのだろう。それはウサギやハムスターのような小動物に抱く感情と、非常に良く似ているのかも知れない。

少女はその特殊な誕生や経歴から合計で”三つの名前”があるのだが、今の鎧を身に纏った彼女は”妖精騎士 ランスロット”の名を名乗るのに相応しい出で立ちであった。素人目にも一点物だと判別の出来る蒼色の鎧が、与える印象も大きく影響しているのだと思うが、可愛い容姿の少女に凛々しさのようなものを感じてしまう。流線形の鎧の上からでも分かる細くしなやかな両腕には、小楯のよくな武装がそれぞれ取り付けられているのだが、これは彼女自身の”魔力”や”外皮”によって作られた”アロنداイトの鞘”である。少女が両手に装備している”二つのアロنداイト”は贋作である。

正式な武装の名前も『妖精剣アロنداイト』であり、本物の所有者である”円卓最強の騎士 ランスロット”の名前を”妖精國の女王モルガン”から拝命したからこそ”仮の宝具”なのだ。本物よりも威力が低い分、手数と小回りが良く射撃武器のような剣である。

――彼女に円卓最強の騎士の名前を授けたモルガンとしては、最強の騎士という意味も確かにあるのだが、”悪い意味”でもランスロットに似通っていると思えば命させたようだが……

汎人類史とは違う歴史を辿った閉ざされた世界——異聞帯 妖精國に於いては、ランスロットの名を拝命した少女だが、実力では正史の円卓最強の騎士に劣らないどころか、お世辞を抜きにして数多の英雄達の中でも一、二を争う強さを誇っている。

それは彼女という存在そのものが、人間とは比べものにならない程の”神秘”を秘めているからだろう。

”世界を滅ぼす獣 ビースト”を倒すための抑止力が遣わした英霊——”グラントサーヴァント”と呼ばれる通常のサーヴァントよりも霊基の格が違う存在と比較しても、少女は存在する世界そのものが違うかのようなであった。

一般人にも分かり易いようにたとえ話をするならば、少女は最新鋭の戦闘機のようなものであり、刀や槍を持った武士が一般的なサーヴァントである。戦えばどちらが勝つかは火を見るよりも明らかであり、そもそも戦う土俵からして違っているのだ。

——それでも彼女と対等な勝負の出来る人間種のサーヴァントが複数存在しているのは、彼らが未来に於いても英雄と呼ばれる所以なのだろう。

そんなある意味で生まれる世界観すら間違っただけいな強さの少女は、瞬時に自身の置かれた状況を理解した。本来ならば有り得なかつた”夢の続き”を見せてくれる黒髪の青年を見詰めながら、凜とした鈴の音のような美しい声で、ようやく得た自分の意思を持って名前を名乗る。

『僕……いや、私は”メリュジーヌ”。異聞帯ブリテンにおいて最強の妖精騎士と言われた者』

元の”個体名”や授かつた”騎士の名前”とは違うものであつたが、少女は呼んで欲しいと思える”大切な名前”を口にした。一人称

も公人として使用していた『僕』から、自分の意思を持った私人としての『私』を使っている。

彼女が口にした『メリュジーヌ』とは、史実では人間と妖精のハーフである。

妖精である母親に『土曜日になると半身が蛇や竜になる呪い』を与えられ、変身する所を見られると永久に戻れなくなる使命を背負わされた妖精だ。史実で語られるメリュジーヌは、人間の男性と恋に落ち、一人の子を授かったとされている。

まだ世界を飛び続けることを出来る喜びを噛み締めながら、彼女はサーヴァントとしての生き方に思いを馳せるのだ。

竜でも無く、騎士でも無く、妖精でも無い——自由な生き方を。

『……そうか。朽ちていくだけの私でも、サーヴァントとしてなら君の役に立てるんだな。……うん、とても嬉しい。たとえ一時の夢であつても、私の翼は君のために羽ばたかせるよ』

その後、メリュジーヌは史実に於いて、ハッピーエンドとバッドエンドのどちらかの未来を迎えるのだが、二つの内どちらが”オリジナル”であるのかは不明である。

——メリュジーヌを名乗る少女が、どちらの未来を迎えるのかは未だ分からない。

——境界の竜 アルビオン

神秘に溢れていた神代が終わろうとしていたその時、最期までブリテン島に残ろうとして死滅した幻想種。その遺体は汎人類史に於いて、“人類最後のマスター 藤丸 立香”が生きる現代では、魔術師達の総本山——時計塔の地下に拡がる“霊墓アルビオン”の礎となっており、最後の“純血たる竜”である。

現代に於ける『竜』と呼ばれる存在は、世界の裏側に移動した竜種たちの残した“竜の因子”が付着し、それぞれの生態を維持したまま“竜に近い生態”となった生物である。勿論、その竜に近い生態となったものは、そこらの人間の手に負えるものではないのだが、オリジナルとは比べることも烏滸がましい。

それらの竜の因子の大本となった存在が、他ならぬ“境界の竜 アルビオン”なのだ。

竜種における冠位と呼ばれる原種であり、地球が誕生した時から“存在していた”のであれば、四十六億年近い生命情報を持つていたこととなる。人間の認知によって象られた神、信仰によって発見された神とは全くの別種、アルビオンとは原初の超存在なのだ。

汎人類史において多くの竜種が神代の終わりを予見した時、幻想が失われる前に世界の裏側へ移動する中、何らかの理由でアルビオンは世界の表側に長く留まっている。汎人類史のアルビオンが何故、幻想の失われる世界に留まろうとしたのかは、今となっては知る者は一人としていない。

結果的にアルビオンは、世界の表側に自分が存在が出来ないことを受け容れ、世界の裏側へ移動しようとしたのだが、その時には既に世界の裏側へと移動するための“孔”を穿ちようがない程に、世界の神秘は衰退しており、既に転移が不可能な状態となっていた。

神秘が薄れていく世界で、原初の竜が取り残されたのだ。

それでもアルビオンが諦めることは無く、『神秘による転移ができ

ないのなら、物理的に移動する』と神秘の残る地底へと潜っていき、最期は地中深くで力尽きたのだ。比喻抜きに山にも匹敵するその遺骸は、やがて地中のうねりによって幾つにも引き裂かれ、元から巨大だった身体を更に大規模にした迷宮となった。

これが汎人類史に於ける、霊墓アルビオンと呼ばれる場所が誕生した経緯である。

時計塔が霊墓アルビオンの上に建築されたのは偶然などでは無く、この巨大竜種の遺骸という最大級の神秘が埋まっていたからこそ、意図してその上に魔術協会の総本山が建てられたのだ。ダンジョンと化した霊墓の中では、地上では失われた神秘が色濃く残っており、竜種の牙や純度の高い霊石といった現代では得られない貴重な呪体が数多く眠っている。

——ここまでは汎人類史での、アルビオンが辿った顛末である。

汎人類史とは異なる歴史を辿った世界——異聞帯 妖精國に於いては、『北の妖精』達の大地である湖水地方の森となっていた。

妖精達からは『境界のアルビオン』と呼ばれており、遺っている巨大な竜骨が失われると湖の栓が抜けて湖水地方一帯が海に戻り、地上と霊洞の境界が無くなってしまうと伝えられている。それだけなら汎人類史のアルビオンと違いは殆ど無いのだが、異聞帯のアルビオンは朽ちる前に自らの”左腕”を切り離していた。

切り離された左腕は湖の中で動くことすらないまま、ただの黒いアメーバ状の肉塊でしかなかった。しかし、そんなものに興味を抱いて唯一自分に近付いた”誰よりも純粋だった妖精”を参考にする事によって、原初の竜の細胞塊は”竜の妖精”へと変性したのだ。

それこそがカルデアに召喚されたメリユジーヌの”正体”であり、汎人類史の伝承”異類婚姻譚”の妖精の名をアルビオンが名付けされた経緯である。

『弱い生き物は強い生き物に従う——のは、当たり前の話だと思うけど……。生存競争をしているわけでもないんだし』

これは世界が神秘に溢れていた神代の頃の原始的な考え方であり、それが当然のことであるかのようにメリュジーヌはマスターに話していた。種族としての違いやこれまで自分の意思を持たずに、妖精騎士として生きていたことが原因であろう。

通常の人間や動物達とは異なっており、彼女は個だけで成立する生物であるが故に、他者と群れる生き方がそもそも不得意なのだ。生まれながらの強者であったがために、強き者に弱者は従って当然だと考えている。

実際に彼女が自分のことを地球最強だと自負しているのは、増長などでは無く純粋な事実である。

それ故に相手を見下すような態度を無自覚に取ってしまうことがあり、相対した者からは冷酷で傲慢な性格をしていると誤解されることが多かった。その上で会話をしている時に、自らの出自に関して必要以上に喋ってしまったり、正論で説き伏せられると拗ねて退却したりと、他者との距離感も測り損ねることが多い。

人間社会という枠組みに当て嵌めるならば、メリュジーヌ本人も自覚している程のコミュ障であり、人理継続保障機関 カルデアに来てからは、自分の思いや考えを伝えることを苦手としている自分を改善が出来るようにと努力しているのだ。

まだまだ一般常識について勉強中の彼女だったが、自分に対して優しくしてくれるマスターに対して好意を抱くようになり、絆を深めていく中で自分の中で最大限の”妥協”をした。それはメリュジーヌ

なりに彼の思いを酌んだ結果であり、相手のために自分の気持ちをほんの少しだけだが我慢したのだ。

しかし、元が尊大で横暴な竜種の源流であるがために、人間から見れば妥協しているのかが分からない所が種族としての違いなのだろう。

『君から見て、私は凜々しいんだ。そっか。……なら、その期待に応えないといけないね。本当のところ、自分でもなんていうか……私は孤独に弱くて、自信が無くて、君の顔を一日二十四時間は見ていたくて、放っておかれると、カルデアを焼き尽くしたくなるけど……うん！私は君が誇りに思うサーヴァント！ だから、『我慢して』君の一番であり続けるよ』

本人的には直ぐにでもマスターを”世界の裏側 アヴァロン”へと拉致・監禁を行い、彼の優しさを独占するだけの生活を送りたかった。心根の優しいマスターのことを一日中ダラダラと見詰め続け、彼には自分のことだけを考えていて欲しいのだ。

自分自身で言っているように『孤独に弱く』寂しがり屋な彼女としては、冗談を抜きにしてマスターと一緒に居られる時間を強制的に削ってくるカルデアでの生活を許容していることは、メリュジーヌなりの最大限の我慢をしているのだ。

——しかし、彼女には一つだけ大きな見落としが存在していた。

あくまでもメリュジーヌがカルデアでの生活を我慢出来ているのは、彼にとつての”一番”が彼女自身であると言う前提があつてこそなのだ。万が一にもマスターに自分以外に愛している女が存在すれば、先程の言葉通りにカルデアを焼き尽くし、彼のことを誰にも邪魔されないアヴァロンへと拉致する可能性が高い。

この時点でカルデアの内情について詳しくなかつたメリュジーヌは、マスターにとつての”一番”他に沢山いる”ことを知らなかつ



た。多くの女性と性的な関係を持っており、既に彼との子を孕んでいる女性も複数人いる。

それは汎人類史に於ける円卓最強の騎士 ランスロットが、アーサー王の妻であるグイネヴィアを奪い取り、逃走の際に円卓の騎士を殺害した時と同じように、カルデア崩壊の切っ掛けとなってしまうだろう。

——メリュジーヌがマスターの”浮気”を知るのに、時間はそう掛からなかった。

「ふーん……君には私だけを見ていてくれるように、”お仕置き”をしないと……ね」

初めての”嫉妬”という感情を覚えながら、複数の女性達と楽し気に話している彼のことを見詰めるのだ。

ジャラ……

金属同士の擦れる音が鳴り響き、マスターは自分の上に”跨る”メリュジーヌに声を掛ける。

「——メリュジーヌ……この手枷は何かな？」

「ふふっ、それは私の愛だよ」

いつもとは違うどこか妖艶な笑みを口元に小さく浮かべる彼女は、視線だけでこの手錠を外す気は無いと告げていた。

彼からすれば本当に一瞬の出来事だったのだが、通路を歩いていると風よりも速い速度で連れ去られ、気が付けばベッドの上で手首を革製の手錠で固定されていた。革製の手錠は金属製の鎖を用いてベッドへと繋がれており、一般人であるマスターでは逃げられる可能性は殆ど無いだろう。

頼みの綱である令呪も規格外な存在であるメリュジーヌに対しては、今の危機的状況を打破するだけの効果があるとは思えなかった。後は誰かの助けを待つしか無いのだが、そこら辺は彼女も想定して対策しているだろう。

それに本気になったメリュジーヌに暴れられれば、新生カルデアは壊滅的な被害を被るだろう。ただでさえ最近、虫を怖がったモルガンによる破壊活動があったのだ。資源に限りがある今の状況では、極力穏便に済ませる必要があるだろう。

色々な考えを巡らせているマスターに対して、自分以外のことを考えていることにムツとした彼女が右手の人差し指を動かし始める。彼の厚い胸板に指先で円を描くように動かしながら、彼女は自分がマスターを拉致・拘束した目的を告げる。

「私のことよりも他の女のことを優先する君に、私という存在を刻み付けながら……もう浮気が出来ない位に、”お仕置き”をするんだっ♡♡ ちゃんと私”だけ”を愛するって約束するまで、ここからは帰さないからねっ♡♡♡ ——はむっ♡♡♡」  
「んっ……」

彼女にされるがままであるマスターの口から、小さな呻く声のようなものが漏れる。

メリュジーヌは男らしい太めの首筋に甘噛みを行い、彼が自分のモノであると主張するように歯型を付けてマーキングをした。マスターの鼻腔には彼女の白髪から漂う甘い香りが入り込み、オスとして

の本能を否応無しに刺激されてしまう。

小振りだがハリのある美尻の下で、彼の長大なペニスに血流が集まっていく。その感触を確かに感じ取りながら、メリユジーヌはゆっくりと甘噛みしていた首筋から口を離れた。

「んっ♡ ——はぁ……っ♡♡♡」

彼女の歯並びの良い歯形がしっかりと綺麗に、マスターの首筋には赤い痕となって残っている。そのマーキングの痕を見たメリユジーヌは、背中にゾクゾクとした快感が走ってしまう。それは動物的な衝動である征服欲が満たされた快感であり、彼女は仄暗い悦びを確かに感じていた。

メリユジーヌは華奢な肩をブルリと一度だけ震わせた後に、マスターの耳元に瑞々しい桜色の唇を近付けて囁く。

「……私でしか気持ち良くなれなくしてあげるっ♡♡♡」

## 番外編：最強種は屈服を覚える―2

「——んっ♡♡ はぁ……っ♡♡」

艶めかしく熱っぽい吐息と共に、銀髪の少女は黒髪の青年の首筋から唇を離す。

自分の”下”にいる彼に視線を向けて、熱くネットリとした”捕食者”が獲物に向けるような視線を送る。そして、彼の耳元に可憐で小さな桜色の唇を近付け『ふー……っ♡♡♡』つと、右耳の孔に向かって息を吹き掛けた。

耳に伝わる温かく湿り気を帯びた風を受け、息を吹き掛けられた耳に青年の神経が集中してしまう。相手のトクントクンと高鳴る心臓の鼓動すら、耳を澄ますことなく聞こえてしまいそうである。

——そして、骨伝導だけで話していることが分かりそうな程に口を近付けると、嗜虐心が僅かに滲む鈴の音のように美しい声でソツと囁いた。

「私でしか気持ち良くなれなくしてあげるッ♡♡♡」

彼女は視線を黒髪の青年がいる下の方に向けると、両手を手枷を用いて拘束した彼の汗ばむ首筋に、端正な作りの顔をグイツと近付けた。自身の鼻先が青年の首筋へと触れてしまいそうな程に、近い距離感である。

互いのパーソナルスペースが完全に侵入しており、肌に触れていなくとも体温を感じられた。

少女は彼と殆ど密着した状態のまま”クンクン”と鼻を鳴らし、男性らしい汗の匂いと爽やかな石鹸の混じった匂いを嗅ぐ。小さな小鼻がヒクヒクと動いており、肺の中の空気が一杯になるまで青年の匂いを取り込んでいた。

——自分の『番となるオス』の匂いを覚えるように堪能する。

”複数のメスの発情臭”が染み付いていることは気に食わなかったが、それでも彼の匂いは少女にとっては甘美なものであった。『異性の中で良い匂いだと思える相手とは、色々と相性が良い』などと言われることもあるが、銀髪の少女にもそれは当て嵌まったようである。

このまま二十四時間——それこそ”永遠”に嗅ぎ続けても、良いと思える程であった。

しかし、匂いを嗅いでいるだけでは満足が出来ない彼女は、鼻先を寄せていた首筋に瑞々しい桜色の唇を近付ける。唇が首筋に触れる寸前に口を大きく開いた少女は、自分という存在を青年の身体に刻み付けるために、そのまま首筋の肉に『カプっ♡』と噛み付いた。

「——んっ♡♡」

黒髪の青年——藤丸 立香”の太く逞しい首の筋に、チクリと細かい針を刺した時のような痛みが走る。

太ももまで伸ばされた銀髪が美しい小柄な少女——”メリユジーヌ”は、マスターが自分のモノであると主張をするようにマーキングをした。彼女が行ったマーキングとは、肌を『ちゅーっ♡』と、音が出る程に吸うことで作られる内出血——俗に言う”キスマーク”では無い。

——それよりも”自分”という存在を、相手の身体に”深く”刻み付ける行為であった。

彼女は甘噛みをしていた状態から、首筋を噛む力を少しずつ強めていく。

「——ッ」

メリユジーヌのマーキング行為により、マスターは小さな呻き声を上げる。

彼女が具体的に何をしたのかと問われれば、彼の首筋に犬歯を突き立てる”傷痕”を作ることであった。肉食獣を彷彿とさせる鋭い犬歯により、余り痛みも無く首筋の皮膚を貫通して、等間隔に点のような二つの傷が出来上がる。

ほんの少しではあるが確かに傷付いた皮膚の上から、ルビーブラツドの宝石を思わせる朱色の血がジワリと傷口から滲み出す。

メリユジーヌの舌先には、微かに鉄臭い血液特有の味がしていた。

「ふう……っ♡♡♡んっ♡♡♡んう……っ♡♡♡」

彼女はマスターの首筋に噛み付いた状態のまま、喘ぎ声とも色っぽい吐息とも判別がつかない艶めかしい声を口端から呼気と共に漏らす。それは桜色の唇に走るジンジンと痺れるような”快感”に因るものも確かにあったが、精神的な部分での”満足感”により漏れ出した声のようにも思える。

彼に付けた”傷”は正しく自分が愛おしいと想うマスターのことを”傷物”にした証であり、他の女達へ向けた『私が彼の恋人だよっ♡♡』という牽制でもあった。最も独占欲が暴走している状態の彼女は、マスターは”自分のことだけを考えていてくれれば良い”と思っているのだから。

彼のことを独占する生活を妄想して、メリユジーヌは恍惚とした表情を浮かべていた。

(マスター美味しい……っ♡♡♡ それに私だけを見てくれるマスター♡♡ うん……良いねっ♡♡♡ それはとつても”素敵”なことだよ♡♡ カルデアの仕事にも他の女にも構わないで、私だけを愛してくれるマスター……良いなあっ♡♡)

メリユジーヌは”恋人”の首筋に、自分が付けた傷跡が残ることを想像する。彼女の琥珀のような色合いをした引き込まれそうな程に

美しい瞳は怪しい光を帯びており、本人は意図していないのだが無意識の内に、彼の首筋に吸い付けている唇の端を上げていた。

——穢れを知らない少女とは思えない、淫らなメスの表情を浮かべている。

その”微かな笑み”の正体とは、彼に好意を寄せている他の女性達に対する優越感の表れであり、マスターのことを支配したいという欲求が満たされていく証でもあった。

しかし、生まれた瞬間から強大な生物である竜とは、古来から金銀財宝といった宝を奪い自らの巢の中に蓄え、欲望のままに美しい女を攫う『強欲な存在』だと、色々な国や時代の伝承やお話の中に残されている。

そんな強欲な竜という種族の中でも、原初にして最強の竜——アルビオンが元となった存在であるメリュジーヌともなれば、それこそ無限にも思える欲望を持つていることは当然の帰結であった。

○  
弱肉強食という野性の世界に於ける絶対のルールに沿い、弱者は強者に従うべきだという考えが本能にまで染み付いている。結果的に他者とのコミュニケーションに齟齬が生まれ易く、自分よりも弱者であるマスターは強い自分に従うべきだと自然に考えてしまうのだ。

——実際に竜という存在は、生まれながらの強者である。

生存競争に於ける弱者のように他者に気を使ったり、周囲の状況や他者の意見に合わせる必要性が皆無であった。そのため人間などの社会性を重視する存在から見れば、傲慢にも思える性格となりがちなのだ。

（一番強い私のこと”だけ”をマスターは、構ってくれれば良いんだよ……♡♡♡ もう私以外に構っちゃ”イケナイ”って教えて上げないと♡♡♡ 私だけを見て、私だけを感じてくれれば良いんだか

らね♡♡)

「ちゅう——っ♡♡ んっ♡♡ ふう……っ♡♡♡♡」

もつと、もつと——そんな相手を求めて自分”だけ”のモノにした  
いという欲求が、湧き水のようにトプトプと胸の内から湧き上がる。  
溶岩のように熱くドロドロとした欲望を、少女は抑えるつもりは微塵  
も無く、今回のようなマスターの拉致・拘束を行ってしまったのだから止まる筈も無かった。

それこそが人とは違う竜や妖精のような精神構造をしている証拠  
であった。だからこそ今回、自分だけでマスターを”独占”するため  
に誘拐をしたのだ。異聞帯で女王モルガンが、メリュジーヌに妖精騎士  
”ランスロット”の名前を与えたのは間違っていないかららしい。

「——っ♡♡♡ んう……っ♡♡♡ ちゅう♡♡♡♡」

メリュジーヌの唾液に濡れた舌先によって、マスターの首筋はチロ  
チロとねちっこく舐められる。

子猫がミルクを飲む時にも似た舌の動きのようでもあり、女が男の  
肉棒に奉仕をする時のようなイヤらしい舌使いのようでもあった。  
彼女は口中で舌先をキュツと尖らせると、その先端を彼の傷付けた首  
筋の肌に合わせて上下左右に動かす。

まるで舌だけが別の生き物であるかのように艶めかしく動き、少し  
ずつ滲んでいく血液を舐め取っていく。

一般的に擦りたいと感じやすい部位である腋や足の裏などと同じ  
ように、首筋を生温かく柔らかかな舌先で舐められると、マスターも思  
わず身を振ってしまいそうになる。しかし、両腕を手枷で拘束されて  
いるため、彼は満足に身体を動かすことも出来はしない。

自分の身体の下で身体を動かさそうとしているのを感じとったメ  
リュジーヌは、唇を離すとマスターのことを挑発でもするかのように  
話し掛けた。小さく白い両手を彼の両頬に添えると、彼の空を思わせ



る蒼色の瞳をジーつと覗き込んだ。

「ちゅう——っ♡♡♡ んっ、はあ……っ♡♡ ♫う……手は拘束されて私が上に乗ってるから、マスターは動くことも出来ないよねっ♡♡ 私に勝てないマスターは、これからずつと♡♡♡ ずうつと……っ♡♡ 私と気持ち良くて”イイコト”をするんだよっ♡♡  
——っ♡♡♡」

メリュジーヌはまるで野生動物が匂い付けでもするように、マスターの身体の上で身体を前後に動かしてズリズリと擦り付けていた。傍から見れば既にセックスをしているかのように見える程に、お互いの下腹部がピッタリと密着している。

「ふう——っ♡♡♡ んっ♡♡♡ これからは私以外の匂いが付かないようにっ♡♡ んう……っ♡♡ いっぱい匂いの交換っこしようねっ♡♡♡ んあ——っ♡♡♡」

艶めかしい吐息を吐き出しながら、メリュジーヌは身体に汗が滲む程に身体を動かす。運動で体温が上がっていると言うよりも、性的な興奮によつて体温が上がっているらしい。

部屋の中に甘酸っぱい汗の匂いと共に、発情したメスのフェロモンが撒き散らされていく。

「んっ……ふうっ♡♡♡ マスターに付いてる”女のニオイ”……っ♡♡♡ はあっ♡♡♡ 私が全部、塗り替えて上げるからっ♡♡♡  
あう……っ♡♡♡」

成熟前の小柄な身体であったとしても、彼女の身体はマシユマロのように柔らかかった。体温が普通よりも少し低いことも心地が良く感じ、ずつと肌が触れ合っていたとしても不快感を覚えることは無いと思えてしまう。

——身体が触れ合う快感を感じ取り、マスターのペニスにも少しずつ血流が集まっていく。

メリュジーヌの下腹部に腹筋とは違う硬い”何か”が当たるようになり、小柄で華奢な身体を持ち上げてしまいそうな程に大きくなっていった。服越しなのに下腹部から伝わる”熱”に、身体が火傷してしまいそうだと感じる。

服という遮蔽物があるのにも関わらず、怒張していくペニスの存在感は凄まじいものがあった。逆に長大なペニスを目で見ていないからこそ、大きく熱を持つていくペニスを下腹部の肌で感じられる。

彼女も”ソレ”の存在には気が付いており、マスターが自分に興奮して”交尾”をしたくなっているのだと分かり、嬉の感情で顔がニヤリと悦に入った笑みを浮かべてしまう。若干、イメージしていたよりも”ペニスが大きい”かも知れないと不安になるが、その程度ではメリュジーヌの最強種としての自信は崩れない。

(あ——ツ♡♡♡ 私のお腹でマスターのおチンポが、段々大きくなってっ♡♡ あんっ♡♡♡ 服越しなのに熱くて、身体が浮き上がっちゃいそうな位に硬くて遅い……っ♡♡ あ——っ♡♡♡  
でも、私の体力に人間のマスターが勝てる訳も無いからっ♡♡  
あう……っ♡♡ まっ、マスターが『もう休ませてくれ』って言っても♡♡  
絶対止めて上げないんだっ♡♡♡ わっ、私だけを……っ♡♡)

自分の下で快楽に呻くマスターを妄想して、下腹部がキュンキュンと疼くのを感じていた。

小振りだが形が良くハリのある美尻やまだ成熟し切っていない薄い恥丘を覆う純白のショーツには、”少しづつ”湿り気”が帯びている。

本当は余裕を持った態度をマスターの前では取りたいのだが、下腹部同士を押し付けた状態で身体を前後に動かして”匂い付け”をしているため、ショーツやズボンの布越しにぷつくりと膨らみ始めたク

リトリスが必然的に擦れてしまう。

我慢が出来ない程に蜂蜜のように甘ったるい嬌声が漏れ、自分からは腰をカクカクと動かすことを止められなくなっていた。彼のペニスを用いた自慰行為に彼女は耽り、全身を『ピクっ♡♡ ピクッ♡♡』と震わせるようになる。

「んうっ♡♡ これ気持ち良い……っ♡♡♡ あっ♡ ああ……っ♡♡  
♡♡ ——んあッ♡♡♡」

——ショーツの秘所部分に舟の形をした”シミ”が出来るのは、時間の問題であった。

## 番外編：最強種は屈服を覚える―3

枕元に設置された照明程度しか点いていない薄暗い部屋の中では、まるで満月の月明かりの下にいるかのような錯覚を覚えてしまう。

そんな僅かな光を銀糸のように美しい少女の髪が反射しており、丹念に磨かれた貴金属に光を当てたかのようにキラキラと輝いているようだ。陶器のように白くきめ細やかな肌には、火照った身体の熱を伝えるように赤みが差している。

平熱よりも遥かに上昇した体温により、艶めかしい肌の上に玉のような汗を幾つも浮かんでいた。特に顔以外の素肌が露出している脇や鎖骨、太ももは、言葉では表現し切れない”色気”がある。汗ばんだ頬に張り付いた数本の銀髪が、退廃的な雰囲気醸し出していた。

剥きたてのゆで卵のようなハリのある全身の肌が汗に濡れ、思わず生唾を呑み込んでしまいそうな程に淫らである。きめ細やかな真っ白な肌には、まだ誰にも踏みしめられていない処女雪を見た時のような感覚を覚えてしまう。

それは自分の足で雪を踏みしめ、穢してしまいたいという征服欲にも似た下卑た欲望であった。

身体中から年若いメス特有の甘酸っぱい汗の匂いがしており、その匂いに混じって発情したメスのフェロモンが確かに混じっている。まだ成熟し切っていない乳臭いメスが出す初々しいフェロモンは、成熟したメスが出す濃密なフェロモンに比べればまだまだ弱い。その拙いフェロモンにどうしようもない興奮を覚えるのは、オスのどうしようもない”性”であろう。

——ギシツ……………ギシ……………ギシつ

木製のベッドが軋む何とも表現し難い音が、部屋の中に木霊していた。

一般的に考えれば不快だと感じる音に分類されそうだが、不思議とそのギシギシという音に妙な心地良さのようなものを覚えてしまう。

それはベッドが軋む音には一定の間隔があり、まるでメトロノームのようだからかも知れない。

ベッドの上で”一定の動き”をしていない限り、この軋む音が鳴り続けることは無いだろう。

ギシッ………ギシッ………

「——ッ♡♡♡ ……んっ♡♡♡ ——ふうッ♡♡♡」

何らかの”運動”が行われているシングル用のベッドの上では、”黒髪の青年——藤丸 立香”が仰向けの体勢のまま、革製の手枷によつて両の手首をガツチリと拘束されていた。ベッド上部側の脚と彼の手枷が鎖によつて繋がっているため、碌に寝返りを打つことも出来ないような状態である。

マスターが少しでも腕を動かす度に、『ジャラジャラ』と金属同士の擦れる特有の音がしていた。

足枷はされていないので自由に動かせる筈の下半身も、鍛えられた腹筋の下腹部辺りに”銀髪の少女——メリュジーヌ”が体重を掛けるように小振りなお尻を載せて跨っているため、膝を曲げることで足をバタバタと動かすこと位しか出来ない。

組み伏せられた青年とその”上”に跨る少女には、明確な優劣が存在しているように見えた。それはそのまま人と竜という種族としての”差”であり、努力などでは絶対に覆せないモノである。この差を覆すことが出来るのは、”竜すら屠る英雄”にしか出来ないことだろう。

ただの人でしかないマスターは、身体を自由に奪われた状態である。

傍から見ればこれから調理されるまな板の上の鯉と言った様子であり、抵抗らしい抵抗も出来ないままに、少女に良いように”搾精”されてしまうのが目に見えていた。彼女が思い描く自分”だけ”を愛してくれるマスターとなつてくれることも現実的なように思える。

彼は正しく絶体絶命の窮地に立たされているのだが――

不思議と焦燥感に駆られていたり、危機感を覚えているようには見えなかった。

それには沢山いるお嫁さんの中の一人である千里眼を持つ”花の魔術師 マーリン”からの助言も影響しているのだが、根本的な部分でメリュジーヌが自分に危害を加えたり、本当に嫌がるようなことはしないと信頼していることが大きいだろう。

彼女の価値観が人と違い過ぎる部分は確かにあるが、それでも根っこの部分から邪悪な存在では無いと理解しているからだろう。本当に邪悪な竜である”ヴリトラ”などと比べれば、可愛らしいと言って良い程である。

――因みに邪悪な竜であるヴリトラも、既にマスターの子供を孕んでいたりする。

多くの異聞帯を乗り越え、自身が与える試練をクリアした”ご褒美”として、彼専用の孕み袋にされているようだ。邪竜は美しい肢体を蛇のように絡み付かせながら『わえはマスターが射精を必死に我慢する顔が大好きじゃ♡♡ 今日もわえのナカでタツプリと射精を我慢する”試練”をするぞ……っ♡♡♡ 褒美はいつものように――』と、蛇も驚く程の長い長い種付け交尾に耽っているらしい。

オチンポ煽りからの敗北アクメが大好きなマゾメス邪竜のせいで話が脱線してしまったが、マスターは普段から神霊や英雄王、フアラオなどの自分の常識では測ることの出来ない相手と接する機会が多いため、”不測の事態”に対する耐性面も人並み外れていることもあり、今回の件に関してもあまり動揺していない理由だろう。

他にも、他にも――日本神話やメソポタミア神話の竜や蛇が、彼のペニスに堕とされ仔を産む孕み袋にされていたりするのだが、ここで全てを語るのには時間が掛かり過ぎてしまうので、また別の機会にするべきだろう。

マスターが普段からマハーバーラタ叙事詩で有名な大邪竜をベツドの上で何度も倒している時点で、同じ竜種であるメリュジーヌが辿る未来も決まっていたのかも知れない。確かに彼は戦闘力の面では

一般人であるが、性の方面に於いては紛れもなく英雄であった。

——”童”から”人型のメス”として形を得た時点で、彼女は負けていたのかも知れない。

「うっ♡♡ んう……っ♡ あっ♡♡ んあ——っ♡♡♡♡」

ベッドがギシギシという音と共に揺れる度に、蜂蜜のように少女の甘い吐息が漏れる。

完全にメリユジーヌの方が有利な状況である筈なのに、劣勢に立たされているのは何故か彼女の方であった。一方的にマスターを性的に責められる状況であるのにも関わらず、快感に負けているのは間違いないメリユジーヌである。

このような結果になったのは、彼女が”快樂”に対して人一倍貧弱なカラダであったからだろう。今もオナニーを覚えてたての小学生女兒よりも、初々しい反応を見せてしまっている。

多淫であることは”生殖本能”が強いからという面もあるのだが、最強種であったアルビオンは子を残すという意味が無かったために、生殖本能に触れる機会が絶無であった。メリユジーヌとなった後にもそれが変わることは無く、結果的に快樂への耐性が絶無となつてしまつたのである。

——結果的に小学生女兒にも快感で負ける、弱々なメスになつてし

まったのだ。

自慰も碌に知らない生娘のままにオスを押し倒しマウントを取った所で、性に関する経験値がゼロである時点でアドバンテージなど殆ど無いに等しかった。本人も驚く程に快感に対して弱く、そして敏感になってしまっている。

メリユジーヌは下唇を噛んで快感の声を漏らすのを耐えようとしているのだが、自分の優位性を保つために必死に声を上げるのを我慢している。しかし、噛んだ下唇の隙間から悩まし気な吐息と嬌声の混じった音が、口端から漏れてしまっていた。

「ん……っ♡♡♡ うっ♡♡♡ ふう……っ♡♡♡ んう——っ♡♡♡  
ふうー……っ♡♡♡」

確かに普段とは違うメリユジーヌの危ない色香に当てられ、マスターは服の上からでも明確に分かる程に長大なペニスを怒張させている。心臓の鼓動のようにペニスが力強く脈打っており、今にも大量の精液を吐き出しそうな予兆をヒシヒシと感じ取っていた。

直ぐにでも濡れそぼった割れ目で亀頭の先端を啜え込み、小さな子宮がパンパンになるまで精を注いで欲しいという淫らな欲求が彼女の胸中に湧き上がる。それは雌が強い雄との仔を残したいという“本能”であり、原初にして最強の竜から生まれた少女であっても変えられない生物としてのルールであった。

初めての衝動に耐え切れず、本能のままに彼女は自慰を続ける。勃起した長大なペニスに自分の秘所を擦り付け、クリトリスを刺激する自慰行為に耽っていた。

(あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ……っ♡♡♡ 腰止めたいのにっ♡♡♡  
きっ、気持ち良くて我慢出来ない……っ♡♡♡ わっ、私のおマメっ♡♡♡  
♡ よっ、弱過ぎるよおっ♡♡♡ こっ、こんなの我慢っ♡♡♡ でっ、  
出来ない……っ♡♡♡ ——いひっ♡♡♡)

長い銀髪が煌めきながらゆさゆさと揺らすメリユジーヌのしなや



かな腰の動きは、ストリップ嬢がステージの上で踊る性的なダンスよりも何倍も淫靡であった。既に精通を終えた男性であったのならば、その淫靡なダンスを見ているだけで股間にドクドクと血流が集まっていくのを感じ取れることだろう。

「あつ♡ あつい……っ♡♡♡ 布越しなのにっ♡♡ おっっ、お尻とおまんこ、ヤケドしちゃいそう……っ♡♡ あつ♡♡ オチンポがビクビクって跳ねてるうっ♡♡ おっ、お股に食い込むっ♡♡♡  
——んひっ♡♡♡」

メリュジーヌはペニスの熱と硬さをお尻や秘所で感じ取り、メスとしての”生殖本能”を強く刺激されていた。生物として自分が考えるまでも無く上である筈なのに、本能がこのオスに媚びて子種を”おねだり”しようと訴え掛けてくるのだ。

（こっっ、これから交尾はするけどっ♡♡ あつ♡♡ あつ♡♡ ああ……っ♡♡ まずっ、マスターが私にメロメロになるのが良いの……っ♡♡♡ こっっ、このままじゃ私がマスターのモノにされたちゃうっ♡♡♡ あう……っ♡♡ ”みんな”と同じになっちゃうよ……っ♡♡♡）

既に本能や肉体はマスターのペニスに降伏しており、自分がおちんぽに負ける雑魚メスだと理解してしまっていた。このままではジャンヌ・オルタやアルトリア・オルタを筆頭とした彼の恋人達と”同じ”になってしまうと、まだ本番も始まっていないのに理解してしまっているのだ。

最強生物としてのプライドだけが言葉にするのを拒んでいるが、肉体の方は既に強いオスへ媚びるような”動き”をしてしまっている。自分の意思では”それ”を止められず、内心では快楽に弱い自分に驚きを隠すことが出来ていなかった。

（——んあッ♡ わっ、私の方が強くて”上”なの……っ♡♡♡ ひうっ♡♡♡ こっっ、これはマーキングの筈なの……っ♡♡♡ おっっ♡♡♡ おひっ♡♡♡ 大きいオチンポでお股ゴシゴシ擦るの……っ♡♡♡ お

っ♡ やっ、止められ無いよお……っ♡♡♡ あう——っ♡♡  
こっ、このままじゃ負けちゃうっ♡♡♡ オチンポに負けるう——い  
ひっ♡♡)

メリュジーヌがマーキングとして行っていたペニスに秘所を擦り付ける行為は、マスターへのご奉仕と快感を得るための自慰へと変化していた。濡れそぼった秘所を勃起したペニスに押し付け、お尻を前後に振る淫らな踊りが止められ無い。

成人男性の腕と比較しても遜色の無い程の大きさのマスターのペニスは、重力に逆らうように天井に向かって反り返ろうとしている。そのペニスが持つ勃起力とも呼べる力は凄まじく、大半の女はペニスだけで体重を支えられる力強さがあった。

小柄な彼女では本当にペニスに身体を持ち上げられ、そのまま床から足が浮き上がってしまうことは目に見えている。実際にメリュジーヌと体重が同じ”花の魔術師 マーリン”は、根元まで挿入されたペニスだけで宙を浮かされ、自身の全体重を子宮に潰されるポルチオアクメから抜け出せなくなるエッチを良くされていた。

——メリュジーヌもマーリンやモルガン達と同じ、お手軽オナホへと調教される未来が確定しようとしている。

正しくメスを殺す凶器のようなペニスであるが、特にパンパンと表現したくなる程に膨らんだ大きな亀頭は、本物の握り拳のような暴力性を秘めていた。この硬質なゴムのような硬さの亀頭で子宮を突かれれば、発情期の雌猫が上げるような嬌声を口から漏らしてしまうだろう。

それは性愛について初心者な、メリュジーヌにも分かることであつた。

メスの膣肉や鬚壁をゴリゴリと抉るためだけにある捕鯨槍の返しのようなカリ首は非常に厚く、彼の親指の第一関節よりも深い段差がある。膣全体が捲り上がってしまうと勘違いする程であり、脳髓を焼き尽くすような快感に乱れ狂うことは必然であつた。

主神クラスの女神や真正の魔性すら虜にする”魔槍”に一度でもその身を貫かれれば、二度と他のオスで満足することが出来なくなるという確信があった。実際に多くの女性サーヴァント達はマスターのペニスが無いと生きていけない身体に調教され尽くしており、彼に犯して貰うためならば自分から淫らなポーズと共に甘えた声でおねだりをするのだから。

(わっ、私の魅力でマスターを墮とす筈なのにっ♡♡♡ んあッ♡♡♡  
自分じや腰が止められ無い…っ♡♡♡ こっ、これじやあっ♡  
あう…っ♡♡ 私がお奉仕してるみたいにい…っ♡♡ こっ、これは私の匂いを付けるための行為なのに——ッ♡♡♡)

怒張するペニスを押さえ付けているメリユジーヌの小振りなお尻が無くなれば、天井を向いてそそり立つ塔のようになることだろう。それ程までに太く長いペニスが放つ存在感は凄まじく、明らかにマスターの中肉中背な体躯とは釣り合いが取れていない。

精力旺盛な巨馬のペニスをそのまま移植したと言われた方が、余程信じる事が出来そうな大きさであった。”オス”としての最上位を今も肌身で感じているため、無意識の内にお尻がモジモジと動いてしまう。

仮にお尻を持ち上げた状態ならば、オスを誘うようにフリフリと左右に振っているのは間違いない。

メリユジーヌが小さな両手で輪っかを作ったとしても、指が回り切ることは無さそうな程に陰茎は太かった。亀頭に至っては太い陰茎よりも更に大きく膨らんでおり、両手を大きく広げたとしても包み込むことは困難である。彼女の股下から鳩尾を優に通り過ぎて胸元にまで届きそうな程に長いペニスは、確実に根元まで挿入することは不可能だろう。

(こんなでつかいオチンポで、おまんこゴチユゴチユされたら死んじやう…っ♡♡♡ うあッ♡♡ 私の小っちゃいカラダじゃ無理い…っ♡♡ いッ♡♡ いっ♡♡ バーゲストでも”足りない”位に大きいオチンポなんて無理だよ♡♡ んあ——ッ♡)

雄々しく逞しい常軌を逸した大きさのペニスは、正しく”肉槍”と

表現したくなる程の威容を誇っている。少なくとも小柄な体躯の少女に対して、この剛槍のようなペニスが挿入されれば『壊れてしまう』と思うのは、常識的に考えれば仕方ないことであつた。

メリユジーヌは気を抜けば身体が浮き上がりそうな程の勃起力を、小振りなお尻をズリズリと押し付けることで何とか押さえ付けている。しかし、ドクンドクンと脈動するペニスによってお尻が何度も持ち上がっており、左右の尻タブの間と柔らかな秘所に太い陰茎が食い込んでいる。

「んっ♡♡ うっ♡ あ…っ♡ あっ♡♡ あう…っ♡♡♡」

身体が浮き上がり秘所にペニスの陰茎が食い込む度にメリユジーヌは、肺の空気の抜ける吐息と嬌声が混じつたような甘い声を漏らしてしまふ。そして、熟れた果実から果汁が溢れるように、未成熟な秘所の割れ目からガムシロップのような蜜が『ジユワっ♡♡♡』と溢れて純白のシヨーツを濡らす。

始めの内は舟型だつたシミも、今では布地全体がびちゃびちゃに濡れている。

「——あッ♡♡♡ あう…っ♡♡♡ あっ♡♡♡ こっ、これっ♡♡♡  
あッ♡♡♡ あう…っ♡♡♡ おっ、おマメっ♡♡♡ いっ、  
いっばい♡♡♡ こっ、擦れるう…っ♡♡♡ あっ♡♡♡ あひ——ッ♡♡♡  
んあッ♡♡♡ あッ~~~~~~~~っ♡♡♡♡♡♡」

普段は搗き立てのお餅のように白い頬だけでは無く、耳の先端まで真っ赤にさせているメリユジーヌは、マスターの厚く逞しい胸板に両手を突いてバランスを取りながら、小振りだがハリのあるお尻を前後に『カクっ♡♡♡ カクッ♡♡♡』と、間抜けにも思える動作で動かし

ている。  
男と女の性を象徴する子を残すための場所が、布を隔ててだが密着するように触れ合っており、言葉には言い表せない快感が生まれてい

た。

互いに衣服を身に纏ったままであるが、それは一般的に『素股』などと呼ばれる行為に非常によく似ている。詳しく説明するならば男性の勃起した陰茎に、女性の大陰唇を密着させた状態でズリズリと前後に動かし、陰茎を圧迫・摩擦する性プレイの一種である。

布越しにも感じるペニスの硬さと熱にメリユジーヌはドロドロに蕩け、快感を得るためだけの器官である小さな突起”クリトリス”を擦り付ける快楽に酔いしれていた。パチパチと頭の中で火花が弾けるような快感が駆け巡り、快感の波が次第に大きなものへと変化していく。

目の前で強い光が灯ったかのように、チカチカと真つ白な光で一杯になる。彼女は自分の身に迫って来る”ナニカ”に怯えながらも、それをただ受け入れることしか出来ない。

「あ——ツ♡♡　くるっ♡　きちやう……っ♡♡♡　きつ、気持ち良いのくるう♡♡　おっ♡　オチンポでおマメ擦ってっ♡♡　クっ、くるうくくくくくくくくくくっっ♡♡♡♡♡」

これまで以上に甲高く大きな嬌声と共に、彼女は背中と首を弓のように反らせる。

勃起した小さなクリトリスの下に位置する尿道口から、透明な体液をおしっこでもお漏らしするように大量に噴き出してしまう。触れただけで折れてしまいそうな程に華奢な肢体が『ビクンっ♡♡　ビクンっ♡♡♡♡』と、痙攣でもしているのかのように震えていた。

秘所をペニスに擦り付けるだけの快感よりも何倍も強く、頭の中で火花が散るような”絶頂”を初めて体験してしまう。一度でも絶頂を体験して覚えてしまったが最後、メリユジーヌの脳と身体は快感を忘れられなくなるのだ。

「はあ、——……っ♡♡♡　はあ、——……っ♡♡♡　——いひっ♡」

初めての絶頂の余韻から抜け出せないまま、荒い呼吸を吐き出す彼女の意識は微睡む。

今も秘所からはガムシロップのような蜜が溢れており、怒張したペニスを愛液で濡らし続けている。ビクンつと彼女の身体を押し上げる程に長大なペニスが力強く脈打ち、それに合わせてメリユジーヌも全身を震わせるのだった。

——性愛を知らなかった無垢な少女は、絶頂の快楽をその身に深く刻み込んでしまう。

## 番外編：最強種は屈服を覚える―4

「――はあ、ー……っ♡♡♡ ふう……っ♡♡♡ はう、――っ♡」

艶めき色つばい吐息を漏らすメリュジーヌは、仰向けの体勢で両手を拘束されたマスターの身体の上に跨ったまま、初めて経験した絶頂の余韻に呑まれている。

目の前をチカチカとした眩い光が瞬き、その閃光が生じる度に目を白黒とさせていた。未だ薄い無毛の恥丘の下に位置する閉じた割れ目からは、潮か愛液かの判断が出来ない粘っこい蜜が『びゅっ♡♡びゅっ♡』と、噴き出している。

身体を持ち上げておく気力や体力も無くなっており、互いに向き合う形でピタリと密着させていた。メリュジーヌはまるで小さなお布団であるかのように、マスターの上に覆い被さっている。

彼女の体重は20kgしか無いのだが、それは物理法則を完全に無視していた。

女の子の体重を羽毛のように軽いなどと表現することがままあるが、メリュジーヌとマーリンの二人に関しては、比喻抜きにその表現が当て嵌まる軽さをしている。当然、お腹の上に乗られているマスターも、重さは殆ど感じていなかった。

ただ子供特有の熱いと感じる程に高い体温と、小柄であっても”オナナ”を感じさせる胸や太もものマシユマロのような柔らかさである。彼の鍛え上げられた硬い腹部の上で、彼女の膨らみ始めた小振りな乳房が『むにゅっ♡♡』と、柔らかさを伝えるように軽く潰されていた。

まだブラジャーなどを着用する必要が無い、慎ましやかな大きさのツンと上を向いた生意気な乳房も可愛らしい乳房は、僅かな身動きによつて彼の胸板の上で乳首や乳輪が擦れる度に、甘く痺れるような快感が生まれている。

その他にも幼い子供特有のイカ腹に近いぷにぷにとした柔らかさ

があり、あばら骨の角ばった硬さを一切感じない。本当に身体の中に骨があるのかと思ってしまう程の柔らかかモチモチボディである。

成人男性の平均に近い体躯のマスターと、完全に子供サイズなメリュジーヌの体格差から、遠目から見れば休日ニダラダラしているパパに対して、遊んでと甘える幼い娘のようにも見えるかも知れない。

「——イっ♡♡♡ いひっ♡♡♡ ひっ………ひう………っ♡♡♡」

しかし、今の彼女が浮かべている表情は、子供が親に甘える時のものでは絶対に無かった。普段の純真無垢な天使のような可愛らしさでは無く、悦楽や男を知ってしまった……

——発情した”メス”がする、淫らに蕩け切った表情である。

禁欲的な聖女にセックスの快楽を教え込んだ時のような、悪魔のような背徳感がある行為。処女雪を踏み荒らしたくなる欲求が誰にもあるように、何も知らない生娘に快感を覚えさせることは言いようの無い悦楽がある。

メリュジーヌは本物の琥珀のように綺麗な瞳を快楽でドロリと濁らせ、自然と開いた口からピンク色の艶めかしい光沢を持った小さな舌先を突き出していた。明らかに幼い少女がしてはいけない、メスが絶頂を迎えた時のアクメ顔である。

『は——っ♡♡♡ は——………っ♡♡♡』と、甘ったるい呼吸を半開きになった口から零し続けていた。人様には絶対に見せられない品の無いメス顔をしている彼女は、開いたまま閉じなくなった口の端から、ガムシロップのような唾液をツーッと垂らしている。

(きっ、気持ち良い………っ♡♡♡ ずっと頭フワフワから戻ってこれにやい——っ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あう………っ♡♡♡)

普段のメリュジーヌならば涎を垂らすことなど絶対に無いのだが、快感で表情筋すら弛緩してしまっている為に、自然と半開きになった口から唾液を垂らしてしまう。







のだ。

汗に濡れて素肌にぴっちり張り付いた服という薄布を隔て、肌同士が密着する幸福感がメリュジーヌの心を満たしている。そして、まだ薄布すら取っ払った本当の素肌同士を密着させる、”溶けてしまうような快楽”が待っていることを彼女は知らずにいた。

互いの体温がアイスのように溶けて混ざり合い、自分の肌と相手の肌との境目が分からなくなってしまいうような感覚を体感していない。それは人や怪物——そして、竜ですら狂わせてしまう”甘い蜜のような毒”であつた。

——その甘美で虜になる毒には、”最強の竜”であつても勝てはしない。

「ん、あつ♡♡ ふう……っ♡♡♡ すう……っ♡♡♡ ふう♡♡♡♡♡」

二人は身体の前面同士をピッタリと密着させている状態であるため、彼女は自然とマスターの”匂い”を鼻腔を通して脳と肺に取り込むことになる。オスのフェロモンを吸い込み、メリュジーヌの中にある性別としてのメスの部分が出していく。

彼女のふにふに人間湯たんぽでマスターの体温も上がっており、メリュジーヌ程では無いが薄っすらと汗を掻いていた。少なからず男の汗の匂いを感じ取ることになる。

普通に考えれば汗など決して良い匂いでは無い筈なのだが、メスの子宮をキュンキュンと疼かせる成分を含んでいた。口呼吸の方が明らかに楽なのだが、態々鼻を鳴らして二オイを嗅ぐ彼女は、肺の中をいっぱいにするように石鹼の香りと彼の汗の匂いが混じった二オイを吸い込んでいる。

——くんっ♡♡ くんくんっ♡♡♡



ニスはサディストであった。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あひっ♡♡♡ まっ、まつれっ♡♡♡  
気持ち良いのキてるかりやっ♡♡♡ おっ、おちんぽビクンって、  
しにやいれえっ♡♡♡ おまめつぶれ——っ♡♡♡ イひいゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝっっっ♡♡♡♡♡」

上に乗るメリュジーヌの下半身が完全に浮く程にペニスが反り返り、今も潮を噴くイヤらしい割れ目——クリトリスに自身の体重が掛かるように持ち上げる。力の入らない身体を動かして逃げようとすればする程、押し潰されたクリトリスが擦れて新たな快感を生み出す。

最強の竜がペニス一つに完全に翻弄されており、小さな肉芽に負け癖を付けていた。これからはクリトリスを軽く押し潰されただけで、自分が敏感で快樂に対して弱々なメスだと思いきや出させられるようになっていた。

——神すら屠る最強の竜は、快樂に対して雑魚メスである。

そんなセックスをする前から負けている彼女は、宙に浮いた両足のつま先まで真っ直ぐに伸ばした状態で、全身をビクビクと痙攣させている。意識は快樂という名の蜂蜜色の沼にドツプリと沈んでおり、潜在的な意識の部分にまで快感を刻み込まれていた。

マスターの胸元に顔を埋めてニオイを嗅ぎ続けているため、パブロフの犬のように彼の匂いを嗅ぐだけで秘所を湿らせる、ドスケベメスに馴けられている。刻一刻と自分が取り返しのつかない、マゾで従順なメスへと変えられていることにも気付かないまま、絶頂に耽溺する憐れな竜娘であった。

——ぶしゅ……っ♡♡♡

「ふしゅーっ♡♡♡ んう♡♡♡ ふしゅー…♡♡♡」

発情期に入ったメス猫を彷彿とさせるメリュジーヌの息遣いは、無意識の内に彼女の口から漏れているものであった。快樂に溺れる脳が酸素を求めて呼吸しているだけなのだが、“気持ち良い”に支配された身体は、当然のことを出来なくさせる。

快樂漬けのトロトロに蕩けた脳は、その殆どが使い物にならなくなっていた。僅かに残った思考することの出来る部分が、自分がクリオナ大好きなドスケベメスに変わってしまったと気付いていた。

(あっ♡♡♡ あたま真っ白になっちゃう…♡♡♡ まっ、まだ目の前チカチカしてるっ♡♡♡ マスターのオチンポで小股ゴシゴシ擦るの、絶対に癖になっちゃったあ…♡♡♡ んあっ♡♡♡♡♡ まらくりゅ——っ♡♡♡)

本当は自分がマスターのことを虜にする筈だったが、現状では自分が更に彼に依存するだけになっている。ここから巻き返しをしなければならぬのだが、未だ絶頂の余韻である気持ち良いという波が引いてくれない。

少し快樂の波が治まったと思っても、また快樂の高波がやってくるのだ。

絶え間なく押し寄せる快感で意識をちやんと保てずに微睡んでいるメリュジーヌの耳に『バキヤっ!!』と、金属がひしゃげて壊れた時にしか鳴らない、破壊音が入ってきた。

音がした方向は扉の方では無く、彼女から見て“前方”である。

視線だけを動かしてメリュジーヌが音がした方を見ると、そこには拘束されていた筈のマスターの両腕が“自由”に動いていた。正確







番外編：最強種は屈服を覚える―5

「――あッ♡♡♡ あっ♡♡♡♡ あひッ♡♡♡ つっ、つよっ♡♡♡ 強い  
……っ♡♡♡ もっとやさしくっ♡♡♡ やさしくっ♡……っ♡♡♡  
うっひッ♡♡♡ まっ、ましゅたあっ♡♡♡ イッ♡♡♡♡ いひ――っ  
♡♡♡」

――年若い少女の蕩けた嬌声が、部屋の中に響いている。

照明の光源を受けてキラキラと光を反射する、宝石やガラスのような銀の糸と見紛うばかりに美しい銀髪を左右に振り乱す少女――メリュジーヌは、蜂蜜のようにトロトロに溶けた甘ったるいメスの声を漏らしていた。マシユマロのように柔らかい頬や耳の先端を熟した林檎のように深紅に染め、本物の琥珀のように綺麗な瞳を快感による涙でうるうると潤ませている。

恥ずかしい声を漏らすのを我慢しようと口を固く結ぶのだが、自然と口が開いて嬌声を上げてしまう。

「あっ♡♡♡ あひッ♡♡♡ うっ……くるう♡♡♡ またキつちやう♡♡♡  
うあッ♡♡♡ あッ♡♡♡ ああっ♡♡♡♡ まっ、まら頭の中、  
真っ白になっちやう♡♡♡ いッ♡♡♡ イク――っ♡♡♡ イっくくく  
くくくくくくっっっ♡♡♡♡♡」

既にびしょびしょに濡れた純白のショーツから、淫らな水音共に透明な体液が溢れ出る。

尿道口から勢い良く出た体液をショーツの布地が受け止め、秘所を覆う布地部分や鼠径部とショーツの隙間から、チヨロチヨロという水音共に零れているような状態であった。元からの濡れやすい体質も確かにあるのだが、好意を寄せる相手にイジメられるような愛撫をされ、尿道口が完全に弛緩してしまっているようだ。

床の上には小さな水溜まりが出来上がっており、淫らな香りを放つ

ている。

マスターの男性らしい大きな両手でなら指が回り切つてしまいうな程に細く、モチモチとした柔らかさとゆで卵のようなハリのある太ももの内側には、膣口から溢れた粘っこいぬるぬるとした愛蜜と尿道口から『ぷしゅっ♡♡♡♡♡』と、腰の震えと同時に嘔き出した潮の混じった体液によって濡れていた。

スカートの内側にはムワツとした熱気と共に、噎せ返つてしまいうな程に濃いメス臭が籠っている。

太ももの下半分からつま先を完全に覆う繊細な刺繍の施された白のニーハイソックスにも、その淫らな体液がゆつくりと染み込んでいた。既に足首にまでその染みが広がっており、このまま行けばつま先の先端からポタポタと体液が落ちることになるだろう。

快感を感じる度に恥ずかしいお漏らしをするメリユジーヌは、羞恥と快感がドロドロに混じり合った思考の中で蕩けている。それは恥ずかしいことが気持ち良いという快感に変わっている証拠であり、何も知らなかった無垢な少女がイジメられる”悦び”を覚えつつあることへの前兆であった。

(おゝっ♡♡♡ おかしい”……っ♡♡♡ おかしいよお♡♡♡ わっ、わたしは無理矢理、お尻捏ねられてるの”♡♡♡ マスターにされるの気持ち良い”……っ♡♡♡ このままじゃっ、へんになっちゃう♡♡♡ うひい——っッ”♡♡♡♡♡)

小学校高学年程しか無い小柄な肢体を『ビクっ♡♡♡ ビクンッ♡♡』と、断続的に震わせる彼女は足先が地面に着かない宙吊り状態のまま、発情したメスの濃密なスメルと汗の混じった香りを周囲に振り撒いている。何故、メリユジーヌが地面に足先が着かない宙吊りのままなのかと聞かれれば、マスターにその軽い身体を持ち上げられ、向かい合うような形で抱っこをされた状態だからであった。

正しく身体を完全に奪われた状態であり、彼女は甘く蕩けた嬌声を上げることしか出来ない。

「イグ——っ♡♡♡♡♡ イグっ♡♡♡♡♡ イ”っちやう”ッ♡♡♡ あ”っ♡♡

あうゝっ♡♡♡ おゝっ、おしり揉まれてえゝ……イゝっぢやうゝ♡♡♡ んあゝ——っ♡♡♡ あゝっ♡♡♡♡

竜種に於ける冠位 アルビオンの左手が人型となった正しく規格外の存在であり、並みのサーヴァントでは手も足も出ない程に絶対の強者であるメリュジーヌは、これまでの生きてきた中で自分の肢体を好き勝手に弄られる経験など、当然であるかのように一度として無かった。

例え自身の”番”となる相手を作ったとしても、自分が上位な立場にあると信じて疑っていなかったのだが……

「ひうゝ……っ♡♡♡ ウゝっ♡♡♡ おゝっ、お尻いっ♡♡♡ イひっ♡♡♡ ぐっ、グニグニい……っ♡♡♡ いひっ♡♡♡ ひっ、広げないれえ♡♡♡ お尻のお肉うゝ……っ♡♡♡ グニっとしやれるとお……っ♡♡♡ いひっ♡♡♡ いゝっ♡♡♡ まゝっ、ますたあゝ……っ♡♡♡ しよれっ♡♡♡ へんっ♡♡♡ へんになるう♡♡♡ あゝっ♡♡♡ んあ——っ♡♡♡」

大人の女性のような豊満で肉付きの良い大きな桃尻とは違う、小振りな大きさだがハリのある真っ白な肌が眩しいメリュジーヌの美尻が、マスターの大きな両手によつて驚掴みにされていた。正しく驚が獲物を掴むかのような手の形で彼はお尻のお肉を掴んでおり、マスターの指が少しでも動く痺れるような快感が走る。

彼女の体重が全てが、彼の両手に掛かっている。普通に考えればそれなりの重さを感じても良さそうなものだが、色々な経緯があつて人並み外れた膂力を持ったマスターには、メリュジーヌは正しく羽毛のような軽さであつた。このまま一日中、持ち上げたままであっても、彼にとっては造作も無いことであろう。

当然、柔らかなお尻の肉に合計十本の太い指が食い込んでおり、彼が指先にグツと力を込めたとすれば、どこまでも尻肉に指が沈み込んでしまいそうな錯覚を覚える程の柔らかさを感じられた。マスター

のお尻と指の隙間からは、大量に滲んだ汗と愛蜜、潮の混じった体液が零れている。

彼の指先が食い込む度に体液を漏らすメリユジーヌの様は、正しく熟した果実から止めどなく溢れる果汁のようであった。汗ばみ汁気タップリのお尻にマスターの太指が食い込む度に、彼女は頭の天辺がジリジリと焼けるような快感を感じ、半開きになった口から湿った呼吸と共に甘く甲高い嬌声を漏らす。

快感の波に耐え切れなくなったメリユジーヌは、何度目になるか分からない絶頂を迎える。それも性感帯の中でも絶頂を迎える部位としては弱い、“臀部”を刺激されて絶頂してしまう彼女は、正しく快感に対して弱々な雑魚メスであった。

最強種としてのプライドも忘れて、メリユジーヌは懇願をする。

「ひい……っ♡♡♡ イッ♡♡♡ やさっ、優しくう……っ♡♡♡  
あひツ♡♡♡ ひい……っ♡♡♡ あっ♡♡♡ あうっ♡♡♡ お  
っ、お尻でイクっ♡♡♡ まらいクうツ♡♡♡ ——イっ♡♡♡  
イックっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡ ううっ♡♡♡  
——っツ♡♡♡♡♡♡」

部屋の中に響き渡る程に大きな声を出した彼女は、マスターの背中に爪を立てながら身体を反らす。服越しに爪先が僅かに突き刺さり、皮膚から朱色の液体が僅かに滲むが、彼がそれを気にする素振りすら見せていなかった。

メリユジーヌの小振りなお尻がブルブルと左右に小刻みに震え、彼女は既に湿り気を帯びている青色のスカートの内側を大量に勢い良く噴き出した潮で濡らす。つま先から水滴が落ちるようにメスのフェロモンをタップリと含んだ体液が零れ落ち、彼女の股下に出来た淫らな水溜まりはその面積を更に広げている。

『ぴちやっ……ぴちやっ』と、恥ずかしい水音が鳴っており、その小さな音が何故か異様に耳に残った。

絶頂を迎える度にメリユジーヌは身体中から玉のような汗を滲ま

せ、快感に耐えるために頭を左右に振ったせいかな汗ばんだ頬には銀色の髪が数本ベツタリと張り付いていた。快樂によりトロトロに蕩けた顔に髪が張り付く様は、幼い容姿とのギャップもあってか、どうしようもない程に淫靡である。

未だ絶頂の波に吞まれているメリユジーヌの真つ赤に染まった耳元へと、マスターは顔を寄せると羞恥心を煽るような言葉をいつもより低めの声でボソツと囁き掛けた。俗に“言葉責め”などと呼ばれる類のものであり、被虐の悦びを覚えつつある彼女にとっては、正しく甘い蜜と遜色ない”毒”のようなものである。

「——お尻揉まれただけでイっちゃうのは、流石に感度が良すぎるよ。揉み心地も良いから……これからもつと気持ち良いことしたいのに、手の動きが止められないんだけど。このままじゃメリユジーヌのお尻が、もつともつと柔らかくて敏感になっちゃうね」

お尻を揉みしだく両手の動きを止めないまま、彼はメリユジーヌを絶頂へと導く愛撫を続けた。

「イ~~~~~~~~つツ~~~~~~~~♡♡♡♡ いひつ♡♡ イ……つ♡♡ イ~~~~~~~~るからあ~~~~♡ むりい……つ♡♡♡ まつ、まらくるう~~~~♡♡ めのまえつ♡♡♡ チカチカいっばい……つ♡♡ イ~~~~♡♡♡ とめつ、とめへえつ♡♡ ん~~~~つ、ひイ~~~~——つツ~~~~♡♡♡」

絶頂するのをギリギリの所で踏ん張ろうとするが、マスターは止めを刺すように彼女の耳をカプツと甘噛みする。そして、メリユジーヌの耳と彼の唇が触れ合ったまま、骨伝導だけで言葉が伝わってしまいそうな距離感で、最後のトリガーを引くように命令をした。

「良いから……イっちゃえ」

「~~~~~~~~つ~~~~♡♡♡ イ~~~~ク~~~~つ♡♡♡ イ~~~~グツ~~~~♡♡♡ イ~~~~つグ~~~~」



だ尻肉を左右に開いたり、逆に閉じたりを繰り返して大きな乳房を捏ね回すように、彼女のお尻の肉を痕が残ってしまいそうな強さで揉んでいる。

小さな頭を左右にブンブンと振って強過ぎる快感に耐えるメリュジーヌは、少し前まで思っていた恥も外聞もかなぐり捨てて懇願をしてしまう。

「いひっ♡♡♡ いっ♡♡♡♡ むりっ♡♡♡ もうイクのむりい♡ おっ♡♡♡、おしりへんになっちやう……っ♡♡♡ まっ♡♡♡、マスターゆうひへっ♡♡♡♡♡ ゆるしてえ……っ♡♡♡ えひいっ♡♡♡——っ♡♡♡♡♡」

次第に彼女のショーツは尻タブ同士の間食い込み、傍から見ればTバックを履いているかのような淫らな姿となる。スカートもその意味を為していない程に捲れ上がっており、辛うじて前面部分だけはショーツを隠してくれていた。

ギョツと絞れば淫らな汁がポタポタと落ちそうな程に濡れたショーツは、恥ずかしい所の柔肌にピッタリと張り付いている。小舟のような形をした秘所も布の上から分かる程に浮き上がっており、割れ目の上で充血したクリトリスも目を凝らせば容易に観察することが出来た。

「あっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ あひ……っ♡♡♡♡♡ れるっ♡♡♡♡♡ れるうっ♡♡♡♡♡ れちやうっ♡♡♡♡♡ ——っ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ ——っ♡♡♡♡♡」

彼女の心身は羞恥と快感によって完全に支配されており、四肢がだらりと下がって完全に力が入っていないかった。完全に癖が付いてしまった潮吹きを腰を『カクっ♡♡♡♡♡ カクッ♡♡♡♡♡』と前後に振りながら行い、遂には放尿のような勢いの無い排尿を始めてしまう。

——ぷしゅっ♡♡♡♡♡ ぷしゅうっ♡♡♡♡♡ ちよろろ……っ♡♡♡♡♡

愛液や潮で出来た水溜まりに黄金色の体液が混じり始め、濃密なメ







愛液や潮とも判別が出来ない体液を零していた。

純白のシーツが敷かれたベッドの上で、彼女は膝裏まである長さの銀髪を波立たせながらベッド全体に広げ、白く透き通るようなきめ細やかな肌を外気に晒している。汗などの体液に濡れた肢体からは、発情したメス臭が匂い立っていた。

均整の取れたメリユジーヌのしなやかな肉体は、穢してはならないという処女性を秘めており、雄の下卑た欲望を刺激する魔性の魅力が存在している。聖女のような清らかな者を穢してしまいたいという暗い欲望が男ならば等しくあるように、心の奥底に潜む悪魔が彼女を犯してしまえと甘言を囁いていた。

驚く程に細い腰を掴まれた状態で、腫れ上がったお尻に腰を叩き付けられるメリユジーヌは、すっかり敏感な性感帯となった尻肉をイジメられる悦びを覚えてしまっている。まだ本番が始まっていないのに、予行演習となる”尻ズリ”だけで何度も絶頂を迎えていた。

豊かな乳房で行うパイズリのように、左右の尻タブの間には腕のように太く長いペニスが挟まれている。マスターの腰が前後に動くのに合わせて、ズリユズリとペニスが動いていた。手淫とは違い摩擦も少なく快感としては弱い筈のだが、尻肉が叩き付けられる度に上げる嬌声や後背位で行うセックスのような視覚的な効果が十分な快感を与えてくれている。

鍛え上げられた硬い腹筋の下腹部をマスターは、一定の間隔でメリユジーヌの尻タブに叩き付けていた。従順なメスと化しつつある彼女に対して、悦ぶ言葉を的確に選択ながら責めている。

——パンっ♡♡♡ パンツ♡♡♡ パチュンっ♡♡♡ ぱちゅっ♡♡♡  
♡♡♡ パンツ♡♡♡ ぱちゅんっ！♡♡♡♡♡

「メリユジーヌのお尻っ、また大きくなったねっ。これから二人で気持ち良くなれるっ、セックスするのにっ。練習だけで気持ち良くなるのっ、本当にドスケベだねっ！」

「ごっ、ごめんなしゃいッ♡♡♡ いひっ♡♡♡ イっ♡♡♡ ドス

ケベおんなでっ♡♡ ごめんなしやいッ♡♡♡ あひッ♡♡ ひっ♡♡  
ひい…:…っ♡♡ イクゝうゝ——ッ♡♡」

腰の叩き付けられるリズムに合わせて、しゃつくりを上げるようにメリュジーヌは哭く。マスターが腰を掴んでいなければ、ベッドの上に五体投地をした状態で、全身をビクビクと痙攣させていたことだろう。

フレアスカートは完全に捲り上げられており、お腹の上で乱雑にまとめられていた。びちゃびちゃに濡れたショーツも、右足の足首に無造作にくしゃくしゃにされた状態で丸められている。下半身の防御力は絶無であり、恥ずかしく淫らな箇所が殆ど見えてしまっていた。

ピタリと閉じていたイヤらしい割れ目は性的興奮によって僅かに開いており、サーモンピンク色の愛蜜に濡れた淫肉がチラリと覗いている。ヒクヒクしながら『ぷしゅっ♡♡ ぷしゅっ♡♡♡』と、恥ずかしい体液を零す尿道口の上には、プツクリと膨らんだクリトリスが僅かに見えていた。充血したクリトリスは触って欲しそうに主張しており、乳首と同じようなイヤらしさを感じる。

そんな数時間前までの性に触れることの無かった身体と比較して、明らかに身体が交尾をするため準備を終えていた。お臍の下辺りにある子宮のズキズキという”疼き”が限界を迎えつつあったメリュジーヌは、恥も外聞も最強種としての誇りも捨てさり、ただのメスとして処女を奪って下さいとマスターに懇願をする。

「いひっ♡♡ イッ♡♡♡ まっ、ましゆたあ…:…っ♡♡♡ わたしのドスケベおまんこにっ♡♡ おっっ♡ おちんぽお…:…っ♡♡ おちんぽくださいっ♡♡ しえつくすっ♡♡ セックスがまん出来ないわたしにっ♡♡♡ ますたあのおちんぽいれてください——っ♡♡♡」

## 番外編：最強種は屈服を覚える―6

「――はあ、ーっ♡♡ んう、♡ はあ、……っ♡ ――ふう、♡」

湿り気を帯びた熱っぽい吐息と蜂蜜のように甘ったるい嬌声が、シェイクのようにドロドロに混ざり合っている。

誰かに何かを伝えようとする思考があって漏れる声では無く、どちらかと言えば呼吸音に近いものであった。噎せ返る程に濃いメスの膣えた性臭が密室と化した空間の中に籠っており、蒸し暑いとすら感じる部屋の中で、途絶えること無く響いている。

まだ成熟し切っていない年若い少女の汗や唾液、潮や尿など体外へと漏れた恥ずかしい体液は、上昇した気温により少しずつ気化して濃密なメス臭へと変わっていった。気化した濃密なメス臭と発情フェロモンは、言葉だけでは説明しようが無い程に淫靡である。

遙か昔から”匂い”とは本能に直接的に訴え掛ける作用があり、部屋に籠ったニオイは男であれば年齢に関係なく性欲を掻てるものであった。精通前の子供ですらまだ皮も剥けていない小さなペニスを膨らませ、手で触れることなくパンツの中に射精してしまいそうな程の破壊力を持っている。

もしも、この部屋に籠った淫らな香りを嗅覚では無く、視覚によって可視化することが出来るのなら、部屋全体が妖しい桃色をした濃霧に包まれていることだろう。刻一刻と雌の淫靡な匂いは濃くなっており、シーツなどの布製品や壁紙、絨毯にまで匂いが染み付いてしまっている。

暫くの間、この淫らな香りが消えることは無いだろう。

染み付く程に籠ったニオイは正しく天然の媚香となっており、オスの性欲を燃え盛ったマグマのようにグツグツと煮え滾らせ、焼き石の上に落とされた水滴のように理性を軽々と蒸発させた。言葉よりも分かり易い本能に根差した”求愛”となっており、本人の意思や理性が取り繕うことが出来ない部分で雄を誘惑する。



悲鳴にも近い嬌声を上げてしまう彼女は、トロトロの愛蜜で濡れそぼった割れ目から『ぷしゅ……っ♡♡♡』と、淫らな体液を恥ずかしい水音を立てながら嘔き出す。小振りな桃尻を『ビクっ♡♡♡ ビクン……っ♡♡♡』と小刻みに震わせながら、少女はこれから訪れるであろう強い快感と意識すら消失する絶頂に怯えていた。

——幾ら哭き叫んでも助けが来ることの無い場所で、最強種だった少女は雑魚メスへと堕ちていく。

『——ごっ、ごめんしやいッ♡♡♡ いひっ♡♡♡ イっ♡♡♡  
ドスケベおんなでっ♡♡♡ ごめんしやいッ♡♡♡』

自分がドスケベな女であることを謝る無様で情けない銀髪の少女——メリユジーヌの姿は、どうしようも無い程に卑猥で淫靡であった。

最初の頃の強気で余裕ぶった態度は完全に鳴りを潜めており、ご主人様のご機嫌を窺う従順なペットのようである。本能がこの”強く逞しい雄”には勝てないと降参してしまっているため、彼女は抵抗らしい抵抗をすることが出来ていない。

『あひッ♡♡♡ ひっ♡♡♡ ひい……っ♡♡♡ イクっ、う——ッ♡♡♡』

何度目になるかも分からない絶頂を迎えると、シミ一つ無い背中を

弓のように反らせたまま、お尻を『ビクっ♡♡ ビク……っ♡♡♡♡』と痙攣させるように震わせる。尿道口からおしっこを漏らすように、弱々しく潮を噴く。

視界が眩むような快感に琥珀色の瞳は自然と天井の方を向き、開いた口から舌先を突き出す蕩けたアクメ顔をしており、少なくとも幼い容姿をした彼女がして良い表情では無かった。

今のメリュジーヌがしている体勢を分かり易く説明するのならば、ネコ科の動物が大きな欠伸と共にグうっつと伸びをした時にするポーズに良く似ている。まだ発展途上である肉付きの中で最も性的な魅力を感じる柔肉が詰まった”美尻”をキュツと突き出しており、自身の性的魅力を最大限に活かすようにワザとらしく強調する体勢になっていた。

——しかし、彼女は自らの意思により、雄を誘うポーズをしている訳では無い。

黒髪の青年——”藤丸 立香”からの性的なお仕置きにより、この体勢に自然となってしまうたというのが正しい認識である。メリュジーヌは既に数え切れない程の絶頂を迎えており、四肢には全く力が入っていないかった。自分の意思では手足を動かすことすらままならず、声を上げることしか出来ない状態だ。

結果、彼の嗜虐心という欲望の赴くままに、彼女はイヤらしい肢体を弄ばれている。

指先がどこまでも沈み込んでしまうと錯覚する程の柔らかさと、沈み込んだ指を跳ね返す弾力を併せ持つ魅惑の尻タブをパン生地でも捏ね回すように、指先の形通りの跡が残る程に強く揉みしだいていた。その他にも小振りだが柔肉がタツプリと詰まった尻タブに、マスターは腰を何度も餅つきでもするかのように叩き付けたのだ。

『パンっ♡♡♡ パンツ♡♡♡♡ パン——っ♡♡♡』と、柔らかい肉に硬い何かがぶつかる拍手にも似た破裂音が部屋の中で断続的に鳴り響き、その直後にメリュジーヌは肺から空気の抜けるような音と嬌声が

混ざった音を漏らしている。

普段はフレアスカートによって隠されている魅力的な臀部を、正しく欲望のままに気が済むまで弄ばれていた。

罰を与えて動物が従順になるまで躰けをするように、メリュジーヌは彼に尻肉をイジメられて調教されている。処女雪のように白くきめ細やかな肌が眩しい尻タブの柔肉は、今では熟した林檎のように真っ赤に染まり、元から一回り以上大きくなっていると錯覚する程に腫れ上がっていた。

傍から見れば痛々しいと思う程に真っ赤に腫れているが、その桃尻が『ビクっ♡♡ ビクンっ♡♡』と震え尻タブの柔肉が波打つ度に、イヤらしい割れ目から粘っこいトロトロの愛蜜が溢れている。透明だった蜜も次第に交尾用の本気汁へと変化していき、今では白濁とした愛蜜で粘性も上がっていた。

人口的に作られたローションよりも性行為に適した、正しくセックス専用の潤滑液である。メスのフェロモンをタップリと溢れんばかりに含んだ体液がペニスに塗り込まれば、ペニスの反り返りは大きくし、半固形のダメダメなザーメンの射精量も更に増えることは間違いないかった。

柔かくも無数の鬚々が密集した狭っこい穴っぽこに、人肌に温められたドスケベ潤滑液が文字通り溢れる程に詰まっているのだ。男であるならば膣壁が無くなるまでペニスのカリ首で掘削してやろうと思うのは、オスとして当然の思考回路である。

マスターは鋼の理性を持っているため、直ぐにメスを犯すような短絡的なことはしないが、絶対に獲物を逃がさず孕み袋として生涯を終えることを誓わせるつもりでいた。その空を思わせる瞳には情欲と独占欲が緋い交ぜとなった妖しい光が灯っており、正しく飢えた狼のようなオスの相貌をしている。

今は後ろを向いているため彼の飢えた獣のような相貌が見えていないメリュジーヌだが、それを目撃すれば『ひい……っ♡♡♡』と、怯えた悲鳴のような嬌声を上げながら、尿道口から黄金色の小水をチョコチョコとお漏らしするだろう。それは純粋な恐怖によるものであ



り、自分が意味合いは異なるが”食べられる”と理解するからだ。

——完全にマスターが捕食者の立場であり、メリュジーヌはか弱い被食者であった。

最強種の竜であるメリュジーヌの『傲慢』なプライドは見る影も無くなり、今では尻タブにそよ風が撫でるだけで喘ぐ程に敏感な性感帯に変えられ、それに法悦を感じるマゾっ娘なエロメスに調教されていた。これからは彼に臀部を軽く撫でられただけで、彼女は秘所をしっかりと濡らしてトコ顔をしてしまう。

メリュジーヌは真後ろから細く括れた腰をガツシリとマスターに鷲掴みにされ、ベッドにピツタリと密着していた下腹部を軽々と持ち上げられていた。結果的にお尻を天井に向かって突き出す、男を誘惑すような態勢になっているのだ。

真っ赤に腫れ上がった尻タブの間に彼の長大なペニスが挟み込まれ、ズリズリと尻コキをするようにマスターの腰がゆつくりとだが力強く前後に動かされている。正しく腕のような太さと長さを持つペニスは、肩甲骨の辺りに亀頭の先端が振れていた。

股下から鳩尾まで余裕で届く馬のペニスをよりも凶悪なフォルムをした肉棒が、これから味わう媚肉の味見をするようにゆつくりと擦り付けている。大量にかいた汗で滑りの良い背中に、ペニスの裏筋が前後に這い回っていた。

それは遠くから見れば一般的に”後背位”と呼ばれるセックスの体位であり、後は粘っこい蜜を止めどなく溢れさせる蜜壺に長大な怒張したペニスをずっぷりと挿入すれば、直ぐにでも本気交尾が始まってしまう。そして、無防備な弱々竜の卵子に屈強な人間の精子が無数に襲い掛かり、簡単に受精してしまうのが目に見えていた。

絶頂の余韻から未だ抜け出せない彼女は、当初の目的から立場が”逆転”してしまったことを僅かに働く思考の中で嘆く。マスターを独占することなど夢のまた夢であり、逆に自分が彼の所有物になってしまうのだと理解させられていた。

(ひう——ッ♡♡ こっつ、こんな筈じゃ無かったのに……っ♡♡♡  
わっ、わたしがマスターのモノになっちゃう♡♡ ひい——ッ♡♡  
おっっ♡ おちんぼ熱い……っ♡ こっつ、腰掴まれて逃げられ  
ない♡♡♡♡ ——いっひっ♡♡♡)

左右の尻タブの間で圧倒的な存在感と高熱を放つ勃起ペニスの威  
圧感に怯え、お尻をモジモジとさせるメリユジーヌだが、細腰を掴む  
彼の大きな手が逃げることを許してはくれない。寧ろ、オナホールを  
扱うような乱暴な荒々しさで、彼女の桃尻を自分の近くにグツと引き  
寄せられる。

メリユジーヌが這う這うの体でベッドの上から逃げようとしても、  
今のような感じでマスターに拘束されるのは目に見えていた。そし  
て、逃げようとしたことを言葉と愛撫でねちっこく責められながら、  
更に激しい”お仕置き”をされるのは先ず間違いない。

さながら蜘蛛の巣に絡み取られた蝶であり、後はどう甚振られなが  
ら捕食されるかの違いである。ザーメンボテ腹で膣穴から大量の子  
胤を溢れさせながら受精しても許して貰えず、文字通り彼の気が済む  
までハメ潰されるのが目に見えていた。

膨らみ掛けの小振りな乳房や濡れそぼった秘所を隠せていない程  
に肌蹴た衣服は、大量に掻いた汗によりじっとり湿っていた。性的  
興奮により赤らんだ、艶めかしい素肌の殆どが見えている。中途半端  
に残っている衣服が、裸であるよりも何倍もイヤらしかった。

処女雪のように真っ白できめ細やかな肌が艶めかしい尻タブの柔  
肉は、熟した林檎のように真っ赤に腫れ上がっている。傍から見れば  
痛々しい程に腫れて見えるかも知れないが、お尻が『ビクっ♡♡ ビ  
クンっ♡♡』と震える度に、淫らな割れ目から粘っこいトロトロの蜜  
が溢れていた。

子宮がズキズキと下腹部が痙攣するように疼いており、頭の中が交  
尾のことで一杯になっている。

絶食をしている時の飢餓感にも似た感覚に耐え切れず、メリユジー  
ヌは遂に最後の一線を越えてしまう。それを越えたが最後——自分  
がマスター専用の孕み袋兼性奴隷になってしまおうと理解していなが



……っ♡♡♡ んゝひいゝ——ッ♡♡」

彼女は小振りなお尻を左右にフリフリと揺らしながら、彼にペニスを挿入して欲しいと懇願する。

正しく花卉のような花開いた小陰唇といった淫らな割れ目は、白濁とした蜜を溢れさせる膣穴がヒクヒクとしており、交尾用の粘っこいトロツトロな蜜を溢れさせている。膣穴の上部には充血してプツクリと膨らんだした肉豆や尿とも潮とも判断の付かない淫液を『ぴゅっ♡♡ ぴゅう……っ♡♡』と、噴き出す尿道口が外気に晒されていた。

度重なるメリュジーヌのハメ乞いに我慢の限界を迎えたマスターは、上体を彼女の方に倒して先端まで真っ赤に染まった耳元に唇を寄せると、下腹部の奥にある子宮に響くような低い声色でボソツと呟く。因みにマスター大好き勢なジャンヌオルタ辺りが同じことをされれば、間違いなく絶頂を迎えて締まりの無いアクメ顔を晒してしまう程の破壊力があつた。

「……今からハメ潰して、絶対に孕ませるから」

「——ッ♡♡♡ あゝ……っ♡♡」

必死にペニスの挿入を懇願するメリュジーヌの痴態に性欲を刺激され、マスターは腰を動かして完全に怒張し切ったパンパンという表現が似合う亀頭を膣口へと触れ合わせた。『くちゅっ♡♡♡』という粘っこい水音が膣口から鳴り響き、彼女は初めて膣粘膜に触れるペニスの熱と硬いゴムのような感触に、大きな目を限界まで見開きながら白黒とさせる。

——ずちゅっ♡♡ ずぶっ♡ ずぶぶぶぶ——ッ♡♡

「まっ、まっれ……っ♡♡♡ おゝっ♡♡♡ おゝっ♡♡♡ おゝおゝ——ッ♡♡」





♡♡♡ イ「っちゅゃ♡♡♡ おお——ッ♡♡」

——ぷしッ♡♡ プしッっ♡ ♫ぷっしゅううううーっッ♡♡♡

快感と屈服する悦びにより簡単に絶頂を迎えるメスは、尿道口から潮を噴き出しながら喘ぐ。

そんな聞いてるだけで性欲を更に刺激される淫らな声の発生源を辿れば、小学生と見紛う程に小柄な体軀をした長い銀髪が美しい少女がいた。彼女の着ている白いレースの付いたフレアミニスカートが可愛らしい洋服の殆どは肌蹴けており、透き通るような透明感のある白く艶めかしい肌の大半が見えている。

シミ一つ見当たらない処女雪を思わせる色白な肌は、性的興奮により赤らみじつとりと汗ばんでいた。

他にも桜色に硬くシコった乳首やぷつくりと膨らんだ小さめの乳輪、慎ましやかな大きさだが柔らかかそうな乳房や小柄な割にムツチリとした肉付きのお尻、濡れそぼり粘っこい愛蜜を溢れさせる卑猥な割れ目など、普段の生活であれば隠している場所が外気へと晒されている。

大事な所を少しも隠すことが出来ない乱れた衣服により、一糸纏わぬ裸の状態よりも遥かにイヤらしい姿が出来上がっていた。

銀色に輝いていると錯覚する程に美しい艶髪が白いシーツの上に波打つように広がっている様は、どこか天使を描いた宗教画めいた神聖さすら感じられる。しかし、その神々しい程に美しい銀髪が存在でさえも、火照った肢体の色つぼさを余計に際立たせる装飾品のようになっていた。

性と無縁に見える無垢な美少女の淫らな痴態が、視覚的效果により雄を更に興奮させてしまう。

そんなただ立っているだけでも劣情を煽る恰好をしている少女だが、今は獣がするような四つん這いの体勢となっていた。グラビアアイドルが撮影の時に良くしている“女豹のポーズ”とほぼ同じであ

り、母性の象徴である乳房に勝るとも劣らない性的な部位であるお尻を強調する体勢をしている。

——彼女が持っている性的な魅力を、最大限に活かすポージングであつた。

男ならば乱暴で無遠慮に尻タブを指の跡が残る程に強く揉みしだき、腫れるまで平手で叩きたいという欲求に、心と体が支配されてしまいそうな程の破壊力に満ちている。実際に青年は少女の肢体を欲望のままに弄んで舐り、自分から”おねだり”をして犯して下さいと懇願するまで執拗に愛撫を続けた。

その結果、彼女は今のような完全に発情し切った、”繁殖欲求”に肉体が支配されたメスとなつたのである。

「いひっ♡♡ あ…っ♡ ひぎっ♡♡ いっ♡♡ おっ♡♡  
♡♡ おお——っ♡♡♡」

発情期に入った獣の哭声にも似た濁音の混じりの嬌声が、少女の半開きになつた口の隙間からガムシロップのように甘つたるい唾液と共に漏れ出る。口端から形の良い顎先に向かって流れた唾液の雫が、純白のシートに向かってポタポタと零れ落ち、円形の小さな染みを作り出していった。

玉のような汗を浮かべるシミ一つ無い背中をグツと反らせる彼女の姿は、銀糸のような美しい髪も相まって白銀の毛皮が美しい気高い狼を彷彿とさせる。しかし、今の少女——メリユジーヌは気高い獣などとはかけ離れた状態であり、どちらかと言われれば雄に屈服する肉欲と被虐の悦びに溺れる哀れなメス犬に近かつた。

四つん這いの体勢で哭くように嬌声を上げることしか出来ず、膣孔をペニスで押し拡げられる快感に悶えている。

「——おっ♡♡ おっつきい…っ♡♡♡ いぎっ♡♡ おっちん



ぽお……っ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あひっ♡♡♡ おまんこ♡♡♡ おまんこひろがつて♡♡♡ うっ♡♡♡ あ……っ♡♡♡ まっ、”ましゆたあ”……っ♡♡♡ おなかミチっ♡♡♡ ミチっ♡♡♡ て、なつて”り”ゆう”——っ♡♡♡♡♡」

彼女は必死に自分のマスターである”藤丸 立香”の名を呼ぶが、それは彼の興奮をより高めるだけであった。腰を押し進められて締め付けの強い膣肉を掻き分けながら、お腹の形がぽっこりと変わる程に大きなペニスが挿入されていく。

膣孔を保護するための膜を簡単に破られ、小柄な身体であるが故に狭い膣孔を無理矢理に押し開けられる。無数にある膣壁や柔らかな膣肉がペニスにご奉仕するためにネットリと絡み付き、フェラチオをするように吸い込んでいると錯覚する程に受け入れていく。

メリュジーヌが竜でなければ痛みを感じて然るべきな状態であったが、残念ながら感じるのは快感や膣孔を拡げられる圧迫感だけであった。ノイズの入らない快楽は正しく麻薬のような中毒性があり、一度でも味わってしまったえば自慰行為では満足が出来なくなる”甘い毒”である。

——永遠に解毒の出来ない毒に犯され、メリュジーヌは更に堕ちて行く。

身悶える彼女は唾液濡れの艶めかしい舌先を半開きの口から伸ばし、これまで味わったことの無い快感を少しでも身体から逃そうとしている。しかし、それだけでは快感を逃し切ることなど到底出来る訳も無く『ビクっ♡♡♡ ビクッ♡♡♡』と、電気が流れたかのように幼くも色気を感じる肢体を震わせていた。

ペニスの形にぽっこりと膨らむお腹がビクビクと痙攣を起こす度に、尿道口から潮とも尿とも判別が出来ない体液を噴いている。息を整えようとしても快感により呼吸が乱れ、軽い絶頂によって息が止まってしまう。

何度も呼吸が出来なくなつて酸欠になつた脳は思考が鈍っており、快感や幸福感だけを感じる受容体となつていた。

「あ——つッ♡♡♡ あッ♡ あ♡ひっ♡♡♡ はあ——っ♡♡♡ ふう♡…:…♡ はあっ♡♡♡ いひっ♡♡♡ ひい…:…♡♡♡ イク♡っ♡♡♡ ああ——ッ♡♡♡」

本来ならば呼吸など殆ど必要が無い存在であるのに、喘ぎ声と荒い呼吸がドロドロに混じつた声とも呼べない音を漏らす。何かに耐えるように長い銀髪を振り揺らしながら、メリユジーヌは頭を左右にブンブンと振っている。

サラサラと揺れる髪により発情したメスのフェロモンが甘酸っぱい汗の香りがベッドの上に振り撒かれ、ドロドロに蕩け切つた爬虫類に似た黄金色の瞳は被虐の悦びに溺れて淀み濁つていた。快感とイジメられる悦びを身体も心も完全に覚えてしまい、これから一生慣れることの無い感覚により溺れている。

彼女の火照つた肢体を欲望のままに弄んでいる相手こそ、これから永遠の時を共にする”番”となるマスターであつた。

メリユジーヌにとつては本来ならば、彼と物理的に戦えば比喻抜きに指先一つで勝てる程に自分の方が強い。そして、存在の格だけで見ても人間であるマスターなどよりも遥かに高い原初の竜に近い存在であるのにも関わらず、今は服従するような四つん這いの体勢を強制的に取らされて犯されている。

そして、それが嫌では無く”嬉しい”と感じてしまつていのが、メリユジーヌが落ちてしまつてい証拠であつた。真夏のチョコレートのようにドロドロに蕩けた思考の中、彼女は未だ僅かに残つている自分が最強であるというプライドが無駄な危機感を告げている。(わっ、わたしの方がつよいのに…:…♡♡♡ いひっ♡♡♡ マスターの好きにされるの癖になるっ♡♡♡ あ——つッ♡♡♡ 気持ち良いのであたまいっぱいになつちゃう♡♡♡ こっ、こんな”未来”は知らないよお…:…♡♡♡ イ——っッ♡♡♡



の身体を前に倒して逃れようとするが、それも細い腰をマスターに  
がっしりと鷲掴みにされているため叶わない。

逃げることもすら彼女はオスに組み敷かれ身体を弄ばれる悦びを覚  
えてしまい、被虐趣味に目覚めてしまった発情期に入ったメスでしか  
ない。それもこれも全ては色々と規格外な存在へと変わったマスター  
ターが原因であり、運命とでも呼ぶべき観測されていた未来からも容  
易に逸脱してしまっている。

彼は手枷すら簡単に壊してしまう腕力を持っており、作家系サー  
ヴァントになら文字通り力で勝つことの出来る力を持って、メリユ  
ジーヌの小柄な割にムッチリとした肉付きのお尻の柔肉を両手と腰  
の叩き付けでタツプリとイジメていた。

その結果、彼女の真っ白だった尻タブは、真っ赤に腫れ上がってい  
た。

一見するとお尻が一回り大きくなる程に腫れて痛々しい見た目を  
しているが、長大なペニスの握り拳大の亀頭を啜え込む割れ目の隙間  
からは、粘っこい交尾用の愛液が止めどなく溢れている。明らかに快  
感を覚えている彼女の股下に敷かれたシートには、粘っこい液溜まり  
が出来上がっていた。

——部屋の中には噓せ返りそうな程に、濃密なメス臭が籠ってい  
る。

番となるオスにタツプリと尻肉をイジメられ続け、真っ赤に腫れ上  
がった小振りだがハリと柔らかさを兼ね備えた美尻。見ているだけ  
でオスの生殖本能を根本から激しく揺さぶられ、メスのエロスを象徴  
する部位の一つ。

絹のようにきめ細やかで処女雪のように真っ白”だった”尻タブ  
は、今では熟した林檎を彷彿とさせる朱色に染まっていた。メスの発  
情フェロモンをタツプリと含んだ甘ったるく酸っぱい匂いの汗に濡  
れ、艶めかしい光沢と匂い立つような濃密なエロスを放っている。

全体的に見れば幼くまだ成熟し切っていない細く小柄な体軀であ

るのにも関わらず『もう赤ちゃんが産めますっ♡♡♡』と、激しく主張するような柔肉が付いた丸みを帯びた桃のようなお尻は、正しく矛盾を内包した反則的な組み合わせであった。

小学生に見える小柄なメリュジーヌと中背だが筋肉質な体躯のマスター、その体格差だけでも犯罪臭がしてしまう。

彼女が冠位の竜の左手が人の形を成した存在でなければ、現代の倫理観では犯罪になりえる淫らな行為であった。しかし、彼にはサーヴァントとは言っても実年齢が10歳近いお嫁さんも複数人いるため、今更な話であるかも知れない。

黒い騎士王や竜の魔女などを筆頭とした女性陣は、常日頃から『マスターは”雑食”で大食いです……っ♡♡♡』と、見境なくお嫁さんの数を増やすマスターについて語っている。実際に相手の生まれた国や年齢、時代や鬼や神なども気にせずに分身の”オンナ”にしている彼は、現代に蘇った性豪で名を馳せた英雄　ヘラクレスのようであった。

セックスに於いては人外の域に達しつつあるマスターを相手に、生娘のメリュジーヌなど相手になる訳が初めから無かったのだ。

——ずりゅっ♡♡　ずりゅっ♡　じゅりゅりゅりゅう——っ♡♡  
……ズんっ♡♡♡

「お——っ♡♡♡　いひっ♡　イ——ぎ……っ♡♡♡　お——っ♡♡♡♡♡♡♡」

ゆつくりとだが確実に挿入されていく長大なペニスだったが、小柄な彼女の膣孔の行き止まりに容易に到達してしまう。誰も触れたことが無いプリッとした子宮口に硬いゴムのような質感をした熱を持った亀頭が触れ、その強い衝撃を伴う快感によってメリュジーヌは背を仰げ反らせる。

潮を『ぶしゅっ♡♡　プしゅっ♡♡♡』と、噴き出しながらお尻を震わせ、彼女の目の前は真っ白な光に包まれた。意識が白む程の絶頂

を迎えてしまっているが、マスターはまだまだ満足していない。人間よりも遙かに頑丈な竜であるメリユジーヌに対して遠慮など必要は無く、彼は彼女の細腰を掴む両手に力を込めながら腰を更に押し進める。

「いぎゅつ?!♡♡♡ あッ♡ いひっ♡♡ ——いッ♡♡ も  
うおッ♡くッ♡♡♡ おッくッからあッ——っッ♡♡♡ イッ  
きッゅ——っッ♡♡♡ イッいッくッくッくッくッくッくッくッ♡♡♡  
♡」

「メリユジーヌはこれから俺のモノになるんだから、チンポも根元まで挿入れられるように頑張ろうね。いっぱいチンポでゴリゴリした後に、精液で沢山マーキングするから」

「——っッ♡♡♡ きゅう……♡♡♡ しッきッゆうつぶれ  
りゅっ♡♡♡ あッひっ♡♡♡ いッっ ♪ ずっといっへりゅっ♡♡♡  
イックッ——っッ♡♡♡♡ イッっクッううッううッううッ  
ううッううッううッううッ——っッ♡♡♡♡」

メリユジーヌは子宮を押し潰されて鳩尾まで押し上げられ、女性の腕二本分ほど長く太いペニスを根元まで挿入される。股下から鳩尾までペニスの形にお腹が膨らんでおり、彼女の蕩けきった表情は誰にも見せられないメス顔であった。

「あ……っ♡♡♡♡ いひっ♡♡♡ ——っ♡♡♡♡」

余りの快感と深い絶頂により尿道口は緩み、じよろじよると卑猥な水音と共に黄金色の体液が溢れる。

「二人だけ気持ち良くなってるんで、メリユジーヌのおまんこで俺も気持ち良くして——よっ」

——ッりゅッ♡♡♡♡♡ りッゅッゅッ♡♡♡ ゴリッゅりゅり



——パちゅんっ♡♡♡♡♡ ぱん……っ♡♡♡♡ バチュんっ♡♡  
とちゅん……っ♡♡♡♡

「イクッ♡♡♡♡ イく……っ♡♡ イ——ッ♡♡ すっ、  
ずっとイツへりゅう♡♡♡ あ——っ♡♡♡ まらデキちゃ  
うっ♡♡ マスターとのあかちゃんまらデキちゃう……っ♡♡♡  
——いひっ♡」

完全に堕ちてしまったメスの絶頂声と肉同士のとぶつかり合う破裂音が絶え間なく響き、二人だけの空間には男と女の濃密な性臭が籠っていた。あれからマスターのペニスでポルチオアクメを覚えるまで犯され、ソフトボールよりも大きな睾丸の中で煮詰まった精液を子宮に直接注がれたメリュジーヌは、妊婦のようなお腹になっている。

怒張したペニスと膣口の隙間からは白濁とした精液と愛液の混じった汁が漏れており、イヤらしく粘っこい水音が腰のピストン運動に合わせて鳴っていた。完全にマスターのオナホ嫁になっていること、彼女が、もう抵抗する様子も無く受精卵を沢山作っていることに夢中である。

最初の射精の時点で受精してしまったメリュジーヌは、その後もマスターに『孕めっ』と命令されたりお腹側から子宮を押されて排卵を強要させられてしまい、既に三人の子宝に恵まれてしまっている。尊い竜の原種の血を人間の血で薄められ、可愛らしい子供を何匹も産むことが決まっていた。

——今は四人目を作るために励んでおり、精液で膨らんだ子宮をペニスで揺らされている。

正常位や駅弁など様々な体位でメリュジーヌを犯したが、彼女が一番好きになってしまった後背位でピストンをしている。前戯でお尻



をイジメていた時よりも真っ赤に腫れ上がった尻タブに腰を叩き付けながら、マスターは敢えて完全にマゾになったメリュジーヌが悦ぶ強い口調で責めていた。

「もつとタマゴだせつ、俺との赤ちゃんいっぱい産めつ！ メリュジーヌは頑丈だから一回で十人だって産めるから、これから毎年イヤって位に孕ませまくってやるっ」

「お~~~~~~~~っつっつ~~~~~~~~♡♡♡♡♡♡ まられるっ♡♡♡♡ たまごいっぱいれりゆう——っ♡♡♡ ましゆたあのあかちゃんうんじやう……っ♡♡♡ うあつ♡♡♡ あ——んあッ……！♡♡♡」

♡ ————ぷりゅッ♡♡♡♡♡ ぶちゅっ♡♡♡ ぶちゅちゅ——ッ♡♡♡♡

数え切れない精子が泳ぐプールになってしまっている子宮の中に、マスターの命令に従って排卵してしまった卵が出てしまう。無防備な卵子に屈強な精子達が群がり、一つの卵子に三つの精子が入り込んでしまった。既に受精してしまっている三人の子供に加え、新たに可愛らしい三つ子の赤ちゃんが追加で生まれてしまうことが決定する。  
（いひっ♡♡♡♡ まっ、まら赤ちゃんできちやつら♡♡♡ わたしのカラダっ♡♡♡ マスターの命令に逆らえなくなっちゃってるっ♡♡♡♡ もうマスターが満足すりゅまで、おまんこでご奉仕するしかないよお……っ♡♡♡ えへ……っ♡♡♡♡）

命令の通りに赤ちゃんを孕んでもオナホドールのように乱暴に犯され続けるメリュジーヌは、誰にも見られたくない恥ずかしい顔をしているのに口端を吊り上げてしまう。絶頂から抜け出すことの出来ない彼女に止めを刺すように、マスターは何度目かになる射精を子宮口に押し付けながらする。

「——また射精するからっ！ 新しい精子で孕めっ」  
「あ——っッ♡♡♡♡♡」



評価者250人記念 番外編―10 BBちゃんは  
クソ雑魚オナホAIに堕ちていく

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちてい  
く―1

「―うーん、最近はとっても暇ですねえ」

声という名の”音”である筈なのに何故か”甘ったるい”と感じる女の子の声が、どこか現実味が希薄な淡いピンク色の光りに包まれた空間の中に木霊していた。ここは声の主が作り出した固有結界に似た空間の中であり、彼女以外には許可や招待が無ければ入ることは叶わない場所である。

「イベントらしいイベントもまだまだ先のことですから、今はさむい雪山に缶詰め状態です。夏になったらハワイの方で、楽しいイベントでも開きたいですねえ」

甘く艶のある少女の声が響いている周囲を見渡すと、テレビ番組の撮影スタジオを彷彿とさせる内装となっていた。そのような空間の中で司会者が立つ場所がありそうな講演台の上に、彼女が長くしなやかな脚を組んで座っている。

一見すると制服のような衣装の上に黒いロングコートを羽織った服装は、奇抜だが不思議と少女に良く似合っていた。

少女が履いている短過ぎる黒のスカートは、直立しているだけでも隠すべき部分が隠せていない。そんなただでさえ短いスカートだが、脚を組んで座ったことにより更に捲れ上がっている。

実際に着ているのは白のレオタードであるのだが、ショーツにしか見えない乙女の秘所を覆う布地が、両脚の付け根部分までモロに見えてしまっていた。もう少しレオタードの締め付けが強ければ、イヤらしい食い込みが作られていたことだろう。

白というワイシャツなどでも透けやすい色をしていることもあり、鼠蹊部を凝視すれば恥ずかしい割れ目の形を視認することが出来るのである。男であれば見ないように努力したとしても自然と視線が吸い寄せられてしまい、目を血走らせ飢えた獣のような視線を向けてしまうことだろう。

「亜種特異点の発生も落ち着いちやって今は平和そのものですし、何か面白いことがないと”BBちゃん”は退屈で死んじやいそうですう……」

暇を持て余すという言葉がそのものズバリ当て嵌まる、自分のことを『BBちゃん』と呼んだ少女の髪は美しく目を惹き、照明の光を髪のカューテイクルが反射し、天使の輪と呼ばれる光沢が浮かび上がっている。

女性ならば誰もが羨むような艶のある長髪は、例えるならば宝石を細い糸状に成形して丹念に束ねたかのようなようであった。照明の光を反射して光っているように見えているだけなのだが、髪が自ら発光しているような錯覚を覚える程である。

後ろ髪の両端が地面に届きそうな位に長い艶やかな紫髪を、白魚のような人差し指でクルクルと弄びながら、瑞々しい桜色の唇を軽く尖らせて独り愚痴っている。物憂げにも見える退屈そうな表情を浮かべた彼女は、儂げな美少女という概念をそのまま体現していた。

和名では紫水晶とも呼ばれるアメジストに似た色をした大きな瞳や小鼻が小さくスツと通った鼻筋、リップクリームを塗っていないくとも瑞々しい桜色の艶やかな唇、シミや皺一つ見当たらない卵肌と形容されるハリと柔らかさを両立する肌。

顔を構成している一つ一つのパーツだけで見ても端正な作りをしているが、大きな括りで見ると、まだあどけなさが残る童顔寄りの可愛らしい顔立ちである。少女から大人へと花咲き誇る寸前のような、どちらの魅力も高いレベルで併せ持っていた。

年若い女の甘く爽やかだがどこか背徳的な色香は、この大人になる

直前のメスにしか出すことは出来ない魅力である。

おおよそ身長150cm半ばという小柄さと白く細い首、華奢な肩幅や綺麗なラインを描く鎖骨、細くしなやかな手足なども相まって、見る者に繊麗な美少女という印象を与えているように見えたが——『ムチっ♡ ムチッ♡♡』と、擬音が聞こえてきそうな程に乳房やお尻が育っていた。

鎖骨から下に視線を向ければパツパツに布を押し上げて生地を虐待する、小玉スイカのように大きく豊かに実った乳房やキュツと括れたウエストからは考えられない、成熟したメス特有の広い骨盤が窺える太ましい腰回り。安産型の大きく形の良いお尻やニーソックスを履けば、確実に食い込み柔肉が乗るムッチリとした肉付きの良い太もも。

細身のくせに男が悦ぶ所にだけ淫らな柔肉をタツプリと蓄えた販促的なドスケベボディであり、見ているだけで情欲の炎が燃え上がっていくのを実感することが出来るだろう。ペニスを怒張させる海綿体に自然と血液が集まっていき、ズボンを突き破りそうな程に張り詰めためさせる。

童顔には似合わない肉感たっぷりのボディから、濃密なメスの香りを匂わせている。蜜蜂や蝶を誘惑して種を残すために満開に咲き誇る花のようであり、その色香に誘われるのが虫か人間の男であるかの違いしか無い。

しかし、”薔薇に棘あり”などという西洋のことわざがあるように、BBに至っては猛毒がタツプリと塗りたくられた鋭い棘を持っていた。

彼女の可憐な容姿と肉感的な身体に惑わされた愚かな人間が、どのような末路を辿るのかと聞かれれば、五体満足で生きていただけで御の字と言った具合である。最悪の場合は死が救済となり得る程に悲惨な目に合うため、絶対に手を出してはいけない相手の内の一人だ。

——BBは普段から大の人間嫌いを普段から公言しており、自他共に認めるルールを破りまくる違法改造の化身である。

朝飯感覚で世界を滅亡させようとする一方、明るくおしやまな後輩として”センパイ”を振り回すコトに全力を尽くす後輩系デビルヒロイン。人類最古の英雄王に『ビースト亜種』であると、お墨付きをされている程に危険な存在である。

聞いているだけでお腹が一杯になりそうな設定であり、頭痛がしてくるような破綻した性格をしているが、実際に彼女に振り回されているセンパイの心労は更に大きいことだろう。

そんな暇を持て余してしまった危険人物であるBBは、いつものように”良くないこと”を考え始める。暫く考えた後に何かを思いついた彼女の瞳は愉悅により細まり、艶やかな色気を感じる口元は三日月のような弧が浮かんでいた。

何故、BBがここまで娯楽に飢えているのかと聞かれれば、ムーンセル・オートマトンにより与えられたビースト討伐という重大な任務を既に終えており、今は”観光”のためにカルデアに居座っている状態であった。

マスターやカルデア職員達にとっては心身共に休まる貴重な休息の時間であっても、彼女にとっては退屈な時間でしか無いのである。口元に片手を当てながら笑みを浮かべるBBの姿は、どこか人を惑わす妖艶な魔女のようである。

「ふふふつ……何か面白いことが無いなら、自分で作っちゃいませうか！ ラスボス系後輩ことBBちゃんは清く、正しい、元が健康管理AIなのですこーしだけ心が痛みますけど、誰かを玩具にして遊ぶのは楽しいですからね。仕方が無いので涙を吞んで遊び相手を探しちゃいませう！」

その瞬間——悪い予感を感じ取ったマスターや彼女と関わりが深い一部のサーヴァント達は、風邪を引いた時のような寒気を背筋に覚えたらしい。

「誰にしまししょうかねえ……」

B Bが潜在的に強く秘めている加虐心をメラメラと燃え上がらせ、誰で遊ぶかをニヤニヤしながら考え始めた。人差し指の腹を唇を当てて考える姿は非常に可愛らしいが、それは正しく生け贄を品定めしている邪悪な神の姿に他ならない。

思考を巡らせた結果、彼女が思い浮かべた人物は――

「――やっぱりセンパイですねっ♡ 一番イジリ甲斐がありますし、最近はあるまり構って上げた記憶が無くて、センパイも寂しがっているとと思うので丁度良いです♡♡」

彼女の頭の中に思い浮かんだのは、どんな相手にも誠実に接する少しだけ格好良くて、おちよくっついていて面白いセンパイが苦笑を浮かべている姿であった。普段から彼には色々なことで迷惑を掛けているため、B Bが普段から見ているのは困ったように笑う表情なのだ。

センパイのことを自分が“構う側”であると思っっていることが、彼女の“イイ性格”を非常に良く表している。そして、B B自身は気が付いていないのだが、彼になら迷惑を掛けても大丈夫だと認識しているのは、無意識の内に甘えても良い相手だと思っっている証拠であった。

「そうと決まれば早速、センパイの所に行きましょう！」

暇を潰すために迷惑を掛けるべきターゲットを見定めたB Bは、声と足を弾ませながら行動へと移すのだ。

「——と言う訳で、センパイのお部屋まで遊びに来たんですけど……」

何故か顔が熟した林檎のように真っ赤なBBの目の前には、思わず両手で顔を覆ってしまいそうになる光景が広がっていた。

その光景とは——

「——イクっ♡ イクっ♡♡ イクイクイク——っ♡♡♡ マスター  
またイキますっ♡ イっ っちやうっ♡♡ イっ いっくくくくく  
くっっ♡♡♡♡」

裸になった男女が獣のようになまぐわっている、生々しい性行為の場面であった。女の幸せにドロドロに蕩けてしまったメスの表情を浮かべるアルトリア・オルタが、マスターにうつ伏せに押さえ付けられて、身動きも出来ない状態で犯され続けている。

「何でセックスしてるんですか?!」

「イってる♡♡ ましゆたあいっ ってますう♡♡♡ あっ っ♡ あ  
っ♡♡♡ あっア——っっ♡♡♡ しっ きっ ゆうっ♡♡♡ いひ  
——っ♡♡♡♡♡」

BBは目の前の淫らな光景に対してツッコミを入れるが、マスター達はセックスに夢中になり過ぎる余り、彼女の声が聞こえていないようであった。無視されたことに対して涙目となってしまうが、BBは生で見る性行為に視線を逸らせず、太もも同士を無意識の内に擦り合わせているだけであった。

マスターとアルトリア・オルタの激しい性行為は、それだけでも衝撃的な光景である。しかし、ベッドの周りにはアルトリア・オルタとは犬猿の仲であるジャンヌ・オルタや最近はお腹を優しく撫でている姿が良く見られるマッシュ・キリエライト、女の子らしくなったと噂の







叶わない。

マスターの鍛えられた身体の下で、全身を痙攣させるメスは傍から見れば憐れだが、アルトリア・オルタの表情は涙や唾液、汗などの体液でドロドロだった。好きな人にしか見せられない蕩け切った幸福そうな表情であった。

「——すっ、すごい……っ♡♡♡」

セックスというのには余りに激し過ぎる、正しく動物同士の交尾を間近で見ているBBの口からは、本人の意思とは関係なく感嘆する声が漏れてしまう。

それだけでは無く——いつの間にかマスターに犯されるアルトリア・オルタを自分に置き換えて考えてしまっていたらしく、彼女の太ももの内側はヌルヌルで粘っこい蜜によって濡れていた。

BBが性行為を見ている間に立っていた足元には、メスの淫臭を放つ小さな水溜りが出来上がっている。本人も気付かぬ内に身体が火照ってきており、甘酸っぱい汗が滲む体からはメスのフェロモンが漂っていた。

完全に伸びてしまったアルトリア・オルタの膣から、未だ怒張したままのペニスをズルズルと引き抜いたマスターは、新しく美味しそうなメスの微かな淫臭を嗅ぎ取ったのか、ゆっくりとBBの方へと頭を動かす。

普段の心優しい青年の顔とは明らかに異なる、センパイの飢えたオスの表情を向けられた彼女は弱い少女のような悲鳴を上げる。それと同時に濡れそぼった割れ目から『ゴプっ♡♡』と、涙を流すような蜜が漏れた。

「——ひいっ♡♡」

新しい獲物を見つけたマスターは、BBの元へと足を進める。

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく—2

「ひい……っ♡♡♡ びっ、BBちゃんにへんなモノ見せないで下さいっ♡♡♡♡ —あうっ♡♡♡」

女の細腕を二本分合わせたよりも遥かに太く長いペニスを怒張させるマスターが、飢えた獣のような視線と破裂しそうな程に膨張させた亀頭を向ける先には、頬を真っ赤に紅潮させたBBの姿があった。

彼女の羞恥により潤んだ紫水晶を彷彿とさせる色合いの瞳には、恐ろしい大きさと槍のような形をしたペニスが映し出されており、高速演算や処理を可能とするハイスペックな筈のBBの脳がショート寸前である。

頭がお酒を飲んだ時のようにフワフワとしてしまい、どこか自分が現実世界にはいないような錯覚を覚えていた。

顔から湯気が出そうな程に真っ赤になながらも、彼女は目の前の長大なペニスに視線が吸い寄せられてしまう。艶やかな色気を感じる上唇と下唇の隙間から溢れるのは、本人も殆ど意識せずに漏れている言葉であった。

「おっ、おつきい……っ♡♡♡ こんなのがアルトリアさん達のナカにっ♡♡♡ ぶ……っ、ブクブク泡立った精液と愛液で、オチンポがドロっドロに汚れてっ♡♡♡ はっ、鼻が曲がるくらい……ひっどい臭いがしてますうっ♡♡♡♡ んう……っ♡♡♡ はあ……っ♡♡♡」

規格外という言葉が完璧に当て嵌まる彼の長大なペニスは、新しい獲物を見付けた悦びによってビクビクと打ち震えている。手で触れてもいないのに一定の間隔でしなり跳ねて暴れる長いペニスは、まるで心臓の鼓動と同期しているようだ。

一目見ただけで分かる力強さと女を殺すことに特化した凶悪な



帯びた体液が『ゴポっ♡♡♡ゴポっ♡♡♡♡♡』と、粘っこい空気の抜ける音と共に漏らしている。

きつとBBがマスターで遊びに来ることがなければ、彼女達は今も休みを与えられることなく順番に犯され続け、漏らしてしまつた精液以上の量の精を吐き出される孕み袋として昼も夜も無くイジメられ続けていただろう。

数十人の精力旺盛な男達に輪姦された後のような惨状であるが、アルトリア・オルタ達は一人の男に愛されて肢体を貪り尽くされただけであつた。

マスターに徹底的に種付けされて犯された四人の美少女達は、完全に意識がなくなつており、深い絶頂の余韻から未だに帰つてこれしていない。今も身体に弱々しい風が吹くだけでビクビクと肢体を震わせ、下腹部を痙攣させながら尿道口から少量の潮を噴いている。

女達は完全に力尽きた後だというのに肝心のマスターの方はと言えば、常人ならば既に腹上死して然るべき量の精液を吐き出したのにも関わらず、無尽蔵に精液を大量に生産し貯蔵した大きな睾丸があり、太く長い陰茎は今にも張り裂けそうな程に怒張したままであつた。

明らかに女を喰べ足りないと怒張したペニスが告げており、亀頭を向けられるBBの脳はパニックになつている。銃などを向けられるよりも遥かに恐怖心を植え付けられ、今まで感じたことが無い程に心が騒つく。

(あつ、遊びに来ただけなのに、物凄い場面に出くわしちゃいました…:…っ♡♡♡♡♡ それにセンパイのオチンポ…:…おつ、大きすぎますっ♡♡♡ こっ、これが私にも…:…っ♡♡♡ あゝくくくくくくっつっ♡♡♡♡♡)

彼女の動揺により揺れ動く視線は、マスターの長大なペニスと彼にハメ潰されたメス達の哀れで淫靡な姿を交互に彷徨つていた。今から自分を犯す極悪ペニスと、犯された末路を嫌が応にも想像させられてしまう。

BB自身は本人も無意識の内に、肉付きの良いむっちりとした太も

も同士を擦り合わせ、下腹部に集まりつつあるじんわりとした”熱”を誤魔化そうとしている。

部屋の中に充満する天然の媚香が性的な興奮を促し、激しい運動をしていないのに過呼吸気味に息を荒くさせた。

「はあっ♡♡ んうっ♡♡ はあッ♡♡ くさい…:…っ♡♡  
ふうっ♡♡♡ くさいれすっ♡♡ はあーっ♡♡♡♡♡」

乱れた呼吸によつて性臭を嗅ぐ量も増え、更に興奮して息が荒くなるという無限ループに入ってしまった。発汗する量も少しずつ増えており、白いレオタードがこれまで以上に素肌にピッタリと張り付いている。

童顔に寄った美少女にスケベで豊満なボディが浮き彫りになっており、聖人君子な男でも目を血走らせてしまう程に淫靡であった。年若い女の匂いを漂わせ見た目も極上であるBBを見詰め、マスターは舌舐めずりをした後にはボソツと呟いた。

「——美味しそう」

「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡ びっ、BBちゃんは食べ物じゃないですう…:…っ♡♡」

震えるような細かい声で反論をする彼女だが、いつものような何事にも自信満々で余裕たっぷりな態度は影も形も見られなかった。捕食者と非捕食者の立場が完全に定まりつつあり、この関係性を覆すことは天地を逆転させるよりも難しそうである。

そして、何よりも——目の前で怒張するペニスに勝てるビジョンが、BBには見えないことが出来ていなかった。

交尾専用の粘っこい愛蜜と無数の膣襞によつて磨かれた結果、重金属のような鈍い光沢を帯びた淫水焼けしたペニスは、全ての雌に恐怖心を植え付けるだけの禍々しさを内包している。

女の膣襞や膣肉をゴリゴリと抉り掘削するためだけにある異様に

発達した雁首、葉脈のように張り巡らされた陰茎に浮かぶ太い血管。馬や巨人のペニスを移植したような大きさであり、ヘラクレスやオロンにも並ぶような巨根である。

一般的に考えると長過ぎる陰茎の太さは、一番細い所でも少女の両手で輪を作っても届かない程に太いが、根本から半ばで太さを増して先っぽに行くにつれて少しだけ細くなる。

しかし、また握り拳のように大きく膨らんだ亀頭の異様さを更に際立たせ、親指の幅よりも遥かに深い段差を作り出していた。彼のペニスはメスを哭かせることに特化した凶悪極まりないフォルムをしており、ただでさえ畏怖を覚える見た目である。

そして、今は凶悪なペニスが精液と本気汁がドロドロに混ざり合ったイヤらしい体液に塗れ、鼻が効かなくなってしまう程に濃い性臭のする湯気を『むわあっ♡♡』と、立ち昇らせていた。

飢餓状態の獣が口元から涎を垂らすように、亀頭の先端にある割れ目から白く濁った精液混じりの先走り汁が、長い糸を引きながら床に向かって垂れている。

そんな恐ろしい魔物のようなペニスがBBの元に近付いており、彼女は立ち竦んだまま何か行動を起こすことが出来ない。辛うじて震える唇を動かして拒もうとするが、そんな弱々しい言葉でマスターが止まってくれる筈が無かった。

「っっ、来ないで下さい……っ♡♡♡ ひっ、ひう——っ♡♡」

結果的に彼が目の前まで移動する頃には、BBはペタンと尻餅を着いてしまっていた。彼女の眼前にはパンパンに膨らんだ亀頭があり、割れ目からは精液混じりの白濁とした先走り汁が、涎を垂らすように糸を引きながら溢れている。

いつもの余裕綽々な態度をしているBBが、今ではどこにでもいるか弱い少女のようであった。そんなか弱いペニ스에怯えた少女に対して、マスターはいつもより低く凄味のある声で命令をする。



「——手で気持ち良くして」

「~~~~~」 なっ、なんで私が……っ♡  
♡ びっ、BBちゃんに命令なんて聞く訳——「無理やり口に突っ込むよ?」ひいっ♡♡」

反抗しようと試みるBBであったが、即座に彼がもつと酷いことをすると脅してきた。それもハツタリなどでは間違い無く、マスターの目は本気であり彼女の頭に彼の手が触れていた。

きつとBBが拒んだ瞬間——マスターは無理矢理に彼女の口を亀頭で抉じ開けてフェラチオをさせ、喉奥まで犯しながらBBのことをオナホールのように扱うだろう。

(ほっ、本気ですっ♡♡ BBちゃんのことを性欲の捌け口としか思っただけ、極悪なベッドヤクザの変態センパイですう……っ♡♡) っ、でも言うこと聞かないと、もつと酷い目にい♡♡♡)

「てっ、手でするだけですっ♡♡ BBちゃんは他の女みたいに、直ぐに犯せる都合の良い女じゃないですから……っ♡♡♡」

数秒の間、思考を巡らした彼女は両手をおずおずと伸ばし、彼のザーメン塗れのペニスに触れた。『グチュっ♡♡』と、粘っこい水音が鳴ると同時に、BBの掌には火傷しそうな程の熱が伝わってくる。

「あっ、熱いですっ♡♡ すうーっ♡ はあッ♡♡♡ そっ、それに指が回らない位に太い……っ♡♡♡ ふあっ♡♡」

間近で饜えた雄の臭いを嗅いで頭が馬鹿になっていく彼女は、思ったことをそのまま口にしてしまう。その言葉が雄の欲望を更に煮え滾らせ、ペニスに大量の血液を送り込ませる。

「触ってるだけじゃ、いつまで経ってもイケないよ。ご奉仕も出来ないなら、さつき言っただけに口を使うけど」

「~~~~~つつっ♡♡♡♡♡ おつ、女の子にこんな酷い扱  
いして良いと思ってるんですか♡♡ —いひっ♡♡♡ わっ、分  
かりましたっ♡♡ うっ、動かします…っ♡♡♡」

口答えをしようとするBBだったがマスターに軽く腰を突き出さ  
れ、目と鼻の先に亀頭を突き付けられたら反抗心は胡散してしまっ  
た。この化け物のようなペニスを満足させなければ、アルトリア・オ  
ルタ達のようにされてしまおうと思いついたのだ。

「なっ、長過ぎですっ♡♡ 手にオチンポと精液の臭いが付いて、取れ  
なくなっちやいそう…っ♡♡♡♡ はあっ♡♡ はっ、鼻が馬鹿に  
なっちやうっ♡♡ すうーっ♡♡♡」

硬質なゴムのような弾性と硬さを兼ね備えたペニスに触れ、彼女は  
力加減や速さも分からないまま手淫を始める。『グチュっ♡♡♡  
グツチュツ♡♡♡』と、卑猥で粘っこい水音が鳴り響き、ペニス  
に快感を与えていく。

BBはただペニスを握り両手を前後に動かしているだけなのに、臍  
から下の下腹部からじんわりと熱が集まっていくのを感じる。秘所  
を覆う白のレオタードには楕円形の“染み”が出来ており、彼女はそ  
れを隠そうとして正座になって脚をギュツと閉じた。

—グチュっ♡♡ ぐっちゅっ♡♡♡ グチュっ♡♡ じゅぷっ  
♡♡♡

部屋中に卑猥な水音が木霊しており、その音が響く度にBBの表情  
は熱に浮かされたように蕩けていった。ペニスを握る力や擦る速さ  
を変えると脈動が変化し、少しずつマスターが気持ち良い動かし方が  
分かっていく。

ペニスの気持ち良い所を覚えて上手くなっていくと、彼は優しく頭  
を撫でたり言葉でも褒め始めた。

最初は強引に命令して言うことを聞かせたのに、しつかり言うことが聞ければ優しくして褒める手口は、女を支配する悪い男の見本のよ  
うな行為である。そんなことにはBBも平時であれば気付けた筈な  
のに、今の性的興奮で頭がフワフワした状態では分からなかった。

少しずつマスター好みの女に躰けられていることも知らずに、彼女  
はより気持ち良くなって貰える奉仕の方法を模索していく。

「すうっ♡♡ はぁーっ♡♡♡♡ こっ、こっちの方がおちんぽが  
ビクンって震えていますっ♡♡♡♡ つっ、次はこうすれば——♡♡  
♡」

——ぐっちゅっ♡♡♡♡ じゅっちゅッ♡♡♡♡ グちゅっ♡♡♡♡  
♡ ぢゅっちゅっ♡♡♡♡

「先っぽからいっばいドクドクお汁出ますっ♡♡ びっ、BBちや  
んの手をマーキングしてっ♡♡♡♡ もっとヌルヌルで気持ち良  
くならうとしますっ♡♡♡♡」

気付けばBBはただ陰茎を握って前後に摩るだけでは無く、亀頭を  
精液塗れの掌でグリグリと擦ったり、雁首を指先で撫で回すテクニッ  
クを身に付けていた。

「ふう……っ♡♡ すうーっ♡♡♡♡ んぁ♡♡ おっ、おちんぽ  
のくっさい臭いで鼻が可笑しくなっつ♡♡ 何だか良い臭いに感  
じてきましたぁ……っ♡♡♡♡♡♡ すう——っ♡♡♡♡」

鼻先がペニスに触れそうな程の距離感で深呼吸をするBBは、完全に臭いに溺れ蕩けるスケベなメスである。

最初の顔から火が出そうな程の恥ずかしい気持ちも薄れていき、自分のテクニクで気持ち良くさせることに優越感を感じるようになっていた。それにペニスの臭いを嗅ぐことが、少しずつ“気持ち良い”へと変化している。

床に正座する彼女の大きく実った桃尻の下には、愛液の水溜まりが出来上がっていた。それはマスターの“オンナ”となつたメス達と同じ状態であり、本人も自覚しないままに彼専用のメスに近付いていつている。

「さつきからビクビクする頻度も上がってますっ♡♡ アルトリアさんに出したみたいにい……っ♡♡♡ 精液いっぱいびゅゅっ♡♡♡ て、射精しちゃいそうですっ♡♡♡♡ ———はあっ♡♡♡♡」

額に大粒の汗が滲む程に手淫を頑張りながら、精液を吐き出すのを待っているBBは、紫色の瞳を怪しい光で爛々と輝かせている。マスターも少しずつ射精が近付いていることを感じており、目の前の従順なメスを精で汚すことを待ち望んでいた。

「もう直ぐ射精すよっ。BBの顔に精液掛けさせろっ！」

「———っつっっ♡♡♡♡♡ びっ、BBちゃんに手コキでご奉仕させてっ♡♡ おっ、っ、お顔もくさーい精液お便所にするなんて最低ですう♡♡ ふう……っ♡♡♡ どっ、どうせ拒否権なんて無いので、好きにぶっかけて良いですよっ♡♡♡」

「———っ！ 射精るっ」

自分の命令に逆らわない癖に雄の征服欲を煽ってくるBBの言葉が引き金となり、マスターは奥歯を噛み締めて堪えていた吐精を開始する。



番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく—3

「——はぁーっ♡♡♡、これで満足ですか？♡♡♡♡」

BBは熱っぽい吐息を吐き出しながら、微かに震え上擦った言の葉を紡いでいる。

端正な造りの顔や妖しい光沢を帯びた紫色の長髪、童顔寄りの顔立ちには不釣り合いな程に大きく小玉スイカのような乳房やムチムチという言葉が相応しい肉付きの太ももを中心に——

真正面から濃厚な精液をガロン単位でぶっ掛けられたため、身体中の前面の殆どを『ドロっ♡♡』とした、高粘度の白濁液によつて穢されている。

一般的な成人男性換算で百人を優に超える人数分の精液を受け止めさせられ、彼女がぐちよぐちよに濡れたスペルマ塗れの姿は、数十人を超えるむくつけき男達に輪姦された後のような惨状であった。

そうしている内に重力に従って彼女の顎先に溜まった精液は、粘性の高さを主張するような長い糸を引きながら胸元へと溢れ落ち、谷間の部分にザーメンの雫が溜まっていく。純白のレオタードを黄ばんだ精液に汚され、その衣服はどれだけ丁寧に洗濯したとしても、雄の臭いが落ちることは無いだろう。

レオタードの布地から濃厚な精液が染み込んでいき、汗によつて蒸れたしっとりとした地肌を更に濡らす。乙女の素肌を雄の欲望に穢されてしまい、快感を感じる部分が拡がっていく。

身体を触れ合わせて体臭を擦り付けるよりも直接的且つ原始的な、子種汁を掛けて臭い付けする行為は、自分が交尾して孕ませるための“雌”だと主張することに最も効果的である。他の雄がマスターの出した咽せ返る程に濃い精の香りを嗅げば、自分では奪い取ることなど不可能だと自覚することが出来るだろう。

十人居れば十人が振り返るBBの壮麗たる美貌や柔らかく肉感的



液漬けにしたメスの痴態に飢えた獣のような視線を向けていた。当然の如く、彼のペニスからはビキビキという擬音が聞こえそうな程に張り詰めており、満足など欠片もしていない事が一目瞭然である。

——しかし、彼女の瞼は粘っこい精液に塞がれて、殆ど目が見えていない。

そのためマスターの先程の異常な吐精量を鑑みて、もう彼は満足していると思違いをしているのだ。耳年増だけの生娘が彼の異常な射精量を全身で感じ、これで何度も射精することなど不可能だと思ったからである。

(あんなに沢山射精してっ♡♡ 流石のセンパイも満足してる筈ですっ♡♡♡ ふっ、普通なら腹上死してる位ですから…っ♡♡ 大丈夫っ、大丈夫です…っ♡♡)

この状況を把握出来ないのはBBだけであり、第三者から見てもその結末は明白である。

身体の外も中もザーメン塗れにされた牝達が三匹もいたことは、Bの頭の中から抜け落ちてしまっていた。冷静になって考えれば直ぐに気付ける事象である筈なのに、強烈過ぎる「雄」を感じたことによつて脳みそは未だにパニックを起こしたままである。

先入観で彼が性的に満足したと勘違いしている彼女は、掌の上で踊る哀れなピエロに近い。

「せつ、精液で頭が重たい…っ♡♡ ふうっ♡♡ ふうっ♡♡ ーっ♡♡ っ♡♡ 髪も絶対に洗うの大変ですう♡♡♡ 女の子の髪は…っ♡♡ ザーメン拭くためのティッシュじゃ無いんですよっ♡♡」

BBの顔や頭を中心に勢い良く精を吐き出されたため、原液のままのカルピスのような体液を何度も何度も塗り重ねられ、髪に関しては後ろ側でさえも他人には見せられないような酷い有り様である。

眩い光沢を内包するアメジストを糸状に細く伸ばしたと見紛うば



かりの長髪が、泡立ち黄ばんだ白濁色の獣欲によって塗り潰されていった。その髪をギュツと絞れば精液がポタポタと滴り落ちそうな程であり、「女の命」とも呼ばれる髪をスペルマに征服され陵辱されている。

——触れる事を戸惑われる程に美しい少女が穢される光景は、「背徳」という言葉が物の見事に当て嵌まっている。

時価換算で数百億円にも及ぶ歴史的芸術品に対して、痰を飛ばし小便を掛けるような愚行であり、どこまでも破滅的で愚かな行動であることは確かだが、言葉では表現し切れない耽美で甘い毒にも似た快感を齎す。

牡ならば全ての生き物が持つ醜い征服欲を満たし、更に生物としての根源にある繁殖したいという欲求を飢餓感すら感じる程に掻き立てる。既に勃起したペニスに更に多くの血流がドクドクと流し込まれ、陰茎の反り返る角度が更にエグいことになっていた。

比喻抜きに腕のような長さも相まって、自身の鳩尾に龟头がベチンと当たりそうな程である。天を衝かんと起立する無骨で長く強靱な肉槍は、もつとメスを求めて心臓の鼓動の様にドクンドクンと力強く脈打っていた。

——血流が海綿体に集中することで熱量も高まり、臭いが空気中へと揮発する量も増加している。

当然、更に濃くなったペニスと精液の臭いが空気中でミックスされ、鼻が可笑しくなるような激臭へと変化。元から部屋の中には性交後特有の男女の営みのニオイが籠っていたこともあり、臭いが「煮詰まっっていく」という表現が合致していた。

それは神や悪魔でさえ容易に墮とす「媚香」であるがために、幾ら第二のビーストとまで呼ばれた彼女でも女である時点で、耐えることなど不可能な代物である。

聖女でさえ狂わせ淫らな情婦へと変えてしまうスメルに耽溺するBBは、マスターから見れば哀れでか弱く、とつても美味しそうなメスでしか無い。

「すうーっ、はあ……っ♡♡ くさいですっ♡ 本当にくっさいですう……っ♡♡♡ — すうーっ♡♡♡」

部屋中に籠ったニオイや自分の身体を汚す精の香りに溺れるBBは、嫌悪感を剥き出しにした言葉を紡いでいた。

しかし、彼女の声色には喜怒哀楽の内の喜の感情が滲み出ており、例え言語が分からない者でも言葉を発しているメスが、悦んでいる“ことは、即座に理解することが出来る。

肌が灼けそうな程の熱を持つ粘っこい白濁液から『ムワツ♡♡』とした湯気が上がり、噎せ返りそうな程に濃い雄の臭いが立ち昇っていた。それは濃厚なスペルマに含まれる水分が蒸発し、熱気と共に臭いが空気中に放出されているからだ。

年齢やであればこの臭いを嗅ぐだけで直ぐに股座を濡らし、強烈な繁殖欲求を促す程に強力な媚香。彼女が呼吸をする度に嗅覚を破壊して、陵辱し、屈服させ——もつと臭いを嗅いでいたいと中毒にさせた。

「すうーっ♡♡ はあ……っ♡♡ はっ、鼻がおかしくなっちゃいますう♡♡ 本当にくさいっ♡♡ くさいですう♡♡ んうっ♡♡ はあーっ♡♡♡♡」

『くさいっ♡♡ くさい……っ♡♡♡』と、嫌悪感を滲ませた言葉を何度も発しながら一向に鼻呼吸を止めない彼女は、重度の麻薬中毒者のようなトリップした危ない表情を浮かべている。外から見ても胸元が浮き上がることが分かる程に、雄の濃い精臭を肺胞の中にタップリと染み込むまで取り込んでいた。

「頭がボーっとしてっ♡♡ すうっ♡♡ はあっ♡♡ のっ、  
脳みそ馬鹿になっちゃいますう♡♡♡ 犯罪っ♡♡ こんなにおい嗅  
がせる何て犯罪ですうっ♡♡ —すうっ♡♡♡♡」

栗の花に似た牡の濃密な精臭が部屋の中に充満しており、一呼吸毎に彼女の鼻腔を通して脳の根幹部分を犯していく。女性が本能から好ましいと感じて中毒になるタイプの臭いであるため、例え鋼鉄の意思を持つナイチンゲールでさえ抗うことが敵わない。

月の癌（ムーンキャンサー）であり新種のビースト亜種、人類種の癌細胞である特大の危険性を孕んだ彼女が、今は濃厚な精臭にトリップするドスケベ女と変わらない。BBの高速思考を可能とするハイスペックな脳が精液の臭いでバグっていき、「マトモ」な思考をすることが困難な状況へと陥っていく。

興奮に合わせて呼吸する頻度が上がっており、その全てを呼吸を鼻から吸って口から吐き出す。熱っぽく甘ったるい悩ましげな吐息は、自身の思考さえもドロドロにの蜂蜜のように蕩けさせていく。

「すうっ♡♡♡ んあッ♡♡ アツアツせいえき……っ♡♡ 本  
当にあっついですう♡♡ やっ、やけどさせるつもりですかっ♡♡ |  
—はうっ……っ♡♡♡♡」

現在進行形で何千億匹以上の精子達が泳ぎ回る精液に素肌を犯されるBBは、黄ばんだ白濁液が付着した部分から火傷した後のような鈍痛にも似た快感を感じていた。

自慰行為に使われたザーメンティッシュと同じ惨めな気持ちや味わいながら、屈辱と快感によって脳と心をグズグズになるまで陵辱される。そして、この屈辱と快感に嫌悪感を持ってないことが、彼女にとって最大の問題であった。

たった一度、手淫を強要されて精液を浴びせ掛けられただけで、性格の悪いDSだと思っていた自分の「マゾメス」な部分を強制的に掘り起こされている。外見だけでは無く心の中もドロドロに犯され、

知らず知らずの内にもつと過激な“次”を期待してしまっていた。

——その期待が言葉にも出てしまったがために、彼女は自分から命運を尽きさせたのだ。

BBは瞼の上に付着した精液を両手の指先で拭い取りながら、思ったことを意識しないまま口から漏らす。それは風邪を引いた時や酒に酔った時に良く似ており、彼に聞かれているという意識が殆ど無いまま口にした。

「びっ、BBちゃんの全身っ♡♡ぐっちやぐちやのドッコロドコロで  
すう♡♡♡ぎっ、罪悪感とか感じ無いんですかっ♡♡そんなこと  
してたら女の子から愛想を——ひいゝ……ッ♡♡♡」

普段通りの相手を小馬鹿にした口を利こうとした彼女だったが、それは未だに亀頭の先端から精液を涎のように垂れ流す、勃起したままの規格外のペニスをハッキリと確認したことによって止まった。

それどころか小鳥が鳴くような悲鳴を上げ、本心から恐怖したことを彼に伝えてしまう。悲鳴を上げた理由は、生意気な口を効けばもつと“酷いこと”をされると、理性的な思考では無く本能で理解したからだ。

「女の子から愛想が——どうなるの?」

「——っ♡♡♡おっ、おちんぽ向けながら止めてください  
……っ♡♡あっ、謝りますからあっ♡♡♡ BBちゃんが悪かった  
ですう……っ♡♡♡」

並の男性であれば一度の射精だけで腹上死するレベルの吐精量であるのにも関わらず、マスターの比喻抜きに馬並みの大きさをしたペニスが、重力に逆らいながら猛り狂っている。

まだまだ射精し足りないと告げるように、パンパンに張った亀頭の



に両手を添え、瑞々しい桜色の唇が震えながら亀頭の先端へと近付いていく。少しずつ二つの距離感は狭まっていき、遂には――

――ちゅっ♡♡♡

濃密な性臭の籠った部屋で、小さな水音が響いた。

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく—4

「ひい~~~~~~~~つっっ♡♡♡ じつ、自分でしますっ♡♡ おくちでご奉仕しますからあ……っ♡♡♡♡」

恐怖に引き攣った少女の弱々しい悲鳴が、震える上唇と下唇の隙間から漏れる。普段の人を小馬鹿にしたような態度が今は嘘のようであり、弱気になつてしていると直感で分かる声色で従順を示す言葉を紡いでいた。

反抗すればイラマチオで無理矢理に喉奥を犯され、オナホルのように乱暴に扱われてしまうのだから、BBが従順になつてしまうのも仕方の無いことである。

未だアルトリア・オルタ達とマスターの本能を剥き出しにした濃厚な交尾の光景や顔面に大量に射精されたことが忘れられず、脳がパニックを起こしたままなことも原因だろう。

腰を前に突き出すように仁王立ちするマスターの正面に、両膝を着いて跪く未だ湯気が立つ程の熱を帯びた白濁液に塗れた彼女は、眼前に迫る禍々しくも雄々しい巨大なペニスの先端に自分から口付けを落とす。

——ちゅっ♡♡

「んう……っ♡ ちゅうっ♡♡♡ ふう……っ♡」

普段の彼女の性格や言動を知る者であればある程、現実かどうかを疑いたくなつてしまう淫靡な光景。

人間の身体の一部であるとは思えない通常の規格を遥かに逸脱した凶悪な魔羅に対して、童顔の美少女が目尻に大粒の涙を浮かべながら瑞々しく艶やかな唇を僅かに尖らせる。そして、可愛らしいリップ

音を亀頭の先端と唇の間で響かせながら、付き合い立ての恋人同士がするような口付けのご奉仕を行っていた。

技術面ではマシユ達には全く及ばないが、辿々しいのが逆に優越感を与える奉仕を受けるマスターは、亀頭の先端から伝わる彼女の柔らかな唇の感触を堪能する。そこから更にBBの羞恥心を煽るような言葉を囁き、彼が普段とは違う乙女な反応を引き出して更に楽しむ。

「BBのキス顔エッチで可愛いね」

「~~~~~つつつっ♡♡♡」

羞恥に震えて口内で嬌声を上げる彼女だが、精一杯の抵抗をするように涙目のまま上目遣いでマスターのことを睨み付ける。しかし、その行為が余計に雄の征服欲や加虐心を刺激しており、BBはオスの性欲を無意識の内に煽り続けていた。

「……これから毎日、フェラで抜いてもらおうかな」

「——つっ♡♡ んう……っ♡」

そう呟く彼の眼下には倒錯的且つ犯罪的な光景が広がっており、クラリと眩暈すら覚えてしまう程の破壊力を秘めている。背徳感と征服欲をそのまま形にしたような光景、それを主観視点で楽しめる男のことを血涙を流しながら、強く羨望してしまうことだろう。

（こっつ、これは仕方なくですう……っ♡♡ センパイに酷いことされないために、ご奉仕で満足させるだけ——っ♡♡）

鍛え上げられた成人男性の剛腕と見紛うばかりのペニスを眼前に突き付けられ、銃や槍を突き付けられるよりも凶悪で恐怖を覚えてしまう逸物に脅されたが故のご奉仕である。今も心の中では言い訳を考え続け、自分は仕方なくご奉仕をしているのだと言い聞かせていた。

しかし、自分からマスターの亀頭に口付けをして自ら奉仕したという事実は、彼女の心の奥底にまで深々と刻み付けられてしまう。



身を焦がすような羞恥と肢体が震える程の屈辱、奉仕の甘美が心を冒していき、ブクブクと溺れるように意識が曖昧な状態へと陥っていく。

BBは頬を熟した林檎のように紅潮させるだけでは無く、耳の先端まで真っ赤に染め上げ、艶やかな唇を亀頭の先端に触れ合わせた状態のまま固まっている。小鼻を膨らませながら『ふう、うーっ♡♡ふう、うーっ♡♡』と、熱っぽく興奮による荒い息を吐き、喉の奥で押し殺した悩まし気な喘ぎ声を漏らす。

「ちゅ、ゆう……っ♡♡ふう、うーっ♡♡ん……っ、ん、うっ♡♡ふう……っ♡♡——ふぁっ♡♡♡♡」

唇同士のキスとは違う亀頭の硬いゴムのような感触と唇を『ジュウ……っ♡♡』と、焼き焦がしてしまいそうな高熱のペニスによって、彼女の高速演算を可能とする筈のハイスペックな脳はオーバーヒートを起こす寸前であった。

半ば記憶力に優れているが故に一生忘れられない記憶となってしまう、BBはもうまともにマスターの顔を見ることが出来ない。頬を染めて涙目になりながらも、熱っぽい視線を送ってしまう。

亀頭と触れ合う唇から伝わる痺れるような快感を逃すために、身体が寒気を感じた時のように震え、熟した果実のようにむっちりとした乳房とお尻の柔肉が『ブルんっ♡♡』と、弾むように大きく揺れる。屈強な牡の前に跪き奉仕する悦びを少しずつ覚え込まされ、彼女は自分でさえも知らなかった心の奥底に秘められていた、強く逞しい男に隷属したいという“マゾ願望”を掘り起こされてしまう。

（おっ、おちんぽが熱くて……唇が火傷しちやいそうですっ♡♡♡んあ……っ、なっ、何でこんなことが気持ち良いんですかあ……っ♡♡）

隷属欲求を掻き立てるペニスへのキスに蕩けるBBは、下腹部にじんわりと“甘く切ない熱”が籠っていき、秘所を覆う白いレオタードの生地は徐々に湿り気を帯びていく。

吸収し切れなかった生温かい体液が布地からトプトプと源泉のように溢れ、淫らな水滴が脚や床へと滴り落ちる。足元には恥ずかしい水溜まりが出来上がっており、本能を揺さぶるような淫らな匂いが漂っていた。

全身からも年若いメスの甘酸っぱい汗の匂いが放たれ、特に下半身からは濃い淫臭と汗が混ざり合い濃密なフェロモンが淫らな匂いと共に漏れている。

柔らかな唇から伝わる硬質なゴムのような亀頭の感触、それは全力で歯を立ててもビクともしないであろう硬度と弾性を秘めており、このような質感の巨大なモノに柔らかな子袋を押し潰されてしまえば、排卵して許しを乞うことしか出来ない。

彼女の悩ましげな声は次第に大きくなり、無意識の内にペニスへの口付けも情熱的なものになってしまう。亀頭の割れ目から溢れてくる精液の混じった先走りの汁を音を立てながら吸い、自分の唾液を口内で舌を用いてぐちゅぐちゅと混ぜ合わせて喉を鳴らしながら嚥下する。

「んぐう………つ♡♡ ふうぐーっ♡♡ ふう………ツ♡♡♡  
ちゅっ………ちゅう♡♡ んぐぐっ♡♡ んぐっ♡♡ —ちゅう♡♡♡♡」

雄の濃い味に酔い痴れるBBは鼻息を荒くしながらペニスの臭いを嗅ぎ、一呼吸毎にお酒を飲んだ時のような思考が鈍化していく。冷静な思考や理性の替わりに表出するのは原始的な本能であり、少しずつ淫らな本能への抵抗が弱まってしまふ。

性的興奮によって全身が火照り体温が上がったことで汗ばみ、大量に吐き出されたザーメンに濡れた衣服が乙女の穢れない柔肌へと張り付く。

ただでさえボディラインが分かり易い白いレオタード風の制服であるのに、服が濡れて肌に張り付くことで更にハッキリと浮き上がらせていた。ぷっくりと膨らんだ乳首の輪郭さえ浮き彫りとなり、目を

凝らせば“薄い桜色”まで透けている。

服の上から硬くシコった乳首を抓れば、その直後に潮を噴きながら無様なアクメを迎えてしまうことだろう。

雄の情欲を煮え滾らせるメスの痴態と柔らかな唇の感触を感じ、怒張したペニスの海綿体には更に血流が送り込まれ、大きさと硬度を更に増しながらビクッと脈打っていた。その度にBBの肢体も連動するかのようビクビクと震え、悩まし気な声が同時に漏れる。

「ふう——っ♡ん♡ん♡う……っ♡♡ぢゆう♡っ♡♡♡——ん♡あ♡ッ♡♡♡」

涙により視界が滲んでいても分かる規格外のペニスを見詰め、彼女の心は魅了の魔法に掛けられたように理性をドロドロに溶かされてしまう。

メスならばどう足掻いても克服することの出来ない弱点である子宮を容易に押し潰し、子孫を残すために大事な卵を無理矢理ひり出させることに特化した、槍や棍棒にも似た凶器のようなペニスの形状。異常な程に発達したエグイ角度と厚さを持った雁首は、男性経験があればある程に恐怖心を与える恐ろしい段差がある。

多淫で知られるケルトの女王やメソポタミア神話の美と愛を司る女神が、哭いて許しを乞う程の逸物であり、地球で性を貪ろうとした頭のおかしい快樂天の獣ですらハメ潰した剛直であった。ある意味で世界を破壊するビースト達を屈服させ、飼い慣らすことに成功しているのは偉業と評しても問題はないだろう。

女性の手では指が周り切らない程に太い陰茎には、大量の血流を送り込むために発達した太い血管が浮き出ており、葉っぱの葉脈のように張り巡らされている。それが鍛えた男性の逞しい腕を連想させ、メスの本能が服従を自主的に選ばせてしまうのだ。

赤銅色をした正しく重金属のような、触れなくとも分かる硬そうな質感。健康的な肌の色と比較すると魔羅の色味だけが違っているのは、女達との交尾で淫液をタツプリと塗り込められ、無数の膣襞や子

宮口による奉仕で丹念に磨かれた証である。

数多くの女達との交尾に耽溺し続け、屈強な精子で有無を言わせず孕ませた結果であった。

幾つかある神話の中でも最上位に近しい位にある女神や人間との和解などあり得ない悪辣な魔に属する者、災害と変わらない神秘の塊である龍、新たな“亜種ビースト”とまで呼ばれたBBでさえも例外は無く、一目見ただけで自分も犯し尽くされ孕まされると理解させられる威容。種族の違いを匙であると投げ捨て容易に超越するだけの迫力が、異常な程に発達したマスターの魔羅にはある。

(こっつ、こんなので犯されたらっ♡♡ これからずつとセンパイの赤ちゃん産むだけのメス穴にされちゃいますう……っ♡♡♡ アルトリア・オルタさん達みたいに、他の女の子とお尻並べられながら順番に犯される性奴隷に——っ♡♡♡)

容易に想像することの出来るマスターに堕ちてしまった自分は、アルトリア・オルタ達と同じ幸せそうなメスの表情をしている。堕ちた自分に嫌悪感を感じることは出来ず、寧ろ羨ましいと思ってしまうのが、何よりもBBが堕ちつつある証拠であった。

恐ろしい程に怒張したペニスには、つい先程までの墮とされた雌達との濃密な交尾の残滓が未だに残っており、女達の愛蜜や本気汁によつて根元から先端までベツタリと濡れている。

「ふうぅーっ♡♡ すうぅーっ♡♡ んぅっ♡♡ ふっ、ふうぅ……っ♡♡ ——すうぅっ♡♡♡♡」

舌が応でもBBの鼻腔に入り込んで来る咽せ返るような牡の精臭、その濃い性の臭いの中には愛する雄への三人分のメスの愛液や本気汁の匂いも混じっていた。男と女の淫らな性臭を嗅ぐことに夢中になる彼女に対して、マスターのことをもつと墮とそうとする。

「ずつとチンポにキスして、匂い嗅いでるだけじゃ射精出来ないよ。もつと舌でペロペロ舐めたり、おっぱいで挟んで気持ち良くして」







常人ならば完全に致死レベルの射精量であるが、マスターはただ射精の心地良さを感じるだけであった。逆にBBの方は口の端や鼻の孔から精液を噴き出し、それでも食道や胃に精が注ぎ込まれ続ける。

呼吸も出来ずにペニスにより窒息する寸前であり、お腹が見る見る内に膨らんでいく。ザーメンで胃がパンパンになり、妊娠しているかのような見た目となる。

長大なペニスとドロドロの精液により窒息するBBは、微睡に吞まれて意識を失いながら、マゾメスとしての本能を完全に覚醒させられてしまう。

(ああ……っ♡♡　ざーめんすきい……っ♡　もっ、もっとおゝーっ♡♡　おゝ……っ♡♡♡)

——彼女のむっちりと実ったお尻の下から、じよろじよろと水音が鳴る。





漏らしていた。

「ゲプう……っ♡♡♡♡ ぎっ、聞かないでえっ♡ げプっ♡♡ げえええぶっ♡♡♡♡♡ んぶ——っ♡♡♡」

傍から見れば滑稽で無様な抵抗が余計に健気でいじらしく、マスターの嗜虐心を更に刺激してしまう。未だに勃起の治らない魔羅を彼女の頭に無遠慮に乗せると、更に羞恥心と被虐心を煽る言葉を投げ掛ける。

「さっきから蛙の鳴き声みたいだね。顔も髪も溢した精液でぐちゃぐちゃだよ。射精した精液を拭くためのザーメンティッシュの代わりみたい」

「~~~~~っ♡♡♡♡♡ んぶ……っ♡♡♡♡ せっ、センパイがお腹タプタプになるまれ……げふうっ♡♡ のっ、呑ませるからあゝっ♡♡ ——げえぶっ♡♡ そっ、それにB Bちゃん はあゝ……っ♡♡ んゝうゝっ♡♡ ざっ、ザーメンティッシュじゃな いれすうゝ♡♡♡ ——げえええプっ♡♡♡」

普段からは考えられない弱々しい口調で、B Bはおくびを漏らしながら精一杯の反論をする。彼女の弱々しい態度の原因は、頭の上に乗せられたズツシリと重たく、肌が火傷しそうな程の熱量が籠ったペニス のせいであった。

何度も何度もご奉仕でガロン単位の射精をさせたのに、射精すればするだけ元気になっていく長大な絶倫魔羅に、挿入される前から絶対に勝てないと理解させられていたのである。

豊満で形の良い乳房や蕩けるような美声を発する口、白魚と見紛うばかりに美しい手をオナホール代わりに、何度も数え切れない位の雄の欲望を吐き出すために使い潰された。

その結果、心の奥底で眠っていた“マゾヒズム”を完全に掘り起こされ、物扱いされることにも背徳的な快感を感じてしまう。

自分のことを人類を虐げて悦ぶ生粋のサディストであると信じて疑って無かったのに、蓋を開けてみれば強い雄の性欲処理に使われて股を濡らしてしまう、どうしようもない“マゾメス”であった。

一番知られてはいけないマスターにもその本質を完全に見抜かれており、高圧的で意地悪な態度を取っているのも、彼女が悦ぶと分かった上での行動である。

「途中からは命令しなくても自分からチンポに吸い付いて、おっぱいで挟みながら精液じゆるじゆる音を立てて啜ってたんだから、お掃除も出来る全自動オナホールだったね」

「——つつっ、♡♡♡♡ さっつ、最低れすう♡♡ んぶ……っ♡♡ BBちゃんのこともつと大切にしないとおっ♡♡ げえぶっ♡♡♡ 後で酷いんれすよっ♡♡ ——ひいつ♡♡♡」

勇気を振り絞って彼に凄もうとするBBだったが、頭の上に置かれたズッシリと重たいペニスが脈打ただけで、喉の奥が引き攣ったような悲鳴を漏らしてしまう。

しかし、自分からマスターにもつと激しくイジメるための“口実”を与えてしまった事実が、悲鳴を漏らしただけで消えた訳では無い。

「へえ……酷いことするつもりなんだ」

「あっ♡♡ ちっ、違いますう……っ♡♡ ことっ、言葉の綾でえ♡♡

ひう……ごめんなさい♡♡♡」

従順にしていればもう少し優しくして貰えたかも知れないが、変に勇気を振り絞った所為でマスターのメスを屈服させたいと言う雄の本能に根差した、鬼畜な一面を事更に刺激してしまったのである。

普段から反省もせずに悪戯ばかり繰り返していることもあり、彼女の言葉は信じて貰える筈が無かった。

「BBはいっつも嘘ばかり吐くから、酷いことする気も起きなくなる

位タツプリ虐めようか」

「ひぎゅーっつっっ♡♡♡♡♡ ひっ♡♡ いっ♡ひっ♡ ひいっ♡♡♡♡」

彼の言葉を耳にして脳で理解した瞬間、BBの心臓がドクンドクンと五月蝍い位に跳ね、お臍の下の辺りがキュンキュン、ズキズキと痛いと感じる位に疼いてしまう。

興奮がグツグツと煮詰まっており、肢体の芯まで火照っている。

どんなに激しい自慰行為の後よりも酷いことになっている割れ目からは、下腹部が疼く度に『ぶしゅっ♡♡♡ぶしゅっ♡♡♡』と、メスのフェロモンを多分に含んだ淫らな体液が勢い良く噴き出していた。

マスターはいつもより低い声を作り、子犬のように震える彼女に命令をする。

「取り敢えず……ベッドに両手をついてお尻を突き出して」

「~~~~~っつっっ♡♡♡♡♡ まっ、待って下しやいっ♡♡♡んうっ♡♡ もっといっばいおっぱいとお口でご奉仕っ♡♡♡げぶっ♡♡ 頑張りますからあゝ……っ♡♡♡」

最後の抵抗のように精一杯のセックスアピールで、彼に許しを乞おうとした。しかし、その程度の色仕掛けに屈する筈も無かったマスターは、ほぼ選択肢にもなっていない二択を彼女に迫る。

「ダメ。押し倒されてオルタ達みたいに犯すのと……どっちが良い？」

「ひうゝ~~~~~っつっ♡♡♡めっ、命令通りにしますうゝ……っ♡♡ 言うこと聞きますからあゝっ♡♡♡——ひんっ♡♡♡」

完全に泣きの入ったBBは抵抗することを諦め、恥ずかしい水溜りが出来上がっている床からお尻や太ももを持ち上げた。そして、彼に



縦の窪んだ割れ目からは『コプっ♡♡ コプ……っ♡♡♡♡』と、粘っこいローションのような愛液が源泉のように溢れ出し、長い糸を引きながら床へと落ちていく。

大きな水溜まりから移動したばかりなのに、足元には小さな水溜りが作られ始めていた。

「お漏らしばっかりして、BBは本当にスケベなんだね」

「んゝひいゝっ♡♡ ちっ、違いますっ♡ 身体が勝手にいゝ……っ♡♡ おゝ——っ♡♡♡♡」

マスターは彼女のお尻の近くに移動すると、両手で包み込むように尻タブの柔肉に触れる。

「柔らかっ。おっぱいと変わらないんじゃないかな?」

「んゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝっっっ♡♡♡♡♡」

絶対に垂れたりしない若さの暴力のようなハリと全ての指に吸い付いてくると錯覚する肌触り、どこまでも沈み込んでいく柔らかさが手の平へと伝わる。いつまでも揉んでいたくなる、常に適温に保たれた搦き立てのお餅に近い感触であった。

少し強く握るだけメス臭い珠のような汗が浮かび、剥きたての卵のように白い尻肉が朱に色付く。

唇の端から唾液が漏れるBBの口からは、濁音混じりの嬌声が漏れてしまう。お尻という快感の弱い場所である筈なのに、火照り肢体が感度を引き上げていた。

「あゝっ♡♡ あゝひっ♡ らめゝえゝっ♡♡♡ お尻いゝ……っ♡♡ おゝっ♡♡ グニグニしにゝやいれえゝっ♡♡ いゝひ——っ♡♡ いゝいゝっぢやうゝっ♡♡」

「まだ優しく揉んでるだけなのに、おまんこから汁漏らし過ぎでしょ。レオタードの上からでも“クリ”がぶつくりしてるのも丸見えだよ」

「やあ……っ♡♡♡ そっ、そこはぜっらいにらめれすう  
っ♡♡♡ んおっ♡♡♡」

両手に収まり切らない尻タブの柔肉を円を描くように優しく揉み  
しだかれ、その一揉み毎に潮を『ぷしゅっ♡♡ ♫ぷっしゅう——っツ  
♡♡♡』と、壊れた水道管のように噴いてしまう。

彼が指摘するよう濡れたレオタードの生地越しに、ぷっくりと膨ら  
んだ豆粒のようなクリトリスが浮かび上がっていた。

性的興奮により大陰唇もふつくらと膨らみ、割れ目の形も鮮明に浮  
かび上がっている。肉ビラの薄く艶かしいピンク色まで見えており、  
完全に服を着ている意味が無い程の透け具合であった。

「後でいっぱい触って擦って潰して上げるけど、今の内にどのくらい  
クリ弄られると気持ち良いのか覚えておこっか?」

「ひいゝゝゝゝゝっっツ♡♡♡♡ らめっ♡♡♡ らめれじゅっ  
♡♡♡ いゝまさゝわられたりゝやっ♡♡♡ しんじやいゝましゝゆ  
——」

頭を左右にブンブンと振って無理だと叫ぶBBを無視して、マス  
ターは尻タブを揉んでいた右手を離すと、触って欲しそうに膨らむ陰  
核を中指の腹で優しくなぞった。

——瞬間、彼女の陰核から脊髄を通して脳を焼き焦がす快感が流れ  
込む

「んゝぎゆうゝうううゝうゝううゝうゝううゝううゝううゝう  
ゝ——っツゝ?!♡♡♡♡♡」

絶叫と混乱が混ざった嬌声が、部屋全体に響き渡る。

口奉仕と乳擦りだけで溜まり続けていた快感が、陰核を撫でられた  
ことが起爆剤となり、本人の想定を遥かに超えて爆発してしまった。  
弓のように背中や首を限界まで反らせながら、少しでも快感を逃そう





うううううううううう——つつっ♡♡♡♡」

防音性のしつかりとした部屋であるのに、外にまで漏れてしまいうな声量の絶頂報告が木霊する。

男性にとつて一番敏感な亀頭に等しいクリトリスを弄られ、先程までの絶頂よりも更に深い絶頂を迎えていた。本人も驚く程に快感に対して貧弱であり、殆ど我慢することも出来ずに直ぐに達してしまう。

それは彼女の処理能力に長けていたことが原因であり、マスターに与えられた快感を余すことなく完全に処理し切ってしまった。

その結果——他人よりも遥かに敏感であり、絶頂に達する臨界点を簡単に超えてしまうのだ。

「ひぐ——っ♡♡ お……っ♡♡ んひいゝゝゝっ♡♡ いっ、いっ、いっ、いっ……っ♡♡♡♡ お——つつっ♡♡」

完全に絶頂の余韻で意識が甘イキの中を彷徨っているBBだったが、敏感で直ぐイってしまう“クソ雑魚マゾメス”だという事実を、最も知られてはならない“相手”にバレてしまっていた。

「ふーん、ちよつとクリ弄られただけでこんなになっちゃうんだ……」  
「はあ、ーっ♡♡ んうっ♡♡ はあ、ーっ♡♡」

本来なら床を這つてでも逃げるのが最善なのだが、今の彼女に出来ることなど何もありません。また与えられる快感で絶頂と共に意識を強制的に覚醒させられ、絶頂でまた意識を飛ばしてしまうことしか出来ないのだ。

「BBには何回も射精させて貰ったから。同じ位イかせて上げる……その後は二人で気持ち良くなるうね」

意識の飛んだままのBBに囁いたマスターは、両手を用いてまだまだ揉み足りないお尻への愛撫を再開する。先程までの優しい愛撫とは異なり、パン生地を捏ねるような指の動きに直ぐに意識が覚醒する。

「んゝひいゝーっ?!♡♡♡ おゝっ♡♡ おゝしゝりいゝ…っ♡  
♡ いゝったっ♡ イゝったゝばっかゝりいゝ♡ きゅっ、きゅ  
ゝけいゝ…っ♡♡♡ あっ♡ あゝっ♡♡ ああっ♡ あゝっ、ま  
らイゝクゝう——っっツゝ♡♡」

目を白黒させながら絶頂を迎える彼女の嬌声は、マスターが愛撫を止めるまで響き続けた。

番外編：BBちゃんはクソ雑魚オナホAIに堕ちていく—6

黒のロングコートやタイトなミニスカート、真っ赤なりボン、甘酸っぱい香りの汗や淫液を吸った白いレオタードなど、クイーンサイズはありそうな大きさのベッドの周りに衣服が散乱している。

広々としたベッドの上にはそれぞれ魅力の異なる四人の美少女達が、一糸纏わぬ美しい裸体を惜しげも無く晒していた。正しく酒池肉林という言葉が完璧に当て嵌まっており、男ならば誰もが興奮を隠すことの出来ない絶景であるだろう。

『はぁ、ーっ♡♡ ふう、っ♡ はぁ、ーっ♡♡♡』

男と女の性臭が充満して煮詰まっている部屋に、少女達の色っぽい呼吸の音色が響き渡っている。

四人中三人は濃厚で激しい交尾によって意識を失っているが、腰まで伸びる長い紫髪の少女——“BB”だけは、未だ絶頂の余韻に呑まれたままであった。

血色の良いルージュを引いたかのような艶やかな上唇と下唇の間から、快感の滲んだ甘ったるい呼吸を漏らし続けている。

「——ん、お、っ♡♡ ふう、っ♡♡ ふうーっ♡♡♡ お、ひ……っ♡ ひい、っ♡♡ ひい、ーっ♡♡♡」

普段の人を小馬鹿にするような小悪魔的な態度からは想像もつかない、柔らかくむつちりとした長い脚を大胆に開き、一番恥ずかしい秘所が露出した無様な姿を晒していた。

うつ伏せとなっているためベッドに豊満な乳房が潰れており、脇から溢れる搦き立てのお餅にも似た柔らかかそうな横乳が覗いている。

庇護欲を刺激される華奢な肩や抱き締めれば折れてしまいそうな細腰、シミ一つない綺麗な背中や筋肉がタツプリと詰まった揉みしだきたくなる桃尻が丸見えとなっていた。

完全に伸びてしまっている彼女を見詰める「マスターは、きゆうきゆうと甘えるように締め付けてくる孔に挿入し続け、ふやけてしまった人差し指と中指に付いた淫液を舌先で舐め取る。

濃厚な牝の味に脳が痺れる感覚を覚えながら、うつ伏せのBBに覆い被さりながら耳元で囁く。

「じゆる…:はあつ。BBの感じてる反応が可愛くて、少しだけイかせ過ぎちゃった」

「~~~~~つっつっ♡♡♡♡♡ ひうっ♡♡♡んっ♡♡んうっ~~~~~」

彼の男性らしいゴツゴツした太指によって、レオタード越しに陰核を愛撫されて絶頂。それから彼女は陰核や膣孔などの敏感な性感帯を執拗に弄られ続け、数え切れない程に絶頂を迎えることとなった。

重たいアクメを更に重いアクメで何度も上書きされ、肢体を『ビクっ♡♡ ビクンっ♡♡♡』と、痙攣させるように震わせながら大量の潮を噴き、理性を失った獣のような嬌声を上げ続けてしまう。

その結果——度重なる絶頂の余韻から今でも抜け出すことが出来ず、ムツチリと肉付いた桃尻だけベッドから浮かせた状態で『カクっ♡♡ カク…:っ♡♡♡』と、快感の波が高まるのに合わせて上下にお尻を揺らしていた。

擬音にするならば『ぷるんっ♡♡ ♫るんっ♡♡♡』が似合う、尻タブの柔肉がイヤらしく波打つ光景は、牝の生殖本能を根幹から刺激する淫靡さに他ならない。

「ひいーっ♡♡♡♡♡ ふうっ♡♡♡ いつ、イク…:っ♡♡ んおっ♡♡♡いっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ イっ♡♡♡ ひゅう~~~~~」

——ぷしゅっ♡♡ プシっ♡♡ プシユ……っ♡♡ ぷっしゅう  
うううううう——っッ♡♡♡♡

白濁と泡立った愛蜜が溢れる卑猥な桜色の割れ目から、アクメし続ける快感を逃すために『ぷしゅっ♡♡♡♡ ぷしゅうッ♡♡♡♡』と、牝のフェロモンを多分に含んだ潮を水音を立てて噴いている。

彼女の股下のシートには卑猥な牝の香りを放ち続ける、大きな水溜まりが作り出されていた。それらは汗や潮、愛液や尿などの尿道口や膣孔から噴き出した体液のみで構成されており、それだけ多くの絶頂を迎えた証である。

「二人共、沢山気持ち良くなつたから……これからはお互いが一番感じる場所同士を擦り合わせて、いっぱい気持ち良くなるうね」

「んゝひいゝ——っッ?!♡♡♡♡ んゝひゅうゝッ♡♡♡♡ いゝひッ♡♡♡♡ おゝひ——っッゝ♡♡♡♡」

淫液で濡れそぼつた割れ目と汗ばむ太ももの間に出来上がった隙間に、前戯で更に太く長くなつた魔羅を挿入すると、腰を前後に動かしてズリズリと擦り始めた。割れ目や陰核を擦り上げられ、BBの意識は快感によって覚醒する。

「たっぷり解したトロトロのおまんこに、ガチガチに勃起したチンポ挿入れるよ。こうやって腰動かしてナカ擦りまくって、子宮もぺちやんこになるまで押し潰すからっ」

——パンっ♡♡♡♡ パンッ♡♡♡♡ パッチュンっ♡♡♡♡

「せんっ、せんぱいゝ——っッ♡♡♡♡ まゝっへ、まっへえゝっ♡♡♡♡ おまめえゝ♡♡♡♡ こすっ、こすれりゅうゝ♡♡♡♡ いひッ♡♡♡♡ ひぎゅうゝうううううう——っッ♡♡♡♡♡♡♡♡」

彼女の大きなお尻の柔らかな尻タブにマスターの恥骨がぶつけられる度に、部屋の中には『パンっ♡♡♡ パンっ♡♡♡♡♡』と、拍手とは少し違う空気を含んだ柔らかい破裂音が響き渡る。

処女雪のように真っ白な尻タブが朱に色付いていく様は淫らであり、彼が腰を前後に動かすストロークは長くなり、速度や力強さも自然と上がっていく。B Bの尻肉が波打つ程に腰を強く打ち付けながら、マスターは独占欲を剥き出しにした宣言をする。

「男の好きなデカくてエロい尻っ！ これから毎日揉みしだいてっ、腰叩き付けて尻たぶ真っ赤に腫らすっ！！ もっとデカいお尻になるの覚悟しろっ！！」

——パンっ！♡♡♡ パッチュンっ！！♡♡♡♡♡ パンッ♡♡♡ バツ  
チュンっ！！♡♡♡♡

「イゝぎゅっ♡♡♡♡♡ ひぐう♡——つつ♡♡♡ おひいゝゝゝっ  
♡♡♡♡♡ ンゝぎゅうう♡うううう♡うう——つつ♡♡♡♡♡」

卑猥な割れ目とプックリ膨らんだ陰核を硬質なゴムのように硬く火傷してしまいそうな熱を秘めたペニスで擦り上げられ、B Bは元から大きな紫色の瞳を限界まで見開きながら嬌声を上げながら絶頂してしまう。

快感の洪水に意識も思考も押し流されながらも、僅かに残った冷静な部分が、自分がどうなってしまうのかを容易に想像させる。

（せつ、センパイっ♡♡♡ 私のことアルトリアさん達と同じ♡ オンナにする気ですっ♡♡♡♡♡ びっ、B Bちゃんのことお♡っ♡♡♡♡ センパイ専用のオチンポケースにして、赤ちゃん産ませる気ですっ♡♡♡♡♡ ひい♡——つつ♡♡♡♡♡）

この状況になった彼女が思い出してしまうのは、アルトリア・オルタとマスターの濃厚なまぐわいであった。自分も彼女達と同じく彼と愛し合いセックスすることしか考えられない、スケベな“牝”へと



♡♡ お好きならけズポズポしてくらさい♡♡ つ♡♡ ドロドロせい  
えきいっぱい『びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡♡♡』て、おまんこに  
出してえ♡——ふき♡ ゆう♡ つっ♡?!♡♡♡♡♡♡」

BBがおねだりを言い切る前に、我慢し切れなくなったマスターが  
膣穴にペニスの一部を挿入した。拳程の大きさをした亀頭に膣の入  
り口がミチミチと強引に押し広げられ、彼女口端から唾液が垂れる口  
からは、混乱と快感の混ざり合った嬌声が漏れる。

肉厚で包み込みながら吸い付いてくる膣孔の気持ち良さに、彼のペ  
ニスは脈打ちながら精液の混ざった先走り汁を吐き出す。ともすれ  
ば射精してしまいそうな、フェラチオをされているかのような極上の  
快感である。

「肉厚でフェラチオするみたいに、吸い付いてくるのエロ過ぎだろっ  
！ そんなにチンポが欲しいなら……子宮で奥まで啜え込めえ—  
—っ!!」

——ズっチ♡ ユン♡ つっ♡!!!♡♡♡♡♡♡

「かひゅ——っつっ♡??!♡♡♡♡」

物理的に肺にあった空気が一気に吐き出され、余りの衝撃にBBは  
白目を剥く。

剛槍による全力の刺突のようにマスターが強引に腰を押し込んだ  
ことにより、長いペニスが根元まで一気に突き刺さる。肉厚な膣肉や  
無数の襞を硬い亀頭が抵抗を許すこと無く掻き分け、か弱い子宮がペ  
ちゃんこになるまで押し潰した。

股下から鳩尾付近にまでペニスが到達しており、彼女のお腹に巨大  
なペニスの形が完全に浮き上がっている。今もグリグリと亀頭の先  
端に押し潰される子宮は、助けを呼ぶように快感という名の絶叫を上  
げていた。











魂まで調教されて犯され続ける。何度も卵子を強制的に排出させられ続け、無数の精子達が泳ぎ回るザーメンプールで受精卵達が溺れる地獄のような快感に吞まれた。

途中でアルトリア・オルタ達が起きてまぐわいに参加するが、余計に魔羅を含めて元気になったマスターにより順番でハメ潰される享楽の宴は、日付が変わっても続くこととなった。

マスターが任務に向かった後の部屋には、五つの魅力的なお尻が横一列に並べられ、膣穴と尻穴から濃厚な白濁液が無限に溢れ続ける。

それから暫くの間、BBが彼の部屋から出てくることは無かった。

『——センパイ専用のオナホAI、BBちゃんを末永く可愛がって下さいっ♡♡♡ん、オ——つつっ♡♡♡』

評価者250人記念 番外編—11 巴御前が愛と  
肉欲によりお嫁さんになるまで

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで

—1

「—はあ、—っ♡♡ いっ♡♡ ひっ♡♡ ひい…っ♡♡ ふう  
っ—っ♡♡♡♡」

咽せ返る程に濃い淫臭の立ち籠める部屋には、息も絶え絶えな女の  
蕩けた呼吸の音が響いていた。

そこには完全に事後としか思えない状態の一糸纏わぬ男女が、シン  
グルサイズのベッドの上で身体を横にしている。扉の入り口から  
ベッドに向かって女物の和服と男物の洋服が、脱ぎ捨てたかのように  
無造作に散乱していた。

きつと行為の前までは綺麗に整えられていたベッドシートが、今で  
は「激しい運動」の名残りで皺苦茶になっており、濃密で激しい交尾  
で溢れた様々な「体液」をタツプリと吸収している。

牝のフェロモンを含んだ汗や口から溢したガムシロップのような  
唾液、尿道口から漏らした潮や尿などの体液が、ベッドの上には幾つ  
もの恥ずかしい液溜まりを幾つも作り出していた。

そんな淫らな体液を溢れさせた張本人である白髪の美女—「巴  
御前」の熟した林檎のように真っ赤に染まった耳元に、黒髪の青年—  
「藤丸 立香」が優しい声色で囁き掛ける。

「気持ち良かったよ…：…巴さん」

「~~~~~っっっっっっっっっっっっ♡♡♡♡♡」

彼女は声にならない嬌声を上げ、真っ赤な肢体を更に赤らめてい  
た。

火照った艶かしい肢体を栗の花に似た臭いを放つ白濁の粘液で穢



なる。時間の経過と共に酒精が抜けてきた彼女は、未だに快感に蕩けた思考で嘆く。

(ああ、……っ♡♡♡ 自らを律して節度を守れることを説いていたの  
にっ♡♡♡ ふあ、っ♡ わっ、私は義仲様にもマスターにも顔向け  
出来ない不貞を働いてしまいましたあ♡♡ ……それにあのよう  
な動物よりも理性の無いまぐわいを——っっ♡♡♡♡)

不貞を働いたことへの自己嫌悪と共に思い出される獣のようなまぐわいの記憶、何よりもマスターを愛おしく想う感情が確かにあったのだ。愛を囁きながら蛞蝓の交尾のような接吻を繰り返し、大量の吐精を子袋で受け入れる時にも両脚を蛇のように絡み付かせていた。

もしも、二人の情事が何らかの機器で記録されていたのならば、百人中百人が愛し合う男女の和姦としか見ることが出来なかつただろう。

肉欲に負けてしまった自分が悪いことは百も承知な巴であったが、それでも酒精に弱い自分にお酒を奨めてきた友人の「メイヴ」と自分を同族だという「酒呑童子」に恨み言を吐きたい気分であった。彼女の蕩ける思考の中にはメイヴ達に言われていた言葉が、無限再生される録音テープの如く流れている。

『——あなたはとつても素材が良いんだから、もっと男を意識して綺麗になる努力をしなきゃ駄目よっ！ それに未亡人氣質をいつまでも引き摺ってるのも良くないわ。お酒でも呑んで少しは羽目を外しなさい！』

『——「ますたあ」に仕えるだけなんて威勢の良い啖呵切つても「鬼」には変わり無いんやから、忠義だけやのうて自分の欲望も少しは許さんとなあ。いつの間にか溜まった欲望が爆発してもうて………  
「取り返し」の付かへんことになつても知らんよお』

結果的にマスターとお酒を呑んだことで取り返しの付かないことになった巴は、何とか今夜の出来事を無かったことに出来ないものかと思案する。一番良いのは二人だけの秘密にすることで、お互いが今





雄を意識させる普段よりも低い声色を出し、マスターはまだまだセックスすることを口にする。

「まだまだエッチしたり無いから、俺の気持ちを身体にも心にもタツプリと教え込みます」

「あゝっ♡♡ あゝひっ♡ ひいゝ——っっ♡♡ もっ、もうゝ無理ですうゝ…っ♡♡♡ あんなにいっぱいしたのですよおゝッ♡♡ おゝひ——っっ♡♡♡」

肉厚の尻タブの谷間の間で太い陰茎がズリズリと擦られ、綺麗なシミ一つ無い綺麗な背中にパンパンに張った大きな亀頭が押し付けられる。

メスのフェロモンをタツプリと含んだ肢体は滑りが良く、股下からこんなに深い所にまで届くと脅していた。

「全然足りてないです。もつと巴さんとエッチしながら、俺が本気で好きだって伝えますから」

「——っっっ♡♡♡♡」

肌を焼くような“甘い熱”を感じて巴は身を振ろうとするのだが、逞しく筋肉質なマスターの身体で拘束されていて動くことは敵わない。牡に組み敷かれて被虐的な快感を与えられ、彼女の火照った肢体の性感は更に高まる。

白濁とした精液と愛蜜の混じった体液をヒクつかせながら溢れさせる膣口には、怒張し切ったペニスの先端を押し当てられた。

——クチュっ♡♡

「あゝ~~~~っっ♡♡♡ おゝっ、お待ち下さいっ♡♡ん  
ゝひいゝッ♡♡こっ、これ以上はむり——」

——ズププっ♡♡ すりゅりゅゆうっ♡♡ ずつぶうー  
っっ♡♡♡♡♡

「イいいいいいいいいいいい——っっ♡♡  
♡♡♡ おっっ♡♡ オっっ♡♡ おひ——っっ♡♡ ひぎゆう  
ううううううううううううっっ♡♡♡♡」

精液で満たされた膣孔に鈍槍のようなフォルムのペニスが挿入さ  
れていき、巴は舌先を突き出しながら濁音の混じった嬌声を上げる。  
既に膣孔をゴリゴリと抉られて開発されているため、意識も飛んでし  
まいそうな快感が走っていた。

肢体を震わせながら潮を何度も噴き、既に焼き付いていた脳を更に  
焼き焦がされる。中心に鋼鉄の芯が入った硬質なゴムのような肉棒  
は、我が物顔で膣壁を掻き分けていく。

——ずりゅりゅゆっ♡♡ じゅぷっ♡ じゅりゅりゅゆう  
っっ♡♡♡♡

「んっおっっ♡♡ おっっ♡♡ ふっ、深いっ♡♡♡ おっ、おくら  
っっ♡♡ えぐれるう——っ♡♡♡♡♡」

三十センチを優に超える長さのペニスは、余裕で子宮口まで届いて  
しまう。ナカにたっぷりと精液の詰まった子宮を彼の硬く熱い亀頭  
が持ち上げ、奥へ奥へと突き込まれていく。

♡♡  
——ずププっ♡♡ ズんっ♡ ずぶぶう……っ♡♡ ずぶんっ♡

「しっ、しぎゆうっ♡♡ いっひっ♡♡ あっ、当たってますう♡♡  
♡♡ うあっ♡♡ おっしっ、押し込まれりゅゆうっ♡♡♡♡  
んっオ——っっ♡♡♡♡」

白濁のザーメンと本気汁に塗れた膣孔の根元まで魔羅が挿入された時には、彼女のお腹は鳩尾の辺りまでぼっこりとペニスの形で膨らんでいた。子宮は押し潰されているのに、うつ伏せのせいでベッドに挟まれて逃げ場がなくなっている。

「いっ、いっ、いきくるしいっ、っ♡♡ おっ、ひいっ、っ♡♡ いっ、ひゅうっ——っ♡♡♡♡♡ っ♡♡♡♡♡ おっ、ッ♡♡♡♡♡ おっ——っ♡♡♡♡♡」

巴は内臓を圧迫されて呼吸出来なくなっており、酸素が欠乏している時特有の顔を真っ赤にしていた。膣孔がぎゅうぎゅうと締めまり、敏感になった膣内の弱点が更に押し付けられる。

「チンポの締め付けキツキツで気持ち良いです。子宮口も吸い付いてきて、精液欲しがってますよ」

「——っ♡♡♡♡♡ ひがっ、うっ、うっ……っ♡♡♡♡♡ んっ、おっ——っ♡♡♡♡♡ おっ、っ♡♡♡♡♡」

挿入された魔羅のことしか頭に無くなっている彼女に対して、マスターは言い聞かせるようにゆっくりと腰を引いていく。

「嘔吐いちや駄目ですよ。こんなに抜こうとすると吸い付いてきて、抜いちやダメって言うってくるのに——っ」

無数の膣壁が逆立つように肉棒が抜けるのに抵抗してくるため、親指よりも肉厚な雁首がゴリユゴリユと音を立てるように掘削していた。

——ずりゅっ♡♡♡♡♡ ズりっ、ゆりゆりっ、ゆりっ、ゆうっ♡♡♡♡♡  
じゅりっ、ゆウっ——っ♡♡♡♡♡

「イククっ♡♡ イククイクイクク——っ♡♡ イクク  
ううウウううううウうウうウうウ——っ♡♡  
♡♡♡♡♡♡♡♡」

G—スポットや他の性感帯も全て容赦すること無く抉られ、大きく開いた口から舌先を突き出しながら巴は獣の咆哮にも似た嬌声を上げる。シナプスが弾けるように強い快感が送り込まれ、彼女は視界を真っ白に染め上げられながら絶頂した。

入り口付近まで長いペニスが引き抜かれた時には、外気に露出した肉棒は白濁の淫液に塗れて淫臭のする湯気を立てている。魔羅の一往復だけで深い絶頂を迎える巴に対して、マスターが筋力に物を言わせて腰を押し込んだ。

——ずっ、ズププ…パンっ!!♡♡♡

「んぎゆう——っっ?!♡♡♡ イってゝるっ♡♡ まらい  
っってゝますうううううう——っっ♡♡♡♡  
おひゆう——っっ♡♡♡」

絶頂で更に敏感になった膣孔を掻き分けられ、か弱い子宮を再び押し潰される。子宮口付近の弱点であるポルチオを硬い亀頭で刺激されて、彼女はまた更に深い絶頂を迎えながら叫ぶ。

絶頂という名の濁流に呑み込まれる巴には、抵抗する意識すら無くなっており、後はマスターに愛されるだけである。

「これから毎日セックスして、いっぱい愛しますから。巴さんがお嫁さんになってくれるまでっ!」

「——っっっ♡♡♡♡♡」

体重を掛けるように腰を力強く叩き付け、ピストンの速度を速めながら宣言した。彼の腰が叩き付けられる度に尻タブの柔肉が波打ち、

真っ赤に腫れ上がっていく。

——パンっ♡♡ パッチ ユンっ♡ バチユンっ♡♡♡ バンっ  
!♡♡

「んゝぎゅっ?!♡♡♡ オゝぎゅッ♡♡ ——おゝっ♡♡♡んゝっ  
きゝゆうゝううゝうゝうゝうゝうゝ——っつッ♡  
♡♡♡」

最早、彼女が発する声は言葉としての意味は無く、ほんの少しでも快感を逃すための音である。部屋の外にまで響きそうな嬌声と腰を打ち付ける破裂音が途絶えること無く鳴り響き、巴はマスターとのセックスの快感を覚えさせられていた。

こんなにも強い快感を覚えさせられれば本能も肉体も同じ快感を求めて、また彼との性行為がしたいと考えてしまうだろう。無意識にも深い絶頂の記憶を刻み付けられながら、膣孔を掘削されて子宮を押し潰され続ける。

何度も何度も腰を叩き付けられ続け、百近い回数ピストンが行われた頃に射精が近付く。柔らかくヌルヌルの膣孔でペニスに快感を与えられ、大きな睾丸で無尽蔵に生産された精液が暴れる。

「射精すっ! 巴さんのための精液射精すっ。子宮で精液の味覚えろっ!」

——パンっ♡♡ パッチ ユンッ♡♡♡ バッチユンっ♡♡ ぱんっ♡♡♡

「——っ♡♡♡ オゝ………っ♡♡♡んゝおゝ——っつッ♡♡  
……オゝっ♡♡♡♡♡」

長い陰茎の中を通ってほぼ固形の精液が根詰まりを起こしながら



ガロンやリットル単位の射精が終わった頃には、彼女は完全に気絶して伸びていた。脳が焼け焦げるような快感で肢体だけが反応し、尿道口からは弱々しく潮か尿かも分からない体液が噴き出ている。

完全に気を失っている巴に対して、マスターは耳元で彼女にとって恐ろしいことを囁きながら腰を動かす。

「朝までいっぱいハメますからね」

「……………ツゝ♡♡♡♡ オゝ————つツゝ♡♡♡」

巴御前がお嫁さんになると誓うまで、彼女は新しい主君に愛され続けるのだ。

——肉欲と愛に塗れた日々が始まる。



## 番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで

— 2

『祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり……』の冒頭で有名な軍記物——平家の盛者必衰の流れを描いた『平家物語』という現代まで読み継がれる作品を知っているだろうか。

日本に生まれたならば義務教育や何らかの情報媒体を通して、一度は作品の名前を耳目したことがある筈だ。

平家物語の中では武将や家臣など数多くの人物が登場するが、その中には英霊となつている勇婦 “巴御前” についても書かれている。幾つか存在する記載の中には、彼女の眉目や武勇に関するものもあった。

『いろしろうく髪ながく、容顔まことにすぐれたり。ありがたきつよ弓、せい兵、馬のうへ、かちだち、うち物もツては鬼にも神にもあはふといふ一人当千の兵也』

これを現代の言葉に言い変えて要約すると——

透明感のある色白な肌に艶やかな長い髪、端正な顔立ちに加えて卓越した弓の腕を持っており、武芸に秀でた一騎当千の美女というものであつた。

齒の浮くような美辞麗句が矢継ぎ早に並べ立てられているが、それも彼女の容貌を目の当たりにしたのなら、お世辞を抜きにした事実を書き記しただけだと理解するだろう。儂げでありながら内に秘めたしなやかな芯の強さを持ち、正しく “大和撫子” という言葉を体現する美貌を誇っていた。

戦闘力に関しては最早語るまでも無いことだが、常人離れた膂力から繰り出される弓矢の破壊力や敵の巨体を空高く放り投げる姿を見れば、一騎当千の言葉に恥じぬ強さだと確信させられることだろう。

しかし、巴御前のことを称賛する言葉だけが書き連ねられている訳でも無く、京の貴族を激怒させた壊滅的な料理の腕前や生の大根を丸

齧りするような味覚音痴についてもしつかりと記されている。

『雀の御宿』として知られる迷ひ家の旅館を切り盛りする“紅閻魔”が呆れる程の女子力の低さや料理下手だが、実はそれにもちゃんとした“理由”が存在していた。

その理由には彼女の霊器の再臨と共に額から前髪を掻き分けて生える、二本の燃え盛る炎のように赤々とした“角”が関係している。角の生えた巴御前の姿は正しく鬼そのものであり、魔に属する者であることを証明していた。

人並外れた膂力も『鬼種の血』が混ざっていることが原因であり、近縁の祖先に強大な力を持った鬼がいたことは先ず間違いないだろう。従って彼女の味覚音痴も鬼の嗜好に由来するものであるため、レシピを忠実に守るなら繊細な料理も作れたりするので。

角や怪力など“鬼種の血”を限りなく濃く引いている彼女だが、その血に吞まれぬように武士の誉や人としての矜持、主君への忠義心によって自分の中にある欲望を律してきた。高位の鬼である酒呑童子による“鬼としての生き方”の勧めにも乗らず、敬愛するマスターに仕える“人”としての在り方を選んだのである。

しかし、押さえ付けていた分だけ“反動”が大きくなるのは必然であり、お酒を呑んだことを切っ掛けに享樂を求める本能が暴走してしまった。

彼女はマスターを誘惑してしまい、不貞を働くこととなる。

そして、理性を取り戻した後は後悔の念に苛まれるが、牡として本気になってしまった彼に組み敷かれ、そのまま愛を囁かれながら朝まで犯され続けてしまう。

——この日を境に彼女のカルデアでの生活は、淫蕩なものへと変化していったのだ。

——咽せ返る程に濃厚な性の臭い

部屋の中には老若男女を問わず一嗅ぎするだけで強制的に発情させ、異性とまぐわうことしか考えられなくなる媚香に近い臭いが漂っていた。

もしも、二オイを可視化することが出来たのならば、部屋全体を覆う妖しい桃色の煙が『ムワツ♡♡』と、湯船を張った浴室に立ち昇る湯気のように見えたことだろう。

ラブホテルやヤリ部屋などよりも卑猥な臭いが籠っている部屋では、ぐつしよりと濡れてシーツに無数の皺が寄るベッドの上、潰れた蛙のような体勢でうつ伏せのまま伸びている美女の姿があった。

「——あゝひ…:…つ♡♡ ふうゝーつ♡♡ ふうゝ…:…つ♡♡♡」

彼女の透き通るような真っ白な肌は、身体の火照りによって色付くように赤らんでいる。特に尻タブの柔肉は何度も腰を杭打ちのような力強いピストンで執拗なまで打ち付けられたため、熟した果実が如く真っ赤になって腫れていた。

元からムツチリと肉付いていた安産型の桃尻は、被虐の悦びをタツプリと覚え込まされたマゾ尻へと変貌している。きつと平手で尻タブをスパンキングされるだけで、秘所をびしゃびしゃに濡らしてしまうことだろう。

そんな明らかに調教が進んでいる美女の正体とは、先程の話にも出ていた“巴御前”であった。彼女は日が夜が更けた頃から朝方になるまで、比喻を抜きに休む暇も無く犯され続けていたのである。

部屋には窓が無いため分かっていないが、外では太陽が昇り始める時間帯となっていた。

「はあ……っ♡♡♡ふうっ♡♡♡ふうっ♡♡♡」

後ろ姿からも分かる程に美しい肢体は、大量に吐き出された黄ばんだ白濁液によりドロドロ口になるまで汚されている。牡特有のギラついた情欲と支配欲によつて、身体の中も外も徹底的に“マーキング”されていた。

長く艶やかな髪の毛の一本一本に絡み付いてきめ細やかな肌の毛穴にまで、牡の欲望がタップリと詰まった濃厚な体液が染み込んでいる。魔力として吸収出来る許容量も余裕で超えているため、彼女のお腹の中には精液がパンパンに詰まっていた。

例え念入りに身体や髪を洗ったとしても臭いが完全に取れることは無く、周囲の者達に自分が牡に愛されていることを伝えてしまう。既に酒呑童子やメイヴには臭いで勘付かれ、マスターの“女”にされてしまったことがバレていた。

「んっう……っ♡♡♡ふうっ♡♡♡おっひっ♡♡♡はあ  
っーっ♡♡♡」

未だセックスの余韻から抜け出せず、彼女は息をするのもやつとな状態である。

そして、部屋に備え付けられたシャワーを浴びていつもの制服に着替えたマスターは、先端まで真っ赤に染まった巴御前の耳元に唇を近づけて優しい声色で声を掛けた。

「今日“も”とつても気持ち良かったよ。今夜もいっぱい愛し合おうね？」

「——っ♡♡♡♡♡♡」

「それじゃ俺は任務に行ってくるから。愛してるよ」

「おっ~~~~っ♡♡♡♡♡♡」

愛を囁かただけで甘イキする彼女を尻目に、カルデアの任務の時

刻が迫っているマスターは、名残惜しそうにしながらも部屋から出て行った。

後に残されたのは、淫臭を放つ巴御前だけである。

最近はマスターが送り狼のように部屋に訪れ、逆に彼の部屋に夜伽で呼ばれるのが交互に繰り返されていた。どちらかの部屋で愛欲に溺れながら、意識も飛ぶような激しいまぐわいが行われているのだ。

「やつとお………っ♡♡♡ お♡お♡おやすみですうっ♡♡♡ いっ♡ひ………っ♡♡♡ ひい………っ♡♡♡」

交尾の間は絶頂の快感で気絶と覚醒を繰り返させられ、まともな休憩も無く朝方まで犯される日々を過ごしており、最近の睡眠の時間帯は朝方から昼頃へと変化していた。

その後に精液塗れの身を清めたり交尾後の淫臭の籠もる部屋の掃除、食事などを済ませていると、また夜のご奉仕の時間になってしまふ。最早、武士や従者としての彼女は遠く彼方にあり、情婦や愛妾と呼ぶ方が幾分か正しい状態となっている。

若い牡特有の無尽蔵の体力と性欲に翻弄され、英霊でなければ確実に孕んでいたであろう大量の中出し吐精で子宮と腸内を満たされていた。肢体の震えに合わせて『ぶぷっ♡♡♡ ぶびゅっ♡♡♡』と、膣口と尻穴の両穴から、お腹が膨れるまで注がれた精液の一部を下品な音と共に吐き出している。

「はあ………っ♡♡♡ ふう………っ♡♡♡ ん………っ♡♡♡ ——  
はあ………っ♡♡♡」

巴御前は快感に身悶えたまま微睡の中へと落ちていき、“今夜”のまぐわいに備えて身体を休めるのだ。

「昨日も一昨日も……っ♡♡ きよっ、今日こそは節度を持つべきだと、マスターのことを説得しなくてはなりませんっ♡ はうっ♡♡」

巴御前はカルデアの通路を覚束無い足取りで歩き、頬を赤く染めながらブツブツと呟きながら食堂へと向かっていた。まだ瞳孔や尻孔に太くて硬い“肉棒”が挿入された感覚が残っており、彼女の歩き方がおかしいのもそのせいである。

良く見れば膝がガクガクと震えており、いつもより歩幅が狭くなっていた。

身体も心も殆どマスターの絶倫巨根に堕とされているが、生来の生真面目な性格であるが故に理性が僅かに残っている。未だに彼のことを誘惑して不貞を働いたことへの罪の意識が残っており、それが無ければ既に淫楽の底無し沼の中で溺れていたことだろう。

「今夜こそゆつくりとお話しないといけませんね——ひゃっ?!♡♡」

肉欲に溺れないという決意を固めていた巴御前の細い腕は後ろから突然掴まれ、そのまま男子トイレの個室へと引っ張られて連れ込まれる。『カチャっ』と扉を閉める金属質な音が鳴り、蓋が閉まったままの便座に座らされた彼女が顔を上げると——

「巴さんのこと見掛けたらムラムラしちゃったから、二人っ切りになれる場所に連れ込んだじゃった」

「まっ、マスター……っ♡♡♡」

自分の腕を掴んで強引に連れ込んだマスターがおり、顔の目の前ではベルトが緩められ、そのままズボンのファスナーまで下ろそうとしていた。

「だっ、駄目ですっ♡♡ せつ、節度を守らなくてはっ♡♡♡ 今朝もあんなにまぐわったのですよっ♡♡」

口では先程の決意の通りに静止の言葉を紡いでいるが、散々ハメ潰されて上下関係をタツプリと教え込まれている巴御前は、強気な言葉や行動で抵抗をすることは出来ない。

そうしている間にも彼はズボンとパンツをまとめて下ろされ、窮屈そうに押さえ付けられていた巨大なペニスが外気へと解放された。肉で形作られた無骨な槍のような魔羅は、中肉中背のマスターとは明らかに釣り合っていない大きさをしている。

二メートル半を超える巨躯の人間基準で考えたとしても、度を越した“巨根”と呼ぶべきイチモツの太さと長さがあつた。牝を性的な意味で殺すことに特化したエグい形状は、牝に生まれた時点で勝負にすらならないものである。

——ベチンっ!!♡♡

「——つつっ♡♡♡ ひっ、ひいっ♡♡♡」

逆らおうとする生意気な牝を叱り付けるように、彼女の頭を巨大な肉棒で鈍い音を立てながら叩かれた。そのままズツシリとした重量が頭に乗せられ、自然と頭を下げるよな形になってしまふ。

自分の膣孔を毎日のように膣壁が無くなる程に力強く掘削され、精液でタップアップの子宮を執拗なまでに叩き潰す極悪な“ご主人様”の魔羅。啼いて、鳴いて、哭いて——どれだけ嬌声を上げて懇願しても、自分のことをマゾな淫乱牝へと調教してくる鬼畜で逞しく男らしい肉槍であつた。

「あつ、あんなにいっぱいシたのに……っ♡♡ もうこんなに大きくなってますっ♡」

肌が焼けるような熱を発するペニスからは、汗で蒸れたことにより牡の饅えた濃厚な臭いが放たれている。

「すうゝーっ♡♡♡ はあゝっ♡ にっ、臭いがすごいですうゝっ♡♡ — すうゝーっゝ♡♡♡」

毎日のようにフェラチオやパイズリでご奉仕をしているため、彼女は魔羅の臭いを嗅ぐだけで脳みそがグズグズになったシチューのように蕩けてしまう。気付けば鼻を近づけて深呼吸をするように小鼻を膨らませ、肺と頭の中がいっぱいになるまで臭いを嗅いでいた。

濃厚な雄の臭いに混ざって自分の牝の匂いもしており、自分の愛液などが染み付いていると分かってしまう。それだけで心の奥底にある独占欲が刺激され、本人に自覚は無いがもつと自分の臭いが染み付いて欲しいと考えていた。

淫らな牝の顔となった巴御前を見下ろすマスターは、彼女の赤々とした角を左右で掴みながらお願いをする。

「巴さんがお口で扱って気持ち良くしてよ」

「~~~~~っっっ♡♡♡♡ いっ、いけませんっ♡♡ 節度っ、節度があ……っ♡♡♡ まだお昼ですっ♡♡ よっ、夜になればシますからあっ♡♡♡」

お昼にするご奉仕を勘弁して貰おうとするが、彼がそのような理由で許してくれる筈も無かった。

「このままじゃ午後の任務にも集中出来なくなっちゃうから、一回だけで良いからお願い」



「いつ、一回だけっ♡♡♡ 一回だけえ…っ♡♡♡」

マスターの一回だけという言葉が免罪符となり、巴御前の中で一回だけなら良いかも知れないという考えが生まれてしまう。それに目の前の魔羅を見詰めているだけなのに、口内にはガムシロップのような唾液が溢れてしまいそうな程に溜まっていた。

正しくご馳走を前にした時と同じ反応を身体がしており、何度も味わっている少ししょっぱく濃厚な牡の味を口が求めてしまっている。自分の中で理性と欲望が激しい戦いを繰り広げていたが、結局は鼻腔から入り込む牡の臭いの後押しで理性が敗北してしまう。

伏し目がちに巴御前は両手で太い陰茎に触れながら、マスターに一度だけフェラチオをすることを口にする。

「にっ、任務に支障が出るなら…っ♡♡♡ いつ、一度だけならお口でのご奉仕致しますっ♡♡ ほっ、本当に一度だけですからっ♡♡♡ つっ、続きは夜ですからね♡♡」  
「うん、俺は”約束は守るからお願いするね”」

若干の含みを感じる言葉で彼は了承すると、彼女は生娘の如く恥じらいながらもご奉仕を始めた。

「大きな音は立てられないので、激しいご奉仕は出来ないのでからねっ♡♡ ん…っ、れろお”——っ♡♡♡」

大きく口を開いた巴御前は唾液塗れの舌を伸ばし、大きく膨らみ硬くなった亀頭をアイスキャンディを舐めるように、舌先をチロチロとイヤらしく動かす。

「れろっ♡♡ ぴちゃっ♡ れろれろお”——っ♡♡ いつもよりしょっぱいれすっ♡♡♡ ちゅぷっ♡♡ ちゅるるっ♡♡♡」

ピチャピチャと小さな水音を立てながら、彼女は舌先に広がるペニスの味を堪能する。濃厚な牡の味と臭いが口内を満たしていき、下着には粘っこい愛液が染み込んでいく。

「ちゅっ♡♡ ちゅぶっ♡♡ ちゅっ、ちゅう♡…っ♡♡」

亀頭を重点的に唾液塗れにしていく巴御前は、形の良い唇を窄めて先端に何度もキスを繰り返す。本人に自覚は無いが隠し切れない愛情が、ペニスへのキスに現れてしまっていた。

本来ならばここからもっと激しい口淫が始まるのだが、いつ人が来てもおかしくない場所であるため、彼女は唾液に満たされた口を大きく開いて亀頭を啜え込む。

「ちゅるっ♡♡ ちゅぶぶっ♡♡ んむっ、ぶはぁーっ♡♡ はぁ…っ♡♡ あーんっ♡♡ じゅぶぶぶっ♡♡ じゅるるっ♡♡♡♡」

口内で舌を動かして亀頭に這い回らせながら、口を窄めて内頬による愛撫も同時に行う。正しく敏感な亀頭を気持ち良くするために設計された、極上のオナホールのような使い心地である。

「あぁっ、本当に巴さんのフェラ気持ち良いよ。金玉に溜まった精液搾るの上手すぎる。毎日少しずつ上達してきているのもエロ過ぎ」

「~~~~~っ♡♡♡♡ ぢゅるるっ♡♡ んっ♡♡ ちゅっ♡♡♡♡ じゅぶぶぶぶうっ♡♡…っ♡♡」

巴御前は下品な女だと言われている筈なのに、どうしようもなく嬉しいと感じていた。フェラチオも熱心になってしまい、気付けば口の奥まで使ってご奉仕をしてしまう。

舌先が裏筋と肉厚なカリ首へと這い回り、彼女はドクドクと溢れる先走り汁を吸っていた。



上げる。呼吸も出来ずに苦しい筈なのに、感じているのは快感だけであった。

その証拠に巴御前は腰を震わせ、ショーツの裏地に潮を何度も噴き掛ける。吐精が終わる頃には袴の股部分には染みが出来上がり、快感に溺れる牝の顔になっていた。

射精が終わったペニスが引き抜かれていき、彼女は尿道の中に残った精液も残さず吸い出す。

「——っ、最後まで気持ち良い射精させてくれるの良いお嫁さん過ぎる。これからはもつとフェラチオもいっぱいするようにしよね」

「くくくくっつッ♡♡♡ んぐっ♡♡♡ んっ♡♡♡ ぷはあ  
ーっ♡♡♡♡ きっ、きもひよかったならいいれすうっ♡♡♡  
あ——っ♡♡♡」

こうしてお昼休みのフェラチオご奉仕は終わったかに思えたが、巴御前はまだガチガチに勃起した魔羅を見てしまう。まだお昼の休憩が終わるには三十分はあり、もう彼女のお腹はザーメンでタップアップのためお昼ご飯も必要ない。

そして何より——おまんこがこれから可愛がつて貰えると勘違いをして、貪欲な子宮と一緒に雛鳥がご飯をねだるように疼いてしまう。少しの間だけ迷った巴御前だが、我慢出来ずに自分から提案してしまう。

「あつ、あの…:…っ♡♡♡ まだ時間もありますよっ♡♡♡ オチンポもまだまだ満足していないようですから、もう少しだけ気持ち良くなりませんかっ♡♡♡ おつ、お口も塞げば声は出ないですよ?♡♡♡♡♡」

淫らな人妻の恥じらいながらの誘惑に雄が抗える筈も無く、彼女とマスターは休憩時間ギリギリまでトイレの個室で淫行に耽った。声押し殺した狭い密室の中でのまぐわいは興奮を煽り、互いの唇をキスで塞ぎながら立ちバックや駅弁スタイルで中出しセックスに溺れ

る。

それから二人が休憩になるとトイレの個室に消えるようになったのは、口にするまでも無い決定事項であった。

番外編：巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで

— 3

——草木も眠る丑三つ時

殆どの人間は眠りに就いている時間帯であり、日中は活気に溢れている場所でさえ、この時間になれば静けさに満ちている。

生まれた場所や時代さえ異なる英霊達が集うカルデアもその例に漏れず、夜が更ければ人が行き交う通路や賑わう食堂なども物寂しいと感じる位に閑散としていた。電力の消費を抑えるために照明も最低限であり、暗がりにより聴覚が否応なしに研ぎ澄まされる。

布擦れや足音などの微かな音ですら妙に大きく聞こえる程、耳が痛くなるような静寂に包み込まれていた。

カルデアという巨大な施設を管理・運営する為の最低限の人員を除き、各々が与えられた個室の中で明日に備えて眠りに就いている。サーヴァントや職員を含めた百名以上に個室を充てがうだけの部屋数がある居住区画には、一室だけ大きな音を立てている部屋が存在した。

もしも、防音性が高く設計されていなかったら、今頃は通路全体に音が漏らし、皆の安眠を妨害していたかも知れない。

音を発生させる部屋の中を覗いて見れば——

——パンっ！♡♡ パンツ♡ ♪ぱちゅんっ！！♡♡♡

咽せ返る程に濃いメスの甘酸っぱい匂いが籠った部屋に、拍手にも似た音が一定のリズムを刻むように響き渡っていた。

理性も衣服も脱ぎ捨てた一組の男女が、絶対に肌が触れ合う狭いベッドの上で激しい“運動”を行っている。大きな破裂音が伴う運動とはまぐわいの事だが、子供を授かる為の神聖な儀式からは程遠

く、男性上位で本能の赴くまま牝の媚肉を貪る“交尾”に他ならぬい。

組み敷かれて獣のような体勢で犯されるメスと膝立ちになり背後から犯すオスは、原始的で生物としての根元にある“交尾”の悦楽を貪り続けている。

照明の光を反射させてキラキラと煌めく銀糸が如き艶髪を振り乱して、脳の奥まで焼き焦がす快感を僅かに逃がそうとする和風な美女は、元からポリューム感があり触れる前から柔らかさが伝わる豊満な臀部の持ち主であった。

もう数センチ大きくなれば下品に感じるだろうが、ギリギリ美尻だと脳が認識するサイズ感に収まっている。

ムツチリと実った臀部を覆うきめ細やかな肌はしつとりと蒸れており、艶めかしい光沢を放ちながら珠のような汗を沢山浮かべていた。

搾るようにギュウっ♡♡と尻肉を握り締めれば、快楽と共にメスのフェロモンを多分に含んだ汗が噴き出す。その様は瑞々しい果実のようであり、思わず齧り付きたい衝動へと駆られる。

四つん這いというお尻を強調する体勢をしている事によって、元から大きなお尻の存在感が更に強調され、真後ろから見ればある種の迫力すら感じるだろう。

成熟した牝の元気な赤ん坊を産む事に適した広い骨盤を感じる安産型の桃尻、丸々とした尻臀は熟した林檎や苺の如く赤らみパンパンに腫れ上がっていた。

何故、平手で何度も叩かれたかのように、桃尻を腫らしているのかと問われれば――

黒髪の青年“藤丸 立香”の引き締まった下腹部が、銀髪の大和撫子“巴 御前”の肉厚な尻臀をお仕置きするように、何度も腰を叩き付けた結果である。柔らかな尻タブに硬い下腹部がぶつけられる音が、部屋の中に断続的に響く破裂音の正体であった。

体脂肪率が低いだけの薄い腹筋とは異なるゴツゴツとした起伏が感じられる逞しい腹筋は、筋肉に対してフェチズムを持っていないくとも女性を『ドキっ♡♡』とさせるだろう。

ただ佇んでいるだけで牡を魅了する美麗で淫靡な彼女に対して、マスターはグツグツと湧き上がり続ける赤黒いマグマが如き獣欲をぶつけていた。

——バツチュンっ！♡♡♡ パンっ♡♡♡ ぱっちゅんっ！！♡♡♡

加虐心を煽るムチムチの尻臀に腰が勢い良くぶつけられる度に、引き締まったお尻の筋肉を覆う脂肪がブルブルと波打っている。

拍手を更に柔らかくしたような空気を含んだ破裂音が、部屋全体を埋め尽くすように響き渡っていた。

それと同時に——

「イッきゅッ♡♡ まらいッぎゅっ♡ イッぢやウウッうッ  
うッウッううッうッつつッ♡♡♡♡♡ んっひいッいッいッい  
いッいッいッいッ——つつ♡♡」

尻臀を打ち付ける淫らな破裂音と共鳴するように、甘美で蕩け切った巴 御前の絶頂報告が木霊する。

快楽に染まり切った嬌声は彼女のメスの部分を強く意識させ、普段の丁寧な言葉遣いや落ち着いた声色を知っていると余計に興奮を煽った。

声と同じように規律や節度を重んじる巴 御前の凜とした姿を知っていればいる程、豊かな乳房やお尻をブルンブルンと揺らしながら、無様に潮を吹いて絶頂しているスケベな姿に眩暈が覚える程の強いギャップを感じるだろう。

彼女は鬼種の血を色濃く受け継いでおり、誠実で義理堅く器量良し



にして一騎当千の女武者である。腕力では絶対に敵わない強き女が自分の魔羅に屈服している事実が、余計に牡を昂らせ、もつと犯して種付けしたいという欲望を無限に掻き立てていく。

マスターが力強く腰を打ち付ける度に巴御前の肺の中にある空気が抜け、それが艶やかで瑞々しい上唇と下唇の隙間から嬌声となって漏れ出ていた。

ぷっくりと膨らんだ陰核の直ぐ下にある小指の先よりも小さな穴から『ぷしゅっ♡♡♡ ぷっしゅうっ♡♡♡』と、牝のフェロモンを大量に含んだ潮を何度も噴き出している。絶頂を迎えて意識を飛ばしては覚醒を繰り返す淫乱な牝は、薄皮以下の理性を用いてセックスを止めて欲しいと懇願を蕩けた声で行う。

「まつ、ますたあ♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ つて♡るう♡♡♡ おまんこイ♡♡♡♡♡ つて♡ますう♡♡♡♡♡ きゅうけい♡♡♡♡♡ きゅうけい♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ イ♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡」

答えは途絶えぬ彼女の嬌声が物語っており、再び柔肉を打ち付ける破裂音が響いた。

今宵も巴 御前は一夜の過ちから「女」として求められるようになった敬愛するマスターの部屋へと呼び出され、激しく濃厚な交尾で意識が飛ぶ程の快感を与えられ続けていた。

前戯の段階で彼女の事を墮とそうとする強い意思が垣間見え、呂律が回らなくなるまで長い舌を絡め合う濃厚な口付けをされながら交尾の準備をされる。

蛞蝓同士の交尾よりもネットリとした口付けの間も手から溢れるサイズの乳房は、合計十本ある指の痕が残るまで執拗に揉み潰されてしまう。ぷっくりと膨らんだ乳首や乳輪も親指と人差し指、中指により翳るように捏ね回され、口内で悲鳴と変わらぬ嬌声を数え切れない程に上げさせられる。

凶悪な形状をした肉槍を受け入れる快楽を覚え込まされた淫乱な牝孔も、根元までずっぷりと挿入された人差し指と中指の二本指により、粘性を帯びた本気汁がグプグプと泡立ち白く濁るまで掻き混ぜられてしまう。

ぬぼおっ♡♡と粘っこい水音と共に膣孔穿りが終わった頃には、彼の指は長時間お風呂に浸かった時のようにふやけていた。潮だけで無く尿を漏らしたがそれでも尚、右手で膣穴をグチュグチュと穿られ続け、左手で乳首を捏ねられ、嬌声を上げて快感を逃そうとする唇も塞がれる。

その過程で床とベッドのシーツなどには、濃厚な牝の淫臭を放つ恥ずかしい水溜りが幾つも出来上がっていた。

前戯の段階でグロッキーになる寸前まで快楽漬けにされ、肌を空気が撫でるだけで嬌声を上げる程に肢体が火照り敏感になってしまう。

抵抗することも出来ぬままグズグズのトロトロに蕩けた膣穴に極太の長魔羅を容赦無く挿入され、半ば強制的に和姦種付けへと移行したのである。

「——今日も朝まで犯して上げるっ」

「ひっ、ひっ、ひっ……っ♡♡♡♡ひっ、——っ、♡♡」



——つつっ♡♡♡♡」

誰の目に見ても心も身体も堕ちている彼女だが、己の中で定めたであろう最後の一線だけはギリギリで守り続けていた。

それは自分のような戦うことしか能がない女よりも主人にはもつと素敵な相手がいるという考えが強く、マスターと肌を重ねて愛情が深まれば深まる程、その考えは確かで強固になっていく。

正しく我儘を言っただけで困らせたりしない雄にとつて都合の良い愛人氣質な考えであり、生前でも愛妾であつたが故に自然とそういう考えに至ってしまうのかも知れない。

きつと愛人やセフレになれと命じれば喜んで受け入れるだろうが、そんな浅い関係で終わらせる事を許さないのがマスターであつた。

「それじゃあもつと愛し合つて、夫婦になつてくれるまでシようか。俺は巴さんがお嫁さんに欲しいし、赤ちゃんだつて産んで欲しいからつ。本気だつて伝わるまで、俺は諦めないですよ」

「あ♡っ♡♡ あ♡ッ♡ あう♡……っ♡♡♡♡」

巴 御前の想像よりも遥かに彼が本気である事を知り、彼女は意味を持つた言葉を紡げなくなつてしまふ。

本人は言語化出来ない感情に戸惑っているが、身体は正直で膣孔が先程までよりもキツく締まっていた。お臍の奥にある子宮も強く疼き、明らかに赤ちゃんという言葉に反応している。

ピストンも更に強く激しくなり、マスターの射精感も高まつていく。

「もう直ぐ射精すよっ！ 子作り意識しながら、子宮で精液受け止めろっ!!」

「い♡ひい♡~~~~~っつっ♡♡♡♡ まっれっ♡♡♡ まっれくらさい♡……っ♡♡♡ いつもよりからだかへんれすう♡♡♡  
——ん♡ひゅう♡?!♡♡♡♡」



——びゅっ♡♡　　びゅっ♡♡♡♡

「あゝえっ?♡♡♡　なんれえゝ……っ♡♡　ふきゝゆうゝううゝううゝうううゝうううゝううっっっ♡♡♡♡♡」

マスターからの愛の告白と妊娠確実の大量射精により、巴　御前の身体は身籠ったと勘違いをする。ぷっくりと膨らんだ乳輪の中心にある硬くシコったイヤらしい桜色の乳首から、甘ったるいミルクの香りのする母乳を噴水の如く噴き出してしまふ。

射精を受け止める子宮だけで無く乳房からも快感が発生し、彼女は更に快感へと呑み込まれていった。

その後も母乳を絶頂と共に噴くようになった巴　御前に興奮したマスターにより、始めの宣言通りに明け方まで休む間も無く犯され続けになってしまう。

「ほっ、ほんろにいゝっ♡♡　にんひんしゆるうゝ……っ♡♡♡♡」

——また一つ彼女はお嫁さんに近付き、淫乱な牝へと堕ちていく。



羞恥心により頬を真っ赤に染める巴御前は、ポロリと溢れてしまい  
そうな位に豊満な乳房を『ぎゅうっ♡♡』と、自身の細い右腕で隠す  
ように押さえ付けていた。

「ちっ、乳首が見えちゃいますう♡♡♡」

彼女が蚊の鳴くような声で呟いている通りに、搗き立てのお餅のよ  
うな質感と柔らかさを兼ね備えた乳房の上半分が露出している。  
ぷっくりと膨らんだ桜色の乳輪がドレスの端から覗き見えており、明  
らかに巴御前の乳房の大きさとドレスが想定してるカップ数が釣り  
合っていない。

——男性の欲情を煽る事に特化したデザインだが、上半身と比べて  
も下半身の露出度は更に上がっていた。

本来ならば足首まで覆っている筈の長いスカートは取り払われ、お  
臍にすら届かないビステュエのような極小丈である。白色のガーター  
ベルトがムツチリとした太ももに食い込み、可愛らしいレースが沢山  
あしらわれた殆ど紐のようなショーツが丸見えであった。

露出癖を持っている痴女がするような格好であり、神の前で永遠の  
愛を誓う花嫁衣装としては不適切かも知れない。

「おっ、お尻がスースーしますっ♡♡♡　こんなに恥ずかしい下着は  
初めてです……っ♡♡」

ぴっちりと閉じた太ももの間に左手を差し込み、じっとしていても  
見えてしまいそうな秘所を隠していた。

細く括れた腰を捻って身体を見られる面積を減らそうとしている  
が、全体の露出度が減っている訳では無いため、いじらしい無駄な努  
力が性的興奮を余計に煽ってしまう。



「でも、お願いしたら着てくれたよね？」

「そつ、それはマスターがっ♡♡ 巴のために苦勞して用意したと言  
うから……っ♡♡♡♡ しつ、仕方なくっ……です♡♡」

「ふーん、そつかあ」

“お願い” されただけでこんな痴女のような格好をしているのが、  
巴御前が表面上だけ取り繕っている事の証明である。そんな彼女の  
心情を手取るように理解しているマスターは、今夜で完全に墮とし  
て素直にさせてしまおうと考えていた。

「仕方なくて花嫁衣装着たんだ」

「~~~~~っつツ?!♡♡♡♡♡ ちっ、ちが……きやつ♡♡」

狼狽する巴御前の華奢な肩を彼は両手で掴むと、そのままベッドに  
押し倒してしまう。短い悲鳴を上げるがそれ以上の抵抗を見せない  
彼女は、牡に組み敷かれて屈服させられる事に慣れてしまっていた。

——巴御前の真つ赤な瞳には、隠し切れない“期待”が浮かんでい  
る。

「今日でお嫁さんになるって、巴さんに言わせるから」

「——っつツ♡♡♡♡」

---

本気でお嫁さんにしようとマスターがプロポーズをした日を境に、

巴御前の態度はこれまでと明らかに変化した。

強く抱擁をされれば心臓の鼓動が煩いと感じるくらい高鳴り、好きや愛していると囁かれるとお臍の奥にある“子宮”が反応して疼きを覚える。口付けを交わす時は快感と共に生娘のように羞恥心が湧き上がり、真つ直ぐ自分の事を見詰めてくる彼とともに視線を合わせられない。

挿入中に愛の言葉を耳元で囁かれながら口付けを落とされれば、本人の意思とは関係無しに膣孔全体が子種を強請るように締めまり、子宮口が亀頭に口付けをするように吸い付いてしまう。

——巴御前の様子を端的に表すならば、恋する乙女が相応しかつた。

「——じゅるるっ♡♡♡♡ ちゅぷうっ♡♡♡♡ ん“ちゅう”っ♡♡♡♡」

「んう”っ、はあ……っ。目離しちや駄目だよ——んむっ」

「ちゅうっ♡♡♡♡ じゅるるっ♡♡♡♡ そっ、そんなこと言われへもお……ん“ちゅう”っ?!♡♡♡♡ ぢゆるっ♡♡♡♡ れろお”っ♡♡♡♡ じゅるるう”……っ♡♡♡♡♡♡」

体格の良いマスターとベッドに挟み込まれており、巴御前はサンドイッチの具材のようにまともに身動きを取る事が出来ない。両手も指と指を交互に絡め合う恋人繋ぎによって拘束され、蛞蝓同士の交尾のように卑猥な口付けが行われ続けていた。

相手の瞳を見詰める事を強制させられており、彼の青い瞳と彼女の

赤い瞳の視線がドロドロ口に混ざり合っている。

誓いのキスとは比にならない長い時間、二人のキスは交わされ続けていた。唇と唇が離れる事なく密着したまま、舌と舌が互いを磨き合うように蠢いている。

「じゅずずう……っ♡♡♡ ぢゆるるっ♡ じゅぷっ♡♡♡  
ちゅうっ♡♡♡ んふう……っ♡♡ じゆるるるうっ♡♡♡」

口内に溜まった唾液を水音を立てながら啜られ、逆に唾液を流し込まれて喉を鳴らして嘔下させられていた。既にマスターの唇と自分の唇の境目が曖昧にぼやけており、口内の温度や唾液の味が同じになるまで溶け合ってしまったている。

恋人繋ぎをする指先にぎゅつと力を込められて身体が跳ね、鼻から吐き出される荒い息が頬に当たるこそばゆさすら心地良い。

彼の舌の動きに合わせるように巴御前も舌を動かしており、誰がどう見ても恋人同士の口付けでしか無かった。それに加えて言葉よりもある意味雄弁な瞳に好きだと口説かれ続け、どれだけ理性を強く保とうと思っても牝に墮とされてしまう。

たっぷりと彼女の唇を味わったマスターは、満足感を感じながらゆっくりと唇を離す。

「んむっ、はあーっ」

「あゝあ——っ♡♡ ふう……っ♡ ふうーっ♡♡♡」

「そんなに名残り惜しそうな顔されると、止められなくなっちゃおうよ？」

「~~~~~っ♡♡♡ そっ、そんな顔してないれすう……っ♡♡ はあ……っ♡♡♡」

言葉では何とか悲鳴の言葉を絞り出しているが、キスが終わった時に巴御前は名残り惜しそうな表情と声を漏らしていた。素直になり切れない彼女に愛おしさすら彼は感じているが、逆に素直になるまでイ

ジメたいという加虐心を募らせる。

マスターは恋人繋ぎしていた手を離すと、既に乳輪が見え窮屈そうにしている乳房を締め付ける布地に触れ、そのままグイッと反対側にひっくり返してしまう。

——ぶるんっ♡♡♡

窮屈さから解放されたお餅のような乳房は、ぶるんぶるんとゴム鞠のごとく弾みながら外気に露出する。

長い口付けの間で身体が火照っていた事により、蒸れ易い谷間や下乳はじつとりと汗ばんでいた。柔肌は艶かしい光沢を帯びながら、甘ったるいミルクに似た香りが解き放たれる。

「きや——っツ?!♡♡♡♡♡」

「こんなに乳首硬くして興奮してるのにつ。身体は正直だよ?」

「あゝんっ♡ おっ、おっぱいっ♡♡ らめれすうゝっ♡♡ いゝひっ♡♡ ひいゝ——っツゝ♡♡ ちくびいゝっ♡♡♡♡ いゝきゆうゝ——っツゝ♡♡」

小さな悲鳴を上げた巴御前が胸元を腕で隠すよりも先に、ぷっくりと膨らんだ乳輪や硬くシコった桜色の乳首をマスターが手慣れた手付きで遊ぶ。

彼女が感じる場所を完全に把握しており、小さな乳首の頭頂部を力リカリと引つ搔くように指先で刺激している。艶かしい桜色の乳輪と白い肌の境目を何度も円を描くようになぞれば、腰が浮き上がるような快感が駆け巡って背中がベッドから自然と浮き上がってしまう。

緩急を自在に操る愛撫は女を哭かせる技術があり、頭の中は乳房を弄られる快感で一杯になる。

「うゝあっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡ ちくびいゝっ♡♡ いゝひッ♡♡♡ カリカリいゝっ♡♡♡ あゝっ♡♡♡ ああゝッ♡♡♡ にゅうりんゾリゾリだ



吸ったベッドに崩れ落ちた。巴御前は大きな乳房をふるふると揺らしながら、肩を上下にさせながら呼吸をする。

「はあゝーっ♡♡ ふう…‥…♡ はあゝーっ♡♡♡」

「今日は正直にならないとこうやってお仕置きするから」

「~~~~~っ♡♡♡♡ はっ、はい…‥…♡♡♡ん  
ひいゝっ♡♡♡」

女の子を快感によつて従順にさせるマスターは、間違い無くベッドヤクザとしての天性の才能を持っていた。甘ったるい香りをした母乳塗れの手を彼女に見せ付けながら、彼は巴御前の本心や身体が妊娠したがっていることを耳元で囁く。

「巴さん、本当は赤ちゃん欲しがってますよね。告白して子供欲しいって言うてから、母乳噴き出してるのが動かぬ証拠です。身体が俺との赤ちゃん欲しがってるんですよ」

「~~~~~っ♡♡♡♡ ちっ、ちがいますうゝっ♡♡♡ 気持ち良すぎ  
てっ♡ 身体が変になっちゃっただけえ…‥…♡♡♡」

「本当に俺との赤ちゃん欲しく無いんですか？ きつと可愛いですよ」

「~~~~~っ♡♡♡♡ まっ、マスターはあゝっ♡♡♡  
ひきようれすうゝっ♡♡♡」

彼女の下腹部の奥にある子宮を意識させるように、マスターの手がお臍の辺りを何度も撫で摩っていた。子作りを意識させる言葉を聞かされて、巴御前は子宮が疼き母乳が乳首から溢れるのを感じる。

本心では自分が子供を欲しがっている気付いているが、彼に自分が相応しく無いと思い込んでいるせいで素直になる事を自分では。だが、このまま関係が続けば自分が堕ちると理解しているため、彼女は最も“相手のことを怒らせる”間違った選択肢を選んでしまう。

「あつ、愛人にならなりますっ♡♡♡ マスターがお好きな時に犯せる  
愛人なら——ひいっ♡♡♡♡♡」

情けない悲鳴を漏らした巴御前の視線の先には、青い瞳に明らかに怒りの感情を秘めたマスターの顔があつた。愛し合う夫婦の関係とは異なる身体だけの関係、自分の事を大切にしていない牝を許せる訳も無い。

「そういうこと言っちゃうんだね」

「まっ、マスター……っ♡♡♡ 何か気に触ることを言ってしまいましたか?♡♡♡♡♡」

自分の何が悪かったかも理解していない彼女に更に怒りを覚え、彼は今まで使っていない“最終手段”を用いる事を決意させる。

「——令呪をもって命ずる」

「マスターっ?!♡♡♡」

——右手の甲に刻まれた三画の令呪が真紅に輝いた。

【NEW】番外編・巴御前が愛と肉欲によりお嫁さんになるまで—5

黒髪の青年——“藤丸 立香”が翳した右手の甲に刻まれた、盾をモチーフとしたデザインの令呪から朱に染まった強烈な光が放たれる。彼は目前にいる淫らな牝を絶対に屈服させるという覚悟を決めており、躊躇する素振りも見せずに三画ある内の一画を用いて声高らかに命令を行う。

「令呪をもって命じる。感度を上げろっ！」

「んあ、——っツ、♡♡♡ あ、ひい、くくくっツ、!!?♡♡♡」

光が徐々に収束していき一画の令呪を消費された瞬間——

艶を帯びた癖の無い銀髪を靡かせる大和撫子——“巴 御前”の女性的な魅力に溢れた『ムチっ♡♡』とした魅力的な肢体が、強めの電流を流されたのかと勘違いしてしまいそうな位に『ビクンっ♡♡♡♡♡』と大きく痙攣する。先程までの行為により絶頂を迎えて感度は十分過ぎる程に高まっていたが、令呪を使用された後では微弱な空気の流れにさえ快感を感じてしまう。

突然の令呪による命令を無抵抗で受けたことにより、普段の感度から二倍以上に跳ね上がった。

本来の“聖杯戦争”で刻まれる令呪は使い切りということもあり自害を強制することが出来る程に強力であり、カルデア式の令呪は専用の装置により回復することが可能という利点があるが、契約を結んでいるサーヴァントが本気で拒否すれば跳ね除けられる土下座でお願いする程度の強制力しかない。しかし、現在の巴 御前は自分から愛人志願してしまうレベルで堕ち切っており、直前の絶頂により思考能力も精神力もまともに働いていないため、王や当主からの勅命以上



に絶対的な命令と化している。

敏感になつてしまった自分の身体に心と思考が追い付かずに、巴御前は濡れた真紅の瞳を限界まで見開き快感と困惑が混在した表情を浮かべていた。そんな彼女の様子を見てもマスターは追撃の手を止める気配は微塵も感じられず、続けざまに二画目の令呪を輝かせて命令を行う。

「続けて命じる」

「~~~~つツ??!!♡♡♡ まっ、待ってえ——♡♡」

「感度を更に上げろっ!」

「んゝぎゆうゝうううゝううゝうううゝう——つツツ??!!♡♡♡♡」

先程から感じていた快感が体感で数倍に跳ね上がり、バリツジでもするかのようには腰を浮かせながら絶叫を上げた。

噴乳することを覚え込まされた乳房がブルンブルンと暴れるように揺れる度に、ぷっくり膨らんだ乳首にある乳腺からは、テーマパークや公園にある噴水のように四方八方に母乳が噴き出す。白濁とした体液が乳房を中心とした肢体やベッドにも撒き散らされ、牛乳や生クリーム特有の甘いミルク臭を何倍にも濃くしたような甘ったるい香りが漂う。

頭为天辺から足のつま先まで全身が敏感な性感帯に変わってしまったと錯覚する程に感度が上がっており、彼女はベッドに触れている背中や太ももの裏側で起こる僅かな布擦れすら、嫌らしい手付きでネットリと撫で回されて愛撫されているかのような快感が走っている。

「あゝ——つツ♡♡♡ いゝ♡♡♡ ひツ♡♡♡ かつ、身体あゝ♡♡♡ んうゝ……♡♡♡ おゝっ、おかひいれすうゝ♡♡♡♡♡ んゝひツ♡♡♡ あひいゝ~~~~つツ♡♡♡」

処女雪のように白く透き通る肌からは牝のフェロモンをタップリと含んだ大粒の汗が溢れており、このまま何もしていなくとも絶頂を迎えてしまいそうな程に、敏感なドスケベボディへと変貌を遂げていた。

巴 御前はビクビクと打ち上げられた魚のように肢体を痙攣させ、マスターは最後に残っていた令呪を使用する。

「最後に命ずる……良いと言うまで本心しか喋れなくなれっ!!」

「あゝ~~~~っつッ~~~~♡♡♡♡」  
??!!!!

嘘や建前を完全に禁止されてしまった事によって、自分の本心や思ったことをそのまま吐露することしか出来なくなってしまう。快楽の奔流に晒される中でも三つ目の令呪の内容は何とか理解することが出来たようであり、彼女は両手で口元を塞ぐことにより本音を口にしないようにする。

小鼻を膨らませて荒い鼻息をさせ、熟した林檎のように頬を染めていた。

「ふう~~~~っ♡♡♡ ふう~~~~っ♡♡♡」

将棋の王手を打たれて“詰み”の状態に入っているのに無駄な抵抗をする巴御前に対して、彼は余計に本心を言わせて自分専用の“牝”であり“お嫁さん”に堕としたいという征服欲求を噴火寸前のマグマの如く高まらせた。触れてもいないのに充血してプツクリと膨らんだ乳首から『びゅ~~~~っ♡♡ びゅ~~~~っ♡♡♡』と、母乳を噴いているスケベな乳房を男性らしい大きな手を用いて容赦無く揉み潰してしまう。

「ん~~~~~~~~っつッ~~~~♡♡♡♡」  
!!!??

——ぷしゅっ♡♡♡ プシッ~~~~♡♡ ぷっしゅうううううう——





撫で回しながら、単刀直入にお嫁さんになるかを問いただそうとする。

「それじゃあ答えて……俺のお嫁さんになるの嫌？」

「~~~~つツ」♡♡♡♡♡ いっ、嫌じゃないですうっ♡♡」

「俺との赤ちゃん欲しくない？」

「ほっ、欲しいっ♡♡ あっ、赤ちゃん欲しいですう”……っ♡♡♡♡」

お嫁さんになることが嫌では無く赤ちゃんを産みたいとハッキリと口にして、彼女が本心ではお嫁さん願望を持っていることが分かっってしまう。既に九分九厘の確率で堕ちているのだが、彼は勃起した規格外の極太長魔羅を見せ付けながら最後に聞きたかったことを確認する。

「最後の質問……愛人とお嫁さんどっちになりたい？」

「~~~~つツ”!!?」♡♡♡♡♡ ……お”っ、お嫁さんっ♡♡♡♡♡ 愛

人でも幸せですけどおっ♡♡ お嫁さんの方がもっと嬉しいですう

”っ♡♡♡♡♡」

「それじゃあお嫁さんになってよ」

「……はいっ♡♡♡♡♡ お願いしますうっ♡♡ —ん”むう”っ!?”♡

♡♡♡♡」

絶対に言い逃れすることが出来ないお嫁さん宣言を聞いたことによつて、我慢することが出来なくなったマスターは彼女の瑞々しい唇を奪った。それは神の前で愛を誓い合う口付けのようであり、お互いに我慢することが出来なくなったのか舌先を伸ばして舌同士を絡ませる。

「ぢゅぶっ♡♡♡♡♡ ちゅるるうっ♡♡ れろお”ーっ♡♡♡♡♡

じゅるるう”っ♡♡♡♡♡ ちゅぶうっ♡♡♡♡♡」

(ああ”……っ♡♡♡♡♡ 私もうマスターのお嫁さんになっちやいま

すうっ♡♡)

巴 御前は全てを受け入れてしまい、彼の首に両腕を回してしま  
う。

濃厚な口付けをタツプリと重ねている間にマスターは腰を動かして、愛蜜が泡立つ程に解されたおまんこの入り口にペニスの先端を合わせた。後は腰を前に動かせばセックスすることが出来る状態であり、繋がっていた唇を離れた彼は荒い呼気を吐いた後に愛を囁き掛ける。

「——っ、ぷはぁーっ。はぁ……っ、巴さん愛してる。絶対幸せにするから」

「はぁーっ♡♡♡ はぁ……っ♡♡ 私も大好きですうっ♡♡♡♡」

「夫婦で初めてのエッチしよう」

「~~~~っ♡♡♡ はい……っ♡♡♡」

——ずぶっ♡♡ ぢゅぶぶぶっ♡♡♡

「あゝっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ——  
——っっっ♡♡♡♡♡」

巨大な亀頭が膣口をミチミチと押し拵げながら挿入され、令呪による感度の増幅もあって簡単に絶頂を迎えてしまう。濁音の混じった母音のみの嬌声を喉が裂けんばかりに叫ぶことになり、彼の引き締まった下腹部に向かって嘔き出した潮が何度も掛けられることになった。

——じゅりゝゆりゆりゝゆりゝゆうっ♡♡♡♡ ズプンっ♡

♡♡



膣口から亀頭が抜けてしまいそうな程に腰を引き抜いたマスターは、腰に力を込めて恥骨に向かって思い切り叩き付ける。

——バッチユンっツゝ!!!!  
♡♡♡♡♡

「おゝ~~~~~っつツゝ!!!!??  
♡♡♡♡♡ おゝツぎゆうゝううゝうゝ——  
っつツゝ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

後は単純作業の繰り返しでありピストン運動による子宮への圧倒的な暴力と膣孔の贅肉を削り取るような掘削のため、巴御前が枕に後頭部に押し付けて左右にブンブンと振り続けて耐えることしか出来ない。

——バッチユンゝっ!!!!  
♡♡♡♡♡ パンゝっ!!!!  
♡♡♡♡♡ パッチユンゝ  
っツゝ!!!!  
♡♡♡♡♡

何度も何度も腰が叩き付けられることによって、部屋全体に柔らかい肉を打ち付ける破裂音が響き続ける。ピストンの一往復毎に彼女は何度も絶頂を迎えてしまい、数十回のピストンの間に三桁近い絶頂回数となってしまう。

前後左右の概念が曖昧になってしまい、自分の全身が宙に舞い上がっているような感覚から戻れなくなって、意識が覚醒しているのか気絶しているのかさえ分からなくなっていた。

マスターは杭打ちのように恥骨に腰を打ち付けるピストンを続けながら、自分が射精寸前であることを言葉にする。

「射精るっ、もう射精そうっ!! 巴の子宮にいっぱい射精すよっ!!!」

——ハゝっチユンゝっつツゝ!!!!!!  
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「おゝおゝ——っつツゝ!!!!??  
♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」







## 特別編

クリスマス特別編：サンタオルタはトナカイと愛を育む

「——んっ♡ あっ♡♡ あう……っ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡  
——あひっ♡♡」

少し前まで静寂に包まれていた空間には、艶めかしい息遣いと共に、澄んだ鈴の音のような喘ぎ声が響いていた。嬌声を我慢しようとして口を噤もうとしているのだが、巧みな指使いによって与えられる快感に甘ったるい声が漏れてしまうのだ。

部屋の明かりは、最小限に抑えられている。

暗闇に目が慣れた状態なら、近くにいる相手の姿がギリギリ視認することが出来る程度の暗さになっていた。視界が悪くなっている代わりに、相手の声や体温、感触が普段よりも強く感じてしまう。人間の脳は視覚情報の処理に大部分が使われているため、このような暗闇の中では視覚以外の五感が鋭敏になるのだ。

華奢な肩や艶めかしい鎖骨、細い二の腕や谷間の覗く胸元を隠していた黒いマントは、既にベッド際の床に脱ぎ捨てられている。特に腰元まで大胆に露出した背中中は、彫刻で彫られた芸術品だと言われても信じてしまいそうだ。僅かな明かりに照らされる雪のように白く穢れの無い肌は、触れることすら戸惑ってしまいそうな程に美しい。

真っ白で細い首には黒色のチョーカーが巻かれており、白い素肌に黒い布が映えていた。何故か犬や猫などのペットに装着する首輪をチョーカーから連想してしまい、彼女の首元を見ているだけで背徳感のようなものを感じてしまう。

「あっ♡♡♡ あっ♡♡ ああっ♡♡♡♡ んう……っ♡♡♡」

服の上から慎ましくも確かな柔らかさを感じる乳房を揉みしだか

れ、ネコ科の動物を彷彿とさせる金の瞳は、声も我慢出来ないような快感を感じる度に細められる。焦点のあっていない瞳で、天井の方向を見詰めていた。

そんな少女のうなじに鼻を埋めている黒髪の青年は、真っ赤に染まった彼女の耳元で愛を囁くのだ。

「アルトリアオルタ、大好きだよ……」

「~~~~つっ♡♡♡ あっ♡ あう……っ♡♡♡ わっ、わたしも愛しているぞ♡♡ ……とっ、”トナカイ”っ♡♡♡ん ひぃーっ♡♡」

彼の乳房を揉みしだく力が更に強くなり、喘ぎ声も更に大きく余裕の無いものへと変化する。

アルトリアオルタと呼ばれた”黒いサンタクロース”は、自分を導いてくれた”トナカイ”である藤丸 立香に身体を預けてしまう。熟した林檎のような赤い耳朶をマスターに甘噛みされ、尖らせた舌先で耳の穴まで舐められながら、彼女は更に甲高く甘ったるいメスの嬌声を上げるのだ。

限界まで高まった快感の波に耐え切れず、アルトリアオルタは腰を浮かせながら絶頂する。背中を弓のように反らしながら、腰だけを突き出すような姿勢は下品で淫らであった。ベッドから浮き上がったお尻がカクカクと上下に動き、痙攣するようにブルブルと左右に震えている。

口端から唾液を溢れさせる彼女は、開いた口から絶頂の報告をしよう。

「イツ♡ いひツ♡♡ いつ♡ いクツ♡♡♡ イクイクっ♡♡  
イツクう~~~~っ♡♡♡♡ ———いひっ♡♡」

尿道口から勢い良く『ぶしゅっ♡♡ ぶしゅう……っ♡♡♡』と、尿では無い体液が大量に噴き出す。

ひらひらとした可愛らしいレースや花の刺繍が施された純白のシヨーツ、細く引き締まったスラリと伸びた脚やハリのある桃尻を包み込む黒いストッキングが、メスの発情したフェロモンをタップリと含んだイヤらしい匂いのする潮によって濡れてしまう。

きっと彼女のお尻の下に敷かれているシーツにも、大きなシミが出来ている筈だ。ベッドの上にエッチな”お漏らし”をする快感は、言葉にならない解放感とイケナイことをした快感が伴っている。子供のような恥ずかしいことをしてしまった羞恥に、言いようの無い快感を感じていた。

未だ絶頂の余韻から抜け出すことの出来ていないアルトリアオルタは、殆どが快楽に埋め尽くされた思考の中で愛しているトナカイのことを想う。

(あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああ……っ♡♡♡ クリスマスのために♡♡♡ いひっ♡♡♡ トナカイを呼び出して♡♡♡ あう……っ♡♡♡ ほっ、本当に良かったあ♡♡♡ んあ——っ♡♡♡)

二人の愛し合う姿を枕元に置かれたプレゼント——竜の玩具だけが見詰めていた。

聖夜——きよしこの夜に、多くの年若い男女が愛を育んでいる。

正確な時刻は時計が見えないので曖昧だが、正式なクリスマスの始まりである”12月24日の日没”を既に迎えており、一般的に『ク

リスマス・イヴ』と呼ぶ時間帯が訪れていた。正式には翌日の日没まで”クリスマス”という行事は続くことになるのだが、国や時代によってその祝い方や在り方は変わってきている。

しかし、それでも現代に於いても世界中で、クリスマスという行事は習慣や文化として根付いていた。

キリスト教が盛んであった西洋圏から遠く離れた日本では、1552年付近の織田 信長が時代を築いていた安土桃山時代の頃、キリスト教と共にクリスマスという文化が伝わっている。しかし、クリスマスを始めとしたキリスト教という文化は、その後天下を取った徳川家康によって一度は禁教となり廃れた。

その後数百年の時を経た1900年代には、またクリスマスを楽しむ文化が日本中に広まっている。

21世紀に突入した現代日本に於いては、子供や恋人、親友などの大切な人にクリスマスプレゼントを贈り、家族や友人とご馳走やケーキを食べて過ごすのだ。勿論、サンタクロースとなったアルトリアオルタが大好きな、ターキーなどの鶏を使った料理も鉄板である。

或いは、恋人同士で愛を確かめ合う日だと認識している人も多いだろう。

特に『クリスマス・イヴ』とも呼ばれる12月24日の夜には、普段よりもセックスに励む恋人達が多くなる。12月24日の午後9時から翌25日の午前3時のことを、冗談混じりに”性の六時間”と呼んだりもする程だ。

その結果と言っては何だが、この時期に恋人や夫婦の間で子供が出来やすい傾向にあり、クリスマスの時期から子供が生まれるまでの期間を計算して、9月生まれの子供は”クリスマスベイビー”と言ったりする。

旧約聖書に記されている『産めよ、増やせよ、地に満ちよ』が、イエス・キリストの誕生日であるクリスマスに行われているのは、ある種の運命的なものを感じてしまう。

——ある意味、サンタクロースとなったアルトリアオルタとトナカ

イ役を務めたマスターが、このクリスマス・イヴという日に愛し合ったのは、半ば必然であったのかも知れない。

人理保障継続機関　カルデアに於いても、クリスマスは一大イベントであった。

生まれた時代や国も違う英霊達が、思い思いのクリスマスを過ごすのだ。彼らの中にはクリスマス自体が何なのかも理解していない者も多いが、普段から水着やハロウィン、バレンタインなどのイベントを経験しているため、楽しいことへの順応性は高かった。

バレンタインのようにチョコを配り歩くだけで終われば良かったのだが、良い意味でも悪い意味でも”事件”に事欠かないのがカルデアである。今年にはサンタクロースとなったサーヴァント——アルトリアオルタにより、トナカイ役としてマスターが”逆召喚”されることとなった。

自分の悪いイメージを払拭しようと考えるアルトリアオルタは、マスターと共にサンタクロースとしての仕事、子供サーヴァントと中心にクリスマスプレゼントを配り始めた。素直に貰って嬉しいプレゼントや自らの死因となったモノに関連する微妙な気持ちになるプレゼントが、サンタクロースとなったアルトリアオルタから渡される。その道中でいつものような戦闘が起きたのも、カルデアなら当然と言えば当然だろう。

兎も角、サンタクロースとしての仕事は大変なこととも確かにあったが、楽しいままに終わることが出来た。沢山のプレゼントがパンパン

に詰まっていたアルトリアオルタの白い袋も、今では殆どを配り終えて無くなっている。

袋の膨らみ方から目測だけで判断すると、中に残っているのはプレゼントは数える程しか無いだろう。その中には彼女が最後まで取っておいた、トナカイ役を務めてくれたマスターへのクリスマスプレゼントも入っていた。それはアルトリアオルタから彼への感謝の証である。

飽き性な自分が最後までサンタクロースとして働けたのは、甲斐甲斐しくこの一週間をサポートしてくれた彼のお陰であった。トネリコで自作した”ラムレイ2号”と名付けたソリの隣にマスターがいなければ、途中でサンタクロースを放棄していたという確信があったのだ。

彼女は袋の中から特に気に入っていた竜の玩具を取り出すと、感謝の言葉と共に彼へと手渡した。

『もうじき夜も明ける……私の、仮初の役職も終わってしまうな……袋の中も、そろそろ底が見えてきた。……だが、うん。全て無くなってしまいう前に、これをお前に渡しておこう。私が特別気に入った竜のオモチャだ。大切にするがいい』

柔らかい笑みを浮かべるマスターは『ありがとう。大事にするね』と、竜の玩具を大事そうに両手で持った。そんな彼の姿を嬉しそうに見詰めていたアルトリアオルタだったが、”もう一つのプレゼント”を渡そうと口を開いた時には、真っ白な頬を朱色に染めてしまう。

『んん……コホンっ！ とっ、トナカイにはもう一つだけプレゼントがあつてだな——』

イチゴのような真っ赤な顔を隠すために俯き気味な彼女は、黒いマントを結んでいた赤と緑のクリスマスカラーなりポンを解き、ベット近くの床にパサリと落とした。愛しいマスターに向かって両手を伸



ばすアルトリアオルタは、恥ずかしそうにしながらも愛の告白を口にする。

『ぶっ、プレゼントは私だ……っ♡♡♡ トナカイの好きなように、私のことを愛して欲しい♡♡ ——んっ♡♡♡』

気が付けば彼女の近くまで来ていた彼が、優しくアルトリアオルタのことを抱きしめる。二人は自然と見詰め合うことになり、言葉も無のままに顔を近づけていく。最後には言葉よりも愛を伝え合うことが出来る、誓いの口付けのような熱い接吻を交わすのだった。

『……んむっ♡♡♡ ちゅっ♡♡♡ ちゅう……っ♡♡♡ ——んっ♡♡』

唇同士を触れ合わせるだけでは足りなくなった二人の口付けが、唾液に濡れた舌同士が絡み合わせるネットリとしたデイクスに変わるのに、そう時間は掛からなかった。

部屋の中に淫らな水音が鳴り響き、二人だけの夜は更けていく。

「——あっ♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ とっ、トナカイい……っ♡♡♡♡ おっ♡♡♡ おっぱいとオマンコ同時は、反則う……っ♡♡♡♡ いっ♡♡♡♡ いひいーっ♡♡♡ いっ♡♡♡♡ イク♡♡♡♡ イクっ♡♡♡♡ まらいくらーっっ♡♡♡♡ イ……っっ♡♡♡♡」

蜂蜜よりも甘ったるい絶叫のような嬌声が、部屋中に響き渡っていた。

今も絶頂の余韻から抜け出せずにいるアルトリアオルタは『ビクツ♡ ビクンつ♡♡』と、瀕死になった虫のように身体を震わせている。純白のベッドの上でマスターに後ろから抱きしめられ、座椅子やソファに全身を預けるようにクタつと脱力させている。

(イツ♡♡ イクツ♡ こつ、交尾の準備でっ♡♡ ずっとイカされ続けてますう…:…つ♡♡♡ あっ♡♡ また——イツ♡♡♡♡)

彼女が絶頂している間も彼の愛撫が止まることは無く、右手で膣孔やクリトリスを弄り回され、左手で乳房全体を揉みしだかれていた。元から敏感だった性感帯を開発され続けており、マスターの指でなければ絶頂の出来ない身体にされている。

「はあゝーっつ♡♡♡ はあゝーっつ♡♡♡ イク…:…つ♡♡♡♡  
「イゝ——ツ♡♡♡」

熱っぽく荒い息を何度も吐き出しながら、アルトリアオルタは絶頂に身を任せることしか出来ない。

全身に甘酸っぱい匂いのする汗を掻く彼女は、黒いサンタクロース風の衣装が乳房を隠せない程に開けている。黒いストッキングも秘所の部分がビリビりに破かれており、愛液や潮でぐしょぐしょに濡れたショーツは恥丘の脇へとズラされていた。

一応だが服を着ているのに、隠すべき所が全く隠されていない。それは下手な全裸と比べても、何倍も淫靡なものだった。

雪のように真っ白な肌と真っ黒な衣装以外に色は無いように見えるのだが、瑞々しい唇やピンと主張する乳首、充血した肉芽が覗く淫肉の割れ目だけがイヤらしい桜色をしている。それが余計に淫らであると、男ならば感じてしまうだろう。

ツルツルとした無毛の恥丘やふつくらと膨らんだ大陰唇、クパクパと開閉を繰り返している淫肉の花弁や涎のように愛蜜を溢れさせる



に反り返っている。

「アルトリアオルタの処女貫うよ……痛かったら言つてね？」

「~~~~~つつつツ♡♡♡♡ ああつ♡♡♡ 私ハジメテを貫つてくれ……っ♡♡♡」

アルトリアオルタの言葉に頷いたマスターは、長大なペニスの根元部分を握り、今も粘っこい蜜を溢れさせる膣穴へと照準を合わせた。ゆつくりと腰を押し進めていき、解れてトロトロになった膣内を犯していく。

「あつ♡♡ ああツ♡♡ あツ♡♡ あく♡ う……っ♡♡♡ う♡つ♡♡  
♡ う♡ツ♡ うひ——ツ♡♡♡」

ぷちつと簡単に防御力の欠片も無い処女膜が破けたが、彼女は痛みと呼べるものを全く感じていなかった。ただ膣肉がミチミチと拡がる感覚と、お腹への圧迫感でいっぱいである。真っ白な喉を見せ付けるように首を反らし、舌先を突き出しながら喘ぎ声を漏らしていた。

既に敗北を認めたオマンコは潮吹きをすることで伝えているのだが、マスターはペニスの挿入を続けている。既に子宮口と亀頭の先端が触れ合っており、そこから更に奥へと押し上げていた。

——ずん……っ♡♡♡

「ん♡お♡~~~~~つつつツ♡♡♡♡ お♡♡♡ お♡  
ひーッツ♡ ——お♡……っ♡♡♡」

女の一番の弱点である子宮口を押し潰され、彼女は濁音混じりの嬌声を上げる。アルトリアオルタは身体中に電気の流れるような快感が走り、脳髓をジユウつと快感が焼き焦がす。まだペニスに腹部を貫

かれる感覚になれていないが、慣れば慣れる程に快感は強くなっていくだろう。

彼女の様子を観察していたマスターは、大丈夫そうだと判断して声を掛ける。

「今から動くから……アルトリアオルタは気持ち良くなるのに集中してね」

「うゝッ♡♡ あう……っ♡♡♡ —はっ、はい♡♡ 私のことだっ、大丈夫う♡♡ オマンコで気持ち良くなってください……っ♡♡♡ いひ——っ♡♡♡」

アルトリアオルタが頷いたのを確認した後に、彼は腰をピストン運動のようにゆつくりと動かしていく。腰が押し込まれれば子宮が潰され、腰が引かれれば膣壁や膣肉を掘削される。タツプリと性感帯として開発されていた膣内は、直ぐに快感を脳髓へと送り込み始めていた。

部屋中に『パンっ♡♡ パンツ♡♡ パン——っ♡♡』と、恥骨と腰のぶつかり合う破裂音が鳴り響き始めた。その破裂音は腰の動きに合わせて次第に早く大きくなっていき、それとシンク口するように彼女が発するメスの哭声も大きく淫らに変わっていく。

——パンっ！ パンツ！ パんっ！！ パンツ!!!

「おゝっ♡♡♡ おゝ……っ♡♡♡ いぐっ♡♡♡ イグっ♡♡♡ イっっぢやう♡♡♡ イ——っっ♡♡♡」

一突き毎に軽い絶頂をしてしまい、尿道口からぷしゅッ♡♡と断続的に潮を噴き出す。

恥ずかしいお漏らしイキ癖を付けられているのに、それすら嬉しいという気持ちや快樂へと変えられてしまう。長い指でも届かなかつたために開発されていなかった子宮口も、次第にポルチオ性感帯へと



数百ミリリットルにも及ぶ大量の精液が、太い陰茎の中を通って鈴口から大量に吐き出される。量も多いが粘度も高いため、途中で何度も詰まるような感じになるが、直ぐに睾丸から送られる精液に押し出されてしまう。

——バツチユンっッ  
!!!!

「射精る——ッ!!」

「——ッっ♡♡♡♡」

アルトリアオルタの子宮口にマスターは亀頭の先端を押し付けながら、大量の白濁とした精液を流し込み続ける。

——びゅぶぶっ♡♡♡♡♡びゅっ♡♡びゅっ♡♡びゅ  
るるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡どぶっ♡♡どぶっ♡♡どぶぶ  
ぶぶぶっ♡♡びゅぶぶぶっ♡♡♡♡♡びゅぶぶぶっ♡♡びゅぶる  
るるるるるるるるるるっ♡♡♡♡♡びゅぶぶぶっ♡♡びゅるるっ♡  
びゅる………びゅ

「——お”お”っ♡♡♡お”お”っ?!♡♡お”あっ!!♡♡あ”ああ  
”あああ”ああ”あああ”ああ”あああ”ああ”ああ”あ  
”ああ”——っっっっ♡♡♡♡♡あ”っ♡♡  
ああ”——っ♡あ……っ♡♡♡♡♡……っ♡♡♡♡」

開いた口から舌を伸ばすように突き出し、彼女は獣のような哭声を上げた。

濃厚な白濁液を受け止めながらの絶頂は、ポルチオアクメを更に戻れない快感へと変えてしまう。全身が浮かび上がってしまうかのような感覚と共に、脳がブクブクと溺れてしまう程の幸せホルモンがドパドパと分泌される。この快楽を一度でも知ってしまったえば、彼女は二度とマスターから離れられないだろう。





まった淫らなサンタクロースは、大きく張り詰めた亀頭に口付けをするのだった。その淫靡な光景はまるでマスターへの服従を誓う、メスとしての誓いのキスのようである。

「んっ……♡♡ わっ、わたしも愛しているぞっ♡♡♡ あっ♡ —  
—きやっ♡♡♡」

——クリスマスが終わっていたとしても、二人のまぐわいと愛に終わりは無かった。

夏休み特別編：レディ・アヴァロンは“ご主人様”にお仕置きされる

スカサハ・スカディが北極圏に作成した特異点には、レディ・アヴァロンに管理・運営を任せ造られた『フラワーパーク』と言う名のエリアが存在する。

“永遠の夏”を実現させることを目論むスカディから好きなように整備して良いと言われたため、彼女は“花の魔術師”らしく草花を愛でられる植物園を造ったというのがこのあらましであった。

そんなフラワーパークについて軽く説明すると、植物園の目玉となる氷の花弁を咲かせる花など、現実には存在しない美しい花々が咲き誇る『花畑』や従業員として働くバゼットをリーダーとする通称YARRIOが管理を任された『歩き回る樹木の森』などがある。

特に歩き回る樹木の森は、生命力に溢れた青々しい木々が生い茂った幻想的な雰囲気になった森林があり、昼間であれば森林浴を楽しみ太陽の温かな木漏れ日が降り注ぐ、癒しの空間であった。

レディ・アヴァロンの造ったエリアは、散歩や休憩に打って付けの場所と表しても過言では無いだろう。

誰もが一度は訪れたくなる魅力に溢れた場所だったのだが、“致命的な欠陥”が一つだけあったことによって、客足が芳しくない状態となっており、自ずと経営状況も悪化の一途を辿っていたのだ。

その致命的な欠陥とは――

レディ・アヴァロンがバゼット達に指示して育てさせたことで生まれた、お客様に対して比喻を抜きにして襲い掛かってくる“危険な植物”の存在であった。本当に樹木が根を足のように動かして歩き回り、ゲイザーに似た花の根っこが攻撃を仕掛けて来る危険地帯となっている。

常識的に考えて怪我や命の危険があるような場所に、入場料を払っ

てまで訪れる者がいないことは当然の帰結であった。その他にも単純に彼女が途中でやる気を無くして放置していた事実も重なり、客足が遠退くフラワーパークの売り上げは伸び悩んでいたのである。

次のエリアに進むためにレディ・アヴァロンの経営に手を貸すことになったマスター達が、物理的な手段により問題を解決した結果——誰かが襲われるような危険性は取り除かれたのだ。

そもそも客足が遠退いていたのは彼女が危険な植物を育てるよう指示したせいであり、それさえ無ければ元から美しい花々や癒しの森林浴が楽しめる観光スポットとして成立していたのである。

——男性の方も相当なロクデナシであったが、女性の方も負けず劣らずであつたようだ。

レディ・アヴァロン本人にやらかしたことを問い詰めると話をはぐらかすばかりか、全く反省の色を示していなかったため、マスターからの“お仕置き”が確定事項となつたのである。

彼の静かな怒りを感じ取つた彼女は、小動物のように震わせて怯えた。

表面上は温和な笑みを浮かべるマスターが『レディ・アヴァロンに少しだけ“話”があるから……皆は先に帰つてて良いよっ！』と、言つた時の彼女の絶望と期待が緋い交ぜとなつた表情は、暫く忘れることが出来ないだろう。

他のサーヴァント達が拠点代わりのクルーザーへと向かうのを見送る真後ろでは、彼女の小振りだがむっちりと実つた桃尻を容赦無く鷲掴みにされていた。本当に大鷲が獲物を逃さぬために掴むような力強さであり、きめ細やかで染み一つ無い純白の肌には指先の赤い痕が残される。

ジンジンと火傷のような痛みや快感、恐怖によりビクビクと肢体を震わせるレディ・アヴァロンに対して、マスターは視線を向けないまま『それじゃあ皆が居なくなつたから……行こうか』と呟く。

蚊の鳴くような声で『はっ、はい……っ♡♡』と、反射的に口にす

る彼女に拒否権などある筈も無く、花畑を通り過ぎながら薄暗くおどろおどろしい雰囲気の歩き回る樹木の森の方へと向かって行ったのだ。

そこでは――

「――あゝっ♡♡ あゝッ♡ あんっ♡♡♡ ごしゅっ、”ご主人様”あゝっ♡♡ ぼっ、”ボク”が悪かったからッ♡ んひっ♡♡ ゆっ、ゆるしてえ”……っ♡♡♡ お”――っッ”♡♡♡♡」

「何が悪かったか分かってる？ 多分、俺に怒られるのも全部”視た”のに、態と適当な運営して期待してたよね」

「ん”ひイ”~~~~~っッ”♡♡♡♡♡ わかつ、分かってましたあ”っ♡♡ お”っ♡♡ お”ッ♡♡ ごっ、ご主人様にオシオキされたくてえっ♡♡ ——イク”うっ♡♡ こっ、こんなこととしてましたあ……っ♡♡ あ”んッ”♡♡♡」

「今日は心の底から反省して……”マーリン”が本当のごめんなさいが出るまでハメ潰すよ。次いでに”また”妊娠させて、暫くは悪さが出来ないようにするから」

「――っッ”♡♡♡♡♡ つっ、次いでで妊娠しち”やう”っ♡♡ お仕置き種付けえ”っ♡♡ ボクまら赤ちゃん産んじやう”♡♡ ん”お”――っッ”♡♡♡♡」

鬱蒼とした暗い森の中にレディ・アヴァロンもとい”マーリン”の口からは甲高く甘ったるい嬌声と、殆ど下着にしか見えない純白のビキニボトムスの”内側”から『グチュっ♡♡ グチュッ”♡♡♡』と、粘っこい液体を掻き混ぜた時のような淫らな水音が鳴り響いている。

巨木の幹に両手を突いたまま腰や膝を『カ”クっ♡♡ カ”クっ♡♡♡』と、今にも地面に倒れ込んでしまいそうな程に揺らす彼女のこゝとを、マスターが背後から抱き締めていた。正確には抱き締めるという言葉よりも肢体を持ち上げており、本当は拘束しているという方が近いのだろう。





濡れそぼった淫らな割れ目から愛蜜が止めどなく溢れ、太ももから伝った潮が地面へとびちやびちやと恥ずかしい水音と共に落ち、地面の土を湿らせて現在進行形で色味を濃くさせている。

汗や唾液、尿に至るまで体液の全てが花のような甘い香りがする彼女の周囲は、本当の花園のような匂いに包まれている。しかし、その匂いの中には隠し切れない程に濃い発情し切った、メスの濃いフェロモンが混ざり合っていた。

オスを誘惑して種付け欲求を刺激する濃密なフェロモンが、全身の隅々から溢れさせる姿は、本当に虫を誘う花のようである。

マスターもマーリンの汗ばむ首筋に鼻を埋めながら、メスの発情フェロモンたつぷりと含んだ甘い体臭を肺の中が一杯になるまで直で嗅いでいた。

「すうーっ、はあ……本当に匂いは好き。花みたいな甘くてエロい匂いはずつと嗅いでたい。すうーっ」

「イックっ♡♡♡ ひっ、ひどい……っ♡♡♡ わるぐちっ♡♡♡ ボクは赤ちゃんも産んでっ♡♡♡ ごっ、ご主人様にだけ尽くしてるのにい……っ♡♡♡ お”ぎゆう”っ♡♡♡」

「そう言う割にいつも余計なことばかりして、皆に迷惑ばかり掛けてるからでしょ」

「ぼっ、ボクなりにみんなのためにい”——”っ♡♡♡ イ”キ”ゆう”ッ♡♡♡ う”っ、うしよですう”……っ♡♡♡ おもしろくなりそうだからやりましたあ”っ♡♡♡♡♡ ひう——”っ♡♡♡」

言い訳や嘘を吐く彼女に対する怒りもメラメラと膨れ上がり、マスターの下半身には大量の血流が集まっていき、ズボンを突き破らんばかりにペニスがいきり勃つ。

「やっぱり言うこと聞けないメス穴は、”コレ”でもう一回自分の立場を思い出させるしか無いか……」





ちやん作るばしよに精液びゅーっ♡♡　びゅーっ♡♡してくら  
さい♡…♡♡♡♡」

散々覚え込まされたおねだりを自然と口にする彼女は、爪先立ちになつてお尻を突き出すと、ご主人様に言われた通りに両の脚を肩幅に開く。

何度も何度もアクメを迎えて準備万端の膣穴を外気へと晒すために、彼は膣孔を穿つていた右手でショーツのようなボトムスをふつくと膨らんだマン肉の横へとズラす。

するとムワツとした湿度の高い熱気と共に、花のような蒸れたメスのは香りが広がり、イジメられた膣穴はご主人様を迎えるためにヒクヒクとしている。色素が薄い蜜に濡れそぼった桜色の淫肉が覗いており、クパクパと開いたり閉じたりを繰り返して雄を誘惑していた。

「本当におねだりだけは上手だよね…お望み通りにハメ潰してあげるからっ」

そう言つてマスターはマーリンの上半身を木の幹に無理矢理に押し付け、細く括れた腰を両手でガツシリと握り締めた。腰を弓のように引き絞つて亀頭の先端へと膣入り口を押し付ける。

「ん♡お♡っ♡♡　アツアツおちんぽ♡　オマンコの入り口にキスしてるっ♡♡♡　お♡っ♡♡　お♡ッ♡　おお♡——っ♡♡♡　おまんこの入り口ミチミチ拡がつてり♡　ゆう♡…♡…っ♡♡♡　お♡ひ——っ♡♡♡」

立ちバツクの体位のまま少しずつ膣孔の中へと、まるで握り拳のような大きさの亀頭の先端がめり込んでいく。

膣を限界まで拡げられる感覚に吞まれ、他人には絶対に見せられないメス顔を彼女は晒している。尿道口からフェロモンたっぷりの汁を漏らし、爪先立ちのまま膝をガクガクと揺らす。

既に快感で一杯一杯な状態のマーリンだが、それでマスターが許してくれる筈も無い。男性らしい発達した腰の筋力で無理矢理に狭い膣孔を突き進み、奥へとペニスを押し進めていく。

「ご主人様のオチンポ、いつもより太くて、っっっ♡♡♡ アツっい♡  
……っ♡♡♡ 赤ちゃん産んだのにつ♡ オチンポの方がお腹へん  
になり♡ ゆう♡——っっ♡♡♡♡♡」

「本当におまんこキツ過ぎだろっ！ ミッチリ膣襞絡み付かせて、チンポ吸い込もうとしてくる。そんなに欲しいなら……根元まで受け入れろっ!!」

——ズっ……パンっっ!!!♡♡♡♡♡

「おぎゅウ♡——っっっ?!♡♡♡ おっっ♡ おぎゅっ♡  
♡ おっっ、きゅウ……っ♡♡♡」

ゆっくりとした挿入であった筈なのにいきなり子宮を押し潰されて、マーリンの舌先を突き出した口からは、野太い獣のような声が漏れる。そうしている間にもこれまで以上に淫紋が眩く発光し、子宮で爆発した快感が脳の奥を焼き尽くす。

「——イクっ♡♡ イク♡イク♡イク♡クイク♡う——っ♡♡  
イッっク♡うう♡うう♡うう♡うう♡ウ♡う——  
——っっっ♡♡♡♡♡」

森林一帯に響き渡るような絶叫が響き渡り、彼女の尿道口からは潮とも尿とも判別の出来ない体液が、勢い良く噴き出し続ける。お腹はペニスの形に合わせてぽっこりと膨らんでおり、亀頭は鳩尾の所にまで余裕で届いていた。

マスターは子宮を態と押し潰したままぐりぐりと腰を動かして、ゆっくりと全ての膣襞を抉り掘削するようにペニスを引き抜く。



全体重を持ち上げられていた。交尾の体位も立ちバツクから駅弁に近い体勢となり、括れた腰を左右から鷲掴んでいた両手が彼女の手首をハンドルのように握っている。

腰が突き出されるの合わせて両の腕を引かれ、全ての衝撃が子宮へと集中した。彼に排卵を命令されるのを忠実に守るように、卵巣から卵達が『ぷりゅっ♡♡』と、何度も何度もひり出される。

「いぎゅっ♡♡ イクイクイクう……っ♡♡♡ たまこれるっ♡♡ まらたまこれりゅっ♡♡ んぎゅううううううう——っつっ♡♡♡♡♡」

後はこの卵を神すら孕ませる特濃ザーメンで溺れさせれば、またマーリンはお母さんになってしまうのだ。先ほどから母性本能が疼いているのか、いつの間にか露わとなった乳房の先端からは触れてもいないのに母乳が噴き出す。

何十回とピストンで子宮を押し潰され、一番暴力を振るわれた子宮口は降参するように開いてしまった。一突き毎に子宮内に龟头が入るようになった頃、ずっと大きな睾丸の中で煮詰まっていた精液が出口を求めて暴れ始める。

高まっていく射精感を限界まで我慢しながら、最後に獲物を仕留めるような激しく重たいピストンを続けた。完全に意識が絶頂に吞まれているマーリンに対して、マスターは射精することを宣言する。

「射精すっ……射精すぞっ！ ドロドロに煮詰まった精液、妊婦と変わらなくなるまで射精するからっ、子宮で全部吞めっ!!」

「——っっ♡♡♡ オ——っ♡♡♡——っっっ♡♡♡♡♡」

容赦の無いピストンで子宮を突き上げながら、彼は最後に一際力強く腰を打ち付ける。彼も飢えた獣のような表情を浮かべており、本能から牝を孕ませることしか頭の中にはなくなっていた。



い筈の夢魔と人間の混血の誕生が決定した。前回の倍近い孕み腹になることは確定であり、本当にベッドの上で暫く生活することになるだろう。

「——っ♡♡ おっっ、おっお……っ♡♡ おっ——っ♡♡」

妊娠半年のようにお腹がパンパンに膨らみ、三分近い吐精がようやく終わりを迎えた。全身がクタクツと脱力してしまっている彼女の尿道口からは『じよろっ♡♡ じよろろろろお……っ♡♡♡』と、恥ずかしい黄金色の体液が流れ続ける。

まともな言葉も話すことが出来なくなっている完全にマーリンに対して、マスターは未だ怒張が一切治まっていないペニスをズンと奥まで突き上げた。

「おっ——っツっ♡♡♡」

「まだまだいっぱい射精せるから、もっと卵ひり出してね」

「はあっ——っ♡♡ ふう……っ♡♡ ひっ、ひう……っ♡♡」

殆ど意識を消失した状態なのに、まだまだ交尾に飢えた牡の気配を感じ取ったのか、彼女の肢体はビクビクと震える。

二人の情熱的な交尾を霊体化も忘れて覗き見していた“女神”の方へと、彼はマーリンを犯し続けるまま視線を動かして呟いた。

「——」スカディ“も混ざりたい?”

「~~~~~っツっ♡♡♡ あっ、あう……っ♡♡♡ そっ、そなた達

がここでまぐわうとは、思っただけ無かったのだっ♡♡♡ あう……っ♡♡

「♡」

真っ赤な顔で目尻に涙を浮かべるスカディは、内腿を擦り合わせて“何か”に耐えようと身悶えている。そんな彼女の足元は淫らな体液によって湿っており、二人のまぐわいをオカズに自慰に耽っていた

ことは明白であった。

「マーリンもスカディも、いっぱい可愛がって上げる」  
「——ひいっ♡♡」

目の前で酷いことになっているマーリンと同じように、自分も犯されることを確信して、スカディはその場にへたり込んでしまう。

——その後、夜明けが来るまで二匹の牝の嬌声が、森の中で途絶えること無く響き続けた。

pixiv有料リクエスト 作品まとめ  
pixiv有料リクエスト：アナスタシアは旦那様と  
のドスケベセックスを記録する

黒髪の青年がボタンを押した瞬間——照明の光を反射してキラキラと輝く艶やかな銀髪が美しい色白な少女の表情が、パツと花開くように笑顔になる瞬間をカメラは捉えた。

『はっ、始まったわ……っ♡♡』

録画を開始したことを知らせるタリーランプの点灯を澄んだ青い氷のような瞳で確認した少女——“アナスタシア”は、撮影開始のボタンを押してくれた青年——マスターにもランプが赤く光ったことを伝える。

『どう？ うまく映っているかしら……っ♡』

自分でビデオカメラの設置する位置や設定をした彼女は、撮影された映像を映す画面を確認している彼に、問題がないかを尋ねた。

生前からの趣味である自撮り写真が現代にも残っていたり、アナスタシアがカメラ好きであることは間違いないが、まだまだ拙い部分があるから不安なのだろう。

同じくカメラが趣味な聖ゲオルギウスと比べれば、腕前も知識もまだまだ劣ると思っているが、そもその比較対象が高過ぎるだけであつた。そんなアナスタシアに対して、マスターはにこやかに答える。

『大丈夫、今日も綺麗だよ』

『あう~~~~~~~~っ♡♡ あ……っ、ありがとうっ♡♡』



毎日のようにベッドの上で愛を囁かれているのだが、未だに慣れない彼女は雪のような白い頬を朱色に染め上げた。その初心な所が可愛らしいと感じるため、彼も積極的に愛を囁いてしまうのだろう。

『毎日言ってるのに慣れなくて、真っ赤になってる所も可愛い』

『——っ♡♡♡ もっ、もう……っ♡♡ 意地悪しないで下さいっ！♡♡♡』

子供のように頬を膨らませて怒る彼女に対して、マスターは『ごめん、ごめん』と、拗ねてしまった子供を宥める時のような態度で謝る。

普段はお淑やかで皇女然とした印象を与える雰囲気や立ち振る舞いをしているが、心を開き身体を重ねた彼の前では綺麗さっぱりと霧散していた。

年相応に喜怒哀楽を表現する、可愛い少女でしかない。

『——うん、充電もデータの空き容量もバッチリ。充電も繋いだままだから、撮影中に消えてることも無いと思う』

画質以外の部分も一通り確認したマスターは、他の部分でも不備が無いことを伝えた。そして、カメラのレンズが向けられる、彼女が腰掛ける天蓋付きのベッドへと移動する。

『準備は全部任せちゃったけど、思ってた以上にちゃんとしてるね』

アナスタシアのことを褒める彼は、本当に当然の様に腕や脚が触れ合う、仲の良い家族や恋人同士でしか許されない近さに腰掛けた。それが二人にとつての当たり前前の距離であり、言葉で説明しなくとも深い仲であると見て取れる。

マスターに褒められたことが嬉しかったのか、彼女は肩や胸元の上背部、背中が露出したローブ・デコルデと呼ばれるドレスの上からでも豊満と分かるバストを張って自慢げな表情をした。

『それは当然ですっ！♡♡ 今夜はマスタ——こほんっ♡ だっ、  
旦那様”との”撮影会”のために準備しましたから……っ♡♡♡』

今回の”撮影会”を企画したのは彼女自身であり、高性能で大容量のビデオカメラも私物であった。旦那様との逢瀬を映像によって記録し、二人の愛を永遠に残したいと提案したのである。

他人から見ればアダルトビデオも真っ青なドスケベ映像になってしまうが、二人にとっては正しく”愛の記録”となるのだ。異聞帯のこともあつて聖杯による受肉は控えており、子供を授かるのはもう少し先だと決めているため、こう言った形に残るものを求めてしまうのだろう。

後少し顔を近づければ唇同士が触れ合いそうなマスターとアナスタシアは同じ色の瞳を交わらせ、視線同士をネットリと絡み付かせるように見詰め合っていた。

互いの呼吸音や鼓動の音すら聞こえてきそうな程に近いのに、二人はもつと近づきたいと、触れ合いたいという欲望が抑えられなくなってしまう。

『それじゃあ始めようか』

『はっ、はい……っ♡♡ お願いしますっ♡♡♡』

我慢することが出来なくなった二人は、カメラに見守られながらの行為を始める。

『——それじゃあ自己紹介から始めようか?』

『……はいっ♡♡ わっ、わたくしはアナスタシアっ♡♡ アナスタシア・ニコラエヴナ・ロマノヴァと申しますっ♡♡♡』

真隣に座ってアナスタシアの括れた腰に手を回すマスターに促されるまま、カメラに向かって彼女は自己紹介を始めた。

ハキハキとした口調で高貴な身分であることを告げながら、その言葉の節々には隠し切れない雄への媚びが滲んでいる。それが余計にアダルトビデオの導入にも似た、淫靡な雰囲気を作り出していた。

『ロシア最後の皇帝……ニコライ二世とアレクサンドラ皇后の間に生まれた四女っ♡♡ わたくしには三人の姉と弟が一人おりまして、家族仲はとても良かったですっ♡♡』

彼らにとつては見慣れた光景だが、とつくの昔に亡くなった英霊が映像として新たに残される破壊力は凄まじい。万が一にもこの映像を現代に生きる歴史研究者が見た日には、その内容を含めて泡を吹きながら卒倒してしまうことだろう。

『いつかアナスタシアの家族とも会ってみたいな』

『はいっ♡♡ その時には旦那様として紹介させて下さいね♡♡♡』

『うん、事後報告になっちゃうけど、夫婦として二人で挨拶しようか』

『~~~~~っ♡♡♡ はい……っ♡♡ よろしくお願いしますっ♡♡ とつても嬉しいですっ♡♡♡』

砂糖や蜂蜜よりも甘ったるい雰囲気か二人の間に流れ、暫くの間はカメラの存在も忘れて微笑み合う時間が続く。独り身が見れば嫉妬に狂ってしまいそうな幸せそうな光景であり、ある意味で“本番”の前からお腹一杯になってしまいうさだ。

このまま無言でイチヤイチャするだけの時間が続きそうになるが、先にカメラの存在を思い出したマスターが質問を再開する。

『それじゃあ……次はスリーサイズを教えてください。』

『はっ、はい……っ♡♡ すっ、スリーサイズは少し前までは上から85、56、82のDカップでしたっ♡ さっ、最近測ったら90、57、86のFカップに成長していましたあ……っ♡♡♡』

自ら肉付きの良い“ドスケベボディ”である口にした彼女の肢体は、身体の線が出難いドレスの上からでも、実りに実った豊満な乳房とキュツと括れた細腰が見て取れた。

彼も少し驚いた表情をしながら、アナスタシアの露出している深い谷間に視線を落とし、腰を掴んでいた手を下の方へと移動させてむっちり実った桃尻を少しだけ撫でてしまう。

『おっぱいとお尻がムチムチでエロくなったと思ってたけど、そんなに大きくなってたんだ』

『んうっ♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡ 旦那様に沢山イジメられて、イヤらしいお肉がいっぱい付いてしまいましたあ……っ♡♡ あんっ♡♡♡♡』

分厚い布越しにお尻を撫でられるだけ喘いでしまう彼女は、誰の目にも分かる程に旦那様からの調教が施されていることを感じた。お尻だけでもこんなに敏感に感じてしまうのだ、二サイズもアップしている乳房の感度も凄いいことになっているだろう。

アナスタシアがドスケベ敏感ボディであることを本人以外で一番良く知っているマスターは、惚けながらこのインタビュを続ける。

『どんな風にイジメられたの？ カメラに向かって答えてみて』

『~~~~っ♡♡♡ おっ、おっぱいは毎日、旦那様の大きくてゴツゴツした男らしい素敵な指でいっぱい揉みしだかれてっ♡♡♡ いっ♡♡♡ わたくしの白い肌に指の痕が残るまで揉み潰していただいておりますう……っ♡♡♡♡♡』

『痕まで残されたら痛くない？ 他にもさされてることはある？』  
『んう……っ♡♡♡ あっ、痕はずっとジンジンして気持ち良いですっ♡♡♡ おっっ♡♡♡ 一緒に居れない間も指の痕から旦那様の存在を感じて幸せになってしまいますう……っ♡♡♡ あっ、後は旦那様のお口で食べられてっ♡♡♡ 唇や歯、舌でいっぱいイジメられて気持ち良くなってますっ♡♡♡♡♡♡ 旦那様にお口で食べられるの大好きいっ♡♡♡ いひ——っ♡♡♡』

気付けば彼の片手がドレス越しに乳房を触り始めており、彼女の口からは甘く蕩けた嬌声が漏れ始めていた。ビリビリと痺れるような快感が乳房から生み出され、肢体を『ビクっ♡♡♡ ビクっ♡♡♡』と、飛び跳ねるように振るわせる。

それに加えてマスターの手を拒絶するどころか、逆に胸を突き出して触り易くしているのが、アナスタシアのマゾっ気が垣間見えていた。

『おっっ♡♡♡ おっっぱいに口で吸われた痕とおっっ♡♡♡ おっひ——っ♡♡♡ あっっ、甘噛みの歯型付けられるの大好きですうっ♡♡♡ それとおっぱいで一番好きなのは“乳首”れすう……っ♡♡♡』  
『乳首どうイジメられるのが好きなの？ ちゃんとカメラを見ながら説明しないと』

『はっ、はい——っ♡♡♡ イジメられるの大好きなあ……っ♡♡♡ っ♡♡♡ おっっ♡♡♡ よわよわ乳首の説明しますう……っ♡♡♡ っ♡♡♡ ひい——っ♡♡♡♡♡♡』

彼に服の上から乳首を軽く抓られ、彼女は首を仰げ反らせながら皇女とは思えない下品な喘ぎ声を漏らす。ベッドの上に座っているのに、膝が左右にガクガクと揺れていた。

軽く達してしまったアナスタシアは、肩で息をしながら敏感乳首の説明を続ける。

『はあゝーっ♡♡ はあゝーっ♡ 旦那様にいっぱい指で乳輪ごと捏ねられてっ♡♡ ふあゝ…っ♡♡ ちっ、乳首が伸びちゃうと勘違いするくらい強く吸われたりいっ♡♡ 甘噛みされる度に“母乳”びゅーっ♡♡ びゅーっ♡♡て、お漏らしながらイっちゃいますうゝ——っ♡♡♡♡♡』

『赤ちゃん出来てないのに、母乳出しちゃうんだ。誰のために母乳噴水みたいに噴いてるのか言っごらん』

『だっ、旦那様っ♡♡ 旦那様のためれすうゝっ♡♡♡ avanaugh さんに頼んでっ♡♡ んゝおっ♡♡ おゝっ♡♡ おゝひっ♡♡ れっ、霊基を弄って母乳出るようにしてもらいましたあゝ…っ♡♡♡♡』

avanaughに頼んで母乳が出る体質に霊器を改造して貰ったことを告白しながら、彼女はドレスの胸元を滲んできた母乳で濡らす。甘ったるいミルクの匂いが漂っており、服の上からでもむしゃぶりつきたい衝動に駆られてしまうのだ。

マスターは服越しにavanaughの乳首を指先でカリカリと引つ掻くように弄りながら、彼女がまだ話していないことを聞き出そうとする。

『そんなに弱くて母乳も漏らしちゃうんなら、日常生活もまともに送れないよね？ どうやって気持ち良いの我慢してるかも教えてよ』

『~~~~~っ♡♡♡♡♡ ふっ、普段はニップレスで乳首と乳輪が擦れないように守ってますうゝ…っ♡♡ いっ♡♡ 今も洋服とニップレスのお陰で甘イキしかしていませんがっ♡♡♡ いひっ♡♡ んあゝ…っ♡♡♡ じっ、直で弄られたらあゝ…っ♡♡♡ 簡単にイっちゃいますうゝ——っ♡♡♡♡』

『それじゃあカメラに向かって、ニップレスしてる所も映しちゃうか』

avanaughはほんの少しだけ戸惑った後に『はい…っ♡♡♡♡』



軽い絶頂に何度も達しながらカメラに痴態を残していく彼女は、ニップレスの中で母乳をこれまで以上に大量に噴き出し、ハートの形の先端部分が少しずつ剥がれていった。プックリと膨らんだ乳輪の一部が覗き、薄桃色のイヤらしい色素が確認することが出来る。

『もう剥がれ掛けちゃってるから、ニップレスも剥がして良いよね?』  
『ふう、ーっ♡♡♡ ふう、…っ♡♡ はっ、はいっ♡♡ カメラに敏感でエッチなちくび映してください…っ♡♡♡♡』

マスターは両手で剥がれかけた母乳濡れのニップレスを摘み、恥ずかしい位に硬くシコった乳首を完全に露出するためにペリペリと剥がした。

彼から何度も捏ねられ、吸われ、甘噛みされた、白桜色のぷっくり乳首が露出する。そして、触れてもいないのに噴水のように、幾筋もの軌跡を描きながら白濁とした体液を噴き出していた。

『んひい——っ♡♡♡ ひうっ♡♡ ちっ、ちくびい…っ♡♡♡ 気持ちいいれすう、っ♡♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ああっ♡♡♡』

乳首が外気に晒されるだけで強い快感を感じており、このまま空気の流れる弱風に撫でられるだけで、絶頂へと昇り詰めてしまいうそである。視線の定まらない蕩けた瞳と半開きの口から唾液塗れの舌先を突き出し、子犬や子猫のような浅い呼吸を繰り返して快感に耐えるしかない。

『はっ♡♡♡♡ ハっ♡♡♡ はあッ♡♡♡♡ イ、クっ♡♡♡ イっち、やい、そうれす、っ♡♡♡♡ かぜっ、風でイ、っちやう、…っ♡♡♡♡』

既にいっばいいいっばいと言った様子のアナスタシアの震える乳首に向かって、マスターは『ふうーっ』と、口を窄めて息を吹き掛け



た。

その瞬間――

『ふぎゅ――つつツ?!♡♡♡♡♡』

彼女は簡単に快感の許容量が限界を迎え、これまで以上に腰をベッドから浮かせて爪先立ちになる無様な体勢をしながら、意識が飛んでしまいそうな強い絶頂を迎えてしまう。

目を開ける限り大きく見開き、目を白黒させながら、僅かにでも快感を逃すためにアナスタシアは発情した猫が交尾中に上げる声よりも酷い、嬌声を部屋全体に響き渡るほど高らかに叫ぶ。

『イ、ク、ツ♡♡♡♡ イ、ク、イ、ク、イ、ク、う――つつ♡♡  
イ、つき、ゆう、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、  
う――つつ♡♡♡♡♡』

腰を中心に身体が上下に激しく揺れ、豊満な乳房も上下左右に暴れ回る。これまで以上に大量に噴き出る母乳が、部屋全体に撒き散らされる。

クイーンサイズは有ろうかという大きさのベッドのシーツや床、身体中を白濁とした甘ったるいミルクの匂いの体液で濡らして染みを作っていた。

絶頂の声を上げた後も暫くの間、腰を浮かせて両の膝を『ガクツ♡  
♡ ガクツ♡♡♡』と、無様に揺らしていたが、クタあ……ツと身体中から力が抜けてベッドに倒れ込む。

『はあ、ーっ♡♡ ふう、っ♡ はあ、ーっ♡♡♡♡』

『凄いイキっぷりだったね。聞くもでもないかもだけど……気持ち良かった?』

『はあっ♡♡ はあ……っ♡♡♡ とつても気持ち良かったれすっ♡♡  
ん、う、う――っ♡♡♡ キスして欲しいですう♡♡ ん

むっ♡ ちゅ……っ、ちゅう♡——っ♡♡♡♡♡』

アナスタシアのおねだりに応えて、マスターは彼女の瑞々しい唇を貪る。ぴちやぴちやと小さな水音を響せながら、カメラのレンズには幸せそうな男女の姿が映し出されていた。

『——ぢゆるっ♡♡ じゆるるっ♡ ちゅう♡……っ♡♡♡ じゅぷっ♡♡♡ ちゅるるるるるるるる——っ♡♡♡♡♡』

アナスタシアとマスターの口同士で行う交尾のようなディープリキスだが、カメラの映像には記録され続けていく。二人共口端から唾液が溢れるのも気にせず、舌同士を擦り合わせるように絡み合せ、混ざり合った唾液をじゆるじゆると卑猥な水音をさせて響かせていた。

濃厚な口付けの間も彼女は肢体を震わせて軽い絶頂に達しており、ドレスのスカート奥では甘ったるい蜜を漏らし、硬くシコったままの乳首から母乳が溢れ続けている。

『ちゅゆるッ♡ しゅゆるるる♡……っ♡♡ ぷはあっ♡♡ はあっ♡♡ だんなさまあ……っ♡♡ んむっ♡ ぢゆるるっ♡♡ ちゅゅう♡……っ♡♡♡♡♡』

このままキスだけで何十分も撮影時間が続いてしまいそうだが、アナスタシアは旦那様のことカメラに残したいため、口付けの快感に何とか抗って提案をする。

『じゅるるっ♡♡♡ ちゅうっ……っ♡♡ んむ——ぷはあっ♡♡ はあ……っ♡♡♡ だんなさまのしょうかいもおっ♡♡♡ しっ、したいれすうっ♡♡♡♡♡』

『それならアナスタシアが俺のこと紹介してよ』

『はっ、はい♡♡♡ 旦那様のこと紹介します……っ♡♡♡』

彼女は荒い息を整えながら、カメラの方向に視線を戻した。

『わたくしの旦那様はっ♡♡♡ んうっ♡♡♡ 本名は藤丸 立香です……っ♡♡♡ あっんっ♡♡♡ あ……っ♡♡♡ カルデアでマスターをしていて、わたくしのマスターでもありますっ♡♡♡ んひい——っ♡♡♡』

手持ち無沙汰なマスターに乳房を軽く揉みしだかれながら、甘い嬌声を上げながらアナスタシアは彼のことを一生懸命伝える。

『だっ、旦那様は優しくてっ♡♡♡ かつこよくてえ……っ♡♡♡ 女性ならみんな好きになっちゃうお方ですっ♡♡♡ 他の殿方のことなんてえっ♡♡♡ どうでも良くなってしまうっ……っ♡♡♡』

『そんな風に思ってくれてるんだ。言葉にされるとやっぱり嬉しいね。俺もアナスタシアのことが大好きだよ』

彼に愛を囁かれて、彼女は身悶えてしまう。

『あゝ~~~~っ♡♡♡ んっあッ♡♡♡ ああっ♡♡♡ 私も好きっ♡♡♡ 大好きですっ♡♡♡ 愛してますう……っ♡♡♡ わっ、わたくしの心も身体も全部っ♡♡♡ 旦那様のモノですっ♡♡♡』

マスターの愛してるという言葉に喜びの感情が爆発してしまい、アナスタシアは更に踏み込んだ内容も隠すことなくカメラの前で口にする。

『大きくてっ♡ 長くてっ♡♡ 遅しいオチンポ様につ♡♡♡ 処女を散らして頂きっ♡♡ 濃厚ザーメンで全身マーキングされてますっ♡♡♡』

『毎日セックスしてるもんね』

『はいっ♡♡ 毎日シてますっ♡ 旦那様専用のお口とおまんことお尻の穴も全部使って頂いてえ♡♡ 将来、赤ちゃん産むための練習してますっ……っ♡♡♡』

毎日セックス漬けの日々を送っていることを告白する彼女は、ズボンの上からでも分かる程に怒張したペニスを服越しに撫でる。

服の上からでも伝わる硬さと熱に子宮をきゅんきゅんと疼かせながら、アナスタシアは艶かしい肌が露出する上半身を彼の方へと倒す。そして、マスターの膨らんだ股間が自分の顔の前に来るように動く、両手を使ってベルトをカチャカチャと外し始めた。

『はあっ♡♡♡ はあ……っ♡ かつ、カメラにも旦那様の遅しいオチンポを……っ♡♡ 毎日セックスしてるオチンポ様を映したいですっ♡♡♡』

『うん、良いよ。このままアナスタシアが脱がせて』

『はいっ！♡♡ いつものようにしますっ♡♡♡』

日々の奉仕で本当に慣れているのだろう、手慣れた手付きでベルトやボタンの外し、前歯を使ってジッパーを器用に下ろしていく。我慢出来ないのかズボンパンツを同時に脱がせると、アナスタシアの頭にはズッシリと重たくて硬いペニスが載せられる。

カメラには凡そ人間のモノとは思えない、棍棒のように太くて長い逸物が映し出されていた。彼女の前腕よりも太く長く遅しいソレは、アナスタシアと縁深い怪僧ラスプーチンの逸話にある巨根よりも遙かに長大である。

『本当に大きいですっ♡♡ それに臭いも凄いつ♡♡ すうーっ♡♡  
はあ……っ♡♡♡♡』

顔を上げてペニスに頬を擦り付けるように動かす彼女は、うっとりとしたはしたないメスの表情を浮かべていた。汗で蒸れた濃厚な雄の臭いを嗅ぎながら、マスターのペニスの素晴らしさをカメラに向かって実況する。

『女を絶対に堕とすオチンポ様ですっ♡♡ 長くて太いだけじゃなく  
てっ♡ 亀頭は硬くて子宮を押し潰すために、握り拳のように大きい  
です♡♡ すうーっ♡♡ はあっ♡♡ 一番怖いのは異常に発達し  
て肉厚な雁首れすっ♡♡♡ おまんこの襞々が全部無くなっちゃう  
かと思う位、ゴリゴリされるの癖になってしまいますっ♡♡ 男性の  
腕のように逞しい陰茎も、筋張っていて本当に逞しいっ♡♡ 太くて  
おまんこの襞をイジめる血管が、至る所に張り巡らされていますっ  
♡♡♡』

旦那様が雄として優れていることを語るアナスタシアは、心の底から誇らしそうですらあった。実際に他の雌からすれば粗末なペニスしか知らないと言われているようであり、完全にマウントを取られ屈辱を感じてしまうだろう。

『アナスタシアはチンポ本当に好きだね』

『はいっ♡♡ 大好きですっ♡♡ 旦那様のオチンポで犯されてっ♡♡  
♡ ラブラブキスしながら種付け射精されるのが世界で一番幸せで  
すっ♡♡♡』

まだまだ彼のペニスを讃える言葉は無くならず、鼻先を陰茎に擦り付けながら、繁殖能力の高さをカメラに向かって語る。

『本当に何回射精しても萎えたりしない、ずっと勃起したままのオチ

ンポに堕ちないメスなんていませんっ♡♡ はあ……っ♡♡ 本当  
に大きくてわたくしの手では収まらない睾丸の中で、無限に濃厚ザー  
メンが作られていてっ♡ んうっ♡♡ 今もグツグツ煮詰まっ  
てるの聞こえてきますう……っ♡♡♡♡』

彼女の贅辞の言葉に悦ぶように、怒張したペニスも脈動して更に怒  
張していた。マスターも我慢することが出来なくなったのか、次の段  
階へと向かうように声を掛ける。

『紹介はもう十分だと思うから、もうそろそろ“本当の撮影会”も始  
めよう』

『~~~~~っっっ♡♡♡♡ それでは準備をさせて頂きま  
すっ♡♡♡』

そう言っアナスタシアはベッドの近くに置かれた小さな机の引  
き出しから、タバコよりも二回り以上大きな紙の箱を取り出した。大  
きくXLと印刷されたそれから、ビニールの袋に包まれた避妊具を取  
り出す。

『今回は旦那様の射精量を分かり易くするために、市販品の物で一番  
大きなコンドームを用意致しましたあ……っ♡♡♡ 250ミリ  
リットルの缶が入る位に太く、20センチまでは根元まで覆ってくれ  
る、巨根のために用意された避妊具ですがっ♡♡ ——んちゅっ♡♡』

破り易いようにギザギザになっているビニールの包装を破き、丸  
まった状態のゴムを取り出した彼女は、マスターのパンパンに張った  
亀頭にゴムを押し当てた。

空気の入ったゴムの先端を口に含んで潰しながら、アナスタシアは  
両手に力を込めて“小さ過ぎる”コンドームで彼の巨根を覆ってい  
く。

今にも弾けてしまいそうな程に張り詰めるゴムで亀頭が覆われる

が、パツパツという表現が当て嵌まっており、彼の方も明らかにキツそうにしている。ゴム程度に負けるような弱い剛直では無いが、本来ならば血流が止まってしまおう筈だ。

『くうっ、相変わらずキツイね』

『ふはあっ♡♡ はあーっ♡♡ ふう……っ♡♡♡ 旦那様のオチンポが大き過ぎてっ♡♡ はうっ♡ 雑魚チンポ用のコンドームではキツキツですっ♡♡♡ 今にもパンっ♡♡と、弾けてしまいそう……っ♡♡♡』

うっとりとした表情をしながら、アナスタシアは熱っぽい視線を向ける。

巨根を想定している商品なのに、明らかにコンドームの大きさが不足していた。それに長さも全然足りていないようで、丸まっていたゴムを全て伸ばしたのに、半分程度がコンドームに覆われずに露出したままである。

『はいっ♡♡ コンドームは全部着けましたが、まだまだ半分以上覆い切れずに余っていますっ♡♡ これで旦那様のオチンポが、規格外に太くて長いことが分かるかと思えます……っ♡♡♡♡』

自分の顔の二倍近い長さのペニスに額を擦り付けながら、カメラに向かつて片手でピースするアナスタシアは、更に過激になる撮影会に期待して淫らかな笑みを浮かべた。

——彼女は邪魔になっていた、ドレスを脱ぎ捨てる。

『——そつ、それでは旦那様とのセックスを始めますっ♡♡♡ んぁ  
っ♡♡♡』

カメラに向かって性行為に励むことを宣言するアナスタシアは、体勢や格好、表情も何もかもが、下手な娼婦よりも淫らであった。

鼠蹊部よりも狭いマイクロTバツグのデザインに加え、縁を装飾するピンク色のレース以外に生地は無いため、秘所を隠していないショーツは、セクシーランジェリーの中でも群を抜いて卑猥である。

豊満な乳房も濡れた秘所も包み隠すことの無い格好に加え、両脚を大きく開いて中腰の体勢になっていた。乳房や秘所などの性的な部位が一切隠れておらず、カメラにはその全てが映し出されている。

彼女がこのような恥ずかしい体勢をしているのは、仰向けに寝そべったマスターの腰の辺りでそそり立つ、巨塔のようなペニスに濡れそぼった割れ目を触れ合う高さに調整した結果であった。その体勢のまま皇女とは思えない下品に腰を前後に『へこっ♡♡♡ へこ……っ♡♡♡』と、動かして濡れそぼった割れ目に亀頭の先端を擦り合わせている。

『んひっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あ……っ♡♡♡ ああ……っ♡♡♡ このようにいっ♡♡♡ いひ——っ♡♡♡ おまんこにおちんぽを擦り付けっ♡♡♡ んっ♡♡♡ おまんこから溢れる蜜で、セックスし易いようにコーティングしますう……っ♡♡♡ あひ——っ♡♡♡』

メスの発情フェロモンの原液のような粘っこい蜜が『こプっ♡♡♡ コプっ♡♡♡』と、源泉のように止めどなく溢れ、ペニスにローション代わりの汁を塗していく。亀頭にぶっくり膨らんだクリトリスが擦れる度に、軽い絶頂と共に潮が床に向かって噴き出す。

部屋全体を牝の汗や潮、母乳などの甘ったるい匂いが、満たし始めている。



さながらマスターのペニスを使った卑猥なダンスや自慰行為であり、彼女の動きに合わせて弾む豊満な乳房の先端からは、白濁とした母乳が噴水のように溢れていた。

ミルク特有の甘い香りの白い飛沫が、彼の下腹部やベッドに掛かる。

快楽に溺れる牝の典型のような緩み切った顔、焦点の定まらない瞳と半開きの口からだらしなく伸びる舌、口端からはガムシロップのような唾液を垂らしていた。

そして、我慢できなくなつたアナスタシアは、彼にペニスを挿入する許可を“おねだり”する。

『だつ、旦那様のオチンポ欲しいですっ♡♡ おっ♡♡ いっぱい濡らしたので、わたくしの欲しがりおまんこで啜えさせてください』

……っ♡♡ んおっ♡♡』

『良いけど……カメラに実況するのは忘れちゃダメだよ』

『はっ、はいっ♡♡ 旦那様のオチンポの凄さをしっかりお伝えしますう……っ♡♡♡♡』

彼女はマン肉の土手を両手で広げ、色素の薄い薄桃色の肉の花弁をカメラに映しながら、ゆつくりと腰を下ろしていく。『ぬちゅっ♡♡』と、粘性を感じる水音と共に、膣の入り口に亀頭の先端が触れ合う。

『んっひいっ♡♡♡ ふうっ♡♡ ふう……っ♡♡♡ そっ、それではわたくしと旦那様のセックスを始めますうっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おっ♡♡♡ おおっ♡♡ ——っつっ♡♡♡♡♡♡♡』

獣の鳴き声のような嬌声に合わせて、亀頭が少しずつ膣入り口を押し広げてる。小指も入らなそう狭っこい孔に、自分の腕よりも太くて長いペニスが挿入されていく。

『ふとっ♡♡♡ 太いオチンポがあっ♡♡♡♡ んおっ♡♡♡ おっ♡♡♡』

♡♡♡ おまんこの入り口をお♡——つ♡♡♡ あ♡つ♡ ジース  
ポットに届きます♡う♡…♡つ♡♡♡ あひつ♡ ん♡ひい♡ いい  
♡い♡いい♡——つ♡つ♡♡♡♡♡♡♡』

——ぶつしゅううううううう——つ♡♡♡♡

これまで少量ずつ噴いていたのとは異なり、亀頭が入り口近くのお腹側にあるGスポットと呼ばれる場所を擦った瞬間、勢い良く大量の潮が尿道口から溢れた。ベッドの範囲を飛び越えて、床にびちゃびちやと水音を立てながら滴り落ちる。

アナスタシアの膝も産まれたての子鹿のようにガクガクと揺れ、それに合わせて乳房も上下左右にぶるんぶるんと暴れ回ってしまふ。今までより深くて重たい絶頂を迎えており、絶頂の波が引くまでの暫くの間は、全身をビクビクと震わせる彼女の姿がカメラに映し出されることとなった。

漸く絶頂の波が引いてきたアナスタシアは、肩で息をしながら実況を再開する。

『ふう♡——つ♡♡♡ はあ♡…♡つ♡♡ ぜつ、ぜつちようしてしま  
いましたあ♡つ♡♡♡ ふあ♡…♡♡♡♡♡♡♡ 引き続きセックス実況を続  
けますう♡つ♡♡♡ ん♡ひい♡——つ♡♡♡』

両脚に力を込めて全身を震わせながら、彼女は少しずつ腰を落とすていく。余りにペニスが長過ぎるせいで、通常ならば根元まで到達する長さを呑み込んで、まだまだ三分の二は外気に露出していた。

『だつ、旦那様のオチンポにおまんこ♡♡♡ お♡ん♡…♡…♡つ♡♡ お  
まんこミチミチ拵げられています♡う♡つ♡♡♡ 毎日セックスして  
も♡♡♡ んぎゆう♡つ♡♡♡♡♡♡♡ なれせん♡つ♡♡♡ イ♡ク♡つ♡♡  
血管のボコボコが♡♡♡ ゴム越してもおまんこの襞をお♡…♡…♡つ  
♡♡♡ ゴリゴリし♡ます♡う♡——つ♡つ♡♡♡♡♡♡♡』

尿でも漏らしたように秘所から体液を噴き出す水音と共に、部屋の中にはアナスタシアのドロッドロに蕩けた嬌声と実況の音が響き続ける。

『太いだけじゃなくてっ♡ ひい♡……っ♡♡ 旦那様のオチンポは長いです♡ うっ♡♡♡ 長ちんぽお♡……っ♡♡ 奥までゴチュゴチュするっ♡ すっごいオチンポれす♡ う♡……っ♡♡♡』

その後も無様に絶頂する姿を晒しながら、彼女はあと少しで子宮の入り口に亀頭の先端が触れ合いそうな所までペニスを受け入れることが出来た。既にフルマラソンを走った後のように全身を汗で濡らしながら、アナスタシアは汗ばんだ頬には髪を数本張り付かせている。

呂律の回らなくなった口と舌を動かし、彼女はカメラに向かってペニスが奥まで挿入されたことを伝えた。

『ひい♡っ♡♡ ふあ♡……っ♡♡ ふう♡ーっ♡♡♡♡ おっっ、奥まれオチンポ届きましたあ♡……っ♡♡ ん♡おっっ♡♡♡♡ 子宮口とオチンポの先っぽがっ♡♡ キスしれますう♡……っ♡♡♡♡♡ 後はあ♡っ♡♡ お射精していただけるようにい♡っ♡♡♡♡ おっっ、おまんこでズリズリします♡ う♡……っ♡♡♡♡♡♡♡♡』

完全にやり遂げた感を出すアナスタシアは、このまま腰を持ち上げて射精させるために膣全体でペニスを擦り上げる、スクワットに似た動きを始めようとするが――

『まだチンポ余ってるから、もつと腰落とせ――っ！』

――ズっチ♡ ユン♡ つっツ♡!!!♡♡♡♡♡







ゝあゝあゝあゝあゝあゝ——つつっゝ♡♡♡♡♡♡』

ゴム越しだがマグマのように熱い大量射精を感じ、彼女は獣の咆哮にも似た嬌声を放つ。大量のザーメンでゴムが水風船のように膨らみ、膣の中でパンパンに膨張して圧迫する。

内臓が圧迫される感覚と膣が拡がる感覚に悶え、絶頂の波に攫われるアナスタシアの尿道口からは、黄金色の体液が放物線を描きながら放たれていた。

二人分の荒い息が室内に響き続け、行為の余韻に密着し合ったまま浸る。

数分後に押し込むように浮かせていた腰をマスターは下ろし、パンパンに精液の詰まったコンドームが膣孔からずりゆんと抜けた。泡立った本気汁塗れのコンドームをマスターは手でペニスから抜くと、彼女の紐下着に縛って括り付ける。

新しいコンドームを手早く片手で嵌めた彼は、意識が戻っていないアナスタシアのポツカリと開いたままの膣孔に、遠慮無しに怒張したままのペニスを挿入する。

『——んゝぎゅっ?!♡♡♡♡』

『起きた？ このままゴムハメセックスでコンドームがなくなるまで犯した後に、生ハメでいっぱい種付けするから——カメラの前でいっぱい無様な姿晒そう——ねっ！』

——ドっちゝゆんゝ——つつっゝ!!!!♡♡♡♡♡

『んゝツッキゝゆううゝううゝうゝうううゝううゝうゝう——つつっゝ♡♡♡♡♡』

部屋の中には再びアナスタシアの獣のような嬌声と、ムツチリと実った尻肉を打ち付ける破裂音が、何時間経っても途絶えること無く響き続けた。

『ゆるっ、ひへえ…っ♡♡ゆるひへえ——ん♡お♡ッ♡♡♡♡』

あれから休むことなく絶倫なマスターに犯され続け、ゴムが無くなり、日付が変わった後も交尾は休むこと無く行われた。部屋中がオスとメスの咽せ返るような程に濃い性臭に包まれ、ベッド全体にコンドームの残骸や様々な体液の痕跡が残っている。

無限に続く交尾にアナスタシアも根を上げ、今のような懇願するだけのメス穴になっていた。全身を白濁液で汚しており、子宮や胃、腸の中までザーメンがパンパンに詰まっている。

『まだまだ犯したい。もっとうち交尾したい』

『~~~~っっっ♡♡♡♡ひぬうっ♡♡ひんじやう…っ♡♡♡ん♡ぎゅっ——♡♡♡』

彼女は大量に注がれたザーメンで妊婦のようなボテ腹となり、大量に括り付けられたコンドームはスカートのようになっていた。ぽっかりと開いたまま戻らない尻穴からは止めどなく黄ばんだ白濁液が溢れ続け、膣孔には未だに萎えていない長大なペニスで根元まで突き込まれている。

マスターは腰を恥骨に押し付けたまま何度目になるか分からない射精をしながら、アナスタシアにとって幸せで絶望的な言葉を口にした。

『二人の愛の記録いっぱい残そうね』





pixiv有料リクエスト：ハロウィンに魔性菩薩は  
マスターに “悪戯” をしようとするが、  
逆に快樂に墮とされてハメ潰される

——ハロウィン

10月31日に行われるハロウィンとは、11月1日にキリスト教の諸聖人に祈りを捧げる祝日“聖人の日”や“万聖節”の前夜祭を指し、ヨーロッパを発祥とした大々的なお祭りである。

秋の収穫へのお祝いと先祖の霊のお迎え、悪霊を追い払うという意味合いがあり、起源を辿っていけば古代ケルト人のお祭りがあった。子供達がお化けの仮装をして町を練り歩き、近所の家々を回りながら『トリックオアトリート』の掛け声でお菓子をねだりする。

最近では大人達も本格的な仮装を行い、街の心地へと繰り出し、お祭り騒ぎをする本来の形とは違うイベントにもなっていた。子供も大人も羽目を外すであろうこの日に、自己愛の怪物“魔性菩薩”も己の欲望を僅かに解放する。

『ふふっ♡♡ どうか私という魔に打ち勝ってくださいませ、マスター……っ♡♡♡』

蕩けてしまいそうな甘ったるい声で呟いた“殺生院キアラ”は、しなやかな両手の指先で自分の頬を触れ、恍惚とした魔性の笑みを浮かべていた。

「トリックオアトリートっ!!」

長い通路とマスターの私室には、子供達の元気な掛け声が響き渡った。

それぞれ思い思いの仮装をした幼いサーヴァント達は、彼に向かって両手の平や手に持った木の籠を突き出し、美味しいお菓子を“おねだり”する。

「イタズラは怖いなあ。だからこのバタークッキーを上げるね」

「はーいっ!」

人理継続保障機関フィニス・カルデアに於いても、毎年恒例となっているハロウインの催しは開かれていた。

子供のサーヴァント達は可愛らしいお化けの仮装に身を包み、お菓子作りが得意な英霊や職員達が用意したお菓子を貰うために、カルデアの施設内を徘徊している。

当然、マスターの元にも仮装した子供達は訪れ、期待に満ちた笑みを浮かべながら『トリックオアトリート』の掛け声を口にした。

「ブーデイカさん達には秘密だよ——」

毎年ハロウインでは“恒例”となっている“エリザベート・バートリー”のチェイテ城で発生する頭が痛くなる特異点は解決済みである。久方振りに心穏やかな気持ちで、彼はハロウインを過ごしていた。

チェイテ城に逆さまになったピラミッドが突き刺さったり、更にもの上に姫路城が違法建築される光景や機械化した超巨大ロボットなメカエリちゃんなど、具合の悪い時に見そうな悪夢にも似た光景から解放されたマスターの表情は、心無しかいつもより晴れやかに見え

る。

「お菓子を食べたら、寝る前の歯磨きも忘れちゃ駄目だよ」

「二二はーいっ！」

予め子供達の分をキッチンと用意していたお菓子を全て配り終えており、キラキラとした笑顔を浮かべる子供達の後ろ姿を見送った彼は、微笑ましいものを見た時の笑みを浮かべながら自室へと戻った。

「今年も大変だったけど、後は平和なハロウィンが過ぎせそうだな——」

本人も無自覚にフラグを立ててしまったのだが、それは直ぐに回収されることとなる。一人用のベッドへと背伸びをしながら向かい、早めに眠りに就こうとするのだが——

“コンコン”

金属室の扉を二回叩かれる音により、マスターの意識は扉の方へと強制的に戻された。

時刻は夜の十時を越えており、子供も大人も大半が自室へと戻っている時間帯である。居住用の通路にも人は殆どおらず、普段であれば彼の元に訪れる者はいないだろう。

「ん？ こんな時間に誰かな」

突然の来客に対して心当たりの無いマスターは首を傾げるが、拠点の中という事もあり扉を開けるボタンを押した。

『プシュー』という音と共に扉が開かれ、彼の眼前に現れたのは——

「こんばんは、トリックオアトリートっ♡♡」

「うわ——っ」

非常に際どい魔女の仮装をした“殺生院キアラ”が、蕩けてしまい  
そんな声を出して目の前に現れた。目を大きく見開いて驚くマス  
ターは咄嗟の判断により、防衛本能に因るものなのか扉を閉めるボタ  
ンを押してしまう。

実際に過去の所業から考えてもこれが最善の行動であり、出来るこ  
となら直ぐにでも彼女の唯一の天敵である“口の悪い童話作家”を  
呼ぶべきである。

しかし、それを行動として移す前に扉の向こう側から、彼女の男の  
理性を溶かしてしまう甘く蕩ける声が聞こえてきた。

「ああ……っ、そんな御無体なっ♡♡♡ 私はただ行事に合わせて、お  
菓子を強請りに来ただけっ♡ 何も悪いことなど考えてはいません  
よ……っ♡♡♡」

「ほっ、本当か?」

「はいっ♡♡ 私もこのような些事で嘘など吐きませんっ♡ 信じて  
頂けないのなら……扉の前でさめざめと泣いてしまうかも知れませ  
んっ♡♡」

嘘泣きをして見せるキアラに根負けしたマスターは渋々とだが扉  
を開き、戸惑いながらも危険性を感じている彼女のことを私室へと招  
き入れる。

歩く度に大きなお尻が左右に揺れ、一つ一つの仕草だけで雄を誘う  
歩き方。

一歩踏み出す度に小玉スイカはあろうかという質量の暴力である  
乳房が『ゆっさっ♡♡ ゆっさっ♡♡♡』と、身体からワントテンポ遅  
れる形で跳ねるように揺れていた。

普段から着ている衣装に負けない位の露出度があり、女性の性的な  
魅力に溢れる乳房とお尻が強調された、誘惑の魔女をモチーフとした  
際どい服装をしている。

正式名称でエナンと呼ぶ鍰の広い黒のトンガリ帽子、乳輪まで見えてしまいそうな程に上乳が露出しているオフシヨルダータイプのワンピースの丈は、極小という概念すら超えていた。

直立した状態でも肉付きの良いお尻や秘所を覆う黒のショーツが完全に見えており、足の指先からむっちりとした太ももまで覆う網タイツソックスに脚の肉が食い込むのがイヤらしい。黒のピンヒールが只でさえ長い美脚の魅力を、更に際立たせている。

もしも、彼女が指名することが出来る淫らなお店があれば、殴り合いに因る暴力や札束を幾ら積んでも指名する者が現れるだろう。精通前の子供を勃起させて取り返しの付かない性癖を植え付け、老衰間近の老人ですら人生に於ける最後の射精と呼ばれる赤玉を吐き出してしまふ極上の淫婦である。

彼も無意識の内に豊満な乳房の深い谷間やお尻へと視線が引き寄せられ、雄特有の熱を帯びたギラギラした熱い視線を向けていた。

「ああ……っ♡♡ そんなに熱い視線を寄せられるとっ♡ 私も火照ってきてしまいますっ♡♡♡」

「ごっ、ごめん」

「いいえっ♡♡♡ 構いません♡♡♡ 寧ろもっと思えて頂くことが、私にとつてのご褒美なのですっ♡♡♡ どうぞ、あなた様の望むまま、私の体に溺れてくださいましねっ♡♡♡」

「——っ」

キアラは両腕を組むように乳房を持ち上げ、マスターに深い谷間を見せ付ける。追撃するかのように蠱惑的な笑みと熱っぽい視線を向けられ、彼の心臓の鼓動が大きく高鳴り、下腹部に向かって血流がドクドクと集まっていく。

完全に彼女のペースに持ち込まれているマスターだが、何とか邪な気持ちを頭を左右に振って追い払う。間違いを起こしてしまうよりも前に、キアラには自室から退室して貰おうと決めた彼は、手早く要件を済ませてしまおうとする。

「そつ、それで何の用事だったっけ？」

「ああつ、はい……っ♡♡ 改めて言わせて頂きますね——コホンっ♡♡♡ トリックオアトリート♡♡ (お菓子をくれなきや悪戯しますっ♡♡♡)」

ハロウィン定番の言葉と共にお菓子を強請る彼女だが、既に用意していたお菓子は全て配り終えていた。彼は困ったような表情を浮かべながら、申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にする。

「ごめん。もうお菓子は配り終えちゃったから無いんだ」

「へえつ、そうですか♡♡♡ そうですか……っ♡♡♡ そうであれば……”悪戯”をしなくてはいけませんねっ♡♡♡」

そう口にしたキアラは彼に倒れ込むように抱き付き、豊満な乳房が『むにゅう♡♡♡』と、厚い胸板で潰れる程に押し付けた。衣服越しにも伝わる重たい質量と柔らかさを感じてどきまぎするマスターに追い打ちを掛けるように、彼女はズボンの上から膨らんだ股間に右手の指先で触れる。

人差し指と中指で引つ搔くようにカリカリと動かし、ズボンの上からでも分かる硬いペニスを刺激する彼女に対して、彼は何とか言葉を絞り出すように言葉を紡ぐ。

「まつ、待つてっ。こういう直接的なっ。ゆっ、誘惑はしないんじや無かったの——っ」

「はいっ♡♡ 普段であれば堕ちゆくあなた様をこのような形で誘惑は致しませんが、今宵は少しだけ欲望を解き放つことに致しましたっ♡♡♡ 私という魔に打ち克てなくとも、後で”無かったこと”にしますから……っ♡♡ どうぞ安心して快樂に身を委ねて下さいっ♡♡♡」

中々墮ちることの無いマスターとの禁欲生活では無く“禁欲プレイ”に飽きたため、キアラはハロウインを口実に少しだけ淫蕩に耽ろうとしていた。硬く膨張していくペニスを指先で引つ搔いて刺激する彼女は、熱を帯びていく魔羅の感覚にうっとりとした表情を浮かべる。

「ああ……っ、そのような表情をされてはっ♡♡ こちらも我慢することが出来ませんっ♡ お菓子の代わりに“甘い蜜”を頂きますっ♡♡ ——んちゅうっ♡♡♡♡」  
「んうっ ——っッ」

快感に耐えようとする彼の表情にゾクゾクとした感覚を覚え、キアラはその表情をもっと間近で見詰めようと美しく淫らな顔を近づけた。そのまま彼女は自身の瑞々しい唇をマスターの唇に押し付け、肉欲を剥き出しにした貪るような口付けを始める。

「ちゅぷっ♡♡♡ ちゅう……っ♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ れろお——っ♡♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅる……ちゅるうッ♡♡♡」

キアラは長い舌を伸ばして彼の口内へと侵入して、舌先で内頬や歯茎を愛撫しながら唾液を絡め取り、唾液を蜜を吸うように呑み込んでいく。上手過ぎる口付けにマスターの口は緩んでいき、閉じていた口が自然と開いてしまう。

「——っ♡♡♡ じゅるっ♡♡ ぢゅぷッ♡♡♡ ——ちゅるうっ♡♡♡」

彼女がその隙を見逃す筈がある訳も無く、舌を奥まで挿し込んで更に深い口付けをする。彼の舌も絡め取って理性をドロドロに蒸発させ、気が付けば二人は蛭蝮同士の濃厚な交尾のような舌交尾を始めていた。



「じゅるっ♡♡♡ ちゅぷぷっ♡♡♡ じゅるるっ♡♡♡ ぢゅるるうっ♡♡♡ ちゅぷ…:…ぷはぁーっ♡♡♡ はぁーっ♡♡♡ とつても激しい」——んちゅっ?!♡♡♡♡♡

獣になってしまったマスターのことを掌の上で転がすキアラだが、たった一つだけ予想外だったことがあり、それは彼のキスが思った以上に情熱的だったことである。それこそ話す余裕も無くなる程に濃厚であり、恋人同士でももつと自重をするだろう激しさであった。

「じゅるるるうっ♡♡♡ ぢゅぷっ♡♡♡ ぢゅるるうっ♡♡♡ ふうっ♡♡♡ ふうっ♡♡♡ ツ?!♡♡♡ ぢゅぷぷっ♡♡♡ れるろおっ♡♡♡ ぢゅるるうっ♡♡♡ んうっ♡♡♡」

最初は攻めていたのは彼女の方であった筈なのに、気付けばマスターの舌を受け入れる側に回っていた。口内のあらゆる部分に舌が這い回り、唾液をじゅるじゅると水音を立てて啜られてしまう。

頭の奥で淫らな水音が途絶えること無く響き、思考が少しずつ鈍くなっていく。

少しずつお互いの口内の味や温度が混ざっていき、繋がりが触れ合う舌や唇の境目が少しずつ曖昧になっていった。一つに溶けて混ざり合うような感覚は、男女の粘膜接触でしか得られないものである。

「ぢゅるっ♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡ んうっ♡♡♡ んちゅっ♡♡♡ ちゅるるっ♡♡♡ ぢゅぷぷっ——ぷはぁっ♡♡♡ はう…:…っ、まっ、ますたあっ♡♡♡ 少し激し過ぎるのでは——んちゅっ?!♡♡♡ ぢゅぷぷっ、んちゅうっ…:…っ♡♡♡♡♡」

何故かは分からぬが本能で危機感を感じたキアラは、マスターとのキスを止めようとする。しかし、彼女のガムシロップのように甘い

感じる唾液に夢中になっている彼が、この濃厚な口付けを止めてくれる筈も無い。

キアラの細く括れた腰に右腕が回され、頭を抱え込むように左腕が回されてガツシリと拘束されてしまう。息継ぎすら満足に出来ない飢えた獣の貪るようなディープキスに、彼女は抵抗する力を少しずつ奪われていった。

「じゅぶっ♡♡ ちゅぶぶ…っ♡♡♡♡ じゅるるうゝっ♡♡ れるお…っ♡♡ ちゅぶっ♡♡ ちゅぶぶうッ♡♡♡♡ じゅるるっ、んちゅうっ♡♡ ぢゅるるうゝッ♡♡♡♡」

抗うことが出来ない理由には、荒々しい口付けの中に溢れて零れてしまいそうな程の“愛情”を感じているからだろう。それも遊女に向けるような軽々しい軽薄な愛では無く、最も純粋な初恋の相手や最愛の妻に向けるような誠実で深い愛情である。

それはキアラがどの並行世界を通してても味わったり、向けられたことの無い感情であった。

“性”という自分の専売特許の分野で戦っている筈なのに、未知に触れる彼女は初々しい牝の表情を見せている。

（いつ、いつの間にか私の方が受け身に…っ♡♡ 責められるのも嫌いではないですが、このような展開になるなんてっ♡ っっ、これでは虜とするどころか私の方が——っ♡♡）

内心では危機感を覚えているのにマスターのキスも拘束も解けないキアラは、思考も身体も蕩けていくような快感を感じながら、黒のシヨーツとむっちりとした太ももの内側をトロトロの蜜で濡らす。

——甘酸っぱい汗の匂いが立ち込めていく部屋の中には、思考を蕩けさせる小さな水音が途絶えることなく響き続ける。

「——じゅるるっ♡♡♡ ちゅるう、ちゅぶぶっ♡♡♡♡ ぢゅるっ♡♡♡  
じゅるるう…:…っ♡♡ ぢゅぶぶっ♡♡♡ ———れろおっ♡♡♡」

お菓子を強請りに来たキアラが来客してから一時間以上が経過した部屋には、未だに口付けを交わす水音が響き続けていた。

あれからマスターに肢体を拘束されたままの彼女は、愛情たつぷりの深い口付けで口内を蹂躪され続け、トロトロに蕩けた牝の顔をしながら舌を絡めている。既にキスだけで五回も甘イキを迎えており、全身が甘酸っぱい牝の匂いのする汗でびっしょりと濡れていた。

ただでさえボディラインがハッキリとしているオフショルダールのワンピースであるのに、汗に濡れたことで素肌に張り付いている。ぷつくりと膨らんだ乳首の形やお臍の窪みまで視認する事が可能であり、服としての機能をほぼ失っていた。

場所は扉の入り口付近からベッドへと移動しており、二人は一人用のベッドの上、仰向けのキアラにマスターが覆い被さる体勢になっている。第三者から見れば愛し合う男女にしか見えない体勢、両手の指が交互に絡み合う恋人繋ぎをしているのが、余計に愛し合う男女にしか見えない。

一時間近く口付けを続けてようやく満足したのか、彼はゆつくりと唇を離れた。口付けを交わし続けた男女の唇と唇の間には、混ざり合った唾液の橋が架かっている。

久方振りの唇が離れてまともな呼吸をする二人の口からは、全力疾走の後にするような息も絶え絶えな荒い呼吸音が木霊していた。

「はあ、ーっ、はあーっ。キアラ好きっ、もっとキアラが欲しいっ！ 我慢出来ないから…:…もっと深くまで繋がりたい」

「~~~~~っっっ♡♡♡♡ ふう、ーっ♡♡♡ ふう

っ♡♡ ええ……っ♡ かつ、構いませんっ♡♡ 私、あなたで溶けてしまいそうっ♡♡」

恋人繋ぎする両手の指にキュツと力を込めるキアラは、完全に堕ちてしまった蕩けた牝の顔をしている。

人間は自分しか存在しないと思っっている自己愛の怪物、自分の身体で他人の人生が終わることが至上の悦びである倒錯者であるのに、何故かマスターとのまぐわいでは只の「メス」として愛されることを甘受していた。

その異常さに気付けなくなる程、彼女の思考は蕩けてしまっっている。キアラは繋いでいた両手をゆっくり離すと、彼に向かって両手を広げたまま伸ばす。

「たっぷりと堪能させて下さいね……っ♡♡♡ ——あんツ♡♡♡」

頬を紅潮させて妖艶な笑みを浮かべる彼女は、人々を惑わせる本物の魔女のようだ。

魅了された彼はずっと胸板で押し潰れていた柔らかい乳房を曝け出すために、オーブンショルダーの衣装から溢れてしまいそうな乳房を最低限だけ覆う頼りない布を捲り上げる。

プルんっ♡♡と弾むように溢れ出たのは、搗き立てのお餅のような柔らかさとズツシリとした質感の豊満な乳房。

まだ触れていないのにぷっくり膨らんだ乳輪や少し大きめの硬くシコった乳首も丸見えであり、処女雪のような純白の乳房も色素の薄い桜色の乳輪や乳首のコントラストは、雄の生殖本能を直に刺激する光景である。

暫くの間、稀代の芸術品でも見た時のように放心していた彼だが、何とか搾り出すようにキアラを褒める言葉を紡いだ。

「……ほっ、本当に綺麗だ」

「存分に視姦してっ♡♡ お好きに揉んで下さいっ♡♡♡ んあっ♡

あゝっ♡♡ ああっ♡ ———んうゝっ♡♡♡」

彼女の言葉で我慢が出来なくなったマスターは、両手で小玉スイカ程もある巨乳に触れ、感触を確かめるようにゆっくりと揉み始めた。どこまでも沈み込んでしまいそうな程に柔らかいのに、指を離せば直ぐに元に戻るだけの張りもある。

そして、蕩けるような甘い嬌声を上げるため、余計に乳房を揉む手を止められなくなってしまう。

汗ばみ吸い付くようにしっとりとしているのに、空気よりも僅かに抵抗を感じる程の柔らかさ。グニグニと弾力のある乳輪や乳首の感触が指へのアクセントとなり、彼はいつの間にか無我夢中で揉みしだいていた。

合計十本の指に力を込めるのに合わせて豊満な乳房が形を変え、ぷっくりと膨らんだ乳輪や硬くシコった乳首が更に赤みを増している。嬌声も更に甘く蕩けて甲高くなり、声量も大きくなって部屋中に反響する。

「あゝっ♡♡ いゝひっ♡ ひくゝう——っ♡♡♡ あゝっ♡ あゝっ♡ あゝっ♡♡♡ ああゝっ♡ ———んゝおゝッ♡♡♡」

雄の加虐性と生殖欲求がマスターが指に込める力を自然と強くさせ、気付けば合計十本の指の痕が残ってしまいそうな程に強くなっていた。それに加えて今にも母乳を噴き出しそうな乳首に言いようもない母性を感じ、彼は口に啜えたい欲求を抑えられなくなる。

——かぶっ、ちゆう……っ♡♡♡

「んゝひいゝ——っッ♡♡♡♡♡ あゝっ♡♡♡ あひっ♡♡♡♡ひくゝうゝ♡♡♡ くっ、口でえッ♡♡♡ おゝッ♡♡♡ ———いゝぎゆうゝっ♡♡♡♡♡」

片手で乳房を揉みしだかれながら、もう片方の乳房の先端を口で啜えられる。前歯で甘噛みをされて舌先で乳首の頭頂部をレロレロと上下左右に舐められ、母乳を吸い出すように『ちゅう、ちゅう……っ』と、マスターに強く吸われてしまう。

キアラは肢体をビクビクと震わせながら軽い絶頂を迎え、両の乳房から走る甘く痺れるような快感に身を委ねる。脳みそが焼け付くのに似た快感を感じながらも、自身の乳房に吸い付く彼に母性本能を擦られていた。

「イククっ♡♡ イク♡イク♡——ッ♡♡♡ イクっクううう♡♡♡ うううう♡♡♡ そっ、そんなに吸われればあ♡♡♡♡♡ ほんろう♡に母乳があ♡——っッ♡♡♡」

母性本能がお臍の奥にある子宮へと働き掛け、ジンジンやズキズキという表現の似合う疼きを覚える。乳房を嬲られれば嬲られる程、子宮の疼きは更に強くなっていく。

（あ♡っ♡♡ わたくしの子宮が♡♡♡ んあ♡っ♡♡ うっ、疼いてしましますう♡……っ♡♡♡ ——ん♡ぎゅう♡ッ♡♡♡）

絶頂を迎えても子宮の疼きが治る気配は無く、寧ろもつともつとと“オス”を欲してしまう。黒いショーツだけでは無くお尻の下の敷かれたシートまで愛液や潮で水溜まりを作り、我慢する事の出来なくなった彼女は“おねだり”をする。

「あ♡んッ♡♡♡ ん♡っ♡♡ ん♡う♡ッ♡♡♡ ちっ、乳房へのあいぶもお♡っ♡♡♡ いくっ♡♡♡ いい♡ですが……♡♡♡ お♡っ♡♡♡ お菓子の代わりにい♡ッ♡♡♡♡ 子宮に精液を下さいますえ♡♡♡ッ♡♡♡♡」  
「ちゅう——ぷはあっ、はあーっ。そんなに可愛いおねだりされたら……我慢が出来ないよっ」

吸い付いたキアラの乳首から口を離したマスターは、捲る必要も無い程に短いワンピースを捲り上げて下腹部を露出させると、淫らな淫

液をタップリと吸い込んだ黒のショーツを脱がせていく。びちやつと水音を立ててシヨーツはベッドに落ち、彼の眼前には性的興奮によりふつくらと膨らんだ無毛の恥丘が晒される。

淫肉の濡れそぼったサーモンピンク色の花卉が覗いており、粘っこい淫液をコプコプと垂らしていた。小陰唇がヒクヒクと開閉を繰り返す、マスターの魔羅を求めている。

経験豊富とは思えないまるで処女のように穢れの無い無垢だとすら感じる女陰に見惚れながら、彼は自分の怒張する魔羅を押しえ付けていたズボンとパンツを脱ぐ。そして、キアラが想像していたよりも遥かに長大な魔羅が、ブルンと大きく跳ねながら露出された。

「——っッ♡♡♡♡♡」

蕩けて潤んだ瞳を大きく見開き、彼女は息を吞んでしまう。

口で啜えることも難しい巨大な亀頭、女の腕を二本合わせたような長さで太さの陰茎。巨人のペニスに見合うだけの巨大な睾丸、生殖器の全てが規格を超えるだけの大きさである。

樹齢千年を超える大木や堅牢な城門を破壊する破城槌のようであり、キアラの中にある雌の本能が刺激されてしまう。同時にずっと感じていなかった雄への根源的な恐怖、自身が犯される側であることを深層心理だけが感じていた。

だが、完全に“獣”と化しているマスターが静止するより前に、濡れそぼり弄る前から準備万端な膣孔へと火傷してしまいそうな亀頭の先端へと触れ合わせる。

——クチュっ♡♡

「いっぱい愛しましょうね……っ」

「おっ、お待ち下さいっ♡♡♡♡♡ イ——っ、ん、ぎ、ゆウッ?!♡

♡♡

正しく蚯蚓千匹や数の子天井と呼ばれる名器を更に進化させたよ  
うなキアラの膣孔に、メスを殺すことだけに特化した極悪魔羅が挿入  
されていく。普通ならば挿入途中で情け無く射精してしまう快樂の  
孔だが、常軌を逸したマスターのペニスは奥を直指して容赦すること  
無く突き進んでいった。

「ふっ、太お——っ♡♡ おっ♡♡ おっ♡♡ ひっ、ひろが  
るう♡♡♡♡ ん♡オ——っ♡♡♡♡」

ヒクヒクする尿道口から潮を何度も嘔き、彼女は濁音の混じった嬌  
声を上げ続ける。

無数の突起と襞々が蠢く淫肉が魔羅へと絡み付き、雑巾搾りとバ  
キュームフェラをするかの如く吸い付く。どんなに高級なオナホー  
ルでも生み出せない極上の快感をマスターにも齎すが、キアラもまた  
膣孔をミチミチと押し拡げられる快感に晒されていた。

視界全体が白むような快感が何度も走り、頭の奥で赤黒いマグマが  
迸り続ける。この時点で彼女は漸く自分が捕食する側では無く、非捕  
食者なのだと気が付いてしまう。

「わっ、私があ♡♡♡♡ ん♡オ——っ♡♡♡♡ 食べられ♡  
るう♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡ んひっ♡♡ ふぎゅう♡————っ♡♡♡  
♡♡♡♡」

この場に至って立場の逆転してしまったキアラだが、逃げ道など残  
されてはいなかった。自分の方が巨大な蜘蛛の巣や熊のいる穴に入  
り込んだ獲物であり、少なくとも翌朝まで助けが来ることは無い。

そして、腰を押し進めれば押し進める程、マスターの繁殖欲求は更  
に高まっていった。気付けばお臍の奥にある子宮は目前となり、彼は  
戸惑うこと無くかの宇宙ですらある彼女の体内の中で、最も極楽浄土  
となっている子宮を押し潰す。













「おっ♡♡♡ おっくっ♡♡♡ しっ、しきゅっ♡♡♡ つぶつ、つぶれりゅうっ♡♡♡ んっおっ——っ♡♡♡♡♡♡♡♡」

甘酸っぱい大粒の汗を浮かべる火照った身体が上から下に動く度に、柔らかいお尻や太ももが硬い下腹部にぶつかる『たぱんっ♡♡』と、空気を含んだ柔らかかそうな破裂音が室内に響く。

彼女が上下のどちらに身体を動かしてたとしても、荒く艶かしい吐息と共に濁音の混じった嬌声が漏れてしまう。腰を持ち上げてても親指よりも分厚く鍍金の返しのように凶悪な形状の雁首で膣襞をゴリゴリと掘削され、腰を落としても子宮を容赦無く硬質な亀頭で押し潰されることになる。

抜け出すことの出来ない快感の無限ループに嵌まっていた。

自ら下腹部に刻んだハートマークと子宮を意識したデザインの淫紋には、軽い絶頂や強い快感に呼応するようにピカピカと発光している。

重量や肉感を感じる大きな桃尻とムチっ♡♡と肉付いた太ももの筋肉が、男の硬い下腹部にぶつかり離れるのを何度も繰り返していた。触れ合う男の腰と女のお尻や太ももの間では、何本もの粘っこくトロツとした糸が引いている。

汗や愛液、潮や唾液などの汁気の多いドロドロエッチは、言葉では語り尽くせない程に淫靡であった。

「ふっ、ふっとおっ……っ♡♡♡ おっ——っ♡♡♡ おっひっ♡♡♡ ひぐうっ♡♡♡♡♡ ——んっおっ♡♡♡♡♡」

鍛えた男性の如き太腕のようなペニスに膣孔をミチミチと押し広げられており、その隙間から交尾用の粘っこい愛液が『トプっ♡♡

コプっ♡♡♡』と、溢れて秘所や魔羅が淫液により濡れそぼる。分厚い雁首により膣孔の中で掻き混ぜられた愛液は、ブクブクと泡立ち卑猥に白く濁っていた。

数字で表すならば三十センチを余裕で超える規格外の長魔羅であ

り、子宮を鳩尾の辺りまで持ち上げた状態から完全に押し潰す。お腹の上からでも位置を把握することが出来る程に巨大な亀頭によって、敏感なポルチオや子宮口をまとめて強い快感を与えている。

快感を全て伝えるように調教されたか弱く敏感な子宮が熱した鉄の棍棒のように硬く熱い亀頭に勝てる筈も無く、彼女は照明のスイツチのオンオフのように簡単に深イキアクメを迎えてしまう。

「お——っ♡♡♡ イクっ♡♡ イっちゅっ♡♡ イ  
くイッくイク——っ♡♡ イいゝゝゝゝゝっっ♡♡  
♡♡」

——ぷしっ♡♡ ぷしゅッ♡ ぷっしゅうううううっ♡♡  
♡

絶頂の波に合わせてヒクつき収縮を繰り返す尿道の入り口からは、腰の震えや腹筋の痙攣に合わせて牝のフェロモンをタツプリと含んだ潮を嘔き、男性の鍛え上げられた腹筋の溝にも淫液が溜まる程にびちやびちやに濡らしている。

「——っ♡♡ ……おっ♡♡ おっひ——っ♡♡」  
「モルガン」 自分だけイってちやダメでしょ。これはお仕置きなんだからっ！」

瀕死になった羽虫のように肢体を痙攣させて深い絶頂で意識を飛ばしているモルガンに対して、まだ射精すらしていないマスターは細く括れた腰を両側から驚掴みにした。

そのまま太い血管が葉脈のように浮き出る禍々しく屈強な魔羅を用い、既に潰れている子宮を腰を持ち上げ容赦無く突き上げる。元から潰されていた子宮が更に押し潰され、火花が散り電流が走るように強い快感が生み出された。

——ズンっ♡♡

「んゝツギゆうゝうううゝうううゝうううゝウゝううゝ——っツゝ?!?!♡♡♡♡♡」

モルガンは目を白黒させながら絶叫のような嬌声を上げるが、それだけで“彼等”のお仕置きは終わらない。

「俺だけ気持ち良くするだけじゃ駄目だよ？ 他にも“俺は”まだまだ沢山いるんだから、おまんこだけじゃなくて手と口とか全身使ってご奉仕しないとね」

「おゝ~~~~~~~~~~~~~~~っっっっ♡♡♡♡♡」

言葉通りに腰を突き上げて揺らすマスターとは別に、双子やソックリさんとも明らかに違う“完全なる同一存在”が、部屋の中にはまだ“十五人以上”存在している。彼女が両手の“支え”としてずつと握っていたのも、膣孔に挿入されているモノと同じ形と大きさの二本の魔羅であった。

モルガンに左右の手でそれぞれペニスを握られる二人のマスターは、彼女のマシユマロのように柔らかい頬に龟头をグリグリと押し付けながら、もっと強いご奉仕をするように命じる。

「さつきからチンポ握ってるだけじゃなくて、もっと扱いて気持ち良くしてよ」

「んゝひゆうゝっ♡♡♡♡ お——っっ♡♡ ひやつ、ひゃいゝ……っ♡♡♡♡ おゝっ、おちんぽシゴきますっ♡♡♡」

彼一人にすら逆らう事が出来ないマゾっ気の強いモルガンが、一目見ただけで十五人以上に“分身”したマスター達に強く命令されれば、抵抗する気力すら湧く筈も無かった。

完全に萎縮する彼女は指が周り切らない程に太い陰茎を握り直し、



根本から先端までの長いストロークを上下に抜き洗うように手淫を始める。

——ずつちゅっ♡♡♡ ぬっちゅっ♡♡♡ じゅっちゅっ♡♡♡

精液の混ざった白く濁る先走り汁が亀頭の先端から漏れて『ぬっちゅっ♡♡♡ ぐっちゅっ♡♡♡』と、火傷してしまいそうな程の熱量を秘めた魔羅と掌の間で粘つくく卑猥な水音が二重に鳴り響く。

両手と膣孔の合計三本のペニスにご奉仕をする彼女だが、まだまだ射精したがっている魔羅は十本以上存在していた。どんなに高価なストリップショーよりも淫らなモルガンの痴態を“オカズ”にして、残りのマスター達も自分で自分の陰茎を握って力強く扱っている。

「あつ、俺もう射精そうつ。モルガンの口貸してよ——ッ」

「ふえゝっ?♡♡♡ おゝっ♡♡♡ おゝまちくだひや——んゝふゝうゝゝゝゝゝッ?!♡♡♡♡♡」

魔羅を扱くマスター達の中の一人の射精が近くなり、モルガンの頭を両手で掴んでそのまま嬌声を漏らす口に無理矢理に魔羅を挿入した。口内を硬い肉が満たして喉奥どころか食道まで犯して根元まで啜え込ませ、敢えて“孔”を使うように容赦せずに腰と彼女の頭を前後に動かす。

「んゝぶっ♡♡♡ ぐぶっ♡♡♡ んゝうゝゝゝゝゝッ♡♡♡♡♡」  
「モルガンの口マンコあったかくて気持ち良いっ。直ぐに射精すからね——っ」

口内でのくぐもった呻き声にも似た嬌声と唾液が掻き混ぜられる水音が響き、殆ど気道を塞がれたまま長く太いペニスがズルズルと口内と食道の中を何度も行き来する。どんなオナホールよりも気持ち良い孔と元から射精寸前なこともあり、彼は根元までペニスを押し込



ガンの口からペニスを引き抜いていく。長く太いペニスが口から徐々に現れる光景は、ある意味でマジックのようであった。

「……っ♡♡♡♡ ぢゆるっ♡♡♡♡ じゅぶぶぶっ♡♡♡♡ ぢゅぶっ♡♡♡♡」

彼女はほぼ意識を失っているのに尿道の中に残った精を啜ってお掃除しており、普段から良く仕込まれていることが傍目にも良く分かる。

——ずるるるっ♡♡♡♡ ぶぽっ♡♡♡♡

モルガンの口から抜けた勃起したまま魔羅は、唾液塗れで淫らな香りの湯気を立てていた。

「とつても気持ち良かったよ。本当はもつと楽しみたいけど、順番待ちだから仕方ないなあ……」

「………っ♡♡♡♡ んっ♡♡♡♡ っ♡♡♡♡ んっ……っ♡♡♡♡ ぱはあ♡♡♡♡ っ♡♡♡♡ はあ♡♡♡♡ っ♡♡♡♡」

射精したマスターは名残惜しそうにしながら離れていくと、息も絶え絶えな彼女の前には新たな“人影”が迫っており、強い熱気と咽せ返る程の雄の精臭を放つ巨大な肉棒が頭の上に無遠慮に乗せられる。その人物が彼女が犯されていることをオカズに自慰行為していた、沢山いるマスター達の中の一人であることは考えるまでもない。

「モルガン次は俺だよ」

「ひっ、ひい♡♡♡♡……っ♡♡♡♡ わっ、我が夫お♡♡♡♡ っ♡♡♡♡ ゆるっ、許ひへえ♡♡♡♡」

目尻には大粒の涙を浮かべてか細い悲鳴を上げるが、このようなこ

とになったのは全てモルガンが“原因”であった。いつ終わるのか  
さえ想像も付かない状況に、彼女は内心で誰かに助けを求めてしま  
う。

（このままでは我が夫に壊されてしまいます……っ♡♡♡ バーヴア  
ン・シー、バーゲスト……っ♡♡ だっ、誰でも良いから助けて下さい  
っ♡♡♡♡）

そんなモルガンの悲痛な願いも虚しく、マスター達は絶望の言葉を  
口にする。

「「「いっぱいお仕置きして上げる」「「「

「~~~~~っっっっ♡♡♡♡」

——まだまだお仕置きは終わらない

——お仕置きが始まる数十分前

「ふむ、総監修はまだまだステージが生温いと言っていますね。それ  
ならば徐福達ギミック班には、更なる高難易度化に努めて貰うとしま  
しょう。それから——」

机の上に積まれた資料に次々と目を通しながら、新たに指示する内  
容をまとめていくブリテン異聞帯の女王“モルガン”の姿があった。  
此処はカルデアのシミュレーションルームの中であり、彼女はマス  
ター達には内緒で“修練場”の建築計画を進行中である。

時間を掛けた修練場の完成が間近なこともあってか、普段よりも合いを入れて取り組んでいた。

総監修役を務めるスカサハや鬼一法眼、司馬懿などの元から殺人的な内容のアスレチックを更にハードにしようとする師匠組やグランドロクデナシで皆の妹を自称するリポーター役のレディ・アヴァロン、諸悪の根源であり嫌な予感しかしないアシスタントを勤める蘆屋道満など――

ハッキリ言って不安しか残らない”人選”ではあるが、長きに渡る統治の経験で培われた女王としての優れた手腕を遺憾無く発揮している。

「ああ、訓練場の名前についてもバーゲストから提案がありましたね……明日霊血古圏（アスレチック・ゾーン）ですか。語感が気に入りました採用とします」

現在進行形で彼女は素に近い天然な部分を披露しており、元配下である妖精騎士バーゲストが”オタク文化に嵌る某海賊”から借りた男臭い漫画を読んで得た着想、一昔前の不良がするような当て字を用いた命名を真面目に採用していた。

明日霊血古圏を読まされることになる実況役の”裏切りそうで裏切らない糸目の仙人”が、このトンチキワードを口にするだけで精神的に限界に達しそうになるのは少しだけ先のお話である。

「スカサハ・スカディが手伝いを希望。夏の償いとは全く義理堅いのか生真面目なのか……しっかりと働いて貰いましょう」

過酷なブリテン異聞帯の統治を終えて肩の荷が降りたモルガンは、サーヴァントとして召喚されたカルデアでの生活を謳歌していた。現在の彼女の状況を一般人に例えるのならば、長きに渡るブラック企業勤めを終えた直後であり、自由に羽根を伸ばせる休暇に入ったような状態である。

カルデアの生活を満喫するのも、当然のことだろう。

「一先ずはこの計画で進めていきましよう。ふふふ……っ、まだ明日霊血古圈のお披露目は決まっていますませんが、すごいのが出来上がるかと間違いありません」

素晴らしい訓練場の完成を思い描くモルガンは、得意気な表情と共に胸を張るがそれに合わせて『たぶんっ♡♡』と、豊満な乳房がその柔らかさを視覚情報だけでも伝わるように揺れる。

愛おしい旦那様の愛情と肉欲を感じながらタツプリと揉みしだかれ続けた結果、元から巨乳の乳房は二サイズ以上バストアップを果たしてメートルを超えていた。魔術と調教により感度も上がっており、性的興奮を覚えるだけで母乳が吹き出すようになったスケベなおっぱいに育て上げられている。

乳房と同様にお尻も同様に可愛がられているため、ドレス越しにも安産型のお尻の形と肉感が分かる程にムチムチと肉付いていた。元気な赤ちゃんを産めますと伝えており、目の前で尻の柔肉を揺らされながら歩かれれば、男が獣へと変貌するのも当然のことだろう。

雄に恋をして愛されることで女は更に美しく淫らに咲き誇り、モルガンはドスケベボディへと進化を遂げている。

「これならば」我が夫も楽しんでくれることでしょう。ふふっ♡」

自身が契約を結ぶマスターであり夫でもある「藤丸 立香」が、この修練場を驚きながらも楽しんでくれる姿を想像する。それだけで彼女は瑞々しい唇に曲げた人差し指の第二関節を軽く押し当てながら、普段の氷のよう冷たい表情からは想像も付かない花のような微笑を浮かべていた。

絶世の美女という評が適切なモルガンの微笑む姿を他者が目撃したのならば、男女問わず魅了の魔法に掛けられたかのように見惚れて

しまうことだろう。

カルデアに召喚されてから夫や愛娘である“バーヴァン・シー”との仲も非常に良好であるため、彼女はある一点を除いて不満の無い充実した時を過ごしている。それに加えて現状で感じている唯一の不満に關しても、修練場の建築と並行して秘密裏に進める“計画”が存在していた。

「こちらはあらかじめ片付きましたので……次は“あちら”の計画を進めましょうか」

モルガンは訓練場の方の書類や資料を手早く片付けると、もう一つの計画を進めるために自身の魔術工房兼自室へと向かう。彼女の足取りはスキップをするような軽やかであり、女王や母とも異なる発情したメスの顔をしながら呟く。

「——待っていて下さい我が夫“達”……っ♡♡」

『——魔術師であれば“自分と同等の分身”などいかようにも作り出せる』

ブリテン異聞帯に於いて嘗ては敵であったマスターと対峙した際に、モルガンは“三人に分身”した状態で上記のような発言をしている。

当時のそれには神代の魔術師にも劣らぬ卓越した腕前を誇示する意図があったが、彼女は分身を生み出せる超高等魔術を用いること

で、カルデアでの生活の不満を無くす計画を密かに進めていた。

果たしてモルガンの計画とは——心から愛おしい“我が夫”の独占である。

自分だけを愛して欲しいという単純な独占欲もあったが、それ以上に沢山いる妻達のせいでマスターに一对一で愛して貰える機会が減っていたことが大きい。本音を言えば毎晩のように耳元で優しく愛を囁かれながら、二人っ切りでイチャラブ子作りに励みたかったのだ。

しかし、万が一にも一人しかいない彼のことを独占しようものなら、聖杯を求めて争う“聖杯戦争”よりも更に苛烈な争い——名付けのならば“正妻戦争”が勃発することは目に見えていた。

古今東西で伝承や伝説を残す英雄や魔に属する者、人智を遥かに超えた神霊や人類悪のビーストなど、全ての勢力を巻き込む壮絶な争いが起きるだろう。そして、何よりもマスターが自分を巡って女達が争うと悲しませるため、妻の間では暗黙の“マスター独占禁止令”が敷かれていた。

時たま独占欲の強いサーヴァント達が無謀にも彼の独占を試みていたりするが、等しく常軌を逸した絶倫と巨根の凶悪コンボによって返り討ちにされ、従順なメスへと“躰”られてるだけだったりするのは秘密である。

『ふふふつ、妻が沢山いるのなら我が夫も“増やせば”良いのです……つ♡♡♡』

正妻戦争などの問題も“物理的”にマスターが増えることで、全て解決することが出来てしまうのだ。モルガンや魔術に秀でた者達が自身の欲望に従い『マスターを増やす魔術』を作り出すことは、遅かれ早かれ時間の問題だったという訳である。

——尚、彼に了承は貰っていなかった



自身の魔術工房へと辿り着いたモルガンは、最終調整を終えてマスターを増やす魔術の準備を完璧に整えている。

唯一の問題であった魔力リソースの確保に関しても、自分に使われた“聖杯”を魔術により取り出すことで解決していた。時間を掛けたが故の達成感と“この後”の期待感により、彼女のテンションはいつもより数段高まっている。

「予想よりも時間は掛かってしまいましたでしたが、ようやく完成しましたっ！ この魔術と魔力リソースとして“聖杯”を用いれば、我が夫のことを半永久的に好きなだけ増やすことが出来ます。そうすれば、ふふふ……っ♡♡」

両手両足の指でも収まり切らない程に増えた“我が夫”に全方位で塞がれるように囲まれ、ズブズブのドロドロになるまで愛される妄想をする。それだけで処女雪のように白く柔らかそうな頬は朱色に染まり、火照った頬に両手を添えながらモルガンは妖しい笑みを浮かべてしまう。

「あっ♡♡ だめです……っ♡ じゅっ、順番にお相手しますからあっ♡♡♡ —— あんっ♡♡」

桃色の想像に脳内を埋め尽くされてトリップする彼女は、肉付きの良い肢体を抱き締めるように腕を組みながら身悶えていた。下腹部に自ら刻んだマスターの令呪をハートマークで囲むデザインの“淫紋”が発光しており、性的興奮を覚えていることは一目瞭然である。

数分後に何とかトリップした状態から戻ってきたモルガンは、軽く咳払いをしながら魔術の詠唱に取り掛かった。

「んんっ、こほんっ♡♡ そっ、それでは始めましょうかっ♡♡♡ |  
——」

艶やかな唇から紡がれるのは流麗な詠唱——

歌うような調に呼応するように床に置いた聖杯に蓄えられた魔力が消費され、術者であるモルガンでさえ目を開けていることが困難な程の強烈な光が放たれる。この魔術にはマスターの召喚と分身、意識共有などの超高度な魔術が幾つも組み込まれており、現代魔術師が見ようものなら泡を吹いて卒倒するような芸当であった。

室内全体が包み込んでいた光は徐々に収束していき、彼女が閉じていた目をゆっくりと開いていくと——

「「「えっ、何これ?」「」」」

「せっ、成功ですっ!♡♡」

自分と瓜二つの存在がいることに困惑するマスター“達”の姿があり、一目見ただけでも十五人以上の分身が存在している。魔術の成功を喜び満面の笑みを浮かべるモルガンだったが、気付けばマスター達が彼女のことを円を作るように取り囲んでいた。

「「「どういうことか説明してくれるよね?」「」」」

「あ——っ。はっ、はい……っ」

ここでようやくモルガンは事前に了承を得ていなかったり、魔力リソースとして与えられた聖杯を無断で抽出したことに気が付く。自分が確実に怒られると理解した彼女だが、複数人に増えた彼の圧に負けて包み隠さずゲロってしまう。







「「それなら次はおまんことお尻の穴にお仕置きしようか」」  
「ひいゝゝゝゝゝゝつツゝ♡♡むっ、むりれすうゝ♡♡——あ  
ゝひいゝゝ♡♡♡」

膣孔にペニスを挿入されたままモルガンは身体を持ち上げられ、尻穴にも亀頭を押し当てられてしまう。彼女は頭を左右に振りながら無理だと伝えるが、お仕置きのためにマスターは容赦無く尻孔も犯していく。

——ズルっ♡♡ずぶぶぶうゝ——っ♡♡♡ズンっ♡♡

「おゝっ♡♡♡おゝほ——っ♡♡♡んゝほおゝゝゝゝゝっ♡♡」

下品な嬌声を上げて快感に溺れるモルガンだが、日頃から尻穴も調教されているせいで簡単にマスターの極太の長魔羅も受け入れてしまう。二本のペニスによつて二穴を串刺しにされるが、痛みは全く無いため快感しか感じられない。

そのまま足を伸ばしても床に足のつかない状態で、ゴリゴリと膣穴の襞と尻穴の腸壁を掘削されながら犯され続ける。

「おひいゝ——っつツゝ♡♡♡♡おゝまんことおひりのおゝひんぽがあゝっ♡♡♡んゝひいゝっ♡♡ナカでいつぱいゴリゴリこすれるうゝっ♡♡♡♡いぎゆうゝゝゝゝつツゝ♡♡♡」

脳みそまで溶けてしまったかのような嬌声を上げ、モルガンは二穴を同時に犯される快感を身体にも心にも刻み付けられていく。内臓を圧迫されて苦しく呼吸も碌に出来ない程になるしい筈なのに、それで膣穴や尻穴が閉まってより強い快感が生み出される。

脳が快感物質を過剰に分泌していき、それにブクブクと溺れてしま



ガロン単位の射精を同時に大量に吐き出され、子宮と腸内がドロドロの濃い白濁液で満たされていった。本来ならばある子宮の逃げ場も尻孔に深々と魔羅を挿入されているために奪われ、完全に逃げ場なくなった子宮は許しを乞うように排卵してしまう。

——ぷりゅっ♡♡♡ ぶちゅちゅちゅんっ♡♡♡♡

「んゝぎゝゆうゝうゝウゝうゝうゝウゝうゝウゝうゝウゝうゝ  
——つつっゝ?!♡♡♡♡♡♡」

排卵した卵子は直ぐに精液溜まりへと溺れてしまい、今の自分と同じ状況のように輪姦されて陵辱される。完全に孕んだ彼女は意識を飛ばしてしまうが、まだまだ犯し足りない雄は多数存在していた。

——ずりゝゆりゆりゝゆりゝゆうゝ…ぶぽっ♡♡♡

怒張したままの精液と愛液塗れのペニスが引き抜かれるが、膣穴も尻穴も拵がったまま戻らなくなっていた。放屁にも似た下品で卑猥な音と共に固形に近い精液を吐き出そうとするが、その二つの孔は直ぐに魔羅で塞がれて満たされることとなってしまう。

——ずぶぶぶぶぶうゝっ♡♡♡ ズチゝユっゝ♡♡ ずりゝゆりゆりゝゆうゝっ♡♡♡♡

「んゝほおゝおおゝおおおゝおゝおおゝおゝおおゝおゝお——  
——つつっゝ?!♡♡♡♡」

「まだまだ俺は沢山いるから、好きなだけイかせて上げる」

その後もモルガンは二穴挿入やフェラで何度も絶頂させられ、快感を全身に刻み付けられることとなる。何度も排卵を行なって卵を差し出して許しを乞うが、その度に新しいマスターのペニスが膣孔や尻



穴へと挿入されてしまう。

——日付が変わっても彼女の部屋から、人が出てくることは無かった。

——コンコン

「お母様っ！ 修練場に最適なヤツを見つけたわっ」

昨日から見掛けていないお母様を探すバーヴァン・シーは、修練場の挑戦者に最適な“汎人類史の女性騎士”を見つけたことを伝えるために部屋へと来ていた。褒めて貰えれば嬉しいなという気持ちで一杯な彼女は、部屋の前で暫く待っていると無言のまま扉が開かれる。

「お母様ーっ？ ふえっ!? あっ、っ、ああ……っ♡♡♡ うそ……っ♡♡♡」

部屋へと入ったバーヴァン・シーが目撃したのは、全身を白濁としたザーメン塗れにしてお腹を妊婦のように膨らませた全裸のモルガンと魔羅を怒張させた沢山のマスター達の姿であった。

信じられない姿に絶句するバーヴァン・シーに対して、膨らんだお腹の淫紋を光らせながらモルガンは謝罪する。

「バーヴァン・シー……っ♡♡♡♡ イッ、クっ♡♡ わっ、わたしは

夫をむだんで分身させへっ♡♡♡ いっぱい増やしたせきにんでえっ♡♡ んっひいっ♡♡ おっ、おまんことおひりをいっぱい使っていたきまひたあっ♡♡ あっ、あなたの弟と妹をいっぱい孕みましたあ……っ♡♡ ふっ、ふじゅんなおかあさんでごめんなひやいっ♡♡♡♡♡」  
「~~~~~っっっ♡♡♡♡♡」

お母様の痴態と部屋に籠る淫臭によつて秘所を濡らすバーヴァン・シーに対して、マスターの一人が彼女の細腰に腕を回しながら囁く。

「モルガンの話聞いたでしょ。俺達が満足するまでお仕置きしてるんだけど、このままだと終わらなそうなんだ。バーヴァン・シーはお母さんの“お手伝い”する？」

「——っっっ♡♡♡♡♡ こっ、このっ♡♡♡ ヘンタイ野郎っ！  
♡♡♡」

咄嗟に彼のことを罵倒するバーヴァン・シーだが、彼女にモルガンを見捨てる事が出来る筈も無く、仲良くマスターに“親子丼”で食べられてしまう。その後、妖精騎士達や花の魔術師がモルガンの部屋の中に消えていき、全員が彼の赤ちゃんを何匹も孕ませられていったのだ。

——この日を境にカルデア内では、マスターの分身魔術は多用されることとなった

pixiv有料リクエスト：貸し切り閻魔亭での愛に塗れた“慰安”

——チュンチュン

障子と障子の間に開いた僅かな隙間から陽光が差し込み、鳥の囀りが心地の良い朝の訪れを歌い上げていた。雲一つ存在しない澄んだ青空は晴れやかであり、眩い太陽の光が周囲の青々と茂る森や近くを流れる川や滝を照らす。

日常生活ではお目に掛かる事が出来ない雄大な自然が感じられる絶景は、今日が幸せな一日になることを漠然とだが予感させるだろう。

言葉では表現し切れない程に自然豊かな場所には、朱色で統一された外観が美しい和風の建築物が存在する。映画の中から飛び出してきたような旅館であり、その中では白い足袋を履き朱色の色鮮やかな着物を纏った中居さんが、木製の長い通路の上をなるべく音を立てないように移動していた。

動き易さのために赤い着物の袖は短めであり、白魚を思わせる細腕が露出している。着物特有の締め付けの上からでも大きいと分かる胸元の直ぐ下から太ももの中程までを覆っているのは、稲穂の白い刺繍が施された薄緑色のショートエプロンであった。

赤と緑と一見すると派手目な色合いに思えるが、旅館の雰囲気も損なっていたりする事は無く、古風な内装に華やかさを加える色彩豊かな花々のようである。

片目を覆い隠し癖の無い桃色のショート髪を後頭部で一つに纏めており、普段は大人びてミステリアスに感じる見た目に活発さが加わっていた。知的な印象を与える眼鏡の奥には、慈愛に満ちた紫色の瞳が優しく輝いている。

不意にドキッとさせられる艶やかな唇を動かし、中居さんの衣装を身に纏った少女は独り言を口にした。

「——先輩……っ♡♡ 待っていて下さいねっ♡♡♡」

着物上からでも発育の良さが伺える少女——“マシユ・キリエライト”は、尊敬する先輩であり愛する旦那様でもある“マスター”の元へと向かっていた。

この御宿のお客様は現在彼だけの“貸し切り”状態であり、彼女はマスター専属中居として全般的なご奉仕を任されている。

小さな足音は旦那様の宿泊する部屋の前で止まり、マシユは目を瞑って軽く深呼吸をした。無意識に牝が媚びる時の甘ったるい声を出しながら、襖の奥で眠りに就いているであろうマスターに声を掛ける。

「すうーっ、はあ……っ♡♡♡ 先輩っ♡♡ 朝の時間ですよっ♡」

彼女は朝の“ご奉仕”に期待しながら寝室の襖をゆつくりと開けたが、其処には昨夜から慰安の“お勤め”を果たしていた先約がいたらしい。

——ムワアっ♡♡♡

「——っ♡♡ ふあッ♡ すっ、凄いいですうっ♡♡♡  
すうーっ♡♡」

ネットリと肌に絡み付く湿度を含んだ熱気と共に、熟成されて饅えた男女の淫臭が室内全体に籠っていた。

雄と雌の濃厚なフェロモンが詰まった汗や唾液、精液や潮、尿などの淫らな体液が部屋全体を汚しており、十人以上の乱交パーティー後のような惨状となっている。

そして、肝心の布団の上には——





ぶぶつ♡♡ びゅるるるるるつ♡ びゅる………びゅ

「~~~~~つつつつつつつつつつつつ♡♡♡♡♡ あ——つ♡♡ い♡つ♡♡♡♡♡ い♡ひ♡つ♡♡ い♡ひ♡い♡い♡い♡い♡つ♡♡ ……お♡つ♡♡ お♡つ♡♡ お♡あ♡つ♡♡ あ♡阿♡あ♡あ♡ ああ♡ ああ♡ あア♡ ああ♡ ああ♡ 亜♡ あア♡ ——— つつツ♡♡♡♡♡♡♡♡」

部屋だけで無く旅館全体に響き渡る獣の咆哮の如き絶叫、口端から蜜のような涎が垂れることを気にする余裕すら無く白目を剥いていた。

チカチカと点滅を繰り返す淫紋が、彼女の絶頂を伝えているが明らかに処理が追いついていない。

お腹の奥の胎ではゴボゴボと聞いたことも無いような音が鳴っており、酒呑童子の子宮は限界まで水を詰めた風船よりも酷いことになっているだろう。

「あ♡つ♡♡♡ あ♡ひ♡つ♡♡ ……あ♡つ♡♡♡ ああ♡——♡♡♡♡」

分単位という常識の範疇を超えた長い吐精が終わった頃には、彼女は言葉も喋れない低級な鬼以下の存在となり果てていた。

芋虫のように暴れていたのが嘘のようにクタツと脱力してしまい、酒呑童子は全身の弛緩と共に弛んだ尿道口からは、黄金色の小水を弱々しい勢いでお漏らししている。

——じよろ………つ♡♡ じよろろろろ………じよろ♡♡

日本三大妖怪とは思えぬ無様な痴態であり、布団の上に来た水溜りが幾つも出来上がっていた。

そして、酒呑童子の断末魔とも呼べる嬌声を目覚まし時計代わりに、漸くマスターは寝ぼけていた状態から抜け出し、気持ちの良い目





待てから解放された人懐っこい仔犬のように、向日葵のような笑顔を浮かべるマシユはマスターの元へと向かう。

### ——閻魔亭

閻魔大王が統治している地獄という広大な領域、その中の番外地と呼ばれる僻地に閻魔亭は存在していた。彷徨う御霊や八百万の神々に安らぎを与える温泉旅館であり、数多く存在している迷ひ家のお家元でもある。

閻魔亭という如何にも仰々しい名前とは別に“雀の御宿”という愛称もあるが、それは舌切り雀の“紅閻魔”と可愛らしい雀の従業員達が旅館で働いている事が由来であった。

地獄に存在するのに天国にいるかのような癒しを与えてくれる閻魔亭は、カルデアと一つの事件を通して深い縁で結ばれている。

その縁とは——

閻魔亭は“竹取の翁”の名を騙る悪しき存在に“宝”を壊したと冤罪を掛けられ、数百年の長き渡って暴利とも思える程の理不尽な債務に負われていた。多額の返済以外にも魔猿の悪戯などの不幸が重なって、経営破綻寸前まで追い込まれていたのだが——

年末の慰安旅行としてレイシフトして来たマスター達が宿の“従業員”となって働きながら、犯人を追い詰める為の材料探しや老朽化した建物の修繕に尽力したのである。

最終的には悪の根源から断つ事に成功し、閻魔亭は趣のある素敵な

温泉旅館を取り戻すことが出来たのだ。

このような経緯から閻魔亭はカルデアに、返したくても返し切れな  
い大恩があった。それだけでも十分だが女将の紅閻魔がマスターと  
“恋仲”である事も加わり、彼を性的な意味で“慰安”する為の舞台  
に選ばれたのである。

——貸し切りとなった癒しの温泉旅館は、マスターを慰安する娼館  
よりも淫靡なドスケベ宿へと変わっていた。

「——それでは先輩のぶつとくて長いオチンポ様っ♡♡♡ 私のお口  
で綺麗になるまでお掃除させて頂きますっ♡♡」

完全に気絶し布団の上で伸び切っている酒吞童子の傍、胡座を搔く  
マスターの前で綺麗な正座を披露するマシユは、礼儀正しく三つ指を  
つきながら淫液塗れの魔羅をお掃除する宣言をした。

額が畳に突きそうな深いお辞儀と後頭部で一つに纏めた髪型が加  
わって、彼女の艶かしく色気を感じる白いうなじが露となっている。  
更に奥に視線を向ければ着物の上からでも存在感を主張する安産型  
の大きな桃尻があり、一晚中射精を繰り返していた筈の魔羅がビクビ  
クと興奮に震えていた。

明らからに興奮しているマシユはゆつくりと顔を上げながら、淫水  
焼けして黒光りしている長く太い凶悪なペニスにずりずりと近付く。  
そして、鼻先が陰茎に触れるような至近距離になったら、深呼吸で  
もするかのように臭いを吸い込む。



「ちゅっ♡ちゅう♡♡ちゅふう……っ♡」

まるで恋人との甘い口付けを交わすように、何度も亀頭に向かって口付けを落としていた。これは『いっぱい舐めて綺麗にさせて頂きますっ♡♡』と、言葉では無くご奉仕によって伝えているのだ。

ふるふるとした瑞々しい唇を淫液塗れにしながら、室内に艶かしいリップ音を何度も響かせる。亀頭全体に唇を押し付けたマシユは、チロリ舌先を伸ばして口元に付着した淫液を舐め取った。

「れろ……っ♡♡ちゅるっ♡ん♡う♡くくくっ♡♡♡♡」

彼女の舌の上に広がるのは濃縮されたかき氷のシロップよりも濃く、生クリームよりも何倍も何十倍も濃厚な雄と雌の味であった。ビリビリと舌を刺激される錯覚さえ覚えるが、それ以上に舌の上から口内全体に濃厚なスメルが広がっている。

タツプリと淫液の味を堪能したマシユは、白い喉を鳴らして呑み込んだ。そして、口を開いて艶かしいピンク色の舌を伸ばし、亀頭全体を本当にお掃除するように丁寧に舐め回す。

「れろお♡ーっ♡♡♡ちゅぷっ♡♡レろろお♡っ♡♡じゅるるう♡♡ん♡ちゅう♡——っ♡♡——ちゅる♡うっ♡♡♡♡」

伸ばした舌先で淫液を子削ぎ落とすように口の中へと含み、また違う場所に向かって舌を伸ばして這わせるスケベな往復運動。亀頭全体の淫液を綺麗にする頃には、マシユの唾液塗れになっていた。

「はあ♡っ♡♡♡ふう♡ーっ♡♡♡せっ、先輩のオチンポ美味しいですっ♡♡ん♡う♡——っ♡♡♡♡まだまだいっぱい綺麗にする所がありますねっ♡♡」



り、龟头先端に割れ目をぐりぐりと穿るように動いたり裏筋をチロチロと舐め回していた。

愛する先輩に一から念入りに“仕込まれた”下品でイヤらしいフェラチオは、腰が思わず浮き上がってしまいそうになる程の悦楽である。マスターも彼女の後頭部に両手を置きながら、少しずつ高まっていく射精感を口にした。

「くう……っ、そんなに激しくされたら射精しちゃうよ？」

「~~~~~っつっつっ?!♡♡♡♡♡ ぢゅっぽっ♡♡ じゅるるっ♡ ぢゅぷう”……っ♡♡♡♡♡ じゅっぽお”っ♡♡♡”

射精という言葉聞いてマシユのフェラチオは更に激しくなり、ペニスの根本部分も両手で握って上下に擦る手淫も加わる。この時点で彼女の頭の中に“お掃除”という単語は消えて無くなり、お射精を強請るだけの搾精ご奉仕へと変わってしまう。

♡ ———ぬ” っちゅっ”♡♡♡ ぐちゅっ”♡ ぬっち” ゆう”っ♡♡♡

「ぢゅっぷう”っ♡♡♡♡♡ ぐっぽっ”♡♡ じゅぽっ♡ ぐっぽお”っっ”♡♡♡♡♡”

口内粘膜と舌を使った口淫に唾液の潤滑液を用いた手コキも加わって、加速度的に射精感が昂まり募っていく。巨大な睾丸の中でグツグツと精液が煮え滾りながら、大量射精を行うために精を生産し続ける。

口内にドクドクと精の混ざった先走り汁が溢れていき、ちゅうちゅうと吸おうとする彼女の内頬は凹んでこれまで以上に下品なフェラ顔となった。それに媚びるような上目遣いも加わり、マスターはマシユの頭を押さえ付けながら精を解き放つ。



愛する人の前でゲップをしてしまう羞恥と膨らんだお腹の奥から放たれる濃厚な雄の臭気が押し寄せ、マシユに出来るせめても抵抗はおくびを小出しに漏らすことだけである。

恥ずかしそうにする彼女の頭を撫でながら、マスターはお礼の言葉を口にした。

「マシユ、ありがとう。チンポも綺麗になったし、気持ち良い射精も出来たよ」

「~~~~~つつっ♡♡♡♡ご満足していただけたなら嬉しいでしゅっ♡♡——げぷっ♡♡♡」

小柄な体躯の鬼娘の小さな蜜壺で精を吐き出しながら起き、豊満な肉付きをした美少女の口内でペニスをネットリと掃除されながら射精をした彼は、世の男性陣が血涙を流す程の朝を満喫していた。

自分の魔羅以外の身体が汗や淫液塗れだと気付いたマスターは、中居さんとして働いているマシユにお風呂に入りたいことを伝える。

「お風呂に入ってさっぱりしたいんだけど、マシユ温泉まで案内して貰っても良い？」

「はい、お任せ下さいっ♡♡」

——潰れたままの酒呑童子を残して、二人は温泉へと移動を始めた。

湿気を含んだ熱気が素肌に纏わり付き、噎せ返る程に濃密な淫臭が



充滿している客室をマスター達は後にした。

後にはドロドロに汚れた布団の上で潰れた蛙のような体勢のまま気絶している酒呑童子だけが、熟成されて饅えた淫臭が立ち籠める部屋の中に取り残される。

温泉へと向かう道中――

仲睦まじい夫婦や恋人のように、二人は肩を並べて歩いていた。

肩同士が触れ合う至近距離を保っていたが、着物越しにも存在感を主張するマシユのムツチリとした桃尻に、マスターの視線が吸い寄せられてしまう。

『もう少しで温泉ですよっ♡♡ ひゃあッ?!♡♡』

満員電車で行われる痴漢行為のように彼の右手が伸ばされ、彼女の臀部は円を描くようにねちっこく撫で回される。

『あっ♡♡ 先輩駄目ですう……っ♡ んっうっっ?!♡♡♡  
ふう……っ♡♡ んっふう……っ♡♡♡♡♡』

頬を朱に染めながら下唇をキュッと噛んで嬌声を我慢するマシユのいじらしい姿が、血液が沸騰するような興奮ともっとイジメたいという加虐心を煽った。

安産型のヒップラインを描く重量感のある尻臀を『ギュウっ♡♡』と、男性的な大きな手で鷲掴みにしながら揉みしだくというセクハラ行為に勤しむ。

『あっ♡♡♡ せつ、先輩いっ♡♡♡ 駄目ですうっ♡♡♡  
――あっ♡♡♡♡♡』

客室から温泉の入り口というそこまで長くない距離の間、されるが

ままの彼女は膝をガクガクと震わせながら、何度も足を止めてお尻と腰を揺らしてしまふ。発情した牝の蕩け切った表情を人通りのある廊下で晒し、押し殺し切れなかった甘ったるい嬌声を度々漏らしながらも、何とか温泉の入り口まで辿り着く事が出来たのである。

この時のマシユの太ももの内側を確認出来れば、糸を引くような粘っこい愛蜜塗れで酷い事になっていただろう。

本当はそのまま一緒に温泉に浸かりながら、先輩の背中を自分の身体を用いてお流ししたいと思っていたが、酒呑童子とのまぐわいで使物になら無くなった部屋の代わりを用意するお仕事が残っていた。強く後ろ髪を引かれながらも、彼女は泣く泣く業務へと戻ったのである。

それに――

『温泉には他の“担当の方”がいらっしゃいますから、お邪魔しちゃうんですよねっ♡♡♡』

「――先輩遅いですね……っ♡♡ 大丈夫でしょうか？♡」

新しい客室の準備を終えて休憩を挟んだマシユだったが、結構な時間が経過しているのに、まだ温泉から戻っていないマスターの事を心配していた。

彼女は様子を見に行くために、再び温泉の入り口まで向かっている。

歩を進める度にマシユのお腹の中に溜まっている精液がチャップチャップと波打っており、強く揉みしだかれたお尻にはジンジンと火傷

した後のような快感が残り続けていた。彼女は真っ白な頬を熟した林檎のように染めながら、お臍の奥から溢れる熱により火照りを感じてしまう。

「もし逆上させていたら、大変ですからね……っ♡♡♡」

自分も温泉で愛して貰えるかもという下心もあり、マシユは普段よりも気持ち早足で歩き、もう少して温泉マークの暖簾が見える場所まで来る。

最後の角を曲がると——そこにはマスター“達”の姿があった。

「あつ、先輩ですっ♡♡」

「マシユ、さつきは案内してくれてありがとう。長湯しちやっただけど、温泉凄く気持ち良かったよ」

「それは良かったです♡♡♡ そつ、その……っ♡ 両脇にいるお二人は……だつ、大丈夫ですか？♡♡」

マシユのアメジストや紫水晶を彷彿とさせる紫色の瞳には、平安時代最強の神秘殺し“源頼光”と『源氏物語』の著者で知られる女流作家“紫式部”の二人が、マスターに細く括れたウエスト部分を抱かれている光景が映し出されていた。

「正しく両手に花を体現するような光景であり、頼光達は“何故か”足元が覚束無い様子のため、彼が支えていなければまともに立ってられないようだ。」

「頼光さんと薰子さんは、逆上せちやっただみたいなんだよ……ねえ？」

「はっ、はい……っ♡♡ そうですう”っ♡♡♡」

「逆上させてしまいましたあ”っ♡♡♡」

明らかに逆上させたのとは違う理由で腰が砕けており、二人の色気を感じる首筋や鎖骨には、蚊に刺されたような“吸い痕”が残されている。

た。温泉とは異なる理由で頬を上気させ、艶やかで長い黒髪をしつとりと濡らしている。

成熟した大人の色気に薫子達は溢れており、精通前の男子ですら見るだけで強制的に“男”へと変えてしまうだろう。

温泉旅館の定番である浴衣に身を包んでいるが、小玉スイカのように大きな乳房の谷間が大胆に露出し、眩しい太ももが根元近くまで見えており、もう少しで色々とポロリしてしまいそうな程に肌蹴っていた。

何よりも頼光達は“メス臭い”と表現して良い程に、全身から濃厚なフェロモンの混じった香りを漂わせている。

(今日の担当は頼光さんと薫子さんだったみたいです…つ♡♡♡  
腰が砕けちゃう位、激しかったみたいで羨ましいですつ♡♡)

年下の青年に良いように肢体を弄ばれ、好きなように種付け交尾された二人にマシユは羨望の視線を向けてしまう。それに気付いた頼光達は、羞恥プレイのように感じたのか視線を落として全身をビクビクと震わせていた。

その事を察したマスターは彼女達の腰を掴んでいた手を移動させながら、普段の生活で行われる日常会話のようにマシユと言葉を交わしていく。

「少し休ませてあげないと辛そうだから、俺の部屋まで案内して貰っても良いかな?」

「はっ、はいっ♡♡ 前のお部屋は使えなくなつたので、新しいお部屋を「んっひいっゝゝゝゝっつッ?!♡♡♡♡」っつ、ご用意しています…っ♡♡♡♡」

マシユの言葉は二匹のメスの嬌声によって掻き消され、言葉尻も蚊の鳴くようなものとなってしまう。その原因は火を見るよりも明白であり、彼の右手が薫子の豊満なお尻をむんずと鷲掴み、左手が頼光



起こされましたあっ♡♡♡♡ その後も尻穴で——』

読んでいるだけで息が荒くなってしまいう情事の記録、気付けばマシユの足元にも愛液による小さな液溜まりが出来上がっていた。薫子と頼光の足元は潮を何度も噴いたことよって、大きな水溜りが出来上がっている。

浴衣は全身に浮かんだ汗をたっぷりと吸って肌に張り付き、艶かしい肌の色がぼんやりと浮かび上がっていた。

「もう二人とも立ってられなさうだから、マシユ案内して貰っても大丈夫？」

「——つつっ♡♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡♡」

マスターの言葉で正気に戻った彼女は案内を開始し、ゆっくりと廊下を歩いていく。二匹のメスはほぼ引き摺られるような覚束無い足取りであり、自分達が“休憩”など出来ないと理解していながら肉食獣の“巢”に連れて行かれる。

——マシユを含めて三つの淫液の筋を廊下に残してしまい、温泉から客室までの道案内が出来上がってしまう。

「本当にマシユは“休憩”しないの？」

「はっ、はいっ♡♡ まだお仕事が残っているのっ♡♡♡♡ そっ、それに夜は私の担当なのでっ！♡♡ その時にたっぷり可愛がってほしいです……っ♡♡♡♡」

マスターとマシユは新しい客室の前で会話を交わしており、部屋の奥にはまな板の上の鮮魚のように、布団の上に載せられた頼光と薫子がいる。

本当なら彼女も頼光達に混ざりたかったが、“また”使い物にならなくなってしまう客室の準備とたつぷりと精の付くご飯の準備が残っていた。

そして、“夜伽”のお仕事はマシユが任されているため、引き続き二人に彼の相手を譲る事にしたのである。

「うん、昨日の酒吞よりいっぱい可愛がつて上げる」

「~~~~~つつっ♡♡♡ おっ、お仕事頑張りましゅっ♡

♡ それでは失礼します……っ♡♡♡」

「行ってらっしゃい。頑張つてね」

言葉だけで腰が抜けてしまいそうになるが、マシユは夜伽への期待を膨らませながら部屋の前を後にした。数秒後、閉め切られた扉の奥から獣のような牝達の嬌声が響き渡り、同時に柔らかな肉を打ち付ける淫音が断続的に廊下に木霊する。

数時間後になるお夕飯の準備の音が掛かるまで、二匹のメス達は種付けをされ続けるのだった。

——そして、夜が訪れる

——トントントン

客室の居間から寝室を隔てる襖を叩く控えめな音が、木枠と和紙を用いた間接照明が優しく照らす寝室に木霊する。部屋の真ん中に敷かれた布団の上で胡座を搔いているマスターの返事の後、襖の奥から緊張により僅かに声を震わせるマシユの声が響いた。

「はい」

「わっ、私ですっ♡♡ マシユですっ♡ お約束通りに夜伽に参りましたっ♡♡♡」

「楽しみに待ってたよ。入って」

『はいっ♡♡ 失礼しますっ♡♡♡』と、彼女はゆつくりと襖を開けていく。

徐々に露となっていくマシユの服装は娼婦でさえ恥じらい、中居さんの着物よりも遥かに露出度が高いものとなっていた。肋骨までしかない丈が無い着物と呼ぶことも憚られる短い丈、白く薄い生地のでいで乳輪や乳首の形やピンク色が浮かんでおり、豊満な乳房の直ぐ下を黒く細い帯で留めている。

谷間や腋、華奢な肩が露となっているため、裸でいるよりも恥ずかしい上着であった。

上半身も際どかったが下半身は更に過激なものとなっており、鼠蹊部のよりも明らかに肌の狭い布面積しか無いただの布切れである。サイドの部分はねじられており、後ろは大きな尻臀の柔肉を隠す意思が感じられない紐であった。

西洋のセクシーランジェリーにも負けない夜伽専用のドスケベ衣装、雄の性欲を刺激する目的しか果たすことしか考えていない。

正座をしているマシユは三つ指を突き、額が畳に着いてしまうのでは無いかと思う深いお辞儀をしながら夜伽の挨拶を始める。

「今宵の夜伽を担当させて頂く、マシユ・キリエライトですっ♡♡ 先輩……っ♡ おっ、お客様の猛ったおちんぽ様のお世話を誠心誠意、



お客様の気が済むまでお勤めさせて頂く所存ですっ♡♡ 本日はどうかよろしくお願い致しますっ♡♡♡♡♡

「——っ。うん、凄く楽しみにしてたよ。よろしくね」

「はいっ♡♡ 頑張りますっ♡ わっ!?!♡♡ ああ、……っ♡♡♡♡♡ すっ、すごいですう……っ♡♡♡♡♡」

頭をゆつくりと上げた彼女が目にしたのは、牡蠣やニンニク、うなぎや胡桃などの精が付く食材が大量に使われた晩御飯を口にした結果——今日一番の怒張を見せている黒々しい肉槍があった。股倉から鍛え上げられた男性の太腕のような魔羅が天井に向かって聳り立ち、余りにも禍々しく巨大なソレにマシユの視線は釘付けとなってしまう。

朝から妖艶な鬼娘や平安美女達の淫液を吸い、無数の膺襞に磨き抜かれた魔羅は、興奮に溺れていた牝を萎縮させ『キュンっ♡♡ キュンッ♡♡♡♡』と、お臍の奥にある小さな子宮を疼かせ排卵を促す。

「ああ、……っ♡♡♡♡ 本当に凄いですう、っ♡♡♡」

目にハートマークが浮かんでいるのかと幻視する程、マシユはうつとりとした視線を向けている。彼女は先程の挨拶程度ではこのオチンポ様に相応しくないかと気が付き、もっとスケベな挨拶をしなければいけないと考えさせた。

お腹を空かせた虎の穴と変わらない寝室へと入ったマシユは、脚を大きく大胆に開いた“蹲踞”を披露しながら、『カクっ♡♡ カクっ♡♡』と、腰を前後に振って強い雄への媚びが増し増しな挨拶をする。

「申し訳ありませんっ♡♡ 先程の挨拶はっ♡ お客様のオチンポ様に相応しく無かったですう……っ♡♡♡♡ やり直させて下さいっ♡♡」

彼女は自らの指先で禪を傍にズラして、ムワあっ♡♡と湯気の立つ

秘所を晒した。

右手で下方向に向かってピースを作るようにふつくらとしたマン肉を左右に広げ、艶かしいサーモンピンク色の肉ビラを晒しながら、ブツクリと膨らんだ肉豆や狭っこい膣口から粘っこい蜜を溢れさせる。

殆ど意味を無していなかった乳房を覆っていた布を押し退け、汗ばみテカる豊満な乳房を晒した。そして、何かを扱きながら啜えるようなエアフェラチオ手コキをしながら、先程よりもドスケベな挨拶を披露してしまう。

「お客様の太くて逞しいおちんぽ様っ♡♡ 私のトロトロおまんことお口でござ奉仕させて頂きますっ♡♡♡ お客様に育てて貰った♡ 大きいおっぱいもお尻もお客様をお慰めする為にだけありますっ♡♡♡ すっ、好きなだけ揉み潰してっ♡ 叩いてイジメて下さいっ♡♡ お客様の赤ちゃん産むためにある子宮にいっ♡♡♡ 濃ゆーい子種汁好きだけ注いで下さいっ♡♡ ザーメン扱き捨てる精液タンクに使って欲しいですっ♡♡♡♡♡」

普段の夢げで可憐な美少女からは想像も出来ない、誰もが赤面し淫乱な痴女が恥じらいを持つ程の淫靡な挨拶であった。マシユのすけべな挨拶はマスターに対しても効果覷面だったようであり、既に怒張し切っていた筈の魔羅が一回り大きくなったと錯覚する程に張り詰め、その長さ故にブルンブルンと撓っている。

本能に従い直ぐに押し倒してしまいたかったが、濃厚で熟成されたかのような牝臭により一つ気付いたことがあったようだ。

「ねえ、マシユはお仕事の間に何回かオナニーしてたよね？ こんなにエロい匂い我慢してただけじゃ出ないでしょ」

「~~~~~っっっ♡♡♡ はっ、はい……っ♡♡ お仕事の最中におまんこ指でズボズボ穿って♡♡♡ お客様のオチンポ想像しながらオナニーしましたっ♡♡ 酒呑童子さんと頼光さんっ♡

紫式部さんを自分に置き換えてっ♡♡♡ いっぱい犯して貰えるの考えてましたあっ♡♡♡♡

言い当てられて完全にたがが外れてしまったマシユは、中居さんとしてのお仕事の最中も自慰行為に耽つていた事を認めてしまう。腰を前後に振る動きや膣口から溢れる淫液の量も増え、エア手コキをする手の動きも激しくなる。

「本当にマシユはスケベになっちゃったよね。今夜は絶対に寝かせて上げないから」

「——っツ♡♡♡ スケベですっ♡♡ 先輩とオチンポが大好きなスケベ女でしゅう♡♡♡♡」

「ほらっ、布団の上で好きな体勢になって良いよ。そのまま挿れて上げるから」

マスターの言葉に『はいっ♡♡♡』と返事をする従順で淫乱なマシユは、一番大好きな体位である正常位で犯される体勢になった。布団の上で屈服した犬のように大きく股を開きながらお腹を晒して、無抵抗を示すように両手を自分の耳の高さに置く。

仰向けになっても綺麗な形を保っている美巨乳が、彼女の荒い呼吸に合わせてふるふると震えている。

「いっぱい犯して下さいっ♡♡♡」

「うん、嫌って言うても止めて上げないから」

マシユの華奢なのにムチムチとしている我儘ボディに覆い被さったマスターは、濡れそぼって前戯の必要すら無いトロトロの膣孔の入り口に魔羅の先端を押し付けた。そのままゆっくりと腰を押し込み、自分専用が開発されている膣穴に剛直を挿入していく。

——ぐちゅっ♡♡ ずりっゅっ♡ ずりっゅりっゅっ♡♡♡

「あゝっ?!♡♡ きたっ♡ お客様のガチガチおちんぽ様あゝっ♡♡  
♡♡ おゝひっ♡♡ ひっ♡♡ ひい♡ —っッ?!♡♡♡♡」

握り拳の如き亀頭が挿入された段階なのに、マシユの尿道口から『ぶしゅっ♡♡ ぶしゅっ♡♡♡』と、メスのフェロモンを多分に含んだ潮を噴き出す。何度挿入されても慣れない膣孔を押し拡げられる感覚と電気の流れるような快感に、脳の許容量が既に怪しい状態となってしまう。

しかし、まだまだ長くて太い陰茎が少なく見積もっても三十センチ以上残っており、奥を目指してゆっくりとだが確実に突き込まれていく。

——ぢゅりゝゝ ゆりゝゝ ゆりゆりゝゝ ゆうゝっ♡♡ じゅりゝゝ ゆうゝっ♡♡

「おゝっ♡♡ おゝまんこギチギチひろがりゝゝ ゆっ♡♡♡ おなにーのゆびよりいゝっ♡♡♡ じゅう倍ふとゝゝ いれすゝうゝっ♡♡ んゝぎゅっ♡ ぬびより奥まれくゝりゝゝ ゆっ♡♡ あたまバカになっちやいゝましゆうゝ——っッッ♡♡♡♡♡」

太くて長い上に形も凶悪な魔羅は、牝を屈服させて孕ませることに特化していた。

自分の細く短い指先と比べることが烏澁がましいレベルの規格外さによって、彼女の細く引き締まったお腹にはペニスの形が浮かび上がっている。特に巨大な亀頭の位置は分かりやすくまだ半分も挿入していないのに、子宮の存在するお臍の辺りにまで届いてしまう。

「もう直ぐ子宮に届くよ? 今日焦らしちゃった分、いっぱいチンポで虐めてたっぷり注いで上げるからね」

「ひっ♡♡ ひいっ♡♡ ひいゝゝゝゝゝっッ♡♡♡♡♡」

——すゝりゝゆるうゝ……っ♡♡ ズンっ！♡♡♡ ぢゅりゝゆりゝゆりゆりゝゆうゝつつっ♡♡♡♡

「くりゝゆっ♡♡ おくまれえゝ……っっ♡ んゝきゝゆうゝゝゝゝゝゝっっっ?!♡♡♡♡♡ あゝっ♡♡ イクっ♡♡ イゝ  
きますうゝっ♡♡♡ イクゝイクゝイクゝうゝ——っ♡♡♡♡♡  
イゝっクゝうゝううゝううゝううゝううゝ——っっっ  
♡♡♡♡♡ —イゝひゝっ♡♡」

朝から晩まで焦らされ続けた子宮を亀頭で刺激され、押し潰されながら奥まで移動させられる快感は凄まじく、廊下全体に響き渡ってしまふような絶頂報告が口から漏れていた。

熱く熱された棍棒のような亀頭が、か弱い仔袋を攻撃するのだ。勝ち目など存在する筈も無く、脳の奥をじゆうっ♡♡と焼き焦がすような絶頂に耐えるしかない。

根元までペニスが挿入された時には、彼女のお尻の下に敷かれた布団は淫液でぐっしよりと濡れていた。

「ひゝゝっ♡♡♡ ふうゝーっ♡♡ おゝっ♡ ひゝゝーっっ  
ゝ♡♡♡♡」

呼吸をするのもやつとな状態のマシユだが、彼女は自分がハメ乞いをしたように容赦無く犯されることとなる。

マスターはマシユの細い手首を拘束でもするかのように掴んで布団に押し付け、ペニスを挿入したまま下半身を持ち上げて激しく力強いピストンが行える体勢を取った。既に瞳の焦点が定まっていな彼女の真つ赤な耳元に唇を寄せ、死刑宣言を囁きながら絶対に牝を孕ませるといふ強い意志を感じる杭打ちピストンを開始する。

「好きなだけイって良いからね。嫌って言ってもいっぱい排卵させ

て、お腹重たくて動けない位孕ませるからっ！」

——バツチユンっ!!!♡♡♡♡

「ふぎゅう——っツっ?!♡♡♡♡♡ あっ♡ あっ♡ ああ♡  
…っ♡ ああ♡ アあ亜あ♡ アあ♡ ああ♡ あアあ♡ ああ亜あ♡ あ  
アあ♡ ああ——っつツっ!!♡♡♡♡♡♡♡♡」

ネットリと甘えるように絡み付いていた膣襞を雁首で一気に掘削され、その直後に腰の骨が砕けてしまうのでは無いかと思う程の勢いで腰を叩きつけられた。正しく亀頭によって殴打されたマゾ子宮は、悲鳴を上げるように快感を生み出すだけの器官になってしまふ。

懲りずに魔羅に絡み付く膣襞や締まる膣孔は、主人であるマシユの状況など考えずに雄へと媚びる。その結果——

「チンポ大好きすぎだろこのおまんこっ。締めろっつて命令しなくても締まるエロ孔っ！ 他の雄に媚びたりしないように躡けてやるっ!!」

——ドチュンっ!♡♡♡♡♡♡ ぢゅりゅうっ——パンっ!!!♡♡♡♡  
ドつちゅんっつっツっ!!!♡♡♡♡♡♡♡♡

「いぎゅつ♡♡♡♡♡♡ ふぎゅつっ?!♡♡♡♡んっつきゅう  
うううううううううううう——っつツっ!!!♡♡♡♡♡♡  
♡♡」

デミサーヴァント化していなければ心も身体も壊れていた杭打ちピストンに、彼女の大きく開き舌を助けを求めるように突き出した口からは、人間の言葉として通用しない獣の咆哮が吐き出され続ける。部屋全体を震わせるような肉を打ち付ける破裂音と絶頂の快楽を少しでも逃がそうとする嬌声、その二つは時間が経てば経つ程に大きく激しくなっていく。









「あかちゃんっ♡♡ いっぱい……っ♡♡ しあわせっ♡♡♡♡」

文字通り精も根も尽き果てており、今にも意識を手放してしまいうだが――

「ねえ、マシユ？ 夜伽だつて言つてたけど、マシユは“専属”の中居さんだから丸一日犯しても大丈夫だよね」

「……………へうっ？♡♡」

彼の言葉の意味を全く理解出来ていないが、彼女はマスターの行動で自分の末路を理解する。瞳孔にズツポリと魔羅が突き刺さった状態で両脚の膝をヒョイと抱え上げられ、駅弁のような体勢のまま部屋の外へと連れて行かれてしまう。

「あっ♡♡ やあ……っ♡♡♡ せんぱいっ♡♡♡」

「取り敢えずお風呂でサツパリしてから、色んな場所ですっぱいエツチしようね？ 今日是一日マシユのおまんこに挿れたままで楽しむっか」

「あっ♡♡ あっ♡♡ ああ……っ♡♡ ゆうひへっ♡♡ ——ひるひへえっ♡♡♡♡♡♡♡♡」

閻魔亭の廊下に許しを乞う懇願と嬌声が響き渡り、それだけで全てを察した牝嫁達は同情と羨望を感じながら蜜壺を濡らした。

――閻魔亭での慰安は、まだまだ終わらない。

pixiv有料リクエスト：オルレアンの乙女は、愛され墮とされ妻となる

— 1 —

— ジャンヌ・ダルク

彼女について説明をする必要性は無いかも知れないが、世界で最も有名な聖女であり“オルレアンの乙女”と呼ばれた救国の英雄である。

1337年から1453年までイギリスとフランスの間で行われた戦争は、後世では“百年戦争”と名付けられており、その名前は誇張したものでは無く百年以上もの長きに渡って続いた。終わりの兆しすら見えなくなった戦乱の時代に生まれたジャンヌ・ダルクは、神から天啓を授かったことにより戦争を終わらせるための行動を起したのである。

最終的に彼女は人身御供の如く己の命を捧げ、フランスとそこに生きる人々の命を救ったのだ。

ジャンヌ・ダルクの生前の偉業について、もう少しだけ詳しく説明すると——

フランスの王位継承権をイギリス王家が主張したことが戦争の発端であり、軍を率いてフランスに進行するイギリス側に付いたブル

ゴーニユ派とフランス王家こそが正統だと主張する派閥によって、国を二分する内乱まで負の連鎖のように起こったのだ。

国の内外を問わず泥沼とも呼べる争いが一世紀以上も続き、繁栄していたフランスは衰退の一途を辿っていった。

戦う力を持たない人々が日々を生きることにより不安を覚えていたフランスの片田舎“ドンミレ村”で生まれ育ち、干し草の山の上で眠ることが好きなどこにでもいる普通の少女だった“ジャンヌ・ダルク”は、神からの啓示を受けたことによりフランスと人々を救うために故郷を旅立つ。そして、精強なイギリス軍に包囲されたフランス中部の町“オルレアン”で彼女は戦いの先頭に立ち、身の丈程もある巨大な旗を手に味方の兵士を鼓舞し続け、“奇跡”と名付ける他ない快進撃を成し遂げたのである。

オルレアンだけでは無くイギリスに占領されていたランスの大聖堂もといノートルダム大聖堂を奪還したことにより、フランス王家のシャルル王太子は暗れて王位に就きシャルル7世となった。天啓を授かったジャンヌ・ダルクの存在が無かったのならば、シャルル7世が王位に就くことは不可能であったと後の歴史家が語っている。

彼女はパリ奪還を目指して進軍していたが、道半ばでブルゴーニュ派に捕らえられてイギリスに売り渡されてしまう。策に嵌められ公正では無い審問官によつて、聖女では無く“魔女”であると貶められてしまった。

最後は十九歳という若さで彼女は磔にされ、その身を業火に焼かれる火刑へと処されたのだ。

魔女だと貶められたまま火炙りにされる悲劇に満ちた死を迎えたジャンヌだったが、彼女は最期の瞬間まで誰かを恨むことは無かったと言われている。それ故に故郷を旅立ってから僅か二年間であったものにも関わらず、フランスという国とそこに生きる人々に救いと希望を与え、ジャンヌ・ダルクの名前は人類史と英霊の“座”に確かに刻み込まれたのだ。

これが彼女の短くも光り輝く物語であり、自分の幸福を捨てて他者の幸福を願った生涯であった。

——“ 邪竜百年戦争 オルレアン”

誰も恨むこと無く炎に焼かれた自分とは明らかに異なる、復讐と憎悪の炎に燃える“ 黒いジャンヌ・ダルク” が竜を率いて暴れ回ったことにより、人理崩壊が起こって本来の歴史から外れてしまった特異点。

この特異点で生まれた国や時代も異なっているマスター“ 藤丸立香” と裁定者のクラスで召喚されたジャンヌは出会い、目的が同じことで協力を結び、人理崩壊したオルレアンのために奮闘した。

竜殺しの大英雄やフランス革命に倒れた王妃など、フランスと縁がある様々なサーヴァント達の協力もあり、黒いジャンヌや聖杯を用いて特異点を崩壊させた“ 張本人” とも決着をつけ、初めて挑むことになった特異点を修復することが出来たのである。

こういった経緯によりカルデアとジャンヌには縁が生まれ、彼からの召喚の呼び掛けにも喜んで応じたのだ。

『——サーヴァント・ルーラー。ジャンヌ・ダルク。お会いできて、本当によかった!』

世界を救うために自らの意思で困難に立ち向かっているマスターの善性を好ましく思い、英霊となった自分に出ることが有るならば全力で力になりたいと考えていたのである。

『うん、これからよろしくジャンヌ』

『はい！ 貴方の戦いの傍で私は旗を掲げ続けますっ！』  
『——っ』

ジャンヌから華やかな笑みを向けられたことにより、彼は心臓の鼓動を高鳴らせ頬を赤く染めた。きつと彼女のことを魅力的な異性として意識したのは、咲き誇る花のような笑顔を見たこの時からだったのだろう。

このような経緯で長く険しい人理修復の旅に、純白の旗を持った聖女が加わったのである。

カルデアに半ば拉致に近い形で連れ込まれ只の一般人でしかなかったが、魔術師としてもマスターとしても未熟な部分が多々あったが、自分の非力を呪い諦めたりすることだけは無かった。それどころか前の特異点で敵対していたサーヴァントや本質が悪のサーヴァントのことは憎まず、信頼を向けて歩み寄りながら特異点の修復に挑み続けたのだ。

生傷が絶えず世界を救うという重圧の中で心も身体も磨耗させていくマスターは痛々しかったが、そんな弱い部分を見せぬようにジャンヌを含めた他者を気遣う優しさすら見せる心の強さを持っている。

『すみません。貴方の戦いぶりに、見とれていました。貴方は未熟であっても、自らの弱さを言い訳にして逃げ出さない。もしかすると、かつて私を見守っていたジルも、こんな気持ちだったのかもしれない。』

直向きに何度転んでも進み続ける彼の隣に立つ彼女は、生前の自分を見守っているような気持ちになっていった。そして、自分を支えてくれたジル・ド・レエも同じ気持ちだったのでは無いかと感じ、今を生きるマスターのためになればと考えるようになる。

公私を問わずに自分に尽くしてくれるジャンヌに魅力を感じてしまうのは仕方の無いことであり、気持ちを我慢することが出来なくなった彼は告白を行ったのだ。

『ジャンヌっ。俺、ジャンヌのことが好きだ』

『~~~~っ?! まっ、マスターっ♡♡ おっ、お気持ちは嬉しいですが、私は神にこの身を捧げました。でっ、ですからマスターには私よりももっと素敵で相応しい方が——』

『俺は他の誰かじゃなくてジャンヌが良い』

『あっ、あう……っ♡♡♡』

真摯なマスターの言葉と真っ直ぐ見詰めてくる視線を受け、ジャンヌは頬だけで無く耳の先端まで真っ赤に染めて狼狽してしまう。その後も彼からの猛烈なアプローチをされ続けた結果、鉄壁の自尊心と鋼の如き信仰心を持っている彼女でさえ根負けてしまった。

『そっ、その……っ♡♡ 不束者ですが、よろしくお願いしますっ♡♡』

そして、禁欲的で“健全なお付き合い”であればという条件付きで、マスターの好意を受け入れてしまったのである。

最初は約束した通りに今までの生活と殆ど変化の無い健全なお付き合いをしていたが、若い男女が好意を持った相手ともっと親密な関係という“先”を求めてしまうのは自然なことであった。

最初は手を繋ぐという肉体的接触にすら戸惑いを覚えていたのが、気付けば肉体が触れ合う面積を増やした熱い抱擁をするようになる。相手の体温を感じることが、少しずつ癖になっていってしまう。

『——だっ、駄目ですっ♡♡』

『お願い。ジャンヌとキスしたい、一回だけだから』

『ほっ、本当に一回だけですよ?♡♡♡ んむうっ♡♡』

聖女であるのにも関わらず彼のお願いに負けてファーストキスを捧げてしまい、更には舌同士を絡ませて唾液を啜り合う濃厚なデーブキスマで許すようになっていったのである。禁欲的な生活をしてきた反動が露骨に出てしまったのかも知れないが、ジャンヌは背徳的な快樂とマスターに愛される心地良さに抗えなくなっていた。

『じゅるるうっ♡♡♡ れろお♡♡♡ ぢゅぶぶっ♡♡♡ ちゅるう♡♡♡ ちゅ♡♡♡ んちゅう…:…ぷはあっ♡♡♡ はあ♡—っ♡♡♡ はあ…:…っ♡♡♡ ほっ、本当は駄目なのにい♡♡♡ —ん♡♡♡ ちゅう♡♡♡』

毎日欠かすこと無くキスをしなければ口寂しさを覚えるようになり、おっぱいやお尻、太ももなどの性的な部位を触られることに悦びを覚えてしまう。最後の一線である処女を喪失し、子作りさえしなければ大丈夫だと自分の中でルールを設けて悦樂を貪るようになる。

そして、最後の一線すら二人は——

「——ぢゅるるうっ♡♡♡ ちゅぶぶっ♡♡♡ れろお—っ♡♡♡ ぢゅぶぶっ♡♡♡ ちゅぶぶぶうう♡♡♡」



マスターの部屋にいつものように連れ込まれたジャンヌは、お互いの腰に両腕を回して溺れるような口付けに耽っていた。最近は大ガが外れつつあるようであり、神の教えに背く行為であるのに抗えなくなってきた。

彼の厚い胸板に豊満で柔らかな乳房が押し潰れており、腰や脇腹の辺りを撫で回されるこそばゆさに身を振っていた。唇の端から混ざり合った唾液が溢れ、顎先に向かって唾液の滴垂れてしまう。

二人とも完全に瞳を閉じておらず、ネットリと視線同士を絡み付かせている。

「じゅるるうっ♡♡♡ ちゅぷっ♡ ちゅるるう。。。っ♡♡」

身長差からジャンヌは爪先立ちになったまま上体をマスターに預け、喉をコクコクと鳴らしながら唾液を飲み込んでいた。年相応な愛らしい少女としての姿を見せられたことにより、余計に愛おしくもつと可愛らしく淫らな姿を見せて欲しいという欲求を湧き上がらせてしまう。

彼は触れ合っていた唇をゆっくりと離すと、混ざり合った唾液による銀の糸で繋がったまま、もっと深く繋がりたいことを彼女に伝える。

「はあ……っ、俺もう我慢出来ない。ジャンヌとセックスしたい」  
「~~~~~っっツ!!♡♡♡ だっ、駄目えっ♡♡ ふう  
……っ♡ エッチだけは駄目ですう……っ♡♡♡ ——あゝんっ♡」

何とか拒絶の言葉を口しようとするが、マスターに豊満な臀部をぎゅうっと握られてしまう。尻臀の柔肉をたっぷりと揉みしだきながら、セックスの気持ち良さをジャンヌの耳元で囁く。

「こうやって抱き合ったままキスするより、セックスは深く繋がって

気持ち良いんだよ？ ジャンヌともつと愛し合えたら、もつとお互いのことを好きになれると思うんだ」

「あつ♡ あつ♡♡ ああ…:…つ♡ だめつ、駄目ですうっ♡♡  
♡ 結婚してない女性があつ♡ん♡ひい♡つ♡♡♡ 処女を散らしてしまうのはあつ♡♡ ダメエ…:…つ♡♡♡」

「それなら俺と結婚しようよ。そうしたら婚前交渉じゃなくなるから？」

「——つッ?!?!♡♡♡ まつ、マスター…:…つ♡♡♡」

当然のように結婚を迫られて彼女は明らかに動揺するが、それも彼の瞳や態度を見れば聞かなくとも「本気」であるとは分かってしまうのだ。他にも駄目な理由を探そうとするのだが、快楽と悦びの感情が邪魔してくるせいでまともに思考することが出来ない。

今回だけ拒めたとしても次は無理だと確信するジャンヌは、彼の胸板に額をグリグリと押し付けながら性行為を承諾してしまう。

「ひっ、卑怯ですう…:…つ♡♡♡ そこまで言われちゃったら、断るなんて出来ませんっ♡♡♡」

『せつ、責任取って下さいっ♡♡♡』と、蚊の鳴くような声で彼女は呟いた。それに対してマスターは返答を返すように、ジャンヌの瑞々しい唇に自分の唇を重ね合わせる。

——ちゆうっ♡♡♡

部屋の中に小さな水音が鳴り響き、艶かしく淫らな水音が続いた。

シングルサイズのベッドの傍では成人手前と思われる年若い男女が抱き合っており、相手の背中や腰、お尻などの身体の背面に両腕を回されていた。艶やかな光沢を帯びたブロンド髪を後頭部で三つ編みに結っている美少女の豊満な乳房は、黒髪 of 青年の逞しい胸板により『むにゆり♡♡』と押し潰れている。

衣服という布地に隔てられているが二人の肌には、相手のドクンドクンと心臓が脈を打つ振動や安心感を覚える温かな体温、身体が触れ合っている感触が伝わっていた。“藤丸 立香”と“ジャンヌ・ダルク”の澄んだ海を彷彿とさせる青色の瞳には、対面している相手の姿しか映っていない。

「ちゅぷっ♡♡♡ん♡うっ♡じゅぷうっ♡♡ふう♡ーっ♡  
んちゅっ♡♡♡ふう♡…♡っ♡——ちゅぷうっ♡♡♡」

唇同士を触れ合わせて離すのを繰り返す二人の口元では、卑猥なリップ音を何度も響かせていた。普段ならば気にも留めないような小さな水音だが、部屋の中を満たしている静寂も合わさって妙に耳へと残ってしまう。

唇が触れ合う度にジャンヌの瑞々しい桜色の唇には、甘い痺れとしか表現が出来ない快感が走っている。

お臍の奥からじんわりと熱を帯びていく淫らな肢体は『ビクっ♡ビクンッ♡♡』と、緊張と弛緩を繰り返すことによつて震わせていた。意識せずに自然と内股になつている両膝が左右にガクガクと揺れており、彼女が快感に溺れているのが第三者視点から見ても良く分かる。

「——れろお……っ♡♡♡ ぢゆるっ♡♡ じゆるうっ♡ じゅぷ  
ぷっ♡♡♡ れりゆうっ♡♡ ちゅぷうっ♡♡ じゆるるる  
るるうっ♡♡♡」

愛情に溢れたキスを続けていく内に気持ち昂っていく二人は、  
ゆっくりと上唇と下唇を開いてトロツトロの唾液に塗れた艶めかし  
い舌先を伸ばす。プラトニックな唇の触れ合いだけでは満足が出来  
なくなつた結果であり、舌同士を触れ合わせた状態で舌先を動かすこ  
とにより絡み付かせる。

「じゅりゅりゅう……っ♡♡♡ れろおっ♡♡ ちゆるるうっ♡  
♡ れろれろおっ♡♡♡ じゆるるう……っ♡♡♡♡♡」

繋がっている口元からは先程のキスよりも激しい水音と熱っぽい  
吐息の音色を響かせ、二つの舌により掻き混ぜられた唾液がブクブク  
と泡立っていく。蛞蝓と蛞蝓の全身を用いた交尾を彷彿とさせる濃  
密な舌交尾、恋人以上の親密な関係でしか成り立たない息の合った  
デーパーキスを披露していた。

男女は十センチ以上もある身長差から自然と爪先立ちになつてお  
り、抱き締め合っているマスターの方に身体を倒して体重を預け、見  
上げる体勢となつているジャンヌの口端からは唾液が溢れてしまつ  
ている。

形の良い顎先まで伝つた唾液は大粒の雫となり、豊満な胸元の谷間  
に吸い込まれるようにポタポタと滴り落ちていく。彼女の乳房を  
覆っている深い紺色の生地は、雫が落ちた一部分だけが元の生地より  
も濃い色に変化していった。

「んっっ♡♡♡ ちゅう……ふはあっーっ♡♡ はあっ♡  
♡♡ ふうっーっ♡♡♡ キスう……っ♡♡ 気持ち良いれすう♡  
♡♡ ちゅぷっ♡♡♡」

普段の快活で慈愛に満ちたジャンヌの姿を知っていれば知っている程、意中の異性への媚を多分に含んだ甘ったるい声色に驚くことだろう。

彼と夫婦になることを受け入れてしまったため、これまで自分を律してきた反動が露骨に出ているのだ。理性が蒸発して本能に近い“牝の部分”が表出している証拠であり、脳が蕩けてしまいそうな快樂と心を満たす幸福感に溺れている。

「じゅぷうっ♡♡♡ん♡ふう♡くくっ♡?!♡♡ちゆるるっ♡  
れるう♡…:…っ♡ちゆるるるう♡っ♡♡ん♡ちゆう♡…:…ぷ  
はあ♡ーっ♡♡♡お♡っ、お尻い♡っ♡♡グニグニだめれすう  
♡っ♡♡♡♡♡——ん♡ちゆう♡っ♡♡♡♡」

愛情と肉欲の混ざり合ったディープキスの間も、彼女の細く括れた腰やムチムチとしたお尻への愛撫は続いていた。

ジャンヌの背後に両腕を回しているマスターが両手を動かすことにより、焦らすように巧みな手付きにより撫で回したり、ムツチリとした尻臀の柔肉を力強く揉みしだき続けている。特に尻タブの柔肉を鷲掴みにされたまま『ぐにっ♡♡』と左右に押し広げられる度に、腰を大きく震わせながら秘所の割れ目から粘っこい淫液を溢れさせていた。

「ぢゆるるっ♡♡ん♡う♡くくくっ♡?!♡♡♡ふう  
♡ーっ♡♡ふう♡…:…っ♡♡♡♡♡じゅぷう♡っ♡♡♡♡ん  
ちゆう♡っ♡♡♡」

相手の口内で蕩けるような嬌声を彼女は漏らしてしまい、ショーツのクロッチ部分や太ももの内側をトロットロの粘り気を帯びた愛液で濡らしている。

肢体を震わせたり喘ぎ声を上げるだけでは処理し切れなかった快感が少しずつ蓄積していき、彼が尻肉を強く揉みしだいたことが切っ



なる子供っぽい悲鳴を漏らす。頼り甲斐を感じる彼の腕に抱き抱えられている状況によつて、恋する乙女の表情を浮かべながら心臓の高鳴らせているジャンヌは、シングルサイズのベッドに優しく寝かされた。

仰向けのまま豊満な乳房を上下にさせて呼吸している彼女に、マスターもベッドの上に乗ってそのまま覆い被さる。鼻先が触れ合うような至近距離で見詰め合う二人は、ゆっくりと顔を近付けて離れていた距離をゼロにして再び口付けを行う。

「はあ………っ♡♡ はあっ♡♡ んっ♡♡ ちゅうっ♡♡ ふうっ♡♡ ちゅうっ♡……っ♡♡♡♡」

何度も唇を交わしている彼は着ている上着を乱暴に脱ぎ、このまま本番が始まる寸前の雰囲気となるが、ジャンヌはまだ若干呂律の回らない声で自分もご奉仕をしたいと言葉にする。

「じゅるるうっ♡♡ んうっ………ぷはあっ♡♡ ツっ♡♡♡♡ はあっ………っ♡♡ わっ、私ばかり気持ち良くなっへるからあ♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡ マスターのことも気持ち良くしたいですうっ♡♡♡♡

だっ、ダメでしょうか？♡♡♡」

「ジャンヌがしたいなら良いよ」

「はっ、はいっ♡♡♡ 不慣れな部分も多いですがっ♡♡ 精一杯頑張りますう♡♡♡♡」

彼女に覆い被さる体勢を止めたマスターは、ベッドの端の辺りに肩幅程度に脚を開いて投げ出すように座った。

そして、ジャンヌも純白のシーツの海を掻き分けるように、匍匐前進に近い動きで這って移動する。彼の両脚の間に身体がすっぽりと収まるように正座をし、まるで土下座をするような体勢となるのだ。

二人がしている体勢から自然とマスターの下腹部が彼女の眼前に来ており、ジャンヌはズボンの上からでも膨張していることが一目で

分かる大きな膨らみや分厚い布越しでも薰つてく芳醇な牡の臭いがしていた。

「すうゝーっ♡♡♡ はあゝ…っ♡♡ 膨らんだズボンの奥からっ♡ えっ、えっちな濃い臭いがしてますうゝっ♡♡ ——すうゝーっ♡♡♡♡」

鼻を鳴らしながら臭いを嗅いでいる彼女は、清楚な聖女よりも淫乱な娼婦に近い淫らな表情を浮かべている。

恥ずかしそうにしながらもズボンを留めているベルトをカチャカチャと音を立てて外して、金属製のファスナーをゆっくりと下ろしていく。

ズボンとパンツの履き口に両手の指先に引っ掛け、後は下ろすだけで窮屈そうに押さえ付けられている魔羅を露出させられる状態となる。

「ふうゝ…っ♡♡♡ ふうゝーっ♡♡ あゝっ、後は下ろすだけですねっ♡♡♡♡」

期待感と羞恥心で一杯になりながら呟くジャンヌは、指先に力を込めてゆっくりとズボンを脱がせていくが、つかい棒のような強い抵抗により阻まれてしまう。

そして、腕にも力を込めて強引に動かすことにより、勢い良く下半身を露出させるが――

ブルンっ!! べちっ♡♡

「~~~~~っっっ??!!  
♡♡♡♡ うっ、うそ…っ♡♡ おおき  
いでしょうゝ♡♡♡」

文字通り飛び出してきた腕の如き長大な肉棒は、彼女の額を力強く



叩いて大きく乾いた音を立てた。脳を揺らす程の物理的な衝撃を与えるのだが、それ以上に規格外なサイズ感の魔羅の存在に驚いている。

口付けや愛撫などの前戯はしてきたが、相手の性器を見るのは今日が初めてであったのだ。

「あつ、あうゝ……っ♡♡♡ 私腕より太い♡♡ こんなにだつ、男性器が大きいなんて知らなかったですうゝ♡♡♡」

自分の腕よりも太く長いのに加え、亀頭も巨大で陰茎との段差も深い。太い血管が張り巡らされており、全体的に見ても凶器にしか見えない形状もあつて威圧感を覚える。

こんなもので自分の膣孔を穿られれば、絶対に壊れてしまうと確信が出来た。

「ひっ、ひいゝ……っ♡♡♡ 絶対に壊れちゃいますっ♡♡」

「大丈夫？ 無理そうならゆっくり慣らしていても良いよ」

「——っつツゝ?!♡♡♡ だつ、大丈夫ですう♡♡ 初めてでびっくりしちゃっただけですから……っ♡♡♡ ちゃんご奉仕しますっ♡♡」

ジャンヌはおっかなびっくりペニスに触れると、これからご奉仕することをマスターに伝える。

「はっ、初めてなので拙い部分は多々ありますが、マスターに気持ち良くなつて貰えるように頑張ります♡♡♡ 私に気持ち良い所をいっぱい教えて下さいっ♡♡♡」

部屋の中に小さな水音が鳴り響き、艶かしく淫らな水音が続いた。

緊張と興奮が入り混じって声を微かに震わせているジャンヌ・ダルクは、天に向かつて聳り立つ規格外なサイズをした魔羅の根本を両手で握った。自分の夫となるマスターにご奉仕するという覚悟を言葉以外でも伝えるために、長大なペニスを握っている両手の指先にグツと力を込めたのである。

ドクンドクンと高鳴る心臓の鼓動に連動するように、男性の鍛え上げられた太腕を彷彿とさせる魔羅が、彼女の手の中で暴れ馬が如き力強さで撓っていた。柔らかな掌やしなやかな指先には血液が送り込まれる際の脈動と共に、熱した鉄に触れているのかと錯覚する膨大な“熱量”が伝わってくる。

「そつ、それじゃあ動かしますね……つ♡♡♡」

雪のように真っ白な頬や耳の先端を熟した林檎の如く真っ赤に染め上げながら、両手を大きく上下に動かすことで陰茎を扱き快感を与えていく。

——しゅっ♡♡♡ しゅうっ♡♡♡ しゅるうっ♡♡♡

硬い肉の表面を擦る音が、静かな部屋に響いている。

最も細い部分ですら片手では指が回り切らず、両手を用いなければならぬ太さをしている陰茎は、自動車のタイヤに使われる硬質なゴムにも似た硬さと弾性を備えていた。

例えサーヴァント由来の人並み外れた膂力を用いて、全力で握り潰

そうとしたとしても、ビクともしないと確信が出来る程に強靱である。蕩けるように柔らかい膣壁と膣肉だけで構成されたか弱いおまんこの孔を掘削するのには、明らかに過剰戦力であり牝は墮ちると挿入前から理解らされてしまう。

逞しい陰茎の表面には小指ほどの太さ程もある血管が、葉っぱの葉脈を彷彿とさせる程に張り巡らされている。とても海綿体に大量の血液が送り込まれ、ペニスが膨張しただけの肉の棒とは信じられないだろう。

「ほっ、本当に硬くて太いですっ♡♡ はぁーっ♡ だっ、男性器がこんなに長いなんて知らなかったですっ♡♡♡ ———ふう♡♡♡♡♡」

自分の前腕よりも太く長いペニスの圧倒的な存在感と禍々しい威圧感に圧倒され、感じたことや思ったことを意識せずにジャンヌは呟いている。

「ジャンヌ、男性器じゃなくてオチンポって言うんだよ。その方が興奮するから」

「おっ、オチンポですか？♡♡♡ ———あっ！♡♡♡ ビクツて震えました♡♡♡ わっ、分かりましたあ……♡ これからはオチンポって呼びますね♡♡♡」

激しい運動をした訳でも無いのに荒い呼気を吐いている彼女に対して、マスターは男性器という堅苦しい呼び方からもっと興奮する下品な呼び方を教えた。強い羞恥心を感じながらもジャンヌがオチンポと口にする度に、本人の興奮に同調するように彼のペニスはビクンビクンと大きく震える。

恐る恐ると言った様子でペニスを両手を用いて扱っている彼女だが、マスターは更にスケベな奉仕をさせるために手コキのやり方を教えていく。

「今も気持ち良いけどチンポを扱くなら、もっと強く握っても大丈夫だよ。竿の部分よりも先っぽの膨らんでる部分が敏感だから、手の平で擦られたりすると気持ち良いっ」

「~~~~~っツ!!??♡♡♡♡♡ はい……っ♡♡ こっつ、こうですか?♡♡♡♡」

ジャンヌは言われるがままに握り拳が如き亀頭を右手の掌でグリグリと擦るように撫でながら、左手で太い陰茎をこれまでよりも強く握った状態で扱き上げる。

先程までの優しく焦らすような手コキから明らかに快感は強くなり、亀頭の先端にある割れ目から濃厚な精液の混じった先走り汗が『びゅくっ♡♡♡♡♡ びゅくうっ♡♡♡♡♡』と、泉の底から湧き上がる源泉の如く溢れていった。

「あゝっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡ さっ、先っぽから熱いのがあゝ♡♡♡ん  
うゝ……っ♡♡♡ 粘っこい汁がドクドクっつて溢れてますうゝっ♡♡♡」

——ずりゆっ♡♡♡♡♡ じゅちゆっ♡♡♡ ぢゅぷっ♡♡♡ じゅっぷう  
っ♡♡♡♡♡

重力に従って亀頭から溢れた大量の先走り汗は、陰茎や睾丸に向かって滴り落ちていく。

常人ならば精液に近いレベルの濃さをしたカウパー液が、ジャンヌの清らかな手をドロっドロに汚してしまい、ローションを用いた時のように潤滑液の代わりとなる。陰茎を扱き上げる彼女の左手からは、男女を問わず興奮させる卑猥で粘っこい水音が鳴り響いていた。

「すっ、凄いですっ♡♡♡♡♡ きっ、気持ち良いんですよね?♡♡♡」  
「うん……っ、気持ち良いよ。先っぽと竿の段差とか玉の部分なんか

も弄って貰えると良いかもっ」

「わっ、分かりました……っ♡♡♡ もつと気持ち良くなって貰えるように頑張りますっ!♡♡」

彼に褒められて自信を持ったジャンヌは、今までよりも積極的にペニスへの奉仕を行う。

親指の横幅程もある肉厚な雁首にしなやかな指先を這わせ、カリカリと引つ搔くように刺激する。そして、片方だけで野球ボールよりも巨大な睾丸は、優しくマッサージするように揉みしだいた。

両手をそれぞれ雁首と睾丸の愛撫に使ってしまい、陰茎への愛撫が出来なくなつた彼女は、少しの逡巡の後に意を決して柔らかな唇で陰茎に口付けを何度も落とす。

「ちゅっ♡♡ ちゅうっ♡♡ ちゅぷうっ♡♡♡ んっむっ……  
はあっ♡♡ はあっーっ♡♡♡ きっ、気持ち良くなって下さい  
……っ♡♡ ——ちゅぷうっ♡♡♡」

パンパンに張つた亀頭の頭頂部を柔らかな掌で撫で回しながら、肉厚で凶悪なフォルムをしている段差を這わせた指先で引つ搔き続ける。もう片方の余つた手で巨大な睾丸を揉みしだき、陰茎に柔らかな唇を何度も落として射精を促した。

彼の腰と魔羅が震える程に強い快感となり、少しずつ射精欲が高まっっていく。

「それ最高っ! 初めてとは思えないくらいだっ」

「~~~~~っっっ?!?!♡♡♡♡ ちゅうっ♡♡ ちゅぷうっ♡♡♡ ——ちろっ♡♡ れろおっーっ♡♡♡♡」

褒められて悦んでしまうジャンヌは、柔らかな唇を更に強く押し付ける。それだけで無く唇の隙間から艶かしい唾液塗れの舌先を伸ばして、陰茎の汚れを刮ぎ取るようにレロレロと舐め回した。





「髪とか顔にもお……っ♡♡♡ せっ、精液がいつぱい掛かってますう♡♡♡♡♡ ……ぢゆるるっ、あむっ♡♡♡♡♡ ん♡むう♡♡♡♡♡ ツ♡♡♡♡♡」

ジャンヌは唇を汚している精液を舌先を伸ばし、チロリと舐め取って口内へと含んだ。

これまでの人生で飲んできた牛乳や生クリームなどとは比べるのすら烏澁がましい、濃縮された原液を口にしたかのような精液の味によつて軽い絶頂を迎える。

口に含んだだけなのに鼻の中が噎せ返る位に濃い牡の臭いで満たされ、ウイスキーやウオツカなどの高い度数のアルコールを摂取した時に近いレベルで酔ってしまう。

「はあ♡っ♡♡♡ ふう♡ーっ♡♡♡ こっ、これえ……っ♡♡♡♡♡ すごいれすう♡っ♡♡♡ 一口だけなのにい♡♡♡ あっ、頭がふわふわしちやいますう♡……っ♡♡♡♡♡」

彼女は恍惚とした表情を浮かべ、呂律の回らない口を動かして精液の感想を口にした。

中指で脛の上や頬に付着したドロツドロのザーメンを掬い取り、濃過ぎる余りに黄ばんで見える白濁液を暫く見詰めた後に再び口に含む。

「あむっ♡♡♡♡♡ ぢゆるるっ♡♡♡ じゆるる♡う♡♡ ん♡ぐっ♡♡♡♡♡ ん♡う♡……っ♡♡♡♡♡ ぷはあ♡ーっ♡♡♡ はあ……っ♡♡♡♡♡ のっ、喉に絡み付くのも、癖になつちやいそうですう♡っ♡♡♡」

このままでは精液に夢中になってしまえばそうジャンヌに対して、マスターはあの大量射精を行った直後とは思えない勃起したままのペニスに力を込めて震わせる。



「ジャンヌが精液好きになってくれるのは嬉しいけど、そのまま放置されるのは少し寂しいよ?」

「~~~~~つつっツ!!!??」  
「~~~~~つつ、ごめんなさい……つつ♡♡  
♡ 初めての味で夢中になってしまいました♡♡ はっ、恥ずかしいですう♡♡♡♡」

頬に手を当てて羞恥に震える彼女のことを優しく抱き締め、彼は濡れそぼったショーツに手を伸ばして触れた。

——クチュっ♡♡

「あゝひいつ!♡♡♡♡ あゝつつ♡♡ あツ♡ そこはあゝつつ♡♡♡♡」

「ジャンヌには気持ち良くして貰ったから、今度は俺が気持ち良くして上げる」

「はっ、はいゝ……つつ♡♡♡♡ 優しくして下さいっ♡♡ ——あゝんっ♡♡♡♡」

狭い一人用のベッドの上で二人は抱き合い、更に愛欲を貪っていくのである。

「——イ、く、い、ク、い、ク、——っ、♡♡♡♡♡ イ、っ、ク、う、く、く、く、つ、つ、!?!♡♡♡ い、ひ、い、ひ、——っ、つ、♡♡♡♡♡」

発情した男女のフェロモンを含んだ淫臭と肌にネツトリと纏わり付く湿気を帯びた熱気が充満する部屋には、理性がドロドロに蕩け切ったメスの絶頂報告が木霊している。度重なる絶頂によって声を抑える余裕は無くなっており、外の通路にすら響いていそうな声量となっていた。

淫らな音の発生源であるシングルサイズのベッドの上では、修道服を元とした衣装が乱れており、艶かしい柔肌が露出している。金髪蒼眼の美女“ジャンヌ・ダルク”は、獣のような嬌声を上げながら、ムチムチしているのにしなやかな肢体を震わせていた。

「ず、つ、ろ、い、っ、へ、ま、す、う、……っ、♡♡♡♡♡ ち、っ、ち、く、び、と、お、ま、ん、こ、♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡ 一緒にされるとお、っ、♡♡♡♡♡ おかしくなっちゃいますう、っ、♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡ ——イ、ひ、つ、♡♡♡♡♡」

彼女が呂律の回らない口を動かして懇願しているように、トロトロに濡れそぼった膣孔には、黒髪の青年“藤丸 立香”の男らしい太くゴツゴツとした中指と人差し指が、根元までずっぷりと挿入されていた。そして、同時に乳房の先端は唇ともう片方の手によって、絶頂を迎えていたとしても容赦無く廻られ続けている。

ぷっくりと膨らんだ乳輪や硬くシコった乳首を指先と舌先で捏ねられ、膣孔の柔肉やGスポットと呼ばれる弱点を軽く曲げた指先により穿くられてしまう。片方だけでも容易に絶頂を迎えてしまう快感であり、同時に性感帯を刺激される刺激は生娘にとっては過剰も良い所であった。

食事のためにお乳を吸う赤子とは明らかに異なるイヤらしい舌使いでジャンヌのぷっくりとした乳首を愛撫していたマスターは、唾液に塗れてイヤらしい光沢を放っている薄い桜色の可愛らしい突起から唇を離す。



見えなくなり、両脚を根元からつま先まで一直線に伸ばした状態で背中を弓のように反らしている。永遠の愛を誓う相手に耳元で愛を囁かれたせいで、脳みそが蕩けて快感がいつも以上に強く感じてしまふ。

心も身体も幸福感と悦楽によつて満たされ、彼女は締まりの無い笑みを浮かべていた。

「ふう、ーっ♡♡♡♡ん、ひい、ッ♡♡♡ひい、くっっ♡♡♡♡  
♡ ふう、ーっ♡♡♡♡——い、っくう、…っ♡♡♡♡」

比喩を抜きに小玉スイカが如き大きさをしている乳房は、呼吸に合わせてプツチンプリンの如くふるふると震えている。全身から大粒の汗が艶かしい肌から滲み、年若い牝特有の甘ったるい牝の香りが放たれていた。

既に二桁近い数で絶頂を迎えさせられており、初めての性行為で強張っていた肢体は弛緩している。それ以上に二本の太指によりトロトロに解された淫肉孔は、粘っこい蜜を溢れさせて交尾をする準備が整っていた。

根元まで挿入していた人差し指と中指を『ぬぽおっ♡♡♡♡』と引き抜き、マスターは彼女の“ハジメテ”を奪うことを伝える。

「こんなにトロトロに解れちゃったよ。もう準備は出来たから…セックスしても大丈夫？」

「~~~~~っっ♡♡♡♡ はっ、はい、…っ♡♡♡ 優しくして下さいっ♡♡♡」

仰向けに寝かされるジャンヌに彼は覆い被さると、ご奉仕を受けていた時や射精していた時よりも、明らかに勃起している長大なペニスの先端を膣口に触れ合わせた。

——クチュっ♡♡♡

「あゝっ♡♡ あひッ♡ 熱くて硬いのがあゝ……ッ♡♡♡」  
「いっぱい解したから大丈夫だと思うけど、痛かったら止めるから  
言ってね」

「はっ、はい……っ♡♡♡ ——来て下さい♡♡♡」

聖母のような微笑みを浮かべながら、彼女は両手を広げながら腕を  
伸ばして受け入れる。マスターはゆっくりと腰を前に突き出すこと  
により、太く長い杭のようなペニスを膣孔に挿入していく。

——ぐちゅっ♡♡ ちゅぶぶ……っ♡♡♡ ぶちッ♡♡

「あゝっ♡♡ あゝひっ♡ オチンポおゝッ♡♡ キてますうゝ  
……っ♡♡♡ ひろがってますうゝッ♡♡ んゝぎゆうゝゝゝ  
ゝっっッゝ!!?♡♡♡♡」

大陰唇を左右に押し広げながらトロトロの膣肉を掻き分けて挿入  
され、龟头全体が隠れて見えなくなったのと同時に処女膜が破られ  
た。

彼の背中に爪先を食い込ませながら、破瓜の驚きや痛みに悶える。  
膣の入り口からは真っ赤な鮮血がシートに向かって垂れており、聖女  
の処女が破られマスターのお嫁さんになった証拠であった。

腰をこれ以上押し込まずに止める彼は、ジャンヌが必要以上に痛み  
を感じないように気遣う。

「痛い？ 無理そうなら一回抜くけど」

「はあゝーっ♡♡♡ はあゝーッ♡♡ あっ、あんまり痛くは  
無いから大丈夫ですっ♡♡ んゝあゝっ♡ 落ち着くまで待つて  
欲しいですう♡♡♡」

「うん、慣れるまで待つから」

「ありがとうございますっ♡♡ その……っ♡♡ キスして欲しいで

すっ♡♡♡ — んうっ♡♡♡ ちゅぷうっ♡♡♡」

彼女の可愛らしいお願いに応えるようにマスターは顔を近付け、親鳥から餌を強請る小鳥のように唇を軽く尖らせながら唇を求め、破瓜に因る痛みと膣孔をペニスに押し拵げられる感覚に慣れるまでの間、二人は何度もキスを重ねて愛情を確かめ合う。

視線を絡み合わせたまま口付けを交わし続け、数分もするとどちらともなく唇を離れた。

「んむう……ぷはあ、ーっ♡♡♡ はあ……っ♡♡♡ もっ、もう大丈夫そうですねっ♡♡♡ 痛くなくって……そのお♡♡♡ きっ、気持ち良くなってきました♡♡♡」

「それじゃあゆっくり動かすから。痛くなったら直ぐに言っってね？」

——じゅぷぷぷぷうっ♡♡♡ ずりゅっ♡♡♡ ぢゅりゅりゅりゅりゅうっ♡♡♡♡♡ ずんっ♡♡♡

「あっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ ひっ♡♡♡♡♡ ……っ♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡ 奥までキテますうっ♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡ んっ♡♡♡♡♡ ひいっ♡♡♡♡♡ —っっ♡♡♡?!?!♡♡♡♡♡」

内側からミチミチと膣孔を押し拵げながら肉槍が挿入されていき、ジャンヌ自身も触れたことが無い子宮の入り口に龟头が触れ、持ち上げられるように奥へと押し込んでしまう。長大なペニスを持った牡にしか出来ないことであり、ハジメテで体験するのには強烈に過ぎる。

無意識に彼女が爪を立ててマスターの背中には、左右にそれぞれ四つの赤い痕が残されていく。

体験したことの無い快感と圧迫感に吞まれているが、彼の長い魔羅はまだ半分近く残っていた。自分だけのメスだと刻み付けるために、マスターは徐々に体重を掛けるように腰を押し込む。



「っっっ♡♡♡♡♡」

快感と牡を覚えたてのおまんこにとつては過剰な程の快樂であり、理性を無くした獣のような絶叫を上げた。既に絶頂していたのがより深くなつていき、膣の入り口近くにあるG—スポットも余すこと無く掘削される。

男性の前腕のようなペニスの殆どが引き抜かれるが、マスターは再び腰に力を入れて子宮を押し潰す。何度も腰を前後に動かして快感を心と身体に刻み付け、恥骨に腰が叩き付けられたことにより拍手にも似た破裂音が何度も鳴り響いた。

——パッチ ユンっ♡♡♡ パンっ♡♡♡ バッチユンっ♡♡♡♡

「ふぎゅっ♡♡♡ ひぐうっ♡♡♡ いっつきゅうっ♡♡♡  
っっっっ?!♡♡♡♡♡」

腰を叩き付けられる度に肺の中の空気が抜け、同時に濁音の混じった嬌声が漏れてしまう。

始めは軽く腰を叩き付けるようなピストンだったが、徐々に腰を動かす動きは早く力強くなつていき、数十回ほど腰が往復した時には体重を掛けた杭打ちの如きピストンに変化していった。

——パッチ ユンっっ!!♡♡♡♡♡ パッチユンっっ!♡♡♡ バッチ ユンっっ!!!♡♡♡♡♡

「っっ、壊れちゃいますっっっっ?!♡♡♡♡♡ んっぎゅうっ♡♡♡  
♡ おまんこおっっ♡♡♡♡♡ 馬鹿になつちやうっ…っ♡♡♡♡♡  
—あっひいっ♡♡♡」

普段の彼女からは想像も出来ない嬌声を上げながら、雄との交尾の気持ち良さを骨の髄まで覚え込まされる。ジャンヌの膣孔全体が常





「~~~~~」  
♡♡ い♡♡♡♡ い♡ひ♡♡ いひ♡♡ いひ♡♡ い♡  
♡♡ ……お♡♡♡ お♡♡♡ お♡あ♡♡ あ♡あ阿  
♡ あア♡ ああ♡ ああア♡ あア♡ ああ♡ ああ♡ 亜  
♡ あア♡ ——— つ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

部屋全体にご奉仕によつて吐精した時よりも数倍濃い精液が、ジャンヌのか弱い子宮を満たして水風船の如く膨らませる。部屋全体に彼女が出しているとは思えない絶叫を上げ、マスターの下腹部に向かつて小便でも漏らすかのように大量の潮を噴き出した。

見る見る内にお腹が妊娠五ヶ月かの如く膨らんでしまい、しなやかな四肢は緊張と弛緩を繰り返している。数分を掛けて精液が吐き出された頃には、ジャンヌの意識は完全に飛んでしまっていた。

「ひい♡ —♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ふう♡ ……♡♡♡ —♡ —♡ あ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

荒い呼吸をするために半開きになった口からは、艶かしい舌先の一部伸びている。このまま意識が悦楽の泥沼に沈んで行つてしまいうな彼女だったが、常軌を逸した精力をしている彼は二回の射精程度では満足していなかったのである。

——ズンっ!♡♡♡♡

「ん♡お♡ ~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ !!!??♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ あえ?♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ なんれえ♡?♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「大好きなジャンヌになら、まだまだ射精出来るよ。朝までいっぱい愛し合おうね?」

「——♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ つ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ あ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ あ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ ……♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

屈託の無い笑みを浮かべているマスターの姿を視認して、ジヤンヌは朝まで休むこと無くハメ潰されてしまうことに気付いた。お腹の奥で力強く脈動しているペニスの存在に怯えと期待の混じった感情を溢れさせながら、トロトロに蕩けた牝の笑みを浮かべて全てを受け入れてしまう。

「はいっ……っ♡♡♡ わたしもお♡♡ いっぱい愛し合いたいです♡♡」

心も身体も重ね合わせて愛を確かめ合う二人は、お昼を過ぎて夕方になるまで部屋から出てこなかった。

——全てを平等に愛する聖女は、旦那様を愛する妻となったのである。

プロローグ：堕ちてるオルタナティブ  
プロローグ―1：淫らに堕ちた竜の魔女（中出しセックス）

近未来的で病室のような部屋。

全体的に白を基調とした色が感じられない内装。部屋の隅に置かれた観葉植物だけが温かな生を感じさせる。

物は極端に少ないが必要最低限であるベッドや小さなテーブルだけは設置されていた。

壁と固定された簡素なベッドの上では、全裸の男女が蛞蝓同士の交尾のように身体を密着させながらまぐわっている。男の長大な肉棒が女のしとどに濡れた女陰に根元まで埋没しており、腰の動きに合わせてぬちゆぬちゆと粘っこい水音が無機質な空間に絶え間なく響いていた。

女は仰向けになったカエルのような体勢で男の太く逞しい首に白魚のような両腕を回し抱き、スラリと長い両足も男の太ももに蛇のように絡みつかせていた。男は四足歩行の飢えた肉食獣のような体勢で女に覆い被さっている。お互いの相手に向ける好意や性的興奮が透けて見えるケダモノ同士の交尾だ。

日本では”いかだ本手”と呼ばれる体位であり、性器だけでは無く唇同士も繋がっていた。女の艶やかな桜色の唇が男に貪られ、粘膜同士の接触と唾液の交換が行われている。

唇の端から形の良い顎先に向かって涎が垂れて、喉から胸元まで伝っていく。

「んうっ♡♡♡　じゅちゅっ♡　じゅるっ……ちゅるるっ♡♡♡　じゅちゅっ♡♡♡」

腰の動き事体はゆっくりと緩慢なものだ。恥骨を叩きつけるような激しい交尾では無い。しかし、緩やかな腰の動きであっても女はビ

クビクと細かな痙攣を繰り返している。

甘く痺れるような軽い絶頂が絶え間なく訪れているようだ。

それが生来の感じやすい敏感な体質なのか、それとも男に肉体を開発された結果なのかは判断が出来ない。

仰向けの状態でもお椀のような綺麗な形を保っている大きな乳房や興奮でプツクリと膨らんだ乳輪、固くシコった桜色の乳首を男の硬い胸板にズリズリと擦り付けている。他のメスに男を奪われないように自分のニオイをマーキングしているようにも見えるが、乳首が擦れる快感を得ようとしている性に貪欲な痴女にも見えた。

上下の体の動きに合わせてムニユムニユと形を変える乳房の先端からは汗だけでは無く、白いサラサラとした液体——母乳をピュっ♡ピュっ♡と噴き出していた。

甘ったるい母乳の乳臭いニオイがベッドの上には充満している。

大量の汗と母乳が潤滑油になっており、身体を擦り付ける動きは摩擦が消えているかのようにスムーズだ。

汗や母乳で濡れた肉体は、部屋の明かりでテカテカと照って見える。その艶姿は雄の欲望を掻き立たせ精を搾ることに特化したサキュバスのようだ。

この母乳は女が赤ちゃんを孕んでいるからではなく、霊基を男のために”弄って”噴乳体質になったからだ。

彼女のことでは断じて無いが、男から女に外見を変更しているサーヴァントも実在するので、母乳を出せるようになる位であれば簡単なことである。それよりも男に喜んで貰えるためだけに、自分の身体を弄っている事実の方が驚くべきことだろう。精神的な所で完全に男に屈服している。

子宮を肉棒でコツン、コツンと優しく圧迫される度に、乳首からピュっ♡と母乳を噴く女の姿は無様で何よりも卑猥である。キスで唇が塞がれていなければ、今も甘いオスに媚びるような喘ぎ声を上げていたことだろう。

「んむっ——ぷはっ♡♡ ましゆたあ♡ んちゅっ♡♡ んむっ

…あんっ♡ いひっ…マスターすきっ♡ 大すきっ♡♡ 子宮  
オチンポでゆさゆさされるのしゅきっ♡♡ おっ——いグっ♡♡  
いっ…しっ、子宮が精液でタプタプしてますっ♡♡♡ まっ、マ  
スター専用のオナホ嫁をもっと可愛がって下さいっ♡♡♡ おっ  
っ——っ♡♡♡ ちゅっ♡♡ じゅるるるっ♡♡♡ んうっ♡  
あっ♡ マスターの唾液美味しいですっ♡♡♡ んふっ♡♡ もっと欲  
しいです——んむっ♡♡♡」

唾液でベトベトになった口元を拭うこともせず、唇が離れると直ぐに男への愛を口にする。快樂で脳がドロドロに惚けているのか出てくる喘ぎ声と聞いているだけで恥ずかしくなるような淫語ばかりだ。涙で潤んだ金色の瞳にはハートマークが浮かんでいる。

舌と舌を絡め合う粘膜同士の接触による生温く優しい快感と、膣肉の襲々をカリ首でぐちゅぐちゅと掘削される電流が身体中を駆け巡るような激しい快感が同時に迫ってくる。

押し寄せ続ける波のような快感に女は溺れていた。

引き締まったお腹の下腹部だけがポツコリと膨らんでおり、これは女の言葉の通り子宮が精液で満たされているからだ。膣口と太い肉棒の隙間から泡立った精液と本気汁の混合液がグプグプと零れていた。

「ますっ、マスターっ♡ ——すきっ♡♡ すきい♡♡♡ オマンコっ  
…オチンポで栓されてお腹苦しいのにつ♡♡♡ おっ、イグっっ♡  
♡♡ 苦ひいのに気持ちいいっ♡♡♡ まぞっ、マゾメスでごめんなさ  
いっ♡♡ イジメられるの大好きなマゾメスでっ…ごめんなさ  
いっ♡♡ おっっ♡♡ お仕置きっ…マスターのおつきなオチンポでお  
仕置きしてえっ♡♡♡ ——あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡」

括れた細腰をガツシリと両手で掴まれ、オナホやラブドールでも扱うようにゆさゆさと強めに揺らされる。これまでよりも大きな水音が鳴り、子宮がぐちゅっ♡♡♡ ぐちゅっ♡♡♡と亀頭で強く押し潰され

る。イジメられるのが気持ち良く感じるマゾマンコに調教されている女は喉を反らして嬌声を上げることしか出来ない。

パチュンっ♡♡ ばちゅっ♡ バチュンっ♡♡♡ パチュっ♡♡  
「おっ♡…♡イグっ♡ つ♡ イクイクイク♡ イク♡ ———♡  
♡」

お椀型の豊満なバストが体の揺れに少し遅れてぶるんっ♡ ぶるんっ♡と大きく上下に揺れる。その様はまるでお皿に盛り付けたプリンをスプーンで横から叩いたようだ。当然、左右の乳首からも母乳を噴き出しており、二人の体やベッドに飛び散って染みを作っていた。

絶頂でお腹をベコベコと凹ませながら尿道口からぷしっ♡ ぷしっ♡と、潮を吹いて啼いている。

「ずっと…♡ずっとオマンコ、イってますっ♡♡♡ いグっ♡♡♡ あんっ♡ あっ♡♡♡ あひっ♡ おっぱいからミルク出てっ…♡♡♡ 気持ちいいっ♡♡♡ ミルク気持ちいいっ♡♡♡ あっ♡♡♡ マスターすきっ♡♡♡ あいつ、愛してますっ♡♡♡ あっ♡♡♡ ———♡♡♡ イグっ♡♡♡」

普段の女は誰に対しても当たりが強く、誰も周りに寄せ付けられない棘のある花のような存在だ。しかし、今は男への愛を耳元で何度も囁き、絶頂したことを逐一報告している。体の方も至極正直なのか、肉棒に膣肉をみっちり絡みつかせて、キュッ♡、キュッ♡と甘えるように締め付け続けていた。

今の淫らに甘える彼女をカルデアの誰かが見れば、きつと泡を吹いて倒れるか疲れすぎて幻覚を見ていると勘違いして二度寝にでも行ってしまうことだろう。

「んあっ♡♡♡ オチンポ膣中でおつきくなってますっ♡♡♡ 膨らんでっ

♡♡♡ ——んおっ♡♡♡ 射精してっ♡♡♡ オマンコの中に魔力供給っ♡♡♡ 精液でマーキングっ♡♡♡ マスターのモノだつてマーキングっ♡♡♡ んむ——っ♡♡♡♡♡♡

また可憐な唇が男に貪られる。

唾液を啜られ、菌茎を丹念になぞられ、内頬を舌で犯される。口内で嬌声を上げるが、体内で反響するだけで快感を逃すことが出来ない。

今までよりも更に膨らんでいく亀頭。鈴口からトプトプと大量の先走り汁を出しながら、射精欲が更に高まっていく。ズツシリと重たそうな睾丸がグツと持ち上がり、着々と射精が近付いていく。

膣中で一際大きくなる肉棒を感じて、彼女の心と体が歓喜に震える。

「ぢゆるるっ♡♡♡ んっ——ぷはあっ♡♡♡ はあっ………♡♡♡ はあっ、射精しますね♡♡♡ 熱々でっ♡♡♡ ドロドロのザーメンっ♡♡♡ ああっ♡♡♡ あっ♡♡♡ んひいつ♡♡♡ ナカっ、ナカにっ♡♡♡ いっぱい射精して下さいっ♡♡♡ オマンコにっ♡♡♡ オマンコにっ♡♡♡ ぱい魔力供給っ♡♡♡ マスターだけのサーヴァントっ♡♡♡ マスター専用のオルタにっ♡♡♡ ”竜の魔女”に……種付けしてえ♡♡♡」

叫ぶように雄の精を強請る竜の魔女”ジャンヌ・ダルク・オルタ”は長いロングウェーブの銀髪を振り乱す。

男の腰を叩きつける力も更に強くなり、子宮と同時に恥骨も圧迫されてイキ狂う。そして、数え切れない程の絶頂を迎え、一際大きく腰が叩きつけられた瞬間……。

——バチユンっ♡♡♡♡♡♡

「——んひいつ♡♡♡」

「ジャンヌオルタ……射精すよ」



びゅっ♡びゆるるるるっ♡♡♡どびゆるるるるるっ♡  
びゅくっ…びゅくっ♡びゆるるるるるっ♡どぶっ…ど  
ぶっ♡びゆるっ♡びゅくっ…びゅっ

「いくっ♡イクイクイクイクグ——っ♡♡いつ、イグ  
ううううううううううううううううううううっっ♡♡」

濁音交じりの獣のような嬌声を上げるジャンヌオルタは、喉を反らして舌を突き出しながら連続絶頂を味わう。何度も繰り返して絶頂する中で身体中をビクビクと痙攣させて、形の良い桃尻をブルブルと震わせて、頭を振り乱しても快感が逃しきれず、気絶と覚醒を繰り返している。

一般成人男性の数十倍はありそうな量の白濁精液が子宮内にドロップと吐き出され、子宮内に収まりきらなかった比較的古い精液が膣内や膣口に追い出されていく。元々膨らんでいたジャンヌオルタの下腹部が更に精液で膨らむ。まるで妊娠三カ月のようなポテツとしたお腹は表現しようが無いが淫靡であった。

ぶぽっ♡と放屁のような間拔けな音と共に精液が膣口とイチモツの隙間から噴き出し、尻タブなどを伝ってベッドのシーツに染みや白濁の液溜まりを作り出す。

「~~~~~♡♡♡♡」

最後にひと際大きく体を反らしながら強張らせて硬直した後、全身の力を抜いてぐにやりと脱力した。四肢をベッドに投げ出しており、時折虫のようにビクビクと手足が痙攣している。

——ぬぽっ♡♡

ズルズルと膣肉を掻き分けながら、未だに勃起している状態のペニス引き抜かれた。愛液と精液が混ざった混合液でペニスはドロドロ

口に汚れている。

「いっ——♡♡」

既に気絶しているジャンヌオルタは声にならない嬌声を無意識の内にも上げる。背中を弓のように反らしながらビクツと体を強張らせた後、ぐったりと軟体生物のように脱力した。

両足が大きく開かれたジャンヌオルタの退廃的な姿に、男のイチモツには更に血流が集まり硬度が増していく。自分の鳩尾に亀頭の先端が接触しそうな程に反り返る長大で禍々しいペニスには、まだまだ女を食べ足りない満足していないことを主張していた。

男はジャンヌオルタの額に口付けを一つした後、月光のように綺麗な銀髪を数度梳かすように撫でた。そして、彼らと同じベッドの隅で自慰行為をしていた全裸の少女に視線を向ける。

「次はアルトリアオルタの番だね……」

「——っ♡♡ 遅いですよ……我がマスター♡」

アルトリアオルタと呼ばれた少女は、ジャンヌオルタと同じ金色の瞳を潤ませながら熱っぽい視線を送る。責めるような言葉を発しているのに、隠し切れない期待と喜びが混じっていた。

## プロローグ―2：被虐と精に溺れる暴君（フェラチオ）

「遅いですよ……我がマスター♡」

ジャンヌオルタの豊満な肉体に比べて、アルトリアオルタは小柄でスマートな体型をしている。

乳房も男の掌に収まる丁度良い大きさであり、プリっと持ち上がったお尻も小ぶりだ。少女のような完全に熟し切っていない背徳的なエロスに満ちた極上の肉体である。

「あつ……このような辱めをつ♡ んう——マスターでなければ四肢を切り刻んでいたぞつ♡♡♡」

「怒ってるのに言い付けはしつかり守るんだね」

「あんつ♡ ふう……ふあつ♡ マスターが守れなければ”お預け”だどつ♡ 言つたせいだろ——おつ♡♡ んひつ♡♡」

男との会話をしながらアルトリアオルタは小さな嬌声を上げた。甘く澄み切った高い声で歌うように啼いている。

その嬌声の理由は彼女が両手を使ってオマンコを弄っているからだ。

待てを指示された犬のような、膝を折り曲げた状態で腰を落とした姿勢。一般的に蹲踞とも呼ばれる体勢であり、肉の割れ目から粘つく泡立った白い本気汁を零している。

良く観察すれば膣口から垂れているのは本気汁では無く、白濁としたゼリーのような精液と愛液の混合液だった。しなやかな指先で膣内をぐちゅぐちゅと掻き回しているせいで泡立っているのだ。

既に男と何度もまぐわっているのだろう。

首筋や鎖骨、胸、お尻、太ももの内側には虫刺されのような赤い痕が幾つも出来ており、それは見る人が見れば直ぐにキスマークだと分かるものだった。

陶器のような白い肌に付けられた赤い小さな痕は、この肢体の全て

が男の所有物であることを無言のまま主張していた。また、お尻全体——特に尻タブ部分が平手で叩かれた後のように真っ赤に腫れていることから、犬のような後背位の体勢でお尻が腫れるまで何度もセックスしていることが推察出来た。

ラブラブセックスをおねだりするジャンヌオルタに比べて、女は獣に貪られるような交尾を求めているのだろう。ジャンヌオルタとアルトリアオルタの二人は、男とのセックスが大好きなことには変わりがないのだが。

「あつ……マスター♡——いくつ♡♡ いぐつ♡♡」

腰を跳ねるようにビクツと震わせて、膣口の上に位置する尿道口からぷしっ♡と潮を吹く。

男とジャンヌオルタのラブラブセックスを見せ付けられながら自慰行為をしていたためか、絶頂を迎えても彼女が満足しているようには見えない。色々な体液で汚れたペニスに向けて、肉食獣のような視線を送っている。金色の瞳から鷹や鷲のような猛禽類を彷彿とさせた。

男の太い指やイチモツを妄想しながら、アルトリアオルタは左手の指先で肉豆をクリクリとイジめるように動かし、右手の人差し指と中指の二本を根元まで膣肉に埋没させて、菜箸で卵を混ぜるように掻き回している。

股座からぐちゅぐちゅと粘っこい水音がしていた。

透き通るような白い頬は汗ばみ、熟した苺のような朱が差している。汗によって頬に張り付いた数本のホワイトブロンドの髪が淫靡な雰囲気を醸し出していた。

ジャンヌオルタと同じ金色の瞳を男に向けながら、女は責めるような口調で声を掛ける。

「あつ♡♡ マスター……ちゃんと命令通りに三回イッたぞっ♡ あ  
の串刺し女とマスターのセックスを見せ付けられながら、それをオカ

ズにオナニーをしたんだっ♡♡ 本当に悔しくてっ♡ 自分が惨め  
だった♡♡」

「アルトリアオルタなら喜んでくれると思ってたけど？」

「それはまっ、マスターが——っ♡♡♡ とにかく……マスターの言  
い付けを守り三回も絶頂を迎えたのだ……約束通りマスターのオチ  
ンポ様で私の弱々オマンコをイジメて貰うぞっ♡♡」

「それだけで良いの？」

「子宮をマスターのドロドロザーメンで満たして欲しいっ♡ 私があど  
れだけ絶頂を迎えても種付けをっ♡♡ 気絶するようなら貧相な尻  
を思い切り叩いて無理矢理起こしてっ——メス豚に容赦は必要あり  
ませんっ♡♡」

マゾ願望を口にする”アルトリア・ペンドラゴン・オルタ”は、男  
に媚びるように両手でオマンコを広げる。蹲踞の体勢のまま腰を突  
き出す姿は卑猥としか言いようがない。

男はアルトリアオルタの目の前まで歩くと、ジャンヌオルタの愛液  
や自身の精液で汚れたイチモツで彼女の頬を軽くビンタする。バチ  
ンと頬を打たれたアルトリアオルタの瞳が被虐願望と快感によっ  
て淀んだ湖のように濁る。

被虐願望のスイッチがより深く入り、頬に付いた液体を指で掬って  
舐めとる。

「~~~~~っ♡♡ れろっ……♡♡ んうっ——オチンポ様で  
ビンタは反則ですっ♡ メス豚の扱いが上手すぎます♡♡」

芝居がかった高圧的な命令口調で男は言う。

多分だが彼自身の本心では無く、アルトリアオルタが求めている言  
葉を敢えて選んでいるようだ。

「取り敢えずチンポ舐めて綺麗にしろ」

「~~~~~っ♡♡ はいっ♡ 復讐旗振り女とマスターが愛し

合った後のヤリチン……オチンポ様っ♡　メス豚奴隷が舐めて綺麗にさせて頂きますっ♡♡　ちゅっ♡　ちゅぷっ♡♡　ちゅっ♡

まるでお作法のように亀頭の先端に愛情タツプリのキスを繰り返す。グロテスクで禍々しい赤黒いチンポに、アルトリアオルタの可憐な桜色の唇が何度も重ね合わされる。

リップ音が何度も鳴り響き、少しずつ汚れたイチモツが綺麗にお掃除されていく。

尿道口、亀頭、雁首、陰茎、睾丸といった男の性器全体に隙間なく接吻を繰り返す。

男のイチモツに愛していますと媚びる今の彼女を円卓の騎士達が見れば、口から泡を吹くどころか全身の穴という穴から出血して卒倒することだろう。中には何も見なかったと両目を躊躇なく潰す者もいるかもしれない。

そんなことは知らぬと彼女は誓いのキスでもするように亀頭の先端に口付けを何度も重ねる。

「ちゅっ……ちゅるるっ♡　ぶは——っ♡　マスターの大きなデカマラっ♡♡　オチンポ様っ♡　これから舌を使ってっ♡♡　根元から先端まで舐め清めさせて頂きます♡♡　れろお——っ♡」

開かれた唇からピンク色の小さな舌が伸ばされ、太い幹のようなチンポを根元から先端に向かって舐め上げる。

一往復毎に舌の上に貯まったザーメンと愛液の混合液を味わうように、自分の唾液と混ぜ合わせながら何度も咀嚼して嚥下する。男に向かって口を大きく開き、舌の裏側まで見せながら呑み込んだことを確認させている。

「れろお——っ♡　んっ……ぐんっ♡♡　ぶはっ……マスターのオチンポっ♡　美味しいです♡♡　こんなに美味しいものを私は知りませんっ♡♡　れろお——っ♡」

溶けかけたアイスでも舐めるかのように何度も何度もペニスを舌を這わせる。鼻をクンクンと鳴らしてペニスの臭いを嗅ぐ彼女の姿は人懐っこい犬のようにも見えた。

「んっ……ぐくん♡♡ オチンポ様の汚れは全て舐め取りましたっ♡  
♡ ですがっ……クンクン♡♡ はあっ……まだ尿道に濃厚ザーメンの臭いが残っていますっ♡♡ マスターの大きなオチンポ様を啜えてっ……残らず啜らせていただきますっ♡♡ はあむっ♡♡」

じゅるるっ♡♡ んぐっ……んぐっ♡♡ ぐぼっ……ぐぼっ♡♡  
んぐっ……ぐっ♡♡

これまでよりも更に口を大きく開いたアルトリアオルタは、大きな亀頭を何とか啜える。彼女の小さな口では物理的に亀頭を啜え込むので限界のようで、木の実を大量に詰め込んだリスのように頬が膨らんでいる。

太いイチモツに吸い付いて唇が窄まっているせいで、綺麗な顔立ちが歪んでいる。下品なフェラ顔は見ているだけで射精欲を煽っている。

目元に涙を浮かべながら上目遣いで、男が気持ち良くなってくれているのかを確認している。

んぐっ……んぐっ♡♡ ぐぼっ……ぐぼっ♡♡ んぐっ……ぐ  
ぶっ♡♡

アルトリアオルタは鈍い唸りのような声を上げながら、ゆっくりと緩慢に頭を動かしているだけのように見える。しかし、口内では舌先をチロチロと動かして裏筋を刺激しており、亀頭を内頬と喉奥を使つて擦り上げるご奉仕フェラチオは見た目以上に気持ちが良い。

口の両端から唾液がダラダラと零れて顎先にまで伝い、雫となってベッドに落ちる。

彼女の自由な両手は重たい睾丸を包み込むように支えており、合計







呼気に雄の濃い性臭が混じっていた。お腹のじんわりとしたザーメンの熱が失われるのが惜しいのか、胃の中の精液を魔力に還元にはしていないようだ。

少なくとも二度目の射精を終えたのにも関わらず、未だに勃起した状態のままであるペニスにアルトリアオルタはウツトリとした表情を浮かべながら愛おしそうに頬ずりをする。両手を使ってシコシコと扱きながら優しい快感を与えていた。

「気持ち良かったよ。零さずにザーメン全部飲んだのも偉いぞ」

男はアルトリアオルタの形の良い頭を優しく何度も撫でた。目を細めて喜ぶ彼女は自慢気に語り始める。

「んうっ♡ マスターのメス豚として当然ですっ♡♡ どこぞの旗振り女はオチンポ様へのお掃除フェラチオも満足に出来ない……強いて上げれば乳くらいしか取り柄の無い女だ。しかし、私ならばマスターのオチンポケースとして、満足して頂ける自信がありますっ♡♡」

「——どうしても大きい乳が欲しいというなら、ロンゴミニアドの私はいかががでしょうかっ♡ 聖槍を手にして成長した私と合わせて美味しく「聞き捨てならないわね。聖剣女」——何だもう起きていたのか。チツ、大人しく寝ていれば良いものを……」

自分ともう一人の可能性である自分を売り込むアルトリアオルタの話の遮ったのは、気絶していたジャンヌオルタだった。男の背中にしな垂れ掛かり巨乳を押し当てながら、アルトリアオルタを怨敵でも見たかのように睨んでいる。

「胸も貧相なら頭も貧相なのね。マスターは直ぐにイッチャウ私が大好きなのっ♡ 毎日ラブラブ種付け交尾をしているお嫁さんな私の方が愛されているって分からないのかしら？」

「……言いたいことはそれだけか。マスターがセックスして下さる回数には私の方が多い。トイレや物陰でも命じられれば直ぐに股を開く私の方が、マスターの所有物として優秀に決まっているっ♡ マスターの溜まった性欲の処理も出来ない駄目女は、もっと肉便器として己を磨くべきじゃないのか？」

「私だってマスターが望むなら廊下やトイレでも喜んでセックスします♡♡ 私よりマスターとセックスするのが少し早かったからって先輩面しないでよ」

「貴様がどれだけ喚こうがマスターの初めてを頂いたのはこの私だっ♡♡ 二番目は二番目らしくそこで黙って、これから行われる私とマスターの熱い情事を見ていろ」

二人は睨み合いながら如何に自分が男に愛されているかを自慢し合っている。

それを眺めていた男は苦笑を浮かべながら、昔のことを思い出す。

「——二人とも凄いエッチになったよね」

元々、性に対しての知識や関心が薄かった二人。

高圧的で排他的な性格をしている似た者同士達が、今では美しい裸体を晒しながら男に媚びるように肢体を擦り付けている。

ジャンヌオルタは汗と母乳で濡れた豊満な乳房やお腹を男の背中にピツタリと押し付け、アルトリアオルタもシミ一つない処女雪のような太ももで男の片足を挟み込んでペニスへと頬ずりを続けている。どちらも男への媚びや好きになって欲しいという思いが透けていた。

男の何気ない言葉を聞いた二人は争いを止めて同時にジト目を向けた。

「……マスターが私をスケベなメス豚に仕込んだのだぞっ♡」

「マスターがエッチが好きな女が好きっていうからっ♡」

合計4つの金色の瞳に睨まれた男は苦笑を浮かべながらことしか出来ない。

息の合った二人の言動に対して、内心で『やっぱり仲が良いな』と思う。しかし、これを言葉にすると烈火の如く怒られる。彼女たちはお互いに相手に対してだけは素直ではないからだ。

周りに人を寄せ付けようとしないう彼女達が、どうしてここまでマスターとの淫愛に墜ちてしまったのか。

——それはまだジャンヌオルタが召喚されるより前まで遡る。

本編――1：アルトリア・オルタはお嫌いですか？

## 第一話：暴君の騎士王と万能の才人の交渉

使用用途が良く分からない実験器具や古めかしい望遠鏡が雑多に置かれた部屋。寝具などが見当たらないので、私室と言うよりは工房が正しいのだろう。

天井からつるされた鳥の模型が二人分の人影を見下ろしていた。

万物の才人と呼ばれた男が油絵で描いた稀代の名作。”モナ・リザ”に非常に良く似た女性とホワイトブロンドの綺麗な髪を後頭部でお団子にまとめ、三つ編みで巻き付けたシニヨンと呼ばれる髪型の少女が座っていた。

モナ・リザに良く似た女性こそ、人類史上の最大の天才と名高い、万物の才人”レオナルド・ダ・ヴィンチ”その人である。生前は男性であったのだが、自身の傑作であるモナ・リザが好きすぎて、モナ・リザの姿でサーヴァントとして召喚された生粋の変人だ。

そしてシニヨンヘアーの少女こそ、かのアーサー王伝説の騎士王にして、暴君や怒りの体現者としての側面が強く現れたアルトリア・ペンドラゴンその人である。民の安寧といった理想を最期まで追い求めたアルトリア・ペンドラゴンよりも、現実主義で非情に徹しきった騎士王としての側面が強いため、アルトリア・ペンドラゴン・オルタと呼ばれる。

アルトリアオルタの表情や身に纏う雰囲気は刺々しく冷めた印象を与えるのだが、シニヨンのお団子を黒色の大きなリボンで結んでいるのが妙に可愛らしかった。スラリと長い足を組みながら木製の椅子に座っている。機嫌があまり良くないのか木製の机を人差し指でトントンと叩いていた。

「それで――マスターの体調に関することで手助けが必要だと言われて来たのだが……一体何があったのだ？ 私が見ていた限りでは、マスターが怪我や病気をしているようには見えなかったが」

その質問にダ・ヴィンチは宥めるように答える。

「まあまあ、そう慌てずに……落ち着いてくれたまえ。マスター君の体調については今すぐに命に関わることでないよ。これは医学や解剖学、魔術にも精通する万物の才人である私が保証しよう！」

「……本当に直ぐには命には関わらないのだな？ それなら一先ずは安心だ。私に出来る範囲のことであれば、多少の助力もしよう。マスターにはハンバーガッ……こほんっ、食べ物など日頃の恩もあるからな」

先程までの刺々しい雰囲気が幾分か柔らかくなっていった。

アルトリアオルタなりに自分のマスターである”藤丸 立香”を心配していたからこそ、悠長に身構えているように見えたダ・ヴィンチに対して苛立っていたのだろう。

雰囲気は柔らかくなったアルトリアオルタにダ・ヴィンチも内心でホッと胸を撫で下ろした。仮にも多数の英雄の中でも最強クラスの存在であるアーサー王に敵意を向けられるのは、精神的に堪えるものがあるのだろう。それが容赦や甘さが無くなったオルタ化しているなら尚のことである。

「ふう……それは良かった！ このままマスター君の問題を放置していると、特異点攻略にも支障が出る可能性があったからね。それに何も対策を講じなければ最悪の場合は、命にも関わるかも知れない。だからこそ予防措置として、マスター君に一番信頼されている君に協力して貰いたかったのさ」

「一番信頼か……悪い気はしないな。それで私は何をすれば？」

アルトリアオルタ自身も無意識の内に頬が緩んでいる。きっと彼女にアホ毛や尻尾が生えていれば、嬉しそうにピコピコと揺れていただろう。

ダ・ヴィンチは内心で微笑ましいと思いつつも、大人であるからそれを抑えたりはしなかった。そして、一つだけ深呼吸をした後、努めて真面目に協力して欲しい内容を伝える。

「——協力と言っても簡単なことさ。マスター君の性欲を発散するのを手伝ってあげて欲しいっ！」

「……………ふざけているのか?」

「私はいつも大まじめだよ」

「分かった。私を馬鹿にしているんだな——叩き切つてやろうっ！」

アルトリアオルタは黒い聖剣”エクスカリバー”を鞘から抜き放とうとする。そして、このまま誰も止めなければダ・ヴィンチに向かって”エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣”を開放し、工房ごと全てを吹き飛ばすだろう。それ程までに怒っていた。

ダ・ヴィンチは慌てた様子で両手をアルトリアオルタに向かって突き出す。それは迫ってくる車を止めようとしているようにも見える。いつもより若干早口で捲し立てるように理由を説明し始める。

「待つて、待つてっ！ これは本当にふざけてない。とつても大事なことなのさっ」

「マスターのせつ、性欲処理のどこが大切なんだ!? 馬鹿も休み休み言わないとカルデアごと本当に切るぞっ！」

「だ・か・ら——このままマスター君が色々溜め込むと本当に死んじゃうんだってっ……………ほらっ！ マスター君は何度か契約しているサーヴァントの夢とかに入り込んでるだろう? アレって実は非常に危ないことなんだよ」

「……………確かにマスターが何度か夢の中で、危機に陥つたと聞いたことはある。それがどうして性欲処理と関わってくるんだ?」

アルトリアオルタは数瞬の間、聖剣の柄に掛けていた手を離

す。

ダ・ヴィンチからちゃんとした説明が聞けると思ったから、今すぐ手を出すことは止めたようだ。勿論、下らない理由だと分かれば再度、抜刀しようとするだろう。

話を聞いてくれるようになったと思ったダ・ヴィンチは姿勢を正す。咳払いした後には人差し指を立てて、順序立てながら説明を始めた。

初めからこうしていれば、先程の争いも起こらなかったような気がするが気のせいだろう。

「二つ目、マスター君の感受性が高いからなのか、それとも別の理由があるのかは分からないけれど。無意識化でマスター君はサーヴァントの心や記憶に触れて影響を受けている。夢の中でサーヴァントの心や記憶に入っているのが分かりやすいかな。

一般人が英霊と呼ばれる超常の存在と深く繋がるのが、精神に対して重度の負荷を掛けることは何となく分かるだろう？

更にマスター君の場合は数十……百近いサーヴァントと契約をしている。こんなに沢山の英霊と契約した前例は無いんだから、どんな影響が出ても不思議じゃ無いんだ。最悪の場合は、精神が摩耗して自分を無くしてしまう可能性すらある」

「……それは」

口ごもるアルトリアオルタ。

否定したかったが、否定できる要素が何一つとして無かった。少しでも戦力が必要な今の状況下で、サーヴァントとの契約を切る訳にもいかない。きっとこれからもマスターは「縁」を繋いだサーヴァント達を召喚して、契約を続けていくだろう。その結果、何が起こるかも分からないのに。

ダ・ヴィンチは人差し指の次に中指を立てて、二つ目の理由を述べる。



「二つ目、特異点を攻略していく中でマスター君は多くの”死”に触れている。訓練もされていけない一般人には、本当に酷なことだよ。訓練された人間だって戦争後にPTSDを患って、苦しんでいる人間もいる位だからね。」

それに全人類の命運を彼は一人で背負っている。逃げたくても折れたくても、彼はどこにも逃げられないし折れることも出来ないんだ。表面上は明るく取り繕っていても重圧は相当なものだろう。幾らロマニ……ドクター・ロマンが優秀でも、メンタルケアには限界がある」

「……マスター」

同情か憐憫か——それとも故郷ブリテンを騎士王として最期まで守り続けようとした自分と重ねてしまったのだろうか。アルトリアオルタの表情には深い悲しみが浮かんでいた。無意識で分かっていたことだが、言葉にして説明されると人類最後のマスターの境遇と運命は壮絶だ。一度でも敗北することが許されない戦いで、常に七十六億の命を背負っているのだから。

ダ・ヴィンチも悲し気な表情を浮かべながら、人差し指、中指に続き薬指を立てて、三つ目の理由を述べる。

「最後に三つ目、これは最近になって分かったことなんだけど。マスター君はあらゆる状況において”良くないモノ”を少しずつ貯め込んでいるみたい。怨念や呪詛と呼ぶしかない、人間の強い思いだったりをね。」

溜まっていく”淀みの塊”や”性悪の残滓”を放置すれば、マスター君を呪い苦しめることになる」

「——っ、それは本当に大丈夫なのか!?!」

これにはアルトリアオルタも驚きの声を上げざるをえない。

人の想い。それも怨念や呪詛といったモノは強力だ。それこそ『呪い殺す』という言葉がある位なのだ。それが精神か肉体のどちらを傷

付けるものかは分からないが、放っておいて良いものでは決してない。

「うん、これに関してはマスター君の中に住んでいる。『共犯者』を名乗る英霊が心の異物や呪詛をまとめて焼却してくれているから、基本的には大丈夫らしいよ」

「それは別の意味で大丈夫なのか……」

体の中にいつの間にか英霊が住み着いていると言われれば、多少なりとも恐ろしいものだろう。本人的には完全に善意で行動してそうな所と実際、有益なことしかしていないので何も文句は言えないのだが。

アルトリアオルタには『クハハハハ』という、独特な笑い声が聞こえた気がした。

「まあ、マスター君は清姫や静謐のアサシンとかに常日頃からストーリーカーされてるから、そんなに気にしてないみたいだよ。『守って貰えるなら心強い』って、本当に平気そうに笑ってたから」

「マスター……」

先程とはまた違った同情と憐憫をアルトリアオルタは覚える。

特異点攻略中では無いカルデアの生活でも、心の安寧が得られなさそうな状況に対してだ。自分よりも遥かに強い存在に四六時中見張られるのは、一体どんな心持ちなのだろうか。それはマスターである藤丸 立香にしか分からないことだろう。

「さて、ここからが本題なんだけど。共犯者の焼却も完璧では無いらしくてね。少しずつ呪詛の欠片のような物が蓄積していつてしまうんだ。その時にマスター君が負の感情を抱えていたり、ストレスが強ければ強いほど——呪詛の欠片は強大な“モノ”に変化する。だから——」

ここまでの説明を受けて、アルトリアオルタもダ・ヴィンチの意図を察したようだ。何とも言えない表情を浮かべつつ答え合わせをする。

「——ようやく話が見えてきた。マスターが呪詛の化け物に殺されな  
いために、ストレスを抱えやすい状況下でも、どうにかしてストレ  
スを減らす必要があるのだろうか」

「Exactly! マスター君にはストレスや負の感情の捌け口が  
必要なんだ。健全なストレス発散方法とかは既に色々試しているか  
ら……古今東西、疲れ傷付いた男を慰める方法は決まっているだろう  
？」

「……女の柔肌だな。高潔な騎士道には反するが、”この私”は理解  
も納得もある程度は出来る。円卓の騎士にも、その手の不義を働く者  
は少なからずいたからな……」

アルトリアオルタの脳裏には、女好きの夢魔である花の魔術師と豎  
琴を弓として操る嘆きの騎士、円卓崩壊の元凶でもある湖の騎士の姿  
が浮かんでいた。既にブリテンも滅び、英霊となった今では恨みなど  
無いが、あまり思い出したく無い記憶なのには変わりはない。

また、彼女には一つ疑問があった。

「何故、私なんだ？ それこそ清姫や他にもマスターを好いている女  
はいるだろう。彼女達に頼めば、喜んで協力するだろう？ 個人的に  
騎士として力を貸すのは良いが、女として尽くすのはまた話が別だ」  
「あ……それはマスター君の争奪戦。聖杯戦争ならぬ正妻戦争が起  
こるのを防ぎたかったんだよね。本当にふざけている訳じゃなくて、  
下手をすればカルデアが崩壊しかねないから。血で血を洗う女達の  
醜い争いは避けないと」

ダ・ヴィンチの説明に少しだけ違和感をアルトリアオルタは感じ

た。嘘は吐いていないのだが、肝心な部分を意図的にはぐらかしているような。それはどこぞの花の魔術師のような――

「――それでも私が選ばれる理由としては弱いのではないか？ 正直に答えろ……私が適任だと助言した、胡散臭い千里眼持ちの夢魔がいるだろう。あの男、幽閉塔の上からこちらを盗み見るだけでは飽き足らず、下世話な話にまで首を突っ込むかっ！」

スキルとしての直感が働いたのか、それとも付き合いの長さによるある種の信頼なのか。アルトリアオルタは花の魔術師”マーリン”がこの件に関わっているとほぼ確信していた。

きつと今頃、アヴァロンにいるマーリンは『ハハハっ、バレたか。いやはや困ったな』などと笑いながら、？気に頬を搔いているだろう。嫌、エクスカリバーで本当に叩き切られる可能性を考えて、割と本気でビビっているかもしれない。

金色の鋭い視線に晒されたダ・ヴィンチは眉を下げて苦笑を浮かべると、降参したように両手を上げた。ここで？を吐いても自分に身の危険が及ぶだけだ。大人しく全てを告白するのが最善である。

「君の考えている通り……『カルデアがハッピーエンドを迎えたければ必要なことさ』と、ありがたい助言してくれた人物は確かにいたよ。多分、本人では無く幻だったと思うけど」

「それはそうだろう。あのいたずら好きの老人は引きこもりだからな。だが、わざわざ助言してきたと言うことは、そういうことなのだろう……」

自他共に認めるクズだが、花の魔術師は心からハッピーエンドを望んでいる存在ではある。基本的に外界とは関わらず、世界を眺めるだけ信条としている。その信条を曲げてでも今回の件に関わってきたということは、カルデアを良い結末に持つていくために必要だということだ。

アルトリアオルタもそれが分かっているからこそ、断るに断れなくなっていた。

（私である必要性は分からないが、ダ・ヴィンチの話の通りマスターは精神を病むか、呪詛によって死ぬのだろう。そうなればカルデアと人理の崩壊は確実か……）

彼女は深いため息を一つ吐いた。

「はあ……仕方あるまい。良いだろうマスターの件、引き受けよう。元々、私に出来る範囲で協力すると言ったのは間違い無いからな」  
「本当かいっ！　花の魔術師が関わっている時点でもう駄目だと思っ  
てただけど」

「取り敢えずマーリンは後で必ず殺す。しかし、私怨と必要なことは別だ。マーリンが召喚されればシミュレーターを暫く借りるぞ……  
良いな？」

「勿論っ！　必要なだけ使って貰って構わないよ」

今日一番の笑顔でダ・ヴィンチは花の魔術師を売った。

元々、こんな事態になったのはマーリンのせいなので、完全に自業自得である。

「……マスターには今夜、私の部屋に来るように伝えろ。それと分かっていると思うが、くれぐれもマスターのモニターや盗聴、監視、それに類するモノが無いように動け。仮にそれが守られなければ、本当にカルデアを破壊する」

「それに関しては私に任せてくれたまえっ！　カルデアのモニターから、電子機器や魔術的なものまで全てをどうにかしよう。万物の才人たる私が全力を尽くすことをここに約束しよう」

「良いだろう……話はこれで終わりだな。マスターへの連絡は任せただからな」

ダ・ヴィンチの工房からアルトリアオルタは去っていた。こうしてダ・ヴィンチの命を懸けた交渉は一応の成功で終わった。マーリンの尊い犠牲は誰もが忘れるだろう。

実際、今回の件で一番苦労していたのは間違いなく彼女であった。座っていた椅子からズルズルと崩れ落ち、地面に寝転がる。頬を地面に押し当てながら、独り呟いた。

「あく、地面って冷たくて気持ち良いね。暫くこのままでもいい」

ダ・ヴィンチが地面に寝そべっていると工房の扉が開き、オレンジ色の髪をポニーテールにした長身の男性が両手にコーヒーの入ったカップを持って入ってきた。

「ココアを淹れたからレオナルドも飲むかい——つて、君は何をしているんだい。寝るならベッドにしてくれよ」

友人の奇行に驚く男性は、胡乱気な目でダ・ヴィンチを見詰める。

「はははっ、別に眠くはないよ。ココアも貰おう。少し、世界を救うための交渉をされていてね」

「今日はいつにもまして意味が分からないことを言うなあ……ボクも人のことは言えないけど、たまにはゆっくり休んだらどうだい？」

ダ・ヴィンチは少しだけ逡巡した後、いつもだったら絶対に考えないことを思いついた。

「確かに休息は必要だね。マスター君がある意味美味しい思いをするんだから、私も少しくらいは良いよね……」

「何だつて？ 後半が聞き取れなかったんだけど」

「いや、何でもないさ。——ところで今夜、少しだけ時間を貰えないか

い？ お互いのストレス発散や疲労回復のために、私の部屋に来て欲しいんだけど」

「え？ 少し位なら別に良いけれど……」

ダ・ヴィンチは一瞬だけ妖艶な笑みを浮かべて舌なめずりをした後、『約束したからねっ♡』と呟いた。地面からパツと起き上がり、男性——ロマニ・アーキマンからココアを受け取った。

首を傾げるロマニが今夜どのような目に遭うのかは、その場にいた二人にしか分からない。しかし、次の日に腰を抑える妙にやつれたドクター・ロマンと肌が艶々で妙に機嫌の良いダ・ヴィンチが目撃されたことだけは伝えておこう。

---

——時刻は夜の九時まで進み、場所はアルトリアオルタの部屋の前に移る。

首を傾げながら扉をコンコンと軽く叩く、マスター”藤丸 立香”の姿があった。

「あの……アルトリアオルタ居る？ ダ・ヴィンチちゃんに来るよう  
に言われたんだけど」

「……居るぞ。取り敢えず入って来い。話はそれからだ」

「うっ、うん。お邪魔します——」

これがマスターとアルトリアオルタの淫靡な生活の始まりだった。

## 第二話：暴君と主人は支え合う（デイープキス）

「……居るぞ。取り敢えず入って来い。話はそれからだ」

「うっ、うん。お邪魔します」

金属製の自動扉が開かれた。

マスター”藤丸 立香”は戸惑い気味に、アルトリアオルタの部屋へと入る。

何故か部屋の明かりが全て消えているため部屋全体が薄暗く、視覚から入ってくる情報が殆ど無い。したがって最初の知覚情報として入ってきたのは嗅覚からのものだった。

濃厚でうつとりするように甘く繊細な花の香りが、マスターの鼻腔に自然と入ってくる。記憶を掘り起こすとそれがジャスミンの匂いであることが分かった。ジャスミンは香りの良さから別名”花の王”とも呼ばれており、古くから世界各国で愛され、香水の原料にもなることで有名だ。

部屋中に濃密な花の香りが広がっているのでは無く、仄かに薰る程度であるのが余計に居心地の良さを覚えてしまう。どれだけ良い匂いでも強すぎれば、それは刺激になってしまふのだ。

ジャスミンの良い匂いに女性の部屋に入って来たのだと、急速にマスターの脳が理解を始める。悪いことをしている訳でも無いのに、気恥ずかしさや気まずさを感じてしまう。

無言でいることに耐えられなくなり、マスターは一先ず疑問に思っていたことを口にする。

「ダ・ヴィンチちゃんは詳しく教えてくれなかったんだけど、何か用件があったから呼んだんだよね？——やっぱりマスターとしての力不足とかかな……それなら本当にごめん！アルトリアオルタが弱い人間が嫌いなことは知ってるけど、もう少しだけ力を貸して貰えないかなっ」



これは全てマスターの本心である。自分の不甲斐なさを誰よりも理解しているからこそ、今回のアルトリアオルタからの呼び出しも叱咤やカルデアから退去したいという内容なのかと思っていたのだ。

表面上はいつものポジティブで元気なマスターに見えるが、明らかに精神的な疲労や卑屈さのようなものが垣間見えていた。常に自分の不甲斐なさを呪い、それを心の底から恥じている。

——それは心の闇と定義して良いものだ。

既に特異点Fを含めて五つの特異点を攻略しており、その中で何度も死を覚悟するような目にも遭っている。度重なる死線と常日頃から善悪を問わないサーヴァント達との関係構築。本人にも認識が来ていない根本的な部分で疲れやストレスが溜まっているのだろう。

アルトリアオルタはダ・ヴィンチが話していたマスターのストレスや負の感情が蓄積されていることが、間違いでは無かったのだと確信出来た。

(やはりマスターにはストレスや負の感情を吐き出す場所が必要か。私が思っていた以上に今の状況は精神的な負荷が激しいようだな)

「……私は別に責める気持ちは無い。マスターは過酷な環境下で、本当に良く頑張っている」

「はははっ、ありがとう。だけどまだまだ足りない所ばかりだから、いつかアルトリアオルタにも一人前のマスターだって思っただけで貰えるように頑張るよ」

「——っ、今日はマスターの労いをしようと思って呼んだ。いつでもも立っているのも辛いだろう、こちらに来い」

ベッドの縁に座るアルトリアオルタは近くのフロアライトの電気を点けた。ベッドの周辺だけが淡い光で照らされる。微光で浮かび上がるのは当然アルトリアオルタの姿なのだが、その恰好がマスターを驚かせた。

アルトリアオルタは最終再臨の衣装に似たネグリジエを身に纏っていた。紺色の薄手の生地で作られた短いワンピースのようなデザイン

ン。しかし、華奢な肩や胸元、シミ一つない背中、眩しい太ももから先が全て露わになっている。女の肌は真珠に例えられることもあるが、彼女よりも真珠のような肌という例えが相応しい者もないだろう。

透き通るようなきめ細かい白肌と僅かな光沢を放つ紺色のネグリジェのコントラストは、磨き抜かれたブルーサファイアが嵌め込まれた精巧な銀細工のように美しい。今この瞬間を写真に収めれば、それだけで美術品としての価値が生まれそうな艶姿である。

「おい、聞こえているのか？」

いつものシニヨンの髪型は解かれており、背中まで伸びたホワイトブロンドの髪が下ろされていた。髪型だけで相手に与える印象が大きく変わるものだが、いつもの凛々しさが全て可愛らしさに変換されている。元々、少女のような容姿だが、より幼く見えるせいでインモラルな色気が感じられた。

きつと湯上がりなのだろう。頬が僅かに上気しており、髪も若干湿っている。瑞々しい肌が更に潤っているため、陶器のような肌に視線が自然と吸い寄せられてしまう。

健全な青少年であるマスターも例に洩れず、アルトリアオルタの魅力に完全にやられている。理性でどれだけ抑え込もうとしても、本能が彼女の肢体を見詰めてしまう。

普通 of 精神が弱い人間であれば、無理だと分かっているても手を出さうとする者の方が多いことを考えれば、十分に紳士的ではあるのだが。

一体どれ程の間、見惚れていたのだろうか。ハッと意識を取り戻したマスターは頬を紅潮させながら、その場でクルッと回って後ろを向く。

「あつ、アルトリアオルタっ！ ご、ごめん。凄く綺麗で見惚れてしまつて——つ、何言ってるんだらう!?! とつ、とにかくごめんっ」

完全に脳が混乱している初心なマスターの反応に、アルトリアオルタはクスリと笑ってしまう。口元を手で隠しながら、空いている片手で自分の隣であるベッドをトントンと叩く。

「ふふっ、私は近くに来いと言ったんだ。私の隣が空いている、座って話すぞ」

「いつ、嫌……その恰好のままだと。せめて上に何か羽織ってくれと助かります……はい」

「見たければ見ても良い。それよりも本題に入りたい。早くしろ」

何度か迷ったそぶりを見せたマスターだったが、観念したのかなるべくアルトリアオルタの方を見ないようにしながら、彼女と一人分程の間を空けてベッドの縁に浅く腰掛けた。

今も視線がバタフライでもしているかのように泳いでおり、油断するとアルトリアオルタの方を見てしまうため、悪魔の囁きや欲望を跳ね除けるように視線を壁に戻す作業を何度も繰り返している。

火を見るよりも明らかな童貞っぽさ全開のマスターは、さっさと用件を終わらせて、この良い匂いのする部屋から退散しようと覚悟を決めたらしい。

「そっ、それで用件って何かな？」

「——そう緊張するな。その状態では碌に話しも出来ないだろうから、酒でも飲みながらゆっくり話そう。これは中々の上物だぞ？」

アルトリアオルタはワインのボトルと二つのグラスの置かれた小さなテーブルを指差しながら言う。初めから部屋にあったのだが、マスターはアルトリアオルタに見惚れていたせいで見落としていたようだ。

かなりの酒豪であるアルトリアオルタは手慣れた手付きでワインボトルのコルクを外し、二つのグラスに鮮血のような赤ワインをトク

トクと注ぐ。片方は自分に、そしてもう片方はマスターへと渡す。

「飲め——話はそれからだ。仮にも王から酌をされた酒だ……飲めぬとは言わせんぞ」

「いや、まだ未成年なんだけど」

「どうせ外の法は働いていない。それに私の生きた時代では既に成人しているだろう。マスターは色々と考えこみ過ぎだ。たまには羽目を外すのも必要なことだぞ」

受け取ったグラスを少しの間だけ見詰めたマスターだったが、意を決したようにグイッと赤ワインを呷った。想像していたかどうかジューズとは完全に別物の酸味や渋み、そして酒精を感じる。今まで味わったことの無いものだったが、鼻を抜けるイチゴやチェリーのような香りも良く、素直に美味しいと感じられた。

「んっ、美味しいね……」

「ふふっ、言っただろう中々の上物だと。どうやらマスターは行ける口のようなだな。ほらっ、グラスを出せ」

アルトリアオルタはマスターの乾いたグラスにワインボトルを傾ける。

それからお互いに何度かお酌をしながら、無言で何も無い壁を見ながらグラスを乾かしていく。殆ど音のしない無言の状況だったが、その無言の間が苦痛に感じるわけではない。マスターが久しく忘れていた”慌ただしくない時間”がゆっくりと過ぎていく。

マスターが最後の一滴をアルトリアオルタのグラスに注ぎ終わった頃、ゆっくりと彼女は話を始める。その声はいつもより幾分か優しい声色だった。

「——マスターは私の過去を知っているか？」

「それは……うん。アーサー王伝説なら今を生きる人間だって聞いた

こと位はあるよ。アルトリアオルタが選定の剣を引き抜いて、王に選ばれた所からが始まりだよ。それから聖剣エクスカリバーを湖で手に入れたり、円卓の騎士を作り上げて――」

「大層な話では無い。民が望む理想の王になろうとした、愚かで孤独な女の話だ。多くの騎士を失い裏切られ、最後はアヴァロンに消えた……マスターは私のようにになるな」

アルトリアオルタの言葉にマスターは驚いたような悲しむような、その二つがぐちゃぐちゃに混ざり合った表情をした。急速に乾く口内をワインで潤すと、ばら撒かれた硬貨の中から単語を探すようにゆっくりと言葉を紡いでいく。

「元々、俺にはアーサー王のように強くは生きられないよ。いつだって誰かに助けられながら、小さな歩幅で一步ずつ、前に進むことしか出来ないポンコツだから。きつと、俺以外の候補者が生きていけば”もつと上手く”出来たんだ」

マスターの持ったグラスの中の液体を小さく震わせながら、神に懺悔でもするように心の内を告白していく。酒精が思考と理性を鈍らせたからこそ、出てきた虚勢を取り払った本音だった。

「アルトリアオルタはAチームって知ってる？ カルデアの爆発が無ければ、特異点攻略の最前線で活動予定だった、魔術師としてもマスターとしても優秀な人達。Aチームの内一人でも爆発から逃れていれば、七つの特異点の攻略もとつくに終わってたかもしれないんだ。もつと犠牲も少なくね……」

「それは……」  
「うん、分かってる。たれば何て話しても意味がないよね。世界中で一人だけ生き残ったマスターは俺しか居ないんだから……絶対に人理修復は成し遂げるよ。例え――」

きつと、その言葉の続きは『死ぬことになっても』だった。最後まで言えなかったのは、アルトリアオルタがマスターの震える肩を抱きしめたからだ。

国のために独りになった女が、世界を救うために独りになろうとしている男に寄り添う。まるで過去の自分と未来の自分が交錯しているようだ。全く違うモノ同士のように見えて、二人の本質はまるで同じだった。

(マーリンが私でなくてはならないと言った理由がようやく分かった。過去の自分を救えと言いたんだな。そして、私に王ではなく、人として、女としての幸せを手に入れろと……お前の思い描く”美しい絵”は、本当に悪趣味だ)

マスターを抱き締めるアルトリアオルタも、今にも泣きそうな顔をしていた。自分はこんなにも痛ましい存在だったのかと思い知らされているからだ。

赤い弓兵が『過去の自分ほど殺したいものは無い』と、言っていた理由が漠然とだが理解出来てしまう。辛い道に進むのが既に分かっているのに、それを止めない方がおかしい。

「——やはりマスターは私と同じだ。誰かのために最初に自分の幸福を切り捨てようとしている。それでは人の心が分からない”人間モドキ”になるぞ」

「でもっ、他に道なんて無いよ。一人の犠牲で七十六億の人間が救われるなら、考える必要もない計算じゃないか。元々、幸運だけで拾った命。あの時の爆発でとつくに死んでたと思えば気楽だ」

マスターの持っていたグラスが床へと落ちる。砕けたガラスの欠片と床に広がる赤い液体は、マスターの未来を暗示しているようだった。

「違う。私の結末は知っているだろう。人の心が分からない王は何も守れず消えるだけだ」

「それならっ、どうすれば良いんだ！ どうすればっ……」

マスター自身も自覚出来ていない涙が、アルトリアオルタの白い肩を濡らしていく。その涙の理由が悲しみなのか、苦しみなのか、恐怖なのかすら分かっていない。ぐちゃぐちゃになった感情がただ出口を求めて、涙と嗚咽に変換されて外に出ていく。

とっくの昔にマスター”藤丸 立香”は限界だった。

彼はまだ二十歳にもなっていない、ただの心根の優しい少年でしかない。魔術や死、波乱から最も遠い所で生まれ生きてきた一般人だった。それが訳も分からぬままカルデアに連れて来られ、いつの間にか人類最後のマスターとしての責務と重圧だけを押し付けられた被害者だった。

ひび割れた心を責任感と使命感で補強していたから、平気に見えていただけだったのだ。

アルトリアオルタは両手でマスターの頬を抑える。涙で潤む蒼の瞳をジッと見詰めた。恐怖して、怯えたような、それでも前を向こうとする彼の姿は、彼女が生前に愛した国の民に似ている気がした。

（良いだろう……マスターは私が最後まで支える。サーヴァントとしてでは無く、マスターを”愛する女”としてだ）

ある種の義務感や同情、憐憫であったマスターへの想いが、確かな恋心や愛情に変わっていく。

その想いはとても強く、今のアルトリアオルタの霊基を通じて彼女の本体がいる”座”に、記録では無く記憶として刻まれていく。それは心の底から”強い衝撃”が無ければ起こらない現象であり、アルトリアオルタの座に藤丸 立香への愛が永遠に残るものだった。

「私にもどうするのが正解なのかは分からん。私自身が失敗した人間だからな」

「そんなんっ……」

答えは無いのかと絶望するマスターに、アルトリアオルタは聖母の

ように微笑む。

「だが、マスターを私と同じ末路にはさせん。

似た者同士、これからは二人で心を分かち合おう……んむっ♡」

マスターの唇をアルトリアオルタが奪う。

唇同士を触れ合わせるだけの幼稚な接吻であるが、本当にお互いの心まで繋がり合ってしまうような感覚があった。

互いの体温と唇の柔らかさを感じながら、一生の記憶に残るファーストキスが交わされる。長い間キスは続き、自然と合図をする訳でも無く二人同時に唇が離れた。

二つの荒い呼吸が部屋に木霊する。

アルコールによるものでは無い赤みが頬に差していた。混乱しているマスターとうっとりとした表情を浮かべるアルトリアオルタは、鼻先が擦れ合う距離で言葉を交わす。

「アルトリアオルタっ……なんで」

「ふふっ、私は決めたぞ。もうマスターを離さん……一生傍で心を繋ぎ止める楔になろう。過去の私と同じ人間モドキになど、死んでもさせんから覚悟しろ——んっ♡♡」

二度目のキス。

その後はマスターが話そうとしても三度、四度と矢継ぎ早に唇が重なるせいで言葉が続かない。互いの鼻息が顔に掛かるこそばゆさすら楽しく感じながら、アルトリアオルタはキスを繰り返す。

何度目のキスかも分からなくなった頃、気付けば二人の体勢が変わっていた。

ベッドに仰向けになるマスターと、その上に覆いかぶさるアルトリアオルタ。誰が見ても愛し合う男女の姿にしか見えない。アルトリアオルタの思いを表すように、両手とも恋人繋ぎで手を握っている。



「——ぷはっ♡ はあ……キスとはここまで心が満たされるモノだったのだな」

「駄目だっ……今ならまだ間に合うから。止めてくれっ」

「私は暴君だから絶対に言うことなど聞かない。もつと深く繋がるうっ♡ ——んむっ♡ ちゆるっ♡ じゆるっ♡♡」

再びキスを止めようとするマスターの唇が塞がれ、更にアルトリアオルタの舌が口内に入ってくる。目を見開き驚くマスターを無視して、彼女は内頬や歯茎を舌で舐めた。口は固く閉じられているので、それ以上先に進むことは出来ないが、そんなことは殆ど抵抗にもなっていない。

「じゆるるるっ♡♡ ちゅぷっ♡ んむっ………ぢゅっ♡ ちゆるるっ♡♡」

口内に溜まった唾液を音を立てて啜られ、逆に唾液を流し込まれる。アルトリアオルタの舌先が二人の唾液を掻き混ぜ、半分ずつ分け合うように互いの口内に入っていく。赤ワインのイチゴやチェリーの香りが未だに残っているせいで、より唾液が美味しいと感ぜられてしまう。

「はあっ♡………はあっ♡……マスターの唾液美味しい。マスターも私の唾液は美味しいか？」

「——っ」

「強情だなっ♡ だが、マスターも知っているだろう？ 私は負けず嫌いだっ♡ れろお——っ♡♡」

アルトリアオルタはもう自分のものだと主張するように、マスターの唇を優しく何度も舐め上げる。動物のマーキングのようにマスターの唇を唾液でベトベトにした。その唇に愛情を伝えるようなキスを繰り返し、お互いの唇がふやけるまでキスを続ける。混ざり合っ

てしまうような錯覚を覚える程の快感に酔ってしまふ。

「——ぷはっ♡♡ はあ……お互いに忘れようの無いキスをしてしまったぞっ♡♡ これからマスターが私以外とキスをして、一生忘れられなくなってしまうたなっ♡♡♡」

「はあ………はあ……俺と一緒にだとアルトリアオルタが不幸になるっ……一緒に居られない」

「ふふっ、この期に及んでまだ私を思いやっているのだなっ♡♡♡ そんな所も好きだぞっ♡」

アルトリアオルタはマスターの耳元で吐息混じりに『愛しているっ♡』と囁き、耳を軽く舐めた。何度も何度も耳元で愛を囁きながら、愛される幸せと喜びをマスターに刻み付けていく。それは正しく人の心繋ぎ止める楔だ、愛と幸せがマスターの心の壁を優しく溶かす。

人間というものは一度知ってしまった幸福は忘れられないものだ。それが強い幸せであればある程、拒むことも手離すことも出来なくなっていく。

「……マスター♡ 私にだけは弱い所も醜い所も全部見せろっ♡ 全て受け止めてやる……ちゅぷっ♡♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡♡ ちゅるるっ♡♡ 私もマスターのモノだっ♡♡♡ んむっ………れるお♡♡ じゅるるるっ♡♡」

その後もデープキスは繰り返され、次第に苦しくなっていく呼吸によって思考や理性が弱まっていく。歯茎を丹念に一本ずつなぞられていく内にマスターの口を閉じる力も弱まっていき、遂には口が開いてしまふ。

「——っ♡♡ じゅじゅっ♡ ちゅるるっ♡♡ ちゅっ♡ ちゅぶっ♡♡」

マスターの口内にアルトリアオルタの舌が入り込み、唾液濡れの舌と舌が絡み合う。力の入って硬くなったマスターの舌をほぐすようにアルトリアオルタの柔らかい舌が動く。

まるでマッサージのような心地よさによって、マスターの舌がプリンやゼリーのように蕩けていく。気付けばアルトリアオルタの舌に導かれて、口の外まで舌が伸ばされていた。お互いの舌を舐め合いっこをしたり、相手の舌に吸い付いて表面の唾液を啜ったり、恋人同士のするキスの中でも相当ディープなキスが繰り返される。

「ぢゆるるゝるっ♡んむっ♡ マスター誓えっ♡♡♡ 私と一緒にになると……♡♡」

「……はあ………はあっ、本当に良いんだね。アルトリアオルタが思ってるより、俺は弱いし醜いかもしれないだよ。失望さ——んっ」

「んっ♡♡ ちゅぷっ♡♡ んんっ……私がマスターの全てを愛するから、マスターも私の全てを愛せっ♡♡ もう、それだけで良いっ♡♡ んむっ……ちゆるるっ♡♡ じゅぷっ♡♡」

このアルトリアオルタの言葉で、マスターも完全に陥落してしまっ

た。もしかするとこれは共依存に近い歪な恋と愛なのかもしれない。しかし、二人にとってこれ以上に幸せな男女の関係は無かった。”独り”だった二人が本当の意味で支え合う相手を手に入れたのだから。マスターは上体を起こす。するとアルトリアオルタがマスターの腰の上に跨るような体勢になった。彼女は全身をマスターの身体に預けているため、相手の体温や心臓の鼓動まで全てが伝わってきた。興奮で汗ばんだ体が触れ合っているが、それが不快感ではなく心地よさに感じる。

お互いに見詰め合ったまま舌を絡ませ合い。ゆっくりと唇が離れる。まだまだ繋がっていたという思いの表れのように、唇の間には銀の糸で伝っていた。

荒い呼吸音が響く部屋の中で、マスターはアルトリアオルタに先程の返事をした。

「はぁ……はぁ……あつ、アルトリアオルタの全てを愛するから、俺の傍にいて下さいっ」

アルトリアオルタは全てを魅了する微笑みを浮かべた。

返事の代わりに唇同士を合わせるだけの短い接吻を一つして、誓いのキスを交わす。それは死がふたりを分かつまでよりも更に重い誓いのキスだ。例えば死を迎えようとも永遠に相手を愛する誓いなのだから。

——その夜、女の部屋からは愛を囁き合う声と口を啜る水音、リップ音だけが木霊していた。

### 第三話：主人の牡に慄く暴君（デーパーキス、服脱がし）

汗とお酒の二つが混ざり合った匂いが、部屋全体に充満していた。長い時間、匂いが籠っていたせいか噎せ返ってしまいそうな程に濃いニオイである。

不快に感じるような嫌なニオイでは無いのだが、匂いの中に含まれているフェロモンとでも表現するべき”何か”が、理性を少しずつ溶かしていくのだ。嗅いでいるだけで男女問わず性欲を煽つて昂らせてくる。お酒を飲んでもいないのに、酔ってしまったかのように思考が鈍っていく。

二つの匂いの原因は、それぞれ床とベッドの上にある。

ベッドの近くの床には、割れたグラスの破片と何らかの液体が乾いた跡が残っていた。この乾いた液体の正体は赤ワインである。昨夜にマスターがグラスごと落としてしまったものがそのまま放置されて、アルコール特有の独特な匂いを放っていた。

そして、もう一つの匂いの元であるベッドの上では、今も男と女が絡み合っていた。

胡坐をかくマスターの膝の上に、アルトリアオルタが向かい合う形で跨っている。彼女の両腕はマスターのがつしりとした首に回され、腕と腕と同じようにスラリと長い両脚をマスターの腰に巻き付けていた。その恰好は木にしがみつくとくアアや母親に抱きつく子供のようなのだ。

お互いの興奮による体温の上昇と、その状態で密着しているせいで身体中から大量の汗を掻いている。二人の衣服は汗を吸収する機能が完全に無くなっており、肌にピッタリと服が張り付いていた。ベッドのシートにまで二人の汗が染みている。

特にアルトリアオルタは薄手のネグリジエが汗でびっしょりと濡れており、色が紺色から黒に変色していた。濡れた生地が身体に張り付くせいで布越しではあるが、慎ましやかな乳房の形や均整の取れた

お腹のライン、女性らしいお尻の丸みが手に取るように分かってしま  
う。

下手な裸よりも淫靡なネグリジエ姿が、汗に濡れたことで更にエロ  
い衣装に変わっている。

アルトリアオルタは自分の卑猥な姿を気にしていない。

蛞蝓同士の交尾のようにマスターに密着した状態で、互いの匂いが  
洗っても取れなくなるように美しい肢体をズリズリと擦り合わせて  
いる。本人は完全に無意識で行っているのだが、他のメスに番を取ら  
れないようにマーキングを行っている獣のようだ。

アルトリアオルタが意識を向けているのは、マスターとのキスのこ  
とだけである。

あれから何度唇や舌を重ね合わせたか定かでは無いが、昨夜から今  
に至るまでに数十や百ではきかない数の口付けが行われていた。二  
人の口の周りは相手の唾液でベトベトである。それが不快に感じる  
のでは無く、気持ち良いと感じてしまっているのが、どうしようも無  
く相手を好いている証明だろう。

「——じゅるっ♡♡♡ ちゅぷっ♡♡♡ れろお——っ♡♡ じゅぷっ♡♡♡ ちゅっ♡♡」

様々な角度をついたり、唇や舌の動きを変えたりしながら二人はキ  
スに耽溺している。

お互いに性知識が豊富な訳では無い。殆ど本能に従って唇を貪っ  
ているだけなのだが、相手を求める気持ちだけで様々な種類のキスを  
発見していた。

唇同士を軽く押し付けるプレッシャーキスに始まり、鳥のように唇  
を尖らせて何度も子気味良く接吻を繰り返すバードキスや相手の唇  
を舌でなぞるニプルキス。舌先だけを重ね合わせるピクニックキス。  
そして、お互いの口内に舌を入れて舐め合うデーパーキス。

相手の好きなキスを探す行為に没頭しているだけで、時間が夏場の  
氷のように溶けていく。

もうお互いの口の中の味は完全に同じになっており、キスを初めて三時間が経過した頃にはお互いの唇の境界線が分からなくなっていた。心地良いキスのことを『融け合うようなキス』と表現することもあるが、正しくアルトリアオルタとマスターはその融け合うようなキスを体感していた。

唇から身体全体がドロドロに蕩けていくような感覚は、愛する人との絡み合いでしか生まれないものだ。

長いキスで顎が疲れてしまうと、休憩の代わりに二人はたわむれ合う。

存在を確かめるように抱きしめ合ったり、汗でじつとりと湿る髪を手櫛で梳いて遊ぶ。特に頭を撫で合う行為が二人はお気に入りだった。誰かに頭を撫でられる経験が殆ど無かったから、承認欲求のようなものが満たされ愛情を感じられるからだ。

たわむれ合いを続けると心と身体が徐々に火照ってしまい、相手に『好き』や『愛している』、『綺麗だ』といった言葉を耳元で囁き合いを始めてしまう。耳への愛撫も耳朶に優しくキスを落としたり、唇で耳朶を挟んで甘噛みをしたり、耳の穴を穿るように舌で舐めたりと過激になっていく。

意図したものでは無いが、相手の耳を性感帯として開発し合っていた。

二人の脳内では一般的に”幸せホルモン”と呼ばれる。セロトニン、ドーパミン、オキシトシンの三つのホルモンが大量に分泌され、脳がブクブクと溺れていた。アルトリアオルタとマスターの二人も、このキスや愛を囁き合う行為に強い依存性があることを漠然とではあるが理解していた。しかし、それが止まる理由にならない程に、お互いを求め合ってしまった。

幾ら唇を重ね合わせても、幾ら愛を囁き合っても足りないと感じてしまう。

——その結果、キスやたわむれ合いだけで朝を迎えてしまったのだ。

二人の体感時間ではそんなに長い時間には感じなかったのだが、時

計の時刻は朝の六時を指していた。

早起きのスタッフやサーヴァント達のために食堂が開いている時間であり、マスターも遅くとも七時には食堂に行かなければ、その後の任務に支障が出てしまう。

シャワーを浴びたり着替えをすることを考えれば、この蕩けるように甘い蜜月を終わらせる必要があった。

盛大に後ろ髪を引かれるが、マスターは殆ど残っていない理性をフル稼働させてキスを止めた。

口惜し気に開いたアルトリアオルタの艶やかな桜色の唇に心を奪われそうになるが、一度でも誘惑に負けてしまえばきつと昼も夜も無く求め合ってしまう。

マスターは心を鬼にして終わりを告げる。

「はあ……はあ……もう時間だから、続きは後にしよう？」

「はあっ♡……はあっ♡……んっ、本当に残念だ。もつとシたかったぞ……」

「うん、俺も同じ気持ちだけど。今はアルトリアオルタにもつと好きになって貰えるように、頑張りたい気持ちもあるんだ」

「——馬鹿者っ♡ これ以上マスターを好きになってしまえば、本当に歯止めが効かなくなるっ♡」

「ははっ、歯止めの効かなくなったアルトリアオルタも見てみたいけど、人理修復までは公私は分けようね。それで色々全部が終わったら……俺と一緒に下さい」

アルトリアオルタは首筋や耳の先端まで真っ赤にしながらかくりと小さく頷く。少しの間だけマスターの胸板に頭を預け、最後にグリと額を擦り付けた後に膝の上から退いた。

部屋の中には蜂蜜のように甘い空気が広がっていた。



「……………ふう、暑いね。汗も凄い掻いちやつた」

マスターは服の胸元をパタパタとさせて胸元に空気を送り込む。

甘い空気を少しでも緩和するために、マスターは感じている事をそのまま口にしただけだった。しかし、未だにマスターへの愛情が治まらないアルトリアオルタは”イケナイ”ことを思いついてしまった。少しでも長くマスターの傍に居られる方法を――

口端を僅かに上げる微笑を浮かべながら、あることを提案する。

「――それなら私の部屋のシャワーを使えば良いだろう」

「良いの？ 確かにこのまま自分の部屋に戻るのは、色々不味かったから助かるけど」

「ああ、私も汗は流したかったからな……………」一緒に浴びようっ♡♡」

マスターが逃げてしまわないように、アルトリアオルタは背中から抱きついた。

「どうせ入るなら私がマスターの体を洗ってやる。朝食までに間に合えば、問題は無いだろう？」

「いつ、いや、確かに問題は無いけど。その……………」

困った様子のマスターの耳元でアルトリアオルタは囁く。それは正しく悪魔の囁きだった。

「…………マスターは私の裸は見たくないか？」

「見たいです…………あつ、違っ」

反射的に答えてしまったマスターは慌てて否定しようとするが、ア

ルトリアオルタは意図して無視をした。背中に抱きついたまま、ガラス張りのシャワールームの前まで移動する。

カルデアの私室に備え付けられているシャワー室は何故か全面ガラス張りである。どこぞのラブホテルにありそうなデザイン。シャワー室の中にある瞬間調光ガラスのスイッチを入れなければ、部屋の中に居る人に全てが見えてしまう設計だ。

興奮で少し息の荒いルトリアオルタは、マスターの上着を脱がせようとする。

控えめに抵抗するマスターだったが、サーヴァントとであるルトリアオルタに敵うはずもない。

しっかりと鍛えられたマスターの上半身が直ぐに露になる。

衣服の上からでは細かい印象を受けるが、アスリート系のしなやかな筋肉が確認出来る。周りの男性サーヴァント達の筋肉が凄すぎるだけなのだ。

比較対象が悪いだけで、一般人の中では相当な筋力を持っていた。ルトリアオルタはマスターの首筋から腹筋までを舐め回すように視姦する。思っていたよりも逞しい肉体を目の当たりにして、下腹部がじんわりと熱が帯びる。背中もいつもより大きく見えて胸が高鳴っていた。

緊張を誤魔化すように胸板をペタペタと触りながら言葉を掛ける。

「ほう……中々に鍛えているなっ♡」

「凄い恥ずかしいんだけど……下も脱ぐよね？」

「当然だ。どうせこれから何度もお互いに見ることになるっ♡ 早めに慣れておいた方が良さだろうっ♡♡」

マスターは色々と観念したのか、特に抵抗もしなくなった。

気を良くしたルトリアオルタはマスターの足元に両膝を着いて跪く。

慣れない手付きでズボンのボタンを外し、ファスナーを下ろす。少しの達成感を感じながらパンツごとズボンを脱がせようと両手でウ

エスト部分を掴んだ。

後はズボンとパンツを下ろすだけになった時に、何故か気まずそうなマスターはアルトリアオルタに忠告する。

「えつと……多分、ビックリすると思うけど。普通の人より”大きい”から気を付けてね」

「ふふつ、『気を付けろ』とは、おかしなことを言うのだなっ♡ 確かに私は生前から経験の無い生娘だが、愛するマスターの体の一部だ♡ 驚くことなど無いだろう?」

アルトリアオルタは小首を傾げながらクスクスと笑う。

男性経験は確かに無いがマスターの体格から、大きくとも20cm程度だと予想していたのだ。自分の小柄な体でもギリギリ受け入れられる範囲であると勝手に慢心していた。

——もう少しだけマスターの忠告を真剣に聞いていれば、冷静に対応できていたのかもしれない。

興奮と羞恥、期待の混じった顔をするアルトリアオルタは、ズルズルとパンツごとズボンを下ろしていく。

「んっ、何かが引っ掛かるな。——んっしょっ」

何故か途中でズボンが引っ掛かってしまったが、アルトリアオルタは力を入れて強引にズボンとパンツを下ろした。すると……

——ベチツ

「……………へっ?」

アルトリアオルタの口から間抜けな声が漏れた。

いきなり子供の腕のような”モノ”で頭を叩かれたからだ。その子供の腕程もある物体は、彼女の頭の上にはずっしりと乗っている。

恐る恐る顔を上げるアルトリアオルタが目にしたのは、明らかにマスターの体格に合っていない大きさのペニスだった。

全体的な形状は例えるならば、捕鯨槍などの返しが付いた槍に近いだろう。

棍棒や小ぶりな丸太のような大きさで、最低でも30 cmは優に超えている。野球ボールのように大きくパンパンに膨らんだ龟头。カリ首部分のエラが異様に張っており、陰茎との段差が2 cm以上はありそうだ。アルトリアオルタの指では回りきらない程に陰茎が太く、葉っぱの葉脈のように陰茎に浮かんだ幾つもの血管が生々しい。

膣肉を効率的に掘削して、雌を屈服させながら孕ませることに特化した牡チンポ。

極悪ペニスの根元には、タツプリと精の詰まった睾丸が確認出来る。片方の玉の大きさが野球ボール程もあり、生殖能力の高さと精液の射精量が桁違いであることが簡単に予想ができた。

混乱し過ぎて思考が止まっているアルトリアオルタは、尿でも漏らすように尿道口から潮を吹いた。

それは雌としての防御本能だ。目の前の強い雄に犯されることを前提に、体が勝手に反応してしまった。結果、少しでも膣が裂けたりしないように、潮や愛液をお漏らしする。汗では無いヌルヌルとした液体で、尻タブや股に食い込む布が濡れていく。

「————あっ♡♡ 大きっ♡ 入らない♡♡♡ につ、ニオイ濃いつ♡♡」

口から思ったことが、そのまま出てきてしまっている。

マスターの忠告は完全に意味が無かったようだ。

アルトリアオルタは鼻から入ってくる雄の臭いに、脳が次第に麻痺していく。初めて嗅ぐ雄の性臭が余りに強すぎたせいだろう。彼女

のお尻の下に敷かれた状態で、一晩中蒸れていたせいで臭いが濃くなり過ぎた。それも顔を上げた状態で固まってしまっているから、蒸れたペニスの臭いを直嗅ぎしてしまっている。

間違っても処女の生娘が嗅いではいけない臭いだ。

一刻も早く口呼吸に変えるべきなのに、彼女は鼻水を垂らしても鼻呼吸を止めない。いや、止めることが出来ない。アルトリアオルタの中にある”メスの本能”が、番になるオスの臭いを一生懸命に覚えようとしているからだ。

理性は早く止めるべきだと訴えているのに、本能が脳と肺をチンポ臭で満たす行為を止めてくれない。

「すう——っ♡♡ はあっ♡ あうっ♡♡ のっ、脳がクラクラするのにい♡♡ すう——っ♡♡♡ はあんっ♡♡ くさいいっ♡ はあっ♡」

自分のイチモツに深呼吸を繰り返すアルトリアオルタの痴態に、マスターもムラムラと性欲が昂っていく。

本当なら今すぐにも彼女の口に無理矢理ペニスを咥え込ませて、お腹がちやぽちやぽと鳴るまでザーメンを吐き出したかった。きつとそれだけでは満足が出来ず、全身をドロドロのザーメン塗れにしていただろう。

このまま欲望に従えば、マスターは最高の快樂が得られた筈だ。しかし、まだ性経験の無いアルトリアオルタに対して、まるでオナホールでも扱うような真似はしたく無いと思っていた。

マスターはアルトリアオルタの顔からペニスを退かして、彼女の曖昧な意識が戻るように声を掛ける。

「アルトリアオルタっ、しっかりして」

「——っ、すまないっ♡♡♡ あう♡♡ 取り乱してしまった♡ そのっ、とても立派でっ♡ 雄雄しいイチモツだなっ♡♡」

林檎のように顔を真っ赤にしながら、アルトリアオルタはペニスを褒める。きつと内心では、自分の先程までの痴態を恥じているのだろう。両手が忙しなく開いたり閉じたりを繰り返していた。

「ありがとうって返事をすれば良いのかな？　大きくなってるから信用できないかも知れないけど、無理矢理襲ったりしないから安心して欲しいな。手順を踏んで、ゆっくり準備しないと挿れるのも難しいと思うから」

「そ、そうだなっ♡♡　ゆっくり準備を——っ♡♡　あゝゝゝゝっ♡♡♡♡」

マスターの極太ペニスをオマンコで受け入れるために、狭い膣肉を指や舌で弄繰り回されながら拵げられる想像をしてしまい、アルトリアオルタは自爆した。

妄想の中で自分が晒すだろう痴態が容易に想像できてしまう。マスターの指が膣内で動く度に、淫らな声を上げて腰を震わせる自分の姿は無様で滑稽だった。

（マスターに私のアソコを指でじっくりと耕されながら、最後はあの大きなアレでっ♡♡　赤ん坊を産むための部屋がっ♡　マスターの精で溺れ——っ♡♡）

想像しただけでアルトリアオルタの膣から、愛液がトプトプと溢れてくる。辛うじて水分を吸収していたショーツも吸水量が限界を迎えてしまったらしく、太ももの内側がヌルヌルの液体で何本も糸を引いていた。

また思考の海に溺れてしまいそうになるアルトリアオルタに、マスターは声を掛ける。

「取り敢えずシャワーを浴びようか。後のことは今日の夜にゆっくり考えよう？」

「——わっ、分かったっ♡　今は一緒にシャワーだなっ♡♡」

——  
——  
アルトリアオルタはゆっくりとネグリジェの裾に手を掛  
けた。

#### 第四話：暴君の裸体と手淫の奉仕（手コキ、精飲）

アルトリアオルタは汗で濡れたネグリジエの裾を、クロスさせた両手で掴んでゆつくりと捲り上げていく。

最初に見えたのは処女雪のように白い肌の腹部だった。

産まれてから今日に至るまで、日に当たることが一度も無かったと言われれば、そう素直に信じてしまえる程に穢れが無い。小さな傷や少しのシミすら見付けられない、きめ細かい肌は触れることすら戸惑われる。

無駄な贅肉は欠片も無い。細く締まったウエストは美しい括れを描いている。

ただ脂肪と筋肉を削ぎ落した、骨と皮だけの身窄らしい細さでは無い。骨の上に細身だがしつかりとした筋肉があり、その更に上に女性らしい柔らかさを成立させる脂肪が乗っていた。

それは健康的な細さとしか表現しようが無い。

アルトリアオルタのお腹には、お臍から鳩尾に向かって薄いラインが入っている。その美しい縦のラインは腹筋の縦線に沿って出来ていた。

思わずその縦のラインに沿って、人差し指でツーツとなぞりたい誘惑に駆られてしまう。

華奢な細さと健康的な美しき、女性らしい丸みの全てを兼ね備えたアルトリアオルタの腹部は、バロック時代の彫刻家が心血を注いで作り上げた傑作に勝るとも劣らない美しきがあった。

マスターも思わず生唾を飲み込んでしまう。だが、本当のお楽しみはここからだ。

アルトリアオルタはネグリジエの裾を掴んだまま、鎖骨辺りまで捲り上げる。そうして服の中から見えてくるのは、女性らしさの象徴の一つと言われる乳房だった。

マスターからの熱い視線を感じているのだろう。首筋まで真っ赤に染まったアルトリアオルタは顔を背けながら、少しだけ申し訳なさそうに告げる。



「あまり色気の無いカラダだろう……だが、お尻などは結構自信があるのだぞっ？ 聖剣を握ったせいで少女までしか育たなかったが、マスターに好いて貰えるように……これからオシヤレなども学ぶつもりだ——っ♡」

もじもじと太ももを擦り合わせながらマスターからの言葉を待つが、一向に返事は返ってこない。不安になって背けていた顔を戻すと、口から小さな悲鳴が反射的に漏れてしまった。

「——っ♡♡♡」

その悲鳴の理由は、マスターが自分の慎ましやかな胸を極限まで飢えた獣が獲物を見付けた時のような眼で見えていたからだ。普段のマスターからは想像もつかない捕食者の相貌に、アルトリアオルタの中の牝が怯えてしまう。

雄のギラギラとした欲望に当てられて、彼女の下腹部がキュツと疼いてしまう。

一方、マスターの方は、この一瞬を永遠に記憶することに全神経を集中させていた。彼がこれまで見てきた何よりも美しいモノが視線の先にはある。

確かに巨乳と呼ぶほど、大きく豊かな乳房では無い。しかし、そんな胸の大きさなど些事であると吐き捨ててしまえる程の魅力が、アルトリアオルタのおっぱいには有った。

お椀型とお皿型の丁度中間にあるような膨らみ。それは少女の幼さと大人の女性の良さを兼ね備えた、ある種の理想形である。瑞々しい何の穢れも知らない可愛らしさと、目が覚めるような妖艶さが共存している。

引き締まったウエストと形の良い小ぶりなバストは、人が最も美しいと感じる黄金比によって作りあげられている。大量の汗を掻いて乳房全体がテカっているからか、正しく磨き抜かれた真珠のような美

しきであつた。

真つ白な肌に映える、桜の花弁のように色素の薄い小さな乳輪。性的な興奮を覚えているからか、控えめながらもぷっくりと乳輪が膨らんでいる。

その膨らんだ乳輪の中心には、ショートケーキの上に乗ったイチゴのように、小さく可愛らしい乳首がちよこんと乗っている。見ているだけで指で摘まみ上げたり、甘噛みをして、弄繰り回したくなる衝動に駆られてしまう。男のスケベ心を常に挑発しているような、淫猥さがアルトリアオルタの乳首にはある。

呼吸をすることすら忘れてマスターは、アルトリアオルタの上半身を視姦していた。

おっぱいが火傷してしまいそうな程、熱量が籠ったマスターの視線に耐え切れず、アルトリアオルタはネグリジエを鳩尾辺りまで下げてしまう。露骨にガツカリした表情をするマスターを、男ならば誰もが責められないだろう。

自分の貧相な身体に欲情して貰えた嬉しさと雄に身体を見られる恥ずかしさがせめぎ合い、感情がぐちゃぐちゃになってしまう。

「まっ、マスター♡♡ 今はシャワーを浴びるだけだぞっ♡♡ 後でっ、後でなら好きだけ見て良いから……っ♡♡」

「うん、後でだよね。……後で」

「~~~~~♡♡♡ 早くシャワーを浴びてしまおうっ♡♡」

マスターの含みを持たせたような言葉に、今日の夜のことを想像しただけで腰が砕けそうになったアルトリアオルタ。あの獣ような顔をしたマスターに、乳房をどのようイジメられるのかが想像出来てしまったからである。

何とか思考を切り替えようと、ネグリジエを勢い良く脱いだ。続きざまに愛液と潮、汗でびちゃびちゃになったショートパンツとショーツも脱いでしまう。湯気の立つような熱気を発する蒸れた桃尻や、ほど良く脂肪の乗った汗ばむ太もも、そしてトロトロと愛液を垂らすピ

タリと閉じた”割れ目”が外気に晒された。

無毛の恥丘は青い果実のような背徳感を与え、取れたての桃のように瑞々しい美尻は雄の征服欲を奮い起こす。

ショーツと股の間と内腿の間には、何本もの糸が引いている。明らかに汗以外の体液で濡れていたことがマスターにも分かってしまう。

処女の生娘であるにも関わらず、殆どキスだけの愛撫でドロドロに濡れてしまう事実。マスターは自身のペニスに、ドクドクと大量の血流が送られていることを感じていた。送り込まれた血液によって、海綿体が更に膨張する。

馬のイチモツのように大きく禍々しいペニスは重力に反逆して反り返り、睾丸の中で牝を孕ませるための精液が貯蔵されていく。

両足からショーツとショートパンツを引き抜いたアルトリアオルタは、洗濯用の籠にネグリジエと合わせて衣類を放り込んだ。『べちやつ』と汁気を大量に含んだ音が室内に響き、更なる羞恥が襲ってくる。

自分にあれは汗だと言いつつも聞かせながら、マスターの視線から逃げるようにシャワー室へと入っていく。クルリと振り返ってドアから顔だけを出すと、太ももをもじもじと擦り合わせながらアルトリアオルタは小さく呟いた。

「……背中を流そう♡」

近い未来に必ず、目の前のメスをガラスに押し付け、立ちバックで種付けすると心の中で誓いながら、マスターもアルトリアオルタが居る”一人用”のシャワー室に入ってしまった。

繰り返しになるがカルデアの私室に備え付けられたシャワー室は、一人で使用することを前提に作られている。それを二人で使用しようとするれば、お互いの身体が密着することは仕方の無いことだ。マスターもアルトリアオルタもそれは百も承知で、一緒にシャワーを浴びようとしていた。

——しかし、アルトリアオルタは現在進行形で、別々にシャワーを浴びれば良かったと後悔していた。

その理由は……

「——あっ♡♡ まっ、マスター♡♡ お腹に当たってますっ♡

ひい♡♡♡」

——グニい

「いひっ——っ♡♡♡」

プシゅっ♡♡♡

アルトリアオルタは腰と膝をガクガクと震わせながら、尿道口から透明な液体を間欠泉のように吹いた。

二人はお互いに向かい合うように立っているのだが、つま先立ちをするアルトリアの鳩尾には、マスターのペニスの先端がグイグイと押し付けられていた。

身長154 cmとアルトリアオルタが小柄であることを考慮しても、やはりマスターのペニスが長く太すぎる。彼女のお腹の筋肉を押し返すように、陰茎に太い血管の走るイチモツがそそり立ち脈動していた。

鳩尾を亀頭でグニっつと押される度に、オマンコが白旗を振るよう如潮をぷしゅっ♡♡ ぷしゅっ♡♡と、無様に吹いているのだ。一回潮を吹く毎に、雌犬根性を躡けられてしまい、生娘のまま弱々オマンコであることを教え込まされていた。

彼女の中で騎士王として生きてきた誇りや、女として無くしてはいけない”何か”が、ゴリゴリと削れていく喪失感が確かにあったが、

それも次の潮吹き快楽で忘れ去られてしまう。

「あっ♡♡ あっ♡♡ ますっ、マスター♡♡ 押し付けるの——  
—ダメっ♡♡♡ だめっ♡♡♡ だめええええ、ええええ、えっ♡♡♡  
ぷしゅっ♡♡♡ ぷしゅ♡♡ ぷしゅあああああああっ♡♡♡♡♡

——実際にはマスターは何もしていない。

アルトリアオルタは内股の体勢で膝をガクガクと震わせているのだが、足に全く力が入れられず、マスターの肩に掴まって何とか立っている状況だ。しかし、彼の肩に掴まるという事は、今まで以上に身体を密着させることと同義であるため、より鳩尾に亀頭が押し付けられていく事となる。結果的に更なるオマンコの敗北に繋がり、強いチンポに負けるのが大好きなマゾメスに躡けられているのだが——  
——全てが自爆である。

要するにマスターのペニスを使って、自分で勝手にドスケベ潮吹きを繰り返しているだけなのだ。傍から見たアルトリアオルタは、マスターのペニスでオナニーを繰り返す淫乱痴女である。

一人相撲のように滑稽な今の痴態を、正気のアルトリアオルタが第三者視点で見たのなら、暫く部屋に籠ってしまおうだろう。しかし、今の彼女にそれを理解することは出来ない。

(シャワーだけと約束したのにつ♡♡♡ マスターは私のことをイかせてくるっ♡♡ あっ♡♡♡ ——いぐっ♡♡ 狭いシャワー室では、どこにも逃げ場が無いっ♡♡ あひっ♡♡♡)

マゾアクメを繰り返すアルトリアオルタは、色欲に染まった思考でマスターに許して貰える方法を考える。

(男性は一度射精せば性欲が治まると聞いたことがあるっ♡♡♡ 今は性行為までは出来ないが、手を使って射精して貰えれば、マスターもきっと許してくれるはずっ♡♡♡)

「まつ、ましゆたー♡♡ あんっ♡♡ 手でっ♡♡ んあっ♡♡♡ 手でス  
るので、これ以上お腹ズンズンするのは止めてくれっ♡♡ いひー  
っ♡♡ マスターが気持ち良くなれるように、ごっ、ご奉仕するか  
らっ♡♡♡ お腹イジメないでくれっ♡♡ ヒイっ—————大きくなっ  
てっ♡♡♡♡」

思考がマスターのオチンポに許して貰うことに囚われているアル  
トリアオルタ。猫撫で声を上げてマスターに媚びる。

その声を聞いたイチモツがビクンと大きく震えたのに更に怯えて、  
直ぐさま奉仕を始めようと動きだす。

マスターの肩を掴んでいた手を離して、そのまま崩れ落ちるように  
床に尻もちをつく。女の子座りのまま顔を上げて、目の前で怒張する  
禍々しいイチモツを両手で優しく握り込む。太すぎる陰茎に、アルト  
リアオルタの指が回りきっていない。少なくとも親指と中指の間が  
2 cmは空いていた。

彼女の手の中でビクビクと脈動するペニスは、早く奉仕しろと主張  
しているようだった。

本人は別に狙っていないのだが、完璧な上目遣いをしながら媚びる  
ように声を掛ける。素でこれが出るのは、天然の魔性なのかもしれ  
ない。

「どうすれば気持ち良いかを教えてくれっ♡♡♡ 拙いかもしれない  
が、マスターのことを思いながらご奉仕するっ♡♡♡♡」

おっかなびっくりと言った様子でアルトリアオルタは両手を動か  
す。どの位の力で握れば良いのか分かっておらず、快感を焦らすよう  
な手淫になっていた。

言いたいことは沢山あったがマスターは、手淫の指示だけをやる。  
きつと頭の中では今夜の”お仕置き”のことを考えているのだろう。

勝手に自分のペニスを使って腹部圧迫オナニーを始めて、勝手に手  
淫のご奉仕を始める変態なアルトリアオルタに、グツグツとマグマの

ような劣情を貯め込んでいた。

——今夜のアルトリアオルタは、昨日のように甘く切ない夜は過ごせないだろう。

「もう少し強く握って欲しいな。後、竿の部分だけじゃなくて、先っぽも掌で撫でるみたいに出来る？」

「——はいっ♡♡ あっ!? わっ、分かった♡ ……こうで良いのか？」

アルトリアオルタは言われた通りに、陰茎を握る右手の力を強めて扱き、左手の掌で亀頭部分を撫で回す。するとペニスの脈動がこれまでよりも強くなり、掌や指先に伝わる熱が上がったことを感じられた。

左手の掌からクチュクチュと卑猥な水音がし始めた。

「気持ち良いよっ、上手だね」

「ほっ、本当か！ もっと気持ち良くなってくれっ♡ あっ、ビクビクしているっ♡♡ マスター先っぽから何か汁がっ♡♡ これが精液なのか？ 凄いニオイだっ♡」

左手に付着する液体の臭いを嗅ぎながら、これが精液だと勘違いしているアルトリアオルタ。本当に性知識が乏しいのだと再確認しつつ、マスターはその液体の正体を教える。

「違うよ。それは『先走り』って言う、気持ち良くなると出てくる液体かな」

「なっ、なるほどっ♡ マスターは私の手が気持ち良くてっ♡ 先走りを出してくれたのだなっ♡ もっと先走りが出るように頑張るからなっ♡♡♡」

お世辞では無く、本当に気持ち良くなって貰えたことが分かり、ア

ルトリアオルタは気分を良くする。もつと先走りを出して貰えるように、手淫に集中する。

「——ああっ♡♡ また先走りがっ♡ ドクドク脈を打つのに合わせ  
てっ♡♡ はあ……っ♡ どぶっ♡ どぶっ♡ つて出てます。先走  
りで滑りが良くなって、先ほどよりもスムーズに動かせますっ♡ く  
んくんっ——ニオイが濃いつ♡」

「あぐっ、本当に気持ち良いよっ。後はっ、先っぽに傘みたいになつて  
る所があるでしょ？ そこも気持ち良いんだ——っ」

「分かったっ♡♡♡ ココだな？ 掌で先っぽクリクリしながら、指  
先の腹で撫でてみるぞっ♡♡♡ ——あはっ♡ 凄いつ♡♡  
今までよりもビクッ♡ ビクッ♡♡と脈打っている♡♡ もつと♡  
もつと♡ 感じてくれ♡♡」

ボールでも掴むように五本先の指先が、雁首を撫で回す。亀頭部分  
も先走りでヌルヌルになった掌で刺激されているので、気が遠くなる  
ような快感がマスターを襲う。

一人で虚しく行かう自慰行為など、この快感を味わった後では正しく  
”独り遊び”でしかない。

脳が焼け付くような快感に睾丸がキュツと持ち上がった。一層、ペ  
ニスが膨張して、先走りに白濁とした液体が混じり始める。

「——アルトリアオルタっ、射精そうだ。もうすぐ射精るっ」  
「まっ、マスター♡♡ わたっ、私はどうすれば良い？」  
「掛けたいっ、アルトリアオルタに精液掛けたいっ……だめっ？」  
「~~~~っ♡♡♡ ……掛けてくれ♡♡ マスターの精液一杯掛  
けてっ♡♡」

アルトリアオルタは亀頭から手を離して、両手で陰茎部分を握って  
抜く。ずちゅっ♡ ずちゅ♡♡と一往復ごとに卑猥な水音を響かせ  
ながら、これまで以上に速く動かしだした。



そして、遂に……

「射精するっ！ だっ射精すよっ！」

「——射精してっ♡♡♡♡」

どびゅっ♡ びゅぶっ♡♡ びゆるるっ♡ びゆるるるるっ♡♡

どびゆるるるるるっ♡♡ ぶぶっ♡ ぶぶっ♡ びゆるる♡♡

「きゃっ——♡♡」

可愛らしい悲鳴を上げながら、アルトリアオルタはマスターの精液を全身で受け止める。

亀頭の先端から少し黄ばんだ白濁液が大量に吐き出されていく。ペニスの脈動に合わせて精液が吐き出される様子は、手動式の井戸ポンプのようだ。睾丸から大量に製造された精液が汲み上げられ、陰茎のホースを通って外に出る。

びゅぶっ♡♡ ぶびゆるるるっ♡ びゅっぶっ♡♡ びゅっぶっ

♡♡ びゆるるっ♡

「精液熱いつ♡♡ あっ♡ 先走りよりも、ニオイが濃い♡

はあっ♡ 一杯射精てるっ♡♡ 全身掛けられて——っ♡」

アルトリアオルタのホワイトブロンドの髪や端正な顔、鎖骨の窪み、慎ましい胸や引き締まったお腹、太ももに精液が掛けられる。

殆ど固形物に近いゼリーやジャムのような粘度の精液は、重力に従って下に落ちることが無い。もしも、衣服に掛かっていけば、洗濯が大変になっていただろう。

白濁液の液溜まりが、鎖骨の窪みと股と太ももの三角形のスペースに出来ている。股間部分の三角形のザーメンプールのせいで、遠くから見れば白色のショートツヤビキニを履いているように見えた。

マスターが暫く性欲処理をしていなかったせいか、射精はなかなか

止まらない。アルトリアオルタが何十人もの男性に精液をぶっ掛けられた後のような姿に変わっていく。

栗の花に似た精液の臭いが、狭いシャワー室の中に充満する。この中に居るだけで妊娠してしまいそうな程に、ニオイが強い。

——時間にして一分近い射精がようやく終わった。

びゅぷっ♡♡♡ びゆる……びゅ

「あう……っ♡♡♡ 凄い沢山射精だな♡♡♡ 本当に凄かったっ♡♡♡  
………はあっ♡♡♡」

自分が想像していた数十倍の吐精量にただただ脱帽していた。雄の精のニオイにクラクラと酩酊している。

アルトリアオルタは唇に付いた精液が気になり、舌で掬うようにペロリと舐め取る。口内に雄の濃いニオイと濃厚で複雑な味わいが広がった。

苦みやえぐみも確かに感じるのだが、アルトリアオルタの口から出た言葉は——

「んうっ……マスターの精液、とっても美味しいぞっ♡♡♡ 濃厚でっ♡♡♡ ニオイも癖になるっ♡♡♡ 精液を飲むとお腹がカツと熱くなるっ♡♡♡ えろお——っ♡♡♡」

頬や額に掛かった精液を指で掬い、口に運ぶアルトリアオルタ。その姿は精を啜る淫魔のようだった。

第五話・暴君は連続絶頂で果てる（乳首絶頂、素股、お漏らし）

「——あむっ♡♡♡♡ じゅるるっ♡ んぐっ………はあっ♡  
おいひい♡♡♡ ——んぐっ」

アルトリアオルタは雄の濃厚な精液に酔っていた。

お酒にとても強い彼女が、顔に掛けられたザーメンを数ミリリットル嚙下しただけで、熱が出た時のように頭が呆けていた。今まで騎士王であるために封印していた”女”と”牝”が、雄の精を口にする度に少しずつ目覚めていく。

「はあっ♡♡♡♡ すう——っ♡♡♡♡ はあ♡♡ マスターの精液の臭いでいっぱいっ♡♡♡♡ 鼻が壊れてしまいそうだっ♡♡♡♡ すう——っ♡♡」

密閉空間に近いシャワー室の中で、自分の全身から漂う磯臭いような栗の花にも似た臭い。

鼻が壊れてしまいそうと言葉にするだけで、決してアルトリアオルタは鼻呼吸を止めない。寧ろ深呼吸でもするかのように、肺がザーメン臭で一杯になるまで空気を吸っている。

口に含んだ精液からの臭いと、鼻腔から入ってくる精液の臭い。口と鼻から同時に入ってくる雄の性臭が、脳を犯してトロトロに蕩けさせる。弱火で温められていくシチューのように、グツグツと興奮が煮詰まっていく。

「んむっ♡♡♡♡ まだまだこんなにっ♡♡♡♡ んぐっ——♡♡♡♡ はう♡♡♡♡ 残すのはマスターにわるいからっ♡♡♡♡ はあっ………ふう♡♡ 私で気持ち良くなって掛けてくれた精液っ♡♡♡♡ あーんっ♡♡♡♡ んぐっ………んぐっ♡♡♡♡ ぷはっ♡♡♡♡ プルプルでネバついてっ♡♡♡♡ 全部、舐め取

らないと——んぐっ♡ しつれいだ♡♡」

自分が精液を味わいたただけなのに、アルトリアオルタはマスターに悪いからと言いついてしている。

顔に掛かったザーメンを指で掬い、舐め取り終わったアルトリアオルタ。

流れ作業のように次は、鎖骨の窪みや乳房に掛かったザーメンを嬉しそうに口に含んでいた。ぶっ掛けられた精液の量が多かっただけに、両手の中指を使つて何度も掬つては口に運ぶ行為を繰り返している。

ホワイトブロンドの髪に付いた白濁液すらこそぎ落としながら、身体中に付着した精を集めていく。

集めた精液と自分の唾液を、舌と歯を使つてぐちゅぐちゅと混ぜ合わせる。その間もずっとワインのテイスティングでもするかのようにな、舌全体でザーメンを味わっていた。

（マスターの精液美味しい♡♡ こんなに美味しいモノを知らなかったなんて、私はもったいない人生を送ってきた……でも、マスター以外のは飲みたくない♡ これからはきつと毎日精液を飲むのが、私のお仕事になるっ♡♡♡ マスターの性欲を処理しないっ♡♡♡ マスターから直接、魔力供給っ♡♡♡）

アルトリアオルタの味覚が、精液をより美味しいと感じられるように作り変えられていく。脳が好きだと強く思うと、味覚は本当に変わってしまうのだ。

精液と唾液が十分に混ぜり合った混合液を、ゴクリと喉を大きく鳴らしながら飲み下す。食道を通つて胃の中に精液が落ちると、胃がカツと熱くなり、下腹部がキュン♡♡ キュン♡♡と疼いていく。

桜色の小さな乳首が痛いくらいに勃っている。マスターからは見えないが、お尻の下の床にはヌルヌル愛液の水溜りが出来ていた。

そうしてマスターに掛けられた濃厚精液に夢中になっていたアルトリアオルタだったが、ふとした瞬間に自分の頭の上に熱気のような

ものを感じた。

何気なくアルトリアオルタが視線と首を上に向けると、勃起したペニスこそそり立っていた。

マスターは自分の精液を美味しそうに啜るアルトリアオルタの痴態に興奮して、射精後の半勃起状態だったペニスを射精前よりも大きくしていた。

彼の性欲の強さも多分に影響しているだろう。しかし、目の前で全裸の美少女が自分の精液を愛しそうに飲んでくれている状況で、勃起しない方が男としてどうかしているだろう。

「——あれ？」

間の抜けた声を上げながら、目の前の事実を受け止めようと思考する。

(あんなに射精したのに……何でまた大きくなってるんだっ♡♡)

あっ♡ マスターがまた怖い顔をしているっ♡♡ 私が男性器を苛立たせてしまったから、怒っているのだな♡)

大地に深く根を下ろした巨木のように逞しい男根に、アルトリアオルタは熱っぽい視線を送る。何故か彼女の口内には、ガムシロップのような唾液が溜まっていた。

口端から唾液が垂れて、形の良い顎先に伝い、雫となって落ちる。

彼女の口内に唾液が溜まった理由は、精液を美味しいモノだと認識してしまっているからだ。美味しい精液を射精してくれるペニスを見ただけで、好物を前にした時のように唾液が分泌されてしまう。アルトリアオルタの好物であるハンバーガーと同じか、それ以上にマスターのザーメンが好きになってしまった事の証明である。

恐る恐る目上の人のご機嫌を窺うように、アルトリアオルタはマスターに声を掛けた。

「あ、あのマスター♡ まだ大きいままだが………どうするっ！」

明らかに追加のご奉仕をさせて貰うことを狙った問い掛けである。期待に染まった金色の瞳で、マスターの目を見詰めていた。

「……アルトリアオルタはどうしたいかな？」

「わっ、私はマスターの望むことを……お腹をイジメないでくれるならっ、それで良いっ♡♡」

マスターは少し考えてから、少し意地悪なことを思い付いた。

「なら、シャワー浴びて、続きは夜にしようか。もう、七時まであんまり時間も無いから」

「えっ——はい……」

アルトリアオルタは蚊の無くような気の抜けた声で、流れに沿って同意してしまった。予想していた答えと完全に違っていたため、生返事を返したものの女の子座りから立てないままにいる。

シャワーヘッドを掴んだマスターは、少し冷たいと感じる程度の水温に調整する。

「お湯だと精液が固まっちゃうから、ちよつと冷たいけど我慢してね？」

「はい……大丈夫だ。あの……何でもない」

マスターの気遣いを嬉しく思いながら、溜まっていた興奮の行き場が無くなってしまったアルトリアオルタは不満気である。自分から改めてご奉仕をさせて下さいとは、まだ言い出せないらしい。

喉元まではおねだりの言葉が出掛かっているのだが、最後の一線を越えてしまえば、取り返しのつかないことになってしまうと漠然とだが理解しているから躊躇していた。

その後、アルトリアオルタは体に付着したザーメンと汗を洗い流した。

火照った体に冷たいシャワーは心地よかったが、下腹部に溜まった熱はジクジクといつまでも熱を持っている。まるでマグマのような熱は、冷たいシャワー程度では冷めなかったようだ。

マスターもシャワーを浴びて汗を全て流し終え、後は二人共ボディークリームで体を洗うだけになった。ここで我慢が出来なくなつたアルトリアオルタは、ボディークリームとネットボールを手取る。

「マスター……体は私が洗いますっ♡ 元々、背中を流すと約束して  
いましたから♡♡」

「それじゃあお願いするね」

「ああ、任せてくれっ♡♡」

アルトリアオルタはお湯で濡らしたネットボールに、ボディークリームを何度かプッシュして泡立て始める。十分に泡立ったことを確認して、後ろを向いているマスターに声を掛ける。

「———それでは洗いますね？」

マスターの広い背中に泡塗れのネットボールを押し当てて、泡を擦り付けるように手を動かしていく。狭いシャワー室では、大きく体は動かせないので必然的に密着するような体勢になってしまう。

マスターの身体を洗っていく中で、アルトリアオルタの身体も泡塗れになっていく。背中に慎ましい胸や引き締まったお腹が何度も当たり、脚同士が触れ合う。

「んっ♡ 痒い所はないかマスター？ はう♡♡」

「大丈夫だよ。気持ち良い位だ」

「それは良かったっ♡♡ んあっ♡ これからは私がマスターの身体を洗ってやろう♡♡ あっ♡♡ これからはマスターがスポンジを持つことは許しませんっ♡♡ んっ……はあっ♡」

自然と当たっていた体が意図的に押し付けられていく。マスターの背中に自分の胸を押し付けて動くと、敏感な乳首が擦れて快感が生じてしまう。甘い声を上げながら自分自身に、これはマスターの背中を洗っているだけと言い聞かせる。

「あっ♡ 沢山汗を掻いたのでっ♡♡ んあっ♡♡ ちゃんと洗わなくてわっ♡ マシユ……キリエライトも、マスターを汗臭いと思ってしまうからっ♡ ああっ♡♡ あひっ♡♡」

円を描くように動かしてみたり上下左右に体を動かすことで、違った快感が乳房に駆け巡る。気付けばネットボールを持つ彼女の手は止まっており、内腿に付いていた泡が水では無い液体で洗い流されていた。

軟体動物のようにマスターの体に密着して、体を擦り付けるアルトリアオルタ。自慰を覚えたての中学生や発情したお猿さんのように自制が出来ていない。今までブリテンや秩序を守るために、自己や性に関する部分を抑圧していたからこそ、歯止めの掛け方が分からないのだ。

初めて知る胸への快感に溺れながら、最後まで致してしまう。

「——んあ♡♡ マスターの背中はやさしい♡♡ んっ♡ 素敵だっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ ああ♡♡ ましゆたあ♡♡ んひい——っ♡♡♡ はあ………はあ………っ♡♡♡」

マスターの太ももに愛液や潮をびちやびちや掛けながら、アルトリアオルタは腰を震わせて絶頂した。目の前が真っ白な光で覆いつくされ、背中が弓のように反ってしまう。身体中に電気が走ったような甘い痺れに酔いしれる。

これまで観察して分かったことだが、アルトリアオルタは非常に敏感な体質であり、唾液や潮、愛液などの”汁気”が多いようだ。特に



潮を吹きやすいようで、余韻イキで腰が震える度に尿道口からぷしっ♡ ぷしっ♡♡と、潮を吹いていた。

鳩尾にペニスを押し付ける行為で潮吹きアクメを何度も繰り返し、今は相手の背中に自分の胸を擦り付けて絶頂する。ある意味、ケルト神話の女王メイブよりも淫らで、大江山の酒？童子よりも欲望に忠実だ。このことをアルトリアオルタが聞けば、鬼気迫る表情で訂正を求めらるだろうが、これまでの行動を見ていたら訂正する気にはなれない。

——当然、いくら我慢強いマスターにだって、限界は確かに存在する。

確かに少し意地悪をして、エッチなことはしないように誘導していた。しかし、乳房を擦り付けるオナニーをし始める方がスケベに過ぎる。耳元で甘い吐息と嬌声を聞かされ、太ももに女の汁を掛けられれば、男の我慢など簡単に限界を迎えてしまう。

マスターの中で嗜虐心が沸々と湧き上がり、理性の糸がギチギチと悲鳴を上げる。

自分の背中に頬と上半身を密着させたまま、甘い吐息を漏らすアルトリアオルタに声を掛ける。

「——おっぱい背中で擦るの気持ち良かった？」

「~~~~~♡♡ ちっ、違うんだっ♡♡♡ っ、その——っ」

羞恥から顔をサクラランボのように真っ赤に染めるアルトリアオルタが、否定の言葉を探そうとするがもう遅い。マスターは無言を言わせぬままガラスの壁まで彼女を追い込む。先程までとは逆で、アルトリアオルタがマスターに背中を向けることになっていた。

より詳しくアルトリアオルタの状態を説明すると、ガラスに両手を突き、背中を反らしながらお尻を突き出しているような体勢である。

ガラスの壁とマスターに挟まれたアルトリアオルタが状況をよく呑み込めずに驚いていると、内股になっていた太ももと股の間に馬のようなペニスが入り込んできた。

俗に言う、立ちバツクの素股である。

疑似的なセックスであり、生理状態のパートナーと快感を楽しむために行うことが多い行為である。今回は立ちバツクの体勢だが、他にも正常位や騎乗位、対面座位で行う素股も存在している。

「まつ、マスター♡♡ これえっ♡♡ あんっ♡ 股に擦れてえ♡♡  
んあ——っ♡♡♡♡」

「スケベなアルトリアオルタなら好きだよね？」

「すけっ、スケベじゃありませんっ——んあ♡♡ お豆がっ♡♡♡  
あっ♡ あひっ♡ 入口い♡♡」

「こんなにヌルヌルに濡らしておいて、スケベじゃないは無理があるんだよ——っ！」

——バチュンっ!!

「あひ——っ♡♡♡♡♡」

今の破裂音はマスターがアルトリアオルタのお尻に腰を叩きつけた音だ。

これまでとは違う、急に肺の空気が押し出されたような甲高い嬌声がシャワー室に響き渡る。

「お腹にチンポ押し付けられただけで潮吹きしてっ！ おっぱい背中に押し付けて擦れただけでイってっ!! 精液美味しいって飲むっ！  
アルトリアオルタはスケベだよっ!!!」

バチュンっ!! バチュンっ!! バチュンっ!! バツチュンっっっ!!!

「こしゅれっ、こしゅれてっ♡♡ ごめんなしやいっ♡♡♡♡ すっ、スケベですっ♡♡♡ わたしはスケベな女ですっ♡♡♡ んひいゝい

いいゝいいゝいいゝいいゝいいゝ  
—— つつつつ♡♡♡♡

大きな破裂音と共にブルブルと尻肉が波打ち、アルトリアオルタの口からは謝罪の言葉と嬌声が混じった声が叫ばれる。特に最後のイキ声は獣の遠吠えのようであった。

本来ならばローションなどを使用しなければ素股など痛いだけであるが、汗気の多いアルトリアオルタの股間部分は、ヌルヌルの本気汁とサラサラの愛液、潮でびちゃびちゃである。マスターの巨大な男根も直ぐに女の汁塗れになり、ズリズリと擦り上げられるクリトリスと小陰唇が受け取るのは快感だけであった。

マスターの30 cm越えの長大なペニスでは、一回のストロークがとても長い。お尻を叩きつけられる時も、ズルズルと引き抜かれる時にも、長い時間クリトリスや小陰唇を擦り上げられてしまう。

お尻を叩きつけられる時には短く強い快感が走り、引き抜かれる時にはネットリと全身に広がるような快感が襲ってくる。それが交互に押し寄せてくるせいで、アルトリアオルタの頭は二種類の快感に耐えられず、ショート寸前である。

膝から崩れ落ちてしまいたい、マスターの頼りがいのあり過ぎるペニスにお尻を持ち上げられ、上半身も壁とマスターにサンドイッチされている。今の身動きの取れないアルトリアオルタに出来ることは、快感を逃がそうと背を反せたり、喘ぐことしか出来ない。

アルトリアオルタは謝っているが、マスターはまだ許すつもりは無かった。彼女の細腰を掴んでいた両手を離して、代わりにイヤらしい桜色の乳首を勃たせた、慎ましやかな乳房を左右でそれぞれ掴んだ。流石にマスターの意図を理解したのか、半狂乱になりながらアルトリアオルタが止めようとする。

「ましゅっ、ましゅたあ♡♡♡ んひい♡♡♡ らめっ♡♡♡ らめれすっ♡♡♡  
♡♡♡ おっ、お股イジメながらっ♡♡♡ 乳首イジメられたらあ♡♡♡  
♡♡♡ こわれちゃいましゅ♡♡♡ 両方ろうじはこわれるっ♡♡♡

あつ♡♡ あつ♡♡ あつ——イグ♡ つ、いくいくいく♡♡ あゝ  
くくく♡♡♡ ————ゆるひへえ♡」

「想像しただけでイク。変態なアルトリアオルタの言うことは聞きません」

マスターは敢えてゆつくりと腰をペニスが太ももから抜けてしま  
うギリギリまで引き抜き、アルトリアオルタの小さな乳首を親指と中  
指の指先で優しく摘まむ。

「らめっ♡♡♡ あたまこわれちゃいしゅ♡♡ やあ——」

「うん………いっぱいイっちゃえ———っ!!!!」

きゆうううっ♡♡♡

ドツチュンンンっっっ!!!!!!

「ふんぎいいいいいいいい!! いっつつっ♡♡♡♡ ————  
—いひっ♡♡♡♡ はへっ♡♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あ  
っ♡ つ♡ うる………くるっ♡♡ くる♡ ツ♡ きち♡ やう♡ つ♡  
♡♡ くくくくくくくくく♡♡♡♡ あああ♡ あああ♡  
ああ♡ ああ♡ ああああ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああ♡

獣でももう少し恥じらいを持つだろう”ケダモノ”のような啼き  
声。

今日一番の絶叫がバスルームの中で反響して、大変なことになつて  
いる。部屋の防音がすっかりとしたもので無かったら、バスルームの  
壁と部屋の壁を突き抜けて、通路にも響いていただろう。

両方の乳首を摘まみ上げられ、クリトリスをペニスで擦り上げられ  
た快感がアルトリアオルタには、寸分の狂いもなく同時に襲つてく  
る。一つだけでも脳が処理しきれない特大の快感が、同時に二つ襲い  
掛かってきた。

絶頂が一度で収まり切らず二度、三度と連続で絶頂を迎えてしま  
う。

絶え間なく迫り来る快感に耐え切れず、辛うじて立っていた足の力も完全に無くなった。マスターの腰とペニスに乗つかるような状態だ。摘まみ上げられた乳首の快感を少しでも減らすためなのか、摘ままれた方向に思いつ切り背を反らしている。

潮なのか愛液なのか判別のつかない体液が腰の震えと同時に何度も吹き出し、何度目かの絶頂を迎えた最後には全身の脱力と共に、黄金色の液体が尿道口からチヨロチヨロと流れ始めた。黄金の液体はマスターのペニスに掛かり、それからシャワー室の壁であるガラスへと掛かる。

ボディーソープの匂いと精液の臭いに加えて、オシッコ特有のツンと鼻を突くようなアンモニア臭がシャワー室には立ち込める。

本来、サーヴアントは全てを魔力に還元することで排泄を必要としていないのだが、今回の場合はアルトリアオルタが魔力の還元さえ出来ない、前後不覚の状態であったために起こった稀有な例である。

初めての連続絶頂とお漏らしの気持ち良さに、殆ど意識を失いかけているアルトリアオルタだった。マスターはやり過ぎてしまったと後悔しながら、彼女の耳元で声を掛ける。

「少しやりすぎた……大丈夫？」

「はあ………はあ………ましゆたあ♡♡♡ きもひ………よかつられす♡♡」

マスターは今後もアルトリアオルタには、エッチなことでは容赦しないと決めた。

第五・五話：暴君は一緒に暮らしたい（台詞のみエロ描写）

「――食堂行こうと思うんだけど、アルトリアオルタはどうする？」  
ベッドの上のシーツの塊に、マスターは服装を整えながら声を掛ける。

マスターに声を掛けられたシーツがビクツと震え、中から頬に熱を帯びたアルトリアオルタがむくりと顔を出した。

「あの……マスター、先程はその……」

歯奥に何か挟まった時のように、まごついているアルトリアオルタ。その原因は単純明快、十分程前にやつと出られたシャワー室での一件である。

淫靡な雰囲気呑まれて、エッチなことをしていた間は良かった。しかし、少しずつ興奮と悦楽で酔っていた脳が冷静さを取り戻し始めると、身を焦がすような羞恥が襲ってきたのだ。叶うことなら直ぐにでも、座に撤退したいと思う程度には、恥ずかしかったらしい。

今ではこうしてシーツの中に身を隠し、お風呂場での出来事を忘れようと苦心しているが、そんなことをしても自分自身もマスターも忘れようがないだろう。

少しだけ不憫に思ったマスターは、何とかフォローを入れる。

「えつと……アルトリアオルタの手コキ、気持ち良かったよ」

「~~~~~♡♡♡」

アルトリアオルタは顔だけでは無く、耳先や首筋まで真っ赤にして羞恥に悶える。マスターなりの最大限のフォローだと分かっただけから、怒るに怒れないのが余計に辛かった。

マスターはアルトリアオルタの元に近付き、彼女にだけ聞こえる声

量で囁く。

「——感じやすい子も、スケベな子も好きだから。明日も一緒にシャワー浴びようね？」

「~~~~~♡♡♡ まっ、マスターは悪い男だっ♡ そうやって女を本気にさせていると、いつか痛い目を見るからなっ♡♡」  
「ははっ、痛い目を見そうな時は、アルトリアオルタが助けてくれるでしょ？ ……それより明日も一緒に入ってくれる？」

無条件の信頼にも似た言葉は、アルトリアオルタの心のささくれを癒してくれる。我ながら単純な人間だと自嘲しながら、彼女は嬉しくなってしまった。

シートからスツと抜け出してマスターに抱きついたアルトリアオルタは、耳元で返事をする。

「——言っただろう？ もうマスターが体を洗うスポンジは持たせない♡ 今日上手く出来なかったが、明日はちゃんと”メイド”のように体を隅々まで磨いてみせるぞ」

「メイドのアルトリアオルタも良いね。今度、見てみたいかも」

アルトリアオルタは横髪をクルクルと指で弄びながら、「私はやると決めたらメイド道を極めてみせるぞ！」と、予想以上に乗り気であった。もしかすると近い将来、メイド姿のアルトリアオルタが見られるかもしれない。

二人が抱き合ったままイチャイチャしていると、マスターが身に付けている腕時計のような機器から『P i P i P i』と、電子的なコール音が鳴った。これはドクター・ロマンやレオナルド・ダ・ヴィンチを始めとするカルデア職員と連絡を取ることが出来る、携帯電話のような物である。

アルトリアオルタがマスターからスツと体を離して、息を潜めるように押し黙った。マスターはボタンを操作して、努めて平静を装いな

がら応答する。

「……もしもし?」

『——あつ、おはようございます。マシユです! 先輩は今、どちらにいらつしやいますか? 一緒に朝食を食べられればと思つて、先輩のマイルームに伺つたのですが、留守のようだったので掛けてみました』

「マシユもおはよう。あー……えつと、少し早めに目が覚めたから散歩してたんだ。今から食堂に行くから、一緒に食べよっか」

『了解です! それでは先輩、また後ほど——』

マスターは機器を操作して、マシユとの通話を終了した。ふう、と長めに息を吐く彼に、アルトリアオルタは後ろから抱きついた。少しだけ責めるような口調で、先程のマスターとマシユのやり取りを揶揄う。

「浮気の誤魔化しのようなだったな? 私のことは気にせず、正直に言ってくれても良かったのだぞ。女性サーヴァントの部屋で一晩を過ごしたと……」

「いや、マシユは純粋な子だから。あんまりエッチなことも教えるのも抵抗があつてさ」

「ふむっ……」

アルトリアオルタはマスターが嘘を言っていないかを横目で窺う。やはり愛する男性に女の影があることは、多少なりとも気に掛かるのだろう。例えそれが”生前に仕えてくれた騎士”の疑似サーヴァントであつたとしても。

(——それに私の直感が告げている。何か些細な切っ掛けがあればマシユ・キリエライトは、私と同じ”マスターの女”になると……)

実際にアルトリアオルタが感じているのは、スキルとして持つ”直感”では無い。しかし、こと恋愛に於いては、それ以上の信頼が持て



る”女の勘”と呼ばれるモノだった。

そんなアルトリアオルタの心配も全く分かっていないマスターは、食堂に向かうために立ち上がった。当然、マスターに後ろから抱きつくアルトリアオルタも、必然的に立ち上がることになる。

歩き出そうとするマスターだったが、アルトリアオルタに引き留められた。彼が振り向くと、顔を赤くした俯き気味のアルトリアオルタが、恥ずかしそうにおねだりをする。

「やつ、やはり、行つてきますのキスは愛する男女には、必要だと思ふのだが……」

「うん、必要だね……顔を上げて」

アルトリアオルタはマスターに言われた通りに、しずしずと顔を上げる。当然のように目を閉じており、背が小さい彼女は、マスターの背丈に合わせるためにつま先立ちになっていた。

正しく玄関先で夫を送り出す新妻、新婚夫婦のような状況である。

本人に言えば烈火の如く怒るだろうが、遠くない未来でマスターに召喚されることになる、違う歴史を辿った”姉”と同じ位に、アルトリアオルタにも妻になりたい願望があるのかもしれない。

マスターもアルトリアオルタの細腰に両腕を回すと、彼女も応えるように相手の首に両腕を回した。グツと身体を抱き寄せてから、唇を近付ける。

「——んむっ♡」

二人の唇が触れ合う。

数秒程度の密着で直ぐに唇同士が離れたが、お互いに少し物足りないく感じってしまった。一晚中キスをしていたのにも関わらず、もっともつとと体が動いてしまう。

「マスター♡ もう一度だけ……んっ♡ ちゅっ♡」

二人はマシユに対して心の中で謝りながら、同時に舌を伸ばした。何の戸惑いも無く、二人の舌が絡み合う。

——しばらくの間、部屋の中では小さな水音が響いていた。

「——マシユ、遅れてごめん」

本当に申し訳なさそうな表情を浮かべるマスターは、マシユ・キリエライトに頭を下げて謝る。因みに十分程度、待たせてしまったらしい。

謝罪された側であるマシユは、気にしていないと顔の前で手をパタパタと振った。まさか信じていた先輩が、女とのデーブキスに夢中になり過ぎて遅れたとは、万が一にも思っていないだろう。

二人は対面する形で食事をしている。

「いえいえ、本当に大丈夫です！ 先輩は人気者なので、英霊の誰かのお相手をしていたのでは？」

「……まあ、そんな所かな？」

「やっぱり！ うーん、どなたでしょう——それは私だ」あつ！ アルトリアオルタさん、だったのですね」

マスターやマシユの五倍はありそうな量の食事を載せたトレイを両手に持った、アルトリアオルタがスツと二人の前に現れる。そのままマスターの隣に座ると、一緒に食事を始めた。

「通路で」偶然、マスターと会ってな。今後のことで少し相談があった話し合っていた。待たせてしまって、すまなかつたな」

「気にしなくて良いです！……それより今後の相談とは何でしょうか？ 第四特異点の攻略も終わったばかりで、暫くは休息と素材集めによる戦力増強だけだったと思うのですが……」

「いや、マスターの体調に関してだ。これまでにマスターは、夜に不埒な連中が寄って来たり、他のサーヴァントの記憶や夢に繋がってしまつた事が何度かあるだろう？」

「はい、確かにそうですね。酷い時には、通路でいきなり倒れるように、レムレムしてしまうこともありまますから。」レングズ・シバ”を用いて、先輩に危険が無いかを常に観察しています。それと……先輩の寝込みを襲う。いえ、見張る清姫さんなどに関してはノーコメントです」

マシユの言葉は間違っていない。

元カルデアの顧問であつたレフ・ライノールが作つた近未来観測レングズ・シバを用いて、基本的にマスターは常に観察されている。マスターが問題を起こすことを警戒してでは無く、万が一の健康被害を防ぐためである。

拠点であるカルデア内で、そこまで警戒する必要も無いと思うだろう。しかし、急に気絶するように倒れ、契約しているサーヴァントの記憶や心に繋がる”レム睡眠”に入ってしまうことがあるので、場所によつては命に関わるレベルで危険だ。例えば湯舟に浸かつている時に、レム睡眠に入つてしまえば溺死する。

個人のプライベートと人命では、後者に比重が置かれるのは仕方の無いことではある。結果的にドクター・ロマンやダ・ヴィンチなどの最低限の人員で、マスターは常に観察されているのだ。

青少年を常に監視とは、生理現象的な意味で酷いことをする。

今朝のシャワー室でマスターの射精量が異常だったのも、もしかすると半強制的なオナ禁が影響しているのかもしれない。――い

や、生まれ持った絶倫であるからだろう。

昨日、アルトリアオルタがダ・ヴィンチと性欲処理の件で話し合っていた時に、夜のマスターの監視を止めるように言っていたのは、こういった事情があったからだ。

マシユの言葉に頷くアルトリアオルタは、予め用意していた本題を切り出す。

「ああ、マスターの命を守ることは確かに大事だ。しかし、就寝の時間はプライベートが守られるべきだろう」

「なるほど……確かに先輩がリラックスして眠れる睡眠環境は大事です」

アルトリアオルタの言葉にマシユもうんうんと頷きながら、深く同意を示した。

「———なので、今後は私がマスターのマイルームに同居することで、マスターの睡眠とプライベートを保障しようと思ってな。マスターの許可も先ほど貰ったから、今日から一緒にマイルームで住む予定だ」

「なるほど……えっ？ それでは先輩のプライベートが守られないのでは……」

「そんなことは無い。私のことは空気か水くらいに思っただけで貰えれば良い。」

「マスターも私ならば安心だと言っていたからな」  
「先輩、本当なのですか？」

アルトリアオルタの言葉が本当なのか、マシユはマスターに確認する。

「うん、アルトリアオルタなら信頼できるから。」

「強さも申し分ないし……お願いしてみようと思って」

「そうですか……私も先輩の安眠をお守り出来るかと思うのですが、いかがでしょうか？」

”守る”ことに対して、一家言あるマシユは自分を売り込む。

表面上でしか分からないがマシユの今の発言は、女としての嫉妬では無く、特異点Fからマスターを守る盾役であったことへの誇りからだろう。

その証拠にアルトリアオルタに対して、敵意や嫉妬は見られなかった。

マスターもマシユの気持ち自体はとても嬉しかったが、根本的な問題が一つだけあった。それは性処理の件では無く、それは彼女が”生身”のままサーヴァントの力を持った、疑似サーヴァントであるからだ。生身であれば最低限の睡眠と休息が必要なことは、人間とは変わらない。

「気持ちは嬉しいけど、やっぱりマシユにはしつかり休んで欲しいな」「マスターの安眠は私が守ろう。」

特異点攻略ではマシユ——貴様がマスターを守るのだ。今はしつかり休むことも大切だろう」

「はっ、はい！ 次の特異点攻略に向けて、今は英気を養いますっ！」

マシユが納得した所でこの話題は終了した。

アルトリアオルタは机の下で小さくガッツポーズをする。

ある意味、アルトリアオルタがマスターの部屋に常駐するために、一番の難関であったのが他ならぬマシユ・キリエライトだったからだ。

(マスターとの甘い生活を送るためにも、私がマスターの部屋に堂々と居られる理由が欲しかったからな。既にダ・ヴィンチは私と協力関係だ。後は文句を言ってくるサーヴァントを物理的に排除すれば完璧だ)

かなり黒いことを考えているアルトリアオルタだったが、マスター

とマシユにそれは分かる筈も無かった。三人で会話を続けながら食事は続き、同時に食べ終わると三人は立ち上がって片付けを始めた。

「？」

その際にマシユは何かの違和感を感じた。

見た目では分からない”何か”だったのだが、本当に些細なことだったからか、それともここが食堂であったことが理由だろうか。最後まで違和感の正体を見付けることが出来なかった。

——マスターとアルトリアオルタが同じ匂いを漂わせていることに

その後、どこかやつれたロマニ・アーキマンと、肌が艶々としている機嫌の良いレオナルド・ダ・ヴィンチからの許可も貰い、アルトリアオルタはマスターの私室に同居することとなった。

『マスター君もハッスルするみたいだし……今日も私の部屋に来てくれるよね♡♡』

『』

『勿論、来ないのは自由だけど、昨日のロマニが私のおっぱいとオマンコに夢中になっていた動画が、カルデア中にばら撒かれちゃうかも？ 獣みたいに私に『孕め！ ボクのモノだっ！』て、後ろから私のお尻に腰を叩きつける姿がね♡♡♡ いっぱい種付けした後の、私のおっぱいをちゅー♡♡♡ ちゅー♡♡♡つて、赤ん坊みたいに吸いなが

ら、よしよしつて頭を撫でられてる所もバツチり映っているよっ♡♡  
♡ ———— 本当に可愛いかったなあ♡♡♡

『あくまでも”かも?”だから。ちゃんと今日も私の部屋に来てくれれば、この映像は私とロマニだけの秘密のままさ。それに……ロマニのために少し霊基を弄ってね♡ ”色々”元気になる栄養満点なミルクをおっぱいから、ビュー♡♡♡ ビュー♡♡♡つて、出せるようにしてみたんだっ♡ 何と言つても私は天才だからね?』

『……?』

『ロマニが大好きな私のおっぱいを吸えば、疲労も睡眠の問題は解消出来るし、性力も上がっちゃうから、一晚中ケダモノエッチが出来るよ♡♡

万物の天才である私が”本気”で愛するんだから、相手が疲労困憊で、薬に頼つてる生活なんてさせる訳がないだろう?』

作業の効率化と他のサーヴァントへの応援要請、打診とかも既に終わっているから。

男女の関係を長く続けるためには、夜の生活を大事にしないとね

♡』

『………』

『資格とかどうでも良いんだ。私は自分の我儘でロマニの終わりが”消滅”だなんて許すつもりは無い。最低でもラグビーチームが組めるようになるまで子供は産むつもりだよ? 赤ん坊を置いてくパパなんて許さない♡♡』

『………』

『確かに肉体関係から始まった関係だけど、私は嫌いな人間とセックスするほど尻は軽くないつもりだ。昨日だつて私のことをデカ尻だつて、平手で叩きながら罵倒してきたじゃないか♡♡ 私の尻が大きくて、重いのはロマニが一番分かっているだろう? 今日大きなお尻にいっぱい腰を叩きつけて欲しいなっ♡

ロマニだつて、昨日は「好きだ」、「愛してる」つて、耳元で囁きながら、おマンコにザーメンを何度もタップリと注いできたんだよっ♡

♡♡ あんなに愛し合っておいて、逃げられると思わないことだ』

『ふぎけてないさ……それにオチンポ勃起させながら、怒られても怖くないなあ♡ —— 聞き分けの悪い女を分からせるには、お仕置きセックスしか無いよ♡♡ 何度も”種付け” 中出しセックスしてくれれば、私も反省して考えを改めるかもしれないなあ♡♡』

『きゃっ♡♡ 今ここでエッチするのかい？ 誰かが来ちやうかもしれない倉庫でっ♡♡♡ 口を手で塞いで、レイプするみたいになっ♡♡♡ あっ♡♡♡』

『あんっ♡ 人払いしてるのバレてたっ♡♡♡ そうだよ♡ ロマニとエッチしたくて、襲われるようにオチンポ煽ってた♡♡♡♡♡ あと、キスすれば和姦だからっ♡♡♡♡ どんな種付けレイプも恋人キスすれば全部和姦っ♡♡♡♡ ……おっぱいが張ってて、我慢が出来ないのおっ♡♡♡』

『すこっ、少しだけ霊基弄りで失敗したことがあって♡♡ ずっとおっぱいからミルク出たくてウズウズしてるんだっ♡♡♡ おっぱい搾って貰わないと、お乳がどんどん張っちゃうのっ♡♡♡ 感度も昨日より三倍は、余裕で上がっちゃってるかも？』

サイズも2カップも大きくなって、牛乳女みたいにいっ♡♡ 私的完美な肉体がおっぱいだけドスケベ乳牛になってしまったから、ロマニにお乳搾りを手伝って欲しいんだ♡ あんっ♡♡♡ 子作りしよっ♡♡♡♡♡』

『——私も愛しているよ、ロマニっ♡♡♡』



## 第六話：主人に乳房を責められる暴君（乳首責め）

「……………」

ダ・ヴィンチとロマニ・アーキマンが倉庫で淫行に耽っている頃、マスターとアルトリアオルタは居住区の通路を無言で歩いていった。

この無言は機嫌が悪いといった負の感情では無く、期待と緊張が極限まで高まっている故の無言であった。昼間の間ずっと溜まり続けていた、今夜の自室での”行為”への期待感が爆発寸前の状態である。

何か些細な切っ掛けでもあれば、二人”も”我慢しきれずに倉庫やトイレの個室で淫行に浸っていた筈だ。唾液が零れることさえ忘れてお互いの唇を貪り合い、アルトリアオルタはマスターの精液をじゅるじゅると啜っていただろう。

幸か不幸か——何の切っ掛けも無かった二人は、一分一秒でも早く自室に戻ろうと足を進めていた。コツコツと二人分の足音を響かせながら、いつもよりやけに長く感じる廊下を歩き切り、マスターとアルトリアオルタの自室の前まで辿り着く。

マスターが部屋の扉を開き、アルトリアオルタを先に部屋の中へと通す。続くようにマスターの部屋の中に入って、自動の扉が閉まると同時に……

「——ちゅっ♡♡ ちゅるっ♡♡ ちゅっ……じゅるっ♡♡ じゅるる——」

部屋に小さな水音が響いた。

何が起こったのかを説明すると、閉まった自動扉にアルトリアオルタを押さえ付けるような体勢でマスターが扉に手を突き、アルトリアオルタはつま先立ちになりながらマスターの逞しい首に両腕を回した。そのまま二人は顔を近付け合い、唇同士を重ね合わせたのだ。

二人が部屋に入ってから、数秒の出来事である。

日中のカルデアのマスターとして活動していた時間帯でも、ふとし

た動作や食事の時に気になっていた、相手の唇を互いに堪能していた。柔らかい唇の感触や唾液を味わっている。

最初に一回だけ唇同士が触れ合うリップキスをした後は、舌を絡ませながら唾液を交換し合うディープキスを続けている。

相手の鼻息が顔に掛かる擦ったさすら楽しみながら、舌の上で二人の唾液を混ぜ合わせていた。

「じゅるっ♡♡ ちゅぷっ……ぷはっ♡♡♡ はあっ♡………  
はあっ♡……私達は盛った獣のようだなっ♡♡ ちゅっ……ぢゆる  
るっ♡ んむっ♡♡ はあっ♡……ずっと口付けを求めている……  
んぐっ♡♡♡ ちゆるるっ♡♡ ちゅぢゅっ——」

「はあ……はあ。俺もアルトリアオルタと、キスしたかった。んっ——」

お互いに話したいことはあるのだが、それよりもキスを続けたいという欲望に勝てない。結果的に相手の唇を塞いでしまい、言葉も途中で途切れてしまう。

アルトリアオルタは後ろに扉があるのだが、目の前のマスターに身体を預けている。慎ましいがしっかりとある乳房が、マスターの胸板で潰れるのも気にしていない様子だ。

寧ろ意図的に押し付けているようにすら見えた。シャワー室でマスターの背中に胸を擦り付けて、自慰行為をした快感を求めているのかもしれない。

むつつりスケベであるアルトリアオルタは、興奮によって体温が上昇してしまい、自然と全身から汗を掻いていく。キスによる酸欠も合わさって紅潮した頬は汗ばんでおり、ホワイトブロンドの髪が数本張り付いて自然と淫靡に見えてしまう。

マスターとアルトリアオルタの口端からは唾液が垂れており、背伸びをしても身長の高い彼女の形の良い顎先に伝う。溜まった唾液は雫となって落ち、アルトリアオルタの胸元の黒い布に染みを作る。

唾液や汗で服が肌に張り付いた頃、アルトリアオルタは名残惜しそ

うに唇を離した。二人の唇の間には唾液の糸が引いている。

「——じゆるちゅっ♡♡ ちゅぢゅっ……んぐっ♡♡♡ んっ  
………ぷはあっ♡♡ はあっ♡……マスター、服を脱いでも良いか  
……っ♡♡♡ 既に遅いかもしれないが、濡れた状態も気持ち悪い♡  
♡」

「はあっ……ごめん、気が利かなかったね。俺も汗掻いたから、一緒に脱ごっか」

自分で服を脱ごうとするマスターの手を、アルトリアオルタは止めた。キスで蕩けた雌の顔をしながら、マスターの服の裾を両手で摘みながらある提案をする。

「自分で脱ぐだけでは情緒が無い……っ♡♡ 私にマスターの服を脱がせようっ♡♡♡♡ マスターも私の服を脱がせてくれ……っ♡♡♡」

アルトリアオルタはマスターの服を捲っていき、腹筋や胸筋が見えるまで上げた。細身ながらしっかりと鍛えられた胸板の汗を、舐め取るように舌を這わせる。

「れる——お♡♡ んっ……しよっぱくてマスターの体は美味し  
いなっ♡♡♡♡ この頼りがいのある胸板も素敵だ……っ♡♡ はあ  
——っ♡」

その後もアルトリアオルタはマスターの胸板に頬ずりをしたり、赤い小さな痕が付くように唇で吸い付いたりする。その間も服の裾を摘まんだ両手を持ち上げて、マスターの上半身に纏っていた服を全て脱がせた。

グルーミングをするようにマスターの首筋に舌を這わせながら、マスターのズボンのベルトに手を掛ける。

「んっ♡♡……次は下だ♡ 人の服を脱がせるのは意外と難しいが……っ♡♡ れろ——おっ♡♡ ちゅううっ♡ マスターに仕えるメイドのようでっ♡♡ はあっ♡ はあっ♡ 変な気分になってしまっ♡♡……っ♡♡♡♡」

マスターの首筋に自分の存在を残すようにキスマークを付けながら、両手を動かしてベルトやズボンのチャックを外す。首筋に這わせていた舌を下に動かして、胸筋同士の間や腹筋同士の間をなぞるようにしながら、アルトリアオルタは膝を曲げて腰を落としながらしゃがみ込み。

骨盤付近でズボンとパンツをまとめて左右で掴み、ズルズルゆつくりと下ろしていく。アルトリアオルタは股間部分に顔を近づけながら匂いをククンと嗅いでいる。布越しではあまり感じられないが、雄の臭いを求めているのは間違いなかった。

途中で怒張したペニスの引っ掛かりがあったが、アルトリアオルタはマスターの服を全て脱がせることに成功した。汗で蒸れた雄の膣えた濃い臭いを発する、勃起した長大な肉棒に熱い視線を送り、鼻先が触れるギリギリまで近づけて臭いを肺一杯に取り込んでいる。

口内には唾液が溜まっており、半開きになった口の端からは涎が垂れていた。

「すう——はあっ♡♡♡♡ すう——はああ♡♡ 何度見ても大きなペニスだ……っ♡♡ パンツの中で蒸れてニオイもとても濃くっ♡♡……私は好きな臭いつ♡♡♡♡ すう——」

このままペニスを啜えてしまいそうなアルトリアオルタの頭を優しく叩き、マスターは彼女を正気に戻す。

「次は俺が脱がせる番だよ。アルトリアオルタは立って？」

「~~~~っ♡♡♡♡ すまない……夢中になり過ぎたっ♡♡♡♡ ——

——脱がせてくれ……っ♡♡♡♡」

自分の痴態に羞恥を覚えながら、アルトリアオルタはマスターの目の前に立つ。戦闘用の衣装でもある黒いドレスを彼女は身に纏っている。

マスターは慣れない手付きではあるが、服のリボンなどを解いている。徐々にアルトリアオルタの雪のように白く穢れの無い肌が露出していき、ストンと足元にドレスが落ちた。残っているのは黒いブラとショーツだけであるが、ブラは汗で湿っており、ショーツは愛液で濡れていた。

特にショーツはびしゃびしゃであり、太ももの内側はヌルヌルの愛液で艶めかしくテカっていた。キスとマスターのペニスの匂いを嗅いだだけで、秘所を濡らすアルトリアオルタは淫乱の素質があるのだろう。今も自分の恥ずかしい所を見られることに興奮しているのか、コプコプと愛液を溢れさせていた。

交尾を求める雌の淫らなニオイが、アルトリアオルタの秘所から立ち込めている。

「マスター……っ♡♡ 下着も脱がせて欲しいっ♡♡♡♡」

「うん、アルトリアオルタの全部を見せて？」

「~~~~っ♡♡♡ 私のを全てを見てくれっ♡♡♡ マスターだけの体だ……っ♡♡♡♡」

アルトリアオルタは、マスターの手で全てを脱がされる。

慎ましい乳房の先端にある桜色のプックリと膨らんだ乳輪と、ピンと勃った小さな乳首が露になる。無毛の薄い恥丘は子供のようであるが、雄を求めるイヤらしい涎でびちやびちやに濡れている。

一度は見ている筈なのに、マスターは見惚れてしまう。

きつと一生見惚れ続けるのだろうと思える程に美しく、雄の獣性を刺激する淫らな肉体である。

「本当に綺麗だよ……」

「マスターに魅力的だと思われるのが、何よりも嬉しい♡♡♡」

嬉しそうに微笑むアルトリアオルタは、マスターに抱きついた。

そこに秩序を求めた騎士王としての姿は無く、愛する男に甘える少女しか居ない。

その後も扉付近でキスや軽いお触りなど、戯れのようなペッティングをしていた二人だったが、次第に性的興奮が高まっていき何方ともなくベッドに移動を始めた。アルトリアオルタはベッドに仰向けに倒れ込み、マスターに向かって両手を伸ばす。

「マスター……愛していますっ♡♡♡♡ 今宵も私と性愛に溺れましょうっ♡♡♡」

「オレもアルトリアオルタを愛してるよ」

仰向けのアルトリアオルタにマスターが覆い被さる。襲われた少女と獣のような体勢であるが、その少女は獣の首に両腕を回して受け入れていた。どう見ても和姦にしか見えない。

アルトリアオルタの可憐な唇を奪いながら、マスターが優しく乳房に触れた。指先が乳房に沈んでいく、慎ましい大きさの乳房だが、マシユマロのような柔らかさである。

「んっ……ちゅるっ♡♡ んぐっ!? んんっ♡♡♡ じゅるちゅっ♡♡ ぢゅるるっ♡♡♡」

マスターの口内でくぐもった喘ぎ声を上げながら、アルトリアオルタは乳房を揉まれる快感に酔ってしまふ。自分で触ったり、マスターの背中に押し付けて擦り付けるのとは違う快感。

自分ではどうやっても想定できない指の動きのせいで、快感に身構えることが出来ない。一番気持ち良い先っぽを触られることが無くとも十分な快感を得ていた。

（舌を絡めながらマスターに乳房を触られてっ♡♡♡ 優しい手付き

で愛情を感じてしまう……っ♡♡♡ 気持ち良いっ♡♡ んぁ——  
——っ♡♡)

アルトリアオルタの乳房を円を描くように両手を動かしながら、乳絞りのように根元から先っぽに向けて合計十本の指を動かす。もしも彼女が母乳が出る体質であつたら、びゅー♡♡ びゅー♡♡と母乳を噴き出していたらう。

今は”まだ”母乳の出ないアルトリアオルタは、乳房から快感を搾られる。

元々、マスターに見られて膨らんでいた乳輪は更にプツクリと膨らみ、ピンと勃つていた乳首も痛い位に硬くなつていた。

「じゆるちゅっ♡♡ ぢゆるっ♡♡♡ んぐ………ぶはっ♡♡  
はあっ♡♡ マスター♡♡ 先っぽが切ない………っ♡♡♡ ちっつ、  
乳首を指で弄って欲しいっ♡♡ ああ——っ♡♡♡ クリクリ  
良いっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あっ♡♡♡ あひ——っ♡♡♡」

マスターに親指と中指で乳首を上下に挟まれ、指先で擦られる快感にアルトリアオルタは嬌声を上げる。汗で指先の滑りが良く摩擦が少ないお陰で、敏感な乳首であつても快感しか感じる事が出来ない。

アルトリアオルタは悩まし気に太ももを擦り合わせて、膣口から雌のフェロモンがタツプリ含まれた愛液を垂れ流す。軽く乳首を摘み上げられる度に、背と首を反らして甘つたるい悲鳴を上げる。

丹念に優しくねつとりと乳房全体を愛撫するマスターは、アルトリアオルタの弱い所を徐々に把握していく。乳首や乳輪だけで無く、下乳とお腹の境目に指を這わせると彼女の反応が良いことに気付いてからは、ずっと指先を這わせ続けた。

優しい愛撫ばかりでは飽きてしまうと思つたマスターは、たまに指で摘まんだ乳首を強めに引っ張つたり、爪を立てて乳首の先端をクリクリと穿つたりする。その後はまた優しい愛情たつぷりの愛撫に戻るのだから、性に疎い女の子では耐えられないだろう。





溜まりに溜まった乳房の快感が一気に爆発した。

アルトリアオルタは部屋中に響き渡る雌声で、絶頂したことをマスターに報告する。

足先から頭に向かって高圧電力が流れたような快感が走り、脳髓と乳首を快感が焼き焦がす。目の前が真っ白な光に埋め尽くされ、脳裏で赤黒い炎が何度も迸っていた。

目を？きながら背中を弓のようになるまで反らせ、閉じていた太ももを思いつきり開いた。大胆に開かれた秘所からは、勢い良く潮を吹き出していた。何度も何度も全身が震えるのに合わせて、破裂した水道管のようにぶしゅっ♡♡♡ぶしゅっ♡♡♡と透明な液体がシューを濡らしていく。

目の前で自分以外に誰も見たことが無い。アルトリアオルタの快楽に歪んだ表情に興奮しながら、マスターは更に乳首をグニグニと捏ね回す。もつと快感を与えて、気持ち良くなって貰いたいからだ。

アルトリアオルタは絶頂で敏感になっている乳首に更なる快感を受けて、全身をビクっ♡♡ビクっ♡♡と震わせて絶頂しながらマスターに懇願する。

「イッって、ますっ♡♡♡もっうイッつたっからっあ♡♡き  
ちやうっ♡♡♡またっきちっやうっううっううっううっううっ  
うっうっうっうっ♡♡いひいっっ♡♡ちくっびグニグニ、と  
めへえっえっえええっえっええっええっええっっ♡♡♡  
♡うあ——っ♡♡」

余裕の無くなった雌獣の咆哮のようなアルトリアオルタの嬌声は、聞いているだけでペニスに血流が集まっていく。彼女は言葉では明確に拒否を示しているのに、声の端々に被虐に満ちた享楽が垣間見えていた。

要するにアルトリアオルタのマゾ性癖を満たしている。

愛する男に絶頂して敏感になった乳首をグニグニと捏ね回されて、

絶頂し過ぎて苦しいのが気持ち良くなっていた。叫んでいても目と口元には悦びの笑みがあり、潮を吹く勢いと量も多くなっている。

これまでのアルトリアオルタの痴態から薄々マスターも分かっており、今回の乳首責めで確信した様子だ。ドSのSがサービスのSと言われるように、マスターは完全な善意と奉仕精神で引つ張った乳首を捏ね続ける。

それからアルトリアオルタの乳房がマスターに逆らえなくなるまで快樂調教された時には、彼女は声も殆ど出せず、背中を反らせたまま瀕死の虫のようにピクっ♡♡ピクっ♡♡と、小刻みに震えていた。

「あひ……………っ♡♡ いっ……………くっ♡♡♡♡ あいつ♡♡」

マスターが乳房から手を離すと、アルトリアオルタは全身を脱力させてベッドに崩れ落ちた。先程まで尿道口から吹いていた潮とは違う、金色の体液をチヨロチヨロと弱々しく排尿している。

部屋全体に牝の発情臭と汗、そしてアンモニア特有の僅かな刺激臭が広がっていった。

表情筋が緩んで幸せそうなアルトリアオルタの額に、マスターは軽く口付けをする。その後、失神寸前の彼女に耳元で乳首責めの感想を尋ねた。

「ねえ……………気持ち良かった？」

「ひどい……………れすっ♡♡♡ もっとやさ……………しうっ♡♡♡」

非難する言葉を吐くアルトリアオルタに、マスターは乳輪と地肌の境目をなぞりながら聞き返した。乳房を騷けられた彼女は、正直な気持ち伝えてしまう。

「……………本当に優しいだけの方が良かった？」

それなら後は優しくおっぱい弄るだけにするけど……本当はどうして欲しい？」

「いひい——っ♡♡ ほんとうは……っ♡♡ いっぱいイって、きもちよかった♡♡ マスターにむりやりイかさせるのすきっ♡♡ だいすきっ♡♡♡ これからもシてほしい……っ♡♡♡♡♡」

元々、熟れた林檎のように赤い顔を更に真っ赤にしながら、アルトリアオルタはマゾヒズムに満ちたことを言ってしまった。マスターに軽蔑されてしまうかもと、不安気な表情に変わってしまう。

羞恥と不安に震えるアルトリアオルタを安心させるように、マスターはホワイトブロンドの髪が綺麗な頭を優しく撫でる。

「これからも好きだけイかせて上げる。

素直な気持ちを聞かせて……絶対に受け入れるから」

「~~~~~♡♡ まっ、マスターのことをもっと好きになってしま……っ♡♡♡ スケベでマゾな女だが、これからも愛して欲しいっ♡♡♡♡♡」

嬉しそうにマスターは頷き、二人は無言のまま口付けを交わした。

## 第七話：暴君は快感を与えたい（クンニ）

一糸纏わぬ男女がベッドの上で口付けを交わしている。

「——んうっ♡ ちゅっ♡ ふう……んっ♡」

新雪のように白く美しい肌の少女が黒髪の青年に対して、子供が親に甘えるように抱きついていている。青年は少女を受け入れ、優しく頭を撫でながら唇を触れ合わせていた。

性感や興奮を高めていくような激しいキスでは無く、愛を伝え合うような優しいキスであった。

少女——アルトリアオルタは尻を下げて、頬を熟した林檎のように紅潮させている。

普段の凛々しく誰も傍に寄せない雰囲気は無くなり、年相応の恋に恋する少女のような甘酸っぱい雰囲気醸し出していった。

数日前のアルトリアオルタであれば想像すら出来ない程、目の前のマスターに恋をして愛していた。彼になら本当の自分を見せても良いと思ひ、猫が主人に甘えるように身体を擦り付けている。

良く見ればマスターの首筋や鎖骨、二の腕には赤い痕が幾つも付いていた。それはアルトリアオルタが可憐な唇で、彼の肌に吸いついて付けたキスマークである。このキスマーク達は自分の物だという独占欲で付けたものではなく、マスターに抱きしめられている時に衝動的に肌に吸いついてしまったものだった。

最初はやってしまったとアルトリアオルタもマスターに謝ったのだが、彼が『大丈夫だよ。もつとしても構わないから』と優しい声色で許してくれたので、歯止めが効かなくなってしまった。

気付けば首筋への甘噛みやをしたりとやりたい放題してしまい、虫刺されでは誤魔化せない程になったのだ。アルトリアオルタが痕を付けている間も、マスターは優しい目をしながら頭を撫で続けていた。

時間を忘れてキスをしていた二人は、ゆっくりと唇を離す。

アルトリアオルタは普段よりも少し高く甘えるような猫撫で声で、マスターの望みがないかを尋ねる。

それは自分ばかり気持ち良くなつて、甘えてしまっていたことへの罪悪感とマスターにも気持ち良くなつて欲しいと純粹に思ったからだ。

「んっ………ふは♡♡ はあ♡……はあ♡ マスターは私にして欲しいことは無いか？♡♡ マスターが望むことであれば、出来る限りのことをしたい……っ♡♡♡」

「うーん、アルトリアオルタとこうやってキスしたり、抱きしめ合つてるだけでも十分過ぎる位に幸せなんだよね。だからして欲しいことと言われると……」

「~~~~っ♡♡♡ わっ、私もマスターの傍に居られるだけでも幸せだっ♡♡ だが……部屋に戻ってから私ばかり甘えている……っ♡♡♡ マスターがしたいことがあれば、何でもしてあげたいっ♡♡」

アルトリアオルタの言葉に、マスターは暫し考えを巡らせる。

本当は男としてアルトリアオルタにして欲しいエッチなことは沢山あったが、彼女が処女で男性経験が無いことを知っているのもあり、色々と段階を踏みながらゆっくり男女の関係を構築していければと思っていたのだ。

マスター自身もこれまで女性経験が無いこともあり、アルトリアオルタが初恋と言つてもいいような状態である。二の足を踏むようではあるが、直ぐにセックスをする体だけの関係のようにもなりたく無かったのだ。

アルトリアオルタの顔を見れば、期待と羞恥の混じった瞳でマスターを見ている。彼女が意外とスケベでマゾ気質なのを知っているせいで、このまま押し倒してハジメテを奪ってしまいたくなってしまう。据え膳食わぬは男の恥であるが、童貞思考と思われても相手を大切にしかつた。

——色々と考えた結果、マスターはアルトリアオルタにお願い  
することを決めた。

「……………えっと——」

アルトリアオルタは全身が震えるような羞恥から、耳の先端や首ま  
で真っ赤になっている。

その理由は見れば分かるのだが、彼女が細くしなやかな両脚を開い  
て秘裂が良く見える体勢になっていることと、その秘裂に鼻息が吹き  
掛かる程にマスターが近くに居るからだ。

マスターに女の一番恥ずかしい所が丸見えの状態であり、アルトリ  
アオルタは下腹部が少しずつつんでいるのを感じていた。ゆつくり  
と秘所に熱が溜まっていくような悩ましい感覚に、身悶えしてしま  
いそうになる。

アルトリアオルタは声を上擦らせながら、マスターに声を掛けた。

「はあっ♡♡……………はあっ♡ マスター……………見てて下さいっ♡♡  
♡」

「うん。アルトリアオルタの恥ずかしい所も全部見せて？」

「……………っ♡♡♡ はっ、はい……………っ♡♡」

羞恥に悶えながらもアルトリアオルタは、マスターの目の前で小陰  
唇を両手の指先を使って開いた。中からは桜色の肉の花弁が露出す  
る。愛液で濡れそぼった秘所は、綺麗で何よりもイヤらしかった。

マスターは初めて生で見る女性器に感動すら覚えながら、独り言のように呟く。

「……………綺麗だ」

「~~~~~っ♡♡んあ♡」

アルトリアオルタは膣口からこぶっ♡♡と、ガムシロップのような愛液を溢れさせた。

二人が何故このようなプレイに興じているのかと聞かれれば、アルトリアオルタにマスターが裸をすっかりと見たいとお願いしたからだ。彼女はもつと直接的なエッチなお願いをされると思っていたのだが、マスターの望みならばとそれを了承した。

灯りを点けた部屋で愛する男性に背中や鎖骨、乳房などを見せる行為は、想像以上に羞恥を感じるものだった。

マスターが『綺麗だね』や『凄い興奮する』と心からの言葉で褒めると、女として身体を褒められる嬉しさと共に触られてもいないのに気持ち良くなってしまう。

次第にマスターに見せる場所もお尻や腋、太ももの内側など恥ずかしい場所が変わっていった。遂には自分でさえマジマジと観察したりしたことのない、雄と交尾するための肉孔をマスターに見せていたのだ。

アルトリアオルタは不安気に、自分の秘所が変では無いかをマスターに確認する、

「まっ、マスター…………っ♡♡ 私のオマンコは変ではないか?♡」

「全然、変じゃないよ。ピンク色で綺麗だと思う。」

「…………初めて見たからあんまり分からんだけど」

「~~~~~っ♡♡♡ そっ、それなら私が説明しよう…………っ♡♡

”これから”のことを考えれば、きつと必要だろうからっ♡♡♡♡

今後の性行為を想定してアルトリアオルタは、マスターに秘所の詳

しい説明をする。顔から火が出る程に恥ずかしかったが、彼との今後を考えれば必要なことだと思っただろう。

小陰唇を片手でくぱあ♡♡と開き、もう片方の手で肉で出来た新芽のような陰核を指差した。

「こっつ、ここがクリトリスだっ♡♡♡ とても敏感な場所だから、触るときは優しく触って欲しい……っ♡♡♡ ふう♡♡♡ 今朝マスターのオチンポで擦られて気持ち良くなっていたのも、ここが擦れてしまったからだ……っ♡♡♡」

「今もプツクリ膨らんでるのは、興奮してるから？」

「~~~~っ♡♡♡ はい……マスターに見られて興奮している……っ♡♡♡」

アルトリアオルタはまた膣口から愛液を零した。

恥ずかしい所をマスターに見られることに、彼女は性的興奮を得ている。

自分が段々と取り返しのつかない変態になっていることを感じながら、それを嫌なことや駄目なことだとは思えない。何故かと聞かれればマスターなら変態な女でも、絶対に受け入れてくれるという信頼があつたからだ。

(マスターは素直な女の方が好きだから大丈夫……っ♡♡♡)

今もマスターはアルトリアオルタの言葉に引いたりすることは無く、情欲の炎が灯った眼で彼女の秘所を見詰めていた。彼の獣のような視線に熱を感じてしまい、より秘所から愛液がトプトプと零れてしまう。

見られているだけで感じながら、マスターへの説明を再開する。

次に彼女が指で指し示したのは、陰核の下に位置する小さく縦に閉じた穴だった。

「ふあ……っ♡♡♡ こっつ、ここは尿を出す穴だっ♡♡♡ 私がいつてしまうと潮を吹いているのもこの穴だ……っ♡♡♡ マスターはいつぱ



い潮やお漏らしをする女は嫌いか？」

「沢山出してくれる方が好きだよ。いっぱい気持ち良くなってくれてるのが分かって安心する」

「そっ、それならば今後も我慢せずに出す……っ♡♡♡」

少し気にしていた直ぐに潮を吹いてしまう体質をマスターに好きだと言われて、アルトリアオルタは隠し切れない程に笑みを浮かべていた。マスターが嫌がっているのであれば、何とか我慢しようと考えていたらしい。

声を弾ませながらアルトリアオルタは最後に、尿道口から更に下にある肉の穴を指差した。今も蜜を噴き出すそこは、マスターのペニスを求めるように開いたり閉じたりを繰り返している。

「最後にこの穴が……っ♡♡♡ まっ、マスターのオチンポを挿入するための場所だっ♡♡ ……この奥に赤ちゃんを作って育てるための子宮がある♡♡♡」

「ここが………凄く狭そうだけど入るかな？」

「たっ、多分だが……私は男性経験が無いので、入り口を守っている薄い膜のせいで余計に狭く見えているのだと思うっ♡♡♡ 確かにマスターの大きなオチンポが挿入出来るかは不安だが、指などで慣らしてくれば大丈夫な筈だ……っ♡♡♡」

アルトリアオルタの言う通り、一般的に処女膜と呼ばれる中心に穴の開いた薄い膜が、彼女の子宮を守っていた。それは誰にも体を許しことが無い証であり、アルトリアオルタにとってもマスター以外には見せることも破らせることも無いと決めている膜だった。

こうして秘所の部位を全て説明し終えたアルトリアオルタは、我慢の限界であった。

ずっとマスターに秘所を見られる状況に、子宮がズキズキと疼いてしまっって仕方が無かったのだ。自分をはしたない女だと思いつながら、マスターにお願いをする。

「マスター……っ♡♡ ずっとオマンコが切ないのだっ♡♡♡ 触つて欲しい——ああっ♡♡」

アルトリアオルタのお願いに応えるように、マスターの右手の指先がクリトリスに触れた。神経の大量に集中した陰核は、軽く触られただけでも鋭い快感が走る。

マスターはクリトリスをソフトタッチで、円を描くように指の腹で撫でる。すると、アルトリアオルタは腰をビクビクと震わせながら甘い声を上げた。ペニスで肉豆をズリズリと擦られるのとはまた違う、クリクリと重点的に刺激される快感に気持ち良くなってしまふ。

「あっ♡♡ ——ああっ♡♡ お豆っ♡♡ 気持ち良いっ♡♡♡  
はあっ♡♡ マスターの指が♡♡ んぁ♡♡ クルクルって回すの良  
いっ♡♡ ……ああっ♡♡」

「——もうちよつと強い方が良い?」

ソフトタッチでは無くもう少ししっかり触った方が良いかと聞かれたアルトリアオルタは、自分の欲求に素直に従って言葉にする。

「はいっ♡♡♡♡ マスターにもつと強く触って欲しいっ♡♡ あっ♡♡  
♡♡ あっ♡♡♡ ああっ♡♡ いっぱい潮吹きしたいっ♡♡♡ あんっ♡♡  
♡♡ ——んひいいいいいっ♡♡♡」

アルトリアオルタはこれまでの甘い嬌声では無く、快感を楽しむ余裕の無い甲高い嬌声を上げる。

これまでの陰核の優しい触り方から大きく変わり、グニグニと横から押すような指使いになった。

アルトリアオルタは、電気が流れるような快感から反射的に太ももが閉じてしまい。その時に、マスターの頭を太ももで挟み込むような体勢になったのだが、秘所に彼の顔を押し付けてしまったのだ。

鼻先がクリトリスに勢い良く当たり、突発的な快感と痛みに甲高い声が出てしまった。

マスターも最初は驚いていたが、直ぐに口での愛撫に変更したようだ。クリトリスを挟んでいた指先を離して、アルトリアオルタの柔らかくスベスベとした太ももを両腕で抱える。

唾液を纏わせた舌先で突いたり舐めるように、充血したクリトリスを刺激した。

「~~~~~っっ♡♡♡♡♡ マスターに舐められ——っ♡♡  
しっ、舌でツンツン駄目え♡♡♡ ……ふあっ♡♡ これ凄い♡♡  
あっ♡♡ ああっ♡♡ はう——っ♡♡」

陰核から電流が流れているような快感が絶え間なく続く。

マスターに恥ずかしい所を舐められているという状況だけで、アルトリアオルタは意識が飛んでしまいそうになる。

一般的に女性への奉仕の意味合いが強いクンニリングスは、他にも理由はあるが男性側から敬遠されがちだ。しかし、マスターは嫌がる素振りも全く無く、彼女が気持ち良くなれるように唇や舌を使って愛撫している。

羞恥以上に愛されていると感じて、性感が更に高まってしまう。

膣口からの愛液の量も増え、アルトリアオルタのお尻の下のシーツには大きな染みが出来ていく。マスターの顔を太ももで挟む力が無意識に強くなる。

マスターは顔の位置を下にズラして膣口を舌先で刺激し始めた。

クリトリスへの刺激は鼻先で擦るように行い、溢れる愛液を水音を立てて啜る。初めてのクンニリングスであったが、直ぐにコツを掴んだのか唇や舌、鼻先の三か所を使って秘所に快感を与えていた。

クリトリスへの刺激だけで精一杯だったのに、アルトリアオルタは更なる快感に襲われて喘ぎ悶える。

「ダメえっ♡♡ あ、あっ♡♡ そんなに激しいとお♡♡ いひゅっ♡



液や潮まで飲まれてしまったことに幸福感と快感に包まれていた。

「はあっ………はあっ。それなら良かった」

アルトリアオルタが気持ち良くなってくれたことをマスターは喜び、彼女のホワイトブロンドの髪を手櫛で梳くように撫でる。心地良さから猫のように目を細めるアルトリアオルタは、マスターの頭に頭をグリグリと擦り付けた。

無言だがそれが苦痛にならない、甘ったるい空気が部屋の中を満たす。

しばらくの間、呼吸を整えたり絶頂の余韻に浸っていた二人だったが、あることに気が付いたアルトリアオルタがムクリと起き上がった。

マスターの下腹部に熱い視線を送りながら、伏し目がちにご奉仕を申し出る。

「そのっ♡♡ マスターはまだ射精してないだろう？」

私に奉仕させて貰えないか……っ♡♡ 気持ち良くなって貰えるように頑張るからっ♡♡♡」

「シて貰えるなら嬉しいけど」

「ならばっ♡♡ 私に任せてくれ……っ♡♡」

マスターの股座の前に、アルトリアオルタはペタンと女の子座りする。

最大まで怒張した子供の腕ほどあるペニスを両手で掴み、何の躊躇も無く亀頭にズリズリと頬ずりをした。クンクンと鼻を鳴らして、ペニスの饅えた雄臭を鼻腔に入れる。

アルトリアオルタは口内に唾液を貯めながら、マスターにご奉仕前の言葉を掛けた。

「すう——はあっ♡♡ マスターのオチンポ……っ♡♡♡ これ

から満足出来るまで、精一杯ご奉仕するっ♡♡♡♡♡ 好きなタイミン  
グで、沢山射精してくれっ♡♡」

誓いのキスでもするかのようにアルトリアオルタは、ペニスの先端  
に熱い口付けをした。

——ちゅっ♡♡♡♡

第八話：暴君は口淫で達する（フェラチオ、イラマチオ）

猛禽類にも似た金色の瞳を閉じるアルトリアオルタは、桜色の瑞々しい唇を軽く尖らせる。それはキス顔とも呼ばれる表情であり、普段は陶器のような真っ白な頬を赤く染めていた。

アルトリアオルタの可憐な唇が向かう先は、マスターの凶悪な雄ペニスである。

硬く熱い亀頭の先端に向けて誓いのキスでもするかのように、彼女は愛情を込めて口付けをした。一回だけのキスでは満足できる筈も無く、二度三度と口付けを繰り返す。

——ちゅっ♡♡♡　ちゅぷっ♡♡　ちゅうっ♡♡♡

部屋の中にリップ音が、何度も響いていた。

ただの小さな水音であるのにも関わらず、聞いているだけで無性にムラムラとした獣欲が湧き上がってくる。マスターの既に勃起しているペニスもアルトリアオルタの口付けを亀頭の先端に受ける度に、硬度を増しながら天井に向かって反り返っていく。

普段よりも声を高く弾ませるアルトリアオルタは、マスターの長大で雄々しいペニスへの感想を口にする。

「——ちゅうっ♡♡♡　んうっ♡♡　もう何度も見たのにつ♡♡♡  
ちゅぷっ♡　はあ……っ♡♡　マスターのおちんぽを見るとドキドキしてしまうっ♡♡♡　——ちゅっ♡♡　おちんぽに触れる唇や手のひらが熱いっ♡♡♡　んむっ♡♡　ちゅるう……っ♡♡♡♡」

蕩けた女の顔をするアルトリアオルタが言うように、雄のフェロモンがタツプリと含まれたペニスが触れる肌。彼女の柔らかな唇や手の平が、ジンとした熱を持つのと同時に甘い痺れが走る。

その熱と甘い痺れは最近になって花開いたアルトリアオルタの中の”雌”が、歡喜に打ち震えているからだ。強い雄に性的な奉仕をする悦びは、言葉に出来ない充足感を与えている。

生前のアルトリアオルタはブリテンや自国の民のために、身命を捧げて戦ってきた。彼女は何かに対して、尽くす気質が元々あつただ。

今のアルトリアオルタはマスターという尽くすべき対象を見付け、そのご奉仕精神とも言い換えられる気質を存分に發揮している。それこそ彼に気持ち良くなつて貰えるために、唇を使つたご奉仕をしてしまう位に。

——そこに王としての責務や騎士としての矜持は無い。

マスター”藤丸 立香”をただ愛する女としての、”アルトリア・ペンドラゴン”がいるだけだった。日に日に彼への愛情は強くなるばかりであり、マスターの傍にいただけで胸の辺りがポカポカと温かくなる。

(——ああ♡♡ マスター好き♡♡♡♡♡ 愛している……♡♡♡♡♡ もっと私の奉仕で気持ち良くなつて♡♡♡♡♡ ——私の熱も感じて欲しい♡♡)

アルトリアオルタの指では回り切らない程に太いペニスを両手でギュツ♡♡と掴み、彼以外には見せられないウツトリとした表情を浮かべていた。初々しい恋人同士のリップキスだけでは満足が出来なくなり、もっと深く繋がりたいと思つてしまう。

「ちゅっ……ちゅぷっ♡♡ はあ♡♡………はあ♡♡ 本当に逞しいおちんぼだ♡♡♡♡ 私腕よりも太くて♡♡♡♡ ちゅうっ♡♡♡♡ 両手で握つても長さが余つてしまう……♡♡♡♡♡ ちゅっ……♡♡♡♡♡ 血管もこんなにビキビキと浮き出ている♡♡♡♡♡ はあ♡♡♡♡ 経験の無い私でも分かるっ……女を駄目にする形をしている♡♡♡♡♡ ——ちゅぷっ♡♡♡♡」

バードキスのように亀頭の先端に口付けを何度も繰り返すアルト



リアオルタは、熱く湿った息をペニス全体に吹き掛ける。目の前の怒張した剛直から片時も目を逸らせず、ドロリとした熱っぽい視線を送ってしまう。

マスターの強く逞しい雄を感じる度に呼吸は荒くなり、アルトリアオルタの興奮も高まっていく。触れてもいけない乳首がピンと勃ち、汗や潮で濡れた秘肉の割れ目からは粘っこい愛蜜がコプコプと溢れる。彼女の肉体は雌として交尾を求めており、そのための準備を始めていた。

自然とアルトリアオルタの上唇と下唇が開き、その間から唾液に濡れたイヤらしいピンク色の舌先が伸びる。彼女はマスターの大きな亀頭をペロリと舐め上げた。それは相手の唇を舐める行為に、似ているかもしれない。

蒸れた汗のしょっぱさが味覚として広がりが、舌上に伝わるのは味覚だけでは無い。張り詰めたゴムのように硬い弾力と火傷してしまいいそうな程の熱を感じるのだ。そして五感の中で一番強く感じるのは、汗に蒸れた雄のフェロモンが豊潤に含まれた饅えた臭いだった。

「~~~~~っっっ♡♡♡♡ はあっ♡ しょっぱくて美味しいの  
にっ♡♡♡ ちゆるっ♡♡♡ 濃い臭いも素敵だっ♡♡♡ れろ—  
—お♡♡♡ んっ…:…はあっ♡♡♡ もととっ♡♡♡ もとと欲しいで  
すっ♡♡♡ れろ——おっ♡♡♡」

クンクンと子犬のように鼻を鳴らしながら、アルトリアオルタは舌先を何度も這わせる。棒付きの飴やソフトクリームを舐めるように、ペニスに何度も舌を伸ばす。今の状況ではありえないことだが、止めようと思っても彼女は舌の動きを止められないだろう。

裏筋にアルトリアオルタは鼻先を触れ合わせて、彼女は舌を陰茎へと這わせる。

一日の任務で大量の汗を掻き、パンツの中で蒸れたペニスのニオイは、一般的に良い匂いと呼べるものでは決して無い。しかし、アルトリアオルタにとっては、これ以上ない程に好きなニオイだと感じてし

まう。精神的にも肉体的にも魅了されている雄の臭いを、発情した雌が不快に感じる訳が無いのだ。

男女の相性が臭いで分かるという研究結果も実際にあるので、アルトリアオルタがマスターのペニスの臭いを好きだと思えるのも、二人の相性の良さがあるからだろう。口の中に広がる雄の膣えた臭いに彼女の理性は溶けていき、口淫も更に激しいものとなる。

「————はあっ♡♡♡ こんなに美味しくて♡♡♡ れろ——  
—おっ♡♡ 素敵な臭いのおちんぽを前に……っ♡♡ ちゆるるっ♡♡  
がっ、我慢なんて出来ない♡♡♡ んっ……はあっ♡♡♡ マスターの大きなおちんぽっ♡♡♡ じゆる……はうっ♡ おしやぶりさせて欲しいです♡♡♡」

アルトリアオルタは舌先で味わうだけは満足が出来なくなり、口全体を使ってペニスをご奉仕したいおねだりをしてしまう。彼女は好物を前にした時のように口内に唾液が溜めて、口端や舌先からトロリとしたガムシロップのような唾液が垂らす。

子供が親にお菓子を買って欲しいとねだる時のような表情をしているアルトリアオルタに、マスターは彼女の頭を軽く撫でながら頷いた。

「うん、アルトリアオルタがしたいようにして良いよ。今のままでも十分に気持ち良いから、無理はしないでね」

「無理はしていないから大丈夫だっ♡♡♡ 私がマスターのおちんぽをしやぶりたいんだっ♡♡♡ あの……美味しい精液を飲ませて欲しいっ♡♡♡ ———はあむっ♡♡♡」

アルトリアオルタは口を大きく開いて、亀頭の半分程度を口に含んだ。

亀頭を唾液濡れの柔らかかな内頬がじゅぷじゅぷと卑猥な水音を立てて愛撫しながら、尖らせた舌先が精液の出口でもある尿道口や筋



に溢れさせながら、二つの睾丸の中で大量の精子を製造している。

その先走り汁は僅かに白く濁っており、過剰に溜まった精液が混じっているせいだ。精液混じりの先走り汁を口内で受け止めるアルトリアオルタにも、精液の味と臭いがしつかりと感じ取れる。

（~~~~~つつ♡♡♡ まだ薄いですけど、精液の味がしますっ♡♡  
濃厚こくまる精液、とつても美味しい……っ♡♡♡ もっと濃い  
のっ♡♡）

ただでさえアルトリアオルタの脳は、クラクラと酩酊してしまう位に雄の臭いを感じている。そこに更に精液の臭いと味が混ざってしまい、彼女の嗅覚と味覚を犯していく。

アルトリアオルタは自分でも分かる位に、頬がだらしなく緩んでいるのを感じていた。正しく美味しいものを食べた時と同じような、笑みを浮かべてしまう。

「ぢゅぞぞぞぞ——っ♡♡♡ じゅるぢゅっ♡♡ ぢゅじゅ  
じゅっ♡♡♡ ぢゅるるるる——っ♡♡♡ ——んぐっ♡♡♡ ん  
んぐ………ふはあっ♡♡♡ はあっ♡………はあっ♡♡♡ 先  
走りに精液が混じってるっ♡♡♡ ぢゅずずっ♡♡♡ 我慢はしなく  
て良いから、射精したくなっただらいつでも……っ♡♡♡ ぢゅっ♡♡♡  
出して良いから♡♡♡ ぢゅるっ——じゅずずずっ♡♡♡♡」

ドロドロと喉に絡み付く濃い精液を求めて、アルトリアオルタの口淫は更に激しくなる。柔らかな内頬が龟头に張り付き、ひよつとこのように間抜けなフェラ顔をしながら、彼の射精を促すように快感を与えていた。

前後に動く頭に合わせてアルトリアオルタのホワイトブロンドの髪が揺れ、陰茎を扱く両手の動きが更に激しくなる。彼女の口と両手から響く水音が更に大きくなり、部屋中に響き渡るようになった。

（……早く精液っ♡♡♡ 好きなだけ私の口の中にびゅーっ♡♡♡  
びゅーっ♡♡♡と射精してくれっ♡♡♡）

アルトリアオルタはマスターの快感に耐える表情を上目遣いで見

詰めながら、言外で子種を強請り続けていた。

今朝、シャワー室で初めての精飲をしてから、あの濃くて少しえぐみのある子種汁の味と、プチプチと噛める半固形物の食感が忘れられないのだ。

子を産める出産適齢期の雌にとって、マスターの精液には強い中毒性がある。

人よりも食事することを好んでいるアルトリアオルタの大好物であるハンバーガーとマスターの精液を比べても、今の彼女は迷わずマスターの精液と答えてしまっただろう。

それは食欲が満たされるだけでは無く、性欲も満たされるためである。

人間の三大欲求の内の二つが同時に満たされるので、単純な美味しものよりも満足度が高いのだ。

アルトリアオルタの熱心な奉仕に、マスターの性感は高まっていた。

これまで以上にドプっ♡♡ ドプっ♡♡とカウパー液が溢れ、亀頭が大きく膨らんでビクビクとペニス全体が震える。

下品なひよつとこのフェラ顔をしながら上目遣いでマスターの顔を見詰めていたアルトリアオルタには、彼の快感に耐えている顔が良く見えた。射精が近いことが分かり、彼女の口と手がラストスパートを掛けるように早く力強くなる。

マスターは快感に呻きながら、アルトリアオルタに声を掛けた。

「——うっ。アルトリアオルタ、苦しかったらごめんねっ」

マスターは中空に彷徨わせていた両手で、アルトリアオルタの後頭部を押さえ付けた。彼女の喉奥に亀頭がグリグリと押し当てながら、射精することを告げる。

大きな亀頭で気道が塞がれたアルトリアオルタは、目を剥きながらも喜んでマスターからのイラマチオを受け入れた。それどころか彼が射精し易いように、裏筋に舌先を添えて動かして、内頬が凹むくら





てくれたマスターへの感謝の言葉を口にする。彼に仕込まれた訳でも無いのに、雌奴隷のように自分のご主人様にお礼を言ってしまうのだ。

「——んぶっ♡♡ げええーっ♡♡♡ っ♡♡♡ マスターのせいえきっ♡♡♡ げふっ♡♡♡ とつてもおいしかったれすっ♡♡♡ げええ——ぶっ♡♡♡ んん…っ♡♡♡」

「アルトリアオルタの口、凄いい気持ち良かったよ。ちよつと待ってて、ティツシュを——」

マスターがアルトリアオルタの顔や唇を拭くためのティツシュを渡そうとするが、未だに意識のハッキリとしていない彼女がそれを手で制した。

唇から零れた濃厚な精を含めて、アルトリアオルタはゆっくりと飲み込んでいく。

数分の時間を掛けてマスターの零れた精液を口に運んだ彼女は、彼に向かって大きく口を開いた。舌の裏側までマスターに見せて、精液を全て飲んだことを教えている。

「——はあ、——っ♡♡♡ はあ、——っ♡♡♡ け、ええ、ぶっ♡♡♡ ぜんぶっ♡♡♡ んんっ♡♡♡ のみましたっ♡♡♡ ——けぶっ♡♡♡」

「うん、全部飲んでくれて嬉しい。」もつと飲んで欲しい”くらいだよ」

「~~~~~っ♡♡♡♡♡」

マスターはアルトリアオルタの頭を優しく撫でながらお礼を口にする。しかし、彼女にはもつと重要な言葉があった。

——”もつと飲んで欲しい”

アルトリアオルタの快楽で蕩けた脳では、例えかそうでないかの判別がつかない。マスターがもつと自分に精を飲んで欲しいのだと、彼女は認識してしまう。



(もつと私に精液を飲んで欲しいとっ♡♡ マスターが望むのなら、私に拒むことは出来ない…:っ♡♡♡♡ マスターの精を飲まないとっ♡♡)

アルトリアオルタはベッドに仰向けになって寝そべり、口を使ってマスターの性欲処理をすることを伝える。

「——マスターっ♡♡ げえぶっ♡♡♡♡ もつとわたしのクチまんこっ♡♡ いっぱいつかつれ♡♡♡♡ けぶっ♡♡ あーっ♡♡」

マスターがペニスを挿入し易いように、アルトリアオルタは口を大きく開いた。この体勢であれば食道まで彼のペニスが入ると思ったため、彼女は仰向けに寝転がるのを選んだのだ。

少しだけ迷ったマスターだったが、アルトリアオルタの口の気持ち良さを知っているせいで、彼女の誘惑には男としてどうしても抗えなかった。

「——苦しかったら手とか叩いてね」

「はいっ♡♡♡♡ オナホみたいにノドつかつれっ♡♡♡♡ んっ♡♡  
~~~~~っ♡♡」

アルトリアオルタは喉で絶頂するまで性感帯を開発され、何度もイラマチオをされることとなった。魔力還元が追い付かなくなるまで、胃の中を精液漬けにされる。

最後の方にはマスターの精液を飲むと、半強制的に絶頂するようにアルトリアオルタは躡けられる。

——その夜、マスターの部屋に女のくぐもった嬌声が、絶え間なく響くこととなった。

「んっ♡♡~~~~~っ♡♡♡♡♡♡♡♡」